

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第99集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

長根羽田倉遺跡

古墳時代前期～平安時代の集落跡の調査
古墳時代後期の滑石製馬形を伴う祭祀遺構

《本文編》

1 9 9 0

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第99集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

長根羽田倉遺跡

古墳時代前期～平安時代の集落跡の調査
古墳時代後期の滑石製馬形を伴う祭祀遺構

《本文編》

1990

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団





祭祀遺構（2号土器集積）出土滑石製模造品



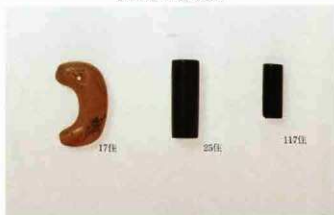
祭祀遺構（3号土器集積）出土滑石製模造品



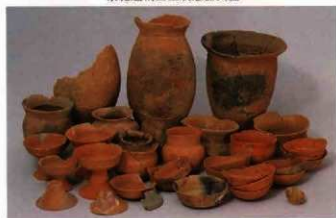
祭祀遺構出土須惠器大甕



遺構外出土瑪瑙制片



出土玉類



第15号住居跡出土遺物一括



第27号住居跡出土遺物一括



第42号住居跡出土遺物一括



第16号住居跡出土遺物一括

序

「西毛の未来を拓くハイウエー」を合言葉に、上信越自動車道建設工事が甘楽の谷を中心に行なわれております。

群馬県内では、穏やかな気候風土に恵まれたこの西毛地域は、古くより多くの人々が居住し、奈良時代のはじめに建郡された多胡郡と、その記念碑でもある多胡碑が残されてまいりました。

新たに地域社会を発展させる高速道路が通ることで、記録保存を目的とした発掘調査が行なわれ、古くより開拓されてきたこの地の人々の生活の跡が掘り出されてきました。

長根羽田倉遺跡は、主として古墳時代から平安時代にかけての人々の集落跡ですが、多胡郡韓級郷との関係や、祭祀に関係する出土遺物も注目されます。

ここに報告書を刊行することで、今後の地域文化解明の一助となることを願いつつ、また社会教育・学校教育の分野での活用を期待いたします。

発掘調査・整理作業に携わった一人ひとりの御労苦に感謝すると共に、御協力いただいた地域の皆様、関係する諸機関の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成2年3月20日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「長根羽田倉遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 長根羽田倉遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字長根字羽田倉、大字神保字宮西・字田ノ入 他に所在する。
3. 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
4. 実際の発掘調査にあたっては、財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台3-15-8 所在）が担当した。

5. 調査期間及び担当者

- | | | |
|----------|--------------|--|
| (1) 発掘調査 | 調査期間 | 昭和61年5月27日～昭和62年10月13日 |
| | 調査担当者 | 小林敏夫（専門員） 小野和之（主任調査研究員）
谷藤保彦（調査研究員） 鹿沼栄輔（調査研究員） |
| (2) 整理 | 整理期間 | 昭和63年4月1日～平成2年3月31日 |
| | 整理担当者 | 鹿沼栄輔 |
| (3) 事務 | 常務理事 | 白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄（平成元年度） |
| | 事務局長 | 井上唯雄（昭和61、62年度）、松本浩一（昭和63、平成元年度） |
| | 管理部長 | 大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成元年度） |
| | 研究部長 | 上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史（平成元年度） |
| | 関越道上越線調査事務所長 | 井上 信（昭和61～63年度）、高橋一夫（平成元年度） |
| | 総括次長 | 片桐光一（昭和62～平成元年度） |
| | 次 長 | 原田恒弘（昭和62年度）、徳江 紀（昭和63、平成元年度） |
| | 課 長 | 長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫（昭和63、平成元年度） |
| | 庶務課 係長代理 | 黒沢重樹（昭和61～63年度）、宮川初太郎（平成元年度） |
| | 主 任 | 関定 均（昭和63・平成元年度）、須田明子 |
| | 臨時職員 | 山崎都夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後関玲子、
田中智恵美 |

6. 報告書作成関係者

- | | |
|-------|---|
| 編集担当 | 鹿沼栄輔 |
| 本文執筆 | 徳江 紀（第1章第1節）、小林敏夫（第3章第3～5節分担執筆、第4章第1節1項）、
小野和之（第3章第2節、第3章第3～5節分担執筆）、
谷藤保彦（第3章第1節、第3章第3～5節分担執筆）、
外山政子（第4章第1節5項）、大江正行（第4章第1節3項）、鹿沼栄輔（上記以外） |
| 遺構写真 | 小林敏夫、小野和之、谷藤保彦、鹿沼栄輔 |
| 遺物写真 | 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団技師） |
| 保存処理 | 関 邦一（群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）、嘱託員 北爪健二
補助員 小材浩一 |
| 整理補助員 | 秋元経子、遠藤栄子、金田とも、黒沢 汎、小林幸子、堤由美子、
藤野ヒロ子、森 節子、山本秀子、湯浅美枝子 |

委託関係 航空写真は韓国国際航業、青高館に、遺構測量・遺構遺物トレースは柳瀬設に、大型土器の実測・トレースは、柳シン航空にそれぞれ依頼した。

プラント・オパール分析は古環境研究所に、炭化材同定は柳バリノ・サーヴェイに、土器の胎土分析は、群馬県工業試験場にそれぞれ依頼した。

また、石材鑑定は、群馬県地質研究会の飯島静雄氏に依頼した。

7. 墨書土器の鑑定は、国立歴史民俗博物館助教授 平川 南先生に依頼した。
8. 本遺跡の地層については、群馬大学教育学部教授 新井房夫先生にご教授いただいた。
9. 出土遺物のうち、陶磁器類、鉄器類、砥石類の観察は、大江正行氏に、2号・3号土器集積出土の須恵器の内服観察は、大江正行、木津博明両氏にそれぞれお願いした。
10. 本書使用の地形図は、国土地理院発行 5万分の1（「高崎」「富岡」）、2万5千分の1（「高崎」「藤岡」「富岡」「上州吉井」）、藤岡市役所発行 5万分の1、2万5千分の1、吉井町役場発行1万分の1、2千5百分の1の地形図を編集して使用した。
11. 写真図版のうち、巻頭カラーの航空写真は日本道路公園のご厚意で掲載させていただいた。また、図版編の航空写真PL. 1は、国土地理院の許可のもとに、昭和22年に米軍が撮影したものを使用した。
12. 本遺跡の出土遺物・図面・写真類は、群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
13. 報告書作成にあたり、下記の方々にご教授、ご指導いただいた。記して謝す次第である。

（敬称略）

相原健史、石坂 茂、井上 太、石井克巳、女屋和志雄、鬼形芳夫、小野和之、大江正行、大木紳一郎、亀井正道、金子裕之、川口 潤、菊池 実、木下正史、木津博明、木村 収、小林敏夫、小安和順、坂井 隆、坂口 一、斎藤利昭、佐藤達雄、楢山林繼、須田 茂、須藤浩晴、関口功一、関 晴彦、田口正美、谷藤保彦、滝上松雄、津金沢吉茂、辻本和美、外山政子、徳江 紀、内木真琴、中沢 悟、春山秀幸、平川 南、藤巻幸雄、前沢和之、松村和男、右島和夫、茂木由行、弓場紀知、依田治雄、綿貫邦男、吉井町教育委員会、吉井町農業協同組合

14. 発掘調査従事者

（敬称略）

秋元経子、新井すみ子、安藤庚申、安藤三郎、飯島 栄、今井ミヨ、今井けき、浦辺保司、浦辺ふさの、大竹幸子、大塚令子、折茂七郎、折茂すい、加藤秀子、加部恵美子、加部まき江、金田とも、金田あい子、金田子之吉、柿田久枝、金沢典子、岸今朝義、木村利雄、黒沢章一郎、黒沢フジミ、黒沢千代子、久保元二、久保ふで、工藤 楨、酒井とし子、斎藤三郎、斎藤淑江、斎藤栄子、清水直美、芝塚なみ、白井さ津き、白井信行、神保光明、神保利政、神保和子、神保君江、神保光代、神保京子、須田しげ子、関口いちえ、関口伸江、反町陽子、田中和満、田中利雄、田中みつ江、高橋時枝、高橋幸子、滝上幸江、滝上光代、田村ハツ子、田村清江、田村善子、田村せい子、田村芳子、千代延八重子、辻中愛子、辻中陽子、塚越 進、塚越恵美子、塚越瑞美子、寺尾久吉、富田房三郎、中野しず江、南雲まさ子、西みよ子、羽切四郎、林 かつ、春山米子、春山ふさ江、春山さき江、福田とみ、藤野ヒロ子、古館 明、古館繁男、堀越よし、堀越智子、堀越美恵子、真加部鈴枝、松井照子、三浦美津、峯岸百合子、矢島百合子、菅原慶子、山崎常夫、山口美知子、吉沢富貴子、吉田ふく、吉田 篤

凡 例

1. 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は、国家座標第IX系である。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は、標高を表す。
3. 遺構実測図の縮尺は次の通りである。
 竪穴住居跡 掘立柱建物遺構 溝 土坑 1/50 竈 祭祀遺構 1/50
4. 遺物実測図の縮尺は次の通りである。
 土器（甕・壺・甔）、大型砥石 1/5
 土器（坏・高坏・埴など）、石器類（鉄を除く）、縄文土器、弥生土器、古式土師 1/5
 鉄器類、滑石石核、紡錘車、古銭 1/5
 滑石製模造品・チップ、土製品など 1/5 祭祀遺構出土滑石製模造品 1/5
 その他、若干の変動があるが、基本的に遺物番号脇に縮尺を入れてあるのでそれを参照されたい。
5. 遺物番号は、遺構毎に通し番号とし、実測図、遺構図、観察表、図版番号が共通している。
6. 土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版 標準土色帖 1988版」を基準に担当が判断した。
7. 竪穴住居跡実測図内の茶色は、床下土坑を表す。
8. 土器断面のうち、土器器は白ぬき、須恵器は黒ぬりで表現した。
9. 土器中の「→」は、寛削りの方向を示す。
10. 遺構及び遺物図中のスクリーントーンは下記のことを示す。



遺構下



焼土

- 土器
- 砥石（砂岩系）
- △ 砥石（二ッ岳軽石）
- 砥石（片岩系）
- ▲ 砥石（流紋岩）
- ◆ 敲打石
- ▲ 工作台
- ★ 滑石成品
- ☆ 滑石未成品
- ✱ 滑石チップ・石核
- ☆ 紡錘車・その他の玉類
- ◇ 鉄器
- 土製品



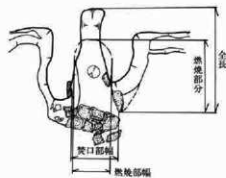
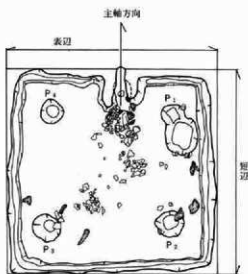
灰軸部分



砥石使用面

なお、祭祀遺構出土の遺物については、図中の凡例を参照されたい。

11. 遺構についての主な計測は以下に示した図のように行った。また、柱穴番号は、基本的に電右下から時計回りにP₁、P₂、P₃、P₄とした。電がない場合は図右上からふった。



12. 住居跡は古墳時代前期、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、平安時代の順で若い番号順に掲載してある。このうち、「飛鳥」の示す時期は、古墳時代後期から奈良時代の間の時期である。「飛鳥時代」の定義については、『国史大辞典』国史大辞典編集委員会編 吉川弘文館 1979によると一般に「飛鳥の地に都があった時代をさすが、政權の所在地を時代区分の基準にすることに無理がある」として次の3説をあげている。
- (1) 推古天皇が飛鳥豊浦宮に即位した崇峻天皇5年(592)から元明天皇が平城京に遷都した和銅3年(710)までの1世紀余り。
 - (2) 仏教の渡来した6世紀中頃(宣化・欽明朝)から平城遷都までの2世紀たらず。
 - (3) 6世紀中頃から大化元年(645)の大化改新までの1世紀。

また、「飛鳥文化」については、「文化史上、7世紀前半の推古朝を中心とする時期の文化をいい、7世紀後半の白鳳文化に先行する。」としている。

群馬県内では、南関東の土器編年で「真間」といわれる時期に画期のある土師器環が、本遺跡を含めて各地で出土しているものの、その出土時期については、現在、研究者間でひらきがあり、不確定である。本報告書では、調査に携わった担当4名で検討した結果、古墳時代後期と奈良時代の間に「真間」の環が使用された画期があること、その時期の名称に苦慮しながら、政治上・社会史上及び文化史上の時期区分を参考にしながら、問題は多いが敢えて「飛鳥」という名称を採用することが決まった。

本文編目次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	3
第2節 調査の方法と経過	4
第3節 調査日誌抄	6
第4節 整理の経過	10
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	12
第2節 基本層序	16
第3節 歴史的環境	17
(1) 周辺の遺跡	17
(2) 周辺出土の祭祀遺物	23
(3) 多胡郡の郷名と轉級郷について	26
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	30
第2節 弥生時代の遺構と遺物	38
第3節 古墳時代の遺構と遺物	42
第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物	217
第5節 平安時代の遺構と遺物	278
第6節 祭祀遺構と遺物	362
第7節 掘立柱建物遺構	407
第8節 井戸跡と遺物	417
第9節 土坑と遺物	418
第10節 水田跡と遺物	434
第11節 畑跡	443
第12節 溝跡と遺物	445
第13節 その他の遺構と遺物	455
第14節 遺構外出土の遺物	461
第4章 成果と問題点	
第1節 出土遺物について	484
(1) 出土土器について	484
(2) 文字資料について	495
(3) 砥石について	496
(4) 鉄器類について	497
(5) 羽田倉遺跡の煮沸具の観察から	500
第2節 竪穴住居跡の 形態・規模・主軸方位について	510
第3節 集落の変遷について	514
第4節 滑石製模造品の製作について	525
第5節 祭祀について	536
第6節 まとめ	549
附編 科学分析	
第1節 胎土分析	550
第2節 プラント・オパール分析調査報告	559
第3節 長根羽田倉遺跡出土炭化材の樹種	568

挿 図 目 次

第 1 図	グリッド配置図	4	第 61 図	第17号住居跡出土遺物実測図1)	78
第 2 図	調査地周辺の地質図	12	第 62 図	第17号住居跡出土遺物実測図2)	79
第 3 図	調査地周辺切通図	13	第 63 図	第17号住居跡出土遺物実測図3)	80
第 4 図	調査地周辺水系図	14	第 64 図	第19号住居跡実測図	81
第 5 図	調査地周辺土性縦断面	13・14	第 65 図	第19号住居跡出土遺物実測図	82
第 6 図	標準土層図	16	第 66 図	第22号住居跡実測図	83
第 7 図	周辺の遺跡分布図1)	18	第 67 図	第22号住居跡出土遺物実測図1)	84
第 8 図	周辺の遺跡分布図2)	21	第 68 図	第22号住居跡出土遺物実測図2)	85
第 9 図	周辺祭祀遺物出土地	22	第 69 図	第23号住居跡実測図	86
第 10 図	周辺出土の祭祀遺物実測図1)	23	第 70 図	第23号住居跡実測図及び出土遺物実測図	87
第 11 図	周辺出土の祭祀遺物実測図2)	24	第 71 図	第24号住居跡実測図	88
第 12 図	多胡郡推定配置図	26	第 72 図	第24号住居跡電実測図	89
第 13 図	第 2 号土坑実測図	30	第 73 図	第24号住居跡出土遺物実測図1)	89
第 14 図	遺構外出土縄文土器実測図	31	第 74 図	第24号住居跡出土遺物実測図2)	90
第 15 図	遺構外出土縄文石器実測図1)	32	75 図	第25号住居跡実測図	91
第 16 図	遺構外出土弥生土器実測図2)	33	第 76 図	第25号住居跡出土遺物実測図	92
第 17 図	遺構外出土縄文石器実測図3)	34	第 77 図	第27号住居跡実測図	93
第 18 図	遺構外出土縄文石器実測図4)	35	第 78 図	第27号住居跡出土遺物実測図1)	94
第 19 図	遺構外出土縄文石器実測図5)	36	第 79 図	第27号住居跡出土遺物実測図2)	95
第 20 図	第22号土坑実測図及び出土遺物実測図	38	第 80 図	第28号住居跡実測図1)	96
第 21 図	第28号土坑実測図及び出土遺物実測図	39	第 81 図	第28号住居跡実測図2)	97
第 22 図	遺構外出土弥生土器実測図	40	第 82 図	第28号住居跡出土遺物実測図	98
第 23 図	遺構外出土弥生土器実測図	41	第 83 図	第31号住居跡実測図	99
第 24 図	第63号住居跡実測図	42	第 84 図	第31号住居跡出土遺物実測図	100
第 25 図	第63号住居跡出土遺物実測図1)	42	第 85 図	第32号住居跡実測図	101
第 26 図	第63号住居跡出土遺物実測図2)	43	第 86 図	第32号住居跡電実測図	102
第 27 図	第67号住居跡実測図	44	第 87 図	第32号住居跡出土遺物実測図	103
第 28 図	第67号住居跡出土遺物実測図1)	44	第 88 図	第33号住居跡実測図	104
第 29 図	第67号住居跡出土遺物実測図2)	45	第 89 図	第33号住居跡出土遺物実測図	105
第 30 図	古墳時代前期遺構外出土遺物実測図	45	第 90 図	第34号住居跡実測図	106
第 31 図	第 1 号住居跡実測図	46	第 91 図	第34号住居跡出土遺物実測図	107
第 32 図	第 1 号住居跡電実測図	47	第 92 図	第35号住居跡実測図	108
第 33 図	第 1 号住居跡出土遺物実測図1)	47	第 93 図	第35号住居跡電実測図	109
第 34 図	第 1 号住居跡出土遺物実測図2)	48	第 94 図	第35号住居跡出土遺物実測図1)	109
第 35 図	第 1 号住居跡出土遺物実測図3)	49	第 95 図	第35号住居跡出土遺物実測図2)	110
第 36 図	第 3 号住居跡実測図1)	50	第 96 図	第36号住居跡実測図	112
第 37 図	第 3 号住居跡掘りかた実測図	51	第 97 図	第36号住居跡電実測図	113
第 38 図	第 3 号住居跡実測図2)	51	第 98 図	第36号住居跡出土遺物実測図1)	113
第 39 図	第 3 号住居跡出土遺物実測図	52	第 99 図	第36号住居跡出土遺物実測図2)	114
第 40 図	第 6 号住居跡実測図	53	第 100 図	第36号住居跡出土遺物実測図3)	115
第 41 図	第 6 号住居跡掘りかた実測図	54	第 101 図	第37号住居跡実測図	116
第 42 図	第 6 号住居跡電実測図	54	第 102 図	第37号住居跡出土遺物実測図	117
第 43 図	第 6 号住居跡出土遺物実測図1)	55	第 103 図	第39号住居跡実測図	118
第 44 図	第 6 号住居跡出土遺物実測図2)	56	第 104 図	第39号住居跡出土遺物実測図	119
第 45 図	第12号住居跡出土遺物実測図1)	58	第 105 図	第40号住居跡実測図	120
第 46 図	第12号住居跡実測図	59・60	第 106 図	第40号住居跡出土遺物実測図	121
第 47 図	第12号住居跡出土遺物実測図2)	61	第 107 図	第41号住居跡実測図	121
第 48 図	第12号住居跡出土遺物実測図3)	62	第 108 図	第41号住居跡電実測図	122
第 49 図	第12号住居跡出土遺物実測図4)	63	第 109 図	第41号住居跡出土遺物実測図	123
第 50 図	第12号住居跡出土遺物実測図5)	64	第 110 図	第42号住居跡実測図	124
第 51 図	第12号住居跡出土遺物実測図6)	65	第 111 図	第42号住居跡電実測図	125
第 52 図	第12号住居跡出土遺物実測図7)	66	第 112 図	第42号住居跡出土遺物実測図1)	126
第 53 図	第15号住居跡実測図	69	第 113 図	第42号住居跡出土遺物実測図2)	127
第 54 図	第15号住居跡電実測図	70	第 114 図	第42号住居跡出土遺物実測図3)	128
第 55 図	第15号住居跡北西隅石組実測図	71	第 115 図	第43号住居跡実測図	130
第 56 図	第15号住居跡出土遺物実測図1)	72	第 116 図	第43号住居跡出土遺物実測図	131
第 57 図	第15号住居跡出土遺物実測図2)	73	第 117 図	第44号住居跡実測図	132
第 58 図	第15号住居跡出土遺物実測図3)	74	第 118 図	第44号住居跡出土遺物実測図	133
第 59 図	第17号住居跡実測図	77	第 119 図	第45号住居跡実測図	134
第 60 図	第17号住居跡電実測図	78	第 120 図	第45号住居跡出土遺物実測図	134
			第 121 図	第46号住居跡実測図	135
			第 122 図	第46号住居跡出土遺物実測図	136
			第 123 図	第47号住居跡実測図	137

第 124 页	第47号住居跡出土遺物実測図	138
第 125 页	第48号住居跡実測図	139
第 126 页	第48号住居跡出土遺物実測図(1)	139
第 127 页	第48号住居跡出土遺物実測図(2)	140
第 128 页	第49号住居跡実測図及びび出土遺物実測図	141
第 129 页	第53号住居跡実測図	143
第 130 页	第53号住居跡実測図	144
第 131 页	第53号住居跡炭化物出土状態実測図	144
第 132 页	第53号住居跡出土遺物実測図(1)	145
第 133 页	第53号住居跡出土遺物実測図(2)	146
第 134 页	第56号住居跡実測図	148
第 135 页	第56号住居跡出土遺物実測図(1)	149
第 136 页	第56号住居跡出土遺物実測図(2)	150
第 137 页	第57号住居跡実測図(1)	151
第 138 页	第57号住居跡実測図(2)	152
第 139 页	第57号住居跡実測図	153
第 140 页	第57号住居跡出土遺物実測図(1)	154
第 141 页	第57号住居跡出土遺物実測図(2)	155
第 142 页	第58号住居跡実測図	157
第 143 页	第58号住居跡出土遺物実測図	158
第 144 页	第61号住居跡実測図	159
第 145 页	第61号住居跡実測図	160
第 146 页	第61号住居跡出土遺物実測図	160
第 147 页	第65号住居跡実測図	162
第 148 页	第65号住居跡実測図	162
第 149 页	第65号住居跡出土遺物実測図	163
第 150 页	第66号住居跡実測図	165
第 151 页	第66号住居跡出土遺物実測図	166
第 152 页	第68号住居跡実測図	168
第 153 页	第68号住居跡出土遺物実測図	169
第 154 页	第70号住居跡実測図	170
第 155 页	第70号住居跡出土遺物実測図	171
第 156 页	第72号住居跡実測図	172
第 157 页	第72号住居跡出土遺物実測図	173
第 158 页	第73号住居跡実測図	174
第 159 页	第73号住居跡出土遺物実測図	175
第 160 页	第74号住居跡実測図	176
第 161 页	第74号住居跡実測図	177
第 162 页	第74号住居跡出土遺物実測図(1)	178
第 163 页	第74号住居跡出土遺物実測図(2)	179
第 164 页	第75号住居跡実測図	180
第 165 页	第75号住居跡実測図	181
第 166 页	第75号住居跡出土遺物実測図(1)	182
第 167 页	第75号住居跡出土遺物実測図(2)	183
第 168 页	第76号住居跡実測図(1)	184
第 169 页	第76号住居跡実測図(2)	185
第 170 页	第76号住居跡出土遺物実測図(1)	186
第 171 页	第76号住居跡出土遺物実測図(2)	187
第 172 页	第76号住居跡出土遺物実測図(3)	188
第 173 页	第76号住居跡出土遺物実測図(4)	189
第 174 页	第77号住居跡実測図	191
第 175 页	第77号住居跡出土遺物実測図	192
第 176 页	第78号住居跡実測図	193
第 177 页	第78号住居跡実測図	194
第 178 页	第78号住居跡出土遺物実測図	194
第 179 页	第79号住居跡実測図	195
第 180 页	第79号住居跡出土遺物実測図	196
第 181 页	第80号住居跡実測図	197
第 182 页	第80号住居跡出土遺物実測図	198
第 183 页	第81号住居跡実測図	198
第 184 页	第81号住居跡出土遺物実測図	198
第 185 页	第82号住居跡実測図	199
第 186 页	第82号住居跡出土遺物実測図	200

第 187 页	第85号住居跡実測図	201
第 188 页	第85号住居跡出土遺物実測図	202
第 189 页	第88号住居跡実測図	202
第 190 页	第88号住居跡出土遺物実測図	203
第 191 页	第91号住居跡実測図	203
第 192 页	第91号住居跡出土遺物実測図(1)	204
第 193 页	第91号住居跡出土遺物実測図(2)	206
第 194 页	第92号住居跡実測図	207
第 195 页	第92号住居跡出土遺物実測図	207
第 196 页	第94号住居跡実測図	208
第 197 页	第94号住居跡出土遺物実測図	209
第 198 页	第105号住居跡実測図	209
第 199 页	第105号住居跡出土遺物実測図	210
第 200 页	第106号住居跡実測図	211
第 201 页	第106号住居跡出土遺物実測図	212
第 202 页	第114・115号住居跡実測図	213
第 203 页	第115号住居跡出土遺物実測図	214
第 204 页	第123号住居跡実測図	214
第 205 页	第123号住居跡出土遺物実測図	215
第 206 页	第126号住居跡実測図	215
第 207 页	第126号住居跡出土遺物実測図	216
第 208 页	第5号住居跡実測図	217
第 209 页	第5号住居跡実測図	218
第 210 页	第5号住居跡出土遺物実測図	218
第 211 页	第9号住居跡実測図	219
第 212 页	第9号住居跡実測図	220
第 213 页	第9号住居跡出土遺物実測図(1)	220
第 214 页	第9号住居跡出土遺物実測図(2)	221
第 215 页	第10号住居跡実測図	222
第 216 页	第10号住居跡出土遺物実測図	223
第 217 页	第11号住居跡実測図	224
第 218 页	第11号住居跡出土遺物実測図(1)	224
第 219 页	第11号住居跡出土遺物実測図(2)	225
第 220 页	第13号住居跡実測図	226
第 221 页	第13号住居跡出土遺物実測図	227
第 222 页	第14号住居跡実測図	228
第 223 页	第14号住居跡出土遺物実測図(1)	229
第 224 页	第14号住居跡出土遺物実測図(2)	230
第 225 页	第16号住居跡実測図	232
第 226 页	第16号住居跡実測図	233
第 227 页	第16号住居跡出土遺物実測図(1)	233
第 228 页	第16号住居跡出土遺物実測図(2)	234
第 229 页	第16号住居跡出土遺物実測図(3)	235
第 230 页	第21号住居跡実測図	237
第 231 页	第21号住居跡出土遺物実測図	257
第 232 页	第30号住居跡実測図	238
第 233 页	第30号住居跡出土遺物実測図	239
第 234 页	第54号住居跡実測図	240
第 235 页	第54号住居跡実測図	241
第 236 页	第54号住居跡出土遺物実測図	241
第 237 页	第59号住居跡実測図	242
第 238 页	第59号住居跡実測図	243
第 239 页	第59号住居跡出土遺物実測図(1)	243
第 240 页	第59号住居跡出土遺物実測図(2)	244
第 241 页	第62号住居跡実測図	245
第 242 页	第62号住居跡出土遺物実測図	246
第 243 页	第64号住居跡実測図	247
第 244 页	第64号住居跡出土遺物実測図	248
第 245 页	第71号住居跡実測図	249
第 246 页	第71号住居跡出土遺物実測図(1)	249
第 247 页	第71号住居跡出土遺物実測図(2)	250
第 248 页	第87号住居跡実測図	250
第 249 页	第87号住居跡実測図	251

第 250 页	第 87 号住居跡出土遺物実例図①	251
第 251 页	第 87 号住居跡出土遺物実例図②	252
第 252 页	第 101 号住居跡実例図	253
第 253 页	第 101 号住居跡出土遺物実例図	254
第 254 页	第 113 号住居跡実例図	254
第 255 页	第 113 号住居跡実例図	255
第 256 页	第 113 号住居跡出土遺物実例図①	255
第 257 页	第 113 号住居跡出土遺物実例図②	256
第 258 页	第 113 号住居跡出土遺物実例図③	257
第 259 页	第 118 号住居跡実例図	259
第 260 页	第 118 号住居跡出土遺物実例図①	260
第 261 页	第 118 号住居跡出土遺物実例図②	261
第 262 页	第 122 号住居跡実例図	263
第 263 页	第 122 号住居跡実例図	264
第 264 页	第 122 号住居跡出土遺物実例図①	264
第 265 页	第 122 号住居跡出土遺物実例図②	265
第 266 页	第 122 号住居跡出土遺物実例図③	266
第 267 页	第 124 号住居跡実例図	268
第 268 页	第 124 号住居跡実例図	269
第 269 页	第 124 号住居跡出土遺物実例図	269
第 270 页	第 129 号住居跡実例図	270
第 271 页	第 129 号住居跡出土遺物実例図	271
第 272 页	第 131 号住居跡実例図	272
第 273 页	第 131 号住居跡出土遺物実例図①	272
第 274 页	第 131 号住居跡出土遺物実例図②	273
第 275 页	第 133 号住居跡実例図	275
第 276 页	第 133 号住居跡出土遺物実例図	275
第 277 页	第 134 号住居跡実例図	276
第 278 页	第 134 号住居跡出土遺物実例図	277
第 279 页	第 2 号住居跡実例図	278
第 280 页	第 2 号住居跡実例図	278
第 281 页	第 2 号住居跡出土遺物実例図①	279
第 282 页	第 2 号住居跡出土遺物実例図②	280
第 283 页	第 4 号住居跡実例図	281
第 284 页	第 4 号住居跡出土遺物実例図	282
第 285 页	第 7 号住居跡実例図	283
第 286 页	第 7 号住居跡実例図	284
第 287 页	第 7 号住居跡出土遺物実例図	284
第 288 页	第 8 号住居跡実例図	285
第 289 页	第 8 号住居跡実例図	286
第 290 页	第 8 号住居跡出土遺物実例図①	286
第 291 页	第 8 号住居跡出土遺物実例図②	287
第 292 页	第 18 号住居跡実例図	288
第 293 页	第 18 号住居跡出土遺物実例図	288
第 294 页	第 20 号住居跡実例図	288
第 295 页	第 20 号住居跡出土遺物実例図	289
第 296 页	第 26 号住居跡実例図	289
第 297 页	第 26 号住居跡出土遺物実例図	290
第 298 页	第 29 号住居跡実例図	291
第 299 页	第 29 号住居跡出土遺物実例図	291
第 300 页	第 38 号住居跡実例図	292
第 301 页	第 38 号住居跡出土遺物実例図①	292
第 302 页	第 38 号住居跡出土遺物実例図②	293
第 303 页	第 50 号住居跡実例図	294
第 304 页	第 50 号住居跡出土遺物実例図①	295
第 305 页	第 50 号住居跡出土遺物実例図②	296
第 306 页	第 51 号住居跡実例図	297
第 307 页	第 51 号住居跡出土遺物実例図①	298
第 308 页	第 51 号住居跡出土遺物実例図②	299
第 309 页	第 52 号住居跡実例図	300
第 310 页	第 52 号住居跡出土遺物実例図	301
第 311 页	第 55 号住居跡実例図	302
第 312 页	第 56 号住居跡出土遺物実例図	302

第 313 页	第 60 号住居跡実例図	303
第 314 页	第 60 号住居跡出土遺物実例図	303
第 315 页	第 69 号住居跡実例図	304
第 316 页	第 69 号住居跡実例図	305
第 317 页	第 69 号住居跡出土遺物実例図①	305
第 318 页	第 69 号住居跡出土遺物実例図②	306
第 319 页	第 69 号住居跡出土遺物実例図③	307
第 320 页	第 69 号住居跡出土遺物実例図④	308
第 321 页	第 83 号住居跡実例図	310
第 322 页	第 83 号住居跡出土遺物実例図	311
第 323 页	第 84 号住居跡実例図	311
第 324 页	第 84 号住居跡出土遺物実例図	311
第 325 页	第 86 号住居跡実例図	312
第 326 页	第 86 号住居跡出土遺物実例図	312
第 327 页	第 89 号住居跡実例図	313
第 328 页	第 89 号住居跡出土遺物実例図①	313
第 329 页	第 89 号住居跡出土遺物実例図②	314
第 330 页	第 90 号住居跡実例図	315
第 331 页	第 90 号住居跡実例図	316
第 332 页	第 90 号住居跡出土遺物実例図①	316
第 333 页	第 90 号住居跡出土遺物実例図②	317
第 334 页	第 93 号住居跡実例図	318
第 335 页	第 93 号住居跡出土遺物実例図①	319
第 336 页	第 93 号住居跡出土遺物実例図②	320
第 337 页	第 93 号住居跡出土遺物実例図③	321
第 338 页	第 95 号住居跡実例図	322
第 339 页	第 95 号住居跡出土遺物実例図①	322
第 340 页	第 95 号住居跡実例図及び 7 号出土遺物実例図②	323
第 341 页	第 96 号住居跡実例図	324
第 342 页	第 96 号住居跡出土遺物実例図	325
第 343 页	第 97 号住居跡実例図	326
第 344 页	第 97 号住居跡出土遺物実例図	327
第 345 页	第 98 号住居跡実例図	328
第 346 页	第 98 号住居跡出土遺物実例図①	329
第 347 页	第 98 号住居跡出土遺物実例図②	330
第 348 页	第 99 号住居跡実例図	332
第 349 页	第 99 号住居跡出土遺物実例図①	332
第 350 页	第 99 号住居跡出土遺物実例図②	333
第 351 页	第 100 号住居跡実例図	333
第 352 页	第 100 号住居跡実例図	334
第 353 页	第 100 号住居跡出土遺物実例図	334
第 354 页	第 102 号住居跡実例図	335
第 355 页	第 102 号住居跡実例図	336
第 356 页	第 102 号住居跡出土遺物実例図①	336
第 357 页	第 102 号住居跡出土遺物実例図②	337
第 358 页	第 103 号住居跡実例図	337
第 359 页	第 103 号住居跡出土遺物実例図	338
第 360 页	第 104 号住居跡実例図	338
第 361 页	第 104 号住居跡出土遺物実例図	339
第 362 页	第 107 号住居跡実例図	339
第 363 页	第 107 号住居跡出土遺物実例図	340
第 364 页	第 108 号住居跡実例図及び 7 号出土遺物実例図①	340
第 365 页	第 108 号住居跡出土遺物実例図②	341
第 366 页	第 109 号住居跡実例図	342
第 367 页	第 109 号住居跡出土遺物実例図	342
第 368 页	第 110 号住居跡実例図	343
第 369 页	第 110 号住居跡出土遺物実例図①	343
第 370 页	第 110 号住居跡出土遺物実例図②	344
第 371 页	第 111 号住居跡実例図	345
第 372 页	第 111 号住居跡出土遺物実例図	346
第 373 页	第 112 号住居跡実例図	347
第 374 页	第 112 号住居跡実例図	348
第 375 页	第 112 号住居跡出土遺物実例図	348

第 376 図	第117号住居跡実測図	349
第 377 図	第117号住居跡電気実測図	350
第 378 図	第117号住居跡出土遺物実測図①	350
第 379 図	第117号住居跡出土遺物実測図②	351
第 380 図	第119号住居跡実測図	352
第 381 図	第119号住居跡出土遺物実測図①	352
第 382 図	第119号住居跡電気実測図及び出土遺物実測図②	353
第 383 図	第120号住居跡実測図及び出土遺物実測図①	354
第 384 図	第120号住居跡出土遺物実測図②	355
第 385 図	第125号住居跡実測図	356
第 386 図	第125号住居跡出土遺物実測図①	357
第 387 図	第127号住居跡実測図	357
第 388 図	第127号住居跡出土遺物実測図①	357
第 389 図	第128号住居跡実測図	358
第 390 図	第128号住居跡出土遺物実測図	359
第 391 図	第132号住居跡電気実測図及び出土遺物実測図①	360
第 392 図	第132号住居跡出土遺物実測図②	360
第 393 図	第135号住居跡実測図	360
第 394 図	第136号住居跡断面実測図及び出土遺物実測図	361
第 395 図	遺跡全体図	362
第 396 図	祭祀遺構周回図	362
第 397 図	祭祀遺構遺物分布模式図	363
第 398 図	祭祀遺構遺物出土状況図	365・366
第 399 図	祭祀遺構遺物エレベーション図	367・368
第 400 図	祭祀遺構滑石製模造品出土状況模式図	369・370
第 401 図	2号土器集積出土遺物実測図①	376
第 402 図	2号土器集積出土遺物実測図②	377
第 403 図	2号土器集積出土遺物実測図③	378
第 404 図	2号土器集積出土遺物実測図④	379
第 405 図	2号土器集積出土遺物実測図⑤	380
第 406 図	2号土器集積出土遺物実測図⑥	381
第 407 図	2号土器集積出土遺物実測図⑦	382
第 408 図	2号土器集積出土遺物実測図⑧	383
第 409 図	3号土器集積出土遺物実測図①	388
第 410 図	3号土器集積出土遺物実測図②	389
第 411 図	3号土器集積出土遺物実測図③	390
第 412 図	3号土器集積出土遺物実測図④	391・392
第 413 図	3号土器集積出土遺物実測図⑤	393
第 414 図	3号土器集積出土遺物実測図⑥	394
第 415 図	3号土器集積出土遺物実測図⑦	395
第 416 図	3号土器集積出土遺物実測図⑧	396
第 417 図	3号土器集積出土遺物実測図⑨	397
第 418 図	3号土器集積出土遺物実測図⑩	398
第 419 図	3号土器集積出土遺物実測図⑪	399
第 420 図	第1号掘立柱建物遺構実測図	407
第 421 図	第2号掘立柱建物遺構実測図	408
第 422 図	第3号掘立柱建物遺構実測図	409
第 423 図	第4号掘立柱建物遺構実測図	410
第 424 図	第5号掘立柱建物遺構実測図	411
第 425 図	第6号掘立柱建物遺構実測図	412
第 426 図	第7号掘立柱建物遺構実測図	413
第 427 図	第8号・第9号掘立柱建物遺構実測図	414
第 428 図	第10号掘立柱建物遺構実測図	415
第 429 図	第11号掘立柱建物遺構実測図	416
第 430 図	第1号井戸跡実測図	417
第 431 図	第1号井戸跡出土遺物実測図	417
第 432 図	土坑実測図①	419
第 433 図	土坑実測図②	420
第 434 図	土坑実測図③	421
第 435 図	土坑実測図④	422
第 436 図	土坑実測図⑤	423

第 437 図	土坑実測図⑥	424
第 438 図	土坑実測図⑦	425
第 439 図	土坑実測図⑧	426
第 440 図	土坑実測図⑨	427
第 441 図	土坑出土遺物実測図①	430
第 442 図	土坑出土遺物実測図②	431
第 443 図	土坑出土遺物実測図③	432
第 444 図	水田跡平面図	435
第 445 図	水田跡セクション・エレベーション図	436
第 446 図	水田跡試掘トレンチ概念図	437
第 447 図	水田跡部分平面図①	438
第 448 図	水田跡部分平面図②	439
第 449 図	水田跡部分平面図③	440
第 450 図	水田跡出土遺物実測図①	441
第 451 図	水田跡出土遺物実測図②	442
第 452 図	第1号畑跡実測図	443
第 453 図	第2号畑跡実測図	444
第 454 図	第3号畑跡実測図	445
第 455 図	第10号溝跡実測図	449・450
第 456 図	第2号・第12号・第13号溝実測図	451・452
第 457 図	溝跡出土遺物実測図①	453
第 458 図	溝跡出土遺物実測図②	454
第 459 図	竪坑状遺構実測図	455
第 460 図	第1号土器集積実測図	456
第 461 図	第1号土器集積出土遺物実測図	457
第 462 図	3区B・4区Bおよび4区Cピット群実測図	458
第 463 図	4区Cピット群実測図	459
第 464 図	ピット出土遺物実測図	459
第 465 図	5区Cピット群実測図	460
第 466 図	遺構外出土遺物実測図①	461
第 467 図	遺構外出土遺物実測図②	462
第 468 図	遺構外出土遺物実測図③	463
第 469 図	遺構外出土遺物実測図④	464
第 470 図	遺構外出土遺物実測図⑤	465
第 471 図	遺構外出土遺物実測図⑥	466
第 472 図	遺構外出土遺物実測図⑦	467
第 473 図	遺構外出土遺物実測図⑧	468
第 474 図	遺構外出土遺物実測図⑨	469
第 475 図	遺構外出土遺物実測図⑩	470
第 476 図	遺構外出土遺物実測図⑪	471
第 477 図	遺構外出土遺物実測図⑫	472
第 478 図	遺構外出土遺物実測図⑬	473
第 479 図	遺構外出土遺物実測図⑭	474
第 480 図	遺構外出土遺物実測図⑮	475
第 481 図	出土土器分類図①	488
第 482 図	出土土器分類図②	489
第 483 図	出土土器分類図③	490
第 484 図	出土土器分類図④	491
第 485 図	出土土器分類図⑤	492
第 486 図	出土土器分類図⑥	493
第 487 図	出土土器分類図⑦	494
第 488 図	時代別鉄器一覧①	498
第 489 図	時代別鉄器一覧②	499
第 490 図	第74号住居跡のカマドとカメ	501
第 491 図	12号住・66号住のカマドとカメ	503
第 492 図	87号住のカマドとカメ・97号住のカメ	504
第 493 図	カメの使用痕跡①	506
第 494 図	カメの使用痕跡②	507
第 495 図	集落実測図①	517
第 496 図	集落実測図②	518
第 497 図	集落実測図③	519
第 498 図	集落実測図④	518
第 499 図	集落実測図⑤	520

第500回	集落実測図⑥	521
第501回	集落実測図⑦	522
第502回	集落実測図⑧	523
第503回	滑石製模造品製作工具類	527
第504回	滑石瓦削及び勾玉製作工程	529
第505回	有孔円板製作工程	530
第506回	剣形製作工程	531
第507回	白玉製作工程	532
第508回	紡錘車製作工程	533
第509回	滑石製模造品製作地及び滑石の産地	535
第510回	滑石製馬形	543
第511回	滑石製馬形及び木製馬形	544
第512回	木製馬形	545
第513回	土馬編年図	546

第514回	鳥形模造品	547
第515回	祭祀遺構遺物出土状態実測図	551
第516回	2号・3号土器集積出土胎土分析試料実測図①	552
第517回	2号・3号土器集積出土胎土分析試料実測図②	553
第518回	Se/RbとCa/Kのグラフ①	556
第519回	Se/RbとCa/Kのグラフ②	557
第520回	プラント・オパール分析試料採取地点	561
第521回	イネのプラント・オパール密度と変遷	564
第522回	おもな植物の推定生産量と変遷①	565
第523回	おもな植物の推定生産量と変遷②	566
第524回	おもな植物の推定生産量と変遷③	567
第525回	第53号住居跡炭化物出土状態実測図	572

目 次

第1表	発掘調査工程表	10
第2表	整理工程表	11
第3表	周辺遺跡の概要	19・20
第4表	周辺出土の祭祀遺物観察表	25
第5表	縄文時代石器計測表	37
第6表	祭祀遺構出土遺物数一覧	371
第7表	祭祀遺構グリッド別出土遺物数一覧	371
第8表	第1号掘立柱建物遺構柱間計測値	407
第9表	第2号掘立柱建物遺構柱間計測値	408
第10表	第3号掘立柱建物遺構柱間計測値	409
第11表	第4号掘立柱建物遺構柱間計測値	410
第12表	第5号掘立柱建物遺構柱間計測値	411
第13表	第6号掘立柱建物遺構柱間計測値	412
第14表	第7号掘立柱建物遺構柱間計測値	413
第15表	第8・9号掘立柱建物遺構柱間計測値	415
第16表	第10号掘立柱建物遺構柱間計測値	415
第17表	第11号掘立柱建物遺構柱間計測値	416
第18表	土坑計測値一覧表	427~430
第19表	文字資料一覧表	495
第20表	住居跡一覧表	511~513
第21表	出土滑石製模造品一覧	526・528
第22表	都道府県別馬形出土一覧	541
第23表	祭祀遺構出土土器胎土分析試料観察表	553
第24表	祭祀遺構出土土器胎土分析試料結果	555
第25表	試料1ccあたりのプラント・オパール個数	562
第26表	イネの推定生産量	563
第27表	出土炭化材の樹種	571

挿入図版目次

1.	4区C遺構確認作業	6
2.	36号住居跡掘りかた調査	7
3.	現地説明会	8
4.	2区C遺構確認作業	8
5.	復元住居近景	9
6.	正式名称	11
7.	上越線調査事務所近景	11
8.	接合復元された大型土器群	11
9.	整理作業風景	11
10.	文字瓦 押印「多」	27
11.	文字瓦 ヘラかき「吉井」	27
12.	文字瓦 ヘラかき「多胡郡織妻郷」	27
13.	文字瓦 ヘラかき「山字子文麿」	27
14.	文字瓦 ヘラかき「山字物部子成」	27
15.	文字瓦 ヘラかき「八田 八里人 八阿子麿」	28
16.	文字瓦 ヘラかき「辛科子浄庭」	28
17.	文字瓦 ヘラかき「辛」	28
18.	文字瓦 ヘラかき「辛神人口(宿)子祖麿」	29
19.	辛科神社遠景	29
20.	神保古墳群出土の小金銅仏(薬師如来か)	29
21.	国指定史跡「多胡碑」	29
22.	炭化材同定標本(1)	573
23.	炭化材同定標本(2)	574
24.	炭化材同定標本(3)	575

抄 録

1. 遺跡の概要

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字長根字羽田倉・大字神保字宮西などに所在し、通称「甘楽の谷」を東流する鍋川の右岸に形成された上位段丘面に位置し、東西2つの舌状台地からなる。この地域には、縄文時代の稲荷山遺跡や古墳時代の神保古墳群・多胡古墳群・安坪古墳群などが存在し、また、古代「多胡郡」の6郷のひとつである「韓級郷」の名残とされている辛科神社が、本遺跡の北北東250mの位置に鎮座している。

本遺跡の発掘調査は、昭和61年5月27日から昭和62年10月13日までの約1年6カ月の期間を要した。その結果、古墳時代から平安時代までの集落遺跡であることが判明し、特に古墳時代後期において、滑石製模造品を使用した祭祀が行われていたこと、2区グリッドからは、滑石製馬形を用いた祭祀遺構を検出し得た。

2. 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
住 居 跡	古 墳 時 代 前 期	2	4世紀前半
住 居 跡	古 墳 時 代 後 期	62	6世紀前半～7世紀前半
住 居 跡	飛 鳥 ・ 奈 良 時 代	24	7世紀後半～8世紀後半
住 居 跡	平 安 時 代	45	9世紀前半～11世紀後半
祭 祀 遺 構	古 墳 時 代 後 期	2	7世紀前半, 土器・滑石製模造品(馬形)・工作用石類
竪立柱建物遺構	時 期 不 確 定	11	
井 戸	平 安 時 代 以 降	1	
土 坑	縄 文 時 代 以 降	93	縄文1 釜生2 古墳時代以降90
水 田	平 安 時 代 以 降	2,590㎡	浅間B軽石下
畑	江 戸 時 代 後 半	3面	浅間A軽石下
溝	時 期 不 確 定	18	道路状遺構2 含む
竪 状 遺 構	時 期 不 確 定	1	製鉄と関係あるか
ピ ッ ト 群	時 期 不 確 定	3	

3. まとめ

①縄文時代 遺構としては、落とし穴と考えられるもの1基確認された。遺物は、表採や他遺構への流れ込みの形で前期から晩期までの土器片・石器類が多数出土した。

②弥生時代 遺構としては、土坑2基である。そのうち、22号土坑は、人為的に一時に埋め戻された可能性をもつもので、遺物は、中期の条痕文をもつ土器、石剣などが出土している。また、表採という形で土器片が出土しているが、概して遺跡の西側に集中している。

③古墳時代 前期の住居跡は、遺跡の西端の5・6区で確認された。出土遺物は、樽式の特徴を有するものである。後期の住居跡は、特に遺跡の西側の舌状台地に集中する。全体に残りが良く、出土遺物が多い。その中で、40%の住居跡から滑石製模造品やチップが出土し、さらに、第76号住居跡からは、42個の磁石が出土している。また、東側の舌状台地からは、土器の破片5,000点以上と併伴して滑石製模造品・チップおよび工作用石器類が多数出土し、その中に、滑石製馬形が12点出土したことは注目される。

④飛鳥・奈良、平安時代 遺跡全体に散在する形で確認されている。特に、紡錘車の出土が多く、また、奈良時代の第122号住居跡では、紡錘車の製作を行っていたことが判明した。平安時代では、45軒の住居跡のほかに、遺跡東端より浅間B軽石で埋もれた谷地水田跡が確認された。

本遺跡周辺は、古代における「多胡郡韓級郷」の比定地とされてきた。今回の発掘調査でそれを直接証明する遺物は確認できなかったが、多胡郡内と考えられる他の遺跡と比較して前代の祭祀遺物がずば抜けて多いことが特徴としてあげられる。国分寺中間地域出土の「辛神人口(宿ヵ)子稲麿」と書かれた9世紀代の文字瓦や辛科神社との関係が注目されることである。

長根羽田倉遺跡

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

群馬県多野郡吉井町は、県の南西部に位置し、同町を東流する鍋川右岸に発達した町である。

鍋川は、県西部の長野県境にある荒船山をはじめとする諸山系から流れを発生し、そのまま東流、下仁田町・富岡市・甘楽町・吉井町を経て、高崎市南部で烏川に合流する。この鍋川流域地方は、いわゆる「甘楽の谷」と呼ばれ、河岸段丘の発達した東西にのびる平地を形成している。

吉井町は、行政的には多野郡に属し、その多野郡は明治の初め、当時の多胡郡と緑埜郡を合併して作られた郡である。多胡郡は、鍋川中下流域を中心とした地方に当たり、現吉井町は、その多くの地域を受け継いで現在にきている。

この地域は、縄文～弥生時代にかけての遺跡も多いが、歴史的には奈良時代初頭、多胡郡建部の記念として建立されたとされる「多胡碑」の存在、及びそれと関連して、『続日本紀』和銅4年の多胡郡建部の記事にかかわる地として全国に知られてきた。

昭和47年、群馬県藤岡市から長野県佐久市までの高速自動車道の基本計画が策定された（当初、関越自動車道直江津線、のちに、関越自動車道上越線、現在は、通称として上信越自動車道となっている）。以後、計画の進展に伴い、昭和59年度、群馬県教育委員会は日本道路公団の依頼を受け、路線内の埋蔵文化財詳細分布調査を実施し、同60年関越自動車道上越線地域埋蔵文化財発掘調査計画を決定した。

吉井町地域を通過する路線は、鍋川をつくる上位河岸段丘及びそれに連なる丘陵地・山間地・それらを横断する小河川上を東西に走ることとなっており、一部の山間地・低地部分を除き、多くが埋蔵文化財包蔵地であることが調査によって判明した。

この埋蔵文化財包蔵地は、遺物の散布の濃い部分・薄い部分・散布は見当たらないものの周囲の状況からあると思われる部分に分かれており、それぞれに遺跡の存在を想定する割合を乗じて、遺跡想定

面積を算出している。その結果、吉井町地域の想定面積は286,380㎡とされた。今回報告する長根羽田倉遺跡（事業名羽田倉遺跡）の想定面積は、12,810㎡となった。

昭和61年、群馬県教育委員会から委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団は、吉井町南陽台3-15-8に設置した関越道上越線調査事務所を拠点にして、矢田遺跡・長根羽田倉遺跡・田塚上平遺跡他（事業名田塚遺跡）・内匠諏訪前遺跡他（事業名内匠下高瀬遺跡）の4カ所で発掘調査を開始した。4遺跡の選定は、発掘地点を集中させないこと・大きな遺跡からとりかかるとを前提に、用地買収及び公団の工事工程の関係を考慮し、県文化財保護課・日本道路公団の協議によるものである。その中の一つが長根羽田倉遺跡である。当遺跡は、鍋川上位河岸段丘面とその南に広がる山地との接点に当たる緩やかな傾斜地にあり、東西約530m、両端を小河川と小谷地に区切られている。

長根羽田倉遺跡の調査期間は、想定面積から10カ月とされた。しかし、調査の進捗に伴い、遺構分布の淡いとされた地域から多くの遺構が検出されたこと、東側の谷地部分を取り込んだこと（当初、神保富士塚遺跡）等により、県教育委員会文化財保護課・日本道路公団と協議をおこない、調査期間を8カ月延長し、昭和62年9月までとなった。調査は進捗し、9月末におおよそ終了し、調査班はそのまま東隣りの神保富士塚遺跡（事業名 上神保遺跡）へ移動した。長根羽田倉遺跡の調査終了面積は、25,700㎡となった。

整理事業は、昭和63年度から吉井町南陽台の上越線調査事務所で開催され、当遺跡の整理は遺構・遺物量から2年の計画で着手された。事業は順調に推移し、今回、報告書の刊行となったものである。

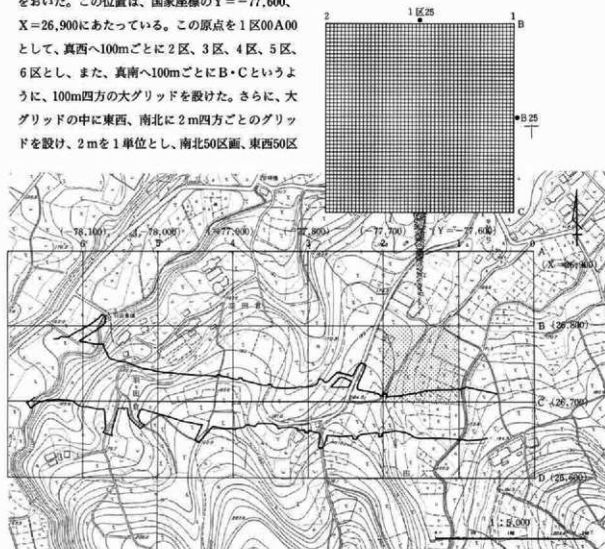
1年6カ月の発掘調査・2年間の整理事業を行う中で、多くの皆様にご協力ご支援をいただいた。ここに厚く感謝の意を表します。（徳江）

第2節 調査の方法と経過

本遺跡の調査対象地は、幅約50～70m、取付道路部分を含めれば、最大幅120m、長さ約530mを測る面積約27,500㎡であり、西に向けて約5°北によった東西方向に長いものであった。この対象地は、地形的には、小さい谷地によって分けられる2つの舌状台地が中心をなしていた。発掘調査上の区割りは、対象地の区画に沿うような形で行うことが効率的と考え設定した。すなわち、調査対象地が前述の通り、東西方向に若干南から北へ傾きながら走っており、取付道路が南北に長く伸びたところもあり、それらをすべて網羅するために調査対象地外に調査地原点をおいた。この位置は、国家座標の $Y = -77,600$ 、 $X = 26,900$ にあたっている。この原点を1区00A00として、真西へ100mごとに2区、3区、4区、5区、6区とし、また、真南へ100mごとにB・Cというように、100m四方の大グリッドを設けた。さらに、大グリッドの中に東西、南北に2m四方ごとのグリッドを設け、2mを1単位とし、南北50区画、東西50区

画の計2,500区画を設定した。また、そのグリッドは、北東コーナーの杭をもって呼称とした。たとえば、原点よりY軸方向へ10m、X軸方向へ20mの杭は1区05A10であり、その南東にかかるグリッドは、1区05A10となる。なお、グリッドの設定、水準点の移動は、特設に委託した。

この地は、本調査に先立ち、分布調査が文化財保護課により行われ、昭和60年3月に「関越自動車道上越線埋蔵文化財分布調査」という報告書が提出されていた。それによるとおおざっぱにいてSTA. 136、STA.138～139、すなわち、調査区の2区、4区



第1図 グリッド配置図

～5区にかけて土器片が濃密に散布しているとされた。さらに、文化財保護課からこの分布調査の結果をふまえて遺物の散布状況によりAランク（遺物散布が濃密で全面調査が必要な部分）・Bランク（遺物散布が薄く試掘調査をして遺構範囲を確認する必要がある部分）・Cランク（遺物散布がなく要試掘部分）・マーク外（遺物散布がなく遺跡がないとされる部分）の4段階に分けられた資料が提示された。それによると4区～5区東半部分は、Aランク、2区は、Bランク、1区と3区は、Cランク、5区西半部分～6区は、マーク外とされていた。そこで担当者3人で協議の結果、発掘調査は、現場事務所から最も遠く、しかも、遺構が密集して確認されるであろう東西2つある舌状台地の西側、5区・4区から始め、徐々に東へ向かうこととなり、調査用具や現地調査を手伝っていただく地元の人たちの手配が整った昭和61年5月27日より開始された。

調査は、まず、地表面に出土している遺物を採集した後、3カ所に2m四方の試掘トレンチをいれて、土層の状況を確認した。その結果、調査前の対象地全域が桑畑を中心とした畑地部分であり、現地表面より30～60cmの深さで耕作土（I層）が認められることから、これをユンボ（バックホー）で全面除去することとなった。その後、引き続き、遺構確認作業を行った結果、古墳時代から平安時代までの遺構が南側を中心にほぼ全域に確認された。

5区東半部分の調査をしていく中で、5区西半部分～6区のマーク外の部分まで遺構の広がりが予想されるようになった。そこで、道路公団・文化財保護課・調査担当者の三者会談の結果、20%の試掘トレンチを入れ、遺構の有無及び広がりの範囲を確認したうえで協議して決めて行くこととなった。それをうけて、10月29日に5区西半部分～6区に2m幅で7本の試掘トレンチを入れたところ、住居跡7軒、住居跡らしきもの6軒が全体に広がっていることが確認され、11月4日に行われた三者会談の結果、全面調査することが決定された。また、1区～3区の遺構範囲確認は、11月11日より24日までの間、3区・

2区・1区の順で行われた。そして、25日に三者会談を行い、3区は、中央の水路部分を除く部分を、2区は全面調査をそれぞれすること、1区は、水田の可能性はあるが不明なのでさらなる精査をすることが確認された。

その後、12月9日に群馬大学の新井教授にお越しいただき、遺跡全体の土層を観察していただいた。その観察結果から1区は間違いなく水田であることが判明し、水路部分を除き全面調査の必要の旨を道路公団・文化財保護課へ連絡をし、了承された。これにより、本遺跡は、1区と3区の水路部分を除き、他の部分を全面調査することとなった。その対象面積は、25,700㎡という広大なものとなった。

調査は、古墳～平安時代の遺構の調査が終了した時点で先土器時代の試掘調査を行うという手順で5区東半部分・4区・5区西半部分の順に進捗して行った。

1月に入って調査は、厳冬期を迎え、調査地付近は、常時「浅間おろし」の強風が吹きすさび、砂塵や小石を巻き上げ、調査を中断せざるを得ない事がしばしばあった。また、朝夕の冷え込みも厳しく、地面の凍結が毎日のようにあり、調査の進行は著しく低下した。そんな中、昭和62年3月7・8日の両日、1年間の成果を県民一般に公開し、埋蔵文化財について理解してもらうという目的で、現地説明会を催した。初日の午後から降雪するという悪条件の中、700人を越す人々が訪れ、担当の説明に耳を傾けてくれた。昭和61年度の調査は、3月27日をもって終了した。調査面積は、16,100㎡に達し、古墳～平安時代までの住居跡89軒、掘立柱建物遺構11棟、溝8条、平安時代の水田跡等の遺構を検出することができた。

昭和62年度の調査は、昭和62年4月15日より開始された。その主体は、2区・3区であった。昨年度の試掘により、全面調査を行うことになった部分であり、ユンボによる表土掘削は、すでに前年度に済んでおり、遺構確認作業から入って行った。その結果、薄い部分はあるものの全体に遺構が確認された。

第1章 調査の概要

ただ、西側の舌状台地比べ、東側の2区・3区は、耕作土が浅く、遺構の残りは、西側よりは悪かった。これらのことから、この部分の調査は、10月終了を目標に行うこと、10月以降は、東側の上神保遺跡(神保富士塚遺跡)の調査を行うことが、道路公団・県文化財保護課と事業団の協議で決まった。また、上神保遺跡の調査に先立ち、Bランクゆへの遺構確認のための試掘調査を行ってほしいとの要請があり、6月2日～8月11日までの2か月以上も担当1人が

それに常駐し、8月12日に上越線調査事務所において、遺跡範囲限定協議がもたれた。

調査の方は、先年度と同様に、古墳～平安時代の遺構の調査終了後、先土器時代の試掘トレンチを入れるという手順で行われ、調査面積9,600㎡におよび、住居跡47軒、溝10条、土坑47基、江戸期の畑跡3面、祭祀遺構2カ所等が検出された。10月13日には本遺跡に関するすべての調査を終了し、10月14日、道路公団に引き渡した。(鹿沼)

第3節 調査日誌抄

昭和61年度発掘調査 昭和61年5月27日～62年3月27日

5. 27 調査区内の遺物表面探査。事務所予定地の整備。
5. 28 調査区4区・5区に土層確認のため、試掘を入れる。(～29)事務所プレハブ工事着工・完成。
5. 29 本日より作業員の人たちが調査に参加。(32名)0.4のユンボによる耕作土除去作業開始。
5. 30 周辺から出土している遺物の調査。(滝上松雄氏宅)
5. 31 ジョレンによる5区の遺構確認作業開始。以後、14まで5区・4区・3区の順に遺構確認作業継続。
6. 2 5区で平安時代の住居跡2軒確認。
6. 3 古墳時代後期(鬼高期)の住居跡1軒確認。
6. 4 本日より0.7のユンボも稼働させる。計2台。
6. 5 4区で遺構確認作業の結果、5軒の竪穴住居跡確認。
6. 7 3区の遺構確認作業。住居跡3軒確認。男性の作業員の人たちに桑根の取り除きをしてもらう。
6. 10 5区で確認された遺構の分布概念図を平板測量で採り始める。
6. 12 5区に検出された1号住居跡の発掘開始。
6. 16 5区に検出された2～4号住居跡も発掘開始。
6. 19 5号住居跡と1号土坑が重複。土坑の方が古い。4号住居跡のセクション写真・実測終了。
6. 24 この頃、住居跡の調査と平行して4区の遺構確認

作業も行う。また、降雨のため、調査がなかなかはかからない。室内作業で遺物の洗浄・注記を行う。

6. 26 課長が来訪。遺留針の件で打ち合わせ。この付近は、地形の影響で雷の通り道となっており、上位段丘面上にあるため、よく落雷するとのこと。辛科神社の森にも落雷したことがあるらしい。7月8日、遺留針を事務所北側に設置。
6. 28 これまでの調査内容の整理とまとめをする。また、今後の調査の方法について検討する。
7. 1 1号住居跡のベルトをはずし、住居全体を精査。
7. 2 1号住居跡の遺物出土状態を写真撮影。「遣り方」による平面図作成開始。2号・3号住居跡も精査。写真撮影。
7. 3 県文化財保護課課長以下6名来訪。
7. 8 1号溝調査開始。5区の北端を東から西へ長く伸びている。
7. 9 7号・8号・9号住居跡発掘開始。土坑は、8号まで調査。
7. 18 8号住居跡と10号住居跡が重複。8号が10号を切って作られていることがセクションから判明。午後、測量来訪し、杭打ちをする。
7. 23 1号溝、2～8号土坑の平面実測終了。2号溝の確認精査。北東方向へ伸びており、1号溝と重複か。
7. 28 11・12号住居跡発掘開始。12号から窠形に近い土器がごっそり出土した。
8. 8 4区Cの遺構確認作業の結果、13・14・15・16号住居跡確認。発掘開始。2号溝の写真撮影。
8. 11 12号住居跡の南東方向に17号住居跡を確認。
8. 13 道路公団・県文化財保護課・事務所長現地視察。協議内容は以下のとおり。
 - ①5区西方のマーク外区域の取り扱いについて、基本的にはトレンチによって遺構の範囲を確認したうえで調査をすること。時期は未定。ただ、この部分に未買収区域があるとのこと。
 - ②5区のローム掘削(表掘り)により先土器時代調査をすること。
 - ③住居跡50軒を晩秋までに終了させること。
 - ④羽田倉遺跡以東を急いで調査してもらいたいとの公団か



1 4区C 遺構確認作業

らの要望。

18号住居跡発掘開始。

8. 18 高崎第7中学校郷土クラブの生徒6名・先生1名1日体験学習。19号住居跡の発掘をしてもらう。

8. 20 17・20号住居跡発掘開始。4区・5区の部分、航空写真撮影のための清掃。その清掃部分をローリングタワー上から撮影。

8. 23 AM 11:00→空撮。(委託先 青高館航空写真)

8. 25 21～25号住居跡確認。発掘開始。

8. 29 27・28号住居跡発掘開始。2号住居跡の床下調査の際に床面が検出され、また、そこから石製帯金具(蛇尾)が出土。住居跡として確認され、29号と命名。この時点で土坑は16号まで調査されている。

9. 2～9. 4 台風15号のため、作業できず。被害は無し。

9. 5 30～33号住居跡発掘開始。

9. 9 1・2号独立柱建物遺構を4区Cに検出。

9. 12 37・38号住居跡発掘開始。

9. 18 39・40・41・42・43・44号住居跡発掘開始。

9. 22 5区・4区の高線平板実測。

9. 24 5区の先土器時代の試掘調査開始。

9. 25 23号住居跡の床下にもう1軒住居があることが判明。45号住居跡と命名。46～48号住居跡発掘開始。4・5区のビット群の平板実測。

9. 30 先土器時代の試掘調査の方法について、研究部長より指示。上越線路線内の要試掘区域(Cラック)の方法を適応すること。遺構の有無の判断は現場サイドで行うこと。

10. 3 35号と49号住居跡との重複関係は、35号の方が新しいことが判明。

10. 6 4・5区の先土器時代の試掘(2m×2m)、今までに合計18か所。

10. 13 先土器時代の試掘調査終了。結局、遺物は確認できなかった。

10. 15 50号住居跡発掘開始。5区の先土器時代の試掘埋めもどし。

10. 16 3区Cの遺構確認調査。数棟の独立柱建物遺構を検出。5区の土砂うって返し。いままで土砂の下であった部分の表土除去作業。

10. 23 1・2区の桑根を抜根。

10. 27 マーク外の5区西半部分・6区のトレンチ設定。

10. 28 2区B・Cにトレンチ設定。

10. 29 5区西半部分・6区の試掘開始。本日終了。住居跡7軒、住居跡らしきもの6軒確認。試掘の件、所長・県文化財保護課に連絡。54号住居跡発掘開始。3区のトレンチ設定。2・3区、5区西半部分・6区の試掘区写真撮影。

11. 4 5区西半部分・6区の試掘結果について道路公団・県文化財保護課・事務所長・担当で検討。その結果、全面発掘調査をすべきであるとの意見で合意。

11. 5 55～57号住居跡発掘開始。3区B・C遺構確認作業。5区西部半分・6区の耕作土除去作業開始。

11. 6 53号住居跡発掘開始。

11. 10 6・52・58～60号住居跡発掘開始。

11. 11 3区B・Cの要試掘区域(Cラック)のコンボによるトレンチ掘り。2カ所に焼土が確認される。

11. 12 5区・6区の遺構確認作業。3区の試掘トレンチ継続。

11. 13 3区・2区西半分の試掘トレンチ終了。

11. 14 5区・6区の遺構確認作業で住居跡を11軒、ビット・土坑多数検出。1・2区試掘トレンチ掘り。

11. 17 0・1区試掘トレンチ掘り。2・3区試掘トレンチ精査。

11. 18 0・1区(水田部分)試掘トレンチ掘削終了。

11. 19 1～3区の試掘トレンチ精査。53号住居跡発掘途中で炭化材多数出土。焼失家屋の可能性もある。

11. 20 61・62号住居跡発掘開始。

11. 22 72・73号住居跡発掘開始。

11. 25 63号住居跡発掘開始。1～3区の試掘区域について道路公団・県文化財保護課・事務所長・担当で協議。その結果、1区・3区の水路部分を除いてほぼ全面調査が必要であるとの合意に達した。ただ、1区の水田部分については、さらなる精査が必要。

11. 26 64・65号住居跡発掘開始。1区北側のトレンチの排水作業。

11. 27 1区試掘トレンチ精査(～28)。74・75・76号住居跡発掘開始。

11. 28 77・78号住居跡発掘開始。

12. 3 80号住居跡発掘開始。

12. 9 群馬大学の新井教授に遺跡全体にわたって、地質の観察をしていただく。その観察の結果、1区の水田部分は、B層石降下時に間違いない水田として耕作されていたことが判明した。

12. 19 81・82号住居跡発掘開始。

12. 23 4・5区航空写真撮影のため、清掃作業。2区耕作土除去作業。

12. 24 遺跡地全体の清掃作業の後、昼頃、航空写真撮影。(委託先 国際航業)

12. 25 年末・年始休業のための遺構シートかぶせ。

12. 26～1. 5 年末・年始休業。

1. 6 本日から発掘作業再開。前日からの降雪のため、遺跡全体を雪掻きする。

1. 8 1区水田部分の表土掘削。0.7のコンボ2台で行う。

1. 10 2区耕作土掘削。0.7のコンボ2台(～16日)。82・83号住居跡平面プランを確認した後、発掘開始。

1. 23 4区のビット群の検出作業開始。

1. 27 4区のビット群セクション実測。



2 36号住居跡掘りかた調査

第1章 調査の概要

1. 28 4区の3号道路東部分のピット群検出作業開始。
1. 29 79号住居跡発掘開始。
1. 30 ピット群セクション注記すべて終了。削付平面図作成開始。
2. 3 前日夕方から朝まで降り続いた雪のため、除雪作業。
2. 5 84・85号住居跡発掘開始。
2. 13 町道3号道路部分の切り回しのため、掘削開始。87号住居跡発掘開始。10号掘立柱建物遺構写真撮影。31~34号土坑写真撮影。
2. 16 3号道路下の遺構確認作業開始。1区水田部分のジョレンによる掘削調査開始。午後、強風のため、外での作業できず、室内作業に切り替える。
2. 18 降雪のため、一日室内作業。
2. 19 現地説明会へむけて準備開始。
2. 23 3区・5区の遺構外の削付図作成。
2. 24 現地説明会にむけて復元家屋2棟を作成開始。5区の先土器時代の試掘トレンチ掘削。3区・5区の削付図作成継続。
3. 3 86号住居跡発掘開始。
3. 4 89号住居跡発掘開始。79号住居跡発掘開始。
3. 7~8 現地説明会開催。1日目の午後から降雪があり、条件が大変悪いにもかかわらず、同日併せて700名以上の見学者あり。団体では、岩平中学校全校生徒、吉井西小学校6年生、多胡小学校1・2年生などが見学した。



3 現地説明会

3. 11 1区水田部分遺物平面図作成、両遺物取り上げ。
3. 13 41~45号土坑まで確認。
3. 16 1区水田部分精査。小ピットの中の火山灰を除去。足跡らしきものも確認される。
3. 26 1区水田部分を清掃し、全景を写真撮影。また、航空写真撮影。(委託先 青高館)
3. 27 本日をもって、昭和61年度の調査を終了する。検出された遺構は、住居跡89軒、溝8条、土坑45基、ピット群4カ所、水田跡などであった。

昭和62年度発掘調査

昭和62年4月16日~10月13日

4. 15 本日より調査を再開。2区の遺構確認作業を行う。2区は、本遺跡に2つある舌状台地の東側の方。作業員さんの登録人数は、昨年度の地道な募集の成果があり、78名となった。
4. 16 昨年度の残株整理。2区の遺構確認作業。
4. 20 1区水田部分の西側の石組エレベーション。ボーリング棒で水田下を確認したところ、30~50cm下の所にかなり多量の石が混入していることが判明。石組は、耕作時に水田面にある邪魔な石を寄せて作られたことが推測される。2区の遺構確認作業。
4. 22 1区水田部分の補足調査。2区遺構確認作業。東側の斜面の肩部分に土器集中箇所1カ所、A経石下短跡1カ所確認。土器集中箇所はのちに滑石製模造品や滑石製馬



4 2区C 遺構確認作業

- 形を併伴する祭祀遺構であることが判明する。住居跡4軒確認。
4. 23 3区の焼土部分(窯跡か)の断面実測・写真撮影。
4. 27 2区にもう2カ所、A経石下短跡確認。都合3カ所。
4. 28 88・90・91号住居跡発掘開始。9号溝発掘開始。
4. 30 3カ所の短跡の精査・写真撮影。93・94・95号住居跡発掘開始。
5. 6 土坑47~56号までナンバーふる。95号住居跡北側(3区の谷地部)に遺構確認のため、試掘トレンチを入れる。大変不明瞭である。
5. 8 96号住居跡・57号土坑発掘開始。
5. 11 97号住居跡発掘開始。
5. 12 98号住居跡・58号住居跡発掘開始。
5. 13 AM 10:00から水田部分の化学分析としてのプラントオパール分析用サンプルを採取する。(委託先 古環境研究所) PM 2:40頃から久しぶりの雨が降ってきた。最近、まったくと言ってよいほど、雨が降らず、遺跡地全体が、バサバサして調査がはかどらなかつた。恵みの雨。
5. 18 99・100号住居跡発掘開始。
5. 19 101・102・103・104・105号住居跡発掘開始。
5. 20 106・107・108・109号住居跡、60・61・62・63・64・65号土坑発掘開始。
5. 21 110・111号住居跡、66・67号土坑発掘開始。
5. 22 68・69・70号土坑発掘開始。
5. 24 112号住居跡発掘開始。
5. 26 71・72・73・74・75・76号土坑発掘開始。
5. 28 93号住居跡貯蔵穴より輪軸出土。77号土坑発掘

- 開始。
- 5、29 113号住居跡発掘開始。
- 6、1 114・115号住居跡・78号土坑発掘開始。
- 6、2 79・80号土坑発掘開始。1号・2号土器集積精査。以前に確認されていた土器集中箇所は2号土器集積となる。本日より9月3日まで調査。出土遺物を1点1点レベルを読みながら採り上げて行く。
- 6、3 2区Cにある谷地部に試掘トレンチを入れる。2号土器集積の上部の状態を写真撮影。116号住居跡・81号土坑発掘開始。
- 6、5 117号住居跡発掘開始。碧玉製管玉出土。本日より上神保遺跡の試掘調査にむけてその準備として草刈を始める。
- 6、8 118号住居跡発掘開始。2区の大溝部分発掘開始。(10号溝)
- 6、10 119号住居跡発掘開始。83号土坑発掘開始。
- 6、15 120号住居跡・83・84号土坑発掘開始。
- 6、18 上神保遺跡の草刈り終了。試掘トレンチ設定開始。11号溝発掘開始。120号住居跡と重複。120号住居跡を切る。
- 6、19 道路公園工事長来訪。上神保遺跡内に鍋川用水が走っており、その図面を持参する。遺跡内を確認する。
- 6、25 121号住居跡発掘開始。上神保遺跡の試掘トレンチ設定終了。ほぼ1週間かかる。かなりの労力がかかり、その間、羽田倉遺跡の調査が遅れることとなる。
- 6、26 上神保遺跡の試掘トレンチ掘削開始。(0.7のユンボ1台)
- 7、2 上神保遺跡試掘調査4日目。西側台地東斜面より古墳時代後期の住居跡7軒確認。
- 7、7 122・123号住居跡発掘開始。上神保遺跡試掘区に安全のため、柵設置し、また、杭打ちしてトラロープを張る。
- 7、9 124号・131号住居跡・12・13・14号溝発掘開始。
- 7、13 125号住居跡発掘開始。
- 7、14 126号住居跡発掘開始。
- 7、15 127号住居跡・85・86号土坑発掘開始。
- 7、16 15・16・17号溝発掘開始。
- 7、20 18号溝・87号土坑発掘開始。
- 7、22 2区C第3トレンチ掘削開始。
- 8、3 88号土坑発掘開始。
- 8、5 128号住居跡発掘開始。
- 8、7 上神保遺跡試掘トレンチ精査、本日終了。ほぼ2カ月の期間を要した。図面整理開始。
- この頃、羽田倉遺跡出土遺物の総数(推定)をバン箱に換算して計算。(564箱)
- 9、1 上神保遺跡発掘制限のため、県文化財保護課(本田氏)・事業団(上原研究部長・原田上総線調査事務所次長)・担当3人(小林・小野・渡沼)で協議。
- 8、27~8、31 航空写真撮影のため、清掃作業。
- 8、31 2号土器集積東側より須恵器を中心とした多量の土器・滑石製模造品(白玉)出土。3号土器集積と命名。発掘開始。2号土器集積と同様に1点1点レベルを読んで採り上げて行く。
- 9、1 2区・3区のアドバルーンによる航空写真撮影。(委託先 青高館)
- 9、2 129・131号住居跡発掘開始。(130号住居跡は欠番)
- 2区・3区の先土器時代の試掘調査開始。
- 9、3 1号・2号井戸跡発掘開始。のちに、1号井戸は、93号土坑に変更。2号土器集積調査終了。遺物総点数1,664点。
- 9、9 羽田倉遺跡の調査と平行して上神保遺跡の事務所設置場所の整地を開始する。
- 9、10 上神保遺跡調査工程について道路公園・県文化財保護課・担当で打ち合わせ。
- 9、14 132号住居跡発掘開始。
- 9、28 133号住居跡発掘開始。
- 10、1 134号住居跡発掘開始。
- 10、9 135号住居跡発掘開始。
- 10、12 3号土器集積調査終了。石類141点・土器3,552点。
- 10、13 本日をもって羽田倉遺跡の全調査を終了する。
- 住居跡136軒 独立柱建物遺構11棟
土坑33基 溝17条 井戸1基
ピット 多数
烟跡3面 水田跡 竈跡1カ所
土器集積3カ所等



5 調査風景(後方に辛科神社の森を望む)

第1章 調査の概要

区	月	61/5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 区								試験		水田調査					神保宮土城 全城試験調査				本調査
2 区								試験											プレ試験
3 区								試験											プレ試験
4 区												プレ試験							
5 区								試験			プレ試験								
6 区								試験			プレ試験								

第1表 発掘調査工程

第4節 整理の経過

昭和62年10月13日にすべての発掘調査が終了した後、上越線調査事務所において整理委員会が設けられ、そこで、昭和63年度から始められる整理事業の計画が決まり、その中で長根羽田倉遺跡の報告書を、昭和63年4月1日～昭和65年（平成2年）3月31日までの2年間で作成・刊行していくことが決定された。

その決定を受けて、昭和63年4月1日より整理事業が開始された。4月～9月までは出土土器の接合・復元作業を行い、9月からは平行して遺構図面の整理・修正・トレース原図作成も行った。特に、土器の接合・復元は、本遺跡の住居跡の半数以上が古墳時代後期の遺物量の多い時期のものであり、また、残存状態が大変良く、個体数が予想以上に多量になったため、半年間という長い期間がかかってしまった。

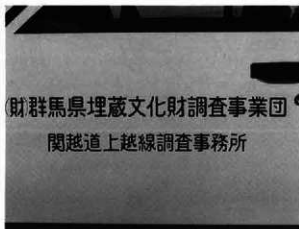
その後、9月後半に実測作業が開始され、11月に写真撮影を行なった。当初、導入する予定の、通称、

3スペースと呼ばれるコンピューター実測機が、実現できず、整理計画を変更することも考えられたが、西平・田籾1両整理班の協力を得て、何とか、土器の実測をこなすことができた。しかし、本遺跡の遺物には、土器だけでなく、大量の石器類・鉄器・陶磁器などがあり、結局、トレースまで仕上げるのに翌平成元年8月までの11カ月間という期間が必要であった。また、トレースのうち、遺構と土器については、外注した。

土器観察表の作成は6～8月までの3カ月をあてた。8月からは、版下図作成、遺構・遺物の写真版下図作成を行った。また、本文執筆は、遺跡担当者4名で分担執筆とし、6～10月までに書き上げた。そして、すべての作業を10月31日で終了し、完全原稿の形で入札をした。その後、取藏作業と校正とを繰り返しながら、平成2年3月に納本・送本を行い、本遺跡の整理事業のすべてを終了した。（鹿沼）

区分	月	03/4	5	6	7	8	9	10	11	12	元/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	2/1	2	3			
調査	接合・復元	—————																										
遺物	トレース							—————																				一部外注
	整理																											
遺構	トレース																										外注	
	整理																											
その他	写真撮影																											
	写真版下作成																											
その他	遺物観察表																											
	本文																											
その他	入札																											
その他	校正・収録・発行																											

第2表 整理作業工程



6 正式名称



7 上越線調査事務所近景



8 接合された大型土器群



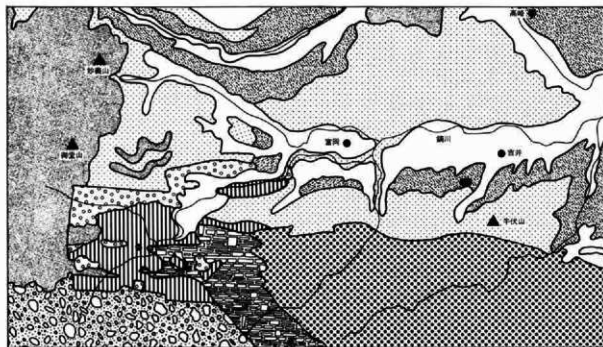
9 整理作業風景

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

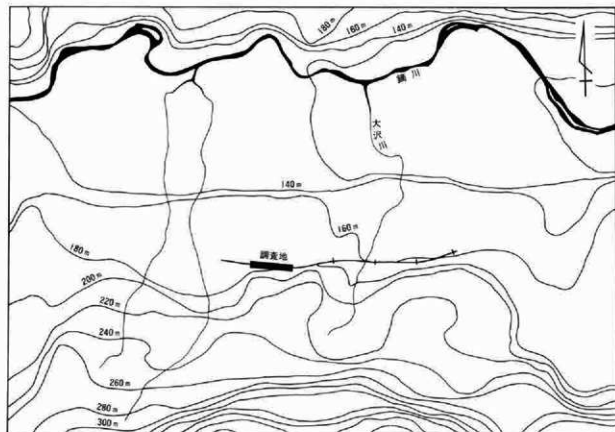
長根羽田倉遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字長根・神保に所在する。この地は、群馬県の南西部を西から東へ流れる鏡川右岸に形成された上位段丘の南縁の、段丘から丘陵への変換点に位置し、大沢川・安坪川などの小河川・水系によって侵食された北に張り出す舌状台地の先端に占地している。本遺跡か

ら北東方向に直線距離で2.5kmに吉井町の市街地があり、さらに1.5km先の所に国指定史跡「多胡碑」がある。また、富岡市街地は、西北西方向へ直線距離で7.0kmである。さらに、遺跡の目の前、北北東方向へ250mの所には711年(和銅4年)に設置されたと言われている多胡郡韓級郷という地名の名残りである

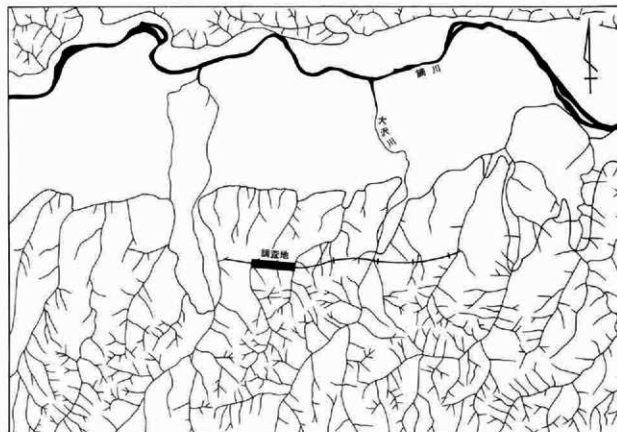


出典：群馬県地質図(1964)、内外地図発行を簡略化

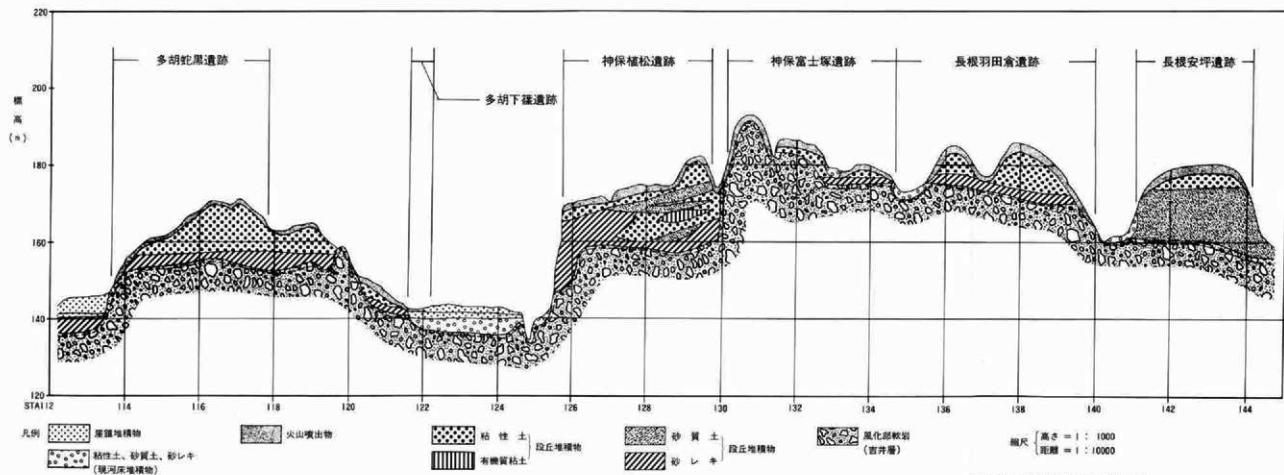
第2図 調査地の周辺の地質図



第3図 調査地周辺切峰図



第4図 調査地周辺水系図



第5図 調査地周辺土性縦断面図

辛科神社が鎮座している。

本遺跡北方3kmの所を東流している鍋川は、上信国境に連なる荒船山・八風山に源を発し、西牧川・南牧川となって下仁田町の川井付近で合流し鍋川となる。そして、さらに東流しつつ小河川を集めながら吉井町で大沢川・矢田川・土合川などの支流を合わせ、高崎市倉賀野付近で利根川の支流の烏川と合流する。この流域における分水界は南北幅およそ18.7km東西幅41.5kmである。この鍋川流域は「甘菜の谷」と通称されており、右岸下流域と左岸の一部に河岸段丘が確認される。河岸段丘は、上位段丘面と下位段丘面とで構成されており、特に右岸に発達している。その成因は、①関東山塊の地核運動に導かれた傾斜運動により鍋川の蛇行状の中心線が北へ移動し、左岸の富岡丘陵を侵食しているため ②支流が北西方向に鍋川に注ぎ込む反Y字現象を呈すること、によるとされており、現在もなお鍋川の北方への移動は継続中であるという。

本遺跡は、その鍋川的作用によって形成されたとされる神保段丘と呼ばれる上位段丘内に所在する。この地に立つと南に牛伏・御荷鈴山系を背にして西に荒船山・妙義山・浅間山、北に富岡丘陵を隔てて榛名山・子持山・谷川岳、北東に赤城山などの山塊が一望に見渡せる。日照度が高く、自然災害の少ない地域であり、日当たりが良く、住み心地の良い場所であるが、冬期には「浅間おろし」と呼ばれる北西の季節風が吹き荒ぶ。この上位段丘面が形成されたのは今から数万年から十数万年前の洪積世末期とされ、その後浅間山による上部ローム層が上位段丘面に堆積する頃には下位段丘面を鍋川が流れていたと考えられる。神保段丘は、吉井町上神保・下神保・折茂を中心に発達しており、標高は155～180m前後で河床からの比高差は60～85m程を測る。その地質は、基盤岩が、吉井層（第三系）と呼ばれる暗灰色の泥岩から成り、その上に、上部に粘性土層、下部に砂質土が分布する段丘堆積物があり、さらに上部には黄褐色の火山噴出物（関東ローム層）が一般に0.5～2mの厚さで堆積しているが、本遺跡の西側

の舌状台地では4.5mほどと比較的厚くなっている。この上位段丘の地表は、鍋川に向かって緩やかに傾斜しており、疎ではあるが水系がみられ、多少開折されている。本遺跡内にも2つの谷地が確認されている。地表の耕作土は、黒褐色土を呈し、舌状台地上では桑畑・こんにゃく畑等に利用され、開折された谷地では水田耕作が営まれている。

さらに、南方には関東山地に連なる主峰牛伏山（標高490.5m）をもった牛伏山系の山並が迫っている。鍋川の上位段丘面と相隣した当山地の基盤岩は、主として牛伏砂岩であり、この砂岩は硬く、縞の奇異な模様が出て、建築石材や石燈籠として現在も需要があり、採掘にあたっては、いわゆる露天掘りで毎日のように岩石を搬出している。古代においても河原の転石を掘り出したり、切り出してきて加工して竈の構築材や砥石として使用していたことが長根羽田倉遺跡の調査でわかった。この牛伏山付近では第三系と東西方向に延びる断層で三波川及び御荷鈴変成岩が接している。この三波川変成帯より産出される滑石・蛇紋岩を利用して古代において「甘菜の谷」の人々は祭祀用品をさかんに作っていた。現在でも、甘菜町秋畑（雄川上流）・吉井町大判地（大沢川上流）・藤岡市日野（鮎川上流）には滑石・蛇紋岩が露頭している所があるといい、秋畑や大判地では、つい最近まで滑石（蠟石）を採掘していた。また、大沢川・安坪川などの小河川には片岩系の河原の転石がある。本遺跡でも竈の構築材や敲打石（ハンマーストーン）・砥石として片岩系の河原の転石が利用され、滑石・蛇紋岩などを祭祀用品や紡錘車として加工する時に使用された。（鹿沼）

参考文献

- (1) 『吉井町誌』吉井町誌編纂委員会 1974
- (2) 鬼形芳夫・内木真輝「鍋川右岸下段丘上における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団創立十周年記念論叢
- (3) 『かよらの自然』かよら理科研究会 1972
- (4) 日本道路公団東京第二建設局高岡工事事務所・株式会社東京ソイルサーチ「随時自動車道神保～長根地区第2次土質調査 報告書」1985

第2節 基本層序

本遺跡は、簡川の作用によって形成された神保段丘と呼ばれる上位河岸段丘内に所在する。その基盤岩は、吉井層（第三系）と呼ばれる暗灰色の泥岩から成り、その上に、上部に粘性土層、下部に砂質土が分布する段丘堆積物があり、さらに、上部には黄褐色の火山噴出物（関東ローム層）が、一般に0.5～2mの厚さで堆積している。その上には、暗褐色土の旧耕作土・褐色土の現耕作土が約0.6～1mの厚さで堆積している。本遺跡は、東西2つの舌状台地より成り、西側の方が、新田耕作土の残りがよかつた。住居跡を中心とした数多くの遺構は、火山噴出物（関東ローム層）の上部の黒褐色のVI層下方で確認することができた。また、2つの舌状台地の間の谷地には柔らかい粘性土を主体とする崖堆積物がかなりの厚さで堆積していた。その中にはB軽石が含まれていた。

以下に、各層序について簡単に特徴を記しておく。

I層：灰褐色土。A軽石を多量に含む締りのない土（耕作土）。

II層：A軽石純層（1873年<天明3年>降下）

III層：褐色土。耕作土を処所に含む細粒だが締りのない土。

IV層：暗褐色土。黄褐色土・B軽石を含む細粒で締りのある土。

V層：B軽石純層（1108年<天仁元年>降下）

VI層：黒褐色土。斑状の褐色土やローム粒を含む細粒で締りのある土。

VII層：ローム漸移層

VIII層：暗黄褐色土。発泡のよい黄色（AS-YP）軽石を上部に多量に含む軟質なローム土。下部は粘性が強い。

IX層：黄色土。かなり堅くしまっている土。

X層：BPブロック。いわゆる、「BP」ではなく、BPグループのひとつ。全体に軽石は細かく、黒色鉱物を多く含み、褐色よりも黒っぽい土。

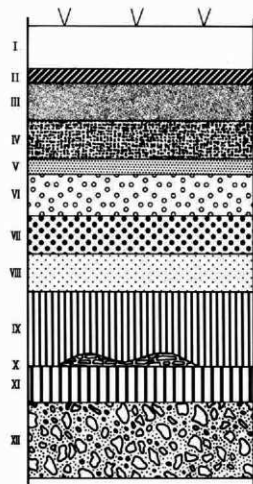
XI層：暗黄色土。BPの軽石を微量に含む。土色は、

かなり暗い。

II層：AS-MP層（浅間一室田軽石層）。3～5mm程の褐色の軽石による純層。水分をかなり含む。浅間山を給源とする軽石層で、従来AS-BPに含めていたが早田（1986）⁽¹⁾のいうAS-MP層（浅間一室田軽石層）である。（谷藤・鹿沼）

註

- (1) 早田 勉（1986）古城遺跡のテフラ分析および重鉱物分析、安中市教育委員会編「古城遺跡—安中古城遺跡住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、111-118



第6図 標準土層図

第3節 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

地形的に見た場合、「第1節 地理的環境」でも説明したとおり、鍋川右岸に河岸段丘が幅広く形成されており、現在確認されている周辺の遺跡の数も第7図のように圧倒的に右岸が多い。しかもその多くが、上位段丘面上に集中している。また、歴史学・考古学の面から見た場合、学史的に有名な入野遺跡が上位の多胡段丘の東端にあり、また、7世紀後半から8世紀前半にかけて築造された上野三碑（山ノ上碑〈天武9年〉・多胡碑〈和銅4年〉・金井沢碑〈神龜3年〉）が、本遺跡の北西4～7kmに存在することも注目されることである。

以下において、周辺の遺跡の内、近年の発掘調査でその内容が明らかになったものを中心に、各時代毎に概観しておきたい。

先土器時代

故 相沢忠洋氏による赤城山東南麓における精力的な調査、群馬県埋蔵文化財調査事業団および北橋村教育委員会の手による昭和56年以降の関越自動車道新高線建設に伴う赤城山西麓の発掘調査などにより、遺跡の数は急激に増加しているが、西毛地区では今まで遺跡はまだ1箇所も確認されておらず、ただ、表面採集ではあるが大字神保字榎松・大字多比良字笠懸において尖頭器がそれぞれ1点ずつ発見されていただけであった。そんな中、昭和62～63年度にかけて調査された関越道上越線神保富士塚遺跡の1区のYPを含むローム層中より黒曜石製の彫器片1点・刺片2点が確認された。いままでも遺跡の発見の可能性はあると考えられていたが、神保富士塚遺跡が西毛地区で初めての遺跡の確認例となった。本遺跡内でも表面採集という形で尖頭器片・調整刺片が出土しているが、縄文時代の可能性が高いと考えられる。

縄文時代

本遺跡の東隣の神保富士塚遺跡では最も本遺跡よ

りの3区から前期の住居跡1軒が確認された。また、神保榎松遺跡では前期～後期の土器片や石器類が多数出土しており、その南側の稲荷山遺跡では表面採集ではあるが、中期の土器片が、石器類と共に出土している。さらに東の矢田遺跡では吉井町教育委員会の調査である榎谷戸遺跡も含めると中期の住居跡4軒・埋壘6基などが確認されている。入野遺跡では前期の住居跡1軒と早期の土器片が出土している。その東の黒熊遺跡群からは中期の住居跡が1軒検出され、そこから下位段丘へ下りた塚原遺跡では中期～晩期の土器包含層を確認した。白石根岸遺跡では前期の住居跡2軒が確認された。本遺跡の西隣である長根安坪遺跡では中期の住居跡12軒・配石遺構3基（そのうち1基は環状列石）・土壇100基以上が確認された。また、白倉下原遺跡では前期～後期の集落跡であり、数石住居跡や柄鏡型住居跡なども検出された。さらに鍋川の対岸（左岸）に目を向けると1970年4月に県立博物館が調査した東吹上遺跡がある。ここからは、前期～中期にかけての包含層が検出され、また、調査のきっかけとなった完形の香炉形土器も出土している。

弥生時代

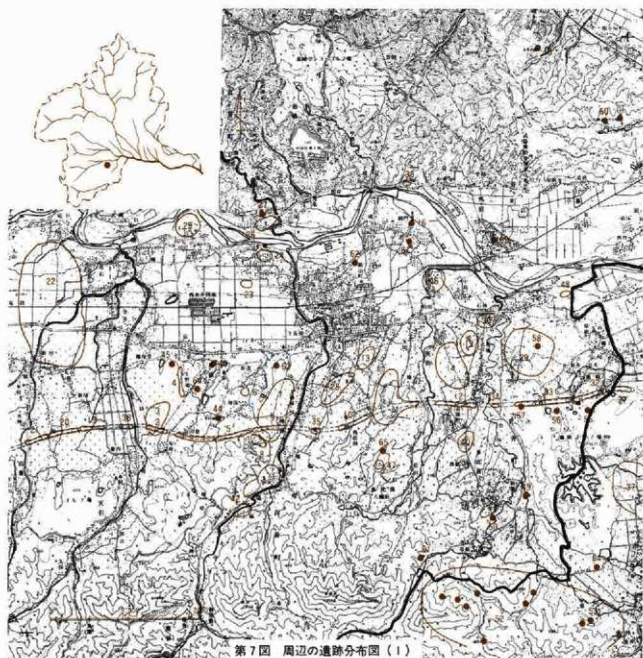
本遺跡の東隣の神保富士塚遺跡では、中期の土壇群が確認され、その東隣の神保榎松遺跡でも同様に中期の土壇群が確認され、その南側の稲荷山遺跡の東北斜面からは中期の土器片や凝灰片岩製の大型石甕が出土している。川内遺跡では中期の土壇と後期の方形周溝墓が検出された。入野遺跡では後期の集落跡であり、黒熊遺跡群の第5遺跡では後期の集落跡と方形周溝墓が検出されている。祝神遺跡は入野遺跡の北に隣接し、下位段丘に位置する後期の集落跡である。本遺跡の西隣にある長根安坪遺跡では、後期の集落跡が確認され、さらに東の白倉下原遺跡では中期の土壇6基・後期の住居跡13軒が確認されており、中でも注目されることは、12軒の住居跡が

第2章 遺跡の環境

ら片岩系の石の剥片が多数出土し、そのうちの5軒から磨製石鏃の成品が出土したことから、その石材を利用して磨製石鏃を製作していたと考えられることである。また、甘梁町笹遺跡からも同様の磨製石鏃や滑石製勾玉が出土しており、白倉下原遺跡との関連性が同われる。それらの出土例から、本遺跡のすぐそばの大字神保字南高原より磨製石鏃と樽式土器が表面採集されていることも注目される。

本遺跡の周辺は、西毛地区でも有数の後期古墳の集中した地域である。すぐ東側には8つの支群からなる神保古墳群がある。この中には墳丘が八角形に近いといわれている一本杉古墳や立敷柄共鉄造横刀（りゅうこづかともがねづくりのおうとう）という太刀を出土している城古墳が含まれている。神保植松遺跡では神保古墳群に含まれる数基の古墳を調査しており、ここでは、前期の方形周溝墓7基も確認されている。さらに、大沢川を挟んで対峙する多胡上位段丘には2つの支群からなる多胡古墳群があ

古墳時代



第3表 周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	時代類別	遺跡の概要	備考
1	長狭野田倉遺跡	縄文～江戸	縄文層とし、弥生土層、古墳前期～平安時代までの住居跡、古墳後期の倉形遺構、江戸天明3年以前の畑跡等。	本遺跡、群馬県蔵文化財調査事業団 S.61.5～62.10
2	長狭安坪遺跡	縄文～江戸	縄文の住居跡・土壌・環状列石等、弥生の住居跡・土壌、古墳の方形周溝墓・住居跡・土壌・古墳、奈良平安時代の住居跡、江戸土層。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.63.1～H.元.2
3	安坪古墳群	古墳後期	古墳時代後期の群集墳。古墳総数では44基をあげているが、長狭安坪遺跡で13基の解された古墳を確認しており、数ほさらに多かったと考えられる。	上毛古墳総覧旧吉井町第11～54号墳
4	西脇場・長狭宿遺跡	古墳前期後、奈良～平安	古墳時代前期の住居跡、奈良時代の遺物集集中地、平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会 S.61.11
5	神保富士塚遺跡	先土器～江戸	先土器の石器・刺片・小樺、縄文の住居跡・土壌、弥生の土層、古墳前期・後期の住居跡、奈良平安時代の住居跡、江戸の小竈穴遺構。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.62.10～63.10
6	折茂東遺跡	弥生～平安	弥生後期の住居跡、方形周溝墓、古墳前・中・後期と平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会 S.61.7～9
7	神保古墳群	古墳後期	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では146基をあげている。周辺では最も大規模な古墳群である。	上毛古墳総覧多胡村第2～147号墳
8	稲荷山遺跡	先土器～弥生	先土器時代の尖頭器、縄文・弥生時代の土器・石器が表面採集。	
9	神保松尾遺跡	縄文～戦国	縄文の住居跡・土壌・埋設土器、弥生の住居跡・土壌、古墳の住居跡・土壌、方形周溝墓、古墳、奈良・平安時代の住居跡、中世城郭(新松城)の主郭、16世紀の竈穴遺構など。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.62.10～H.元.3
10	多胡蛇尾遺跡	先土器～平安	先土器の尖頭器、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.63.11～H.元.4
11	矢田遺跡	縄文～中世	縄文の住居跡・埋設土器、古墳前期の住居跡、古墳後期～奈良・平安時代の住居跡、中世の居跡跡など、平安時代の住居跡より「八田郷」なる藤原文字のある初期草履が出土。古代矢田郷か？	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.61.3～継続中
12	多比良追野遺跡	古墳～平安	古墳時代中期・後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.2～継続中
13	川内遺跡	縄文～中世	縄文の土層、弥生の住居跡、方形周溝墓、古墳前・中・後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、中世の井戸など。	吉井町教育委員会 S.57
14	千保原遺跡	古墳	古墳時代後期の土器が散布している。	
15	入野遺跡	縄文・古墳・中世	縄文前期の住居跡、古墳前期・後期の住居跡、中世の墓壇など。	群馬大学 S.26 吉井町教育委員会 S.60-61
16	多胡碑	奈良	和銅4年(711)の多胡郡設置の記念碑。日本三碑の1つ。	国指定史跡
17	山ノ上碑及び古墳	飛鳥・白鳳	天武9年(681)利智によって母のために建立された墓誌。	国指定史跡
18	金井石碑	奈良	神亀3年(726)三一家一族で祖先・父母の菩提のために信仰を表明。	国指定史跡
19	天引狐崎遺跡	古墳	マウンドなしの古墳・住居跡等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査予定
20	天引向原遺跡	弥生～平安	弥生後期～平安時代の住居跡等。	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査予定
21	白倉下原遺跡	縄文～平安	縄文後期の柄杓形住居・敷石住居跡・土壌、弥生の住居跡(磨製石製の工房跡)、古墳初期方形周溝墓、古墳時代後期住居跡～平安時代の住居跡など。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.5～継続中
22	甘楽寺埋遺跡	古墳～江戸	古墳前期～平安(B軽石直下)・江戸(A軽石直下)の水田跡。古墳後期の滑石製模造品工房跡。	甘楽町教育委員会 S.58.5～
23	道六神道跡	平安	一部にB軽石の覆った水田跡、平安の住居跡など。	吉井町教育委員会 S.60.4～6
24	本郷古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	古墳総覧吉井町第67～87号墳
25	片山古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	古墳総覧吉井町第55～69号墳等
26	岩崎古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では6基をあげている。	古墳総覧岩井 第1～6号墳
27	東次上遺跡	縄文～古墳	縄文前・中期の土器・石器、古墳後期の住居跡。	県立博物館 S.45.3～4
28	多胡古墳群	古墳後期	古墳後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では23基をあげている。	古墳総覧多胡 第22～29号墳等
29	黒熊遺跡群	縄文～平安	第1～第6遺跡までである。縄文～平安までの住居跡。	吉井町教育委員会 S.59.5次
30	祝神古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	古墳総覧入野第34～44号墳
31	白石根岸遺跡	縄文・奈良平安	縄文前期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、B軽石直下の水田跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.3～6
32	黒熊築崎遺跡	平安・近世	平安時代の住居跡、平地神社跡など。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 S.62.4～9
33	黒熊八幡・中西遺跡	奈良・平安	奈良・平安時代の住居跡と山寺寺院跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.7～継続中
34	多比良平野遺跡	平安	10世紀の住居跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.6
35	多胡下城遺跡	江戸	A軽石で埋もれた水田跡及び畑跡。	群馬県埋蔵文化財調査事業団 H.元.5
36	天引口明塚遺跡	古墳	マウンドなしの古墳	群馬県埋蔵文化財調査事業団調査予定
37	F1竹沼遺跡	縄文・弥生・古墳	先土器末期～縄文草創期の石器、縄文中期の住居跡、弥生の土層、古墳前期の住居跡、後期の住居跡、滑石製模造品の工房跡。	藤岡市教育委員会 S.52.12～53.3
38	川福遺跡	奈良・平安	奈良時代の土器集集中地、平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会 S.59.3～6

第2章 遺跡の環境

No	遺跡名	時代類別	遺跡の概要	備考
39	中ノ原古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳群では10基をあげている。	古墳群鑑入野 第54～53号墳
40	東沢遺跡	古墳～平安	古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会 S.61.5～7
41	塩ノ古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳群では10基をあげている。	古墳群鑑多胡 第148～
42	塩田古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳群では12基をあげている。	古墳群鑑多胡 第158～
43	長根城跡	中世	小堀氏の支族である長根氏の居城の可能性あり。	
44	幸科神社・神保城跡	中世以降	上野道神名帳(永仁6年)記載の神社か。周囲に薬研状の堀あり。植松との関連性が注目される。	
45	悪行寺古墳	古墳	径40mの大型円墳。未定礎の可能性が大きい。	古墳群鑑吉井町 第54号墳
46	塚原古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳群では44基をあげている。	古墳群鑑吉井町 第110号～
47	山ノ神古墳群	古墳後期	古墳後期の群集墳。上毛古墳群では7基をあげている。	古墳群鑑入野 第46～52号墳
48	小串塚原遺跡	縄文	縄文後期の土器片散布地。	吉井町教育委員会 S.58
49	下五反田遺跡	平安	9～10世紀にかけての須恵器・瓦を焼いた窯跡。	国士館大学 S.51.8
50	滝ノ前遺跡	平安	10世紀前半に須恵器を焼いた窯跡。	
51	末ノ沢窯跡	奈良・平安	8～9世紀にかけての須恵器・瓦を焼いた窯跡。	国士館大学 S.51.8
52	下日野金井窯跡	奈良・平安	8～10世紀にかけての須恵器・瓦を焼いた窯跡。	藤岡市教育委員会 S.62・63
53	金山窯跡	奈良	8世紀後半の瓦・須恵器を焼いた窯跡。	立正大学考古学研究室 S.39
54	西平井ノ場南寺	不明		
55	塔ノ峰南寺	平安	9～10世紀の山岳寺院。	
56	黒熊八幡南寺	平安	9～10世紀の山岳寺院。	
57	黒熊中西南寺	平安	9～10世紀の山岳寺院。	
58	黒熊熊野南寺	平安	9～10世紀の山岳寺院。	
59	高尾東南寺	白鳳～奈良	7世紀末期の寺院跡か。	
60	ていせいじ南寺	奈良	8世紀前半の寺院跡か。	
61	阿庭寺	奈良	8世紀前半の寺院跡か。	
62	榎木味南寺	奈良	8世紀前半の寺院跡か。	
63	下高野南寺	平安	9～10世紀の寺院跡か。	
64	東脇南寺	平安	9～10世紀の寺院跡か。	
65	松田南寺	不明		

る。この中には終末期の敷石切組積で有名な多胡葉師塚が含まれている。また、大沢川の支流には塩古墳群が散在している。一方、目を西に方向けると安坪川を挟んで長根段丘には安坪古墳群があり、関越道上越線の長根安坪遺跡の調査では墳丘を残すもの2基・周溝のみのもの13基を調査することができた。また、前期の方形周溝墓も多数確認することができ、この地区が古墳時代前期・後期において基城であったことが判明した。この安坪古墳群の北縁には径40mをはかる大型円墳の悪行寺古墳がある。段丘を下りて下位段丘面へいくと本郷・片山・岩崎古墳群が鍋川を対峙して存在する。

この時期の集落跡としては、前期に相当する住居跡群を検出している遺跡としては神保富士塚遺跡・神保植松遺跡・折茂東遺跡・西脇場遺跡・川内遺跡・矢田遺跡・入野遺跡・黒熊第5・6遺跡などをあげることができる。中期に相当する住居跡を検出している遺跡としては折茂東遺跡・多比良追部野遺跡等非常に少ない。後期の住居跡群を検出している遺跡は後期の古墳群の存在が関係してか大変多く、神保

富士塚遺跡・神保植松遺跡・折茂東遺跡・長根安坪遺跡・多胡蛇馬遺跡・矢田遺跡など17遺跡を数えることができる。その中で藤岡市のF1 竹沼遺跡・甘楽町甘楽条里遺跡・甘楽町笹遺跡において、後期の滑石製模造品の工房跡が数軒ずつ検出されたことは本遺跡との対比をするうえで重要である。

奈良時代・平安時代

奈良時代の集落跡は、神保富士塚遺跡・矢田遺跡などおよそ14遺跡を、平安時代の集落跡は、16遺跡をそれぞれ数えることができる。また、生産遺跡としては、多比良地区で下五反田や末沢などの窯跡群が確認されている。この作業は8世紀～10世紀にかけてのもので瓦や須恵器などが製作されていた。水田の条理遺構が本遺跡北方の下位段丘の大字長根、大字本郷にある道六神遺跡とその西方の甘楽条理遺跡で確認されている。道六神遺跡では明治39年の現況図と当時の一町である109mの区画とよく一致し、しかも調査時の区画が現況図と全体としてよく一致していることから時期は不明ながらも条理

制が敷かれていたであろうと結論付けている。一方、甘楽条理遺跡では、一部分の調査であるとしながらも検出された畦畔が一町四方の方格地割りを構成する畦畔と考えられ、また、直上にB軽石が堆積していることからB軽石降下直前まで水田として機能していた跡が確認されたとしている。

鎌倉時代以降

本遺跡の東方の神保植松遺跡では中世城郭である植松城の主郭部分の調査をおこなった。その結果、内郭・外郭をもつこと、内郭は、東を大沢川の崖を背にし、三方を内堀によって区画された方形を呈し、郭内部に多数の柱穴群と井戸などを持つこと、外郭

は、内郭を帯状に三方を囲む形で外土塁をもつこと、などが確認された。遺物は「永徳四年二月」の紀銘のある板碑、瀬戸・青磁・白磁などが出土している。さらに、辛科神社の森も一説には神保氏の居館といわれる薬研状の堀をもつ館跡であり、北西方向には、小幡氏の支族である長根氏の居城であった長根城跡もある。その他の遺構としては神保富士塚遺跡で内耳鍋・景德鎮産の磁器などを出土した2m×1mの土坑が確認され、神保植松遺跡では、明青花・香炉・内耳鍋等を出土した一辺が7～11mを測る中央に炉跡のある方形の竪穴状遺構を2軒確認している。時期は、出土遺物より16世紀と考えられる。(鹿沼)



- | | | | |
|----------|---------------|-----------|-----------|
| 1. 長根羽田倉 | 6. 稲荷山 | 11. 東監場南寺 | 16. 下高家庵寺 |
| 2. 神保富士塚 | 7. 辛科神社 (神保城) | 12. 愚行寺古墳 | 17. 道六神 |
| 3. 神保植松 | 8. 瓦敷布地 | 13. 長根城 | 18. 多胡下條 |
| 4. 神保古墳群 | 9. 長根安坪 | 14. 折茂東 | 19. 多胡蛇黒 |
| 5. 堀古墳群 | 10. 安坪古墳群 | 15. 瓦敷布地 | 20. 矢田 |
| | | | 21. 多胡古墳群 |

第8図 周辺の遺跡分布図(2)



(2) 周辺出土の祭祀遺物

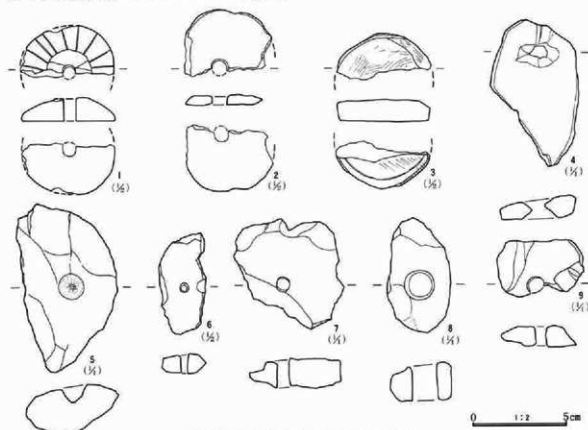
長根羽田倉遺跡周辺では、発掘調査による祭祀遺物の発見の他に、耕作中に出土した祭祀遺物を所有している地権者が数名いる。この節では、吉井町神保在住の滝上松雄氏の御好意で、氏所有の祭祀遺物を紹介する。

図示した遺物は、滝上氏が出土した土地の地番を明記しておられたため、出土地点が確実にわかる。そのうち、No.1～20までは、大字神保字門出533番地出土で、この地は、当事業団が長根羽田倉遺跡に引き続き発掘調査を行った神保富士塚遺跡の調査区域内である。また、No.21も門出535-1番地で調査区域に隣接する場所である。発掘調査では、鬼高Ⅱ～Ⅲ期にあたる11軒ほどの住居跡から滑石製模造品や滑石チップが出土しており、No.1～21の祭祀遺物は、それらの住居跡との強い関連が考えられる。また、No.22～25の遺物は、地神木598～601番地より出土しており、この地は、神保富士塚遺跡北側の取り付け道路の西側調査区域外にあたる。No.26・27は、富士塚

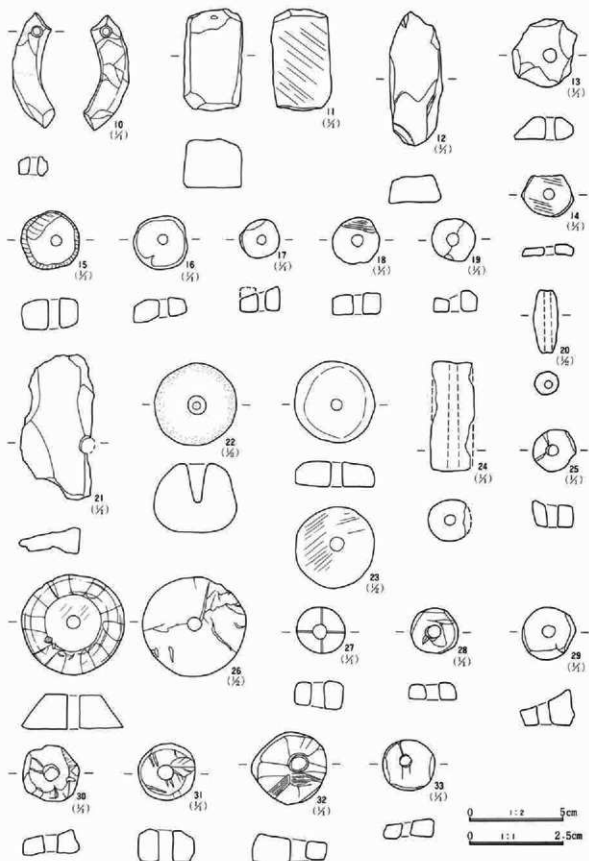
571番地より出土しており、神保富士塚遺跡の南側の調査区域外より出土したものである。No.28～31は、宮東392-3番地より、また、No.32・33は、出土地不明であるが、折茂2370番地の可能性が高く、これらの地は、現在の大神保の集落の北側に位置する。

これらの遺物の特徴をみると、有孔円板については、器形が、円板を呈しておらず、ただ、穿孔のみで有孔円板としていること、白玉については、全体に器形が大きいこと、などの理由により、古墳時代後期の特徴を兼ね備えているということが言える。

このようにみると、長根羽田倉遺跡の滑石製模造品と時期的にはほぼ一致し、古墳時代後期において、長根羽田倉遺跡や神保富士塚遺跡を含めた、この周辺一帯は、祭祀時における滑石製模造品の製作・神への供献を行なった地域であることが言える。また、その祭祀をもとに、この地域がまとまり、後の時代の「郷」にあたるような地域共同体を形成していた可能性があるのではないだろうか。(鹿沼)



第10図 周辺出土の祭祀遺物実測図(1)



第11図 周辺出土の祭祀遺物実測図(2)

第4表 周辺出土の祭祀遺物観察表

図番号	器種名称	出土位置	材質	計 測 値		備 考	
				長さ×幅×厚さ(㎜)	重量(g)		
1	紡錘車	門出533	蛇紋岩	4.9×2.3×1.2 (前輪)(後輪)	21.2	0.6	短軸面および側面に放射状線あり。穿孔は、一方、半分が割れている。調整時以降の欠損と考えられる。
2	紡錘車か	#	滑石	4.5×—×0.5	14.5	(注)	短軸面部分が、割離しており、薄くなっている。穿孔は、一方、半分が割れている。調整時以降の欠損と考えられる。
3	紡錘車か	#	蛇紋岩	5.0×4.8×1.15 (長軸)(短軸)	20.5	—	全面を磨きにより、整形・調整している。長軸面と思われる面の縁に凹が線刻されている。企画図か。
4	有孔円板	#	滑石	3.7×2.3×0.6	8.4	0.35	下方欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。全面、刃物による削りで調整、穿孔は、両方向から、刀子状工具の先端によるか。
5	未成品	#	蛇紋岩	4.3×2.5×0.7	17.5	(注)	上平面に、途中でやめたと思われる穿孔部分あり。縁によるか。側面に刃物による削り痕あり。
6	有孔円板	#	滑石	5.0×2.4×1.0	20.8	0.5	表面に、刃物による削り痕あり。穿孔は、一方、終孔部は、修正していないため、楕円形状に穿孔している。
7	有孔円板	#	滑石	2.8×2.7×0.8	9.4	0.4	上下平面は、削り調整。図左下方は、調整時以降の欠損か。穿孔は、一方、一方。
8	有孔円板	#	蛇紋岩	3.0×1.6×1.0	6.2	0.8	両側面を削りによる調整。穿孔は、一方、上下平面には、原石面が残る。
9	有孔円板	#	滑石	2.3×1.5×0.55	2.8	0.4	上下平面・側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方で、終孔部は、刀子状工具による面取りで修正。修正時に下半は欠損か。
10	勾玉	#	滑石	2.4×0.75×0.5	2.7	0.3	上端欠損。表面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向から。良の薄い勾玉。
11	未成品	#	滑石	2.7×1.5×1.2	11.2	—	ほぼ直方体を呈する。6面全面を磨きによる調整。上下端は、角を面取りしている。
12	未成品	#	滑石	3.5×1.4×0.7	7.1	—	同上平面上方を割離欠損している他は、刃物による削り調整。上下端は、角を面取りしている。
13	白玉	#	滑石	1.8×1.6×0.6	3.1	0.3	上下平面・側面を刃物による削り調整。穿孔は、一方、未成品の可能性あり。
14	白玉	#	滑石	1.3×1.1×0.25	0.7	0.3	下平面は、割離面。穿孔は、一方、側面は磨き。上平面は削り。
15	白玉	#	滑石	1.5×1.5×0.8	3.6	0.3	上下平面は、原石面か。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方、
16	白玉	#	滑石	1.5×1.4×0.6	1.7	0.3	上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、
17	白玉	#	滑石	1.0×1.0×0.6	1.1	0.3	上平面は、削り調整。側面は、磨き調整。穿孔は、一方、
18	白玉	#	滑石	1.2×1.2×0.5	1.4	0.3	上下平面は、原石面。側面は、磨き調整。穿孔は、一方、
19	白玉	#	滑石	1.1×1.1×0.5	1.1	0.3	下平面は、削り調整。側面は、磨き調整。穿孔は、一方、
20	土 鏝	#	土	3.3×1.3×1.2	5.0	0.4 0.35	顕微鏡。表面は、撫でによる調整。穿孔は、焼成前。
21	有孔円板	門出535-1	滑石	3.8×1.9×0.65	7.7	0.4	側面一部に削り痕ある他は、すべて、原石面か。右側半分欠損。穿孔は、一方、節理に沿って、欠損している。
22	土製品	地神木598	土	4.3×1.9×3.6	86.2	1.0 0.3	土師質。上平面は、ほぼ平坦になっており、途中で穿孔してある。下平面も、平坦で、縁によると思われる小孔が3カ所ある。
23	紡錘車	地神木601	滑石	4.3×3.7×1.3	43.5	0.6 0.7	全面を磨きによる整形・調整。穿孔は、中心よりずれている。両方向。
24	管 玉	地神木599	チャート	2.9×1.0×1.1	0.9	0.3	全面、精緻に研磨してある。3カ所に割離欠損。穿孔は、両方向から試みているが、貫通していない。
25	白玉	地神木594	滑石	1.1×1.1×0.6	1.1	0.3	下平面は、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、
26	紡錘車	富士塚71	蛇紋岩	5.4×3.2×1.9 (前輪)(後輪)	71.2	0.65	全面、研磨。穿孔は、一方、長軸面に、割離欠損部分あり。
27	白玉	#	滑石	1.3×1.2×0.7	1.8	0.35 0.4	上下平面は、削り調整。側面は、磨きによる調整。上平面に、十文字の線刻あり。穿孔時の目印か。藤岡市竹笠道跡にも同様な物あり。
28	白玉	宮東392-3	滑石	1.3×1.3×0.4	1.1	0.35	上平面は、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、下方欠損。
29	白玉	#	滑石	1.4×1.4×0.9	2.4	0.3	下平面は、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、未成品か。
30	白玉	#	滑石	1.5×1.45×0.6	2.2	0.3	上平面は、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、下方欠損。
31	白玉	#	滑石	1.5×1.5×0.9	3.6	0.4	全面、磨き調整。角がとれていて、丸味を帯びる。穿孔は、一方、
32	白玉	出土地不明	滑石	1.95×1.9×0.8	4.8	0.4	上下平面、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、未成品か。
33	白玉	#	滑石	0.9×0.8×0.5	1.5	0.25	下平面は、削り調整。側面は、磨き。穿孔は、一方、上方欠損。

(3) 多胡郡の郷名と韓級郷について

現在の吉井町には、『続日本紀』和銅四年三月辛亥(六日)の条の

「○中略、割上野国甘良郡織裳 韓級 矢田 大家、
緑野郡武美、片岡郡山等六郷、別置多胡郡」

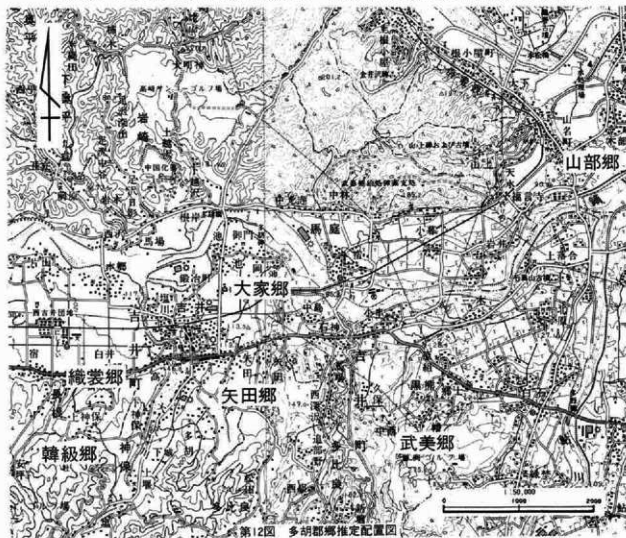
とある記事と内容のほぼ一致する多胡碑が存在する。この碑は、多野郡吉井町大字池に所在し、以下の文面が刻されている。

「弁官符上野国片岡郡緑野郡甘
良郡并三郡内三百戸郡成給羊
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅
直左中弁正五位下多治比真人
太政官二品徳儀親王左大臣正二
位石上尊右大臣正二位藤原尊」

『群馬県史 資料編4』では「この両者の照合に

より、郡を構成する6つの郷(当時の制度上では「里」とすべきである)の名前がわかり、また、当時の大宝令制では50戸を以て1里としていることから、これに合致する内容であることがわかる。この多胡郡は、現在の吉井町全域と高崎市山名町付近をその範囲とする。そして、八田(矢田)郷には上毛野朝臣氏、山部(後に山字と改める)郷には秦人氏の居住していたことが知られ、『続日本紀』天平神護二年(七六六)五月壬戌(八日)条の記事によると上野国に在住していた新羅人の子牛足ら193人が吉井連の姓をうけていることから、郡内には多数の渡来系の人々が居住していたものとみられる。」¹⁾と述べられている。

また、上野国分寺跡から出土している8世紀中頃の創建期の瓦の中には「多」と押印してある文字瓦



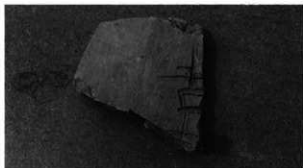
があったり、9世紀前半代の補修用瓦に多胡郡在住の人物により発注されたと思われる、郷人名名がヘラ書きされた文字瓦が多数確認されている。前者は、国分寺創建に対し郡単位で瓦の供給に当たった可能性を示唆しており、後者は、その貢進者、あるいは、寄進者と推定される人名と、その居住地とみられる郷名を併記したものであるとされている。⁽²⁾ その中には、先の「続日本紀」に記された郷名の内、織裳・韓級（辛科）・八田（矢田）・武美・山（部）（山字）の五郷それぞれを示す文字や、おそらく、大家郷を示すと思われる「大」の文字も出土しており、それぞれの郷に在任していたか、あるいは関係していた人々が国分寺に補修用瓦を送っていたことがわかるのである。これらの資料は、その時代における、上野国に占める多胡郡の位置を物語るものとして注目されている。

それらの郷の位置については、それを表す資料はほとんど残っておらず、ただ、現在の地名から推測せざるを得ない。それを見るに、八田は大矢矢田として、織裳は字折茂として、韓級は神社名の辛科神社として、（山部～山～山字）は、高崎市山名町として残っている。また、大家・武美同郷については、地名として残っていない。（「吉井町誌」では、大字石神字宿地一の甲に鎮座している大武神社の名称の由来について、「当所は、奈良時代において石神村と中島村は大家郷に属し、深沢村は武美郷に属していたので各郷の頭文字をとり、大武神社とした。」⁽⁴⁾として

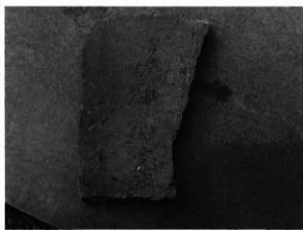
いる。）
古代の地名が、古代から現在に至るまで同じ場所で生き続けるかどうかについてはかなりの疑問があるが、そんな中で、昭和161年度から現在まで継続して調査が行われている矢田遺跡（調査に当たって、遺跡名を大字から取った）で、「八田郷」と線刻された紡錘車が2点出土していることは示唆的である。「吉井町誌」は、「現在の行政区画になるまで、幾多の変遷がおこなわれており、ましてや明治年間の多胡郡の郡境と、「続日本紀」に記されている多胡郡の範囲が一致しているとか、いないとかを論ずることは



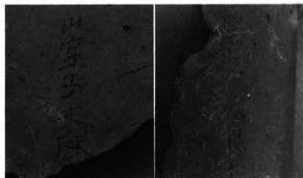
10 「多」押印



11 「吉井」か



12 「多胡郡織裳郷」



13 「山字」文産

14 「山字物部子成」

第2章 遺跡の環境

基準の異なっているものを比較しているようなものであって、そこにはなんの意味をもたない」としながら、現在の地名から8世紀代の郷の位置を推定している。それを参考にし、さらに、先の矢田遺跡と八田郷の関係から、吉井町では古代の地名が比較的良好、その場所が残ったと仮定して、作成した郷推定配置図が、第12図である。

本遺跡は、韓級郷の名残であるとされる辛科神社の南西250mのところを幅60m長さ600mでほぼ東西に調査された。辛科神社については、『吉井町誌』では「上野国神名帳（総社本）の多胡郡の筆頭にあげられている古社名であり、同神社所蔵の銅板毛彫の懸仏と併せて考えるとき、その存在は、鎌倉時代以前であろうとされる。また、鎮座地の神保は、この辛科神社の神領が荘園的性格を有することからその呼称が起ったとみられ、韓級郷から神保への移行は、平安時代後期にさかのぼることができる」としている。

同神社が、元から今の場所にあったのではなく、後世になって、あの場所に移動されたという可能性もある。しかしこの神社は、『上野国神名帳』にいう多胡郡筆頭に上げられていること、14世紀中頃成立の『神道集』に「多胡郡の鎮守辛科大明神」として出てくるような信仰の篤い神社であること、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った関越道新潟線関連の「関分僧寺・尼寺中間地域」の発掘調査で、9世紀代の補修用とおもわれる瓦に「辛神人□(宿カ)子稲麩」という文字がへら書きされてあるものが出土

しており、すなわち、9世紀代に「神人(みわひと)」⁽⁶⁾という出雲系氏族といわれる大神氏・大三轮氏あるいは大神神社との関連性を伺わせる人物が辛科(韓級)郷に居住していたか、辛科郷となんらかの関連があったと思われること、大神神社・宗像大社など社殿を構えている周辺から古墳時代の祭祀遺物が集中して出土している例があることなどから、神社がそう簡単に移動されたとは考えられず、たとえ移動したとしても、すぐそばからの移動であって、別の郷から移動するとは考えにくい。このような仮説をうけて、本遺跡は、8世紀の韓級郷の一部にあたる地域を調査したことになるのではないだろうか。

前節で紹介した通り、6世紀後半から7世紀前半にかけての祭祀遺物が、他の地域に比べてかなりの集中度をもって出土していることや、次の第3章・第4章の記述と併せて考えると、この地域が、古代において、祭祀行為と密接な関係をもっていたことが、多胡郡の他の地域とは絶対的に異なっている性格といえる。奈良時代の韓級郷にあたる地域は、伝統的にこの多胡郡域における祭祀行為の中心的位置を占めていた可能性が強い。(鹿沼)

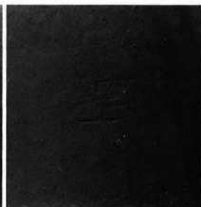
- 註
- (1) 『群馬県史 資料編4』の史料解説 P. 1217より。
 - (2) 県教育委員会文化財保護課 前沢和之氏にご教示いただいた。
 - (3) 前沢和之「瓦に書かれた歴史—上野国分寺跡出土の文字瓦から—」『群馬風土記』1988年3月号
 - (4) 『吉井町誌』吉井町誌編さん委員会 1974
 - (5) 黄志正遺訳 東洋文庫本『神道集』「郡波八郎大明神の事」に宮内庁宮宗光のこととして登場してくる。
 - (6) この資料は、関越道新潟線関分僧寺・尼寺中間地域報告書第四分冊に掲載予定であるが、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び関係各位のご厚意によって掲載させていただいた。



15 「八田」「八里人」「八阿子口」



16 「辛(科)子浄庭」



17 「辛」

- (7) 【辛科】の名は、他に4か所で確認される。2か所は、現在の藤岡市に辛科神社として残っている。また、一か所は、『上野郡郡村誌』の多胡郡多胡村に「辛科神社」として見える。残りの一か所は、現在の高崎市木部町の小字名として存在している。『群馬県史料集 第2巻 風土記編目』に収められている江戸時代天明・寛政頃に著された『多胡砂子』には辛科神社を中心とした信仰民俗がかなり詳しく記録されているが、その中には「権宣神を持正月3の戌之日、11月3の戌の

日(3の戌無時翌月二入)より出て17日之内郡中ヲ廻ル事有之(中略)3月9日を祭へきを九月九日を祭る事ハ造て秋毛もて供物する事当國なとハ九月初中後の九日を思ひ思ひ村々ニ祭ルなれば秋にかしたる也(以下略)」とあり、多胡郡内の村村では同じ日に祭を行っていたことが伺れる。藤岡市日野に現在も辛科神社があることや木部村にも見えるから村村に辛科神社の分社が存在していた可能性もある。



18 国分寺中間地域出土「辛神人(宿)子稲産」



19 辛科神社遠景



20 神保古墳群出土小金銅仏



21 多胡碑

神保古墳群出土の小金銅仏

本遺跡と同じ神保上位河岸段丘上の東端にある神保古墳群中、一本杉古墳の北東に位置する小円墳より出土した。(上毛古墳群寛旧多胡村第112号墳) 所在地は、吉井町大字神保158番地である。発見者は、土地所有者で、発見者の話では、1体の遺骨の胸元より出土し、他に数体

分の骨・勾玉・耳環などが出土したそうである。本仏像は、薬師如来であろうか。

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構・遺物

本遺跡の主体となる時期は古墳時代以降にあるため、縄文時代の遺構・遺物は少なく、遺構は遺跡西側台地に陥し穴状の土坑が1基検出されただけで、他にはなかった。遺物は土器・石器・石製品等があるが、多くは遺跡全域に散布するものや、古墳時代以降の遺構埋没土中より出土したものであり、縄文時代の遺構に伴うものはない。

検出された遺構

2号土坑 (第13図)

5区03B42グリッドに位置し、遺跡西側台地の北西へ傾斜する斜面変換部のやや下方にある。土坑の規模は開口部で長軸2.0m、短軸1.48m、底部で長軸1.37m、短軸0.68m、深さ1.46mを測り、底部形状がほぼ長方形であるのに対し、開口部は楕円（不整長方形）となる形状を呈する。長軸方向は北北西を指す。埋没土については第13図に示した通りであるが、古墳時代以降の遺構埋没土と比較すると、全体的に埋没土が緻密で、明確に区別することができる。出土遺物はなかったため時期を特定することはできない

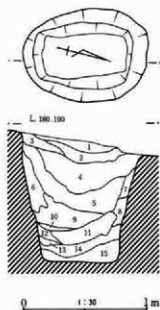
が、土坑の形状から縄文時代の陥し穴状土坑と考えられる。

出土遺物

土器 (第14図)

本遺跡より出土した縄文時代の土器は、量的には少ないものの前期から晩期までのバラエティーに富む内容である。とりあえずこれらの土器を第I群土器（前期）、第II群土器（中期）、第III群土器（後・晩期）に大別し、以下に個々の説明を加える。

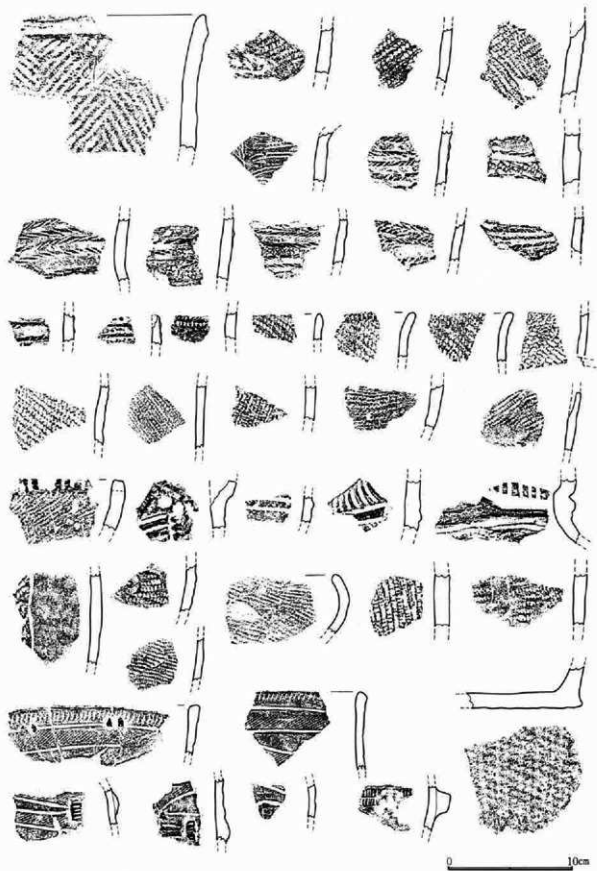
第I群土器（1～4）は胎土に繊維を含む土器群である。1は平口縁となる深鉢形土器で、口縁部に幅狭な横位の捺糸圧痕帯をもち、以下胴部に0段多条のLR・RLを用いた縦位回転による羽状縄文を施すもの。2は胴部に0段多条のLRの縄文を地文とし、沈線で文様を描くもの。3は胴部に筋が大粒となるLRの縄文を施すもの。4は胴部に0段多条のRLの縄文を施すもの。5から24は胎土に繊維を含まない土器群である。5は多岐竹管具による肋骨文を施すもの。6から14は浮線文土器で、6・



土層注記

1. 明褐色土 細粒だが、あまり締りがない。
2. 暗褐色土 明褐色土を逐状に含む。細粒で締りがある。
3. 褐色土 細粒で締りがない。
4. 暗褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量含む。細粒で締りがある。
5. 暗褐色土 炭化物をごく少量含む。細粒で締りがない。
6. 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を多量に含む。粗粒で締りがない。
7. 明褐色土 炭化物粒、ローム粒を含む。締りない。
8. 黄褐色土 ロームの大きなブロックを含む。粗粒で締りない。6に類似。
9. 暗褐色土 細粒だが、あまり締りがない。
10. ロームブロックと褐色土の混泥土
11. 黄褐色土 黄色礫石(YP)を多量に含む。粗粒で締りがない。
12. 暗褐色土 細粒だが締りがない。
13. 汚れた黄色礫石層(YP)。
14. 灰黄褐色土 細粒でやや粘質。
15. 灰黄褐色土 14と同質。ロームブロックを含む。

第13図 第2号土坑実測図



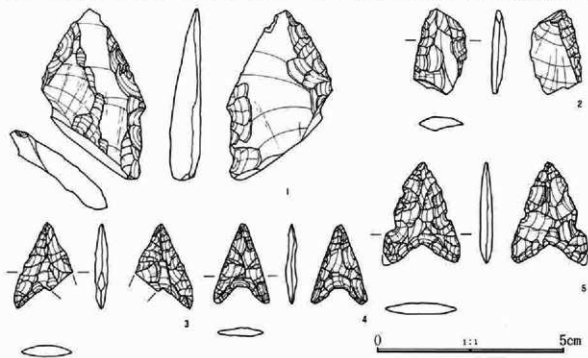
第14図 遺構外出土縄文土器実測図

10は地文にLRの縄文を横位に施し、数本の細い粘土紐を張り付け、その上に矢羽状方向に刻みを付す。7も同様であるが、浮線文の上下にやや太い沈線をもつもの。8・9は地文にRLの縄文を横位に施し、細い粘土紐を張り付け、その上に矢羽状方向の刻みを付す。11から14も他と同様に浮線文をもつが、地文に施された縄文原体は不明である。15は半載竹管による横位への連続刺突を数条施すもの。16から24は、これら浮線文土器群に伴い全面に縄文施文を施すものである。16から22はLRの縄文を施すものであり、23・24はRLの縄文を施すもの。

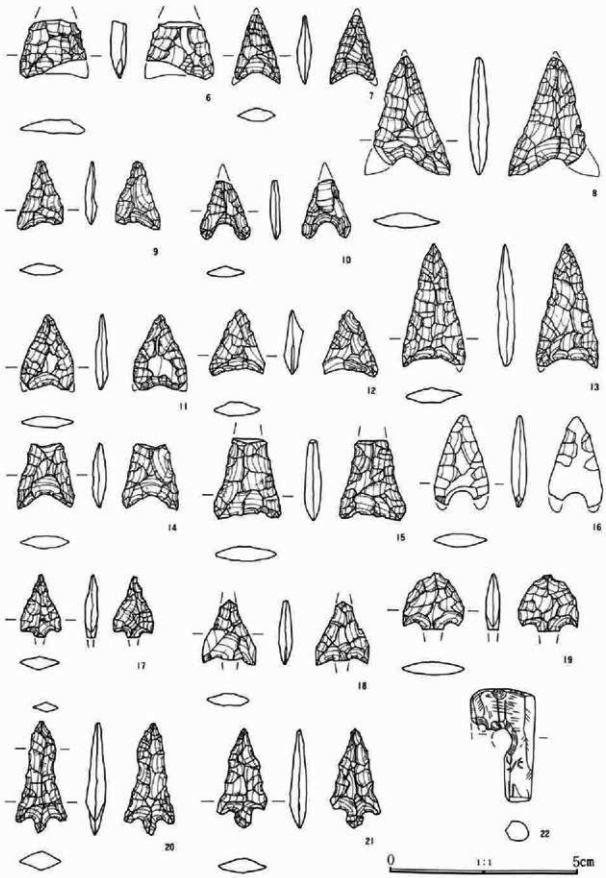
第II群土器 (25~35) 25は胎土に小石を多く含み、平口縁となる口唇部に刻みをもち、口縁下にLRの縄文を施す。26は隆帯上に細かな刻みを施し文様を区画し、区画内に大形の半載竹管具による平行沈線及び刺突を施す。27は胎土に多量の雲母を含み、2条平行の結節沈線文が施される。28は胴部に隆帯と沈線により文様を区画し、区画内に緩やかな弧状沈線を施す。29は口縁部から頸部にかかる破片で、口縁部文様には隆帯と太い沈線で楕円状に文様が区画され、区画内には縦位に沈線が描かれ、頸部は無文となる。30は胴部に縦位の沈線により区画し、幅広の

無文帯を垂下させ、地文にはRLの縄文を施す。31は地文に荒い縦線によるRLの縄文が施文され、胴部に「S」字状に太い沈線を描く。32は緩やかな波状口縁となり口縁が内反する深鉢形を呈する土器で、口縁下にLRの縄文を施す。34は胴部に隆帯による文様を描き、地文にRLの縄文を施す。33・35は胴部にRLの縄文を施すもので、35は器厚が比較的薄い。

第III群土器 (36~42) この群の土器は、いずれも胎土・焼成共にかなり良好な土器である。36・37は同一個体の土器で、平口縁となる鉢形を呈し、口縁下に刻み状の縦位の沈線を巡らせ、平行沈線や弧状の沈線で文様を区画し、区画内に縄文を施す。縄文は節が細くなる撚りの細いRLが施される。さらに口縁部の縦位沈線下には、2個で一对となる瘤状の貼付文を数カ所に付す。38も先の36・37と同一個体の可能性のあるもので、並行・弧状の沈線で文様を区画し、区画内にRLの細い縄文が施され、さらに瘤状の貼付文及び横刻みをもつ縦長の貼付文を付す。39は並行・弧状の沈線により文様を区画し、区画内に撚りの細いRLの縄文を施し、横刻みをもつ縦長の貼付文を付す。40は沈線で並行ないしは曲線的に文

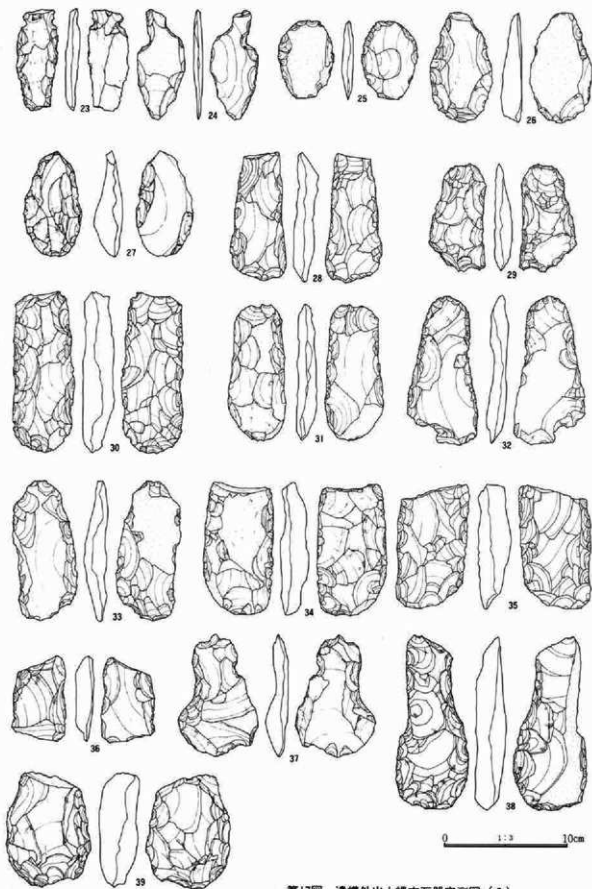


第15図 遺構外出土縄文石器実測図(1)

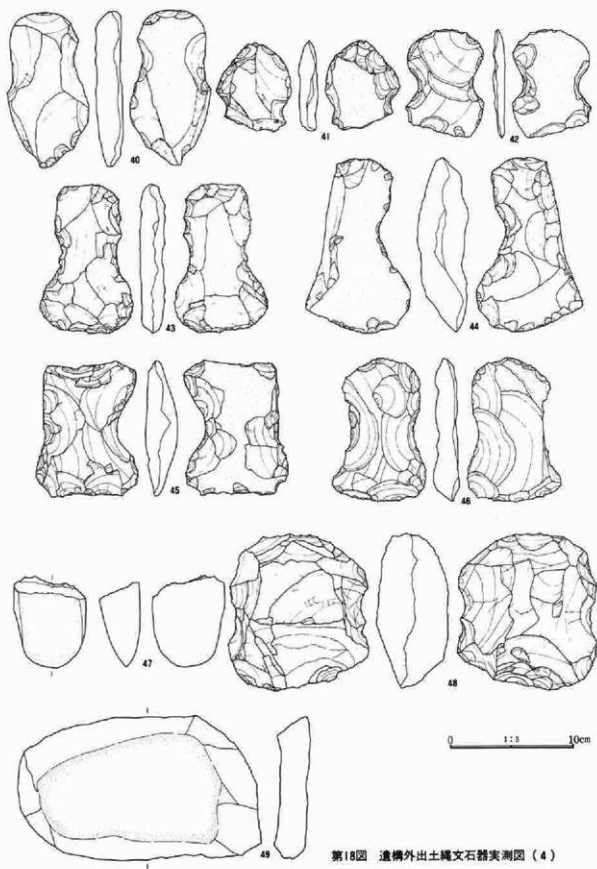


第16図 遺構外出土縄文石器実測図(2)

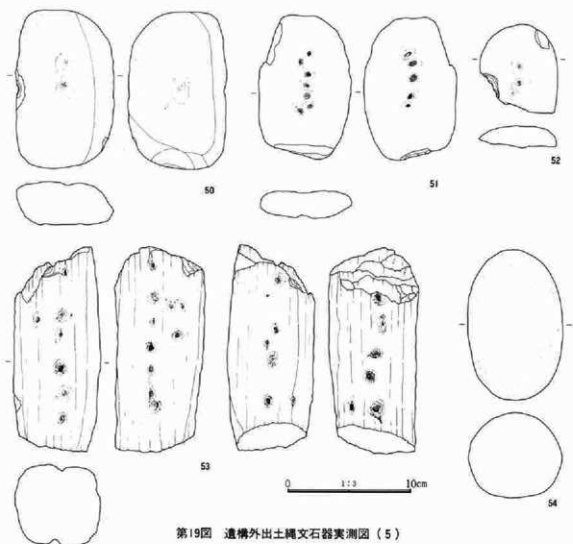
第3章 検出された遺構と遺物



第17図 遺構外出土縄文石器実測図(3)



第18図 遺構外出土縄文石器実測図(4)



第19図 遺構外出土縄文石器実測図(5)

様を描き、区画内かなり細い撚りの縄文を施す。41は連続した刻み状の痕位沈線をも2条巡らせ、縦刻みをもつ大きな瘤状の貼付文を付す。なお器面には朱が塗布されている。42は底部破片で、底面に網代痕をもつ。

石器・石製品 (第15～19図)

本遺跡で出土した石器は、土器と同様に時期的なバラエティーに富む。

1は黒曜石の剥片を素材とするポイントで、両面の両側縁に調整加工が施されており、基部は欠損している。2は黒曜石の剥片を素材とするもので、両面に調整加工の施されたポイント状のものから剥がされた作出剥片とも思われる。この1・2については縄文時代でも古い時期のものと考えられる。

3～21は石鏃で、石材には黒曜石・チャート・黒色頁岩が使用されている。また、無基鏃と有基鏃の両者がある。3～16は無基のもので、概ね二等辺三角形を呈し、抉りの深いものや、比較的大型のものもある。17～21は有基のもので基部に抉りをもつもののみである。19は最大幅に対し短身のもの。20・21は最大幅に対し長身となるものである。23・24は調整の比較的大きい縦長石匙。25～27は筈状石器で、いずれも片面を主体に調整を施した半両面加工のものである。28～46は打製石斧で、泥岩・頁岩・安山岩等を主体に用い、楕円形・短冊形・分刺形を呈するもの。47は玄武岩製の磨製石斧である。48は石核で頁岩を用いたもの。49は石皿であるが、周縁を欠損している。50～53は凹石で、いずれも片岩による。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

50～52は両面に、53は4面に凹みが施されている。

飾り。これら3～54の石器・石製品は、縄文時代前期

54はひん岩による敲石。22は珪質頁岩による块状耳

から晩期にかけてのものと考えられる。(谷藤)

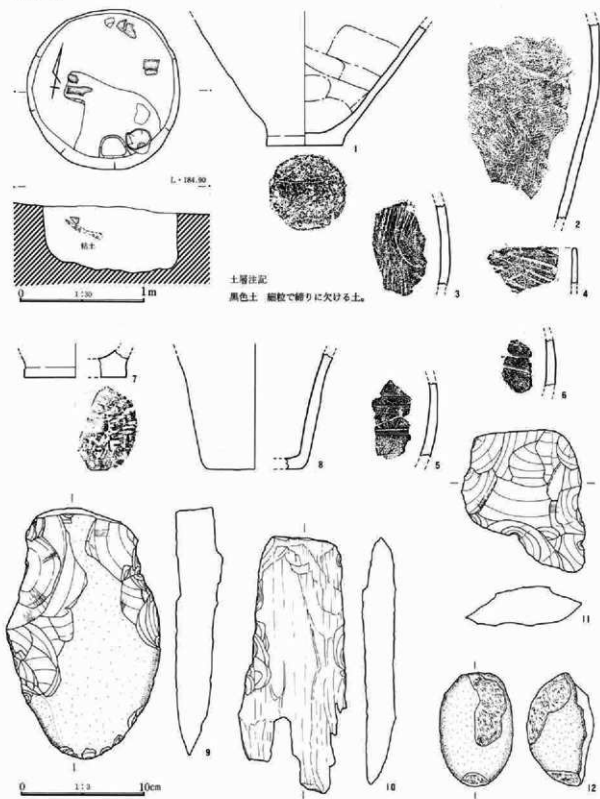
第5表 石器計測表

単位(cm)、(g)

番号	出土位置	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重さ	備考
1	2区C	ポイント	黒曜石	4.5	2.8	0.8	9.74	基部欠損
2	表採	調整剝片	黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.86	
3	10号溝埋没土	石 鏃(無茎)	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.81	一部欠損
4	59号住カマド	#	チャート	2.1	1.5	0.3	0.63	
5	10号溝埋没土	#	黒曜石	2.6	2.1	0.3	1.35	
6	2区表採	#	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.99	
7	1区C	#	黒曜石	1.8	1.2	0.4	0.47	
8	4区C	#	チャート	3.1	2.0	0.5	2.14	
9	2区表採	#	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.55	
10	4区C	#	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.37	
11	3号住埋没土	#	チャート	2.0	1.5	0.4	0.80	
12	3区C	#	黒曜石	1.7	1.5	0.4	0.82	
13	30号住掘りかた	#	黒曜石	3.2	2.7	0.5	1.76	
14	2区C	#	チャート	1.7	1.5	0.4	0.96	
15	121号住埋没土	#	黒曜石	2.1	1.8	0.4	1.96	
16	10号溝埋没土	#	黒色頁岩	2.4	1.5	0.4	1.17	表面風化
17	59号住埋没土	(有茎)	黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.29	
18	76号住埋没土	#	黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.63	
19	115号住掘りかた	#	チャート	1.5	1.6	0.4	0.87	
20	2区C	#	チャート	3.0	1.4	0.5	1.24	
21	116号住埋没土	#	黒曜石	2.6	1.4	0.4	0.93	
22	10号溝埋没土	块状耳飾り	珪質頁岩	3.0	1.7	0.4	30	
23	39号住埋没土	石 匙	黒色頁岩	7.9	3.2	1.1	33	
24	4区C	#	硬質泥岩	8.4	3.7	0.7	26	
25	2区C	塊状石鏃	頁岩	6.2	4.4	0.7	28	
26	10号溝埋没土	#	頁岩	8.7	5.0	1.2	90	
27	2区C	#	硬質泥岩	8.3	4.6	2.2	76	
28	17号住埋没土	打製石斧	実質安山岩	10.0	4.4	1.7	100	
29	2区C	#	硬質泥岩	8.4	4.5	1.3	62	
30	36号住埋没土	#	硬質泥岩	12.4	4.5	2.3	200	
31	5区B	#	硬質泥岩	10.5	4.6	1.6	150	
32	2区C	#	硬質泥岩	11.6	5.6	1.3	93	
33	11号溝埋没土	#	硬質泥岩	11.0	4.6	1.8	106	
34	2区C	#	硬質泥岩	10.0	5.6	1.9	167	
35	2区C	#	硬質泥岩	9.2	5.7	2.6	150	
36	2区C	#	頁岩	6.6	4.2	1.3	48	
37	4区C	#	硬質泥岩	9.7	6.4	1.5	83	
38	4区C	#	硬質泥岩	13.5	5.8	2.3	220	
39	2区C	#	粗粒安山岩	9.0	6.7	3.0	228	
40	11号溝埋没土	#	緑色片岩	12.3	6.3	1.7	226	
41	2号溝埋没土	#	硬質泥岩	6.6	6.0	1.3	90	
42	2区C	#	頁岩	8.3	6.2	0.9	64	
43	4区C	#	硬質泥岩	11.7	7.5	2.8	100	
44	2区C	#	硬質泥岩	13.8	8.4	3.2	438	
45	3区C	#	硬質泥岩	10.5	8.2	2.6	250	
46	2号溝埋没土	#	硬質泥岩	11.2	6.2	1.6	180	
47	6区B	磨製石斧	実質玄武岩	6.4	5.9	3.2	180	
48	87号土坑埋没土	石 核	頁岩	12.2	11.1	5.0	900	
49	5区B	石 皿	粗粒安山岩	25.7	15.1	3.0	2500	
50	4区C	凹 石	雲母石英片岩	12.5	7.8	3.4	600	
51	5区B	#	緑色片岩	11.3	7.3	2.1	340	
52	4区C	#	雲母石英片岩	6.7	6.1	1.8	100	
53	10号溝埋没土	#	黒色片岩	21.7	9.2	8.3	2900	
54	6号住埋没土	敲 石	ひん岩	11.9	7.6	6.8	900	

第2節 弥生時代の遺構と遺物

22号土坑



第20図 第22号土坑実測図及び出土遺物実測図

22号土坑

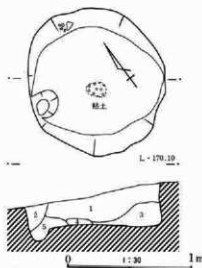
ほぼ円形を呈し、規模は径約110cm、深さ約50cmである。底は比較的平坦で、壁は垂直に掘り込まれている。埋没土は細粒で締まりに欠ける土である。自然堆積ではなく、人為的に一時に埋め戻された可能性が高い。中から弥生式土器片（条痕文）数片、片岩製の石鎌3点出土。土坑の中心に白色の粘土様のものが認められている。

出土土器 1は壺形土器の胴下半部、底径はやや小さく胴部は直線的に開く。外面は荒磨きか施され内面は荒撫でされている。胎土は石粒が目立ち内面に炭化物が付着している。底面に木炭痕が見られる。

2、3は壺形土器の胴部片、地文にLRの縄文を施した上に櫛状工具による曲線文が見られる。内面、荒撫でされている。摩耗が著しく、胎土は粉っぽい感じを呈す。4は壺形土器の口縁部片である。斜格子状に条痕が見られる。口唇部に刻みを持つ。5、6は同一個体片、外面に縦方向の細い条線が浅く施される。胎土は粒子が細かい。7は底部片、かなり厚手で底に網代痕を持つ。8は無文の底部片である。胴部に向かってやや開く。9は石鎌である。片面に自然面を大きく残す、大型品で刃部の形は先端部がやや尖り気味となる。基部は両側より浅くえぐりを入れている。3片に割れて出土したものが接合した。10は片岩製で細長い板状を呈す。基部の片側に調整痕が見られる。石鎌か。11は礫器である。片面は自然面、剝離は多方向より行われているが、細かな調整痕は見られない。12は欠損しているが破打石と思われる。打面は先端よりややずれている。

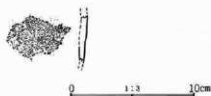
28号土坑

ほぼ円形で底は平坦である。壁は垂直に掘り込まれている。中央部より白色の粘土塊が出土している。**出土土器** 櫛状工具による波状文を持つ。黒っぽい土器で砂粒が目立つ。



土器注記

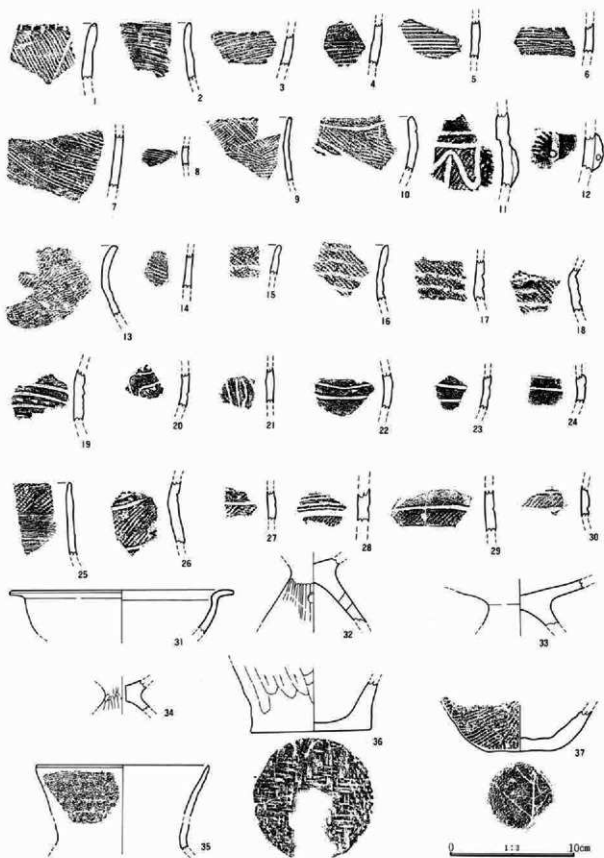
1. 暗褐色土 細粒、炭化物少量含む。
2. 褐色土 細粒、やや粘質。
3. 褐色土 ローム小塊少量含む。
4. 暗褐色土 細粒、粘質。堅くしまっている。
5. 黄褐色土 細粒、やや粘質。締りが強い。



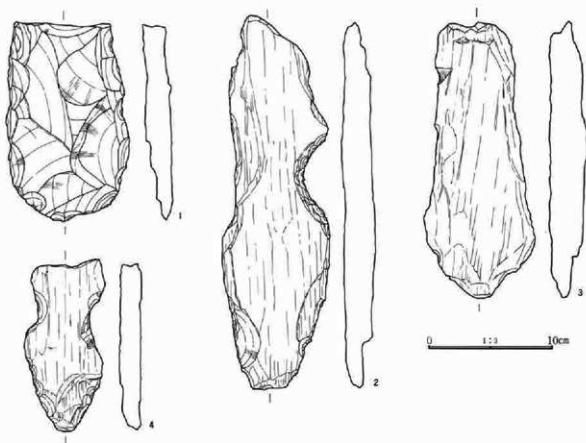
第21図 第28号土坑実測図及び出土遺物実測図

土器

1、2は口縁部に刻みを持つ。3、4、5、6、7、8は胴部片である。いずれもやや粗い工具による条痕が斜めに走る。胎土中に1~2mmの石英粒子含む。9は椀形土器の斜条痕を施す。薄手で口唇部に刻みを持つ。色調はやや黒みを帯びる。10は口縁部、地文にLRの縄文を施し下位に不規則な条痕を横位に施す。口唇に縄文の押圧、胎土中に砂粒目立つ。11は厚手の土器である。太い沈線により横位、縦位、山形に文様を描く。区画内にLRの縄文、刻みをもつ耳状の有孔貼付け文を持つ。12も同個体。13、14は全面に縄文を持つものである。13は肩から口縁にかけての破片である。やや薄手でLRの縄文を持つ。15、16、17、18は同一個体である。地文に全面RLの



第22図 遺構外出土弥生土器実測図



第23図 遺構外出土弥生石器実測図

縄文を施す。輪積痕が観察される。19、20、21、22、23、24は平行沈線を持つ。19、20には刺突文が見られる。25は口縁部にLRの縄文、下位に条痕を持つ。26、27、28、29、30は沈線間に縄文が施される。31、32は赤色塗彩された高坏。31は坏部片、口縁部は水平に開き、内面横、外面縦の磨き痕が残る。32は脚部である。外面磨きされ、4個の透かし孔を持つ。33も高坏片。34は器台片。35は全面に櫛状工具による波状文を持つ。輪積痕が残る。比較的薄手である。36、37は底部片、36は外面削り整形されている。底部に網代痕を持つ。37は外面に横位の条痕を持つ。底部に木葉痕が見られる。

石 器

2号溝 1は石鎌である。偏平でやや幅広、刃部に向かって開き端部は丸くなる。片面に自然面を一部残し、この面および刃部はかなり摩耗している。

12住 2は細長い板状で、中央にえぐりを持ち両端が尖る。

35住 3は板状で下部が広がり、端部は尖る。

5区 4はえぐりを持ち、片方は折れているが、両端が尖っていたものと思われる。

今回の調査で検出された弥生時代の遺構は、中期の土坑のみであったが、調査区内において出土した土器について見ると、中期中半から後期後半にわたっている。数量的には少なかったものの、ほぼ全域で散見された。個々の土器は中期条痕文系のもの、中期後半のいわゆる竜見町式土器、後期樽式土器などが見られる他、縄文の施文された赤井戸式土器も混在している。近接する神保富士塚、安坪遺跡では中期の土坑、後期の住居跡などが検出されており、弥生時代全般にわたってかなり濃密な遺構の存在が考えられる。

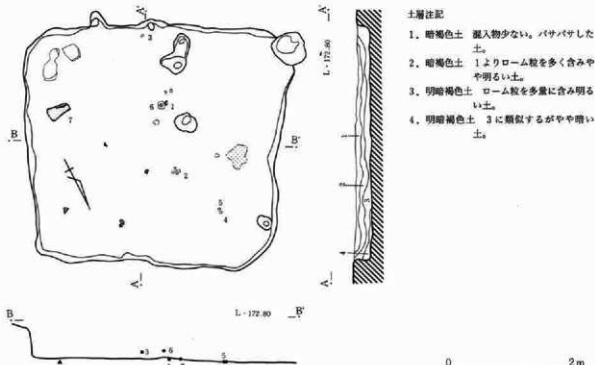
(小野)

第3節 古墳時代の住居跡と遺物

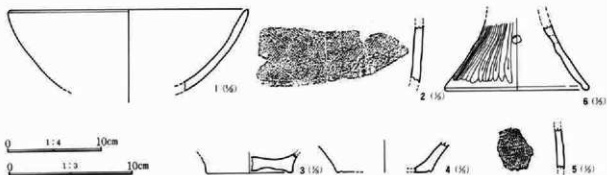
第63号住居跡

位置 5区34B30 **写真** PL.11
形状 長辺4.18m、短辺3.78mの台形気味の隅丸方形。壁はロームで 高さ 0～51cmである。
面積 15.23㎡ **方位** N-62°-W
埋没土 凡そ4層に分けられる暗褐色土で埋められていて、境底状の自然堆積の様相を示している。
床面 ローム層まで掘り込み、ローム層をそのまま平坦に整地して床としているが、西側がやや低い。南側隅角部床には灰白色粘土塊が置かれていた。

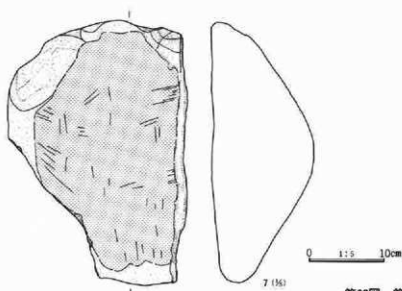
炉 北西壁寄りの位置には径30cm×40cmの範囲に地床炉跡とみられる床面の焼土化した部分が検出された。しかし、掘り窪めたような形跡はなかった。
柱穴 明確に柱穴とみられるピットは発見されなかったが、大小5個のピットが存在する。
貯蔵穴・壁周溝 両者共存在しなかった。
遺物 土師器壺・埴・器台等の破片が住居全体に散在して出土した。また、輝緑岩製の工作台1点あり。
備考 出土遺物は非在地系の特色を示すものがあり、住居の年代は4世紀前半とみられる。(小林)



第24図 第63号住居跡実測図



第25図 第63号住居跡出土遺物実測図(1)



第26図 第63号住居跡出土遺物実測図(2)

第63号住居跡出土遺物観察表(PL.96)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	古式 高 環	+3	口(19.2) 高一 底一口~底	①細・黒色鉄少量 ②酸化・硬 ③赤色	外面 口縁部横撫で、体部磨き。 内面 口縁部横撫で、体部磨き。	内外共に、赤色 顔料(丹か)
2	古式 壺	+2	胴片(縦4.5 横12.0)	①細・黒色赤色鉄少量 ②酸化・硬 ③浅黄色	外面 磨きの後、縄文筋文、羽状縄文。 内面 窪撫で。	
3	古式 壺	+19	底(6.8) 底部片	①細・白色黒色鉄少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内面 窪撫で。 底面 窪磨き。	
4	古式 鉢型	+3	胴部~底部片	①普通・黒色鉄少量 ② 酸化・硬 ③灰色	内外共磨き。	
5	古式 鉢型	+4	破片(縦3.1 横2.8) 胴部片	①普通・黒色白色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 磨きの後、縄文筋文。 内面 窪撫で。	
6	古式 器台	+15	口一高一底11.6 脚部列	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 縦尻磨き。 内面 窪撫で。	
7	礎石	+1	材質 輝緑石。長さ 34.4cm 幅23.9cm 厚さ 13.7cm 重さ15.6kg。		川原石の利用。大型であるため、何かの 製作台としても考え得る。使用は、表面のみで平滑面と多数のヒケ傷が認められる。主体は、金属、他か。	

第67号住居跡

位置 5区45C02

写真 PL.11

形状 長辺5.6m、短辺5.12mの南北に長いやや歪んだ長方形。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、残り
は比較的良好で残存壁高10~45cmを測る。

面積 29.18㎡ 方位 N-30°-E(長軸)

埋没土 凡そ5層の暗褐色土、褐色土によって埋没
していた。全体的には埴底型堆積を示しており、徐々
に堆積していった様相が窺われた。

床面 確認面から凡そ40~80cm掘り込み、ロームや
褐色土の混合土を客土してほぼ水平に床を整地して
いるが、やや中央部が低くなっていた。

炉 地床炉で、住居中央よりやや北寄りに位置して
いた。径30cmほどの円形に床面が焼けており、北端

に長さ20cmほどの棒状の川原石が1個置かれていた。

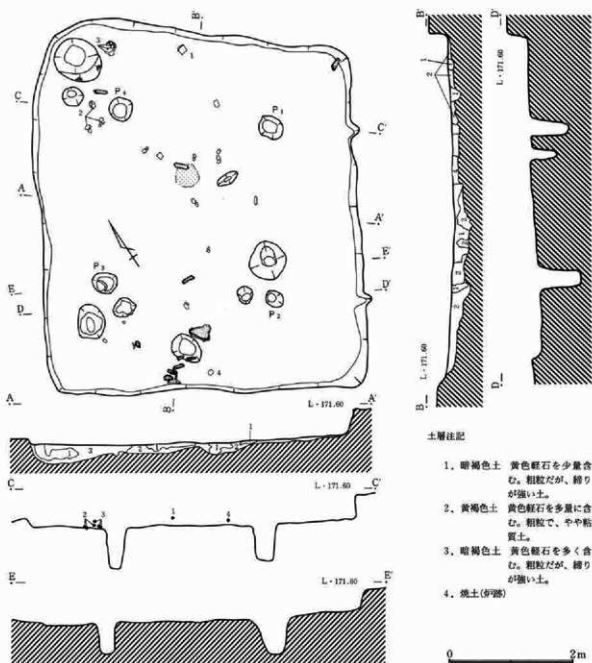
柱穴 ビットは10個検出されたが、柱穴は9個と推
定される。当初はP₁~P₄の4主柱穴であるが、後に
建て替えて掘り直されたものとみられる。P₁~P₄
は大体同じ大きさで径35~40cm、深さ55~65cmであ
る。また、東壁には床面を底部とするビットが2カ
所検出された。これは人工的な造作の跡とみられる。

貯蔵穴 北側隅角部に径70cm、深さ52cmの円形で下
がややすままる形態のものが検出された。

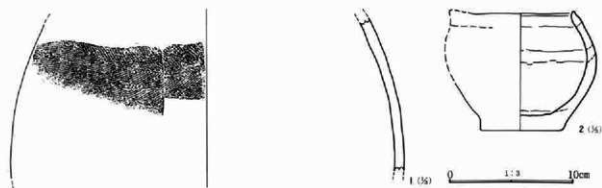
壁周溝 存在しなかった。

遺物 土師器壺・器台・埴が北半部に散在し、南西
壁中央に棒状川原石の集中箇所が見られた。

備考 本遺跡の住居遺構では第63号住居跡と共に最
古に属し、4世紀前半とみられる。 (小林)



第27図 67号住居跡実測図



第28図 第67号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第67号住居跡出土遺物実測図(2)

第67号住居跡出土遺物観察表 (PL.96)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	古式 甕	+4	胴部片(縦5.0 横 14.0)	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③浅黄色	外面 縄文の下は磨き。羽状縄文。 内面 指撫で、磨き。	外面下半部、黒く 染けている。
2	古式 片口鉢	+12	口(10.0) 高9.2 底6.5 口～底 残	①普通・灰色黒色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部磨り。 内面 口縁部横撫で、体部磨き。	
3	古式 壺	-13	口8.8 高16.7 底(5.6) 口～底 残	①灰色紅微量 ②酸化・ 普通 ③鈍い赤褐色	外面 磨き。 内面 口縁部横撫で。	外面上半部～内 面口縁部鈍い丹 塗彩。
4	古式 鉢台	+2	口一高一底7.0 脚部 残	①細・黒色紅少量 ②酸 化・硬 ③黒色	外面 磨き。 内面 撫で。	全体に焼成時の 黒色。片程鈍い 黄褐色。
5	古式 埋没土 鉢台	埋没土	口一高一底(11.8) 脚部 残	①普通・白色赤色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 磨き。 内面 指撫で。	
6	弥生 洗鉢?	埋没土	破片(縦2.6 横4.0)	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	外面 工字文を施文したのち、磨き。 内面 撫で。	流れ込み。
7	弥生 埋没土	埋没土	破片(縦3.0 横4.0)	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	外面 縦方向、内面 横方向の細かな刷毛目 による調整。	流れ込み。

第120号住居跡出土遺物

2区12C10のグリッドに所在する120号住居跡の埋没土中より出土した。点数は、4点であり、同一

個体の可能性が高い。表面全体は、刷毛目、内面は輪痕や指頭圧痕が残る。(産沼)



第30図 古墳時代前期遺構外出土遺物実測図

第120号住居跡出土遺物観察表 (PL.-)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	古式 壺	埋没土	口13.8 高一底一 破片(縦4.0 横4.0)	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴部縦刷毛目(粗) 内面 口縁部横刷毛目(粗)	
2	古式 壺	埋没土	破片(縦4.5 横4.5)	①細・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③暗褐色	外面 胴部縦刷毛目(粗) 内面 指撫で、輪痕あり。	
3	古式 壺	埋没土	破片(縦4.3 横4.3)	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③灰黄色	外面 胴部刷毛目(粗) 内面 指撫で、輪痕あり。	
4	古式 壺	埋没土	破片(縦6.5 横3.8)	①白色紅少量 ②酸化・ 普通 ③褐色	外面 胴部縦刷毛目(粗) 内面 指撫で、輪痕、指頭圧痕あり。	

第1号住居跡

位置 5区13C00 写真 PL.12

形状 一辺の長さが4.1mの正方形を呈する。四隅は、直角をなし、各辺も直線的に掘り込まれている。壁面の勾配は、75~85°で立ち上がる。

面積 17.60㎡ 方位 N-27°-E

埋没土 四方方向から徐々に溜鉢状に堆積している。黄褐色土を斑状に含む褐色土が主体をなし、床面近くでは比較的大粒の炭化物を含む層もある。

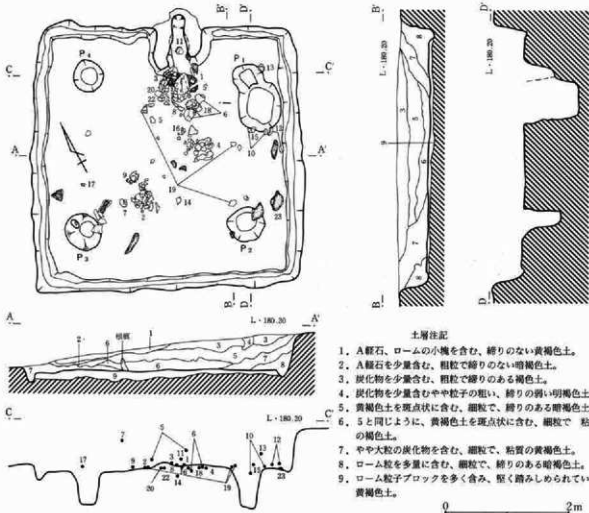
床面 東から西へ向かう比較的緩やかな斜面を、確認面でローム層を東側で65cm、西側で20cm前後掘り込み、その上にロームを10cmほど客土し堅く踏みしめて床面を形成している。住居のほぼ中央電寄りの部分は、堅く踏み固まっていた。

竈 北側の壁にあり、煙道部が住居外へ出るほかは、

すべて住居内にある。材料は、粘性のあるロームブロックを主体とする。焚口部は、灰褐色の泥岩を加工し島居状に組んでいたと思われ、両袖に袖石が立ち、その前に泥岩の天井石が数個に割れて横たわっていた。燃焼部には雲母石英片岩を2本支脚として使用し、左側の支脚には土器器環がかぶさった状態で検出された。火床面はほぼ平坦で煙道部に連続しており、煙道部は壁外へ緩やかに立ち上がっている。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:48×64、P₂:64×64、P₃:60×58、P₄:52×48を測る。

貯蔵穴 竈に向かって右側、柱穴P₄のP₂側に位置する。短径70cm、長径80cmの楕円形を呈し、下部にいくに従い、長方形になる。深さ84cmを測る。内部にはロームブロックを多く含み、中層から下層にか



第31図 第1号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

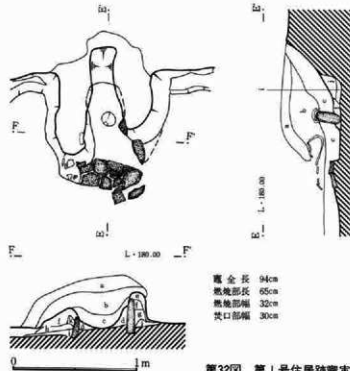
けて、炭化物粒が少量検出された。

壁周溝 幅5~16cm、深さ10~14cmの規模で全周。

遺物 電焚口部の床に落ちた天井石に内側から倒れかかるように2個体の長胴甕が出土し、そこから径1mの円の範囲に長胴甕1 小型甕2 大型甕1 小型甕2 高坏片 坏などが集中して出土した。ま

た東壁とP₂との間に表面に擦痕のある雲母石英片岩の工作台が出土した。

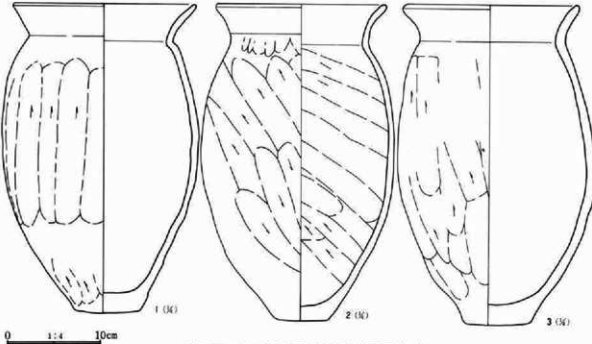
備考 本住居と近接している3号・6号・58号住居跡とは主軸方位がほぼ一致し、遺物もほぼ同時期のものと考えられ、何等かの関連があるものと思われる。本住居跡の年代観を6世紀前半とした。(鹿沼)



竈全長 94cm
 竈地部長 65cm
 竈地部幅 32cm
 焚口部幅 30cm

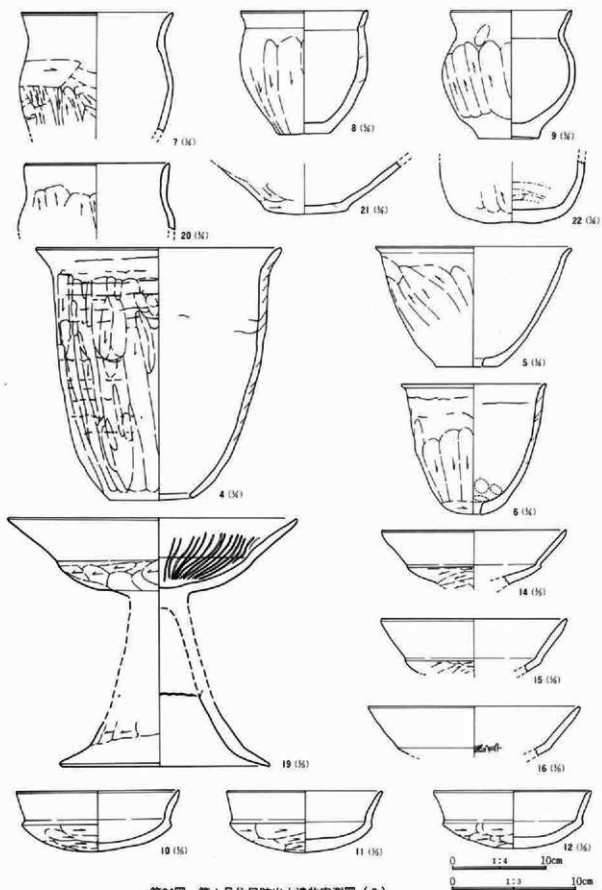
- 土層注記
- a. 暗褐色土 黄色ローム粒子を含み、住居覆土と同様。
 - b. 黄褐色土 黄色ロームを主とした層。
 - c. 暗赤褐色土 よごれた黄色ロームに、焼土粒を多量に含む。
 - d. 赤褐色土 焼土粒や炭化物粒を多く含む。
 - e. bに類似するが、やや暗い。
 - f. 黄色土 ロームブロック(カマド袖)。
 - g. 黄色土 fと類似するが、やや焼土化する。
 - h. 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土ブロックを含む暗褐色土。
 - i. 暗黄色土 ロームブロックを主とするが、よごれている。
 - j. 暗褐色土 hに非常に近いが、全体的に焼土を含み、やや赤味がかった。ロームの粒も含む。かなりしっかりしている。
 - k. 焼土ブロック

第32図 第1号住居跡竈実測図



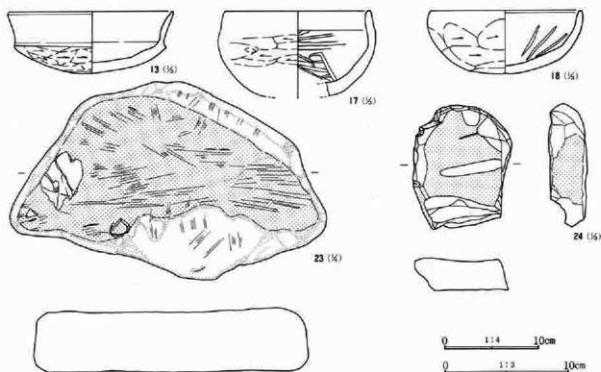
第33図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第34図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



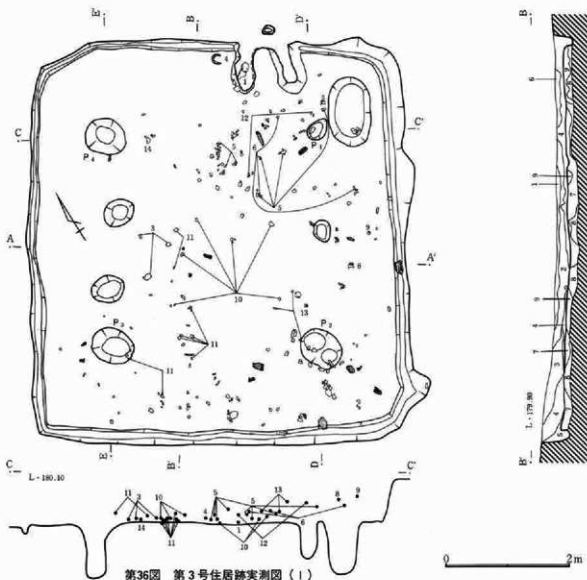
第35図 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

第1号住居跡出土遺物観察表 (PL.97、98、99)

器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1 土師器 長胴壺	甕	口19.1 高32.8 底6.8 ほぼ完形	①普通・白色灰少量②酸化・普通③橙色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	胴部下平、黒褐色。 2次の火跡あり。
2 土師器 長胴壺	床面直上	口17.8 高33.8 底5.4 ほぼ完形	①普通・白色灰少量②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横線で、体部斜め瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部～底部瓦削り。	胴部下平、黒褐色。 2次の火跡あり。
3 土師器 長胴壺	甕	口18.4 高 34.1 底6.9 欠	①普通・灰色灰少量②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	胴部下平、黒褐色。 2次の火跡あり。
4 土師器 壺 大	床面直上	口26.1 高26.8 底8.8 完形	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。内面 口縁部横線で、体部無で。内外に輪轆痕あり。	内面一部に黒褐色部分あり。
5 土師器 瓶	甕	口21.1 高12.7 底7.8 欠	①細・灰色灰少量②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横線で、体部無で。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
6 土師器 瓶	甕	口15.3 高13.7 底3.1 欠	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。内面 口縁部横線で、体部無で。上半に輪轆痕、底 指圧痕。	
7 土師器 壺	+25.7	口16.2 高一 底一 片	①細・白色灰少量②酸化・硬③鈍い赤褐色	外面 口縁部横線で、体部無で。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
8 土師器 壺	床面直上	口13.7 高13.1 底5.6 完形	①普通・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
9 土師器 壺	床面直上	口12.9 高13.6 底6.5 欠	①普通・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③暗赤褐色	外面 口縁部横線で、体部縦瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
10 土師器 環	床面直上	口12.9 高4.8 底一 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横線で、体部横瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
11 土師器 環	甕	口12.5 高4.8 底一 完形	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部横瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	左支脚にかよった状態出土。
12 土師器 環	床面直上	口12.6 高4.5 底一 完形	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部横瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
13 土師器 環	床面直上	口13.3 高4.9 底一 ほぼ完形	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部横瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
14 土師器 高 環	床下	口(14.8) 高一 底一 口～底 欠	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部斜瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
15 土師器 高 環	+6.3	口(14.8) 高一 底一 口～底 欠	①細・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③橙色	外面 口縁部横線で、体部斜瓦削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
16	土師器 高 坏	床面直上	□(16.8) 高一底一 口~底 片	①胎・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦削り。	
17	土師器 坏	+5.6 床面直上	□(11.8) 高(6.7) 底一 片	①胎・夾雑物なし ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦削り。	
18	土師器 坏	床面直上	□(12.0) 高5.0 底一 片	①胎・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦削り。	内面に暗文あり。
19	土師器 高 坏	床面直上	□(23.4) 高(19.5) 底(16.7) 片	①胎・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。脚部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦削り。	内面に暗文あり。
20	土師器 甕	床面直上	□15.2 高一底一 片	①普通・灰色紅多量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦削り。	
21	土師器 甕	埋没土	□一 高一 底8.6 胴~底 片	①普通・白色灰色紅多量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 体部縦削り。 内面 体部縦削り。	
22	土師器 甕	床面直上	□一 高一 底9.6 胴~底 片	①普通・灰色紅多量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 体部縦削り。 内面 体部縦削り。	
23	工作台	床面直上	材質 雲母石夾片岩。長さ34.1cm 幅20.6cm 厚さ6.6cm 重量7.4kg。図平面上のみ、研磨面。表面に金属の刃ならし痕の僅あり。研磨は、浅い部分に及ぶため、研磨主体(磨かれる物体)は、木、皮など。			
24	砥石	埋没土	材質 砂岩。長さ9.6cm 幅7.7cm 厚さ2.5cm 重量250g。図左右側部と平面の3面が、使用面。奥の小口面は、原石面。平面の傷は調査時。右側部の研磨面は、左上がりのため、右ききで、研磨主体は、金属。			



第3号住居跡

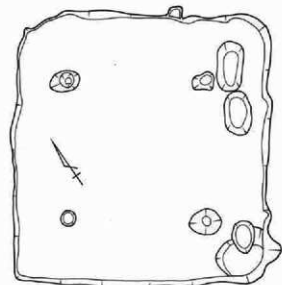
位置 5区10B45 写真 PL.13

形状 長辺6.46m、短辺6.08m、深さ0～55cmの規模の方形を呈するが、西壁は完全に削られていた。

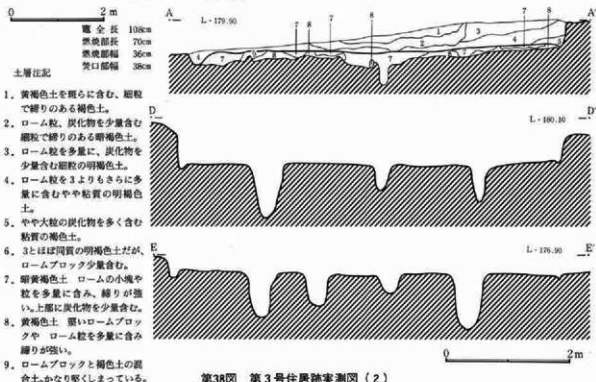
面積 38.12㎡ 方位 N-34°-E

埋没土 凡そ6層の明・暗褐色土により埋まっていたが、自然堆積の様相が窺われた。

床面 確認面から60cmほど掘り込み、褐色土やロー



第37図 第3号住居跡掘りかた実測図



ムの混合土を約20cmの厚さに客土し、整地していた。西側が下がり気味で中央がやや低くなっており、竈前では踏み固められた堅い面が検出された。

竈 北壁の東寄りの位置に黄白色粘土を用いて、屋内に造り出されていた。天井部は崩落していたが袖部は比較的よく残り、袖の中には壘の破片が芯材に入れられていた。竈焼部はよく焼けていた。

柱穴 ビットは7個検出されたが、この中のP₁～P₄が主柱穴で他は補助的なものとみられる。埋没土の断面に柱根痕が見られ、柱の立ち腐れを推定させている。柱穴の規模はP₁:64cm×60cm、P₂:38cm×38cm、P₃:64cm×70cm、P₄:68cm×87cmである。

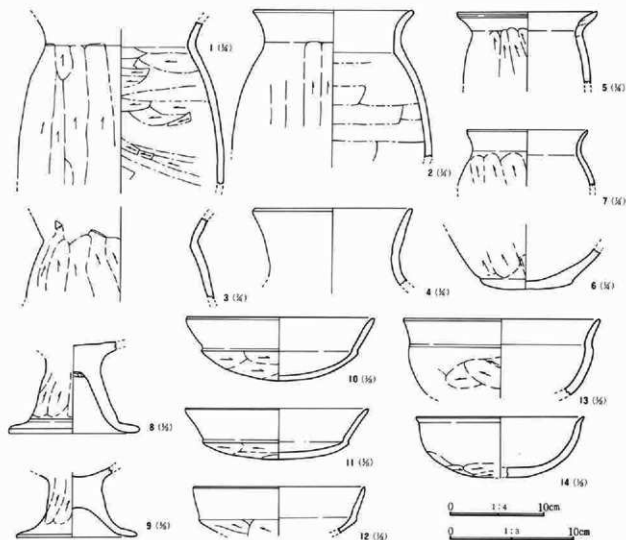
貯蔵穴 長方形のものが竈の右側に南北に2つ並んで検出された。後出の北側のは縦108cm×横65cm、深さ94cmであるが、南側のも大体同じ大きさである。

壁周溝 幅14～30cm、深さ6～12cmが全周していた。

遺物 土師器壘・環・高環の破片が住居全体に散在して出土したが、量は少ない。

備考 他の遺構との重複はない。年代は6世紀前半と推定される。(小)

第3章 検出された遺構と遺物

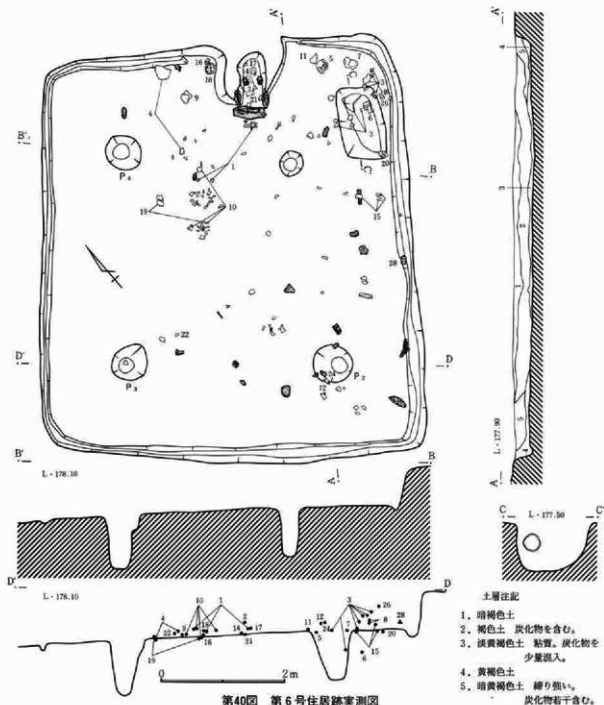


第39図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 (PL.99)

順号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴壺	竈左袖	口一 頸(16.1) 胴一割 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦線で。	
2	土師器 長胴壺	埋没土	口17.0 高一 底一 口一割 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦線で。	
3	土師器 壺	+5	口一 頸(16.5) 口一割 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦線で。	
4	土師器 壺	+3	口17.1 高一 底一 口縁部 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③橙色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦線で。	器台へ転用。
5	土師器 壺	+5	口14.0 高一 底一 口一割 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦で、上半に輪横状。	
6	土師器 壺	+39	口一 高一 底7.4 底部 ⅔	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 胴部縦瓦削り。 内面 胴部一底部横で。	
7	土師器 壺	貯蔵穴	口12.7 高一 底一 口一割 ⅔	①細・灰色藍少量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	外面 □縁部横線で、胴部縦瓦削り。 内面 □縁部横線で、胴部縦で。	
8	土師器 高 坏	+33	口一 高一 胴10.0 胴部 ⅔	①細・灰色藍少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 胴部縦瓦削り。 内面 胴部横で。	
9	土師器 高 坏	+35	口一 高一 胴9.6 胴部 ⅔	①細・灰色藍少量 ②酸 化・硬 ③赤褐色	外面 胴部縦瓦削り。 内面 胴部横で。	

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
10	土師器 杯	+4	口径14.9 高5.0 丸底 口径~底 1/2	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横尻削り。 内面 口縁部横撫で、体部~底部撫で。	内面は黒色処理。
11	土師器 杯	床直	口径14.5 高4.1 丸底 口径~底 1/2	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横尻削り。 内面 口縁部横撫で、体部~底部磨き。	内面は黒色処理。
12	土師器 杯	+14	口径(13.8) 高一 底~口径~体部片	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部斜め尻削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
13	土師器 杯	+17	口径(15.6) 高一 底~口径~体 1/2	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部横尻削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
14	土師器 杯	+3	口径(13.5) 高4.8 丸底 口径~体 1/2	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横尻削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	



第40図 第6号住居跡実測図

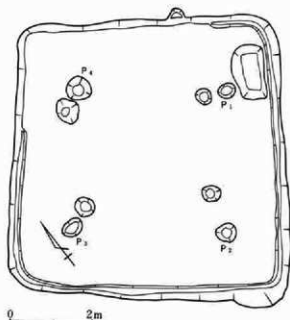
第6号住居跡

位置 5区18B45 写真 PL.14

形状 長辺6.5m、短辺6.1mを測る台形気味の方形。
壁は西側が残りが悪い。壁高0~74cmである。

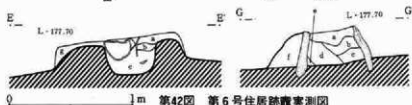
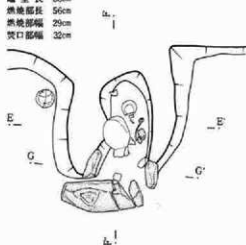
面積 37.41㎡ 方位 N-35°-E

埋没土 凡そ6層の暗褐色土、褐色土等によって埋まっている。埋没土層断面上に坑底型層序が見られる



第41図 第6号住居跡掘りかた実測図

竈 全長 88cm
燃焼部長 56cm
燃焼部幅 29cm
焚口部幅 32cm



第42図 第6号住居跡竈実測図

ことから、徐々に堆積していったものとみられる。
床面 ローム層を50~70cm掘り込み、ロームをそのまま床面としていた。全体的に平坦であるが、西側がやや低くなっていた。竈前から住居中央にかけては、踏み固めてできた堅い面が広範囲に残っていた。
竈 北壁の中央やや東寄りの位置に黄白色粘土と石を用い、壁を背にして屋内に造り出されていた。天井は崩落しており、焚口には扁平で細長い費母石英片岩が両端に突き刺されており、燃焼部には棒状の片岩が2個立てられ、支脚に使用されていた。なお、焚口前には泥岩が落下していた。

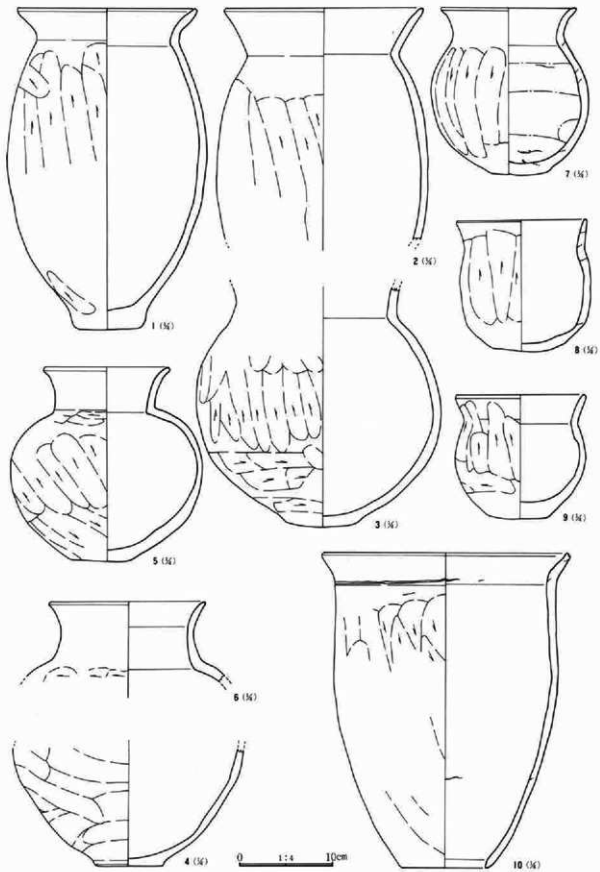
柱穴 住居四隅を結ぶ対角線上に載る位置に4個検出された。規模は4個が大体同じで径50cm前後、深さ80cmほどである。いずれも柱根痕をよく留めている。
貯蔵穴 竈の右側に縦118cm×横70cm、深さ76cmの長方形を呈するものが検出され、内部より長甕が2つ割れになって落ちこんだ様子が出土した。

壁周溝 幅14~38cm、深さ8~14cmのU字溝が全周。
遺物 土師器長甕・壺・甔・坏、須器器壁片が竈や貯蔵穴の周辺に比較的多く出土した。また、竈には横倒しになった長甕や伏せられた壺底部などが出土しており、当時の台所の姿を偲ばせていた。

備考 本住居跡の年代は6世紀前半と推定される。

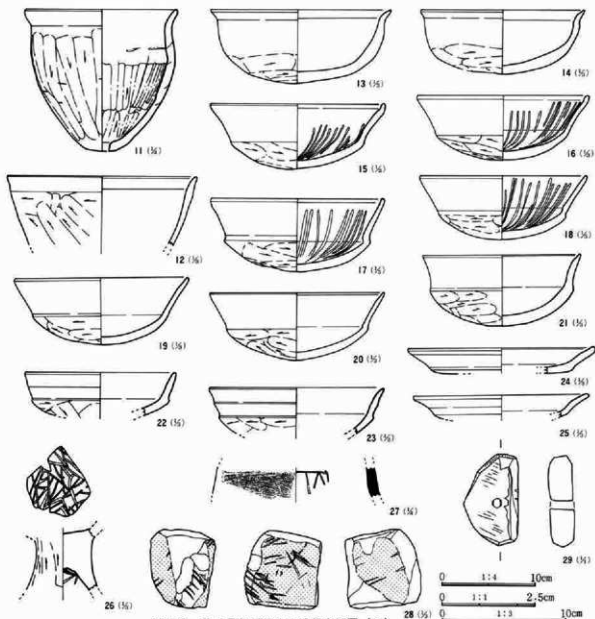
土層注記 (小林)

- a. 明褐色土 細粒で締りが強い。
- b. 褐色土 細粒で、黄色粘土を若干含み、粘性が強い。
- c. 褐色土 炭土粒、炭化物を多く含み、粘性が強い。
下部は炭土の量が多い。
- d. 明褐色土 黄色粘土、炭土粒、炭化物を若干含む。
- e. 赤褐色土 炭土を多く含む。
- f. 黄褐色粘土
- g. 暗褐色土 細粒だが締りが弱い(カマドの覆土)。
- h. 黄土
- i. 褐色土 細粒だが締りはない。



第43図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第44図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表 (PL.100, 101, 102)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+12	口径18.5 高さ34.0 底6.5 口～底 ㄉ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦突削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
2	土師器 長胴壺	壺内	口径21.5 高一底一 口～胴 ㄉ	①普通・灰色白色紅少量② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦突削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
3	土師器 壺	貯蔵穴中 -29	口径(1.2) 高(25.3) 底7.5 胴～底 ㄉ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部上部縦突削り、下 部横突削り。内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
4	土師器 壺	-6	口径一 高一底7.3 胴～底 ㄉ	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 胴部縦削り。 内面 胴部無で。	
5	土師器 壺	-1	口径13.1 高20.5 底6.0 口～底 ㄉ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め縦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で？。	
6	土師器 壺	-29	口径16.3 高一底一 口～胴 ㄉ	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦突削り。 内面 口縁部横撫で。	器台転用か？。
7	土師器 小型壺	+4	口径14.1 高17.7 底6.1 口～底 ㄉ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦突削り、下部縦削 り。内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	輪撰痕あり。

図録	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
8	土師器 小型甕	+15	口径13.7 高13.9 底8.5 口～底 丸	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	輪痕あり。
9	土師器 小型甕	+6	口径13.6 高13.1 底6.4 宛形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
10	土師器 甕	+9	口径(25.7) 高(33.3) 底8.5 口～底 丸	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
11	土師器 小型甕	+3	口径16.2 高15.1 底一 ほぼ宛形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。内面 口 縁部横撫で、胴部上半部無で、下半部縦貫削り。	輪痕あり。
12	土師器 小型甕	+12	口径(10.4) 高一 底一 口～胴部片	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
13	土師器 土師 環	柱穴中 (P ₂)	口径14.4 高5.8 丸底 ほぼ宛形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
14	土師器 土師 環	竈内	口径13.2 高5.1 丸底 ほぼ宛形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③暗褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
15	土師器 土師 環	-2	口径14.0 高5.1 丸底 口～底 丸	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で後、放射状暗文。	
16	土師器 土師 環	-1	口径13.5 高5.1 丸底 口～底 丸	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。内 面 口縁部横撫で、体部無で後、放射状暗文。	
17	土師器 土師 環	竈内	口径13.8 高5.7 丸底 ほぼ宛形	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で後、放射状暗文。	
18	土師器 土師 環	+6	口径13.3 高5.0 丸底 宛形	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で後、放射状暗文。	
19	土師器 土師 環	-10	口径13.9 高5.2 丸底 ほぼ宛形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③暗褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
20	土師器 土師 環	床直	口径(14.0) 高(5.3) 丸底 口～底 丸	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
21	土師器 土師 環	竈内	口径(12.7) 高(5.6) 丸底 口～底 丸	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
22	土師器 土師 環	-7	口径(12.2) 高一 底一 口～蓋部片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無。	内面の縁が、灰 黒色。
23	土師器 土師 環	埋没土	口径(14.0) 高一 底一 口縁部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部削り。 内面 口縁部横撫で、	
24	土師器 土師 甕	-17	口径(15.0) 高一 底一 口～底 丸	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部削り。 内面 口縁部横撫で、底部無。	
25	陶器 土師 甕	埋没土	口径(14.0) 高一 底一 口縁部 丸	①細・夾雑物なし ②還元 焼成 ③灰白色	外面 口縁部に輪痕。 内面 貫入あり。	
26	土師器 土師 甕	+40	口一 高一 底一 脚部片 丸	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③赤褐色	外面 脚部に削り。 内面 脚部上部に磨き。	
27	須恵器 土師 甕	埋没土	頸部片 (縦2.8 横7.7)	①細・白色紅少量 ②還元 元・硬 ③オリーブ黒色	紐作り後、ロク口整形か。 表面に波状文あり。	「四」の文字 書き。
28	砥石	+2	材質 流紋岩(砥沢石)。長55.9cm 幅5.8cm 厚34.8cm 重さ200g。右面左側は、旧時の欠損。その右小口に原 石面あり、それを除く4面に使用面。2面に刃なし傷あり。極めて面は滑らかなため、主体は金属。			
29	有孔円板	埋没土	材質滑石 長さ2.4cm 幅1.4cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 重さ3.7g。全周、面ごとに着いている。半円形を呈す る。表裏に、形削りの段階のタガ状工具の跡あり。			

第12号住居跡

位置 4区45C06

写真 PL.15、16、17

形状 長辺3.32m、短辺3.10mの規模の方形。西側が
下りになっているため、西側の遺存状態は不良。残
存壁高は西側では12cm、東側では58cmである。

面積 9.87㎡ 方位 N-60°-E

埋没土 大きく5層に分けられる黒褐色土や褐色土
によって埋まっていた。各層にかなりの凹凸があり、
短時間に埋没していった様子が窺われる。

床面 確認面からローム層を15～70cmほど掘り込

み、凹凸のある掘りかた底面に厚さ10～20cmほどロ
ームと暗褐色土の混合土を客土して、ほぼ水平で平
坦に整地している。電前から住居中央にかけては広
範囲に踏み固めてきた堅い面が検出された。なお、
住居のほぼ中央には長軸1.12m、短軸1.03m、深さ32
cmの楕円形の床下土坑が検出された。底部が櫛鉢型
にすまざる形態であるが、内部から何も検出されな
かった。この土坑は、周囲の土層から床面整地後に
掘り込まれたものと推定される。

竈 北壁の東寄りの位置に黄色粘土と石を用い、壁

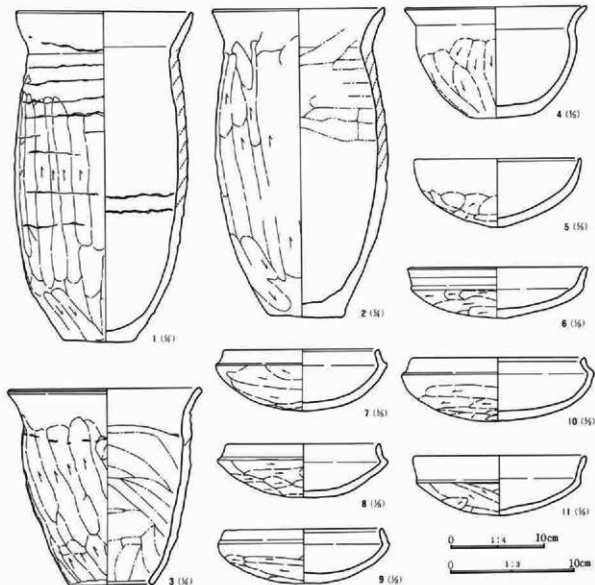
第3章 検出された遺構と遺物

を背にして屋内に造り出されていたが、遺残状態は極めて良好である。即ち、焚口の両端には扁平な雲母石英片岩が突き刺してあり、燃焼部中央には石の支脚が1個立てられていた。このような竈の燃焼部には長壺が2個並べてかけた状態で出土した。左側の壺は前に倒れていたが、右側の壺は支脚で底部を支えた恰好になっていて、当時の姿をそのまま伝えていた。燃焼部は強く焼け、焼土が多量に残っていた。柱穴 検出されなかった。

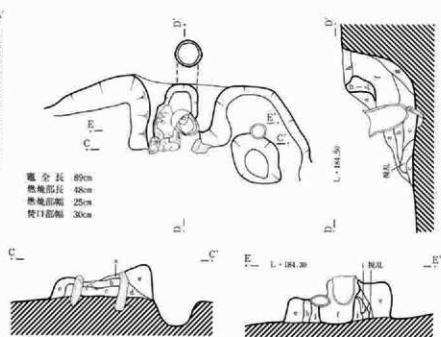
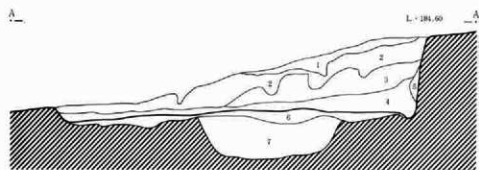
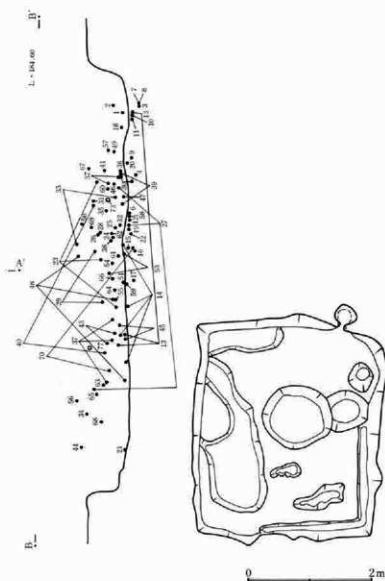
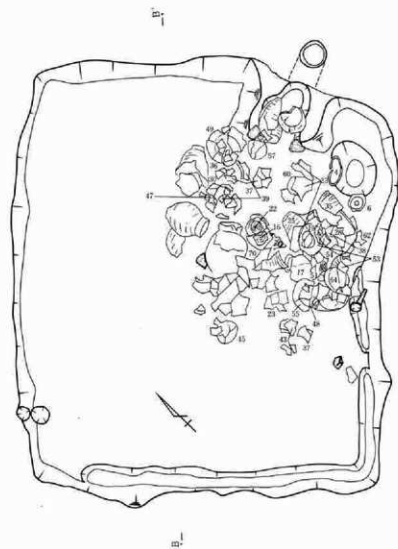
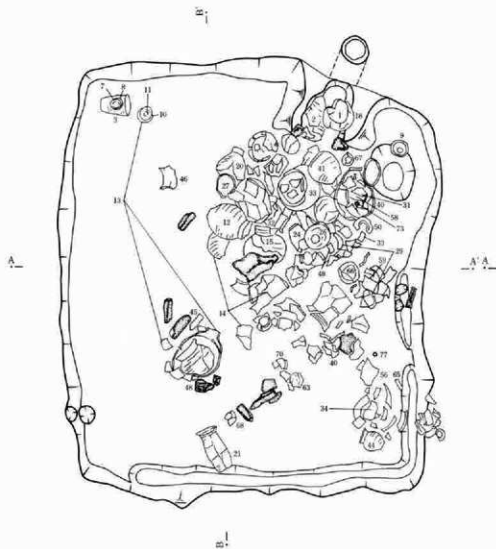
貯蔵穴 竈の右側に検出された。形態はやや不整な楕円形で鍋底状を呈する。規模は長軸46cm、短軸36cm、深さ23cmである。

壁周溝 東壁の中ほどから南壁にかけて幅14~20cm、深さ4~7cmの規模のものが存在した。

遺物 多量の土器とごく少量の滑石成品が発見された。即ち、土器は壺・長壺・小型壺・甕・鉢・盤・杯・高杯・甌で、住居の東側殆ど所の所に集中していた。これらは横倒しや斜めになっているものが多く、無造作に置かれたような状態を呈していた。滑石成品は白玉が6点、有孔方形板が1点、その他に滑石片が3点である。白玉は壺や甕の中から出土。備考 多量の土器類は大きく2時期に分けられるが、下層の方が新しいという特異な現象を示している。遺物の年代は6世紀前半とみられる。(小林)



第45図 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



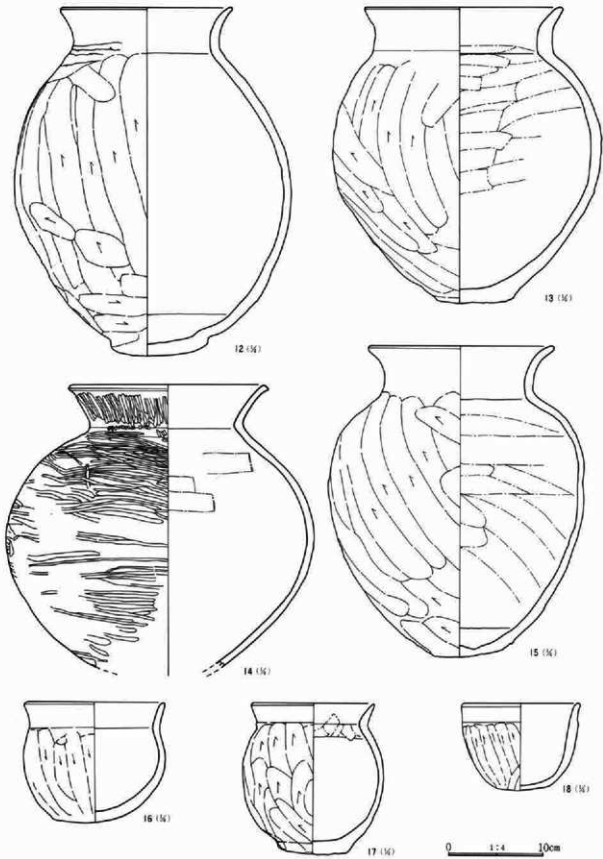
土層注記

1. 明褐色土 ロームのブロックや小粒を含む。かなり堅い。
2. 褐色土 斑状の黄褐色土が含まれる。ロームの小粒も含む。東側に塵を多く含む。
3. 暗褐色土 2より細状の黄褐色土を多く含む。ロームの小粒も含む。東側に塵を多く含む。
4. 黒褐色土 2、3よりもちろい。ロームの小粒を含む。
5. 暗褐色土 砂質で柔らかい。ロームの小粒を含む。
6. 明褐色土 黄色ロームブロックを多量に含み、堅く固まっている。粘質な椀材。
7. 床下土坑 埋設土

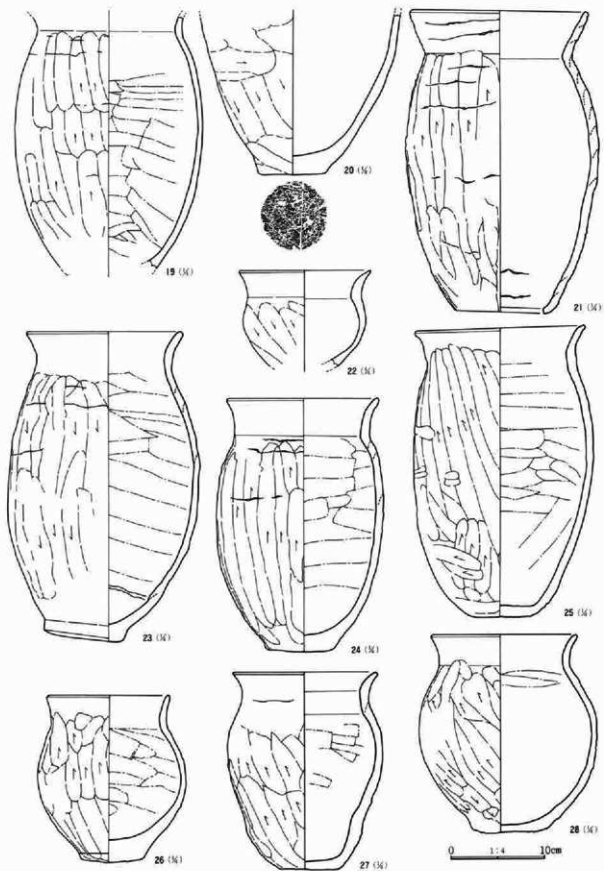
堀全長 80cm
 掘削部長 48cm
 掘削部幅 25cm
 掘削部幅 30cm

土層注記

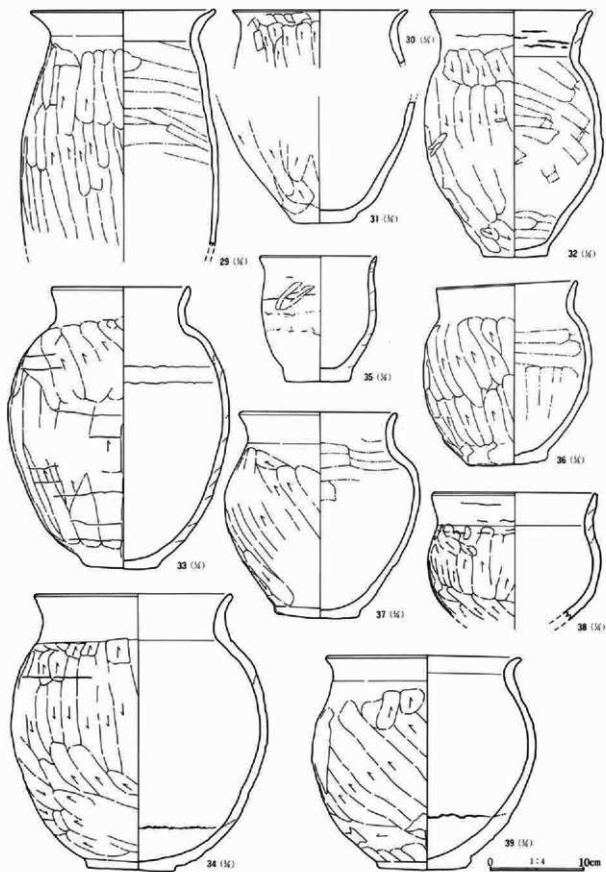
- a. 暗褐色土 焼土粒を多く含む、しまっている。
- b. 赤褐色土 焼土粒を多く含む、ややバラけている。
- c. 赤褐色土 焼土ブロック粒を主とした崩壊焼土。灰化物も多く混入する。
- d. 暗赤黄褐色土 ロームと焼土を混在させた堅くしまっている様。
- e. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- f. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含む。
- g. 暗褐色土 fより明るいが類似する。
- h. 黄色粒土 黄色ロームを主としたブロック(カマド跡)。
- i. 焼土
- j. 赤褐色土 cと同様だが、堅くしまっている。



第47図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

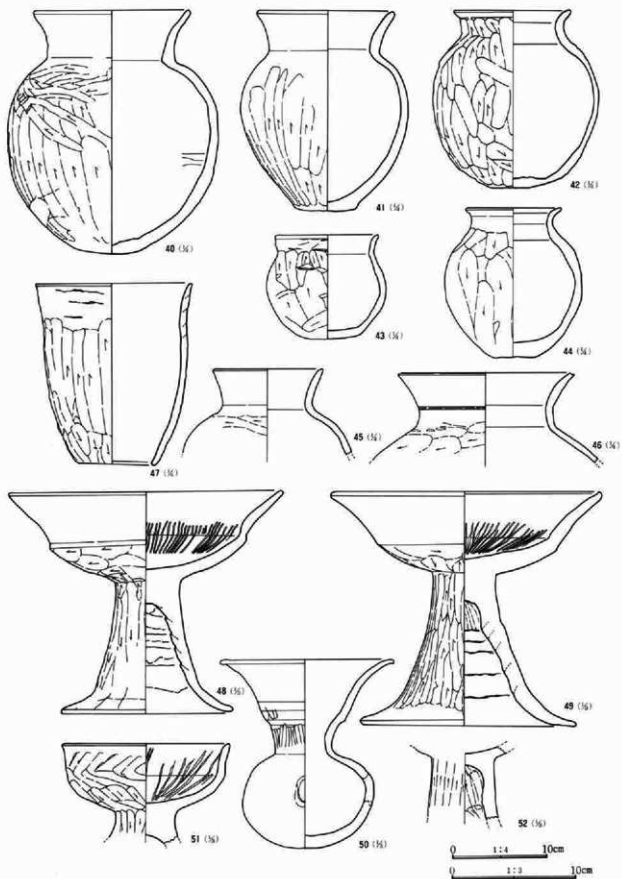


第48図 第12号住居跡出土遺物実測図(3)



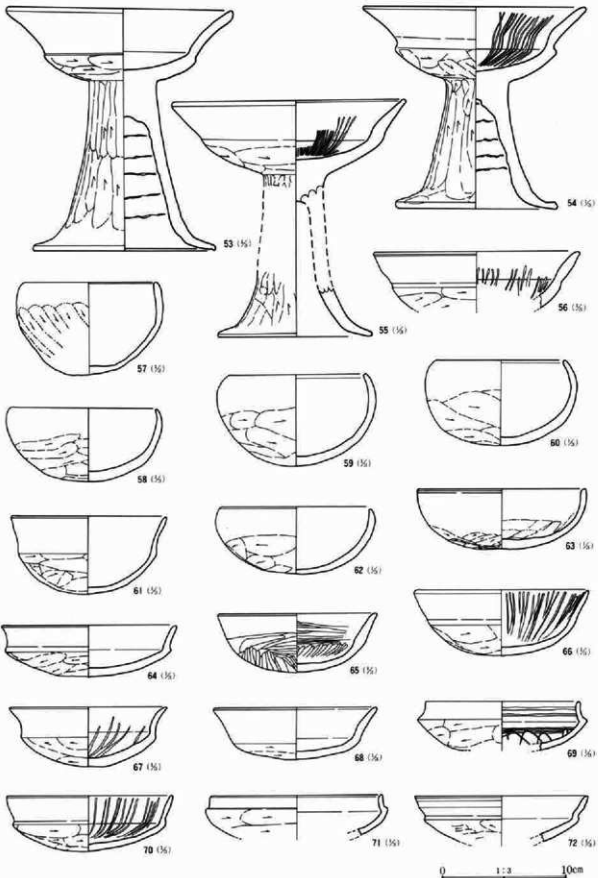
第49図 第12号住居跡出土遺物実測図(4)

第3章 検出された遺構と遺物



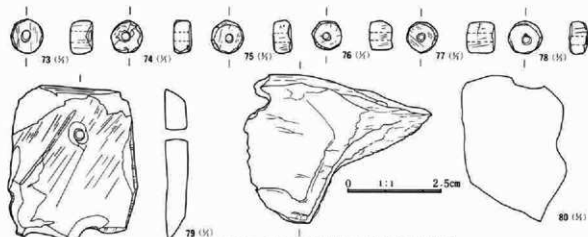
第50図 第12号住居跡出土遺物実測図(5)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第51図 第12号住居跡出土遺物実測図(6)

第3章 検出された遺構と遺物



第52図 第12号住居跡出土遺物実測図(7)

第12号住居跡出土遺物観察表 (PL.102, 103, 104, 105, 106, 107)

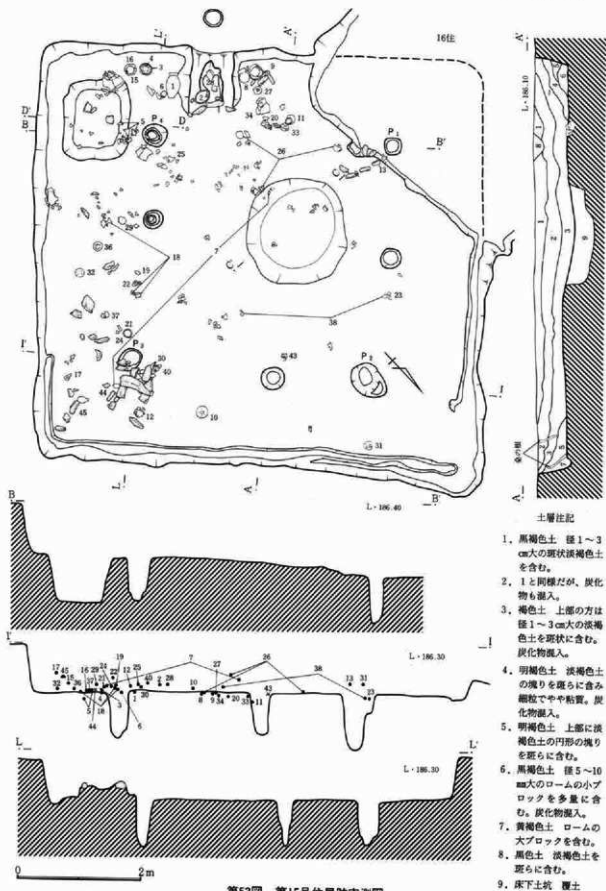
番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	竈内	口径18.7 高さ34.4 底径7.7 □～底 ㄹ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	輪痕あり。
2	土師器 長胴甕	竈内	口径18.3 高さ32.4 底径9.2 □～底 ㄹ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	輪痕あり。
3	土師器 小型甕	+1	口径20.8 高さ20.2 底径9.0 完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め寛削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
4	土師器 鉢	-6	口径19.2 高さ11.6 底径6.4 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	2次的な、火を うけた跡あり。
5	土師器 杯	竈	口径13.3 高さ5.4 丸底 □～底 ㄹ	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
6	土師器 杯	+1	口径14.2 高さ4.0 丸底 ほぼ完形	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③灰褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	
7	土師器 杯	+1	口径12.4 高さ4.8 丸底 完形	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	黒色処理？
8	土師器 杯	+1	口径12.3 高さ4.1 丸底 完形	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部～底部無。	黒色処理。
9	土師器 杯	-4	口径12.6 高さ4.3 丸底 完形	①胎土・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部無。	黒色処理？
10	土師器 杯	+1	口径13.8 高さ5.0 丸底 完形	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部無。	黒色処理？
11	土師器 杯	+1	口径13.7 高さ4.7 丸底 完形	①胎土・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部寛削り。 内面 口縁部横撫で、体部無。	黒色処理？
12	土師器 甕	+4	口径18.3 高さ36.7 底径10.4 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	輪痕あり。
13	土師器 甕	+1	口径20.9 高さ31.0 底径8.2 完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
14	土師器 甕	+8	口径21.1 高さ(31.1) 底一 ㄹ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で後削り、胴部縦筋有り後削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。	
15	土師器 甕	+3	口径19.5 高さ32.8 底径7.0 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め寛削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
16	土師器 小型甕	-6	口径14.3 高さ12.8 底径8.5 □～底 ㄹ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
17	土師器 小型甕	-6	口径13.2 高さ15.9 底径7.0 完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 口縁部横撫で、胴部無。	
18	土師器 小型甕	竈内	口径12.0 高さ9.2 底径5.7 完形	①胎土・白色黒少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋有り。内面 口 縁部～胴部中央部横撫で、胴部下半部横撫で。	内面口縁部に一 周黒色の付着あり。
19	土師器 長胴甕	-1	口径一 高さ一 底一 胴(29.0) 胴一 胴下半	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部横撫で、胴部縦筋有り。 内面 胴部横撫で、胴部縦筋有り。	輪痕あり。
20	土師器 長胴甕	+7	口径一 高さ一 底7.2 胴一 底 ㄹ	①胎土・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部横撫で。	底面に木炭あり。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

図録	器物 番号	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
21	土師器 長胴壺	+6	□19.0 高32.2 底一 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	輪襷痕あり。 皿に転用。
22	土師器 小壺	-3	□(13.8) 高一底一 口～胴 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
23	土師器 長胴壺	+25	□16.5 高32.5 底8.5 口～底 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
24	土師器 長胴壺	+11	□18.1 高30.6 底6.6 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
25	土師器 長胴壺	+9	□16.3 高26.7 底7.0 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
26	土師器 小壺	+24	□13.0 高17.6 底6.8 完形	①普通・灰色白色紅少量② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
27	土師器 小壺	+13	□(15.4) 高20.9 底6.4 口～底 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
28	土師器 小壺	+25	□(14.4) 高20.2 底8.1 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
29	土師器 長胴壺	+19	□19.3 高一底一 口～胴 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
30	土師器 壺	+12	□(18.5) 高一底一 口～胴部片	①細・褐色紅少量 ②酸 化・硬 ③灰黄色	外面 口縁部～胴部縦筋削り。 内面 横撫で。	与豊島色、1次のか 2次のか不明。
31	土師器 長胴壺	+27	□一 高一底7.0 胴一底 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部無で。	
32	土師器 壺	+8	□17.2 高26.3 底6.7 口～底 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
33	土師器 壺	+42	□14.0 高29.6 底7.8 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	輪襷痕あり。
34	土師器 壺	+21	□20.9 高29.0 底9.4 口～底 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴上半部縦筋削り、下半部 斜め足削り。内面 口縁部横撫で、胴部無で。	輪襷痕あり。
35	土師器 壺	+19	□12.3 高13.2 底7.0 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部無で。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	輪襷痕、明瞭に 残る。
36	土師器 小壺	+12	□(14.3) 高19.1 底8.6 口～底 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
37	土師器 小壺	+16	□(16.8) 高21.7 底9.2 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
38	土師器 小壺	+13	□17.5 高一底一 口～胴 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
39	土師器 小壺	+6	□20.7 高22.5 底9.9 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め足削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
40	土師器 壺	+27	□(16.9) 高25.6 底6.5 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴上半部縦筋削り、胴中 央部縦筋削り。内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
41	土師器 壺	+20	□14.7 高21.1 底6.5 完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
42	土師器 小壺	埋没土	□12.5 高18.8 底5.5 完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、頸部・胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
43	土師器 小壺	+8	□11.0 高11.0 底6.0 口～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、頸部～胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
44	土師器 小壺	+31	□10.2 高15.8 底4.0 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
45	土師器 壺	+1	□11.4 高一底一 口～胴 ⅴ	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
46	土師器 壺	+19	□(18.0) 高一底一 口～胴 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
47	土師器 小壺	+6	□16.6 高19.2 底8.3 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	
48	土師器 高 坏	+40	□29.8 高16.8 底13.8 口～胴 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、坏底部横筋削り胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、坏底部横筋削り後端吻。	胴部内面に輪襷 痕あり。
49	土師器 高 坏	+18	□21.6 高18.4 底17.1 ほぼ完形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	口縁部・胴部内外共横撫で、外面 坏底部横筋 削り、胴部縦筋削り。内面 坏底部横筋削り後端吻。	胴部内面に輪襷 痕あり。
50	土師器 通	+38	□13.8 高14.7 丸底 口～底 ⅴ	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 磨き。 内面 横撫で。	内面、黒色処理。

第3章 検出された遺構と遺物

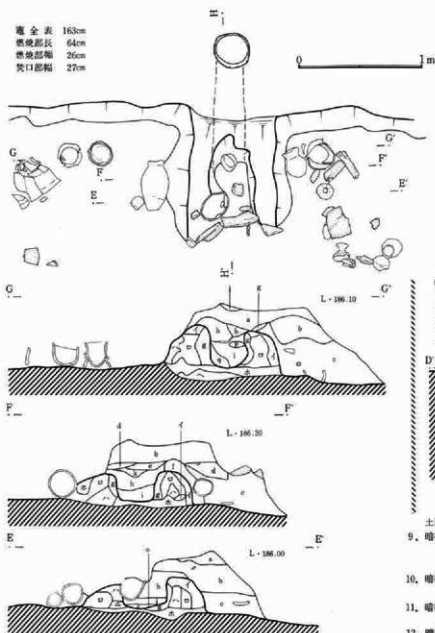
図号	遺構 遺物	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
51	土師器 高 環	+5	口13.3 高1 底一 口一 胴上部 片	①細・灰褐色ほとんどなし ②酸化・普通 ③橙色	口縁部内外共無で、外面 坯底部へ胴上部施 削り。外面 撫で後、放射状暗文。	
52	土師器 高 環	埋没土	口一 高一 底一 胴部 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 脚部縦削り。 内面 脚部蓋削り。	
53	土師器 高 環	+4	口18.0 高19.1 底14.5 ほぼ丸形	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③橙色	口縁部・胴部内外共横削り。外面 坯底部横 削り、脚部縦削り。内面 坯底部無で、暗文。	脚部内面に輪襷 痕あり。
54	土師器 高 環	+13	口(17.4) 高15.6 底12.8 口一 脚 片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	口縁部・胴部内外共横削り。外面 坯底部横 削り、脚部縦削り。内面 坯底部無で、暗文。	脚部内面に輪襷 痕あり。
55	土師器 高 環	+10	口18.7 高(18.6) 底(12.3) 坯部・脚部	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	口縁部・胴部内外共横削り。外面 坯底部横 削り、脚部縦削り。内面 坯底部無で暗文	
56	土師器 高 環	+39	口16.2 高一 底一 坯部 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、坯底部横削り。 内面 口縁部横削り、坯底部無で、暗文。	
57	土師器 鉢		口14.1 高9.7 丸底 ほぼ丸形	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横削り、体部斜め削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
58	土師器 環	+33	口11.6 高5.8 丸底 ほぼ丸形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
59	土師器 環	+2	口11.1 高7.2 丸底 ほぼ丸形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
60	土師器 環	+18	口10.2 高6.7 丸底 丸形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
61	土師器 環	+8	口12.4 高6.1 丸底 ほぼ丸形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
62	土師器 環	+13	口12.1 高5.3 丸底 ほぼ丸形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
63	土師器 環	+18	口13.3 高4.7 丸底 口一 底 片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
64	土師器 環	+9	口13.9 高4.1 丸底 ほぼ丸形	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	黒色処理。
65	土師器 環	+22	口12.7 高4.6 丸底 ほぼ丸形	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③赤褐色	内外共磨き。	内面底部黒褐 色。
66	土師器 環	+13	口13.8 高5.2 丸底 丸形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。内 面 口縁部横削り、体部蓋削り、放射状暗文。	
67	土師器 環	+33	口12.5 高4.7 丸底 ほぼ丸形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り、暗文。	
68	土師器 環	+26	口13.0 高4.1 丸底 口一 底 片	①普通・灰色紅多量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
69	土師器 環	+29	口16.2 高3.9 底一 口一 底 片	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い橙色	外面 口縁部横削り、体部横削り。内面 口 縁部横削り、体部横削り後磨き、暗文。	
70	土師器 環	+13	口13.2 高4.4 丸底 口一 底 片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横削り、体部へ底部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り、放射状暗文。	
71	土師器 環	埋没土	口(13.6) 高(4.1) 底一 口一 底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③灰黄褐色	外面 口縁部横削り、体部横削り。 内面 口縁部・体部共に削り。	
72	土師器 環	埋没土	口13.7 高一 底一 口一 体 片	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横削り、体部横削り。 内面 口縁部横削り、体部蓋削り。	
73	白 玉	+18	材質 滑石。長さ0.9cm 幅0.9cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 重さ0.3g。 穿孔は、一方向である。側面は、やや斜め方向に研削。上・下は、扁平に近づけようとして調整されている。			
74	白 玉	埋没土	材質 滑石。長さ0.8cm 幅0.8cm 厚さ0.5cm 孔径0.3cm 重さ0.3g。 穿孔は、一方向である。側面は、やや斜め方向に研削。上・下は、扁平に近づけようとして調整されている。			
75	白 玉	埋没土	材質 滑石。長さ0.9cm 幅0.8cm 厚さ0.5cm 孔径0.3cm 重さ0.3g。 穿孔は、一方向である。側面は、やや斜め方向に研削。上面は、平らに調整。下面は、斜削面となっている。			
76	白 玉	埋没土	材質 滑石。長さ0.8cm 幅0.8cm 厚さ0.7cm 孔径0.2cm 重さ0.3g。 穿孔は、両方向である。側面は、やや斜め方向に研削。上面は、平らに調整。下面は、斜削面となっている。			
77	白 玉	+34	材質 滑石。長さ0.8cm 幅0.8cm 厚さ0.8cm 孔径0.2cm 重さ0.6g。 穿孔は、両方向である。側面は、ほぼまっすぐに研削。上・下とも、平らに調整されている。			
78	白 玉	埋没土	材質 滑石。長さ0.9cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm 孔径0.3cm 重さ0.2g。 穿孔は、一方向である。側面は、やや斜め方向に研削。上・下とも、平らに調整されている。			
79	板方 孔	埋没土	材質 滑石。長さ0.4cm 幅3.5cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 重さ14.5g。穿孔は、下面からの一方向である。上・ 下及び4側面は、研削されている。下方側面には、研削後、故意に円形に刻まれた部分がある。			
80	石 核	埋没土	材質 滑石。長さ4.8cm 幅3.9cm 厚さ2.7cm 重さ50g。鈍い黄褐色を呈する。この他に、同様のチップが2片 確認されている。			



第53図 第15号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

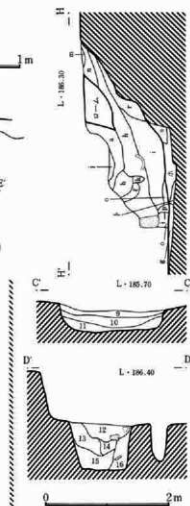
竈全長 163cm
 竈総厚 64cm
 竈底部幅 26cm
 竈口部幅 27cm



土層注記

- a. 暗褐色土 洪褐色土を斑らに含み、細粒でやや粘質。
- b. 褐色土 径3~5cm次の洪褐色土を斑らに含み細粒でやや粘質。
- c. 暗褐色土 焼土粒を少量含み、細粒でやや粘りが強い。
- d. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
- e. 褐色土 全体に焼土を薄く含む、ロームの粒や洪褐色土も含まれる。細粒でやや粘質で粘りが強い。
- f. 明褐色土 上部に焼土が集中している。径1~2cm次の洪褐色土も含まれる。細粒で粘質。
- g. 焼土
- h. 焼土の小塊を多量に含む黄色粘土(ローム)。
- i. 焼土を多く含む、やや赤色の黄色土。
- j. 黒褐色土 細粒だが粘りが強い。炭化物混入。
- k. 黒褐色土 藁の根の痕。
- l. 暗褐色土 細粒でやや粘質。炭化物若干混入。
- m. 黒褐色土 混合物なし。
- n. 暗褐色土 焼土粒混入。
- o. 赤褐色土 焼土ブロック多量に含む。粗粒でもろい。

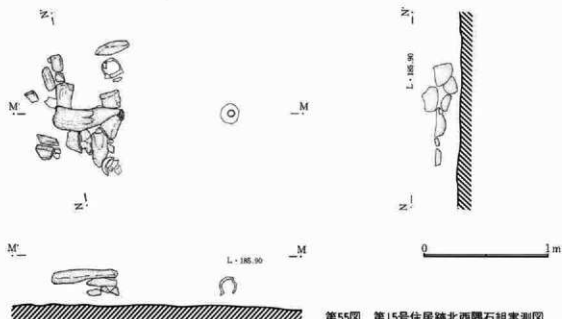
- p. 褐色土 ローム粒多量に混入。細粒だが粘性あり。
- q. 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む(崩落焼土)。
- r. 暗褐色土 ローム粒少量混入。粗粒でたいへんもろい。煙道部か?
- s. 暗褐色土 径1~2cm次のロームブロック混入。細粒で粘性。粘りあり。(照りかた)
- イ. 赤黄褐色土 ローム粒を多量に焼土等も多く混在した土。
- ロ. 黄色土 ロームブロック(カマド袖の芯)。



土層注記

9. 暗褐色土 ロームブロックを上面に多量に含み、かなり堅くしまっている(未).
 10. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含み柔らかい。9より明るい。
 11. 暗褐色土 ロームブロック粒を多量に含み柔らかくかなり黄色系。
 12. 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
 13. 暗褐色土 12と類似するがやや暗い。
 14. 暗褐色土 ローム粒子を少量含み、他層よりかなり暗い。
 15. 暗褐色土 12と類似するがやや明るい。
 16. 暗黄色土 暗い黄色ローム土。
- ハ. 赤黄褐色土 焼土粒を多く含んだローム粒の混在土。イよりも赤色系。
 - ニ. 暗黄褐色土 ローム小ブロック、焼土粒及び灰を少量混在する。
 - ホ. 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土粒及び灰を少量混在する。
 - ヘ. 褐色土 炭化物粒、崩れた土面粒を含む。
 - ト. ローム漸移層

第54図 第15号住居跡踏査実測図



第55図 第15号住居跡北西隅石組実測図

第15号住居跡

位置 4区33C06 写真 PL.18, 19

形状 長辺7.16m 短辺6.62mのほぼ正方形を呈する。

面積 47.90㎡ 方位 N-136°-W

埋没土 大粒の淡褐色土ブロックを多く混在する黒褐色土、ないしは暗褐色土を主とする。下層ほど色調は明るくなり、炭化物粒を比較的多く混入する。

床面 ローム面をそのまま床面とし、堅く踏みめられている。掘りかた面は確認されなかったが、住居跡中央部に、径が1.6mで深さが35cmほどの規模となる円形の床下土坑が検出された。この床下土坑の上面には、ロームブロックを多量に混在する暗褐色土による、かなり堅く踏みめられた貼床が確認された。

竈 西壁のやや南よりに位置し、残存状態はかなり良好であった。焚口部から燃焼部にかけてやや揺鉢状にくぼみ、燃焼部から煙道部にかけては、2カ所に段をもちながらも緩やかに立ち上がり、煙道の口が、住居西壁の外側50cmほどのところに開口する。焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれているものと考えられる。燃焼部には石の支脚が据えられている。袖部はロームを主に構築し、煙道は地山のローム層を掘り抜いたものと考えられる。なお、

袖部内壁及び煙道の天井部はかなり焼土化している。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴及び西側を除く東・南・北の三方の主柱穴の間にも柱穴が検出された。

貯蔵穴 竈の左側に位置し、長方形を呈する。1.2×1.0mで深さが70cmを測る規模をもつ。

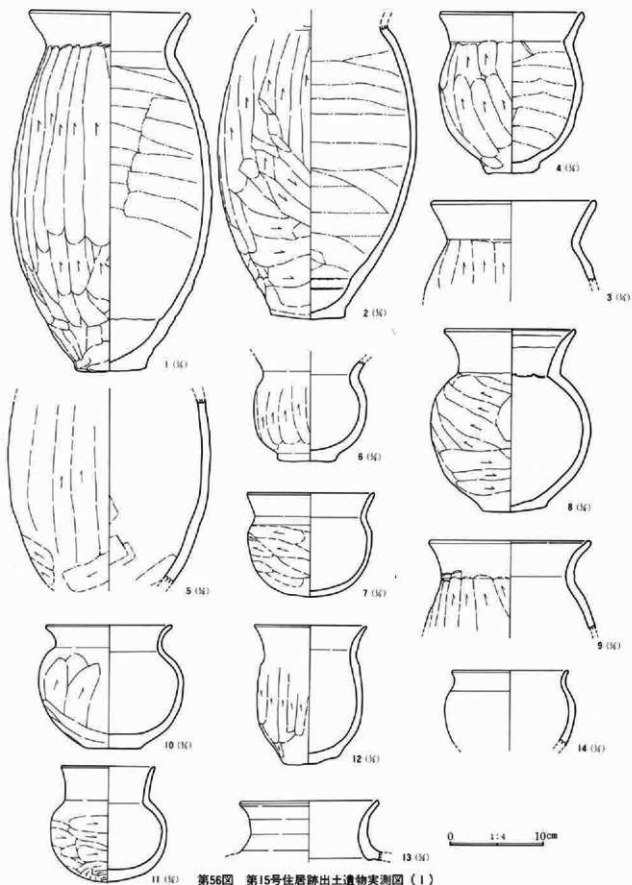
壁周溝 南壁の一部と東・北壁際に、幅25cmほどの溝が巡る。

遺物 竈周辺及び住居東側の石組周辺に土器が集中して出土している。まず竈内には左袖部によりかかるように壺があり、竈の左側貯蔵穴までの間に小型・大型の甕、甕が正位ないしは横転した状態で出土し、竈の右側には壺や甕、高坏等が出土している。また石組周辺には、高坏、坏、手捏土器等が多く出土している。

備考 本住居の東側部分には「コ」の字状に配された石組が検出されており、この周辺から出土している高坏や坏、手捏土器をも合わせ考えると、祭祀等の何等かの施設とも考えられる。また本住居跡の西側に第16号住居跡が重複しており、その重複関係は、埋没土の堆積状態から、本住居跡の方が古い。住居跡の年代観を出土遺物より6世紀前半とした。

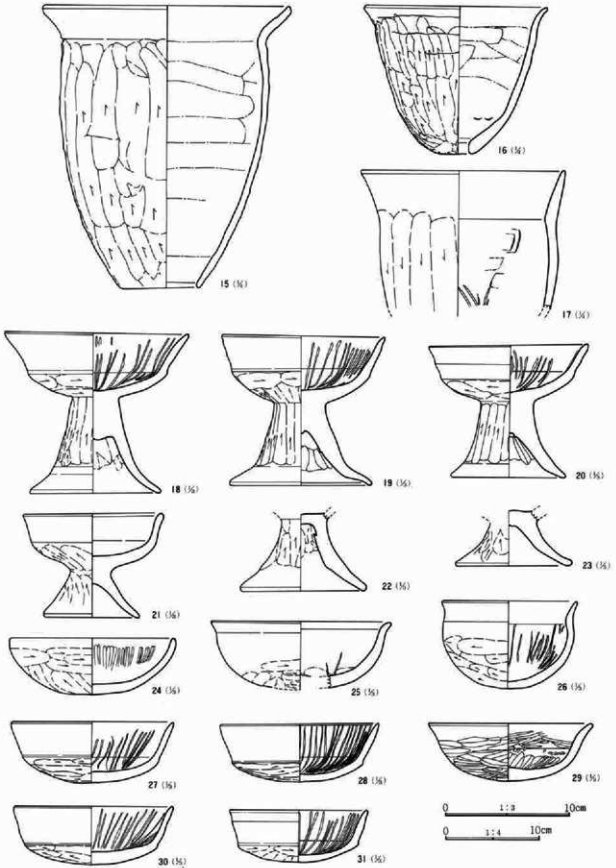
(谷藤)

第3章 検出された遺構と遺物



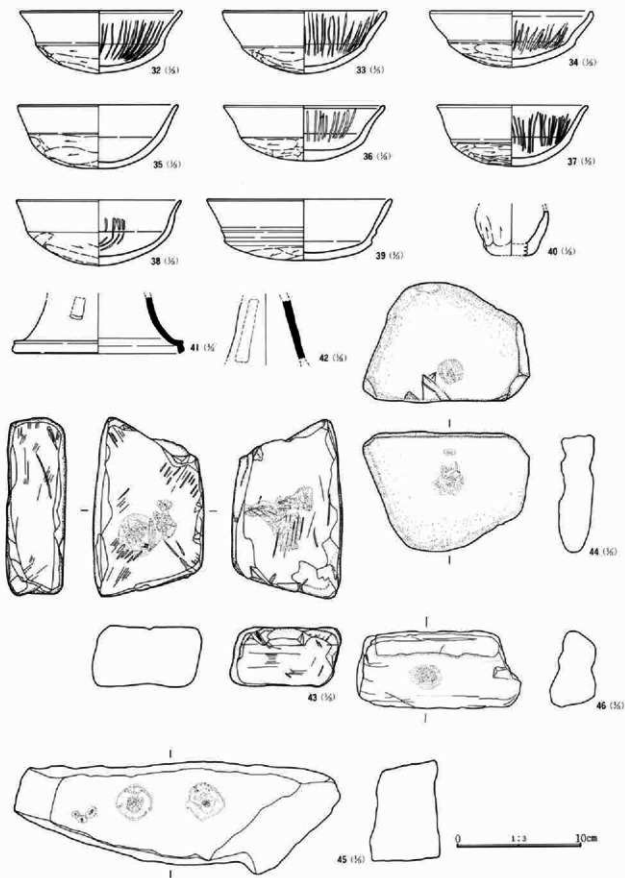
第56図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第57図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第58図 第15号住居跡出土遺物実測図(3)

第15号住居跡出土遺物観察表 (PL.108、109、110)

図号	器種 分類	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	+1	□17.1 高38.2 底7.6 完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③明褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
2	土師器 長胴甕	竈内	□一 高一 底7.9 割～底 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴部上半部縦瓦削り、下半部斜め瓦削り。 内面 胴部縦撫で。	内面の下半部に、輪轆痕あり。
3	土師器 甕	-3	□17.3 高一 底一 □～割 ⅴ	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	器台へ転用。
4	土師器 小型甕	-3	□15.4 高17.0 底5.5 完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
5	土師器 長胴甕	-8	□一 高一 底一 胴部(21.6) ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 化・軟 ③褐色	外面 胴部縦撫で。 内面 胴部縦撫で。	
6	土師器 小型甕	-1	□(11.6) 高11.0 底(5.8) ほぼ完形	①細・灰色紅少量 ②酸化 化・軟 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
7	土師器 小型甕	+12	□13.4 高11.0 丸底 □～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
8	土師器 甕	+3	□14.0 高19.4 底6.7 完形	①細・白色紅微量 ②酸化 化・普通 ③褐色	口縁部内外共横撫で、外面 胴部上半部斜め瓦削り。 下半部横瓦削り 内面 胴部縦撫で。	
9	土師器 甕	+9	□17.1 高一 底一 □～割 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	器台へ転用。
10	土師器 小型甕	+12	□(13.3) 高13.0 底(5.9) ほぼ完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
11	土師器 埴	-1	□9.9 高12.2 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部縦撫で。	
12	土師器 小型甕	+12	□11.9 高14.6 底5.9 □～底 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	表面に2次的な火跡あり。
13	土師器 甕	+24	□(14.6) 高一 底一 □～割 ⅴ	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で。 内面 口縁部横撫で。	
14	土師器 小型甕	埋没土	□(12.2) 高一 底一 □～割部片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部指撫で調整。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
15	土師器 甕	+15	□26.6 高29.7 底8.4 ほぼ完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
16	土師器 甕	-2	□19.5 高15.6 底4.0 完形	①細・灰色紅少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
17	土師器 甕	+31	□21.5 高一 底一 □～割 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
18	土師器 高 坏	+6	□14.6 高12.6 底10.2 □～割 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部～环上部 裾部横撫で、环底部～脚部縦瓦削り。内面 环部・裾部横撫で、脚部縦瓦削り。	内面に暗文あり。
19	土師器 高 坏	+11	□13.0 高11.8 底11.3 完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・軟 ③褐色	外面 口縁部～环上部・裾部横撫で、环底部～脚部縦瓦削り。内面 环部・裾部横撫で、脚部縦瓦削り。	内面に暗文あり。
20	土師器 高 坏	床直	□12.6 高10.4 底9.1 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部～环上部・裾部横撫で、环底部～脚部縦瓦削り。内面 环部・裾部横撫で、脚部縦瓦削り。	内面に暗文あり。
21	土師器 高 坏	+6	□11.0 高8.1 底7.4 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・軟 ③褐色	外面 口縁部～环上部・裾部横撫で、环底部～脚部縦瓦削り。内面 环部・脚部横撫で。	
22	土師器 高 坏	+27	□一 高一 底(9.3) 脚部 ⅴ	①細・灰色紅微量 ②酸化 化・硬 ③明赤褐色	外面 脚部縦瓦削り、裾部横撫で。 内面 脚部縦瓦削り、裾部横撫で。	
23	土師器 高 坏	+1	□一 高一 底(9.2) 脚部 ⅴ	①細・黒色紅微量 ②酸化 化・硬 ③赤褐色	外面 瓦削り。 内面 撫で。	
24	土師器 坏	+8	□13.1 高4.5 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で、暗文。	
25	土師器 埴	+14	□(14.2) 高(5.4) 丸底 □～割 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸化 化・普通 ③灰褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で。	
26	土師器 鉢	+2	□14.2 高9.2 丸底 □～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 化・軟 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で、暗文。	
27	土師器 坏	+3	□12.9 高4.8 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅微量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で、暗文。	
28	土師器 坏	竈内	□12.6 高4.6 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦瓦削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で、暗文。	
29	土師器 坏	+9	□12.8 高4.5 丸底 □～底 ⅴ	①細・丸雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③赤褐色	内外共磨き。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
30	土師器 環	埋没土	口径12.7 高4.6 丸底 口一底 瓦	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
31	土師器 環	+29	口径10.9 高4.1 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
32	土師器 環	+8	口径12.9 高4.9 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 口縁部横線で、体部撫で後、暗文。	
33	土師器 環	+6	口径13.1 高4.9 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
34	土師器 環	+3	口径13.0 高4.5 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
35	土師器 環	貯蔵穴	口径12.8 高5.0 丸底 ほぼ完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・軟 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 口縁部横線で、体部撫で。	
36	土師器 環	+9	口径12.8 高4.4 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
37	土師器 環	+3	口径12.0 高4.8 丸底 口一底 瓦	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 撫で後、暗文。	
38	土師器 環	+1	口径(13.2) 高5.2 丸底 口一底 瓦	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 口縁部横線で、体部撫で後、暗文。	
39	土師器 環	埋没土	口径14.3 高4.8 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②焼 化・普通 ③明褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底部覆削り。 内面 口縁部横線で、体部撫で。	
40	手短土 器	+15	口一高一底(3.5) 体一底 瓦	①細・黒色紅少量 ②焼 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 縦溝あり。 内面 撫で。	
41	須恵器 高 環	埋没土	口一高一底(13.0) 脚部片	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	口クロ整形(右回転)	
42	須恵器 高 環	埋没土	口一高一底一 脚部片	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③緑灰色	口クロ整形(右回転)	
43	加工石 材	+5	材質 砂岩。長さ14.1cm 幅8.9cm 厚さ4.8cm 加工痕は明確でない。わずかながら、図示のように削り跡がみられる。右端中央に敲打痕か。	重さ800g。加工石材である。表面がわずかに風化するため、加工痕は明確でない。わずかながら、図示のように削り跡がみられる。右端中央に敲打痕か。		
44	凹み石	+8	材質 砂岩。長さ13.2cm 幅9.4cm 厚さ2.7cm 重さ500g。図示のように、表・裏面に、1箇所ずつの凹みがある。用途不明。	重さ500g。図示のように、表・裏面に、1箇所ずつの凹みがある。用途不明。		
45	工作台	+25	材質 砂岩。長さ25.8cm 幅8.6cm 厚さ5.6cm 重さ1.3kg。図示のように、表面に大小5ヶ所の凹みがある。特に、最も右側の凹みは、同心円状に穿たれており、底部は、鋭く尖って、円錐状を呈している。	重さ1.3kg。図示のように、表面に大小5ヶ所の凹みがある。特に、最も右側の凹みは、同心円状に穿たれており、底部は、鋭く尖って、円錐状を呈している。		
46	凹み石	床下埋没土	材質 雲母石英片岩。長さ13.0cm 幅6.0cm 厚さ3.7cm 重さ500g。表面はほぼ中央部に、浅い凹みが1箇所ある。用途不明。	重さ500g。表面はほぼ中央部に、浅い凹みが1箇所ある。用途不明。		

第17号住居跡

位置 4区42C08

写真 PL.20

形状 南西側が一部20号住居に切られている。やや歪んだ方形である。長辺5.60m、短辺5.22m。壁は比較的残りが良好で、壁高18～52cmを測る。

面積 28.62㎡ **方位** N-68°-E

埋没土 5層の褐色土、黒褐色土が塊底型堆積を示しており、徐々に堆積していった様相が窺われる。

床面 確認面から凡そ20～60cmローム層を掘り込み、凹凸のある掘りかた底面上に厚さ10～30cm、暗褐色土やロームの混合土を客土して床面を作っている。床面は平坦で水平になっており、竈前から住居中央にかけては広範囲に踏み固めてできた堅い面が残っていた。床下には長方形の浅い掘り込み(深さ15cm前後)が存在したが、床下土坑ではない。

竈 東壁の中央の位置に黄色粘土と石を用い、壁を

背にして屋内に造り込まれていた。石は扁平で細長い雲母石英片岩で、焚口の両側に差し込まれていた。燃焼部はやや窪んでおり、この奥は斜めに立ち上がって煙道へと続いている。燃焼部は強く焼けており、焼土、炭が多く残っていた。

柱穴 4隅を結ぶ対角線上に4個検出された。柱穴の規模はP₁:50cm×48cm、P₂:48cm×38cm、P₃:70cm×40cm、P₄:66cm×34cm。

貯蔵穴 竈右側の南東隅部に径50cm、深さ72cmの規模の円形のものが検出された。口径が小さく、深さが深いため柱穴状を呈する特異な形態である。埋没土上部からは土器が検出された。

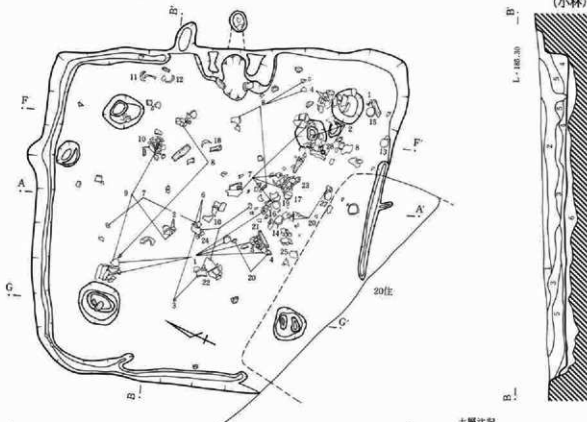
壁周溝 南東隅部は未検出。南西隅部は区域外のため未確認。このほかは幅18～30cm、深さ6～14cmの規模のものが回っていた。

遺物 土師器長甕・小型甕・甌・環、須恵器有蓋片身

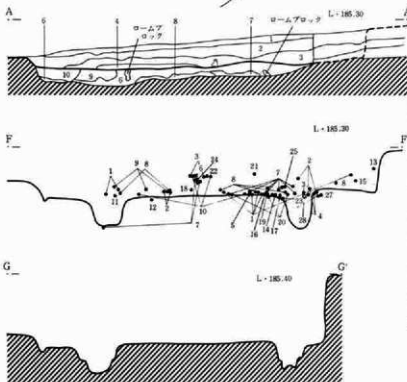
部、瑪瑙製勾玉、滑石製有孔板、用途不明石製品、棒状川原石等が貯蔵穴近辺から住居中央にかけて散在して出土した。出土量は然程多くはないが、完形若し

くは完形に近いものが多いという特色が見られた。
備考 本住居跡は南西隅角部を第20号住居跡に切られていた。住居の年代は6世紀後半とみられる。

(小林)



土層注記

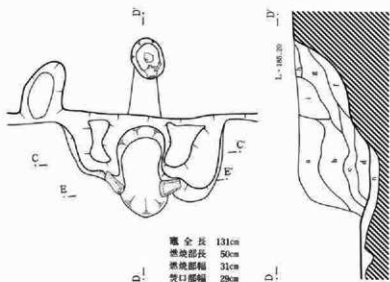


1. 黒褐色土 斑状の褐色土が混入しており、非常に濃いロームの小粒も混入。砂質。
2. 黒褐色土 斑状の褐色土が混入しているが、1に比べてはっきりしている。ロームの小粒も混入。粘性あり。
3. 黒褐色土 斑状の褐色土が混入している。ロームの小粒の混入が、2に比べて多い。粘性あり。
4. 褐色土 砂質。ロームのブロックが多量に混入している。床面に近い。
5. 黒褐色土 3に非常に近いが、ロームの混入物の量が多い。砂質。
6. 暗褐色土 ローム小ブロックを多く混在させた、堅くしまった床材。
7. 明暗褐色土 ローム粒を多く含む粘質土。
8. 明暗褐色土 ローム粒、ブロックを多く含む粘質土。
9. 暗褐色土 黒褐色土を主とするがロームブロックを含み、堅くしまっている。
10. 暗褐色土 9と類するが、ロームブロックの混入度が高い。

0 2m

第59図 第17号住居跡実測図

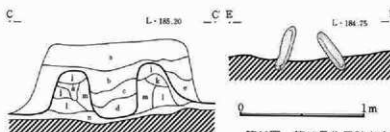
第3章 検出された遺構と遺物



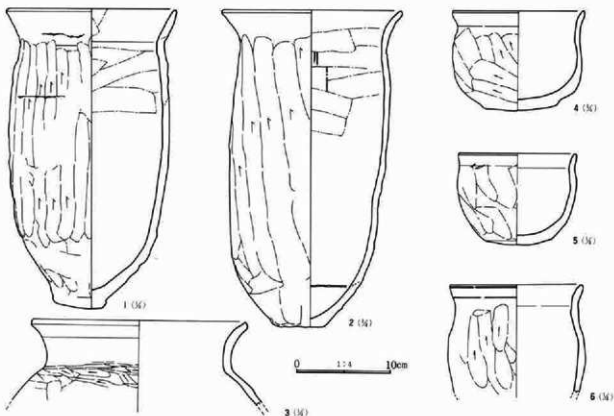
竈全長 131cm
 竈地盤長 50cm
 竈焼部幅 31cm
 焚口部幅 29cm

土層注記

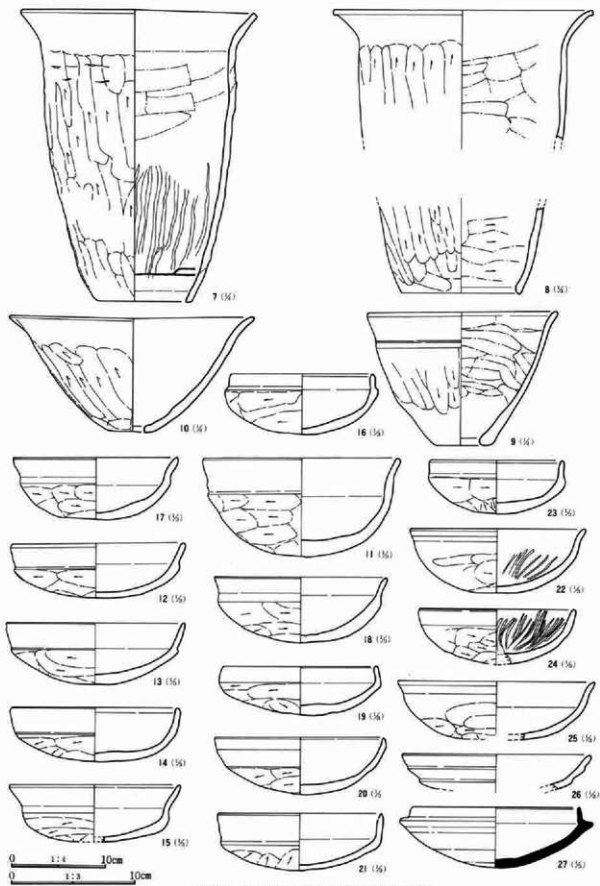
- a. 暗褐色土 焼土粒を若干混入するが、混入物少なく暗い。
- b. 明褐色土 aに類するが、ローム粒を含み、明るい。
- c. 暗赤褐色土 焼土粒を多く混在させる。
- d. 赤褐色土 天井部等の崩落焼土や焼土を主とする。
- e. 明褐色土 ロームブロックをかなり多く含む。
- f. 赤黄褐色土 焼土ブロック粒を多量に含む。黄色ローム粒を主とする。
- g. 明褐色土 fに近いが焼土量が少ない。
- h. 明褐色土 焼土粒を少量含み、地山よりやや赤褐色系。
- i. 黄褐色土 大粒のロームブロックを主とするが、天井部が崩落しているものと思われる。
- j. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む明るくやや粘性をもつしまった土。
- k. 黄褐色土 ロームを主とした粘性土。
- l. 暗黄褐色土 kに近似するが、全体的にやや暗い。
- m. 暗赤褐色土 高熱による焼土化が進み、赤褐色系の土。
- n. 暗褐色土 住居掘りかた(床下)と同一層、ローム小ブロックを多く混在した堅くしまった床材。



第60図 第17号住居跡竈実測図



第61図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第62図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第63図 第17号住居跡出土遺物実測図(3)

第17号住居跡出土遺物観察表 (PL.111、112、113)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長割壺	+11	口径18.2 高31.6 底5.5 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
2	土師器 長割壺	-4	口径19.2 高33.5 底5.3 口～底 残	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
3	土師器 壺	+33	口径22.2 高一底一 口～胴 残	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
4	土師器 小型壺	-1	口径14.1 高10.5 底7.7 口～底 残	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
5	土師器 小型壺	-2	口径12.6 高9.6 底6.7 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
6	土師器 小型壺	+25	口径14.2 高一 底一口～胴 残	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
7	土師器 壺	表直	口径25.2 高30.8 底11.0 口～底 残	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
8	土師器 壺	+2	口径26.9 高(12.5) 口～胴と胴～底 残	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。	
9	土師器 壺	+5	口径20.3 高14.3 底5.9 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捩り。 内面 縦撫で。	
10	土師器 壺	+5	口径26.1 高12.2 底4.3 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部斜め捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
11	土師器 坏	+3	口径15.7 高7.8 丸底 ほぼ完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
12	土師器 坏	+2	口径13.6 高4.2 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
13	土師器 坏	+37	口径14.2 高4.8 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
14	土師器 坏	+3	口径(13.1) 高4.3 丸底 口～底 残	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
15	土師器 坏	+24	口径13.5 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・黒色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
16	土師器 坏	+3	口径11.3 高4.8 丸底 完形	①細・黒色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	
17	土師器 坏	表直	口径13.1 高4.8 丸底 完形	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 縦撫で。	
18	土師器 坏	+13	口径13.8 高5.2 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	黒色の部分あり、 2次の欠火跡か。
19	土師器 坏	+3	口径12.4 高3.8 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦捩り。 内面 口縁部横撫で、体部縦捩り。	

種別	器類 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・器形の技法	備考
20	土師器 環	-1	口径13.5 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で。	
21	土師器 環	+36	口径13.2 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で。	
22	土師器 環	+33	口径14.0 高5.0 丸底 口～底 残	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部削り。 内面 口縁部横撫で、体部削り後、暗文。	
23	土師器 環	+1	口径18.3 高4.2 丸底 口～底 残	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 口縁部横撫で、体部無で。	
24	土師器 環	+30	口径12.5 高(4.3) 丸底 口～底 残	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 撫で後、暗文。	
25	土師器 環	+13	口径15.6 高(4.6) 口～底 残	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部削り。 内面 撫で。	
26	土師器 環	埋没土	口径(14.9) 高一底一 口縁片	①細・黒色紅微量 ②酸化・硬 ③灰黄褐色	外面 口縁部～体部は横撫で、体部は削り。 内面 撫で、体部は削り。	
27	須恵器 環	-1	口径13.4 高4.7 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②還元・普通 ③灰白色	口縁部整形。回転削り調整。	
28	勾玉	床直	材質 瑪瑙。長さ3.3cm 幅1.1cm 厚さ0.8cm	重さ6.9g。穿孔は、両方向より行なう。全面を磨き上げているが、完全ではなく、表面に磨き時の痕が、所々にみられる。形状は、「コ」の字型をしている。		
29	剣形か	埋没土	材質 滑石。長さ3.3cm 幅2.8cm 厚さ0.5cm	重さ4.6g。穿孔は、両方向より行なっている。側面が、かろうじて残存しており、その角度から、剣形と推定した。上・下、側面とも研磨している。錆の表現はない。		
30	工作台	埋没土	材質 砂岩。長さ14.2cm 幅11.1cm 厚さ3.2cm	重さ600g。川原石の利用。図左の下方に写らし様の傷があり、その他、こまかな傷がある。図左の中央に縦打痕状の凹み。主体は、木・皮など。		

第19号住居跡

位置 4区29C04

写真 PL.20

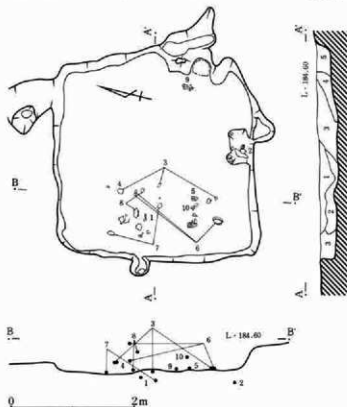
形状 長辺3.40m 短辺3.20mのほぼ正方形を呈する。

面積 10.27㎡

方位 N-82°-E

埋没土 大粒の淡褐色土ブロックを多く混在する黒褐色土、ないしは暗褐色土を主とする。床面近くは色調が明るくなる。

床面 ローム面をそのまま床面とし、強く踏みしめられている。壁高は、20～33cmを測る。



第64図 第19号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

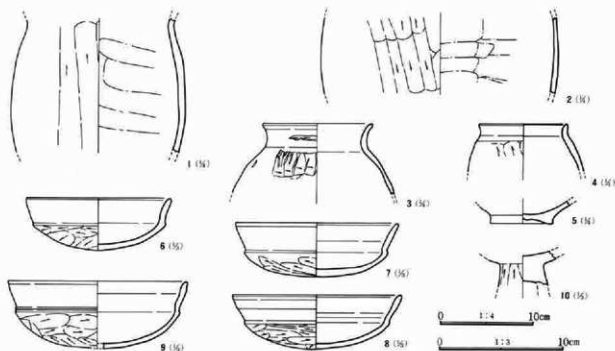
竈 東壁のかなり南に寄った部分に位置し、残存状態は悪く、煙道部は複乱穴により壊されている。焚口部及び燃焼部は平坦で、袖部は燃焼部の部分がわずかに残存するのみであり、暗褐色土により構築され堅くしまっている。

貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 柱穴状の穴が2カ所検出されたが、これらが柱穴かどうかは不明である。

遺物 住居跡の西側に、甕や環の土器片が集中して出土している。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(谷藤)



第65図 第19号住居跡出土遺物実測図

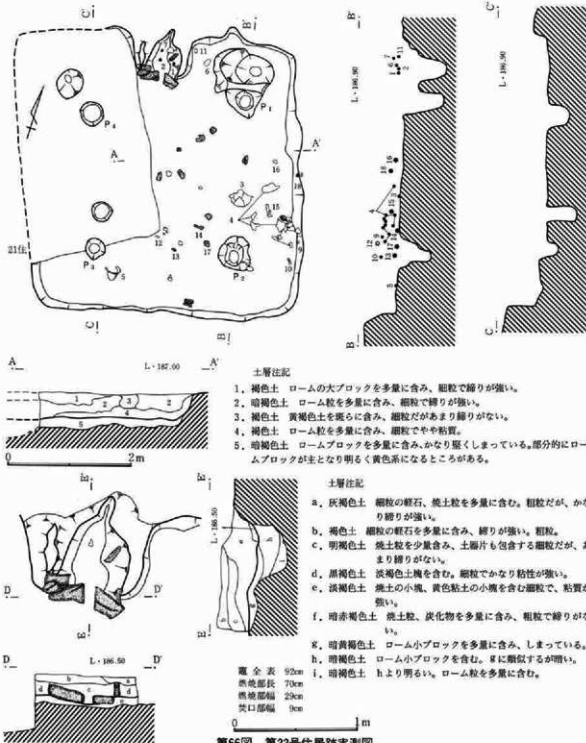
第19号住居跡出土遺物観察表 (PL.113)

図録号	形態・器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	床直	口一 胴(18.6) 底一 胴~胴 ¾	①普通・白色鉱少量 ② 酸化・普通 ③橙色	外面 胴部縦割り。 内面 胴部縦割り。	
2	土師器 甕	-18	口一 胴(25.5) 底一 胴部 ¾	①普通・白色鉱少量 ② 酸化・硬 ③黒褐色	外面 胴部縦割り。 内面 胴部縦割り。	
3	土師器 甕	+2	口11.8 高一 底一 口~胴 ¾	①細・夾層物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横割で、胴部縦割り。 内面 口縁部横割で、胴部縦割り。	
4	土師器 甕	+19	口(9.4) 高一 底一 口~胴 ¾	①細・白色鉱微量 ②酸化 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横割で、胴部縦割り。 内面 口縁部横割で、胴部縦割り。	
5	土師器 甕	+5	口一 高一 底6.7 底部 ¾	①粗・白色鉱少量 ②酸化 化・軟 ③黒褐色	外面 胴部縦割り。 内面 無で。	
6	土師器 環	+1	口11.6 高4.1 丸底 ほぼ丸形	①細・白色鉱微量 ②酸化 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横割で、体部~底部縦割り。 内面 口縁部横割で、体部縦割り。	
7	土師器 環	床直	口12.8 高4.2 丸底 口~底 ¾	①細・赤色鉱少量 ②酸化 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横割で、体部~底部縦割り。 内面 口縁部横割で、体部縦割り。	
8	土師器 環	+2	口13.6 高4.2 丸底 口~底 ¾	①細・白色鉱微量 ②酸化 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横割で、体部~底部縦割り。 内面 口縁部横割で、体部縦割り。	
9	土師器 環	+1	口14.3 高(5.2) 丸底 口~底 ¾	①細・白色鉱微量 ②酸化 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横割で、体部~底部縦割り。 内面 口縁部横割で、体部縦割り。	表面は黒色処理。
10	土師器 高 環	+22	口一 高一 底一 脚部片	①細・白色鉱少量 ②酸化 化・普通 ③橙色	外面 縦割り。	

第22号住居跡

位置 4区21C04 写真 PL.21
 形状 長辺4.48m 短辺4.26mのほぼ正方形を呈する。
 面積 19.66㎡ 方位 N-15°W
 埋没土 大粒のロームブロックを多量に混在する褐色土を主体とする。

色土を主体とする。
 床面 掘りかた面は、重複する第21号住居跡よりもやや浅い位置にあり、ロームブロックと暗褐色土の混在土を客土し、床面は堅くしまっている。
 竈 北壁のほぼ中央に位置し、残存状態は比較的よい。焚口部は平坦であるが、燃焼部は楕円状にくぼ



第66図 第22号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

み、燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がる。焚口部に位置する袖部分は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。燃焼部には支脚が据えられている。袖部はロームを主体とする黄褐色土で構築され堅くしまっている。袖部内壁は、かなり焼土化している。

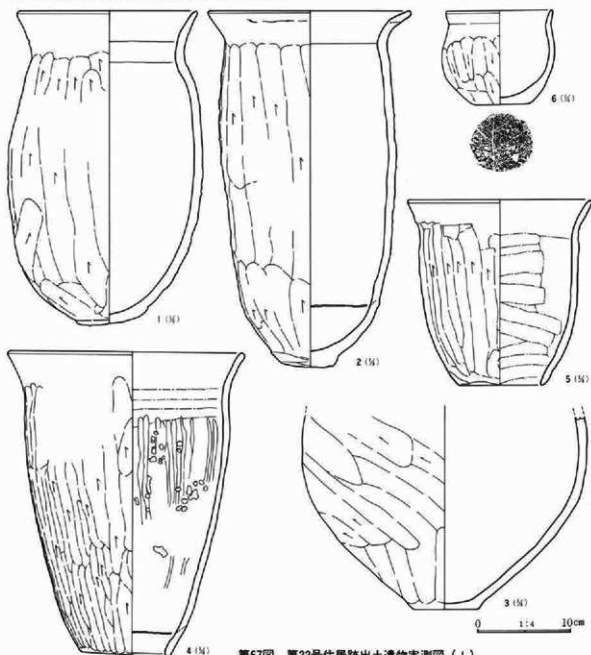
柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴が検出された。

貯蔵穴 竈の右側に位置し、北東の柱穴と接するようにある。長軸が94cm、短軸が80cmとなる不整な楕

円形を呈する。深さは68cmを測る。

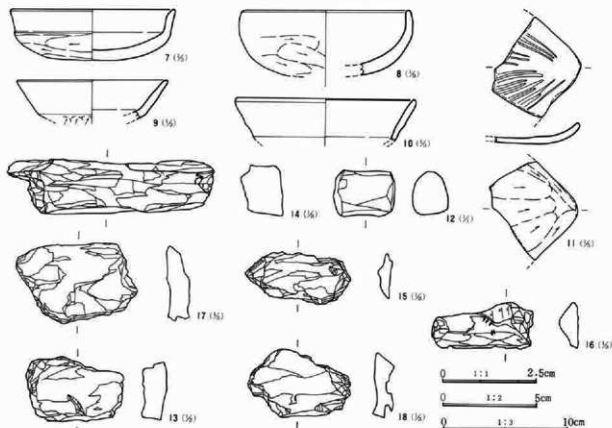
遺物 竈内にかんりの土器が集中して出土した。遺物には大型・小型の甕・甔、坏等があり、その他に滑石による石製品の未成品や石核がある。

備考 本住居跡の西側には、第21号住居跡が重複しており、その新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面、掘りかた面の状況から本住居跡の方が古いものと考えられる。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(谷藤)



第67図 第22号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



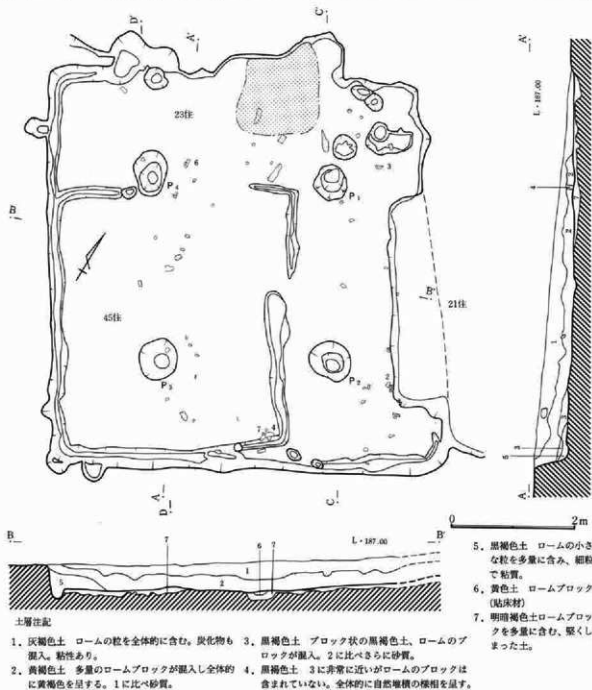
第68図 第22号住居跡出土遺物実測図(2)

第22号住居跡出土遺物観察表 (PL.113, 114)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長頸壺	甕	口径19.3 高さ33.0 底径7.2 口～底 ⅴ	①普通・白色灰土少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、胴部無で。	
2	土師器 長頸壺	甕	口径21.8 高さ37.7 底径6.3 口～底 ⅴ	①普通・灰色土少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、胴部無で。	口縁部に輪状痕あり。
3	土師器 壺	+3	口一高一底(6.8) 胴～底 ⅴ	①普通・白色土少量 ② 酸化・軟 ③鈍い褐色	外面 胴部～底部縦筋削り。 内面 胴部無で。	
4	土師器 壺	+12	口径25.3 高さ32.3 底径11.6 口～底 ⅴ	①細・灰色土少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦筋削り。内面 口 縁部横溝で、胴部上半部縦筋で、下半部磨き。	
5	土師器 壺	-2	口径19.6 高さ19.5 底径9.1 丸形	①細・灰色土少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、胴部無で。	
6	土師器 小型壺	+13	口径11.4 高さ9.9 底径6.2 ほぼ丸形	①細・白色土少量 ②酸 化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、胴部無で。	底部に木腐痕あり。
7	土師器 環	甕内	口径13.0 高さ4.0 丸底 ほぼ丸形	①細・灰色土少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横溝で、体部～底部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、体部無で。	
8	土師器 環	埋没土	口径(8.6) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・白色土少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横溝で、体部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で、体部無で。	
9	土師器 環	+34	口径12.0 高一底一 口～底 ⅴ	①普通・白色土少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横溝で、体部縦筋削り。 内面 口縁部横溝で。	
10	土師器 環	+24	口径14.2 高一底一 口～底 ⅴ	①細・白色土少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横溝で。	
11	土師器 皿	+9	口一高一底一 口～体 ⅴ	①細・白色土少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 寛削り。 内面 珽文あり。	葉状土師。
12	白玉 未成品	+33	材質 滑石。長さ1.6cm 幅1.2cm 厚さ0.9cm 重さ4g。全面、磨りで調整している。形状から、白玉の未成品の可能性がある。			
13	石核	+4	材質 滑石。長さ5.2cm 幅3.4cm 厚さ1.3cm 重さ50g。上面の部は、調査時、同右上が、刺繍をしているが、ほぼ、板状に荒削りされており、また、角が丸味を帯びており、円板か方板を考えた荒削りかと思われる。			

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器物 器形	出土位置	特 徴
14	石核	+4	材質 滑石。長さ16.5cm 幅4.3cm 厚さ3.9cm 重さ350g。若干の湾曲があるものの、ほぼ、方形に荒削りされている。
15	石核	+15	材質 滑石。長さ8.5cm 幅3.6cm 厚さ1.0cm 重さ100g。図右側に、たがね状の傷跡あり。全体に、板状を意図して、荒削りされている。
16	石核	+16	材質 滑石。長さ8.2cm 幅3.8cm 厚さ1.5cm 重さ100g。裏面に、若干の削り跡があり。表面には、板があるがほぼ板状を意図して荒削りされている。
17	石核	+4	材質 滑石。長さ9.1cm 幅6.4cm 厚さ1.7cm 重さ200g。全体に、板状を意図して、荒削りされている。
18	石核	+18	材質 滑石。長さ8.2cm 幅5.4cm 厚さ1.5cm 重さ100g。裏面および図右側に剥離が激しいが、全体に板状を意図して荒削りされている。



第69図 第23号住居跡実測図

第23号住居跡

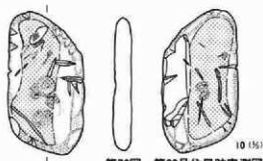
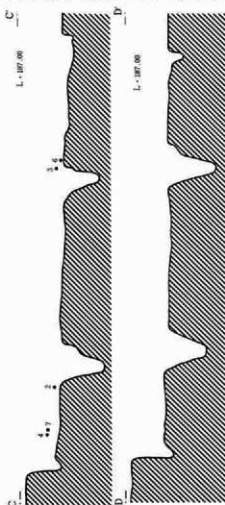
位置 4区25C04 写真 PL.21

形状 長辺6.58m 短辺6.00mのほぼ正方形を呈する。

面積 40.19㎡ 方位 N-23°-W

埋没土 混入物の少ない粘質な暗褐色土ないしは黒褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを主とした黄褐色土を掘りかた面に客土し、床面はかなりよく堅くしまっている。



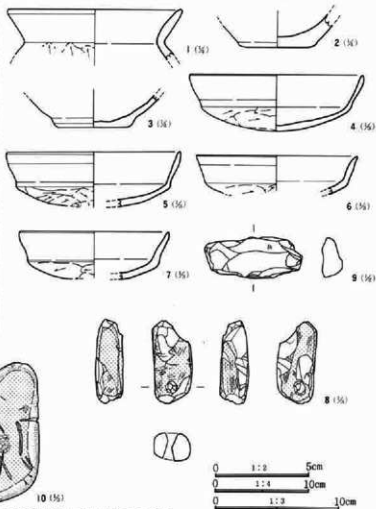
第70図 第23号住居跡実測図及び出土遺物実測図

竈 北壁のやや東寄りに位置するが、耕作による攪乱で残存状態はかなり悪い。焚口部では平坦で、燃焼部がやや窪鉢状にくぼむ。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴を確認。壁周溝 西・南の壁際に検出された。

遺物 量的には少なく、壺・杯の破片や、砥石・滑石製の剣形未成品等が出土している。

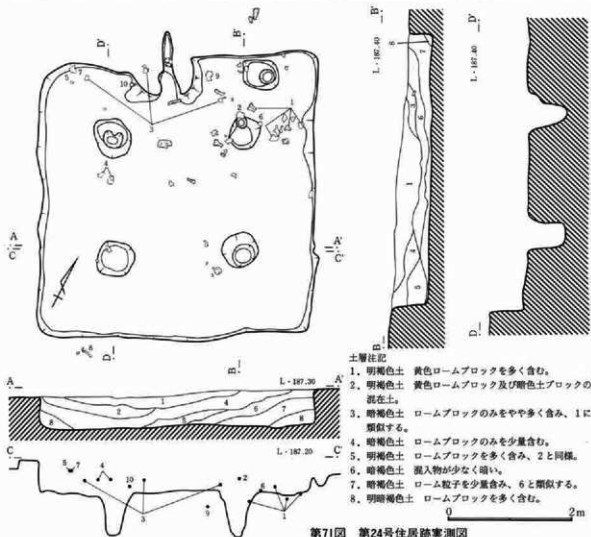
備考 東側に第21号住居跡、西側に第45号住居跡が重複している。これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面・掘りかた面の状態から、第21号住居跡よりも古い。また第45号住居跡との関係では、両住居が西・南壁を共用していることや、掘りかた面の観察で第45号住居跡の床面の中央部を残しそのまま使用していること等から、本住居跡は第45号住居跡を北・東方向へ拡張したものと考えられる。本住居跡の年代観は出土遺物より7世紀前半。(谷藤)



第3章 検出された遺構と遺物

第23号住居跡出土遺物観察表 (PL.113, 114)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	埋没土	口(18.6) 高一底一 口縁部片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	内外共口縁部横線で、外面 胴部削り。	
2	土師器 壺	+14	口一高一底8.2 底部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	外面 胴部削り。 内面 胴部削り。	
3	土師器 壺	+13	口一高一底8.6 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・軟 ③鈍い赤褐色	外面 胴部下下部削り？。	
4	土師器 環	+21	口(13.7) 高4.4 丸底 □〜底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 □縁部横線で、体部〜底部削り。 内面 □縁部横線で、体部削り。	
5	土師器 環	埋没土	口(14.0) 高4.3 (丸底) □〜底 片	①細・赤色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 □縁部横線で、体部〜底部削り。 内面 □縁部横線で、体部削り。	
6	土師器 環	+5	口(12.7) 高一 (丸底) □〜体 片	①細・灰雑物なし ②酸 化・普通 ③橙色	外面 □縁部横線で、体部削り。 内面 □縁部横線で、体部削り。	
7	土師器 環	+22	口(12.0) 高一 (丸底) □〜底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 □縁部横線で、体部〜底部削り。 内面 □縁部横線で、体部削り。	
8	砥石	埋没土	材質 泥岩。長さ6.4cm 幅3.1cm 厚さ2.2cm	重さ500g。下底。図奥の折れ口を除き、全面が加工・使用面である。穿孔は、表裏の2方向から。研磨跡は少なく、下底としての使用は浅い。主体は金属。		
9	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ5.2cm 幅2.2cm 厚さ1.1cm	重さ580g。表面一部分に若干の削り跡あり。全体の形状が鋸形に近いことから、鋸形の未成品の可能性がある。		
10	砥石	埋没土	材質 砂岩。長さ11.6cm 幅6.3cm 厚さ1.5cm	重さ100g。川原石の利用。図の左右に刃傷(金属)あり。表裏に敲打痕あり。側面については、未使用に近い。		



第71図 第24号住居跡実測図

第24号住居跡

位置 4区25C09 写真 PL.22

形状 長辺4.52m 短辺4.34mのほぼ正方形を呈する。

面積 19.33㎡ 方位 N-32°-W

埋没土 ロームブロックを少量ないしは少量混在させる明褐色・暗褐色土を主に堆積する。

床面 床面は、重複する第25・34号住居跡よりもやや深い位置にあり、掘りかた面にロームブロックと暗褐色土の混在土を客土し、床面はよく踏みしめられかなり堅くしまっている。

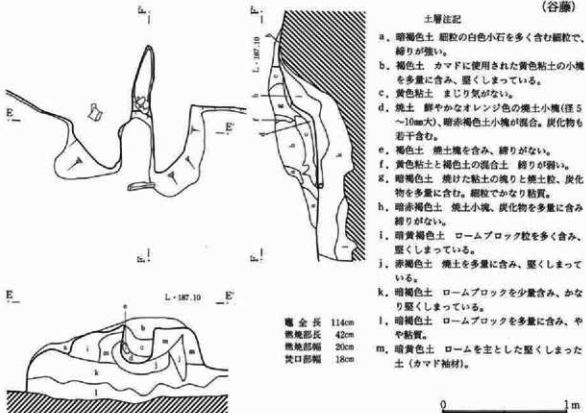
竈 北壁のやや西寄りに位置し、焚口部から燃焼部にかけては平坦で、煙道部は段をもちながらも緩やかに立ち上がる。袖部はロームを主とした暗黄色土を用い、堅くしまっている。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の比較的大型の主柱穴が検出された。

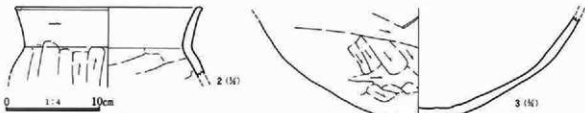
貯蔵穴 竈の右側で東壁との中間に位置し、54cm×44cmの長方形を呈しており、深さは24cmを測る。

遺物 竈内及び住居の東側に、壺・坏の破片が少量出土している。

備考 本住居跡の南に第34号住居跡、北東に第25号住居跡が重複しており、その新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面ないし掘りかた面の状態から、いずれの住居跡よりも本住居跡の方が新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半とした。(谷藤)

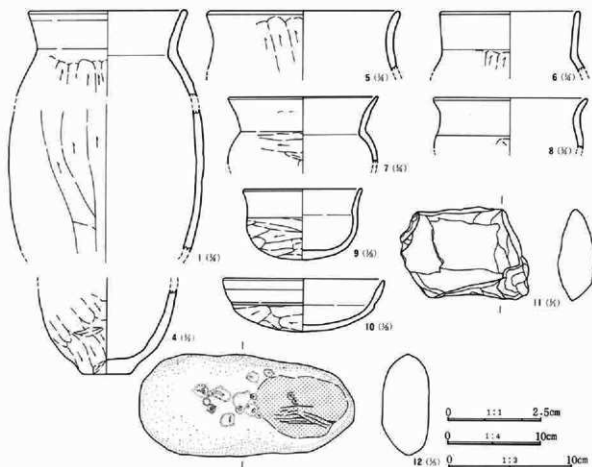


第72図 第24号住居跡竈実測図



第73図 第24号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第74図 第24号住居跡出土遺物実測図(2)

第24号住居跡出土遺物観察表 (PL.113, 114)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	-13	□(17.0) 高一底一 口~胴 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。	2次的な火跡。25 住からの流入
2	土師器 壺	+22	□(20.0) 高一底一 口~胴 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 □縁部横撫で、底部縦篋削り。	25住からの流入 か。
3	土師器 壺	+19	□一高一底(9.0) 胴~底 ⅔	①粗・白色灰微量 ②酸 化・硬 ③褐色	外面 胴部斜の篋削り。 内面 胴部横撫で。	
4	土師器 壺	+28	□一高一底5.0 胴~底 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 胴部斜の篋削り。 内面 胴部横撫で。	
5	土師器 壺	+38	□(20.2) 高一底一 口~胴 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部縦篋削り。 内面 □縁部横撫で。	
6	土師器 壺	+6	□(17.3) 高一底一 口縁部片	①粗・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 □縁部・胴部横撫で。	
7	土師器 壺	+38	□(16.0) 高一底一 口~胴 ⅔	①粗・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 □縁部・胴部横撫で。	
8	土師器 壺	住居外	□(16.4) 高一底一 口縁部片	①粗・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③暗赤褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 □縁部横撫で。	
9	土師器 鉢	-14	□(6.7) 高(5.4) 丸底 口~底 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 □縁部横撫で、底部縦篋削り。 内面 □縁部・底部横撫で。	
10	土師器 杯	-7	□(12.8) 高4.2 丸底 口~底 ⅔	①粗・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横撫で、底部縦篋削り。 内面 □縁部横撫で、底部横撫で。	
11	チップ	埋戻土	材質 滑石。長さ3.3cm 幅2.3cm 厚さ0.9cm	重さ9g。板状に瓦割りされており、円板・方板を煎煮した束成品の可能性がある。		
12	砥石	住居外	材質 滑石製灰岩。長さ17.2cm 幅7.9cm 厚さ3.7cm	重さ810g。川原石の利用。固平面の破線内に、研磨面あり。研磨面は、硬質の夾石類が凸出し、主体は、木・皮などか、傷は、刃ならし傷。		

第25号住居跡

位置 4区24C09

写真 PL.22

形状 長辺5.02m 短辺4.28mの長方形と思われる。

面積 21.57㎡(推定) 方位 N-58°-E

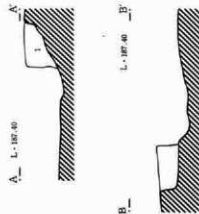
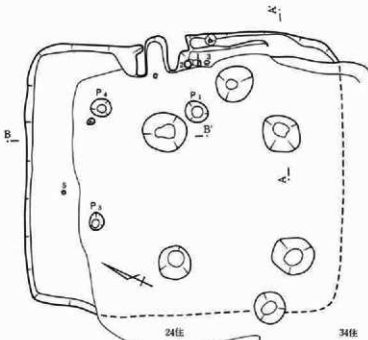
埋没土 ロームブロックを少量混在する黒褐色土を主に堆積する。

床面 ローム面ブロックを少量含む暗褐色土を客土

して床面とし、堅く踏みしめられている。

竪 東壁のほぼ中央に位置し、焚口部は第24号住居跡によって壊されている。燃焼部はやや窪み状にくぼみ、中央に支脚を据えている。袖部はロームによって構築され、堅くしまっている。

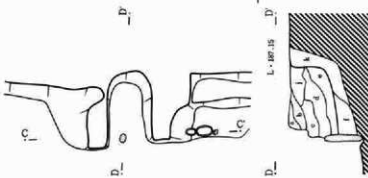
柱穴 第24号住居跡の掘りかた面で、本住居に伴うと考えられる3本の柱穴が検出されたが、本来住居外形の対角線上に、4本の支柱穴があったと思われる。



土層注記

1. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。細粒、粘質。

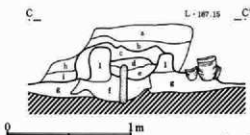
0 2m



土層注記

- a. 黒色土 ロームブロックを少量含む。細粒で中粘質。
- b. 黒褐色土 ロームの小ブロックを少量含む。
- c. ローム 袖、天井部を構成。細粒。
- d. 焼土とロームの混合土。
- e. 焼土
- f. 黒色土 径1~2cm大のロームブロックを少量含む。細粒。粘質が強い。
- g. ロームと黒色土の混合土
- h. 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- i. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。細粒粘質。
- j. 暗赤褐色土 多量の焼土、炭化物、少量のローム小塊を含む。
- k. 褐色土 細粒で堅くしまっている。黒褐色土のブロックも若干含む。
- l. 袖

竪全長 50cm
 焼土部長 50cm
 燃焼部幅 25cm
 焚口部幅 25cm



第75図 第25号住居跡実測図

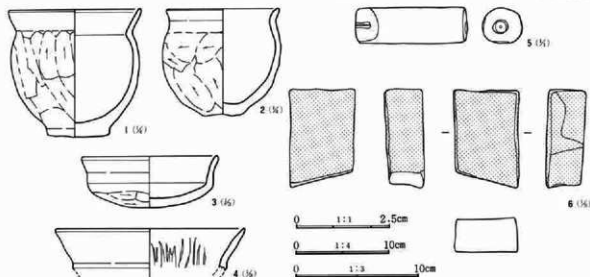
第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 竈の右側に、径が55cm前後の円形を呈する穴を確認した。

遺物 竈の右側に小型の甕や坏が、また碧玉製管玉等の石製品が出土している。

備考 本住居は東・北側の一部を残すのみで、住居

の大半を第24号住居跡と重複している。この新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態、さらには本住居の竈が第24号住居跡の東壁によって壊されていることなどから、本住居跡の方が古い。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(谷藤)



第76図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 (PL.114)

図号	器種 器形	出土位置 残存状態	口径 高さ 底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 小型甕	+2	□14.0 高13.4 底6.3 ほぼ丸形	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦削り。 内面 口縁部横撫で、胴部削で。	
2	土師器 小型甕	+3	□12.2 高11.3 底3.6 ほぼ丸形	①普通・白色黒色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦削り。 内面 縦削で。	
3	土師器 坏	床直	□11.0 高4.0 丸底 □~底 丸	①細・夾雑物なし ②酸化 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦削り。 内面 口縁部横撫で、体部削で。	
4	土師器 坏	床直	□(15.0) 高一 底一 口縁部片	①細・白色紅微量 化・普通 ②褐色	内外共口縁部横撫で。	内面に暗文あり。
5	管玉	床下~20	材質 碧岩。長さ3.0cm 幅0.9cm 厚さ1.1cm 孔径0.35cm 重さ6.1g。表面は、非常に精緻に研磨されている。穿孔は、両側から一方方向。左側の欠損部分は、穿孔時に割れたものと思われる。比較的大よりの管玉。			
6	磁石	埋没土	材質 粗粒安山岩。長さ7.7cm 幅5.0cm 厚さ2.7cm 重さ200g。定形型の磁石で、図左下の右側旧時穴でやや風化摩耗。使用面は、小口を除き、4面。小口面は、成品化後、未使用に近い。主体は金属。			

第27号住居跡

位置 4区19C14 **写真** PL.22, 23

形状 長辺4.10m 短辺4.00mのほぼ正方形を呈するものと考えられる。

面積 17.10m² **方位** N-52°-E

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土を主とする。

床面 ロームブロックを主とした黄褐色土を掘りかた面に客土し、床面はかなりよく堅くしまっている。

竈 東壁のほぼ中央に位置し、残存状態はかなり良好である。竈前には黒灰層があり、焚口から燃焼

部にかけてやや揺鉢状にくぼみ、燃焼部から煙道部にかけては緩やかに立ち上がり、煙道の口が、住居東壁の外側40cmほどのところに開口する。焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部はロームを主に構築し、煙道はローム層を掘り抜いたものと考えられる。なお、袖部内壁はかなり焼土化している。

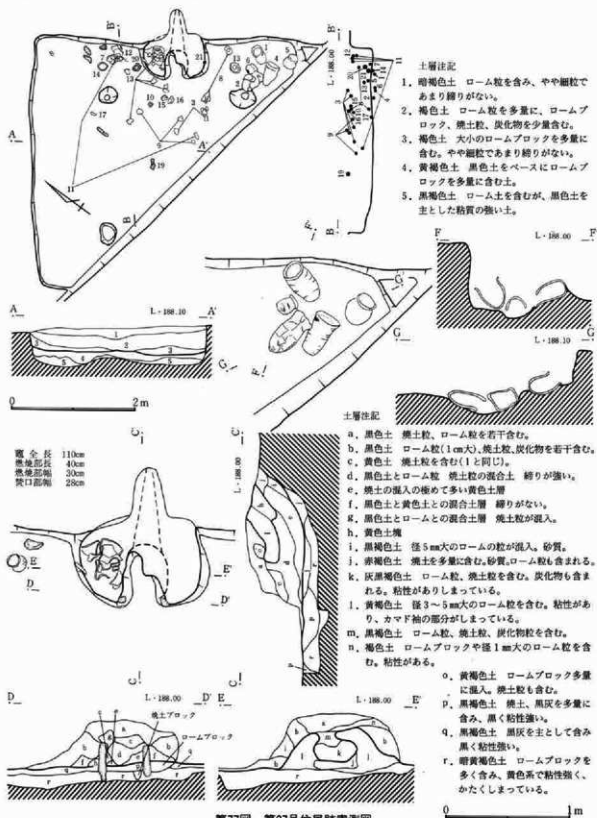
柱穴 本住居の南半分が調査区外のため、3カ所だけ検出されたが、本来は住居外形の対角線上に、4本の主柱穴があると考えられる。

貯蔵穴 竈の右側に位置し、溜鉢状にくぼむ。

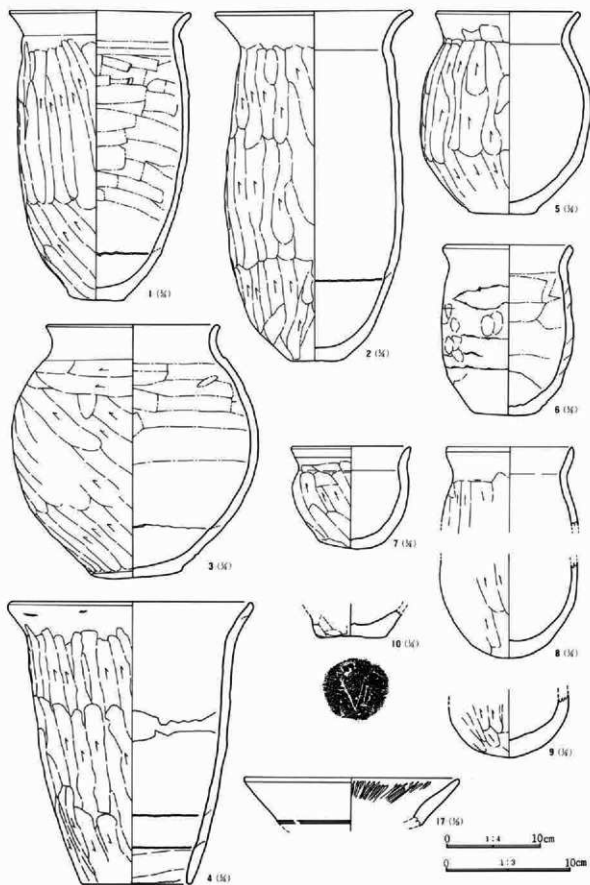
遺物 貯蔵穴を含め竈の周辺から大型・小型の甕や
 甔、坏が多く出土し、また滑石製模造品の未成品等

もある。特に貯蔵穴部分には、甕や甔の完形品が多い。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀前半
 としたい。(谷藤)



第77図 第27号住居跡実測図



第78図 第27号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



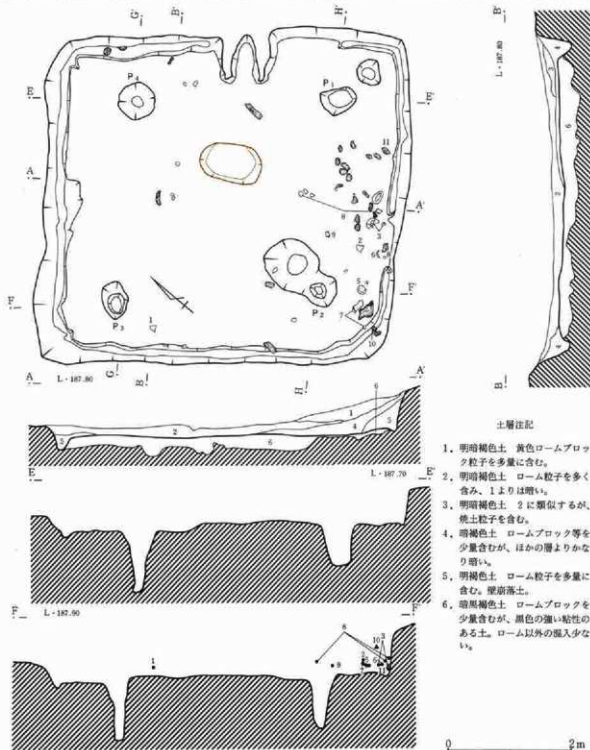
第79図 第27号住居跡出土遺物実測図(2)

第27号住居跡出土遺物観察表 (PL.114、115、116)

図番号	図種	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴壺	-17	口径19.4 高30.7 底5.8 完形	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部上半・中央部縦 寬削り、下半部斜め寬削り。内面 胴部底撫で。	
2	土師器 長胴壺	-16	口径21.2 高37.1 底5.4 ほぼ完形	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦寬削り。 内面 胴部底撫で。	輪痕あり。
3	土師器 甕	竈左袖	口径18.4 高36.7 底9.7 口〜底 ½	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部上半部横削り り、中央・下半部斜め寬削り。内面 胴部底撫で。	輪痕あり。
4	土師器 甕	-20	口径26.1 高39.7 底11.6 完形	①細・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦寬削り。 内面 口縁部横撫で、胴部底撫で。	輪痕あり。
5	土師器 小型壺	-6	口径15.4 高21.4 底7.4 完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦寬削り。 内面 口縁部横撫で、胴部底撫で。	
6	土師器 小型壺	-19	口径15.9 高18.0 底6.5 完形	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部指頭圧痕。 内面 口縁部横撫で、胴部底撫で。	輪痕あり。
7	土師器 小型壺	+4	口径12.6 高10.7 底7.0 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部底撫で。 内面 口縁部横撫で、胴部底撫で。	
8	土師器 小型壺	-3	口径(13.6) 高一 丸底 口〜胴と胴〜底 ½	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦寬削り。 内面 口縁部横撫で、胴部底撫で。	
9	土師器 甕	+24	口一高一 丸底 底部片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部縦寬削り。 内面 胴部底撫で。	
10	手掘土 器	+27	口一高一 底5.3 底部 ¾	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③灰青褐色	外面 指頭圧痕。	底部に木炭痕あり。
11	土師器 環	+12	口径(14.0) 高(5.3) 丸底 口〜底ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。	
12	土師器 環	+22	口径12.0 高4.5 丸底 口〜底 ¾	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。	
13	土師器 環	+6	口径13.2 高5.0 丸底 口〜底 ¾	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。	
14	土師器 環	+1	口径12.8 高4.2 丸底 完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。暗文。	
15	土師器 環	+30	口径12.2 高4.4 丸底 口〜底 ¾	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。	
16	土師器 環	+34	口径(14.0) 高(5.0) 丸底 口〜底 ¾	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部〜底部寬削り。 内面 口縁部横撫で、体部底撫で。	
17	土師器 高 環	+1	口径(17.2) 高一 底一 口縁部片	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。 内面 暗文あり。	

第3章 検出された遺構と遺物

図明	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
18	直造器 壺	埋没土	胴部片 (縦9.5 横6.5)	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③黄灰色	外面 斜め格子叩き。 内面 青濁波叩き。	
19	砥石	+37	材質 砂岩。長さ10.1cm 幅6.1cm 厚さ2.0cm 大きな傷は、調査時。砂岩 粒状は、やや細か。	重さ180g。川原石の利用。表面・側部、小口面使用。図石の大きな傷は、調査時。砂岩 粒状は、やや細か。	研磨主体は、尖稜の凸出がなく、金属。	
20	石核	竈左袖 直上	材質 滑石。長さ9.2cm 幅1.7cm 厚さ1.0cm	重さ29g。図上側面に、刀子かたがね状工具による削り跡あり。全体に長方形を認識した荒削りをしている。その他に、もう一片、滑石のチップが竈右袖直上より出土している。(21)		



第80図 第28号住居跡実測図(1)

第28号住居跡

位置 4区18C10 写真 PL.23

形状 長辺5.74m 短辺5.22mのほぼ正方形を呈する。

面積 29.67㎡ 方位 N-52°E

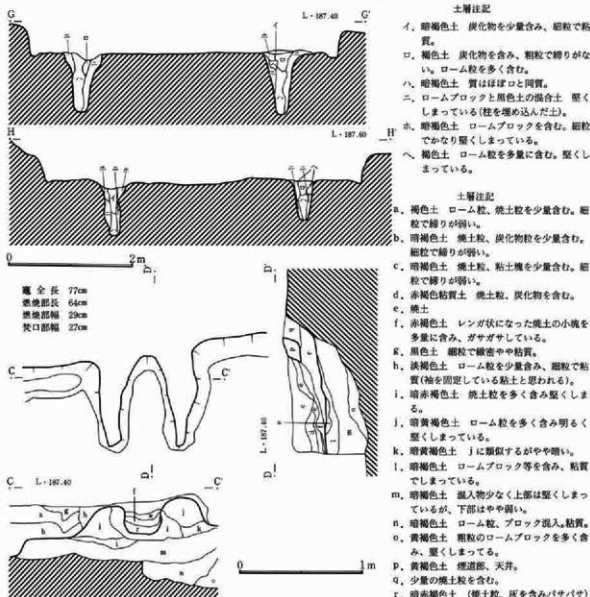
埋没土 ローム粒を多量に混在させた明るい暗褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを少量含む粘性の強い暗黒褐色土を掘りかた面に客土し、床面が比較的堅くしまっている。掘りかた面は、かなり凹凸のあるでこぼこした面となる。なお住居中央部には、床下土坑と思われるものが1カ所検出された。

竈 東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は比較的良好だった。竈前には黒灰層があり、焚口部から燃焼部にかけてやや漏斗状にくぼみ、燃焼部から煙道部にかけては緩やかに立ち上がり、煙道の口が、住居東壁の外側に開口する。袖部はロームを主に構築し堅くしまっている。なお、袖部内壁はかなり焼土化している。

柱穴 住居外形の対角線上に5カ所検出されたが、このうちの4本が本住居跡の主柱穴になると考えられる。

貯蔵穴 竈の右側で南東角に、柱穴状の比較的小さな穴が検出された。



第3章 検出された遺構と遺物

壁周溝 東側電部分を除く4方向の壁際に、20cm前後の幅をもつ溝が巡る。

遺物 住居の南側に、甕・坏・砥石等の遺物が出

した。さらに南壁際にこも銅石が集中して出土した。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半とした。 (谷藤)



第62図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表 (PL.116)

図号	器種・形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 小型甕	+12	口(15.2)高一底一 口縁部片	①普通・白色紅微量 ②酸化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部横線で、頸部縦筋削り。 内面 口縁部横線で、頸部無で。	
2	土師器 甕	+21	口一高一底一 胴部片	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部無で。	
3	土師器 坏	+7	口12.3 高4.9 丸底 ほぼ完形	①普通・白色紅微量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横線で、体部へ底面削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	
4	土師器 埋没土 高坏		口(13.1)高一底一 口へ坏部片	①普通・白色紅微量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、坏部削り。 内面 口縁部横線で、坏部無で後、暗文。	
5	須恵器 坏身	+14	口13.6 高3.5 丸底 口へ底片	①普通・白色紅少量 還元・硬 ③灰色	口クロ整形。回転削り調整。	
6	須恵器 坏身	+13	口(12.8)高一底一 口へ底片	①普通・白色紅少量 還元・硬 ③灰色	口クロ整形。回転削り調整。	
7	須恵器 坏蓋	+15	口(13.2) 高5.0 天井部へ口縁片	①普通・白色紅少量 還元・硬 ③灰色	口クロ整形。回転削り調整。	
8	須恵器 坏蓋	+13	口(14.6) 高(4.3) 天井部へ口縁片	①普通・白色紅少量 還元・硬 ③灰色	口クロ整形後、天井部削り。	
9	須恵器 坏蓋	+11	口(13.2) 高4.6 天井部へ口縁片	①普通・白色紅少量 還元・硬 ③灰色	口クロ整形。回転削り調整。	

図号	器形	出土位置	特	徴
10	砥石	+43	材質 流紋岩(砥石)。長さ11.5cm 幅7.5cm 厚さ4.6cm 重さ600g。図左側の小口は、旧時欠損。右側は、原石面。図中の傷の大半は、万ならし・金属傷。図左平面の中央は、凹み。小形の研磨主体。主体は金属。	
11	こもあみ石	+5	材質 雲母石英片岩。長さ11.8 幅7.8 厚さ3.5 重さ500g。住居南側の遺跡に16個集中して出土したうちの1つ。他の石も、ほぼ同様の重量を示し、同じ意図のもとに使用された可能性があることから、こもあみ石とした。	

第31号住居跡

位置 4区19C03 写真 PL.24

形状 一辺が4.10mほどの正方形と思われる。

面積 16.41㎡ 方位 N-59°-E

埋没土 混入物の少ない暗褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを混在する暗褐色土を掘りかた面に客土し、床面はよく踏みしめられ堅くしまっている。また住居中央には、長軸1.8m、短軸1.3mほどの楕円形を呈する床下土坑が検出された。

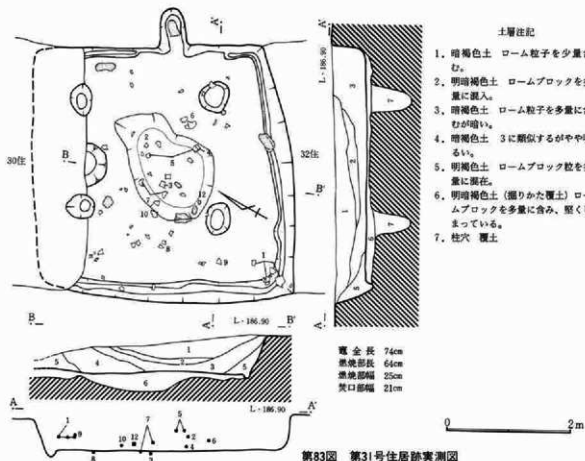
竈 北壁のほぼ中央部に位置しているが、その大半が第30号住居跡に壊されており、残存するのは楕円状にくぼむ焚口部だけである。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴が検出された。

壁周溝 北壁の第30号住居跡と重複する部分は不明であるが、東壁の一部を除く壁際に、20cmほどの幅をもつ溝が巡る。

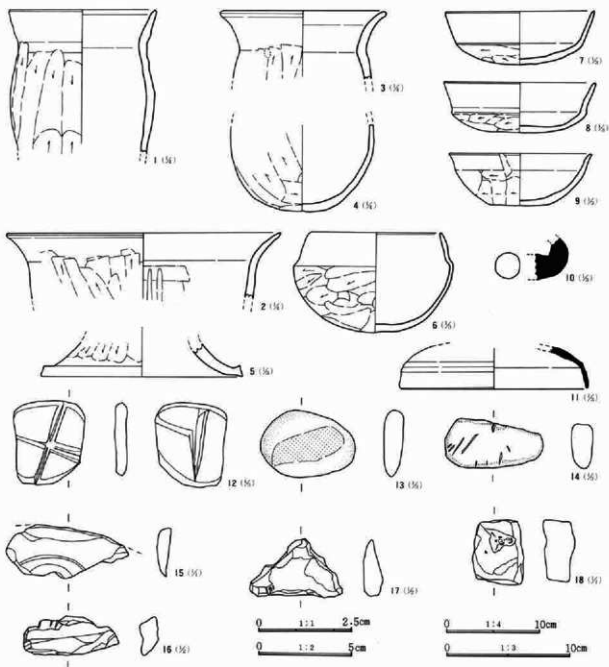
遺物 住居の中央に、壺・坏の破片や砥石・滑石製品の未成品等が出土している。

備考 本住居跡の北側に第30号住居跡が、南側に第32号住居跡が重複しており、その新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態、さらに本住居跡の竈が第30号住居跡に壊されていることなどから、本住居跡は第30号住居跡よりも旧く、第32号住居跡よりも新しい。また東壁にある出張りが、周溝等の状況から、北に位置する竈に先行する竈の残存部であると考えられる。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第83図 第31号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

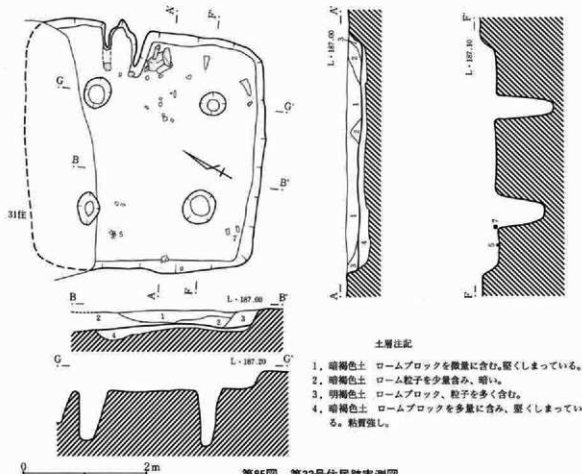


第84図 第31号住居跡出土遺物実測図

第31号住居跡出土遺物観察表 (PL.116、117)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	+23	□(15.8) 高一底一 □~割 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦削り。 内面 □縁部横撫で、胴部縦削り。	
2	土師器 壺	+23	□(29.4) 高一底一 □縁部片	①細・白色灰少量 ②酸化 化・普通 ③鈍い褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦削り。 内面 □縁部横撫で、胴部縦削り・磨き。	
3	土師器 壺	+3	□(17.6) 高一底一 □~割 片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	外面 □縁部横撫で、胴部縦削り。 内面 □縁部横撫で、胴部縦削り。	外面胴部に市面 圧痕あり。
4	土師器 壺	+13	□~高一 丸底 割~底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 胴部縦削り。 内面 胴部縦削り。	
5	土師器 高 杯	+38	楕(16.2) 裾部片	①細・白色灰少量 ②酸化 化・硬 ③明赤褐色	外面 胴部縦削り、横部横撫で。 内面 横撫で。	

図号	遺物 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
6	土師器 坏	+25	口径10.3 高7.8 丸底 口～底 片	①胎・白色紅少量 化・硬 ③灰褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
7	土師器 坏	-1	口径12.0 高4.2 丸底 完形	①胎・白色紅少量 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部～底部磨削り。 内面 撫で。	
8	土師器 坏	+3	口径(12.2) 高3.9 口～底 片	①胎・黒色紅少量 ②酸化・普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部～底部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
9	土師器 坏	+29	口径(11.4) 高(4.1) 丸底 口～底 片	①胎・白色紅少量 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部磨削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
10	須恵器 提 瓶	-11	把手部片	①胎・白色紅少量 ②還元・硬 ③オリーブ黒色	自然釉。	
11	須恵器 坏 蓋	埋没土	口径(15.0) 高一 体～口 片	①胎・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰褐色	ロクロ整形。	
12	磁 石	+18	材質 砂岩。長さ6.6cm 幅5.7cm 厚さ0.9cm と上方側部にも使用面あり。石材の粒状は広い。		重さ51g。川原石の利用。表裏に、ならし痕あり。図左の左側部と上方側部にも使用面あり。石材の粒状は広い。	
13	磁 石	埋没土	材質 砂岩。長さ7.5cm 幅5.2cm 厚さ5.6cm 重さ70g。川原石の利用。図平面の縦線面に研磨面あり。使用が 浅いため、主体が、金属・石・木・皮などのいずれか不明。		重さ70g。川原石の利用。図平面の縦線面に研磨面あり。使用が浅いため、主体が、金属・石・木・皮などのいずれか不明。	
14	磁 石	埋没土	材質 砂岩。長さ7.8cm 幅3.8cm 厚さ1.7cm 重さ57g。川原石の利用。図平面のみ、使用が認められるが、風 化のため、明確でない。ならし痕あり。主体は、夾雑物が色出しているため、木・皮などか。		重さ57g。川原石の利用。図平面のみ、使用が認められるが、風化のため、明確でない。ならし痕あり。主体は、夾雑物が色出しているため、木・皮などか。	
15	刺 形 刺 片	埋没土	材質 滑石。長さ3.3cm 幅1.3cm 厚さ0.3cm 重さ2g。図表面及び上部側面は、刃物によって、整形されている。 上部側面のカーブが、紡錘車や有孔円板のそれよりも緩やかであるため、刺形とした。		重さ2g。図表面及び上部側面は、刃物によって、整形されている。上部側面のカーブが、紡錘車や有孔円板のそれよりも緩やかであるため、刺形とした。	
16	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ5.1 幅2.0 厚さ0.9 重さ12.6g。図上部に2カ所、たがね状工具によるとみられる傷跡あり。 形状から、刺形を意識しているか？		重さ12.6g。図上部に2カ所、たがね状工具によるとみられる傷跡あり。形状から、刺形を意識しているか？	
17	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ5.0cm 幅2.9cm 厚さ1.3cm 重さ14.5g。ところどころに、若干の削り跡あり。三角形の形状 から、刺形を意識しているか？		重さ14.5g。ところどころに、若干の削り跡あり。三角形の形状から、刺形を意識しているか？	
18	未成品	埋没土	材質 滑石。長さ1.7cm 幅1.3cm 厚さ1.2cm 重さ3.4g。穿孔しようとした跡あり。右側を除く3側面は、研磨 されている。		重さ3.4g。穿孔しようとした跡あり。右側を除く3側面は、研磨されている。	



第85図 第32号住居跡実測図

第32号住居跡

位置 4区18C05 写真 PL.24

形状 一辺が3.70mほどの正方形と思われる。

面積 13.69㎡ 方位 N-60°-E

埋没土 混入物の少ない堅くしまった暗褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを多量に混在する粘質な暗褐色土を掘りかた面に客土し、床面は踏みしめられ堅くしまっている。壁高は、17~25cmを測る。

竈 東壁のやや北寄りに位置し、残存状態は比較的良好であった。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がる。焚口部に位置する袖部分は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部の下部には、粘性の強い黒褐色土が用いられ、上部には黄色ローム土を用いて

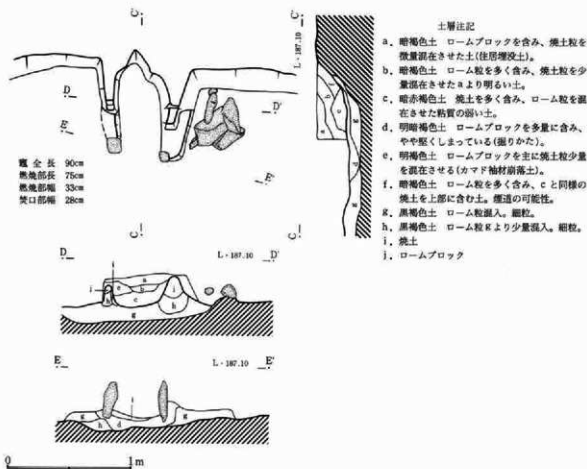
構築され堅くしまっている。なお、袖部内壁は、かなり焼土化している。左袖部は、袖石との間が一部壊されていた。支脚は、取り除かれていた。

貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の支柱穴が検出された。

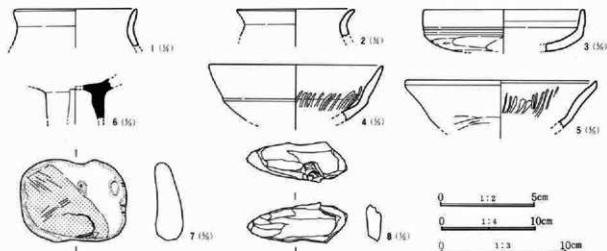
遺物 竈に使用された石が、竈の右側にまとまって出土している。また出土した遺物は少なく、埋没土中より壺・杯・高杯の破片や、滑石製品の剣形未成品等がある。

備考 本住居跡の北側には第31号住居跡が重複しており、その新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態から、本住居跡の方が古い。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(谷藤)



第86図 第32号住居跡竈実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第87図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表 (PL.117)

番号	遺物 器形	出土位置	口径 高さ 残條 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土器器 小型壺	埋没土	口(13.0) 高一 口縁部片 欠	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横無で、	
2	土器器 小型壺	埋没土	口(12.6) 口縁部片	①普通・赤色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横無で、 内面 口縁部無で、	
3	土器器 土師 環	埋没土	口(13.0) 高一 底一 口~体 欠	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横無で、体部窪削り。 内面 口縁部横無で、体部無で、	
4	土器器 環	埋没土	口(14.0) 高一 底一 口~底 欠	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横無で、 内面 略文。	
5	土器器 環	+5	口(15.2) 高一 口縁~体 欠	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横無で、体部窪削り。 内面 口縁部横無で、略文。	
6	須恵器 高 杯	埋没土	口一 高一 底一 胴部片	①細・白色紅微量 ①澄 元・硬 ③オリブ灰色	ロクロ整形(石回転)。選しあり。	
7	砥石	+1	材質 砂岩。長さ8.3cm 幅6.5cm 厚さ2.0cm 重さ150g。川原石の利用。図平面の上方に割込があり表裏に使用痕あり。主体は、硬質の箇所が凸出しているため、木・皮。顯著な凹みは、金属か。			
8	未成品	埋没土	材質 燧石。長さ5.0cm 幅2.1cm 厚さ0.7cm 重さ12g。形状から、鋸形を意圖して製作された未成品の可能性が高い。右図上部に、U字状の刃物の削り跡が残る。			

第33号住居跡

位置 4区20C01

写真 PL.24

形状 一辺が4.60mの正方形を呈する。

面積 21.16㎡ 方位 N-61°E

埋没土 ロームブロックを混在する灰暗褐色ないしは暗褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを多量に混在させる粘質な黄褐色土を掘りかた面に客土し、床面は踏みしめられ堅くしまっている。壁高は、6~20cmを測る。

竈 東壁のほぼ中央に位置し、残存状態はあまり良くない。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、煙道部は緩やかに立ち上がる。袖部はロームブロックを混在する暗褐色土で構築されている。

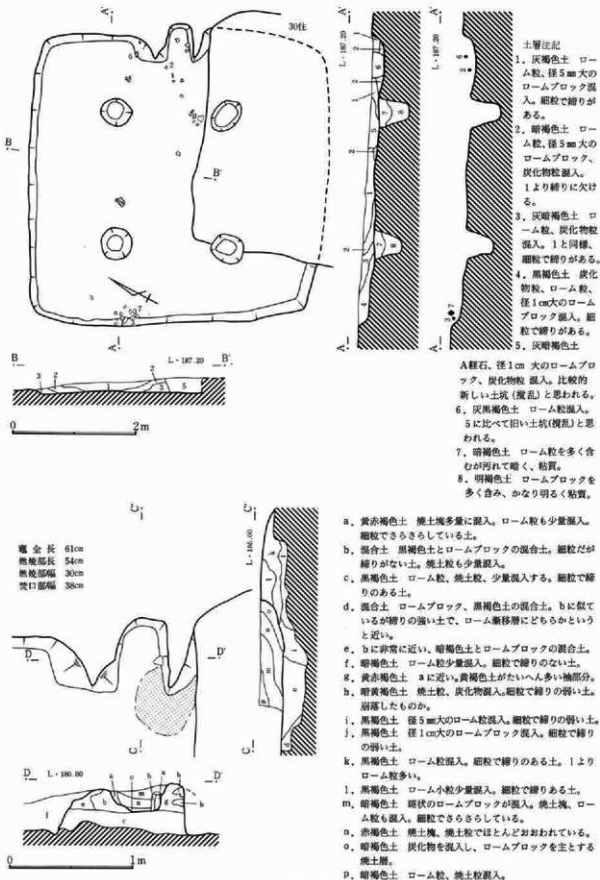
貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴が検出された。またそのうち、2本は、第30号住居跡の掘りかたの調査中に確認された。

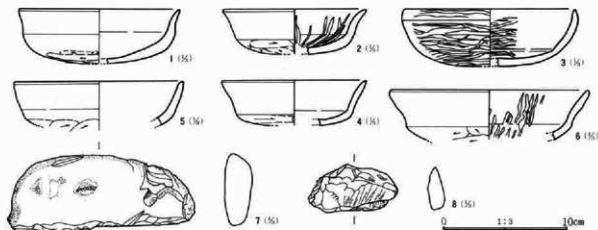
遺物 出土遺物は少なく、竈の周辺に坏の破片及び滑石製品の未成品がある。

備考 本住居跡の南側に第30号住居跡が、西側に第79号住居跡が重複している。これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態、さらには第30号住居跡によって本住居跡の竈の一部が壊されていること、第79号住居跡の竈を本住居跡が壊していること等から、本住居跡は第30号住居跡より旧く、第79号住居跡より新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(谷藤)

第3章 検出された遺構と遺物



第88図 第33号住居跡突洞図



第89図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表 (PL.117)

品名	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②酸化 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 坏	埋没土	口(12.7) 高(4.3) 底一 口～底 欠	①細・白色紅微量 ②酸化・硬 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部撫で、底部裏削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
2	土師器 坏	-1	口(11.3) 高3.6 底一 口～底 欠	①普通・灰色紅微量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部裏削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で後、暗文。	黒色処理。
3	土師器 坏	+17	口(13.6) 高(4.5) 底一 口～底 欠	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③暗赤褐色	内外共磨き。	内面は黒色処理。
4	土師器 坏	埋没土	口(11.5) 高一 底一 口～底 欠	①細・白色紅微量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部裏削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
5	土師器 坏	埋没土	口(13.5) 高一 底一 口～体部片	①細・白色紅微量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部裏削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
6	土師器 高 坏	+16	口(15.8) 高一 底一 坏部片	①細・灰色紅微量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部裏削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で後、暗文。	
7	釧打石	+22	材質 雲母石英片。長さ15.0cm 幅6.0cm 残っている。上部側面にも若干ある。	長さ2.3cm 厚さ1.1cm 重さ300g。表面に、削り跡、若干残る。板状を意図して丸削りされた後、若干の磨き調整をした段階で遺棄されたものと考えられる。制形を意図したか。		
8	未成品	埋没土	材質 燧石。長さ7.2cm 幅3.8cm 厚さ1.1cm			

第34号住居跡

位置 4区24C12 写真 PL.24, 25

形状 一辺が5.20mの正方形を呈する。

面積 25.02㎡ 方位 N-62°-E

埋没土 混入物の少ない暗褐色土を主に堆積する。

床面 ロームブロックを多量に混在する暗褐色土を掘りかた面に客土し、床面はよく踏みしめられ堅くしまっている。重複する第24号住居跡の床面に比べ、高い位置にある。また住居中央には、床下土坑状の穴が検出されている。壁高は、28～50cmを測る。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は比較的良好であった。焚口部から燃焼部にかけては播鉢状にくぼみ、煙道部は緩やかに立ち上がる。袖部は焼土粒・ロームブロックを混在する暗褐色土で構築され、燃焼部には支脚が据えられている。

柱穴 掘りかた面で検出された柱穴をも合わせると、計12本の柱穴を検出できたが、本来の主柱穴とすれば住居外形の対角線上にある4本（北東に位置する柱穴は、第24号住居跡との重複により不明）が、本住居跡の主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 竈の右側に位置し、長軸88cm、短軸65cmを測る楕円形を呈する。

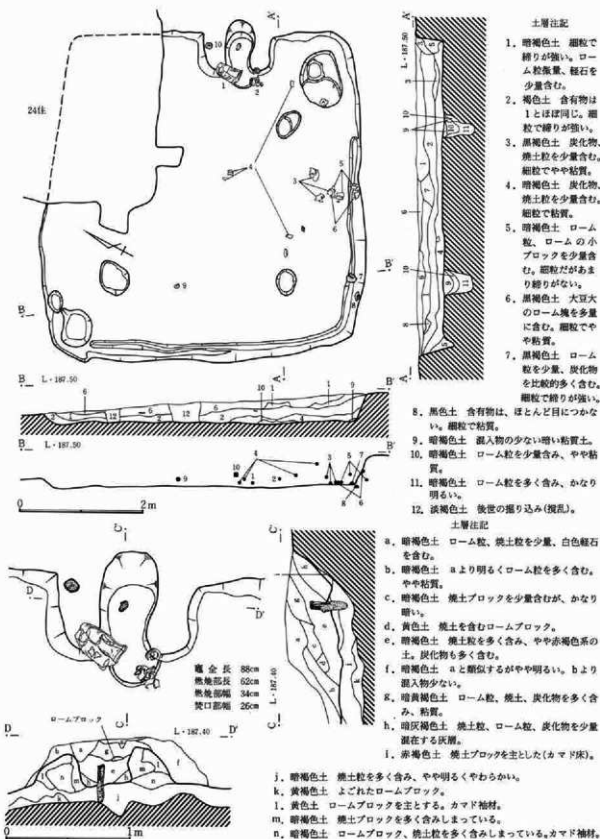
壁周溝 西壁際と南壁際の一部に、幅20cm前後の溝が巡る。

遺物 竈及びその周辺を中心に出土し、遺物には大型・小型の甕、浅鉢、坏等の土器の他に、砥石・滑石の石核等がある。

備考 本住居跡の北側には第24号住居跡が重複しており、その新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面、掘りかた面の状態から、本住居跡の方が古いものと

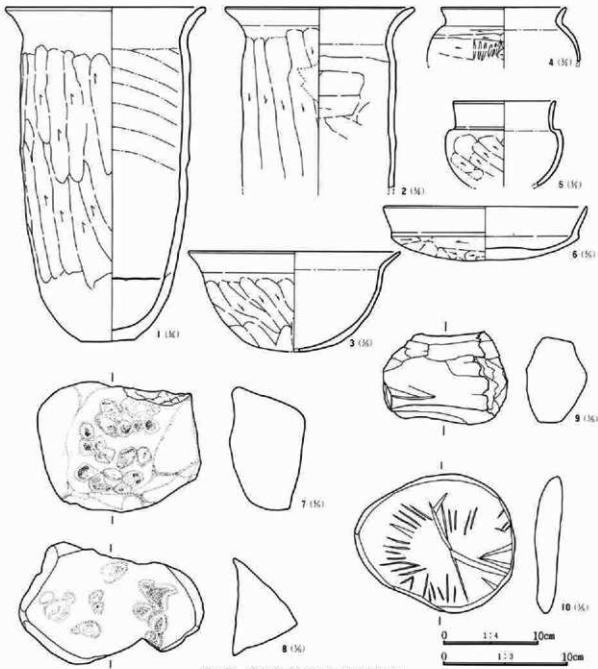
第3章 検出された遺構と遺物

考えられる。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第90図 第34号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



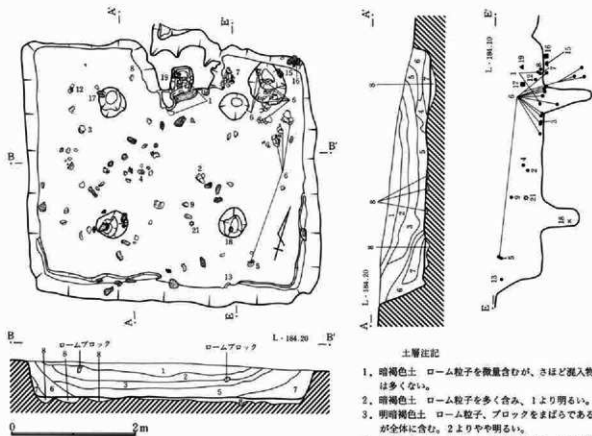
第91図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表 (PL.117、118)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	竈左袖	口(21.0) 高35.1 底5.5 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。	
2	土師器 壺	竈右袖	口(20.4) 高一底一 口~胴 1/2	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。	
3	土師器 鉢	+3	口(22.8) 高(10.6) 底一 口~底 1/2	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部斜め捫り。 内面 口縁部横撫で、体部無で。	
4	土師器 小型壺	+14	口(13.3) 高一底一 口~胴 1/2	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦捫り。	
5	土師器 小型壺	+5	口(11.0) 高一底一 口~胴 1/2	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め捫り。 内面 口縁部横撫で、胴部無で。	

第3章 検出された遺構と遺物

種別	器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
6	土師器 環	+5	口116.6 高4.2 底一〇〜底五	①細・赤色紅少量 ②軟 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横割で、体部〜底部直削り。 内面 口縁部横割で、体部直削り。	
7	工作台	+5	材質 粗粒安山岩。長さ12.5cm 幅10.0cm 厚さ5.8cm 表面に十数個の浅い凹みあり。			
8	工作台	+2	材質 砂岩。長さ14.7cm 幅9.2cm 厚さ4.8cm 重さ700g。表面に敲打を受けた跡のような凹みが残っている。 裏面は、鋭角に尖っており、床に懸置されていた可能性が高い。			
9	石 核	+11	材質 礫石。長さ9.6cm 幅7.1cm 厚さ4.7cm 重さ400g。図下側面と裏面一部に、刃物による削り痕あり。			
10	砥 石	住居外	材質 砂岩。長さ12.8cm 幅10.9cm 厚さ1.9cm 重さ300g。川原石の利用。使用は、表面にあり、図平面図にのみ、刃ならし傷あり。使用は不定方向で、成に凹む。主体は、図側は金属・石、裏面が木・皮などか。			



第92図 第35号住居跡実測図

第35号住居跡

位置 4区05C40 写真 PL.25
 形状 長辺4.62m 短辺4.00mの長方形を呈する。
 面積 18.48㎡ 方位 N-17°W
 埋没土 ローム粒・ロームブロックを全体に含む暗褐色土が主体をなす。壁際は、三角堆積。
 床面 確認面でローム層を80cm程掘り込み、その上に5cm程黒褐色土とロームブロックの混合土を薄く

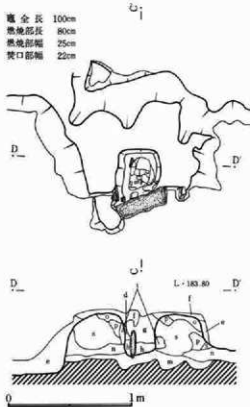
客土して、床面を形成している。

竈 北壁のほぼ中央にある。煙道部が外へ出るほかは、全て屋内に構築されている。造作材は、粘土が主体をなす。焚口部には砂岩が両袖石及び天井石として利用され、また、雲母石英片岩が1支脚として燃焼部左よりに立っていた。残りはよく、土師器壺が1個かかった状態で出土した。燃焼部は、ほぼ平坦で煙道部は緩やかに立ち上がる。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:44×76 P₂:48×60 P₃:48×72 P₄:46×78を測る。

貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁の間にある。円形を呈し、径56cm深さ69cmを測る。

壁周溝 南壁と東壁の一部に確認した。幅10~15cm



第93図 第35号住居跡竈実測図

深さ2~6cmを測る。

遺物 竈周辺及び貯蔵穴からの土師器の出土が目立った。また、竈あるいは甕の把手が2個、滑石製模造品の白玉・チップ、砂岩製の砥石の出土もあった。

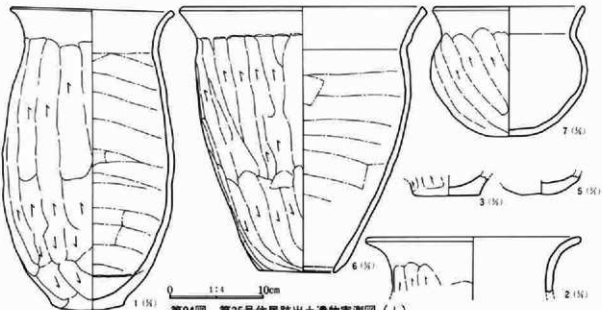
備考 49号住居跡と重複。出土遺物から本住居跡の年代観を6世紀前半としたい。(龍沼)



土層注記

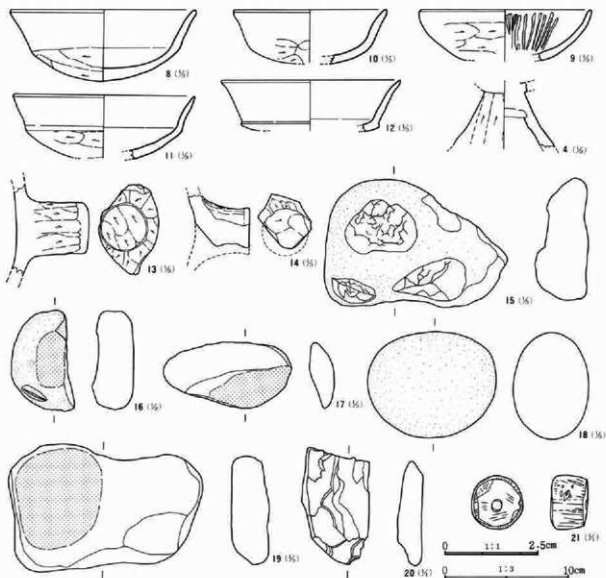
- a. 暗褐色土 細粒の白色小石を多く含む。細粒 締り強い。
- b. 褐色土 含有物はaと同じ。細粒。締りは強い。
- c. 褐色土 ロームの大ブロックを多く含む。細粒粘質。
- d. 黄土 粘土の焼けたもの。混合物はない。
- e. 暗褐色土 質は細粒であり締りがなく、ロームブロックを少量含む。
- f. ローム(粘土)褐色土と黄土塊の混合土 固まっている。
- g. 暗赤褐色土 黄土粒、ローム粒を含む。粒子は細かくfに比べて砂質。
- h. 暗赤褐色土 黄土粒、ローム粒を含む。粗粒で砂質。
- i. 灰暗褐色土 黄土粒、炭化物混入。粗粒でたいへんもろい。
- j. 暗黄褐色土 黄土粒、黄土塊混入。細粒で粘性ありまっている。

- k. 暗褐色土 ローム粒多量に混入。細粒でしまっている。
- l. 濃茶褐色土 ローム粒、黄土塊混入。粗粒で締りがない。煙道部と思われる。
- m. 暗褐色土 ローム粒多量に混入。細粒でしまっている。
- n. 灰暗褐色土 ロームブロック多量に混入する。細粒で締りのある土。
- o. 褐色土 黄土粒が全体に混入しているため、全体に赤味がかっている。
- p. 暗褐色土 黄土粒少量混入。粗粒でたいへんもろい。
- q. 黒褐色土 径1cm大のロームブロック混入する。細粒で締りのある土。
- r. 暗赤褐色土 黄土塊を多く含む。粗粒の土。s. 粘土 t. 黄土



第94図 第35号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第95図 第35号住居跡出土遺物実測図(2)

第35号住居跡出土遺物観察表 (PL.118)

種別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 丸胴壺	-	口径17.2 高さ31.7 底7.5 口~底 片	①普通・白色灰色彩少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横線で、胴部縦筋で。	
2	土師器 壺	+25	口径22.6 高一底一 口縁部片	①普通・白色彩少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横線で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横線で、胴部無で。	
3	土師器 壺	+10	口一高一底7.0 底部片	①普通・白色彩少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴部下半は縦筋削り。 内面 底部は無で。	
4	土師器 高 杯	+28	口一高一底一 胴部片	①普通・白色彩微量 ② 酸化・軟 ③鈍い褐色	外面 脚部は縦筋削り。 内面 胴部は無で。	
5	土師器 壺	+68	口一高一底3.8 底部片	①粗・白色彩少量 ②酸 化・軟 ③褐色	外面 底部は縦筋削り。 内面 底部は無で。	
6	土師器 甕	-2	口径26.4 高さ28.0 底8.1 口~底 片	①普通・白色灰色彩少量 ②酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横線で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横線で、胴部縦筋で。	
7	土師器 小型壺	+9	口径16.0 高さ13.7 丸底 口~底 片	①普通・白色彩少量 ② 酸化・普通 ③褐灰色	外面 口縁部横線で、胴部斜め縦筋削り。 内面 口縁部横線で、胴部無で。	
8	土師器 杯	+13	口径14.8 高さ5.6 丸底 口~底 片	①粗・白色彩少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、体部~底部縦筋削り。 内面 口縁部横線で、体部無で。	

図号	器種 器形	出土位置	口徑 高さ 底徑 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
9	土師器 杯	+50	□13.6 高一底一 口一底 欠	①細・灰色紅少量 化・普通 ②褐色	外面 □縁部横線で、体部削り。 内面 撫で。	
10	土師器 杯	埋没土	□12.2 高一底一 口一底 欠	①細・白色紅少量 化・普通 ②褐色	外面 □縁部横線で、体部削り。 内面 □縁部横線で、体部撫で。	
11	土師器 杯	埋没土	□14.4 高一底一 口一底 欠	①細・白色紅少量 化・硬 ②褐色	外面 □縁部横線で、体部削り。 内面 □縁部横線で、体部撫で。	
12	土師器 高 杯	+20	□14.3 高一底一 杯断片	①細・夾雑物なし 化・硬 ②鈍い褐色	内外共横線で。	
13	土師器 高 杯	+67	□一 高一底一 把手片	①細・白色紅少量 化・硬 ③暗褐色	外面 磨り。	
14	土師器 甕	埋没土	□一 高一底一 把手片	①普通・白色紅少量 化・普通 ②鈍い褐色	外面 削り。	
15	工作台	+5	材質 変質安山岩。長さ14.6cm 幅9.5cm 厚さ4.0cm 重さ600g。表面に4か所の凹みがある。			
16	磁石	+9	材質 牛伏砂岩。長さ7.8cm 幅4.5cm 厚さ3.3cm 重さ150g。川原石の利用。割れ口は、旧時。使用は、表裏にあり、主体は、夾雑物が凸出しているため、木などの軟質の物質か。			
17	磁石	+40	材質 砂岩。長さ10.2cm 幅5.1cm 厚さ1.9cm 重さ100g。川原石の利用。使用面は、図平面の下半のみ。主体は、夾雑物の凸出が少ないため、金属か。			
18	磨り石	柱穴中 -32	材質 変質安山岩。長さ10.2cm 幅9.4cm 厚さ6.1cm 重さ900g。図の左右端に若干の敲打痕あり。表面にもかなりの磨痕がある。縄文時代のもを、柱の根石として転用したものか。			
19	磁石	竈内	材質 粗粒安山岩。長さ14.8cm 幅9.8cm 厚さ3.1cm 重さ700g。川原石の利用。使用面は、図平面の破断線。主体は、洗い込みの中で摩耗が及ぶため、木・皮などか。			
20	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ2.8cm 幅1.8cm 厚さ0.6cm 重さ5g。形状から、削形を意圖したものか。			
21	白玉	+32	材質 滑石。長さ1.5cm 幅1.4cm 厚さ1.0cm 孔径0.3cm 重さ3.7g。穿孔は一方向か。側面は、縦方向の研磨。断面は、好物による調整。大振りのお玉である。			

第36号住居跡

位置 4区14C07

写真 PL26

形状 長辺7.94m 短辺7.32mのほぼ正方形を呈する。

面積 56.07㎡ 方位 N-50°-E

埋没土 混入物の少ない、ないしはロームブロックを混在する暗褐色・明るい暗褐色土を主とする。なお、住居跡の中央部には第136号住居跡が重複しているため、その埋没土が堆積している。

床面 ローム粒・炭化物粒・焼土粒を多量に混在させる暗褐色土を客土し、床面はかなりよく踏みしめられ堅くしまっている。壁高は30～81cmを測る。また住居跡中央部には、円形ないしは楕円形の床下土坑が3ヶ所検出された。なお、床面下の掘りかた面は、平坦ではなくかなり凹凸の激しいでこぼこした状態となっている。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は比較的よかった。焚口から燃焼部にかけては平坦で、燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がる。焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたも

のと考えられる。火床面及び袖の下部には、粘性の強い黒赤褐色土が用いられ、袖部には黒褐色土を主に構築され堅くしまっている。なお、袖部内壁は、かなり焼土化している。

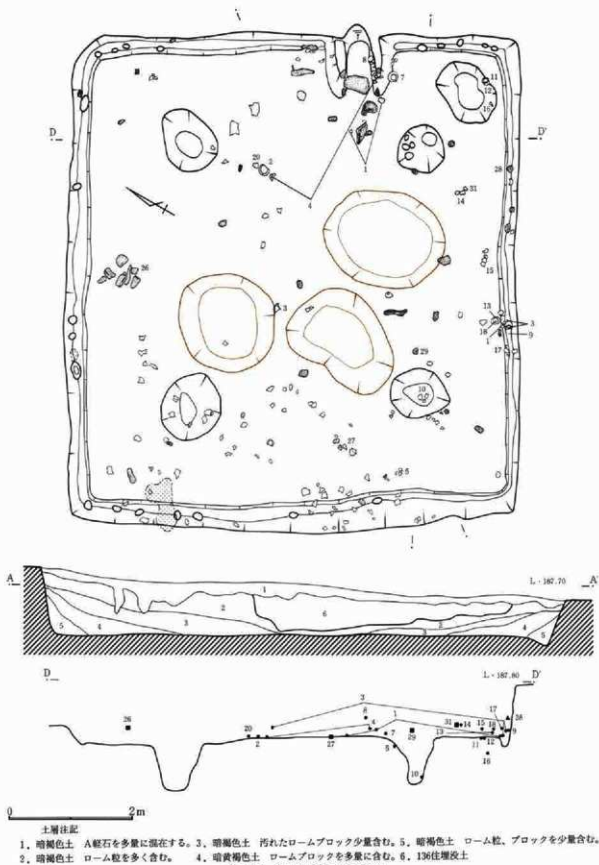
柱穴 住居外形の対角線上に、径が80cm前後となる円形の4本の大きな主柱穴が検出された。なお、掘りかた面では、床面で検出された主柱穴のさらに外側に、同規模の柱穴が4本検出された。

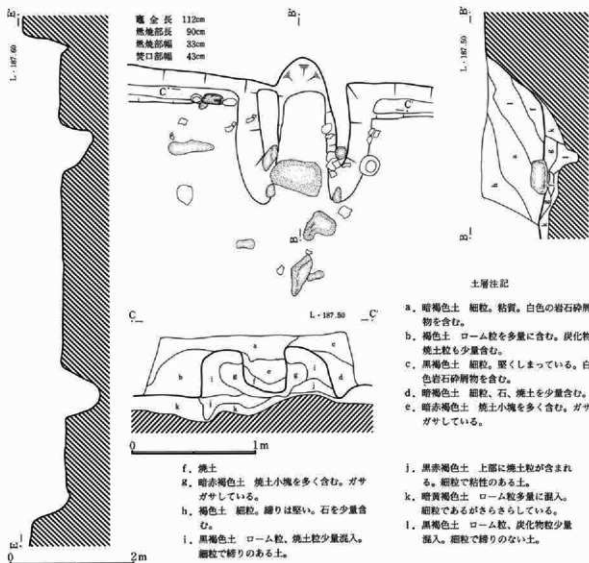
貯蔵穴 竈の右側に楕円形を呈する深い穴が検出されているが、先の主柱穴の外側にある柱穴と一連のものである可能性がある。

壁周溝 幅が25～30cmで、深さが15cm前後となる比較的幅広い溝が壁際を全周する。(竈下部にも壁周溝が巡る)

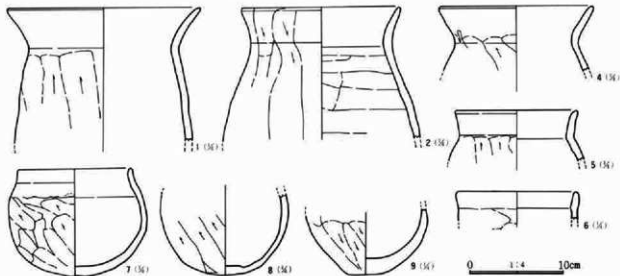
遺物 竈周辺には、竈に使用されていたと考えられる石や甕・坏等の土器が、また住居全体に遺物が散布する。出土した遺物には、甕・甕・坏・手捏土器や、磁石などの石器及び石製品等がある。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀前半としたい。(谷藤)

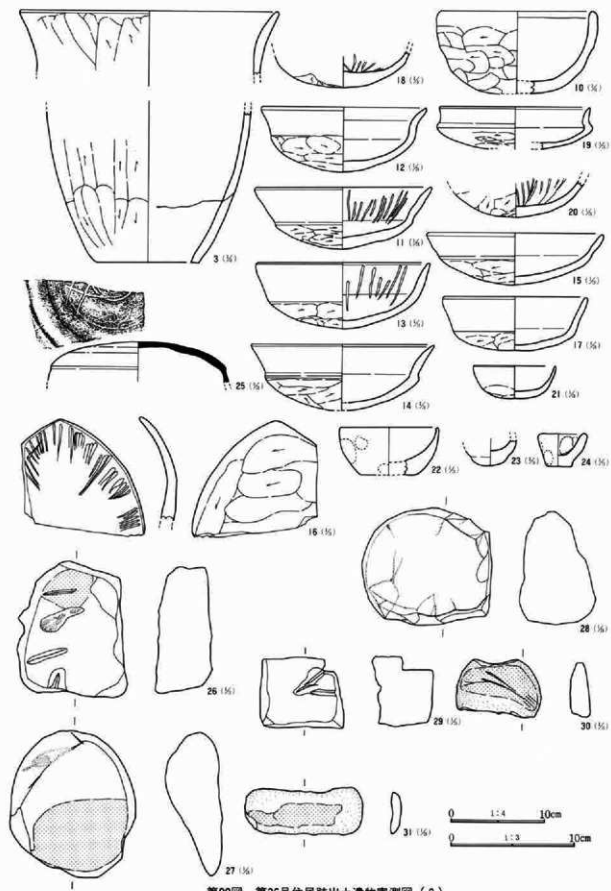




第97図 第36号住居跡竈実測図

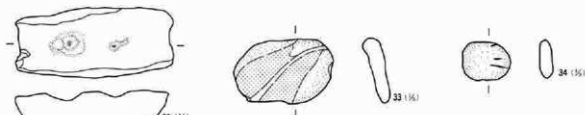


第98図 第36号住居跡出土遺物実測図(1)



第99図 第36号住居跡出土遺物実測図(2)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



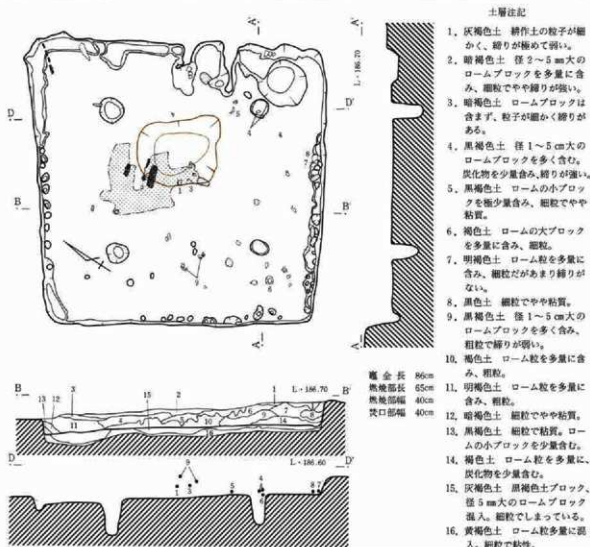
第100図 第36号住居跡出土遺物実測図(3) 0 1:3 10cm

第36号住居跡出土遺物観察表 (PL.118、119)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+5	□(20.4) 高一底一 口一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で 外面 胴部縦筋削り。 内面 撫で。	
2	土師器 壺	+4	□(17.2) 高一底一 口一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
3	土師器 甕	+18	□(27.6) 底(11.0) 口一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明褐色	外面 口縁部高削り、胴部縦筋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	
4	土師器 甕	甕右袖側	□(16.2) 高一底一 口一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部高削り。 内面 胴部撫で。	
5	土師器 小型壺	-3	□(13.0) 高一底一 口一底 片	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部撫で。	
6	土師器 小型壺	埋没土	□(12.6) 高一底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 口縁部横筋削り。	
7	土師器 小型壺	+8	□(12.2) 高11.3 丸底 口一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③馬褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部一底部斜め 高削り。内面 胴部撫で。	
8	土師器 小型壺	甕内	□一高一丸底 胴一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部斜め高削り。 内面 胴部撫で。	
9	土師器 小型壺	+14	□一高一底4.0 胴一底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部斜め高削り。 内面 胴部横撫で。	
10	土師器 環	柱穴中 -54	□(12.3) 高(6.5) 丸底 口一底 片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部一底部高削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
11	土師器 環	貯蔵穴 -5	□14.0 高4.9 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で後、暗文。	
12	土師器 環	貯蔵穴 -5	□13.0 高5.1 丸底 完形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で。	
13	土師器 環	+9	□13.8 高5.2 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部横筋 削り。内面 体部撫で後、暗文。	
14	土師器 環	+20	□(14.5) 高(5.2) 丸底 口一底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で。	
15	土師器 環	+13	□(14.0) 高4.1 丸底 口一底 片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③黒褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で。	
16	土師器 皿	貯蔵穴 -18	□一高一底一 口一底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 高削り。 内面 撫で後、暗文施文。	木の葉形。
17	土師器 環	+21	□(11.3) 高(4.2) 丸底 口一底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で。	
18	土師器 環	+14	□一高一丸底 体一底 片	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 底部高削り。 内面 体部撫で後、暗文。	
19	土師器 環	埋没土	□(12.0) 高一底一 口一底 片	①細・灰褐色ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部高削り。 内面 体部撫で。	
20	土師器 環	+8	□一高一丸底 体一底 片	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③赤褐色	外面 体部一底部高削り。 内面 体部撫で後、暗文。	
21	手捏土 器	埋没土	□(6.6) 高2.5 丸底 口一底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部一底部高削 り。内面 体部撫で。	
22	手捏土 器	埋没土	□(8.0) 高3.3 底(4.4) 口一底 片	①細・灰褐色ほとんどなし ②酸化・普通 ③灰黄褐色	外面 指おさま。	
23	手捏土 器	埋没土	□一高一底一 体一底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	裏を横したりのみ、内外共に指撫で痕あり。	
24	手捏土 器	埋没土	□一高2.6 底2.2 口一底 片	①細・灰褐色ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共に指撫で痕あり。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	遺物 図形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
25	須色器 環蓋	埋没土	口一高一底一 体部 片	①普通・白色減少量 ② 還元・硬 ③暗褐色	外面 左回転ロクロ整形、上半部は回転旋削 り。内面 左回転ロクロ整形。	窠印「キ」
26	磁石 +27		材質 砂岩。長さ10.2cm 幅8.4cm 厚さ4.2cm 破砕内に研磨痕あり。研磨主体は、夾雑物の凸出が少なく、金属か。			
27	磁石 +6		材質 砂岩。長さ11.2cm 幅10.0cm 厚さ4.2cm 重さ500g。川原石の利用。使用は、図平面の下半と、裏面の一部にあり、主体は、硬い箇所の凸出があるため、木など軟質。大きく凹む理由は、金属の可能性もある。			
28	磁石材	+34	材質 流紋岩(磁石)。長さ11.0cm 幅10.0cm 厚さ6.0cm 重さ700g。自然石の角礫である。使用は、図平面下端にあり。その他、右側にも、わずかにあり。形状からして、未使用の磁石材か。稀な例か。			
29	磁石 +12		材質 砂岩。長さ5.7cm 幅5.3cm 厚さ4.6cm 重さ200g。自然石の角礫。使用は、図平面右上に、ならし痕あり。その他は、未使用。主体は金属。			
30	磁石 埋没土		材質 中伏砂岩。長さ6.8cm 幅4.3cm 厚さ1.6cm 重さ60g。川原石の利用。使用は、片面に研磨痕、図平面にならし痕あり。主体は、夾雑物の凸出があるため、木や皮などの軟質物質。			
31	磁石 +20		材質 砂岩。長さ9.4cm 幅3.7cm 厚さ1.0cm 重さ40g。川原石の剥片の利用。使用は、図平面側と裏面側。表面側の摩耗は浅く、裏面は深い。主体は、夾雑物が凸出しているため、木・皮などか。			
32	工作台	埋没土	材質 中伏砂岩。長さ12.5cm 幅5.2cm 厚さ3.0cm 重さ250g。図平面に、2箇所の凹みあり。うち、左側のものは、同心円状に穿たれている。裏面にも、1か所、浅い凹みあり。			
33	磁石 埋没土		材質 中伏砂岩。長さ7.6cm 幅5.1cm 厚さ1.5cm 重さ130g。川原石の利用。使用は、表面、図上方が用いられている。主体は、金属のほか、夾雑物の凸出があるため、木・皮などか。			
34	磁石 埋没土		材質 砂岩。長さ3.8cm 幅3.0cm 厚さ1.0cm 重さ15g。川原石の利用。使用は、図平面の右側に、ならし痕があり、側面にもわずかに使用痕あり。側部の使用は、夾雑物の凸出があり、木などの軟質物質。			



第101図 第37号住居跡実測図

第37号住居跡

位置 4区04C01 写真 PL.26

形状 一辺4.6m程の正方形を呈する。

面積 20.47㎡ 方位 N-65°E

埋没土 全体にロームブロック・ローム粒を多く含む土が埋まっている。また、床面近くになると炭化物が含まれるようになる。これらのことから、この住居跡は人為的の堆積で埋まり、しかも、火災を受けた可能性がある。

床面 確認面でローム層を30～35cm掘り下げ、黒褐色土とロームブロックの混合土を客土し、床面を形成している。竈前面に大変堅くしまった部分を確認した。掘りかたの調査中、中央やや竈よりに径1.2m程の床下土坑を確認した。

竈 東側の壁にあり、煙道部が外に出る以外に住居内にある。造作材は、粘土を主体とするが、壊されているため、焚口部に石材などを使用したかどうか

は不明。火床面は、ほぼ平坦で、煙道部から外側は緩やかに立ち上がっている。

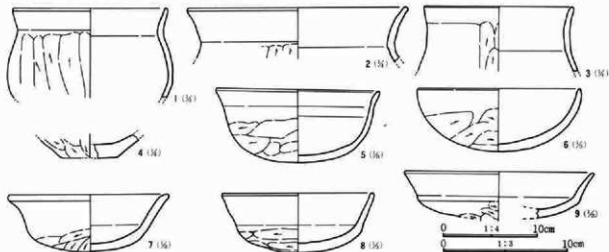
柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)はP₁:28×50 P₂:26×44 P₃:34×58 P₄:36×50をそれぞれ測る。

貯蔵穴 竈に向かって右側、南東隅に位置する。径70cm深さ81cmを測る。中程に径2～3cm大のロームブロックを含む層があり、底近くには炭化物を少量含む層もある。

壁周溝 北東部分では幅18～24cm深さ6～15cmを測る。西半分の壁下には径15cm深さ10cm程の多数の一系列の小穴を確認した。

遺物 土師器壺口縁部・土師器坏等があるが出土数は多くない。

備考 住居中央および竈周辺より炭化物が多量に出土しており、その一部を同定した。遺物より本住居跡の年代観を6世紀後半としたい。(鹿沼)



第102図 第37号住居跡出土遺物実測図

第37号住居跡出土遺物観察表 (PL.119)

図号	器種 器形	出土位置	①口径②高さ③底径 ④残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 小型壺	+18	口(16.6) 高一 底一 口一 胴 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦寛削り。 内面 胴部撫で。	
2	土師器 壺	増設土	口(24.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦寛削り。 内面 胴部撫で。	
3	土師器 小型壺	+21	口(14.0) 高一 底一 口一 胴部片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦寛削り。	
4	土師器 壺	+1	口一 高一 底(6.0) 底部片	①粗・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 胴部下半は斜め削り。 内面 胴部下半一底部は撫で。	
5	土師器 鉢	+8	口17.4 高8.0 丸底 口一 底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横寛削り。 内面 撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図例	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
6	土師器 環	-2	口(12.8) 高5.0 丸底 完形	①細・白色灰少量 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横滑で、外面 体部～底部斜め 削り。内面 撫で。	
7	土師器 環	+7	口13.0 高4.5 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横滑で、外面 体部～底部斜め 削り。内面 撫で。	
8	土師器 環	+2	口12.0 高4.7 丸底 口～底 欠	①細・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横滑で、外面 体部～底部横滑 削り。内面 撫で。	
9	土師器 環	+25	口(15.2) 高一底一 口～底 欠	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部無で、体部横滑削り。 内面 口縁部横滑で、体部無で。	

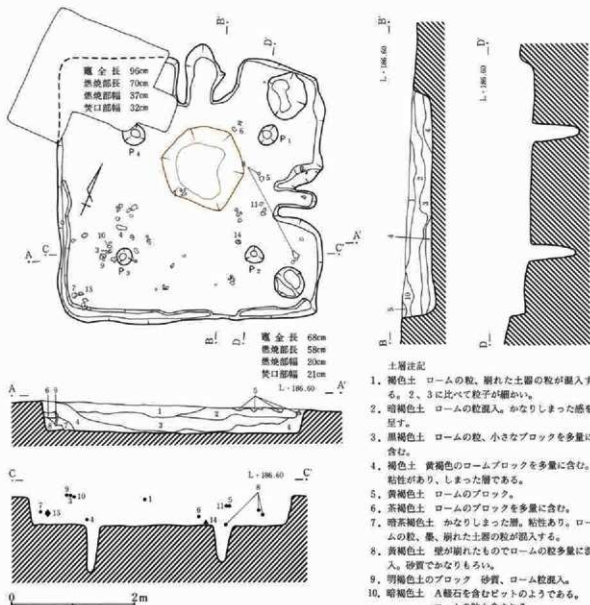
第39号住居跡

位置 4区09C01 写真 PL.27

形状 長辺4.22m 短辺4.14mのほぼ正方形。

面積 17.15㎡(推定) 方位 N-20°-W

埋没土 床面壁際に黄褐色のロームブロックを多量
に含む褐色土が三角堆積しており、上層はローム
粒・ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土が主体。
床面 確認面でローム層を60cm程掘り込み、その上



第103図 第39号住居跡実測図

に黒褐色土とロームブロックの混合土を客土し、踏み固めて床面を形成している。床面中央に特に堅い部分を確認した。また、掘りかたの調査中に住居中央北寄りとはほぼ中央に2つの床下土坑を確認した。なお、壁高は、確認面で40~44cmであった。

竈 北壁と東壁の2カ所に確認された。造作材は、ともに粘土塊を多量に含む褐色土が主体をなしており、北壁の竈の火床面は、中央部でやや下がり、煙道部にかけて緩やかに立ち上がっている。また、東壁の竈の燃焼部には雲母石英片岩が支脚として使用されており、火床面は、ほぼ平坦で煙道部にかけて緩やかに立ち上がっている。2つの竈が同時に機能していたとおもわれるが、その理由については不明。

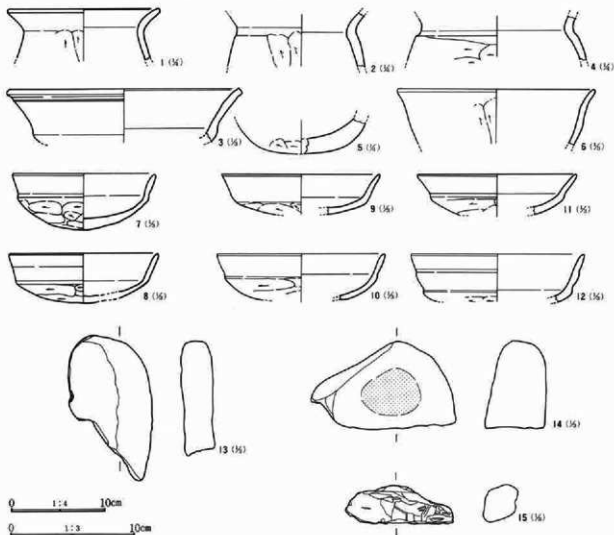
柱穴 住居外形の対角線に4本検出。各柱穴の規模

(径×深さcm)は、北東隅よりP₁:40×78 P₂:44×73 P₃:40×60 P₄:34×60である。また、P₂とP₃の間の壁際と、P₂と西壁の間に計4個のピットを確認したが柱穴なのか別の施設なのかは不明。
貯蔵穴 北壁の竈の右側と東壁の竈の右側にそれぞれ1個ずつ確認した。ともにほぼ円形を呈し、深さはそれぞれ42cm・53cmを測る。

壁周溝 南壁・西壁にそって幅10~24cm深さ4~7cmのものが確認された。

遺物 住居南半分よりの出土が多かった。また、滑石のチップ、ハンマーストーンも出土した。

備考 重複する住居は第40号であり、本住居跡のほうが新しい。遺物より本住居跡の年代観を7世紀前半とした。(鹿沼)



第104図 第39号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第39号住居跡出土遺物観察表 (PL.119、120)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+34	口(16.0) 高一 底一 口～頸 片	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横無で。外面 内面 頸部縦筋あり。	
2	土師器 壺	埋没土	頸(11.9) 高一 底一 頸～胴部片	①普通・灰色減少量 ② 普通・軟 ③鈍い黄褐色	内外共頸部横無で。外面 内面 胴部横無で。	
3	土師器 高 坏	+36	口(18.4) 高一 底一 口～坏体部片	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横無で。	
4	土師器 壺	+3	頸(16.0) 高一 底一 頸～胴部片	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③灰黄褐色	内外共頸部横無で。外面 内面 胴部横筋あり。	
5	土師器 壺	+32	口一 高一 底(7.0) 高部片	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 底部横筋あり。 内面 底部横無で。	
6	土師器 鉢	+17	口(21.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・夾雑物なし ② 酸化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部～体部縦筋あり。 内面 口縁部横無で。	
7	土師器 坏	+8	口11.4 高4.5 丸底 完形	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横無で。体部～底部横筋あり。内 面 体部横無で。	
8	土師器 坏	+3	口11.8 高4.9 丸底 口～底 片	①細・赤色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部～底部横筋 筋あり。内面 体部横無で。	
9	土師器 坏	+38	口(12.8) 高一 底一 口～底 片	①細・灰色減少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部～底部斜め 筋あり。内面 体部横無で。	
10	土師器 坏	+34	口(13.4) 高一 底一 口～底部片	①細・黒色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄色	内外共口縁部横無で。外面 体部横筋あり。 内面 体部横無で。	
11	土師器 坏	+33	口(12.8) 高一 底一 口～底部片	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部横筋あり。 内面 体部横無で。	
12	土師器 坏	埋没土	口(13.8) 高一 底一 口～底部片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③暗灰色	内外共口縁部横無で。外面 体部横筋あり。 内面 体部横無で。	
13	巖打石	+7	材質 雲母石英片岩。長さ9.9cm 幅6.5cm 厚さ2.3cm 重さ250g。図上部側面、下部側面に敷り所、巖打による 剝離部分あり。			
14	砥 石	+7	材質 粗粒安山岩。長さ11.4cm 幅6.9cm 厚さ4.8cm 重さ530g。自然石の角摩。使用は、図平面の破線内。主 体は、浅い凹みにも及ぶため、木・皮など敷質。			
15	石 核	埋没土	材質 燧石。長さ8.4cm 幅3.0cm 厚さ2.6cm 重さ78.5g。図平面上に、刃物により削り痕あり。石質は、22号 住居跡出土の燧石石核と同じでほぼく良質である。			

第40号住居跡

位置 4区08C01

写真 PL.27

形状 推定ではあるが、長辺4.50m短辺4.00mを測
る隅丸長方形と考えられる。

面積 18.95㎡ (推定) 方位 N-57°E

埋没土 一部分ではあるが、ロームブロックを含む
褐色土により埋まっていた。

床面 確認面で14cm程ローム層を掘り込み、暗褐色
土とロームブロックの混合土を客土して床面を形成
している。

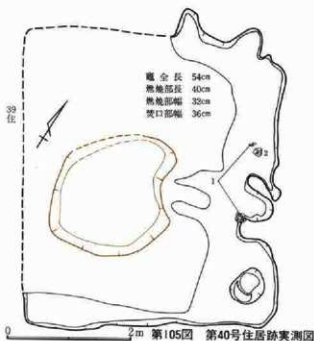
竈 東壁ほぼ中央にあり、残り方が悪いため明確で
はないが、煙道部を除いて全て屋内に構築されてい
たと思われる。

柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 竈向かって右側に確認された。ほぼ円形を
呈し、径70cm深さ52cmを測る。

壁周溝 確認できなかった。

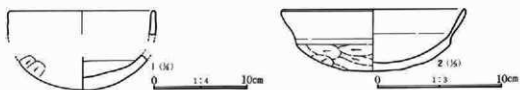
遺物 きわめて少ないが、甕右袖に土師器小型甕の



底部が、また、竈左に土師器坏が出土した。

備考 第39号住居跡と重複。遺物より6世紀後半の
年代観を与えたい。

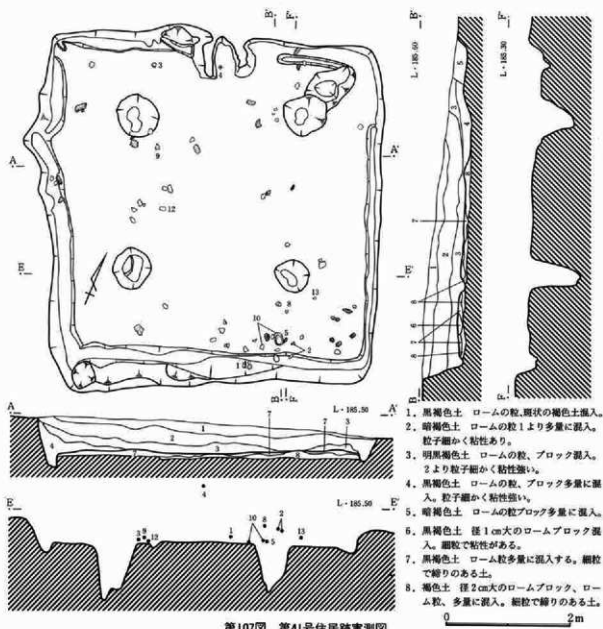
(鹿沼)



第106図 第40号住居跡出土遺物実測図

第40号住居跡出土遺物観察表 (PL.一)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	壁石袖 -5	□(15.6) 高- 丸底 口縁部と底部片 欠	①粗・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 底部斜の段削り。 内面 底部無で。	
2	土師器 坏	+3	□14.6 高4.9 丸底 □~底 欠	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部段削り。 内面 体部撫で。	



第107図 第41号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第41号住居跡

位置 4区08B46 写真 PL.28

形状 1辺ほぼ5.5mの正方形を呈する。

面積 29.67㎡ 方位 N-22°-W

埋没土 細粒の黒褐色土が主体をなし、そのなかに斑状の褐色土・微細ローム粒が含まれる。壁際は三角堆積をしている。

床面 2面の床を確認した。第1次の床面は遺構確認面ではほぼ1m程掘り込み、その上に暗褐色土と径2~5cm大のロームブロックとの混合土を客土して形成されていた。住居のほぼ中央に特に堅い面を確認した。第2次の床面は、第1次の床面の上におよそ10cm褐色土とロームブロックとの混合土を貼り直して床面を形成していた。特に竈前と住居中央に堅くしまった面を確認した。第1次・第2次の床面とも南端から北端までの標高差は、およそ20cmであり、平坦であるといつてよい。なお、壁高は、24~36cmの範囲で確認された。

竈 北壁ほぼ中央に構築されている。少なくとも2回同じ場所に作り直されていることが竈掘りかたの

調査により判明した。第1次の竈の存在は、竈セクションのg・hの中に袖部として使用したと考えられる多量の粘土塊があること、そのレベルが第1次の床面と対応することにより分かった。第2次の(確認された)竈は、煙道部を除き、全て住居内に作られている。造作材は、粘土と思われる、また、袖のなかに多量の焼土ブロックが混入している。燃焼部は、ほぼ平坦で煙道部は緩やかに立ち上がっていく。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。それぞれの規模(径×深さ)は、P₁:70×60 P₂:56×70 P₃:66×85 P₄:64×74を測る。

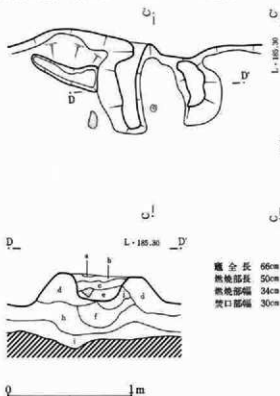
貯蔵穴 竈向かって右側、柱穴P₁と壁との間にある。長軸70cm短軸60cmの楕円形を呈し、深さは62cm。

壁周溝 北東隅を除き幅22~40cm深さ10~21cmの範囲で確認された。

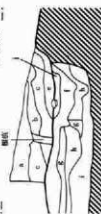
遺物 出土量は少ないが、南壁付近より土器器頸類が出土しており、また、滑石製の有孔円板・ナブなどもある。

備考 出土遺物より、この住居跡の年代観を7世紀前半としたい。重複は、第42号住居跡である。

(庫沼)



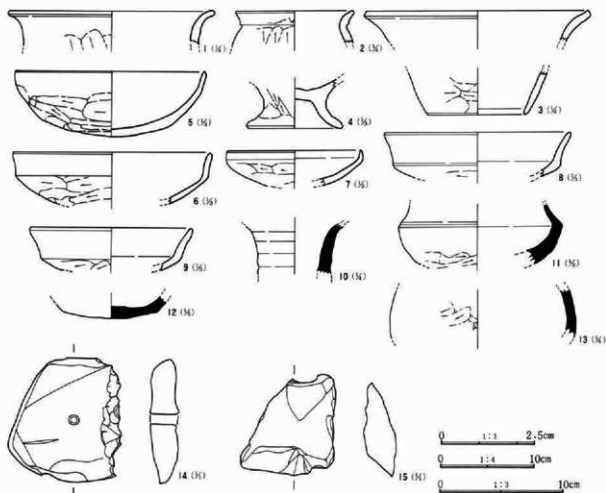
竈 全長 66cm
 竈地部長 50cm
 竈地部幅 34cm
 焚口部幅 30cm



- 土層注記
- a. 褐色土 径1~2mm大の白色の軽石を多量に含む。細粒。
 - b. 暗褐色土 炭化物、焼土粒を少量含む。
 - c. 暗褐色土 a、bよりやや暗く、焼土ブロックを含む。やや粘質。
 - d. 暗赤褐色土 「袖」と思われるが、焼土は少ない。
 - e. 赤褐色土 崩落焼土粒、ブロックが主となる。
 - f. 暗赤褐色土 焼土粒、ローム粒、炭化物多量に混入。細粒に粘性。
 - g. 灰褐色土 炭化物粒、焼土ブロック、灰色粘土ブロック多量に混入し、細粒に粘性的のある土。粘土ブロックは1次のカマド袖部分をかこして、新たに2次のカマドを制作した時の1次カマドの残骸かと思われる。
 - h. 濃茶褐色土 焼土塊、粘土ブロック混入。細粒に粘性。焼土塊は1次カマド焼土。
 - i. 黄褐色土 焼土塊、ローム粒混入。細粒。
 - j. 赤褐色土 焼土塊多量に混入。燃焼下部と思われる。粗粒。

第108図 第41号住居跡竈実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



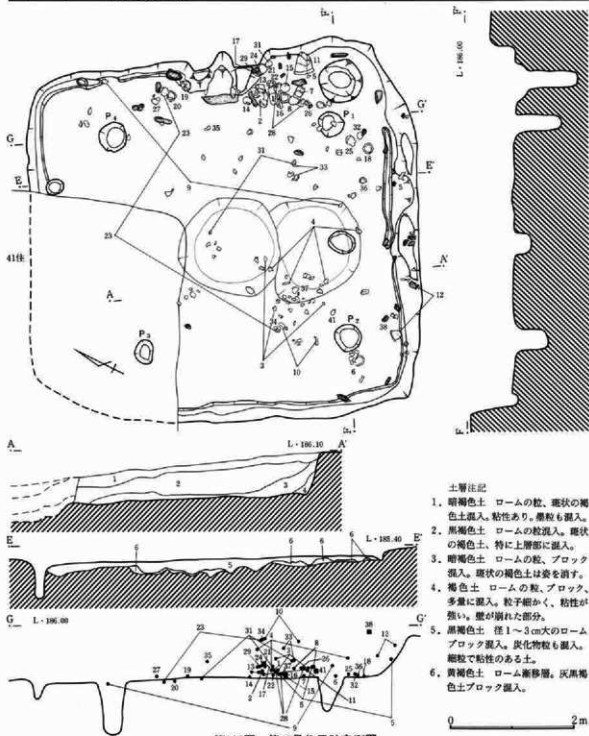
第109図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表 (PL.120)

図中	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	+11	口径 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面	胴部縦貫削り。
2	土師器 壺	+23	口径2.7 高一 底一 口縁部 ⅔	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面	胴部上半縦貫削り。内面 胴部上半撫で。
3	土師器 瓶	+12	口径(23.5) 底(10.2) 口縁部片と底部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面	胴部下半横貫削り。内面 胴部下半撫で。
4	土師器 台付罐	窠内	口径 高一 底一 台部 ⅔	①粗・白色紅多量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 台部斜め削り。	高台付罐。
5	土師器 杯	+2	口径15.2 高15.1 丸底 ほぼ丸形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～	底部縦削り。内面 口縁部横撫で、体部撫で。
6	土師器 杯	埋没土	口径(15.8) 高一 底一 口～底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面	体部～底部横貫削り。内面 体部撫で。
7	土師器 杯	埋没土	口径(10.7) 高一 底一 口～底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面	体部横貫削り。内面 体部撫で。
8	土師器 杯	+27	口径(14.8) 高一 底一 口～底 ⅔	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面	体部縦削り。内面 体部撫で。
9	土師器 杯	+21	口径(12.9) 高一 底一 口～底 ⅔	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面	体部縦削り。内面 体部撫で。
10	須恵器 長頸甕	+2	口径 高一 底一 頸部 ⅔	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
11	須恵器 甕	埋没土	口径 高一 底一 口～底 ⅔	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	底部縦削り。

第3章 検出された遺構と遺物

図録	器種 器形	出土位置	口徑 高さ 底徑 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
12	須恵器 坏	+12	口一高一底一 底部 1/4	①普通・白色感少量 ② 還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。回転削削り。	
13	須恵器 壺	+10	口一高一底一 胴部片	①胎・夾雑物なし ②還元 ・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 削削り 内面 削削り調整。内面 削削り調整。	
14	有孔円 板	埋没土	材質 滑石。長さ3.3cm 幅3.0cm 厚さ0.7cm 孔径0.3cm 重さ11g。穿孔は、両方向。表裏および側面は、刃物 によって削り調整されている。図右側の割れは、製作時か、製作後か不明。			
15	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ2.5cm 幅2.4cm 厚さ0.8cm 重さ6.3g。一部に、刃物により削り痕あり。形状より、刺形を意 識したものか？。			



第42号住居跡

位置 4区06B48 写真 PL.28, 29

形状 北西隅が第41号住居跡により切られているため、推定であるが、ほぼ1辺6.20mの隅丸正方形。

面積 34.27㎡ 方位 N-58°-E

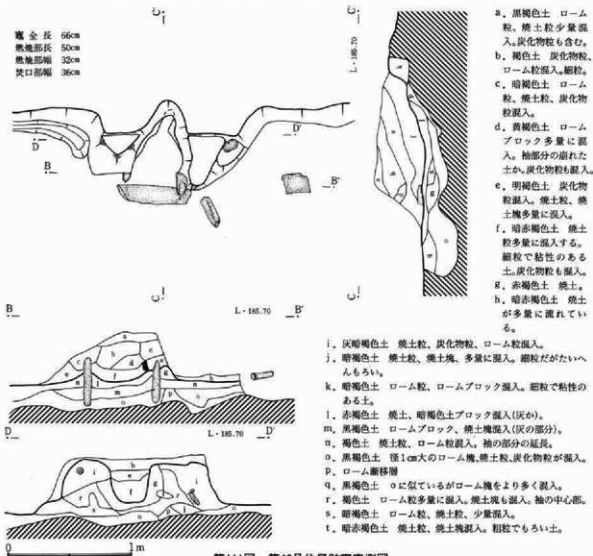
埋没土 微細の黒褐色土が主体をなし、斑状の褐色土・ロームブロックが含まれる。壁際では三角堆積。

床面 南から北へ向かう緩やかな斜面を、確認面で80cm程掘り込み、その上に暗褐色土とロームブロックの混合土を10cm程客土して床面を形成している。掘りかたの調査中に、住居中央とその南側より2つの床下土坑を確認した。径は、ともに1.6m程であった。なお、壁高は確認面で12~81cmの範囲。

竈 東壁やや南寄りにあり、燃焼部の一部と煙道部

が外へ出るほかは、全て屋内に構築されている。造作材は、褐色の粘土が主体をなし、そのなかに炭化物粒や焼土粒が混入している。袖前面には左右両方ともに雲母石英片岩の袖石が直立しており、そのすぐ前には同じ雲母石英片岩の天井石が落ちた状態で確認された。また、竈向かって右側には、支脚に使用されていたと思える雲母石英片岩が横たわっていた。火床面は、燃焼部ではほぼ平坦で煙道部へは、ほぼ70°の角度で立ち上がる。

柱穴 住居外形の対角線上に4本、P₁とP₂との間に1本補助的な柱穴が確認された。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:34×74 P₂:48×52 P₃:37×50 P₄:48×82である。なお、P₃は推定。

貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁の間にある。円形を


第111図 第42号住居跡竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物

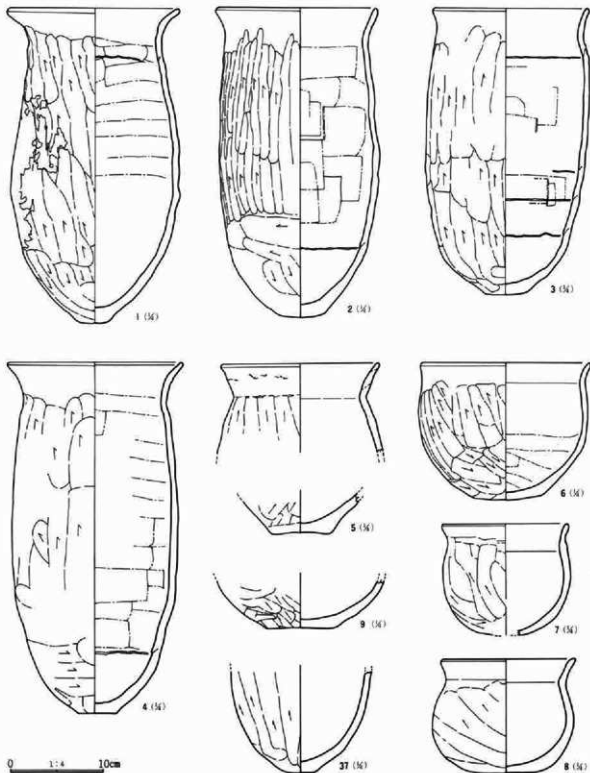
呈し、径60cm深さ97cmを測る。

壁周溝 貯蔵穴付近を除いて、ほぼ全周回っていたようである。幅16~34cm深さ4~9cmを測る。

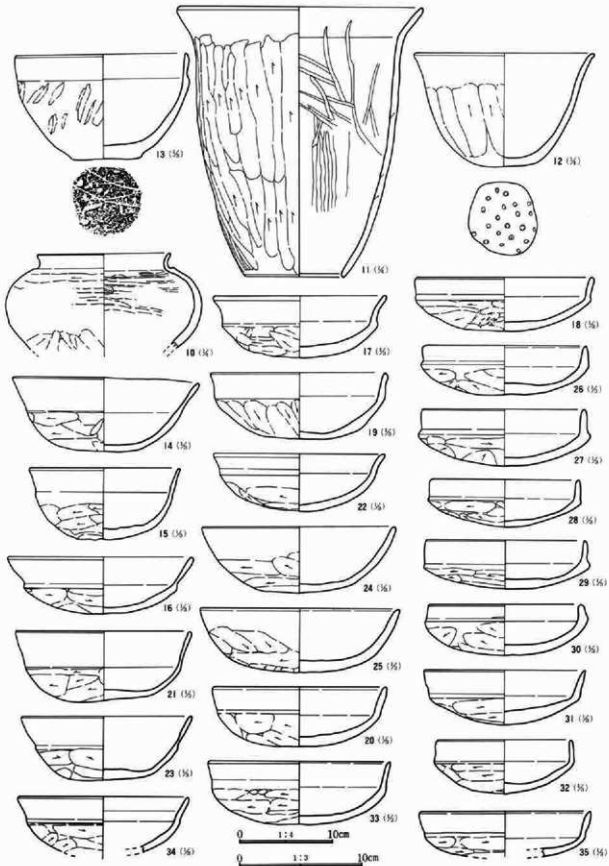
遺物 残存状態がよく、甕右に土師器甕・坏類が多

量に出土した。また、P₁近くより須恵器坏蓋が、P₁の埋没土より紡錘車が1個出土した。

備考 第41・43号住居跡と重複。出土遺物より本住居跡の年代観を6世紀後半としたい。(鹿沼)

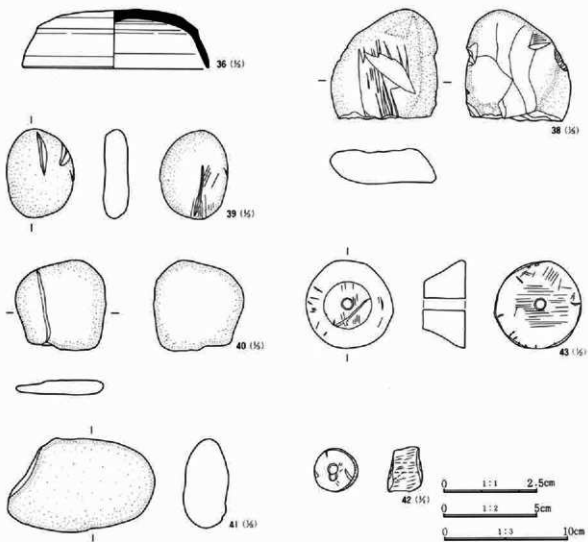


第112図 第42号住居跡出土遺物実測図(1)



第113図 第42号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第114図 第42号住居跡出土遺物実測図(3)

第42号住居跡出土遺物観察表 (PL.120、121、122)

図中	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+11	口径18.4 高33.1 底2.6 口～底 ⅔	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部無で。	
2	土師器 長胴壺	+1	口径17.1 高32.8 底4.2 宛形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴上半部～中央 部縦貫削り、胴下半部横貫削り、内面 腹無で。	
3	土師器 長胴壺	+4	口径16.6 高30.3 底4.0 口～底 ⅔	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦貫削り、内面 腹無で。	輪痕あり。
4	土師器 長胴壺	+11	口径18.4 高36.0 底4.3 口～底 ⅔	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴上半部～中央 部縦貫削り、胴下半部横貫削り、内面 腹無で。	
5	土師器 長胴壺	+22	口径16.8 高6.6 口～胴・底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③黒褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部無で、胴下半部腹無で。	輪痕あり 底部に木蓋痕？。
6	土師器 小型壺	-3	口径18.1 高14.4 底7.5 口～底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め縦削り。 内面 腹無で。	
7	土師器 小型壺	+3	口径13.6 高(11.8) 口～底 ほぼ宛形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め縦削り。 内面 胴部無で。	
8	土師器 小型壺	+13	口径14.3 高11.1 底6.0 宛形	①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め縦削り。 内面 胴部無で。	
9	土師器 壺	床直	口一 高一 底7.4 底径 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	外面 胴部下半は斜め縦削り。 内面 胴部は横で。	

第3節 古墳時代の遺構と遺物

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
10	土師器 罍	+53	口(14.4) 高一底一 口~底 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部は不定方向 磨削り。内面 胴部は磨削り。	
11	土師器 甕	+9	口26.3 高28.5 底10.5 完形	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線磨削り。 内面 横で磨削り。	
12	土師器 甕	+28	口18.8 高12.0 底6.9 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線磨削り。 内面 胴部横線で。	多孔。
13	土師器 甕	+19	口13.7 高8.2 底5.5 口~底 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部磨削で。 内面 胴部磨削で。	底部に木葉痕あり。
14	土師器 甕	床直	口14.9 高5.9 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	表底部 暗灰黄色。
15	土師器 甕	+4	口12.1 高5.6 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
16	土師器 甕	+6	口14.8 高4.6 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
17	土師器 甕	+20	口(14.0) 高(4.9) 丸底 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
18	土師器 甕	床直	口14.0 高4.2 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
19	土師器 甕	+1	口14.4 高5.2 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部斜め 磨削り。内面 体部磨削で。	
20	土師器 甕	-2	口14.0 高4.7 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
21	土師器 甕	+17	口14.0 高5.6 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③明褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部横線 磨削り。内面 体部磨削で。	
22	土師器 甕	+9	口(13.8) 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横線で、体部~底部磨削り。 内面 口縁部~底部磨削り。	
23	土師器 甕	-4	口13.6 高5.0 丸底 口~底 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
24	土師器 甕	+21	口15.5 高5.2 丸底 完形	①細・白色色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
25	土師器 甕	+1	口(16.0) 高(5.0) 丸底 口~底 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
26	土師器 甕	+5	口13.0 高3.9 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	内外共黒色処理 した跡あり。
27	土師器 甕	+2	口12.8 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	内外共黒色処理 した跡あり。
28	土師器 甕	+5	口11.8 高3.7 丸底 完形	①細・突縁物ほとんどなし ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	内外共黒色処理 している。
29	土師器 甕	+21	口12.5 高3.8 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部横線 磨削り。内面 体部磨削で。	内外共黒色処理 した痕跡あり。
30	土師器 甕	埋没土	口12.4 高4.0 丸底 口~底 ㄗ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部磨削り。 内面 体部磨削で。	
31	土師器 甕	+1	口12.8 高4.3 丸底 口~底 ㄗ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部横線 磨削り。内面 体部磨削で。	
32	土師器 甕	+4	口10.8 高4.3 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部横線 磨削り。内面 体部磨削で。	
33	土師器 甕	+25	口(14.6) 高(5.0) 丸底 口~底 ㄗ	①細・赤色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部~底部横線 磨削り。内面 体部磨削で。	
34	土師器 甕	+56	口(13.6) 高(4.8) 底一 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部磨削り。 内面 体部磨削で。	
35	土師器 甕	+24	口(13.6) 高(3.7) 底一 口~底 ㄗ	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横線で、外面 体部横線磨削り。 内面 体部磨削で。	
36	須恵器 甕	+3	口14.8 高4.5 天 井部8.0 ㄗ	①普通・白色灰少量 ② 還元・硬 ③オリブ灰色	磁作り後クロコ型、回転磨削り。	
37	土師器 長胴甕	+7	口一 高一 底(3.6) 胴一底 ㄗ	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 胴部縦線磨削り。 内面 胴部磨削で。	
38	磁 石	+68	材質 牛伏砂。長さ8.6cm 幅8.5cm 厚さ2.7cm 重さ300g。川原石の利用。使用は、左平面的であり、研磨痕と多くのならし傷が残る。高部の縁は、石の凸凹である。主体は、突縁部が凸出し、木などの軟質か。			
39	磁 石	埋没土	材質 牛伏砂。長さ7.0cm 幅5.4cm 厚さ2.0cm 重さ190g。川原石の利用。使用は、表裏にならし直、図右平面的に研磨痕あり。主体は、突縁部が凸出しているため、木などの軟質物質か。			

図号	遺構 器形	出土位置	特	備
40	砥石	埋没土	材質 牛伏砂岩、長さ7.2cm 幅7.1cm 厚さ1.2cm 重さ100g、川原石の利用。使用は、表面にあり、図左平面の左半に、一段下がり平滑面あり。主体は、尖鋭部物の凸出が少なく、金属も考えられる。	
41	砥石	+1	材質 牛伏砂岩、長さ11.9cm 幅7.0cm 厚さ3.4cm 重さ360g、川原石である。磨痕・研磨痕は、顕著でない。	
42	白玉	電埋没土	材質 燧石、長さ1.2cm 幅1.1cm 厚さ0.9cm 孔径0.3cm 重さ2.0g、穿孔は、一方の面には、穿孔を途中でやめた跡あり。側面は、やや斜め方向の研磨。平面は、刃物による削り調整。	
43	紡錘車	柱穴 埋没土	材質 燧石、長軸4.6cm 短軸2.5cm 厚さ2.2cm 孔径0.6cm 重さ66g、表面全面を、刃物による削り調整している。長軸面に、多くの磨痕あり。	

第43号住居跡

位置 4区05B49 写真 PL.29

形状 第42号住居跡及び第20号土坑により切られているため推定ではあるが、隅丸正方形か。

面積 23.29㎡ (推定) 方位 N-102°E

埋没土 ローム粒・炭化物粒を含む黒色土が主体をなす。西壁際では三角堆積をしている。

床面 西壁際でかろうじて確認できた。遺構確認面からおよそ75cm掘り下げ、そこへ黒色土とロームブロックの混合土を客土して床面を形成している。壁高は、24~68cmを測る。

竈 東壁にある。第42号住居跡により削り取られ、右袖部と燃焼部の焼土がかろうじて残っており確認

できた。造作材は粘土が主体と考えられる。

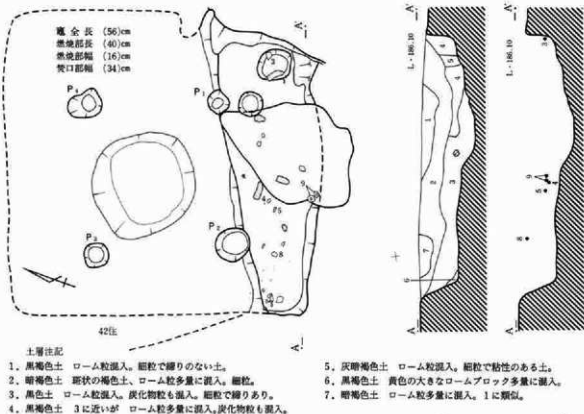
柱穴 本住居跡と第42号住居跡の掘りかたの調査中に4本検出した。各柱穴の規模(径×深さcm)は、推定で P₁:35×56 P₂:56×55 P₃:39×63 P₄:44×65である。

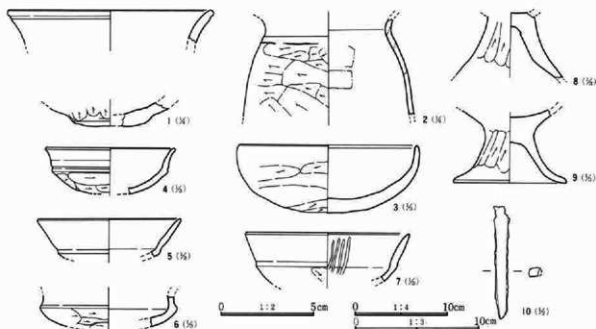
貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁の間にある。円形を呈し、径54cm深さ63cmを測る。埋没土はロームブロックを多く含む細粒の黒褐色土が主体をなす。

壁周溝 確認できなかった。

遺物 土師器壺・坏類の小破片が全体に散らばっており出土している。

備考 第42号住居跡・第20号土坑と重複。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半とした。(鹿沼)





第116図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土遺物観察表 (PL.123)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	埋没土	□(21.7) 底(8.2) 口縁片と底部片 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。	内面 胴部撫で。
2	土師器 壺	埋没土	□一高一底一 類(13.6) 胴一胴 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。	内面 縦撫で。
3	土師器 杯	+10	□(14.4) 高5.2 丸底 □一底 ⅔	①細・白色灰微量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部一底部横削 り。内面 体部撫で。	内外共口縁部横撫で。外面 体部一底部横削 り。内面 体部撫で。
4	土師器 杯	+25	□(19.2) 高一丸底 □一底 ⅔	①細・白色灰微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部一底部横削 り。内面 体部撫で。	内外共口縁部横撫で。外面 体部一底部横削 り。内面 体部撫で。
5	土師器 杯	+27	□(11.5) 高一底一 □一底 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③明褐色	内外共口縁部横撫で。	内面は黒色地 肌。
6	土師器 杯	埋没土	□一類(11.0) 底一□一底部片	①細・白色灰微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部撫削り。	内面 体部撫で。
7	土師器 杯	埋没土	□(13.0) 高一底一 □一底 ⅔	①細・白色灰微量 ②酸 化・軟 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦削り。	内面 体部撫で。暗文。
8	土師器 高杯	+52	□一高一底一 脚部 ⅔	①細・白色黒色灰少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 胴部縦削り。 内面 杯底部・脚部撫で。	
9	土師器 高杯	+27	□一高一底9.0 杯底部一底部 ⅔	①細・赤色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部斜削削り。 内面 杯底部・脚部撫で。	
10	釘か儀	埋没土	全長5.9cm横断面形は、長方形を呈し、両端部は調査時欠損。錆化は不定方向に進み、縁の茎、または、釘を思わせる。			

第44号住居跡

位置 4区10B48 写真 PL.29

形状 周辺の3軒の住居跡と芋穴により一部切られている。長辺4.46m 短辺4.12mの隅丸正方形。

面積 16.97m²(推定) 方位 N-52°-E

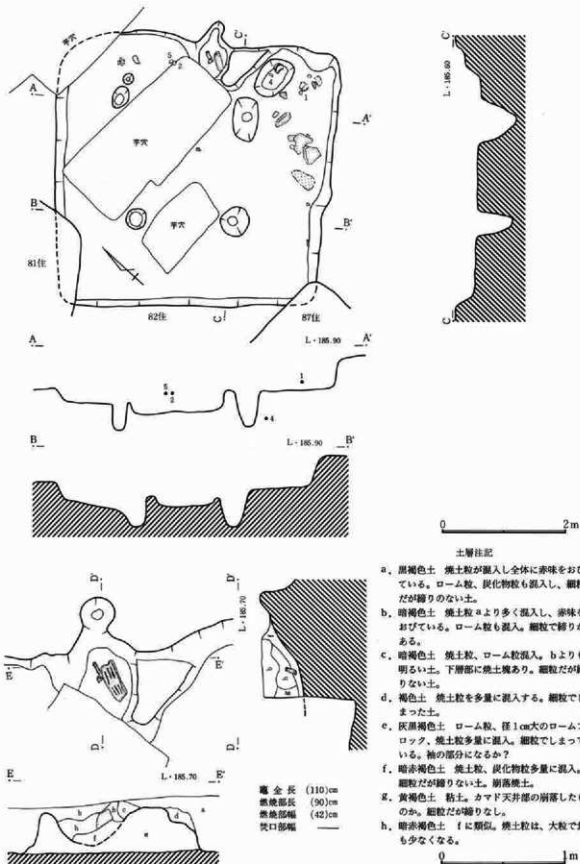
埋没土 斑状の褐色土・ローム粒が混入する黒褐色土が主体をなす。下層にいくほど細粒で粘性が強い。

床面 近・現代の3つの芋穴により攪乱を受けてい

る。確認面でおよそ70cm程掘り込み、その上に暗褐色土とロームブロックの混合土を客土し、貼床としている。掘りかたの調査中に住居中央や南寄りから径1m程の円形の床下土坑を1つ確認した。

竈 東壁ほぼ中央にある。芋穴により⅔程切られている。造作材は、粘土が主体である。燃焼部より雲母石英片岩が2つ出土したが支脚と袖石に利用された可能性が高い。また、南壁付近より長方形に整形

第3章 検出された遺構と遺物



第117図 第44号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

された泥岩が2つに割れて出土しており、天井石に使用されたと思われる。火床面は、燃焼部はほぼ平坦で煙道部にいくに従い緩やかに立ち上がる。

柱穴 住居外形のほぼ対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:40×56 P₂:44×56 P₃:32×46 P₄:25×40である。

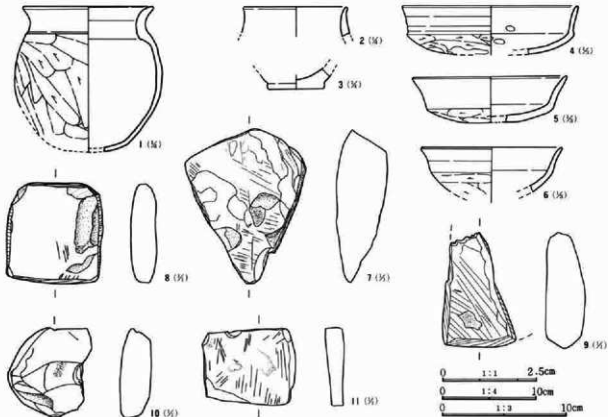
貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁の間にある。長軸60

cm短軸54cmの楕円形を呈し、深さ66cmを測る。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 貯蔵穴の周りから土師器小型甕・坏類が出土した。また、方形の滑石製模造品が5点出土した。その成形は磨きによる。

備考 第81・82・87号住居跡と重複。出土遺物から本住居跡の年代観を6世紀後半とした。 (鹿沼)



第118図 第44号住居跡出土遺物実測図

第44号住居跡出土遺物観察表 (PL.123)

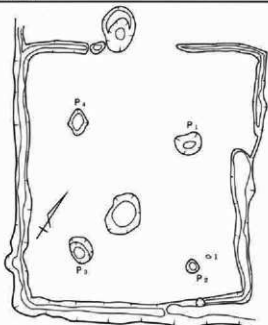
番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	+18	口径14.0 高(15.4) 底(8.5) 口～底 残	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。内面 胴部撫で。	
2	土師器 甕	+1	口径(11.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色灰色灰少量②酸化・普通③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。	
3	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底(6.0) 底部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・軟 ③鈍い赤褐色	底部底起し。	
4	土師器 坏	貯蔵穴中 -38	口径14.0 高一 底一 口～底 残	①細・夾雑物なし ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横削り。内面 体部撫で。	
5	土師器 坏	+1	口径(12.4) 高(3.6) 底一 口～底 残	①細・黒色灰微量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部削り。内面 体部撫で。	
6	土師器 坏	埋没土	口径(11.2) 高一 底一 口～底 残	①細・白色灰微量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部削り。内面 体部撫で。	内面底部、黒色処理か？
7	未成品	埋没土	材質 滑石。長さ4.1cm 幅3.2cm 厚さ1.4cm	重さ17.5g。全面を研磨して整形しているが、完全に磨き込んでいないため、ところどころに原石面が、露出している。形状から、劍形に見えるが、断面が厚すぎる。		
8	方板	埋没土	材質 滑石。長さ2.6cm 幅2.6cm 厚さ0.6cm	重さ9g。四面磨すべで、研磨している。表裏面は、刃物による磨りか。成品か未成品か、不明。		

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	特 徴
9	未成品	埋没土	材質 礫石。長さ3.0cm 幅1.9cm 厚さ1.0cm 重さ7.6g。全面すべて研磨で整形しているが、完全に磨き込んでいないため、原石面が露出している。表面に、穿孔しようとした跡あり。
10	未成品	埋没土	材質 礫石。長さ2.4cm 幅2.0cm 厚さ0.8cm 重さ6.6g。穿孔しようとして、割れたものか。側面は、研磨による調整。表面は、汚物による磨り調整。
11	方板	埋没土	材質 礫石。長さ2.4cm 幅1.9cm 厚さ0.5cm 重さ0.5g。全面、研磨で整形しているが、完全でないため、原石面が露出している部分あり。完成品か、未成品か不明。

第45号住居跡

位置 4区24C06 写真 PL.21
 形状 長辺4.16m短辺4.00mのほぼ正方形を呈する。
 面積 15.65㎡ 方位 N-30°-W
 埋没土 第23号住居跡と重複するため確認できなかった。
 床面 第23号住居跡と重複するため、不明。
 竈 竈自体は第23号住居跡のために破壊され現存しないが、その位置は周溝のされる北側のほぼ中央にあったものと考えられる。調査では、その部分に若干の焼土を検出した。
 貯蔵穴 確認できなかった。
 柱穴 掘りかたの調査中に住居外形の対角線上に、4本の主柱穴が検出された。



第119図 第45号住居跡実測図

壁周溝 北側の一部をのぞき、ほぼ方形に巡る。
 遺物 掘りかた面の客土中に、壺・杯の破片が数点出土した。
 備考 本住居跡全体が、第23号住居跡と重複しており、その新旧関係は、本住居跡の竈が第23号住居跡

に壊されていることなどから、本住居跡の方が旧いと考えられる。第23号住居跡は本住居跡を拡張して造られたものと考えられる。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第45号住居跡出土遺物観察表 (PL.一)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師壺 壺	-1	口(22.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横溝で。	
2	土師壺 壺	埋没土	口一 高一 底一 頸(16.5) 頸~胴部片	①普通・白色少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共頸部横溝で。外面 胴部縦溝あり。 内面 胴部横溝で。	
3	土師壺 杯	埋没土	口(13.2) 高一 底一 口~底部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部縦溝あり。 内面 体部無で。	
4	土師壺 杯	床下埋没 土	口(13.8) 高一 底一 口縁部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横溝で。	
5	土師壺 杯	埋没土	口11.5 高一 底一 口~底部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部縦溝あり。 内面 体部無で。	

第46号住居跡

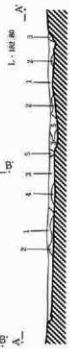
位置 4区04B35 写真 PL.30

形状 一部が調査区域外にあるため推定ではあるが、長辺4.70m短辺4.50mの隅丸正方形と思われる。

面積 21.60㎡ (推定) 方位 N-90°-E

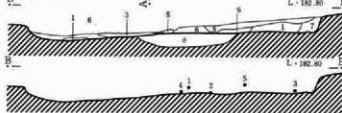
埋没土 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が粘性のあるロームブロックを多く含みながらブロック状に埋まっており、人為的な堆積と考えられる。

床面 確認面でローム層を40cm程掘り込み、その上に黒褐色土と黄褐色土の混合土を客土して床面を形



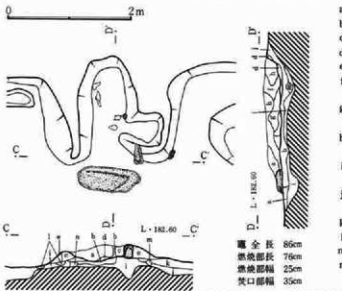
土層注記

1. 黒褐色土 ロームの粒、ブロック多量に混入。細粒でしまっている。
2. 黄褐色土 ロームブロック多量に混入。粘性あり。堅くしまっている。
3. 茶褐色土 2と非常に近いが、2ほど粘性なく、締りもない。
4. 褐色土 ロームの粒、ブロック多量に混入。3よりも粘性あり。しまっている。
5. 暗褐色土 ロームの粒混入。粒子粗く、たいへんもろい。
6. 明茶褐色土 ロームの粒混入。粘性あり。しまっている。
7. 暗褐色土 5に近いが5以上にロームブロック混入。壁の崩れたものらしい。粘性あり強い。
8. 床下土坑 覆土



土層注記

- a. 灰褐色土 焼土の小塊を多量に含む(復乱層)。
- b. 暗赤褐色土 粘質焼土塊を多く、炭化物を少量含む。
- c. 褐色土 焼土塊を多く含む。粗粒で締りが弱い。
- d. 焼土
- e. 黄色粘土(左側袖)
- f. 濃茶褐色土 焼土粒、少量の炭化物を含む。細粒でしまっている。
- g. 灰褐色土 細粒のローム粒、焼土粒を含む。細粒でしまっている。
- h. 灰茶褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。細粒で締っている。
- i. 灰褐色土 ローム粒、暗褐色土ブロック、ロームブロック混入。細粒で粘性がある。ローム漸移層か。
- j. 褐色土 ローム粒多量に混入。細粒でしまっている。ローム漸移層か。
- k. 黄色粘土
- l. 黒褐色土ブロック
- m. 灰褐色土ブロック
- n. 焼土ブロック



■ 全長 86cm
 ■ 溝底幅 76cm
 ■ 溝壁厚 25cm
 ■ 溝口幅 35cm

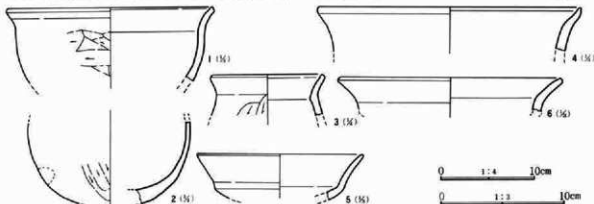
第121図 第46号住居跡実測図

0 1m

第3章 検出された遺構と遺物

成している。竈前面に大変堅い面を確認した。掘りかたの調査中に、住居中央より長軸2m短軸1.6mを測る楕円形の床下土坑を確認した。なお、壁高は確認面で14~31cmであった。

竈 東壁中央にある。煙道部を除いてすべて屋内に構築されている。残存状態はあまり良くないが、造作材は、黄色粘土が主体をなし、焚口部前には天井石として使用された雲母石英片岩が出土し、また、右袖からは牛伏砂岩が出土した。燃焼部は平坦であり、煙道部は緩やかに立ち上がっていたと思われる。



第122図 第46号住居跡出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表 (PL.123)

器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1 土師器 鉢	竈内	口(22.0) 高一底一 口~胴 Ⅴ	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部瓦削り。 内面 胴部無で。	
2 土師器 小皿	-2	口一高一底一 胴(17.2) 胴~底 Ⅴ	①普通・灰色灰微量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 胴部斜め瓦削り。 内面 胴部無で。	外面に指圧痕あり。
3 土師器 甕	+7	口(11.6) 高一底一 口~胴部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③灰赤色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部破瓦削り。 内面 胴部無で。	
4 土師器 甕	+9	口(28.4) 高一底一 口縁部片	①細・白色灰色灰微量 ②酸化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。	
5 土師器 杯	+16	口(13.4) 高一底一 口~体 Ⅴ	①細・灰色灰微量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。	
6 土師器 高杯	埋没土	口(17.6) 高一底一 口縁部片	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。	

第47号住居跡

位置 4区07B36 写真 PL.30

形状 一辺が4mの隅丸正方形を呈する。

面積 15.56㎡ 方位 N-59°-E

埋没土 ローム粒・ロームブロックを多量に含む黒褐色土が主体をなす。壁際は三角堆積をし、中央はレンズ状堆積をしている。

床面 確認面でローム層をおよそ40cm程掘り込み、

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:46×45 P₂:56×43 P₃:54×54 P₄:42×43である。

貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁との間にある。長軸77cm短軸66cmの楕円形を呈し、深さは79cmを測る。壁周溝 貯蔵穴周辺を除き、幅18~24cm深さ6~11cmで全周あったと考えられる。

遺物 竈燃焼部から土師器類などの破片が出土した。

備考 本住居跡の年代観は、出土遺物から7世紀前半としたい。(鹿沼)

その上に18cm程灰褐色土と黄褐色土の混合土を客土して床面を形成している。住居中央に大変堅い面があった。壁高は、確認面で12~22cmであった。なお、掘りかたの調査中に、住居中央から径1.5mの円形の床下土坑を確認した。

竈 東壁ほぼ中央にあり、煙道部を除いてすべて屋内に構築されている。造作材は、黄色粘土が主体である。焚口部には天井石として使用された雲母石英

片岩が2つに割れて出土し、また右袖石として緑色片岩が左袖石として砂岩がそれぞれ使用されていた。支脚には緑色片岩が1本あった。燃焼部は平坦で煙道部は緩やかに立ち上がっている。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、 $P_1: 44 \times 74$ $P_2: 36 \times 60$ $P_3: 37 \times 66$ $P_4: 44 \times 46$ である。

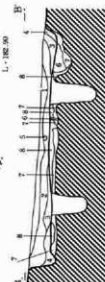
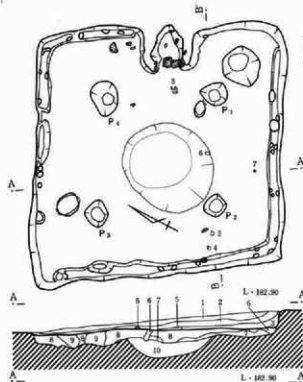
貯蔵穴 竪向かって右、 P_1 と壁との間にある。径60cmの円形を呈し、深さは92cmを測る。

壁周溝 貯蔵穴付近と北西隅を除いて確認した。幅18~28cm深さ9~13cmを測る。

遺物 土師器杯の破片・刃ならし傷のある砂岩製の砥石などが出土している。

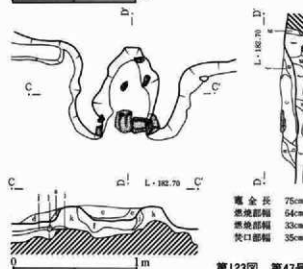
備考 本住居跡の年代観を6世紀前半としたい。

(鹿沼)



土層注記

1. 灰黒褐色土 ローム粒、ブロック混入。粒子粗く、粘性弱い。
2. 黒褐色土 ローム粒、ブロック多量に混入。黒色土のブロックも混入。粒子細かく、粘性あり。塵粒も混入している。
3. 褐色土 ローム粒、径2cm大のロームブロックが多量に混入。粒子細かく、粘性あり。
4. 黄褐色土 ロームのブロック多量に混入。壁が崩れたものと思われる。粘性より弱い。
5. 黄褐色土のブロック、粒子が粗くもろい。
6. 灰黒褐色土 ローム粒混入。細粒で粘性があり、しまっている。
7. 黄褐色土 ローム漸移層。細粒でしまっている。
8. 灰褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に混入。細粒でしまっている。
9. 灰暗褐色土 径2~3cm大のロームブロック、ローム粒多量に混入。
10. 床下土 覆土

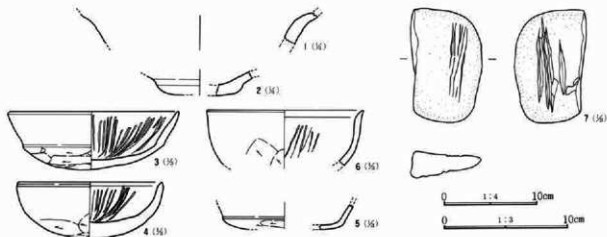


- a. 暗褐色土 黄色粘土の小塊を多く焼土粒を少量含む細粒でやや粘質。
- b. 褐色土 aよりも粘性が強く、しまっている。
- c. 灰褐色土 黄色粘土、焼土の小塊を多量に含む、やや粘質だが締りが弱い。
- d. 黒褐色土 A 軽石を含む(覆土層)。
- e. 焼土 径5mm~1cm大の鮮やかなオレンジ色の焼土小ブロックと暗赤褐色土の混入土。
- f. 暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。粗粒。
- g. 黒褐色土 径5mm大のローム粒、多量に混入。細粒だが締りが弱い。焼土粒も含む。
- h. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を含む。細粒だが締りが弱い。
- i. 黄褐色土 ローム漸移層。
- j. 褐色土 ローム粒多量に混入。細粒で粘性あり。
- k. 黄色粘土
- l. ロームブロック

高さ 75cm
 燃焼部幅 54cm
 煙道部幅 33cm
 焚口部幅 35cm

第123図 第47号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第124図 第47号住居跡出土遺物実測図

第47号住居跡出土遺物観察表 (PL.123)

品別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	埋没土	口(25.5) 高一底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部焼成で。	
2	土師器 壺	+21	口一 高一 底(9.0) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	外面 底部焼成りか? 内面 底部焼成で。	
3	土師器 杯	床直	口13.5 高4.6 丸底 ほぼ球形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横断で、体部～底部焼成り。 内面 口縁部～底部焼成で、暗文	
4	土師器 杯	+21	口(11.6) 高(4.4) 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部焼成で。外面 体部～底部焼成 り。内面 体部焼成で、暗文。	
5	土師器 杯	埋没土	口一 高一 底一 口～底部片	①細・灰雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部焼成で 外面 体部焼成り。	
6	土師器 杯	+6	口(12.5) 高一 底一 口～体部片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部焼成で。外面 体部焼成り。 内面 体部焼成で、暗文。	
7	砥石	+5	材質 牛状砂岩。長さ9.5cm 幅5.5cm 厚さ2.1cm 重さ100g。川原石の利用。使用は、表裏にあり、共に刃ならし傷が残される。主体は、夾雑物の凸出が少ないため、金属か。			

第48号住居跡

位置 4区10B37 写真 PL.31

形状 長辺5.18m短辺4.90mの隅丸正方形を呈する。

面積 25.10㎡ 方位 N-57°-W

埋没土 暗褐色土が主体をなす。壁際は三角堆積をし、中央はレンズ状堆積を呈する。

床面 確認面でローム層を1m程掘り込み、その上に33cm程暗褐色土とロームブロックとの混合土を客土して床面を形成している。掘りかたの調査中に住居中央と南寄りに2つの円形の床下土坑を確認した。径は、それぞれ1.2mと1.5mを測る。なお、壁高は、最大で73cmを測る。

竈 北壁や東寄りと西壁北寄りの2カ所に構築されていたようであるが、調査時には西壁の竈の右袖のみが残っていただけであり、その規模や形状をつかむことは出来なかった。北壁の竈のはじめに構築

され、後に西壁の竈が使用されたと考えられる。

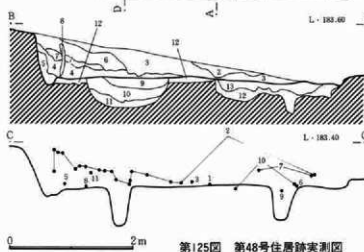
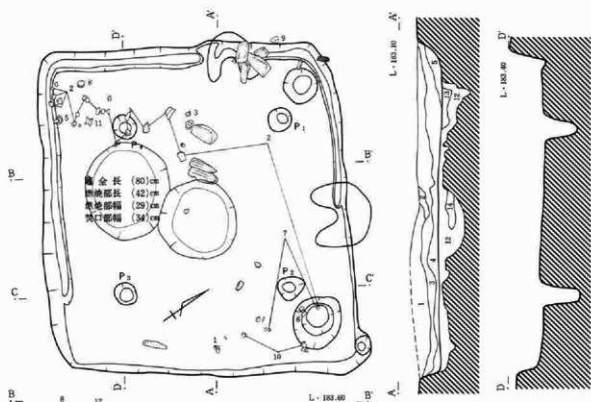
柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:38×48 P₂:44×52 P₃:40×60 P₄:42×50である。

貯蔵穴 北東隅と北西隅の2カ所に確認した。北東隅の貯蔵穴は、径90cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。北西隅のそれは、径54cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。

壁周溝 住居の西半分に幅12～33cm深さ6～8cmで確認された。

遺物 土師器類・高環・環などが住居西半分から多く出土している。また、南寄りの床下土坑から鉄製の鎌が、さらに、埋没土中ではあるが角閃石安山岩(二ツ岳砥石)の砥石も出土している。

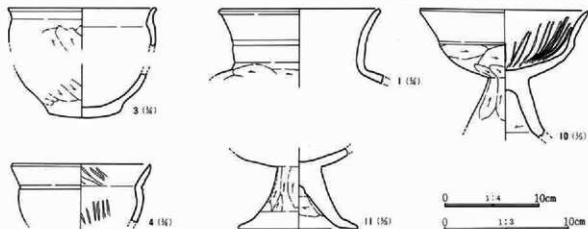
備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半としたい。(鹿沼)



第125図 第48号住居跡実測図

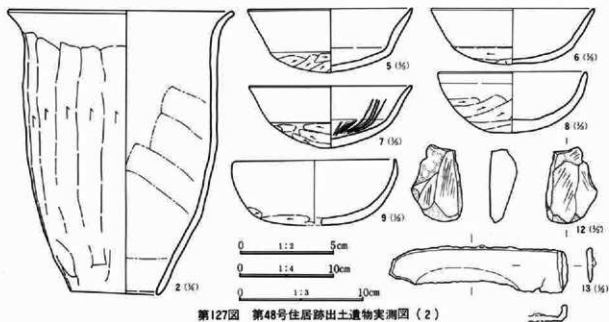
土層注記

1. 暗褐色土 全体にA軽石が混入し、もろい土。
2. 暗褐色土 A軽石少量混入。
3. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量混入。
4. 暗褐色土 3以上にローム粒多量に混入。
5. 黒褐色土 ローム粒、径5cm次のローム塊混入。
6. 明黒褐色土 ローム粒多量に混入。
7. 黒褐色土とロームブロックの混合土
8. 暗褐色土 根の痕の、ローム粒少量混入。
9. 黄色土 黄色ローム。堅くしまった粘床。
10. 暗褐色土 小ロームブロックを多量に含む。
11. 暗褐色土 大形のロームブロックを多量に含む。
12. 暗黄褐色土 ロームと褐色土との混合土(粘床)。
13. 暗褐色土 ロームブロック少量。やや堅い。
14. 暗褐色土 2と類似。混入物少ない。



第126図 第48号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第127図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)

第48号住居跡出土遺物観察表 (PL.123, 124)

番号	器種 器形	出土位置 残存状態	口径 高さ 底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	+2 口(16.9) 高一底一 口一肩 片	口(16.9) 高一底一 口一肩 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	外面 口縁部横撫で、胴部横篋削り。 内面 口縁部横撫で。	
2	土師器 甕	+7 口24.1 高29.8 底10.1 口～底 片	口24.1 高29.8 底10.1 口～底 片	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦篋削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦撫で。	
3	土師器 小空甕	+8 口(16.0) 底7.6 口～胴・底部 片	口(16.0) 底7.6 口～胴・底部 片	①普通・白色灰色紅多量 ②酸化・普通③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部斜め縦削り、底部 縦削り。内面 口縁部横撫で、胴部横撫で。	内面は黒色処理。
4	土師器 鉢	貯蔵穴 埋没土	口(14.8) 高一底一 口一底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部は摩耗して いるため不明。内面 増文あり。	
5	土師器 杯	+16 口13.0 高5.0 丸底 欠形	口13.0 高5.0 丸底 欠形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 撫で。	
6	土師器 杯	+4 口13.0 高4.3 丸底 口～底 片	口13.0 高4.3 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 撫で。	
7	土師器 杯	+20 口(13.0) 高4.8 丸底 口～底 片	口(13.0) 高4.8 丸底 口～底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 撫で後、暗文。	
8	土師器 杯	+8 口11.8 高4.8 丸底 欠形	口11.8 高4.8 丸底 欠形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 撫で。	
9	土師器 杯	床底 口(13.0) 高5.0 丸底 口～底 片	口(13.0) 高5.0 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 撫で。	
10	土師器 高杯	-2 口(13.3) 高一底一 口～底 片	口(13.3) 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。外面 杯部～脚部縦削り。 内面 杯部撫で、脚部縦削り、底部縦撫で。	内面に暗文あり。
11	土師器 高杯	+29 口一高一側(9.6) 杯底部～胴部 片	口一高一側(9.6) 杯底部～胴部 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	外面 杯底部～脚部縦削り、胴部横撫で。 内面 胴部回転縦削り、胴部横撫で。	杯部内面に暗文あり。
12	磁石 埋没土	材質 角閃石安山岩(ニツ格磁石)。長さ5.7cm 幅4.7cm 厚さ2.4cm 重さ33g。割れ口を除き、原石状態を示す 箇所がなく、旧形状不詳。使用は、旧時の割れ口を除き、表裏にあり。主体は、金属。				
13	鎌 埋没土	床下土坑 残存長9.5cm				小型鎌で、欠損は少ない。刃は、表側の方が顕著に屈がれ、裏側にも研磨の浅い縁が立つ。 刃区から耳部の間、推定される柄部の直径は、2.1cm以下。

第49号住居跡

位置 4区02B40

写真 PL.31

形状 長辺4.60m 短辺4.38mを測る隅丸正方形を呈する。

面積 20.03㎡(推定)

方位 N-57°-E

埋没土 ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土

が主体をなす。

床面 確認面でローム層を30cm程掘り込んだ高さに床面を形成していた。掘りかたの調査は出来なかったが、床面の状況より混合土を寄土していると思われる。

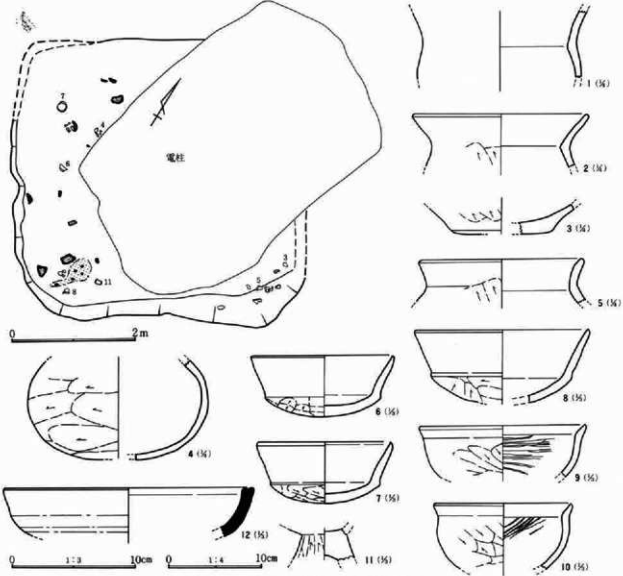
壁 北壁にあると思われるが、調査できなかった。

柱穴 貯蔵穴 壁周溝 確認できなかった。

遺物 土師器甕の口縁部・土師器坏などが床面直上から出土した。また、炭化物がかなりの量出土している。(材については附編第3節参照)

備考 電柱があったため、部分的な調査しかできな

かった。第35号住居跡と西隅でわずかに重複している。本住居跡のほうが古い。また、炭化物が多く出土しており、火災にあったか焼却廃棄した可能性もある。本住居跡の年代観を遺物より6世紀前半としたい。(鹿沼)



第128図 第49号住居跡実測図及び出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表 (PL.124)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	埋没土	口一類(16.5) 底一口~胴部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。外面 胴部削で。	内面 胴部削で。
2	土師器 甕	埋没土	口(18.9) 高一底一 口~胴部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	内外共口縁部横断で。外面 胴部削で。	内面 胴部削で。
3	土師器 甕	+15	口一高一底(10.5) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 底部斜め削り。	内面 底部削で。
4	土師器 甕	+10	口一高一底一 胴(19.2) 胴~底 ¾	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴部~底部横削り。	内面 胴部~底部削で。

第3章 検出された遺構と遺物

図例	遺構 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
5	土師器 壺	+9	口(17.6) 高一 底一 口~底(破片)	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部覆削り。 内面 頸部撫で。	
6	土師器 坏	+6	口11.6 高4.8 丸底 完形	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部斜め 覆削り。内面 体部撫で。	
7	土師器 坏	+13	口10.7 高4.8 丸底 口~底 瓦	①細・白色減少量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部斜め 覆削り。内面 体部撫で。	
8	土師器 坏	+20	口(13.9) 高一 底一 口~底 瓦	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部覆削 り。内面 体部撫で。	
9	土師器 坏	埋没土	口(13.3) 高一 底一 口~底部片	①細・白色減少量 ②酸 化・硬 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部斜め覆削り。 内面 体部撫で。	
10	土師器 坏	埋没土	口(11.0) 高一 底一 口~底 瓦	①細・赤色減少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部斜め覆削り。 内面 体部磨き。	
11	土師器 高 坏	+13	口一 高一 底一 脚 上部(3.7) 脚部片	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 脚部縦削り。	
12	須恵器 甕	埋没土	口(19.9) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色減少量 ② 還元・硬 ③灰褐色	覆削り調整。紐作り後口口整形。	流れ込みか。

第53号住居跡

位置 4区12C14 写真 PL.31, 32

形状 長辺7.25m 短辺6.90mの正方形を呈する。

面積 51.35㎡ 方位 N-120°-W

埋没土 黒褐色土・暗褐色土が主体をなし、径1~3cm大のロームブロックが混入している。また、どの層にも多量の炭化物が混入しており、火災を受けた可能性が高い。

床面 南東から北西へむかう緩やかな斜面を、確認面でローム層を70cm掘り込み、その上に黒褐色土とロームブロックの混合土を10~25cm程客土し堅く踏みしめて床面を形成している。南側と北側の床面の比高差は、20cm程度であり、ほぼ平坦と考えてよい。また、竈前面から床面中央にかけて非常に堅くしまった部分を確認した。掘りかたの調査中、住居ほぼ中央に径2.1m深さ0.3mを測る床下土坑を確認した。なお、壁高は、確認面で12~61cmであった。

竈 西側の壁にあり、すべて住居内にある。造作材は、粘土を主体とし、焚口部には雲母石英片岩が左右の袖石として立ち、また、燃焼部に天井石として使用された泥岩が落下していた。燃焼部には雲母石英片岩が2本、支脚として使用されていた。火床面は、焚口部ではほぼ平坦で燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がっている。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:45×105 P₂:58×88

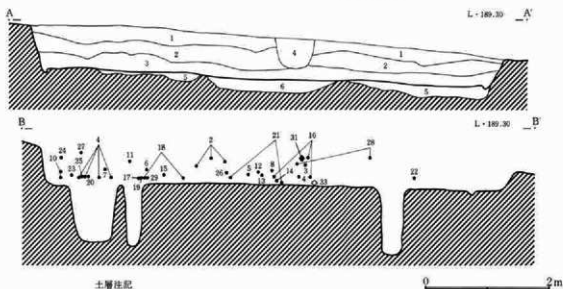
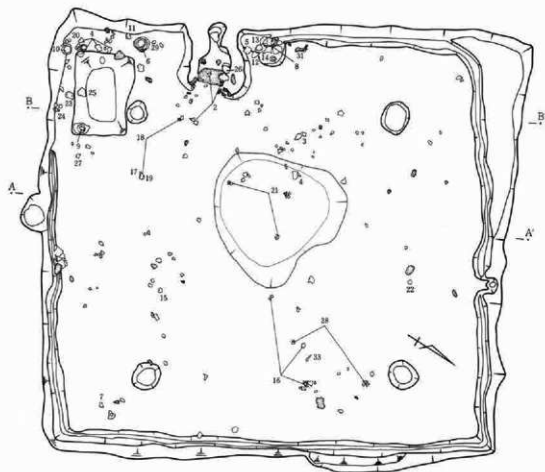
P₃:44×85 P₄:32×100をそれぞれ測る。

貯蔵穴 竈に向かって左側、柱穴P₄と南壁の間に位置する。長辺1.3m短辺0.75mの長方形を呈し、深さ0.95mを測る。覆土のほぼ中間から炭化物の塊や粒が多量に検出され、この住居が火災を受けたときには、貯蔵穴の半分ほどが埋まっていたことになる。また、覆土上部より器台に転用された甕の口縁部が出土した。

壁周溝 南西隅の貯蔵穴周辺を除いて存在する。幅12~25cm、深さ15~20cmを測る。

遺物 竈右側から大型甕・小型甕・坏が、左側より器台に転用された須恵器大甕の口縁部とその上に小型甕が乗った状態でそれぞれ出土している。また、埋没土中ではあるが、金銅製耳環が出土しているのも特徴である。さらに、鉄製鉋が住居東側の床面直上より出土している。

備考 床面直上より炭化材が多量に出土しており、しかも良好な残存状態であったのでそのうち5点について炭化材同定をおこなった。結果は、1点がモミ属の一種で、残りの4点はすべてアカガシ亜属であることが判明した。(附録 第3節 炭化材同定参照) 重複する住居跡は第52号である。また、本住居跡と近接する第36号・27号住居跡とは主軸方位が一致し、遺物もほぼ同時期のものと考えられるので何等かの関連があるものと思われる。遺物より本住居跡の年代観を6世紀前半としたい。(鹿沼)

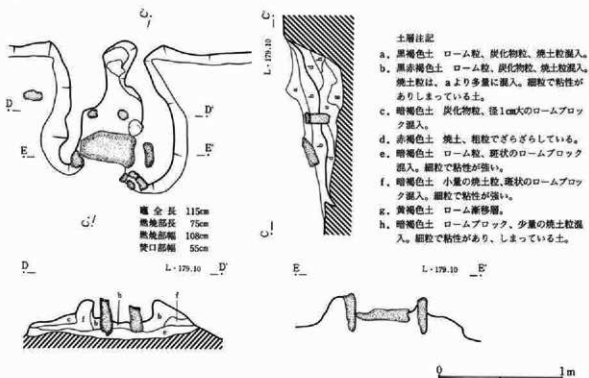


土層注記

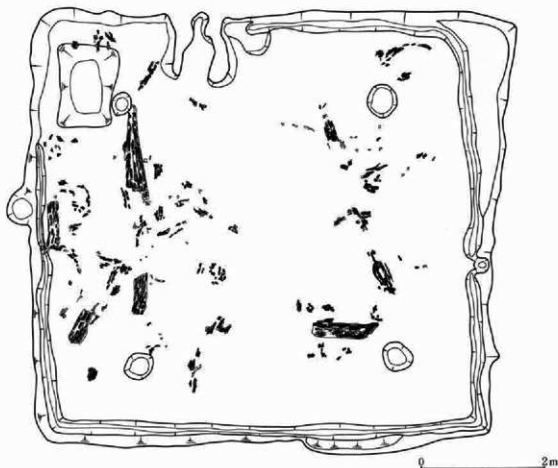
- | | | |
|----------|-------------------------------------|------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒、炭化物粒混入。細粒だが網りに欠ける。 | か？ |
| 2. 灰暗褐色土 | ローム粒、径1~3cm大のロームブロック、炭化物粒 多量に混入。 | 5. ローム新移層 |
| 3. 増黄褐色土 | ローム粒、径1cm大のロームブロック、炭化物粒 多量に混入。粘性あり。 | 6. 黒褐色土と黄褐色土の混合土(床下土坑) |
| 4. 黒褐色土 | ローム粒、炭化物粒混入。1よりも黒い。新しい土坑 | |

第129図 第53号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

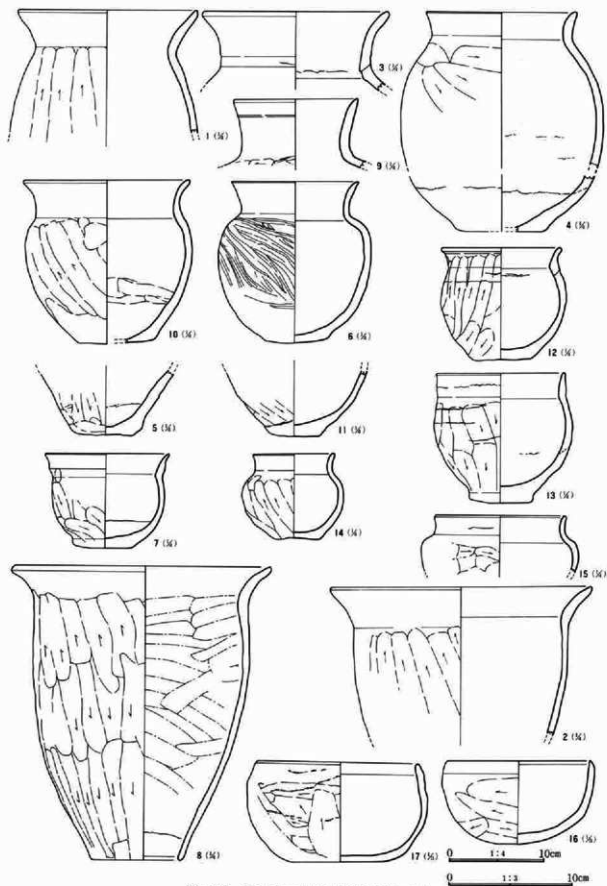


第130図 第53号住居跡縦断面図



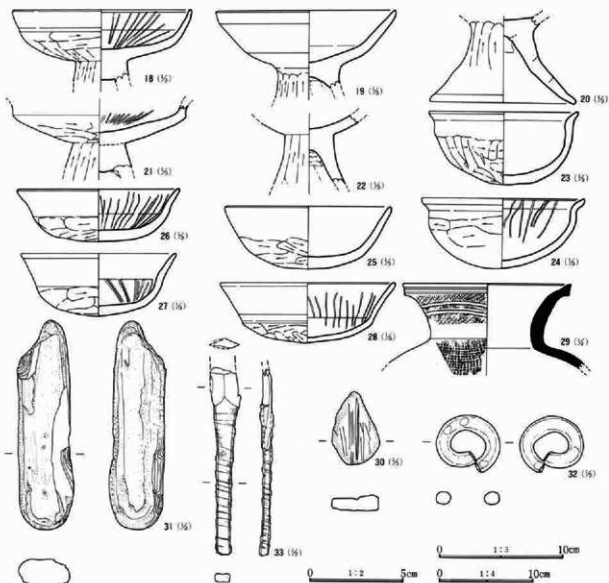
第131図 第53号住居跡炭化物出土状態実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第132図 第53号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第133図 第53号住居跡出土遺物実測図(2)

第53号住居跡出土遺物観察表 (PL.124, 125, 126)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	貯蔵穴 埋没土	□19.0 高一底一 口一割 ㄉ	①普通・白色紅多量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部縦筋で。	
2	土師器 甕	竈内 +23	□(28.0) 高一底一 口一割 ㄉ	①普通・白色灰色紅多量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部縦筋で。	
3	土師器 甕	+27	□(20.0) 高一底一 口縁部片	①普通・白色紅多量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で。内面 頸部無しで。	
4	土師器 甕	+2	□(16.0) 高(9.0) 口一割と割一底 ㄉ	①細・白色灰色紅多量 ②酸化・軟 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部縦筋で。	
5	土師器 長胴甕	+15	□一 高一 底7.0 割一底 ㄉ	①普通・白色紅多量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	外面 胴下半部筋有り。 内面 胴下半部筋で。	
6	土師器 小型甕	+15	□13.5 高17.0 底6.5 ほぼ丸形	①細・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。胴部 筋無し。	
7	土師器 小型甕	+14	□(13.2) 高(10.0) 底6.0 口一底 ㄉ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部筋で。	内面底部にリン グ状痕あり。
8	土師器 甕	+25	□27.7 高31.0 底9.5 ほぼ丸形	①普通・白色灰色紅多量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦筋有り。 内面 胴部筋無しで。	

第3節 古墳時代の遺構と遺物

種別	器類 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
9	土師器 小型壺	貯蔵穴 埋没土	□13.2 高— 底— 口径部	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部置削り。	器台として転用。
10	土師器 小型壺	+2	□17.5 高17.2 底8.0 ほぼ完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め置削り。 内面 胴部横撫で。	
11	土師器 小型壺	+24	□— 高— 底5.0 胴—底 互	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め置削り。 内面 胴下半部横撫で。	
12	土師器 小型壺	+14	□12.6 高11.8 底6.3 完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部横撫で。	
13	土師器 小型壺	+21	□(13.8) 高13.7 底6.8 □—底 互	①細・白色灰少量 ②酸化 ・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部破綻置削り。 内面 胴部横撫で。	
14	土師器 小型壺	+5	□8.7 高9.0 底5.0 完形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め置削り。 内面 胴部横撫で。	
15	土師器 小型壺	+9	□(14.0)高— 底— □—胴 互	①細・白色黒色灰微量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部破綻置削り。 内面 胴部横撫で。	
16	土師器 環	+10	□11.3 高6.6 丸底 □—底 互	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横置削り。 内面 体部横撫で。	
17	土師器 環	+3	□12.8 高7.8 底7.5 ほぼ完形	①細・白色灰色灰微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部置削り。 内面 体部横撫で。	
18	土師器 高 環	+3	□14.4 高— □—柱 互	①細・白色灰少量 ②酸化 ・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 環部～胴部置削り。 内面 環部横撫で。暗文。	
19	土師器 高 環	+3	□(14.5) 高— 底— □—柱 互	①細・白色灰少量 ②酸化 ・普通 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 環部～胴部置削り。 内面 環部横撫で。	
20	土師器 高 環	+4	□— 高— 幅11.6 脚部 互	①細・白色灰少量 ②酸化 ・普通 ③橙褐色	外面 脚部置削り。 内面 胴部横撫で。	
21	土師器 高 環	+2	□— 高— 環部13.9 環部～柱部 互	①細・白色灰色灰微量 ②酸化・普通 ③橙褐色	外面 環部横置削り。脚部縦置削り。 内面 環部横撫で。暗文。	
22	土師器 高 環	+12	□—高— 環部4.0 環部～脚部片	①細・白色灰少量 ②酸化 ・普通 ③橙褐色	外面 環部～胴部置削り。 内面 環部横撫で。脚部置削り。	
23	土師器 環	+2	□12.0 高5.7 丸底 □—底 互	①細・白色灰少量 ②酸化 ・硬 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横置削り。 内面 体部横撫で。	
24	土師器 環	+30	□(13.0) 高5.5 丸底 □—底 互	①細・灰色灰少量 ②酸化 ・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横置削り。 内面 体部横撫で。暗文。	
25	土師器 環	+1	□13.2 高5.0 丸底 完形	①細・灰色灰少量 ②酸化 ・普通 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部置削り。 内面 体部横撫で。	
26	土師器 環	甕内 +7	□13.0 高4.1 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸化 ・硬 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部置削り。 内面 横撫で。暗文。	
27	土師器 環	+38	□(12.4) 高4.9 丸底 □—底 互	①細・灰色灰少量 ②酸化 ・硬 ③鈍い橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部置削り。 内面 横撫で。暗文。	
28	土師器 環	+31	□(14.0) 高4.7 丸底 □—底 互	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部置削り。 内面 横撫で。暗文。	
29	須恵器 壺	+2	□(18.0) 高— 底— □—胴 互	①細・白色灰少量 ②還元 ・硬 ③灰褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 口縁部 波状文。肩部 格子叩き。	器台として転用。
30	磁石 埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ5.7cm 幅3.8cm 厚さ1.2cm 重さ25g。川原石の利用。使用は、表裏面に写ならし傷。底平面の平面に研磨痕あり。主体は、表面に凸凹があり、木などの軟質の物質か。				
31	敲打石	+41	材質 黒色片岩。長さ16.5cm 幅4.1cm 厚さ2.3cm 重さ300g。側面に、敲打時の剥離痕あり。流れ込みの可能性が高い。			
32	金銅製 耳環	埋没土	長3.4cm 径5.0cm 重さ25.5g	図左下方部は、内側に曲げられている。また、両端部は、打ちつぶされ、扁平になっている。全体に緑青が付着しており、かろうじて、一部に金が確認できる。		
33	鉄製品 鉾	+1	残存長9.8cm	基部は調査時、先端は旧時欠損。基部にセルロース様の物質のまきつき痕あり。茎の横断面は長方形を呈する。錆化は顕著でなく、良質の鉄を思わせる。		

第56号住居跡

位置 4区09B40

写真 PL.33

形状 長辺5.70m短辺5.32mの隅丸正方形を呈する。

面積 29.63㎡ 方位 N-27°-W

埋没土 ローム径・径1～5cmのロームブロック・

炭化物粒を含む暗褐色土が主体をなす。壁際は三角

堆積をし、中央はレンズ状堆積を呈する。

床面 確認面でローム層を110cmほど掘り込み、その

上に黒褐色土と黄褐色土の混合土を主体とする土を

客土して貼床を形成している。掘りかたの調査をした

が、床下土坑は確認できなかった。なお、壁高は、

32～56cmを測る。

第3章 検出された遺構と遺物

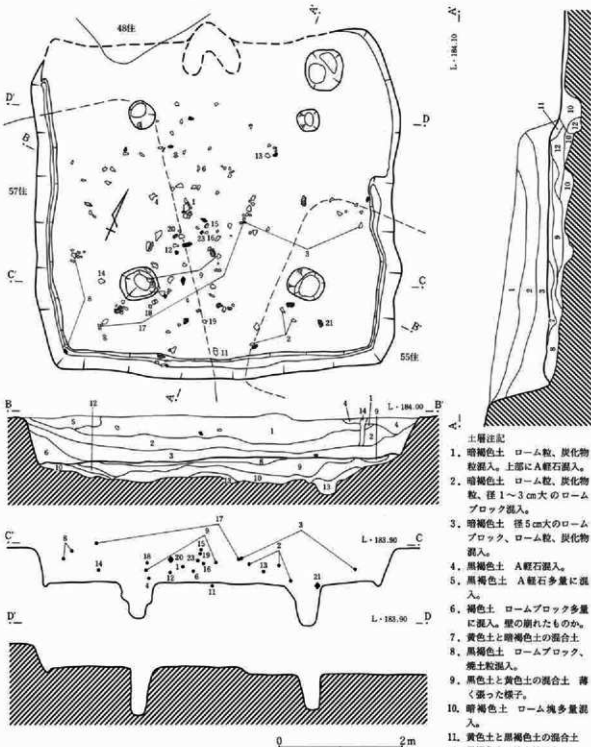
竈 北壁中央に焼土面が確認され、竈と判明した。形状・造作材等は不明であるが、煙道部を除いて屋内に構築されていたと考えられる。

柱穴 住居外形の対角線上に4本検出。各柱穴の規模(径×深さcm)は、P₁:34×54 P₂:50×60

P₃:70×60 P₄:46×78を測る。

貯蔵穴 竈向かって右、P₁と壁との間にある。形状は、円形で径70cm 深さ46cmを測る。

壁周溝 住居南側に幅22~38cm 深さ5~11cmの規模で確認された。北向きに関しては削平されているた



第134図 第56号住居跡実測図

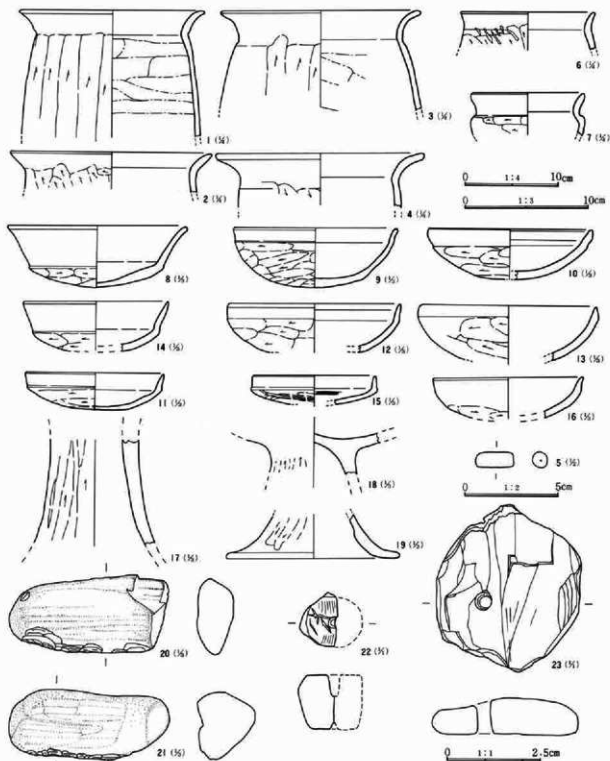
第3節 古墳時代の遺構と遺物

め、不明である。

遺物 電付近は削平されているため、出土はなく、住居中央より南側に多く出土した。土師器甕・瓶の口縁部、土師器坏等が多い。また、滑石製模造品の

有孔円板・白玉、雲母石英片岩製のハンマーストーン等も出土している。

備考 第55号・57号・48号住居跡と重複。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半とした。(鹿沼)



第135図 第56号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

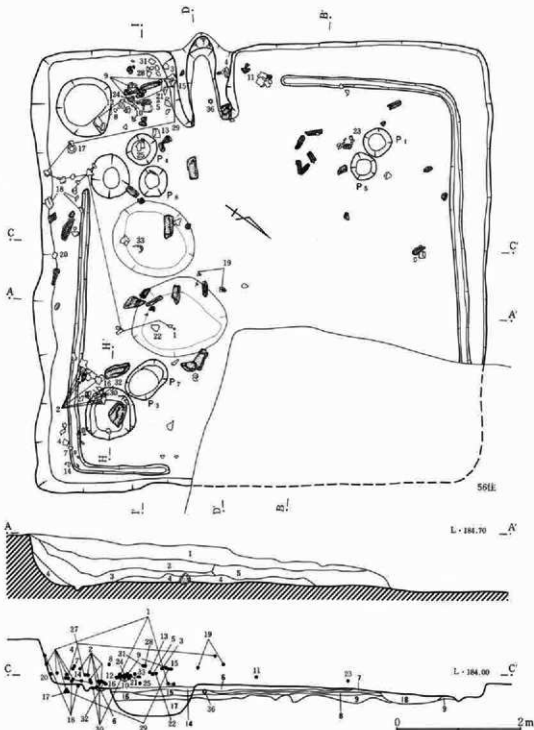


第136図 第56号住居跡出土遺物実測図(2) 0 1:3 10cm

第56号住居跡出土遺物観察表 (PL.126)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長頸壺	+30	口(19.8) 高一底一 口~胴部片 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 胴部縦割で。 内面 胴部縦割で。	
2	土師器 長頸壺	+7	口(21.6) 高一底一 口縁部 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 頸部縦割り。	
3	土師器 長頸壺	+23	口(21.4) 高一底一 口~胴 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 胴部縦割り。 内面 胴部縦割で。	
4	土師器 長頸壺	+13	口(30.4) 高一底一 口~胴部片 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 頸部縦割り。 内面 頸部無で。	
5	土製品 埴段土	径0.9 長3.1		①細・白色紅微量 ②酸化 ・普通 ③鈍い褐色	円筒状の土製品。穿孔しようとした形跡あり。 用途不明。	
6	土師器 壺	+24	口(14.3) 高一底一 口縁部片 ⅴ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 頸部斜め縦割り。 内面 頸部無で。	
7	土師器 小型壺	埋没土	口(12.0) 高一底一 口~胴部 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 ・普通 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 胴部横割り。 内面 胴部無で。	
8	土師器 環	+33	口(14.4) 高(4.8) 丸底 口~底 ⅴ	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③赤褐色	内外共口縁部横割で。 外面 体部~底部横割り。 内面 体部無で。	
9	土師器 環	+26	口13.0 高4.7 丸底 口~底 ⅴ	①細・白色赤色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部横割 り。内面 体部無で。	
10	土師器 環	埋没土	口(13.0) 高4.0 丸底 口~底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③明褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部横割 り。内面 体部無で。	金雲母少量混 入。
11	土師器 環	床直	口11.0 高2.9 丸底 口~底 ⅴ	①普通・白色黒色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部横割 り。内面 体部無で。	
12	土師器 環	+14	口13.8 高一底一 口~底片 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部縦割り。 内面 体部無で。	
13	土師器 環	+22	口(14.0) 高一底一 口~底 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部縦割 り。内面 体部無で。	
14	土師器 環	+22	口(11.6) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・夾雑物なし ②酸化 ・普通 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部横割 り。内面 体部無で。	
15	土師器 環	+56	口(10.0) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸化 ・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部は割 り後、磨き。内面 体部は割で後、磨き。	
16	土師器 環	+34	口(12.0) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸化 ・硬 ③褐色	内外共口縁部横割で。外面 体部~底部は横 割り。内面 体部は割で。	
17	土師器 高環	+43	口一 高一 底一 径7.0 脚部片	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 脚部は縦割り。 内面 脚部は割割で？	
18	土師器 高環	+32	口一高一 脚上8.8 环底部~脚部片	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 脚部は縦割り。 内面 环底部と脚部は割で。	
19	土師器 高環	+50	口一高一 径14.0 脚部~環部	①細・白色紅微量 ②酸化 ・普通 ③褐色	外面 脚部は縦割り。環部は横割で。 内面 環部は横割で。	
20	敲打石	+44	材質 雲母石英片岩。長さ15.3cm 幅6.6cm 厚さ2.8cm 重さ350g。図下方に割断部分が集中している。その部分で、敲打したものと考えられる。			
21	敲打石	+3	材質 雲母石英片岩。長さ12.7cm 幅5.3cm 厚さ4.5cm 重さ480g。図下方に割断部分が集中している。その部分で、敲打したものと考えられる。			
22	白玉 未成品	埋没土	材質 滑石。長さ1.4cm 幅一 厚一 重さ5g。全面を研磨によって調整し、そのうち、穿孔しようとしたが、穿孔途中で、半分に割れてしまったため、製作をやめたものと考えられる。穿孔は、棒磨を使用。			
23	有孔 円板	+39	材質 滑石。長さ4.3cm 幅3.8cm 厚さ0.9cm 孔径0.4cm 重さ21.7g。図表面は刃物によって調整。側面は、割断部分が主体をなし、若干の研磨痕がみられる。			

図番号	器種 器形	出土位置	特 徴
24	磁石	埋没土	材質 粗粒安山岩。長さ9.2cm 幅3.7cm 厚さ2.8cm 重さ180g。川原石の利用。使用は、表と右側面にある。主体は、研磨面に凹凸のむらがあり、木など軟質の物質か。
25	磁石	埋没土	材質 砂岩。長さ6.0cm 幅4.7cm 厚さ1.4cm 重さ45g。川原石の利用。使用は、表裏にあり、研磨の他、ならし痕あり。主体は、研磨面に凹凸のむらがあり、木など軟質の物質か。
26	磁石	埋没土	材質 砂岩。長さ3.9cm 幅4.0cm 厚さ1.8cm 重さ24.5g。川原石の利用。表裏に均ならし傷があり、研磨面は、明瞭でない。石材は、軟かく、粒状は、荒い。



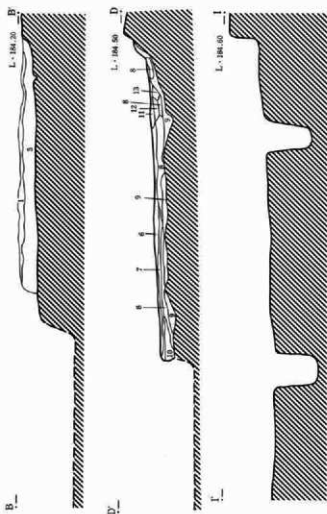
第137図 第57号住居跡実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



土層注記

- イ、黒褐色土 炭化物の大塊を含む。細粒で粘質。
 ロ、褐色土 細粒で締りない。
 ハ、淡褐色土 細粒で締りない。炭化物多量を含む。



土層注記

1. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒混入。細粒で締りのある土。
2. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒、ロームブロックの混入。1よりローム粒多量に混入。
3. 黒褐色土 炭化物粒、ローム粒多量に混入。
4. 暗褐色土とロームブロックの混合土。炭化物粒多量に混入。細粒で締りの弱い土。
5. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック、炭化物粒多量に混入。細粒で締りのある土。
6. 黄褐色土と黒褐色土ブロックの混合土。細粒で締りの強い土。
7. ロームブロックと黒褐色土の混合土。6より黒褐色土、多量に混入。
8. ロームブロックと黒褐色土の混合土。6より黄褐色土、多量に混入。
9. 黒褐色土 ローム粒少量混入。細粒でもろい土。
10. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に混入。細粒で堅くしている土。
11. 暗黄赤褐色土 焼土粒多量混入。細粒でもろい土。
12. 赤褐色土 焼土。粗粒でもろい土。
13. 黒褐色土 焼土粒多量に混入。粗粒でもろい土。
14. 黒褐色土 ロームブロック多量に混入。
15. 黄褐色土 黒褐色土ブロック多量に混入。
16. 褐色土 黄褐色土ブロック混入。
17. 暗褐色土 黄褐色土ブロック混入。
18. 黒褐色土 ローム粒少量混入。細粒だがもろい土。一辺に硬めた様相あり。

第138図 第57号住居跡実測図(2)

第57号住居跡

位置 4区10B42

写真 PL.33, 34

形状 北東部 $\frac{1}{2}$ 程度が第56号住居跡により切られているため、推定で一辺が7.10mの隅丸正方形を呈する。

面積 51.77 m^2 (推定) 方位 N-129°-W

埋没土 ローム粒・炭化物粒をふくむ黒褐色土が主体をなす。床面直上には暗褐色土とロームブロックとの混合土が堆積しており、そのなかには多量の炭化物が含まれていた。

床面 確認面でローム層を95cmほど掘り込み、その

上に黄褐色土と黒褐色土の混合土を四回にわけて客土し、版築状に4層、大変丁寧に貼床を形成している。掘りかたの調査中に、住居南寄りのところから東西二つの床下土坑を確認した。ともに円形を呈し、東側は径1.4m、西側は径1.3mを測る。なお、壁高は、確認面で17~69cmである。

竈 西壁やや南寄りにある。造作材は、黄色粘土が主体をなし、焚口部には両袖石に雲母石英片岩が使用されていた。また、向かって左側から天井石に利用されたと思われる雲母石英片岩も出土した。燃焼部は、ほぼ平坦で、煙道部は緩やかに立ち上って

いる。また、電作りかたの調査をしたところ、電の下から壁周溝が出てきた。

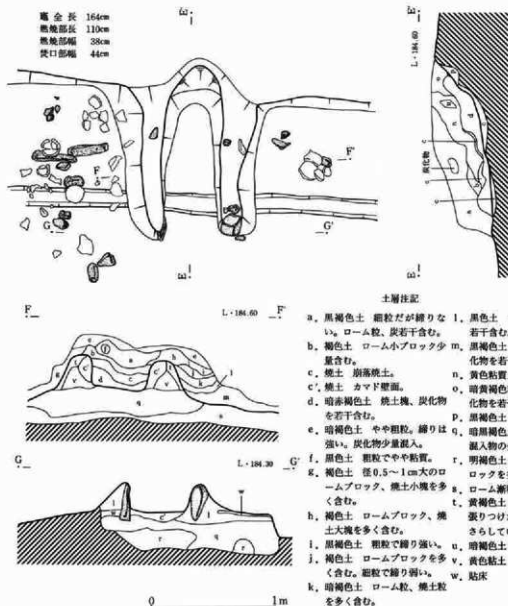
柱穴 第56号住居跡により切られているため、P₃に当たる柱穴は確認されなかった。住居外形の対角線上に新旧それぞれ3本ずつ検出。外側の柱穴が、新しい柱穴であり、規模(径×深さcm)は、P₁:62×76 P₂:44×66 P₄:72×77。旧の柱穴の規模(径×深さcm)は、P₅:56×46 P₇:50×76 P₈:48×76。

貯蔵穴 電向かって左。形状はほぼ円形を呈し、径90cm深さ69cm。また、南東隅にも貯蔵穴と思われる穴があり、形状は一辺70cmの方形を呈し、深さ79cm。

壁周溝 貯蔵穴周辺を除き、ほぼ全周していたと考えられる。幅12~20cm 深さ9~20cmを測る。

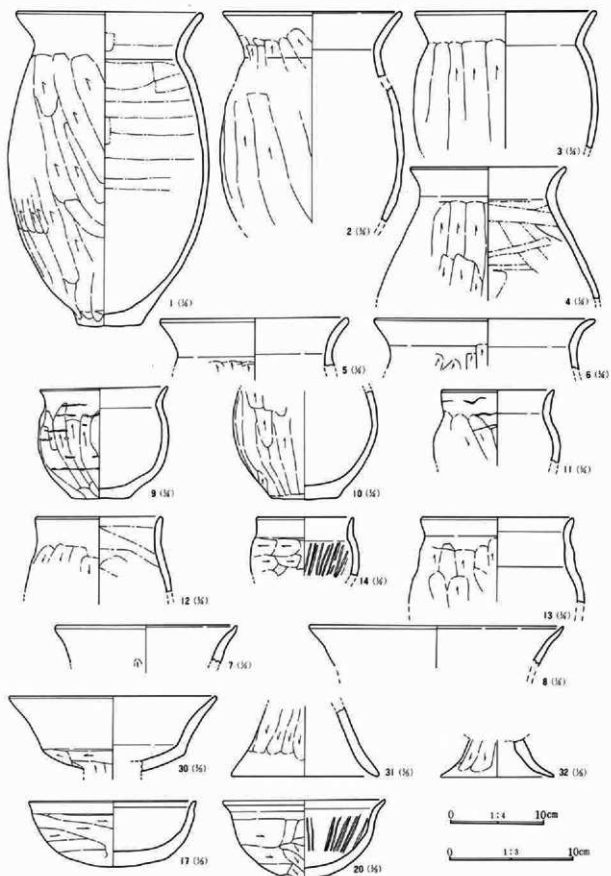
遺物 電及び貯蔵穴周辺より多く出土。土師器甕・坏が主体で滑石製模造品の勾玉、砂岩製の砥石なども出土。また、床面から炭化物も多く出土している。

備考 本住居跡は、作り替えをしていると考えられる。当初、現存よりも規模が小さく、竈も東壁に構築されていたものを、規模を大きくして、竈も西壁に構築し直した模様である。重複は、第56号住居跡である。本住居跡の年代観を遺物より6世紀前半としたい。(鹿沼)



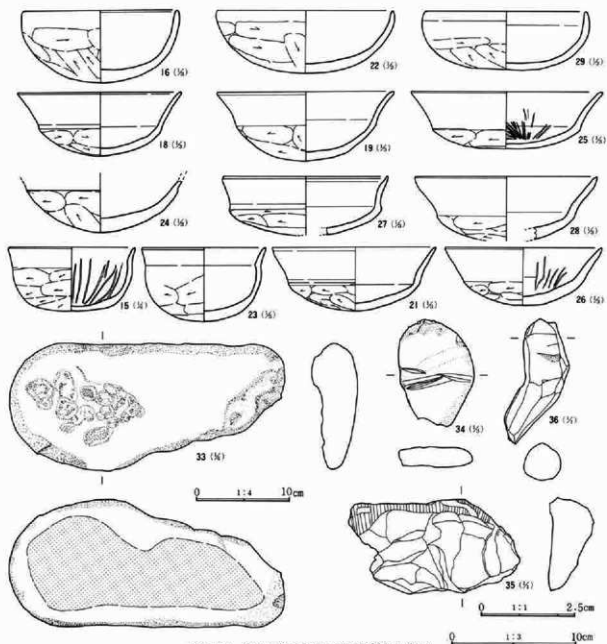
第139図 第57号住居砂竈実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第140図 第57号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第141図 第57号住居跡出土遺物実測図(2)

第57号住居跡出土遺物観察表 (PL.126、127)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+3	口19.9 高33.1 底7.0 口~底 ⅔	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め取削り。 内面 胴部直線で。	
2	土師器 長胴壺	床直	口(19.2) 高(19.5) 口縁部と胴部 ⅔	①粗・白色紅多量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線削り。 内面 胴部直線で。	
3	土師器 長胴壺	+12	口(19.4) 高一底一 口~胴 ⅔	①粗・白色灰色紅多量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線削り。 内面 胴部直線で。	
4	土師器 壺	+1	口(16.7) 高一底一 口~胴 ⅔	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線削り。 内面 胴部直線で。	
5	土師器 長胴壺	+4	口20.2 高一底一 口縁部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め取削り。 内面 胴部直線で。	
6	土師器 長胴壺	竈埋込土	口(23.6) 高一底一 口縁部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦線削り。 内面 胴部直線で。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
7	土師器 瓶	+19	口(19.6) 高一底一 口縁部片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。	
8	土師器 瓶	+25	口(27.2) 高一底一 口縁部片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横線で。	
9	土師器 小壺	+7	口13.3 高11.8 底6.2 ほぼ定形	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦線削り。 内面 胴部横線で。	輪痕あり。
10	土師器 小壺	+4	口一高一底(7.0) 胴一底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦線削り。 内面 胴部横線で。	
11	土師器 小壺	+5	口(12.2) 高一底一 口一底 片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部斜め縦削り。 内面 胴部横線で。	
12	土師器 小壺	+4	口(13.8) 高一底一 口一底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横線で。胴部縦線削り。 内面 口縁部一胴部横線で。	
13	土師器 小壺	+6	口(16.0) 高一底一 口一底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦線削り。 内面 胴部横線で。	
14	土師器 小壺	+18	口(10.2) 高一底一 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で。外面 胴部縦線削り。 内面 胴部横線で。	内面に放射状暗 文あり。
15	土師器 鉢	+11	口13.6 高6.7 丸底 ほぼ定形	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削 削り。	
16	土師器 環	+9	口12.3 高5.7 丸底 定形	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部縦削 削り。内面 体部横削 削り。	
17	土師器 環	-8	口13.3 高5.2 丸底 ほぼ定形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削 削り。	
18	土師器 環	+33	口15.0 高6.0 丸底 ほぼ定形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削 削り。	
19	土師器 環	+23	口(14.2) 高5.4 丸底 口一底 片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部縦削 削り。内面 体部横削 削り。	
20	土師器 環	+6	口(13.0) 高(6.2) 丸底 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部縦削 削り。内面 体部横削 削り。	
21	土師器 環	+2	口13.3 高5.0 丸底 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部縦削 削り。内面 体部横削 削り。	
22	土師器 環	+22	口(14.2) 高5.0 丸底 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横削で。体部一底部縦削削り。 内面 口縁部一底部横削削り。	
23	土師器 環	+2	口(10.0) 高5.8 丸底 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削 削り。	
24	土師器 環	+7	口一高一 横12.0 横一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③灰褐色	外面 体部一底部縦削削り。 内面 体部横削削り。	
25	土師器 環	-1	口(15.2) 高(11.8) 高(4.5)口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削削り。 暗文。	
26	土師器 環	埋没土	口(12.6) 高(3.4) 丸底 口一底 片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削削り。 暗文。	
27	土師器 環	+19	口(13.1) 高一底一 口一底 片	①細・赤色灰少量 ②酸 化・軟 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削削り。	
28	土師器 環	+15	口(14.4) 高一底一 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部横削 削り。内面 体部横削削り。	
29	土師器 環	-7	口(12.8) 高4.6 底一 口一底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 体部一底部縦削 削り。内面 体部横削削り。	
30	土師器 高環	-13	口(16.6) 高一 口一 坏底部 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・軟 ③褐色	内外共口縁部横線で。外面 坏底部横削削り。 内面 坏底部横削削り。	
31	土師器 高環	+15	口一高一 横(11.8) 胴部片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 胴部縦削削り。 内面 胴部横削削り。	金管得少量混 入。
32	土師器 高環	+8	口一高一 横(9.1) 胴部片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 胴部縦削削り。 内面 胴部横削削り。	
33	工作片	+15	材質 牛伏砂岩。長さ29.1cm 幅13.3cm 厚さ4.9cm 重さ2.2kg。川原石の利用。使用は、上平面側に敲打痕 のように見える浅い凹みがあり、下平面の破綻内に敲打による浅いハゼ面と部分的に研磨痕あり。			
34	磁石	埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ8.1cm 幅5.9cm 厚さ1.6cm 重さ120g。川原石の利用。使用は、両平面側のみに、太めの ならし痕あり。研磨面は、不明瞭。			
35	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ4.0cm 幅2.5cm 厚さ1.1cm 重さ13g。表面に若干の削り痕がある他は、自然面のままである。			
36	勾玉 未成品	埋没土	材質 滑石。長さ2.7cm 幅1.2cm 厚さ1.0cm 重さ7g。表面を、刃物による削りによって調整しており、とこ ろどころに、刀傷あり。まだ、荒削りの段階であり、削りの面と面の境に線が残っている。穿孔は、していない。			

第58号住居跡

位置 5区22C01 写真 PL.34

形状 一辺4.52mの方形。残存壁高10~40cm。

面積 19.61㎡ 方位 N-40°-E

埋没土 凡そ5層の暗褐色土、黒褐色土などが埴底型堆積をしていることから、自然堆積とみられる。

床面 確認面のローム層から20~70cm掘り込み、凹凸のある掘りかた底面上に褐色土とロームの混合土を厚さ10~30cm客土して床面を造っている。床面は水平かつ平坦に整地されていた。

竈 北壁の東寄りの位置に黄灰色粘土を用いて屋内に造り出されていた。燃焼部の焼け方は弱かった。

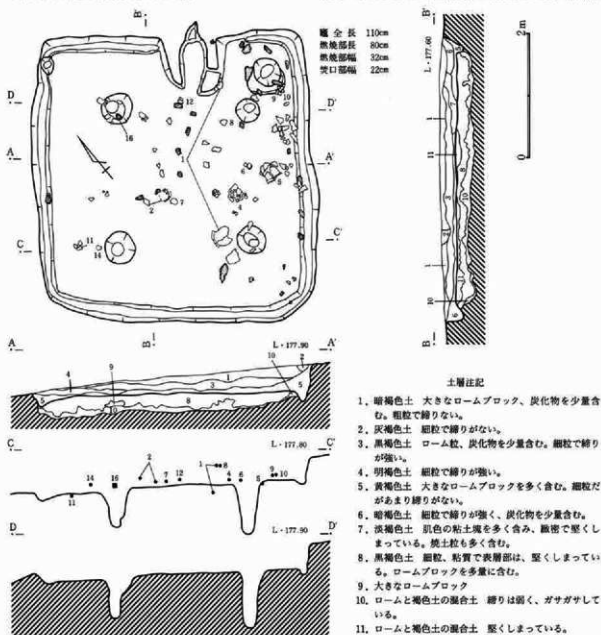
柱穴 住居の対角線上に4個検出されたが、いずれも柱根痕がよく残っている。P₁:38cm×86cm、P₂:42cm×78cm、P₃:48cm×58cm、P₄:38cm×62cm。

貯蔵穴 竈の右脇。円形。径42cm、深さ90cm。

壁周溝 全周。幅22~30cm、深さ5~15cm。

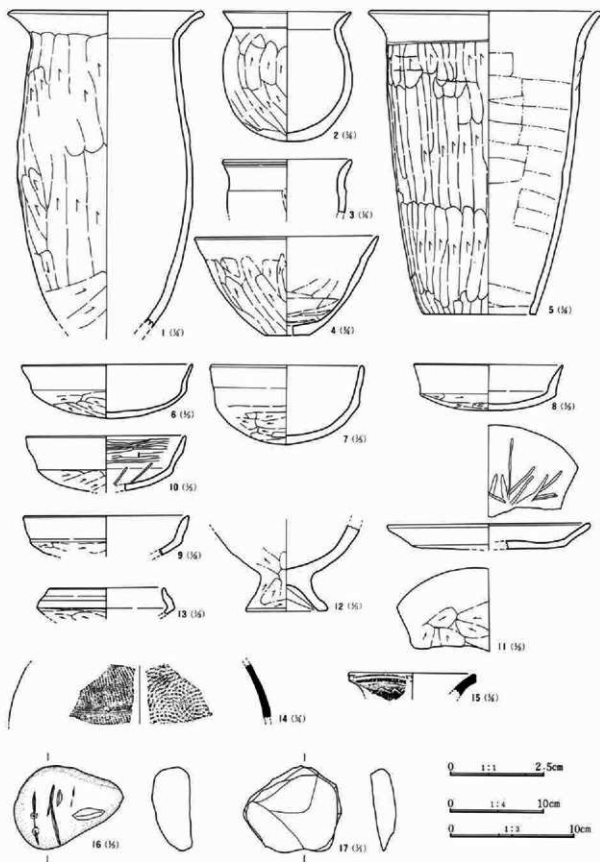
遺物 土師器長甕・小型甕・鉢・甑・坏・高坏、須恵器甕、磁石が東壁寄りに出土。出土量は少ない。

備考 本住居跡は6世紀後半と推定される。(小林)



第142図 第58号住居跡実測図

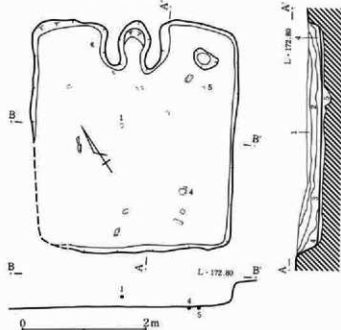
第3章 検出された遺構と遺物



第143図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土土物観察表 (PL.127、128)

図号	器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長柄甕	-13	口径29.8 高一底一 口~胴 瓦	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上部~胴中央 部は縦割削り、胴下部は撫で、内面 胴部撫で。	
2	土師器 小型甕	+5	口径13.6 高13.6 丸底 ほぼ完形	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦割削り。 内面 胴部撫で。	
3	土師器 小型甕	埋没土	口径(13.9) 高一底一 口~胴 瓦	①普通・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦割削り。 内面 胴部撫で。	
4	土師器 甕	+5	口径19.6 高10.4 底4.9 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部~底部縦割 削り。内面 胴部縦撫で。	
5	土師器 甕	-3	口径24.8 高32.0 底12.0 完形	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦割削り。 内面 胴部撫で。	
6	土師器 杯	+1	口径(13.7) 高4.2 丸底 口~底 瓦	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦割 削り。内面 体部撫で。	内面黒色処理。
7	土師器 杯	+6	口径(12.3)高(6.2) 丸底 口~底 瓦	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦割 削り。内面 体部撫で。	
8	土師器 杯	+26	口径(11.9) 高(3.6) 丸底 口~底 瓦	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦割 削り。内面 体部撫で。	
9	土師器 杯	+7	口径(13.2) 高一底一 口~底 瓦	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦割削り。 内面 体部撫で。	
10	土師器 杯	+7	口径(12.8) 高一底一 口~底 瓦	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③灰黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部斜め縦割削り。 内面 口縁部磨き、体部撫で後、増光。	内外共黒色処理。
11	土師器 甕	床直	口径(16.1) 高(2.1) 底(12.3) 口~底 瓦	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 底部縦割削り。 内面 撫で後、増光。	内外共黒色処理。
12	土師器 台付甕	+3	口~高一 胴6.6 胴下半部~台部 瓦	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③灰褐色	外面 胴下半部~台部は縦削り。 内面 胴下半部~台部は撫で。	
13	土師器 杯	埋没土	口径(9.1) 高一底一 口~体 瓦	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦割削り。 内面 体部撫で。	
14	須恵器 甕	+14	胴部片 (縦6.5 横6.5)	①細・白色紅少量 ②選 元・硬 ③灰色	外面 平行叩き。 内面 背面叩き。	
15	須恵器 甕	埋没土	口径(13.6)高一底一口 縁片(縦2.8 横5.8)	①細・白色紅少量 ②選 元・硬 ③緑灰色	縦削り後、コロボ形(右回転)。 外面に波状文あり。	
16	砥石	+6	材質 砂岩。長さ8.3cm 幅6.6cm 厚さ3.2cm 重さ200g。川原石の利用。使用は、図平面の表側と、上側部側に あり。表側にならし削。上方は、研磨面。主体は、木など軟質の物質。		重さ200g。川原石の利用。使用は、図平面の表側と、上側部側に あり。表側にならし削。上方は、研磨面。主体は、木など軟質の物質。	
17	滑石 未成品	埋没土	材質 滑石。長さ2.6cm 幅2.2cm 厚さ0.5cm 重さ4.8g。全面を刃物による削りによって調整している。裏面一 部は、剥離している。形状より、有孔円板を意図して製作された可能性が高い。		全面を刃物による削りによって調整している。裏面一 部は、剥離している。形状より、有孔円板を意図して製作された可能性が高い。	



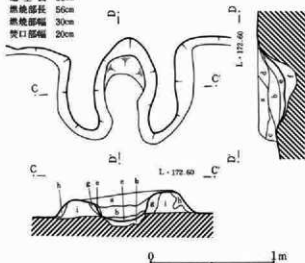
第144図 第61号住居跡実測図

土層注記

1. 暗褐色土 混入物少なく、バヤバヤしている。
2. 明褐色土 大粒の黄色軽石を少量含み、1よりやや明るい。
3. 明褐色土 ローム粒を多く含む。2より明るい。
4. 明褐色土 ローム粒をかなり多量に含み、かなり明るい。
5. ロームと黒褐色土の混泥土 ロームが多いため、黄褐色を呈する。

第3章 検出された遺構と遺物

竈全長 85cm
 燃焼部長 56cm
 燃焼部幅 30cm
 焚口部幅 20cm



土層注記

- a. 褐色土 やや粗粒。炭化物、燼土、粘土を少量含む。締りが弱い。
- b. 暗赤褐色土 燼土を多量に含む。粘質土。
- c. 黄褐色粘質土 細粒でかなり締りがある。焚口の天井部を構成していた粘土と思われる。
- d. 褐色土 炭化物、燼土を多量に含む。粗粒で締りが弱い。
- e. 燼土
- f. 燼土と褐色土の混合土 ガサガサしていて締りがない。
- g. 赤褐色土 黄色粘土が挟んで、赤味がかったり。
- h. 黄色粘土 褐色土の塊りを少量含む。
- i. 黄色粘土 袖部分。

第145図 第61号住居跡竈実測図

第61号住居跡

位置 5区29B35 写真 PL.35

形状 長辺3.56m、短辺3.24mの方形を呈する。壁は直立に近い状態に掘り込まれており、壁高0～46cmを測る。

面積 11.38㎡ **方位** N-36°-E

埋没土 凡そ4層の暗褐色土で埋没していた。各層はロームの粒子を多く含む。埴底型堆積をしている。このことから徐々に堆積していった様相が窺われる。

床面 確認面より凡そ40～50cmローム層を掘り込み、部分的に厚さ4～5cmほど黒褐色土とロームの混合土を客土して作られている。竈前から住居中央にかけては踏み固めてできた堅い面が広範囲に検出された。床下の掘りかた底面は平らである。

竈 北壁のほぼ中央に壁を背にして屋内に袖をだす

形態に作られていた。用材は黄色粘土が主体であるが、袖を形成する粘土塊の中には雲母石英片岩の極小片が少量挟み込まれていた。焚口から燃焼部にかけての天井はすでに落下していた。燃焼部は床面とほぼ同レベルであり、焼け方は強くはなかった。

柱穴 存在しなかった。

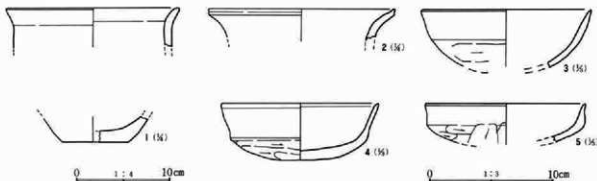
貯蔵穴 竈の右側に長軸38cm短軸26cm、深さ57cmの規模の楕円形で柱穴状のものが検出された。

壁周溝 存在しなかった。

遺物 竈の前方から貯蔵穴周辺にかけて土師器長壺・坏の破片が発見されたが、極めて少量であった。

備考 竈の袖部を構成する粘土中に片岩の小片を入れるという特異点が見られたが、これが何を意味するかは明らかでない。本住居跡の年代は7世紀前半とみられる。

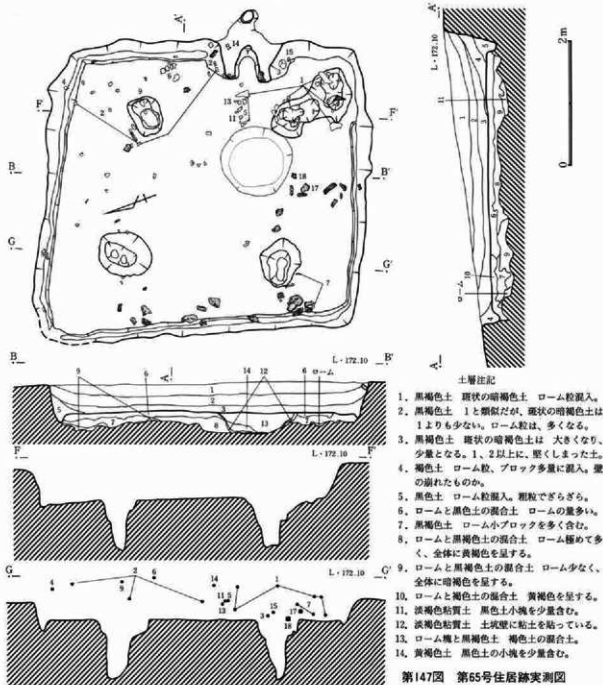
(小林)



第146図 第61号住居跡出土遺物実測図

第61号住居跡出土遺物観察表 (PL.128)

層序	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	+16	口(18.6) 底(7.2) 口縁部片と底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部深削り。内面 胴 上部は寛撫で、底部は撫で。	
2	土師器 甕	埋没土	口(20.0) 高一底一 口~胴部片	①細・灰白色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。	
3	土師器 杯	床上 埋没土	口(13.6) 高一底一 口~底部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横深削り。 内面 撫で。	
4	土師器 杯	+1	口12.7 高4.5 丸底 ほぼ完形	①細・夾雑物ほとんどな し ②酸化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横深 削り。内面 体部撫で。	
5	土師器 杯	-1	口(12.8) 高一底一 口~底部片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部深削 り。内面 体部撫で。	



第147図 第65号住居跡実測図

第65号住居跡

位置 5区41B48 写真 PL.35

形状 長辺5.08m、短辺4.66mのやや歪んだ方形。壁は遺存状態良好であり、壁高14～66cmを測る。

面積 23.57㎡ 方位 N-111°-E

埋没土 凡そ5層の黒褐色土、褐色土によって、壁際から徐々に埋まっていた様相を呈していた。

床面 確認面より褐色土、ローム層を30～80cm掘り込み、黒色土、黒褐色、ロームの混合土を厚さ15～30cm粘土し、水平かつ平坦に整地して床面としている。竈前では径1.15m、深さ30cmの正円形の床下土坑が検出された。土坑の壁面及び底部の一部には厚さ2～3cmの淡褐色粘土が貼られ、底部には片岩の小塊が数十個置かれていた。

竈 東壁の南寄りの位置に黄色粘土と雲母石英片岩

を用いて屋内に造り出されていた。焚口の両端には前述の片岩がやや内側に傾けて突き刺してあった。

燃焼部は強く焼けており、焼土が多量に残っていた。

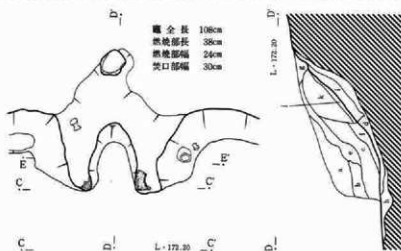
柱穴 4個確認されたが、建て替えが行われたようでいずれも下部が2個の穴になっていた。規模はP₁:50cm×74cm、P₂:68cm×90cm、P₃:78cm×92cm、P₄:52cm×76cmである。

貯蔵穴 竈の右脇に長軸74cm短軸68cm、深さ36cmの楕円形で底部が2個の穴になっているものを検出した。

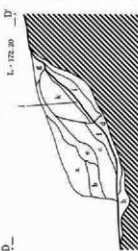
壁周溝 竈下から貯蔵穴部分を除いて、幅18～30cm、深さ5～14cmの規模のものが全周していた。

遺物 土器器長甕・小型甕・坏、須恵器甕の破片及び手捏土器、砥石、石製品が住居全体に散在して出土した。なお、手捏土器は竈袖上に出土した。

備考 本住居跡の年代は6世紀後半とみられる。(小林)

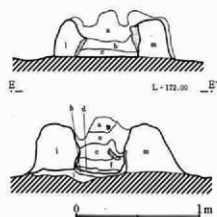


竈 全長 108cm
燃焼部長 38cm
燃焼部幅 24cm
焚口部幅 30cm

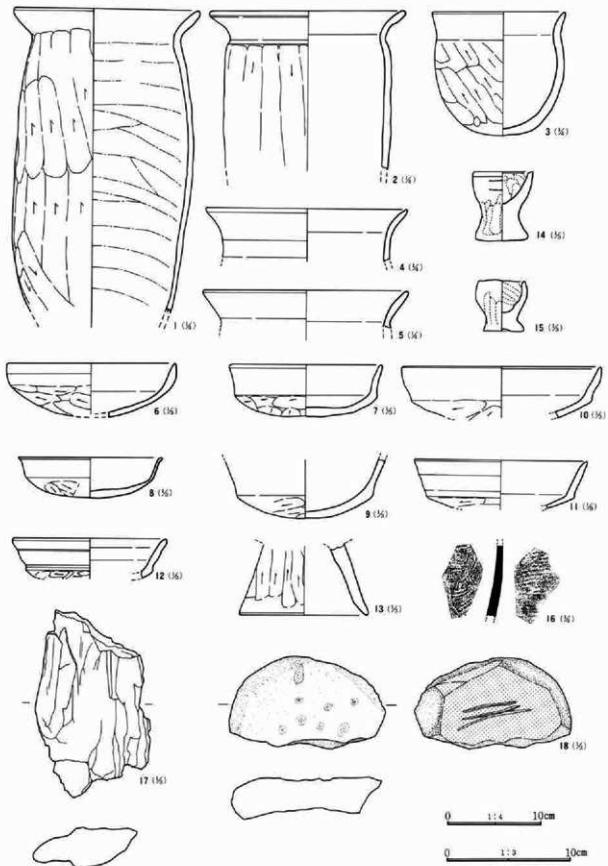


土層注記

- a. 黒褐色土 黄褐色の小塊を若干含む。細粒で締りが無い。
- b. 黄色粘土 黒色土の小塊、炭化物、ローム粒を若干含む。天井部の構造材。
- c. 暗赤褐色土 焼土、炭化物、灰の混合土。
- d. 焼土
- e. 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- f. 赤褐色土 焼土を多量に、炭化物を少量含む。細粒だがあまり締りが無い。
- g. 赤褐色土 焼土小塊。炭を多く含む。細粒だが、締りが無い。
- h. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。細粒で締りは無い。
- i. 暗赤褐色土 焼土の小塊を多く含む。ガサガサして、締りが無い。
- j. 焼土 粘土が焼けて鮮やかな朱色を呈する。
- k. 黄色粘質土 燃焼部奥の天井部を構成していたものと思われる。
- l. 黄色粘土 黒色土を含む。
- m. ロームと黒色土の混合土



第148図 第65号住居跡竈実測図



第149図 第65号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第65号住居跡出土遺物観察表 (PL.128)

種類	副種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴壺	+23	□(17.0) 高一底一 口~胴 ㄉ	①普通・白色灰土灰少量 ②酸 化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部横撫で。	
2	土師器 長胴壺	+29	□(21.0) 高一底一 口~胴 ㄉ	①粗・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部横撫で。	
3	土師器 壺	+5	□14.2 高13.0 底4.0 口~底 ㄉ	①普通・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め縦筋削り。 内面 胴部横撫で。	
4	土師器 壺	+53	□(21.6) 高一底一 口縁部片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③暗色	内外共口縁部横撫で。	
5	土師器 甕	+25	□(22.0) 高一底一 口縁部片	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。	
6	土師器 環	+62	□(13.6) 高一底一 口~底 ㄉ	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で 外面 体部~底部削り。 内面 体部横撫で。	
7	土師器 環	+9	□(12.0) 高4.0 丸底 口~底 ㄉ	①細・白色赤土灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部削り。 内面 体部横撫で。	
8	土師器 環	埋没土	□(11.6) 高3.2 底一 口~底 ㄉ	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部削り。 内面 体部横撫で。	外面底部は黒褐色。
9	土師器 環	+50	楕(11.0) 高一底一 口~底 ㄉ	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦筋削り。 内面 体部横撫で。	
10	土師器 環	埋没土	□(16.0) 高一底一 口~体 ㄉ	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦削り。 内面 体部横撫で。	
11	土師器 環	+25	□(13.4) 高一底一 口~底 ㄉ	①細・黒色灰少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦削り。 内面 体部横撫で。	内外共黒色処理。
12	土師器 環	埋没土	□(12.2) 高一底一 口~体部片	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横削り。 内面 体部横撫で。	
13	土師器 高 環	+18	□一高一 額(10.3) 胴部片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 脚部縦筋削り。 内面 脚部横撫で。	
14	手捏土 器	竈内 -42	□4.7 高5.4 底4.0 完形	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内面、外面とも、指による撫で調整。	内外共に指頭圧痕あり。
15	手捏土 器	竈内 +7	□3.8 高4.0 底3.2 ほぼ完形	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内面、外面ともに指による撫で調整。	内外共に指頭圧痕あり。
16	須恵器 壺	埋没土	胴部片 (縦7.5 横4.7)	①細・夾雑物ほとんどなし ②還元・硬 ③暗灰色	外面 格子目叩き。 内面 青釉敲叩き。	
17	石 核	+9	材質 雲母石英片岩。長さ14.5cm 幅8.2cm 厚さ3.1cm 重さ400g。雲母の様に、非常に薄く割れやすく、また非常に、軟かく、もろい。			
18	砥 石	-1	材質 牛伏砂岩。長さ12.5cm 幅6.8cm 厚さ3.0cm 重さ300g。川原石の利用。左平面の左側に原石面、他の側面は、旧時の割れ口。片側に突込の小穴。片側に研磨とならし痕あり。主体は、敷貫の物質か。			

第66号住居跡

位置 5区36B49 写真 PL.36

形状 長辺4.30m、短辺4.24mを測るやや歪んだ方形。壁は残りが悪く、壁高0~34cmである。

面積 16.98㎡ 方位 N-82°-E

埋没土 凡そ5層の黒褐色土、茶褐色土等によって埋められているが、埋まり方は明らかでない。

床面 確認面からローム層まで凡そ20~50cm掘り込み、凹凸のある掘りかた底面上に厚さ10~20cmの暗褐色土を客土してほぼ平らに整地されていたが、やや北側に傾斜していた。竈前には小範囲に堅い面が認められた。

竈 東壁のほぼ中央に黄灰色粘土と石を用いて屋内に造り出されていた。石は棒状の雲母石英片岩と板状の泥岩であり、前者は焚口の両端と支脚に、後者

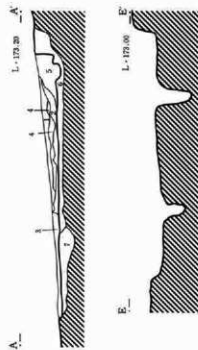
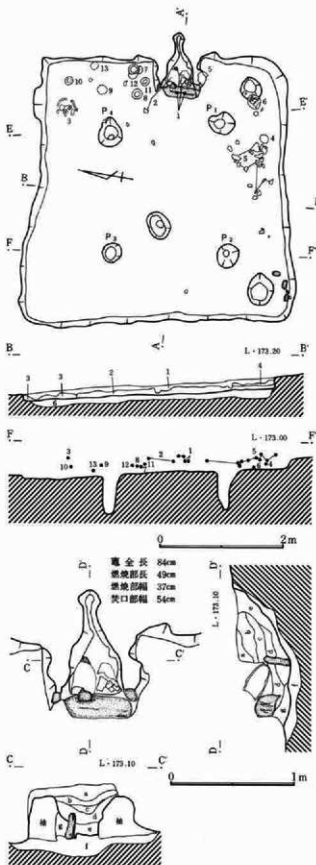
は焚口の天井に使用されていた。しかし、泥岩は焚口の前にはずされた状態で出土した。この竈には長甕が2個並べてかけられた状態で出土した。

柱穴 全部で6個のピットが検出されたが、柱穴は住居の四隅を結ぶ対角線に載る位置のものとみられる。柱穴の規模は P₁:44cm×56cm、P₂:34cm×60cm、P₃:30cm×58cm、P₄:40cm×35cmである。

貯蔵穴 竈の右脇に検出。円形で、規模は径30cm、深さ77cmである。壁周溝 存在しなかった。

遺物 前述の外、竈の前を中心に土師器壺・甕・環が少量発見されたが、完形品が多かった。

備考 本住居跡は遺物の出土量は少ないが、竈にかけられていた長甕を始め完形品が目立った。いかなる訳であろうか。住居の年代は6世紀後半。(小林)



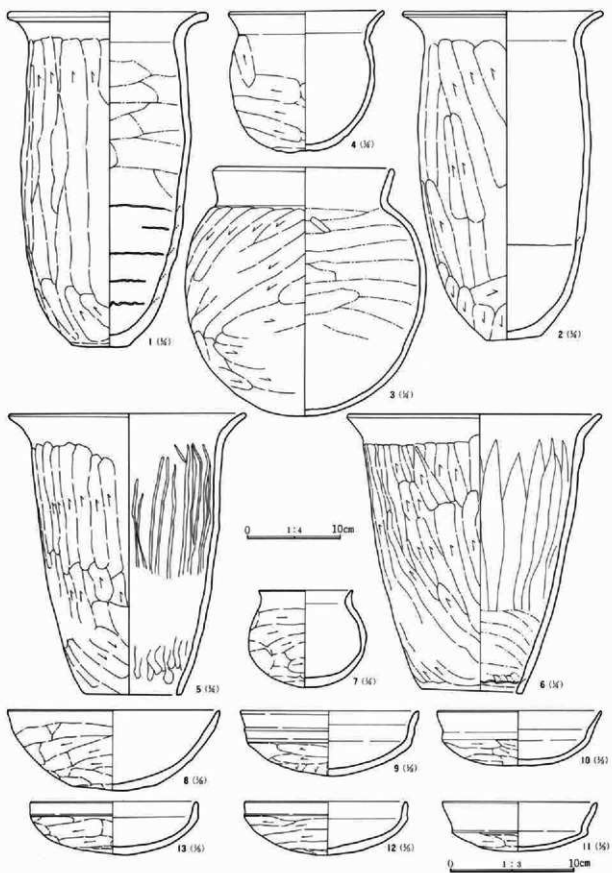
土層注記

1. 黒褐色土 ローム粒混入。細粒だが締りの弱い土。
2. 褐色土 ローム粒多量に混入。堅いブロック状々混入。
3. 黒褐色土 1に類似。1よりも弱い。
4. 暗褐色土 斑状の褐色土、ローム粒混入。粘性がある。
5. 茶褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に混入。焼土も多少混入。細粒だが締りに欠ける土。
6. 暗褐色土とロームの混合土 ロームより暗褐色土のほうが多い。締りは強い。
7. 暗褐色土 黄色軽石を少量含む。細粒だが締り強い。

- a. 褐色土 細粒で締りが強い。ローム粒若干含む。
- b. 暗褐色土 細粒。炭化物、黄灰色粘土塊を少量含む。
- c. 黄灰色粘質土 炭化物、褐色土を若干含む。天井部を構成していた粘土が落下したものと推される。
- d. 暗赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む。
- e. 暗赤褐色土 dに類似するが砂質で締りなし。
- f. 暗褐色土 混入物少ない。灰を含む。
- g. 褐色土 ローム小塊を多量に含む。

第150図 第66号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第151図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表 (PL.128、129、130)

品目	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長頸甕	竈内 +3	口21.3 高35.5 底6.0 完形	①普通・灰色藍少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋あり。 内面 胴上半部直撫で。胴下半部輪横筋あり。	
2	土師器 長頸甕	竈内 +11	口(21.0) 高34.7 底5.4 口~底 ⅴ	①普通・白色灰色藍少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。 内面 胴部無で。下半部輪横筋あり。	
3	土師器 壺	+26	口19.4 高26.3 丸底 口~底 ⅴ	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。 内面 胴部直撫で。	
4	土師器 小壺	+9	口16.7 高14.9 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰色藍少量② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部削り。 内面 胴部無で。	
5	土師器 壺	+7	口(25.0) 高29.8 底10.8 口~底 ⅴ	①細・灰色藍微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部無で。一部磨き。	
6	土師器 壺	+4	口27.0 高29.1 底10.7 ほぼ完形	①普通・白色藍微量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。 内面 胴上部~中央部は撫で後磨き、下部撫で。	
7	土師器 壺	+9	口10.0 高10.2 丸底 ほぼ完形	①細・白色藍微量 ②酸 化・普通 ③鈍い藍色	内外共口縁部横撫で。胴部~底部縦筋削り。 内面 胴部無で。	
8	土師器 坏	+12	口16.9 高6.3 底6.7 完形	①細・次陶物ほとんどなし ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	
9	土師器 坏	+16	口14.1 高5.1 丸底 完形	①細・赤色藍微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	
10	土師器 坏	+13	口13.1 高4.3 丸底 完形	①細・赤色藍微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	
11	土師器 坏	+15	口12.3 高3.9 丸底 完形	①細・白色藍微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	
12	土師器 坏	+12	口13.0 高4.2 丸底 ほぼ変形	①細・灰色藍少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	
13	土師器 坏	+3	口13.1 高4.1 丸底 完形	①細・灰色藍微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部直削り。 内面 体部無で。	

第68号住居跡

位置 5区30C01

写真 PL.37

形状 長辺3.56m、短辺3.48mの方形を呈する。西側壁はほとんど残っていないが、その他は10~34cm残存。

面積 11.84㎡ 方位 N-101°E

埋没土 凡そ4層の褐色土や黒褐色土によって埋まっている。壁際から埋まっていた様相を呈しているが、淡褐色土やロームのブロックを珪を含むことから短時間に埋まったものと思われる。

床面 確認面のローム層から20~60cm掘り込み、褐色土やロームの混合土を厚さ10~30cm客土して床が造られている。掘りかた底面は著しく凹凸があるが、床面はほぼ水平かつ平坦に整地されていて、甕前には踏み固めてきた堅い面が残存していた。

竈 北側と東側のそれぞれの壁の中央に2カ所検出された。北壁の方が先に造られたようで、焼土と一部粘土が残るのみで、袖は全く存在しなかった。残存部分は燃焼部分と煙道の一部である。東壁の方は壁を背にして屋内に袖を造り出す形に造られていた。用材は灰黄褐色粘土と扁平で細長い黄石英片

岩である。石は焚口の両端、天井及び燃焼部の支脚に使われていたが、天井石は焚口両側の石に架せられた状態で出土した。なお、焼土は比較的多く残っており、長期の使用が窺えた。

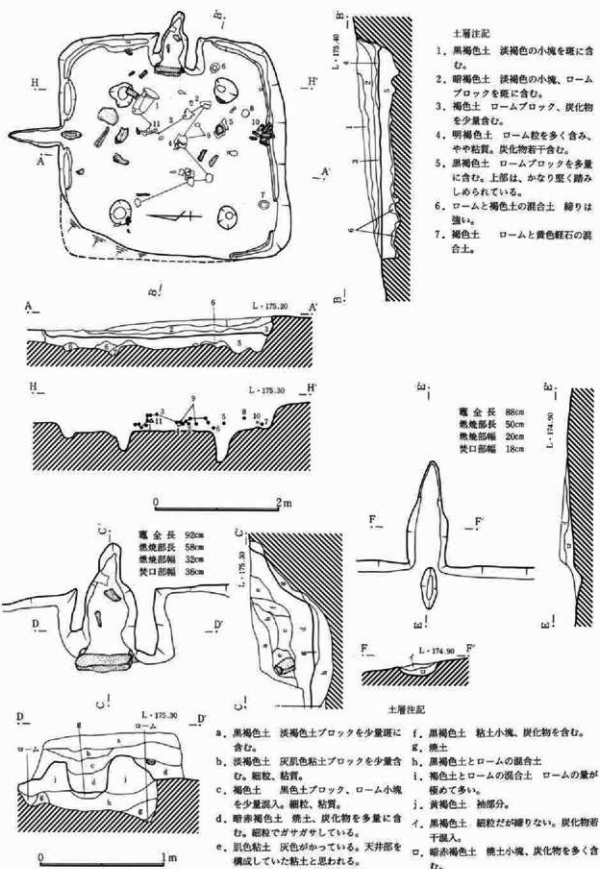
柱穴 住居の四隅を結ぶ対角線上に4個検出された。いずれも平面形は円形であり、規模はP₁:50cm×46cm、P₂:28cm×56cm、P₃:32cm×36cm、P₄:38cm×30cmである。これらの柱穴断面の調査によればP₁、P₂、P₄は柱根底がよく残っていた。これによれば径20cm前後の柱が立てられたものとみられる。貯蔵穴 存在しなかった。

壁周溝 甕の部分、西南隅の一部及び西壁の大部分を除いて全周していた。規模は幅10~20cm、深さ5~15cmである。

遺物 土師器長甕・小壺・甕・坏、砥石、棒状川原石が大小の隙と共に住居全体に散在して出土した。長甕は甕前左のP₄ピットの近くに完形で出土していた。また、南壁中央の周溝上には棒状川原石が9個まるとって出土しており、注目される。

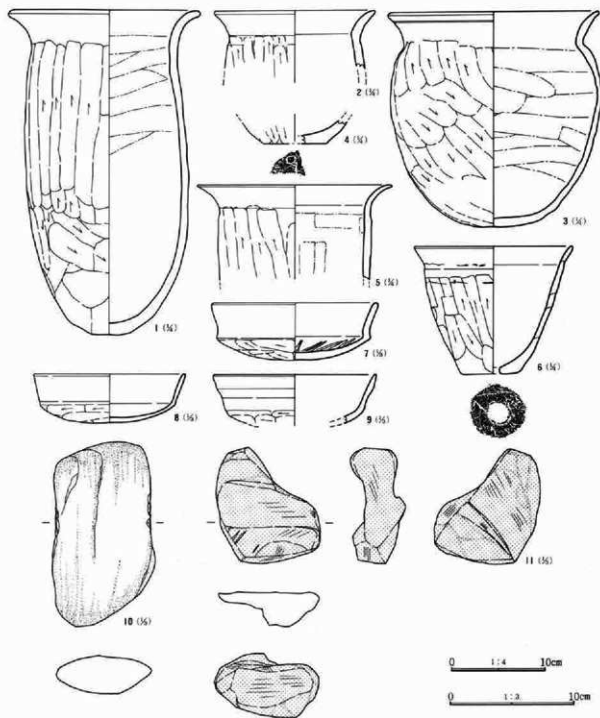
備考 本住居跡の年代は6世紀後半。(小林)

第3章 検出された遺構と遺物



第152図 第68号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



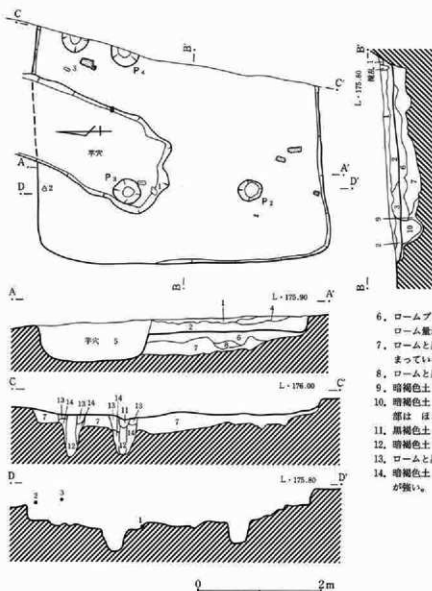
第153図 第68号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡出土遺物観察表 (PL.130)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴甕	+4	口径20.4 高さ34.5 底3.5 ほぼ光形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部縦撫で。	
2	土師器 甕	+12	口径(17.2) 高一底一 口~胴部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部撫で。	
3	土師器 甕	+2	口径22.5 高さ22.7 底6.0 口~底 欠	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め筋削り。 内面 胴部縦撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
4	土師器 壺	+7	底部片(6.8)	①普通・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴下半縦筋削り。 内面 底部撫で。	木葉痕あり。
5	土師器 壺	+8	□(21.0) 高一底一 口~底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部撫で。	
6	土師器 壺	-1	□16.8 高13.6 底6.0 ほぼ丸形	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部撫で。	輪横痕あり。底部に木葉痕あり。
7	土師器 壺	+18	□13.4 高4.5 丸底 丸形	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦筋削り。内面 体部撫で後、磨文。	
8	土師器 壺	+6	□12.2 高3.9 丸底 丸形	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦筋削り。内面 体部撫で。	
9	土師器 壺	+6	□(13.0) 高一底一 口~底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦筋削り。 内面 撫で。	
10	こもあ み石	+4	材質 雲母石英片岩。長さ13.8cm 幅8.1cm 厚さ2.9cm 重さ500g。図左右側面に、縦打して初磨きさせた部分あり。この他に、8個の石が、集中して出土している。			
11	砥石	+12	材質 角閃石英山岩(二ツ岳軽石)。長さ9.1cm 幅8.4cm 厚さ3.8cm 重さ100g。転石の利用。部分的に原石面あり。それを除き、他は研削面。手持砥のためか、各面の曲率が高い。主体は金属。			



土層注記

1. 黒褐色土 淡褐色土小塊を底に含む。細粒だが締まらない。
2. 褐色土 1と類似。締りは強い。ロームブロックも少量混入。
3. 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粗粒で締りが弱い。
4. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多量に含む。細粒で締りが強い。
5. ロームブロック主体の混合土(平穴)
6. ロームブロックと褐色土の混合土 上部層はローム量が多く、堅くしまっている。
7. ロームと黒色土の混合土 細粒、粘質で堅くしまっている。黒色土の量が多い。
8. ロームと黒褐色土の混合土
9. 暗褐色土 ローム小塊を多量に含む。
10. 暗褐色土 下部にローム粒を少量含むが、上部はほとんどない。
11. 黒褐色土 細粒で締りが弱い。
12. 暗褐色土 やや粗粒。締り弱い。
13. ロームと黒色土の混合土 黒色土が多い。
14. 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。細粒で締りが強い。

第154図 第70号住居跡実測図

第70号住居跡

位置 5区30C07 写真 PL.38

形状 東側が一部道路下に入り込むため、形状は不明と言わざるを得ないが、柱穴のあり方からすると、一辺3.90m前後(この長さは南北壁長)の正方形と推定される。壁高は0~16cmである。

面積 不明 方位 推定N-90°-E

埋没土 凡そ4層の褐色土、黒褐色土によって埋没しているが、浅いため埋まり方は明らかでない。

床面 確認面からローム層を30~70cm掘り込み、褐色土やロームの混合土を厚さ30~40cm客土して床面が造られている。床面は平坦であるが、北・西側に

傾斜している。北半分は芋穴によってかなり破壊されているが、住居中央部には部分的に堅い面が検出された。

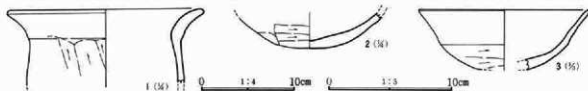
竈 調査範囲内からは検出されなかった。

柱穴 ビットは4個検出された。このうち柱穴はP₂~P₄とみられる。規模はP₂:40cm×58cm、P₃:42cm×78cm、P₄:42cm×33cmである。

貯蔵穴 不明 壁周溝 存在しなかった。

遺物 土師器長壺・坏の破片がごく少量と棒状川原石が2個検出された。

備考 本住居跡は東側が道路下に入り不明な部分が多いが、年代は出土遺物から7世紀前半。(小林)



第155図 第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土遺物観察表 (PL.一)

図号	遺物 器形	出土位置	口徑 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	-28	□(29.3) 高一底一 □~胴部片 片	①粗・白色灰少量 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部磨で。	胴部縦削り。
2	土師器 壺	+29	□一高一 底(丸底) 胴~底部片	①粗・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③黒褐色	外面 胴下部横削り。 内面 底面磨で。	胴下部横削り。
3	土師器 坏	-6	□(13.5) 高一底一 □~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部磨で。	体部横削り。

第72号住居跡

位置 4区25B40 写真 PL.38

形状 長辺4.83m 短辺4.02mの長方形を呈するが、南東の角がやや崩れた形である。

面積 18.69㎡ 方位 N-57°-E

埋没土 褐色土ブロックを斑状に多く混在する黒褐色土を主体とするが、床面に近い下層ではロームブロックをより多く含む。

床面 ロームブロックを多量に含む粘性の強い暗黄褐色土を掘りかた面に客土し、床面は比較的堅くしまっている。壁高は、5~48cmを測る。また住居跡の中央には、径が1.6m程の円形となる床下土坑が検出された。なお、掘りかた面はでこぼこした面である。

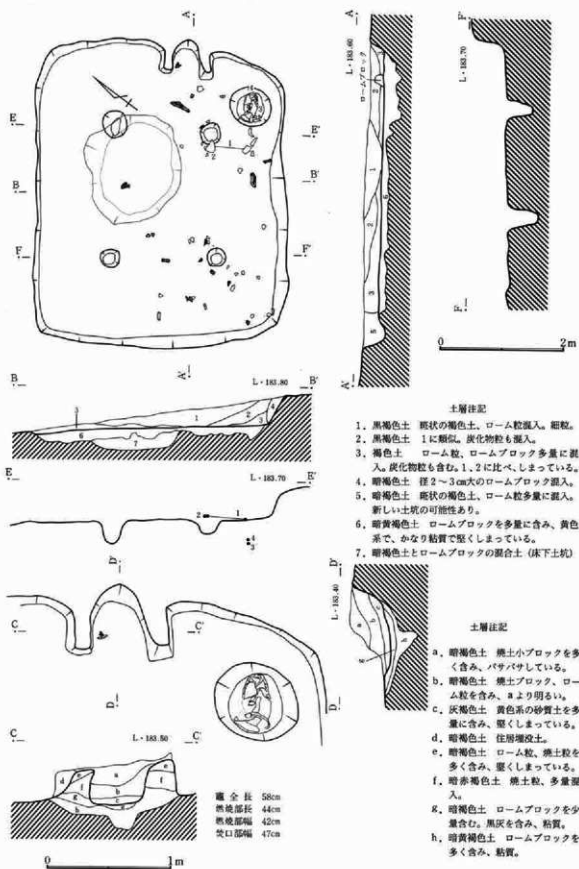
竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は比較的良好。焚口部から燃焼部にかけて摺鉢状にくぼみ、煙道部が立ち上がる。袖部はローム粒や焼土粒を多量に含む暗褐色土を構築材とし、堅くしまっている。焚口部には袖石や天井石は確認されなかった。また、袖部内壁は、赤く焼土化している。

柱穴 住居外形の対角線上の比較的内側に寄った位置に、4本の主柱穴が検出された。

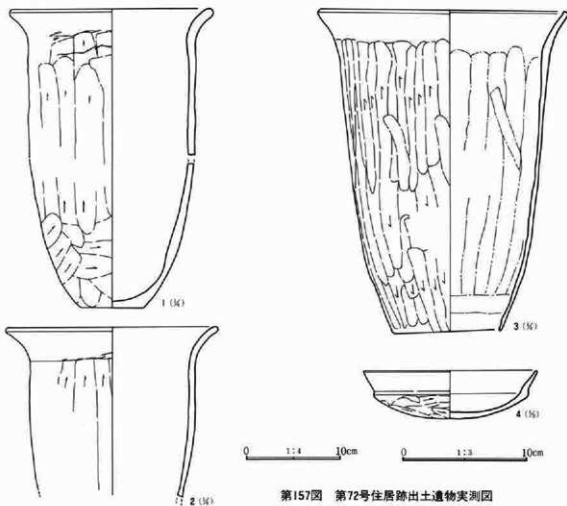
貯蔵穴 竈の右側に位置し、径が65cmほどで、深さが33cmを測り、円形を呈する。

遺物 貯蔵穴内から壺や甗の完形品が、また埋没土中より壺や坏等の破片が出土した。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第156図 第72号住居跡実測図



第157図 第72号住居跡出土遺物実測図

第72号住居跡出土遺物観察表 (PL.131)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土器器 長胴壺	+9	口(21.0) 高6.7 口~胴・胴~底 欠	①粗・白色灰多量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。内面 胴部撫で。	
2	土器器 長胴壺	+9	口(22.3) 高一底一 口~胴 欠	①粗・白色灰多量 ②酸化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。内面 胴部撫で。	
3	土器器 甕	-37	口26.8 高33.6 底11.4 ほぼ宧形	①細・灰色灰微量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。内面 胴部撫で。	
4	土器器 坏	-30	口13.7 高3.8 丸底 口~底 欠	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部削り。内面 体部撫で。	

第73号住居跡

位置 4区22B43 写真 PL.38

形状 長辺3.76m 短辺3.55mのほぼ正方形を呈する。

面積 12.62㎡ 方位 N-83°-E

埋没土 褐色土ブロックを斑状に多く混在する黒褐色土を主体とするが、床面に近い下層ほど混入物が少なくなる。

床面 ロームブロックを多量に含む粘性の強い暗黄

褐色土を掘りかた面に客土し、床面は比較的堅くしまっている。掘りかた面は、かなり凹凸のあるでこぼこした面となる。

竈 東壁の中央に位置し、残存状態は比較的良好である。焚口部から燃焼部にかけて溜鉢状にかなりくぼみ、煙道部が急傾斜に立ち上がる。左右の袖部の先端(焚口部)に、棒状の石を立位に埋め込んであること等から、この焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部はや

第3章 検出された遺構と遺物

や暗い黄色ローム土を主に構築材とし、堅くしまっている。また袖部内壁は、赤く焼土化している。

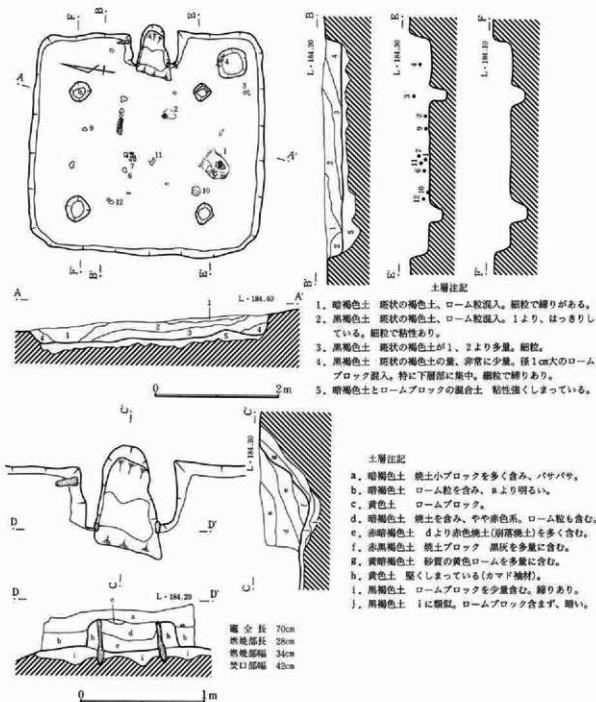
貯蔵穴 掘りかたの調査の段階で、竈右側より一辺が45cm深さ80cmほどを呈する方形のものが確認された。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の支柱穴が検出

された。

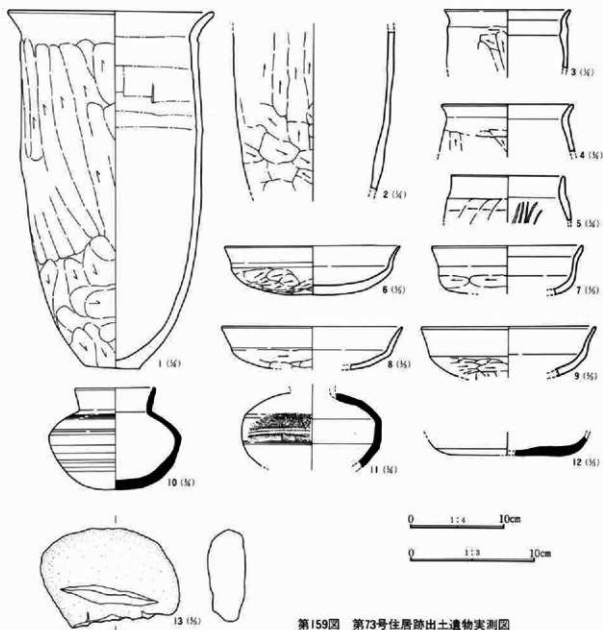
遺物 床面直上のもをも含め住居跡全体に分布し、大型・小型の甕、環、他に須恵器の壺などが出土している。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第158図 第73号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第159図 第73号住居跡出土遺物実測図

第73号住居跡出土遺物観察表 (PL.131)

図号	器種・器形	出土位置	口径	高さ	底径	底形状	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 兵部甕	+5	□21.9	高37.6	底5.5	口～底 ㄥ	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦篋削り。内面 胴部直撫で。	
2	土師器 甕	+7	口～高一部一 胴(16.5)	ㄥ			①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 胴部直削り。内面 胴部撫で。	
3	土師器 小型甕	+24	□(13.2)	高一底一 口～胴 ㄥ			①網・黒色腐紅微量 ②酸化・硬 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部直削り。内面 胴部撫で。	
4	土師器 小型甕	+15	□(14.0)	高一底一 口～胴 ㄥ			①網・夾雑物なし ②酸化・硬 ③灰黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部直削り。内面 胴部撫で。	
5	土師器 小型甕	埋没土	□(12.2)	高一底一 口～胴 ㄥ			①網・夾雑物なし ②酸化・硬 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦篋削り。内面 胴部撫で後、暗文。	
6	土師器 坏	+19	□(14.0)	高3.8	丸底	口～底 ㄥ	①網・赤色紅少量 ②酸化・普通 ③橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め直削り。内面 体部撫で。	
7	土師器 坏	+28	□(12.0)	高一底一 口～底部片			①網・灰色紅微量 ②酸化・普通 ③鈍い橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦篋削り。内面 体部撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
8	土師器 坏	竈 埋没土	口(14.4) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横撫で。内面 体部撫で。	
9	土師器 坏	+17	口(14.0) 高一底一 口~底部片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦刷り。内面 体部撫で。	
10	須恵器 短頸壺	+2	口8.5 高10.7 丸底 ほぼ完形	①細・灰色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。胴下半部~底部回転刷り(右回転)。	
11	須恵器 短頸壺	+17	口一高一底一 胴(14.6) ⅴ	①細・黒色白色微紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。胴部・胴部下半は自然軸、胴部に波状文あり。	胴下半部黒(自然軸)。
12	須恵器 坏	+19	口一高一底(9.0) 底部片	①細・白色微紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形、回転荒切り。	
13	紙石 埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ11.4cm 幅7.1cm 厚さ2.9cm 重さ300g。川原石の利用。研磨面は、明確でなくならし痕が、底平面側に残される。平面下半は、旧時の欠損。ならしの主体は、金属か。				

第74号住居跡

位置 4区18B39 写真 PL.39

形状 長辺4.52m短辺4.34mのほぼ正方形を呈する。

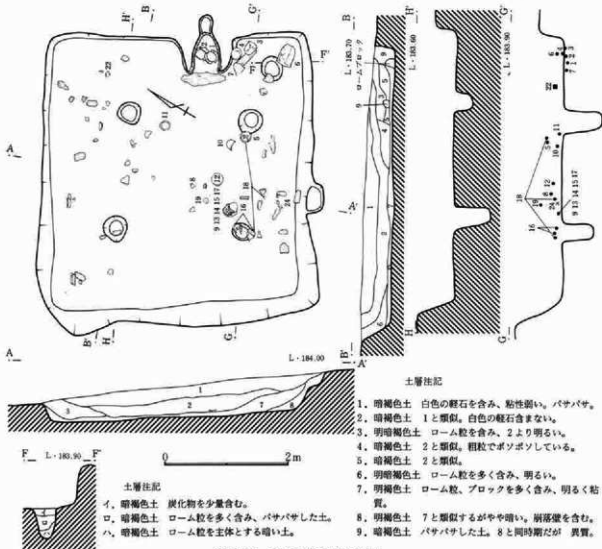
面積 20.15㎡ 方位 N-66°-E

埋没土 白色の細かい軽石を含むが、他の混入物の

少ない暗褐色土を主とし、床面に近い下層ではロームブロックを含み明るい。

床面 ローム面をそのまま床面としており、堅く踏みしめられている。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は良好で



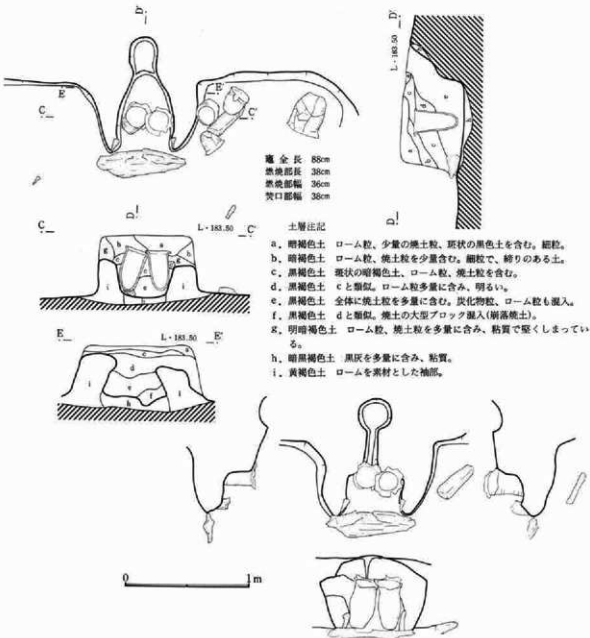
第160図 第74号住居跡実測図

ある。焚口部から燃焼部にかけてやや傾斜状にくぼみ、燃道部が急傾斜に立ち上がる。左右の袖部先端（焚口部）に配された棒状の石等から、この焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部はやや暗い黄色ローム土を主に構築材とし、堅くしまっている。また袖部内壁は、赤く焼土化している。

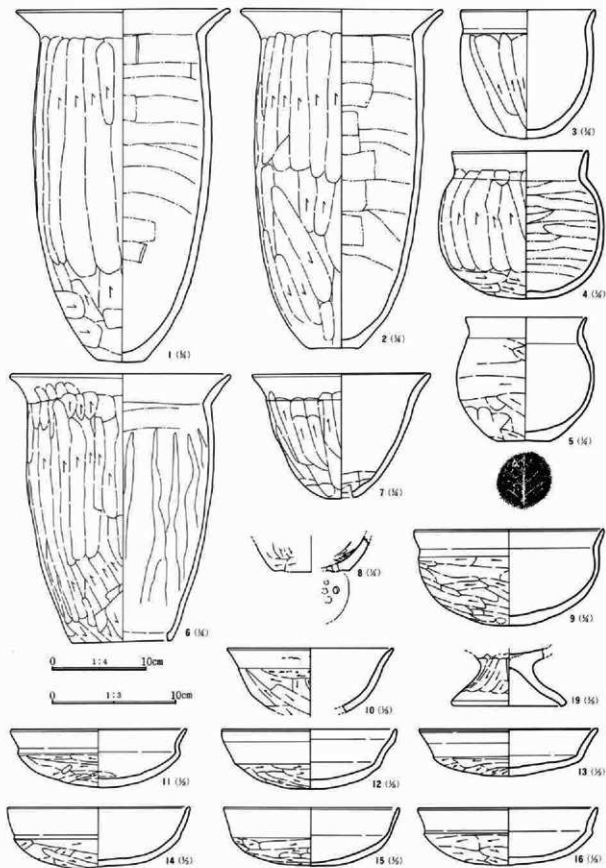
柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴を検出。
貯蔵穴 竈の右側に位置し、円形で40cm程の径をもつ。

遺物 竈燃焼部に立位で並列するかたちで2個の大型の甕が、竈の右側及び貯蔵穴周辺に大型・小型の甕、甕が、さらには住居跡全体から坏、高坏、こも網石と考えられる石等が出土している。

備考 本住居跡の竈内における甕の出土状況を見ると、元々2個の並列で甕が据えられていたものと考えられる。しかし、この型が特殊なものではなく、他の住居跡においても2個並列に据えられていたと考えられる竈が多々見受けられる。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。（谷藤）

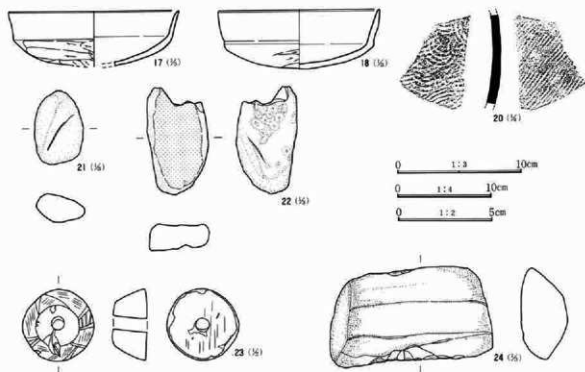


第161図 第74号住居跡竈実測図



第162図 第74号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



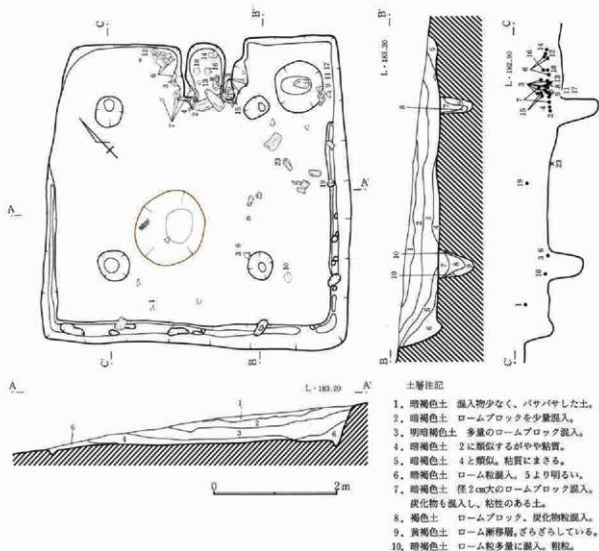
第163図 第74号住居跡出土遺物実測図(2)

第74号住居跡出土遺物観察表 (PL.131、132、133)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径	①胎土 ②釉成 ③色調	成形・器形の技法	備考
1	土師器 長頸壺	甕内(右)	口径22.3 高36.1 底4.2 ほぼ完形	①滑潤・白色灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上半～中央部 縦篋削り、下半部縦削り。内面 胴部縦削り。	
2	土師器 長頸壺	甕内(左)	口径21.5 高35.6 底5.0 ほぼ完形	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上半～中央部 縦削り、下半部斜め縦削り。内面 胴部縦削り。	
3	土師器 小型壺	-2	口径14.4 高13.6 丸底 ほぼ完形	①普通・白色灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無で。	
4	土師器 小型壺	+1	口径14.6 高15.5 底4.5 完形	①細・灰色紅微量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上半～中央部 縦削り、胴下半部横削り。内面 胴部縦削り。	
5	土師器 小型壺	+26	口径13.0 高(13.0) 底5.5 口～底 欠	①細・灰色紅少量 ②釉 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無で。	底部に木葉痕あり。
6	土師器 壺	+15	口径23.5 高28.1 底10.5 完形	①細・灰色紅微量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無で、磨き。	
7	土師器 甕	+3	口径19.0 高13.1 底3.0 ほぼ完形	①細・白色紅微量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴上半～中央部無で、胴下半部縦削り。	
8	土師器 甕	+22	口～高一底一 胴下半～底部片	①細・夾雑物なし ②釉 化・硬 ③褐色	外面 胴下半部縦削り、底部横削り。 内面 胴下半～底部無で。	多孔(底部に0.5 cmの穴)
9	土師器 鉢	+7	口径20.2 高10.1 底5.5 口～底 欠	①細・白色紅微量 ②釉 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 体部無で。	
10	土師器 鉢	+11	口径(17.8) 高一底一 口～胴 欠	①細・夾雑物なし ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部不定方向 縦削り。内面 体部無で。	
11	土師器 杯	+10	口径14.0 高4.6 丸底 ほぼ完形	①細・夾雑物なし ②釉 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部縦削り。 内面 口縁部～体部横撫で、底部無で。	
12	土師器 杯	+8	口径14.0 高4.7 丸底 ほぼ完形	①細・灰色紅少量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 体部無で。	
13	土師器 杯	+7	口径14.3 高3.7 丸底 ほぼ完形	①細・灰色紅微量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部斜め縦削り。 内面 口縁部～体部横撫で、底部無で。	
14	土師器 杯	+7	口径14.6 高4.7 丸底 ほぼ完形	①細・白色紅少量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、体部～底部斜め縦削り。 内面 体部無で。	
15	土師器 杯	+7	口径14.0 高4.6 丸底 口～底 欠	①細・赤色紅少量 ②釉 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部縦削り。 内面 体部無で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図番号	遺構 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
16	土師器 環	+10	口径14.3 高4.5 丸底 口～底 瓦	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③橙色	外面 口縁部横撫で、体部～底部横筋削り。 内面 口縁部～体部横撫で、底部横撫で。	
17	土師器 環	+7	口(13.6) 高一 (丸底) 口～底 瓦	①細・赤色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り、 底部斜め削り。内面 体部横撫で。	
18	土師器 環	+11	口(12.8) 高(4.6) 丸底 口～底 瓦	①細・白色藍微量 ②酸 化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め 削り。内面 体部横撫で。	
19	土師器 高 環	+36	口一高一 頸8.5 環底部～脚部 瓦	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 脚部縦筋削り、頸部横撫で。 内面 脚部横撫で。	
20	須恵器 甕	埋没土	胴部片(縦10.1 横 7.0)	①細・白色灰色紅少量 ②還元・軟 ③黒褐色	外面 平行叩き。 内面 青海波叩き。	
21	砥石	埋没土	材質 角閃石安山岩(三ツ石軽石)。長さ5.8cm 幅3.9cm 厚さ2.0cm 重さ26g。軽石の利用。表面に部分的に研磨面あり。主体は、小円礫のため、観察困難。			
22	砥石	+20	材質 牛伏砂岩。長さ8.2cm 幅4.9cm 厚さ2.0cm 重さ98g。自然石の利用。片側に敲打痕様にみえる凹み。面上端は、凹跡欠損。			
23	紡車 車	埋没土	材質 滑石。長軸3.8cm 短軸2.4cm 厚さ1.8cm 孔径0.8cm 重さ36g。全面を刃物で調整したのち、側面は、研磨によって最終調整。長軸両端面は、刃物によって削り落とされている。穿孔は、短軸方向からの一方向か。			
24	こもあ み石	+3	材質 雲母石英片岩。長さ12.7cm 幅7.0cm 厚さ3.6cm 重さ550g。図右側面は、敲打されて割れている。この他に、ほぼ同重量の石が、11個集中して出土している。			



第164図 第75号住居跡実測図

第75号住居跡

位置 4区14B36 写真 PL.39, 40

形状 長辺4.90m 短辺4.66mのほぼ正方形を呈する。

面積 23.18㎡ 方位 N-37°-E

埋没土 ロームブロックを少量ないし多量に混在する暗褐色土・明暗褐色土を主に堆積する。

床面 ローム面をそのまま床面としており、堅く踏みめられている。住居中央には円形の浅い床下土坑が検出された。

竈 東壁の中央に位置し、残存状態は比較的良好である。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、煙道部が緩やかに立ち上がる。左右の袖部先端(焚口部)に配された棒状の石等から、この焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部は黄色ローム土と褐色土の混在土で構築さ

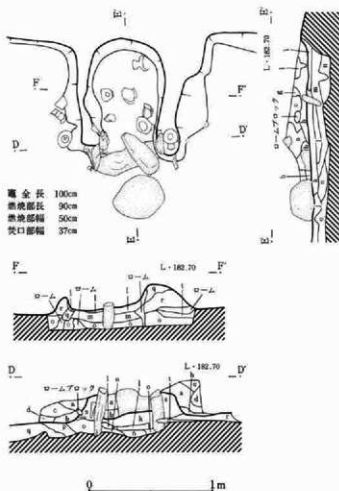
れ、堅くしまっている。また、袖部内壁は、赤く焼土化している。なお、燃焼部中央には石の支脚が据られており、さらに、高環も支脚として転用されている。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の支柱穴が検出。貯蔵穴 竈の右側に位置し、円形で80cm程の径をもち、深さ70cmを測る。

壁周溝 北壁の一部、西壁、南壁の一部に幅25cm前後の溝が「コ」字状に巡る。

遺物 竈内・周辺、貯蔵穴周辺に土器が集中している。遺物には大型・小型の壺及び瓶、高環、環、さらに磁石が住居の南側に点在していた。特に竈の支脚や袖部構築材として高環が利用されているのが特徴である。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀前半としたい。(谷藤)

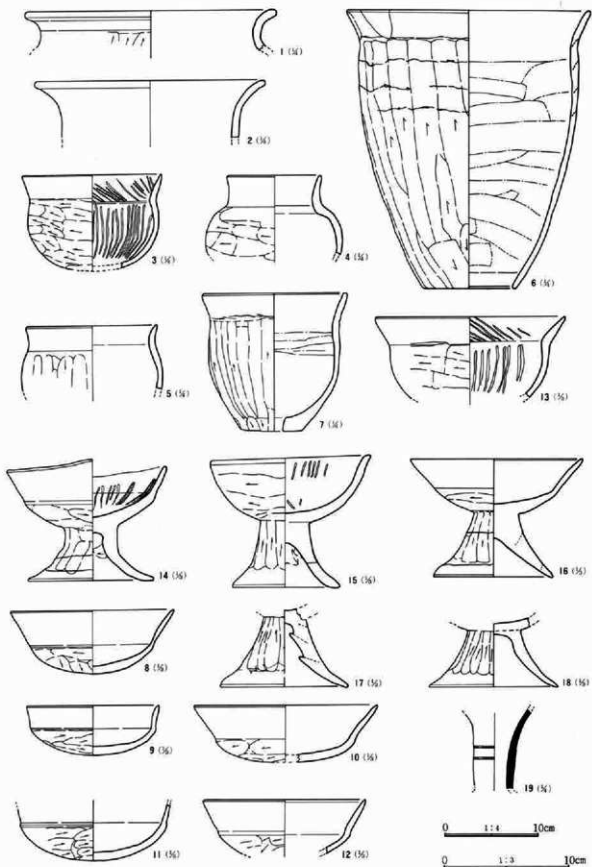


第165号 第75号住居跡竈実測図

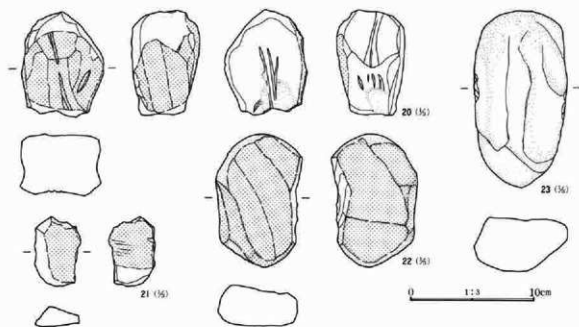
土層注記

- a. 黒褐色土 ローム粒混入。粗粒で締りない。
- b. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒混入。
- c. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒混入。
- d. 明褐色土 ローム粒、焼土粒少量混入。
- e. 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒を多量に含む。
- f. 褐色土 炭化物粒、ローム粒混入。袖もしくは天井部に使用された土の崩落か。
- g. 暗赤褐色土 焼土粒多量に混入。
- h. 暗赤褐色土 灰より、多量に焼土粒混入。
- i. 灰赤褐色土 焼土塊、全体に含まれている。
- j. ロームと褐色土の混在土
- k. 暗赤褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。
- l. 焼土
- m. 黒色土 ローム小ブロックを少量含む。
- n. ロームと黒色土の混在土 細粒でやや粘質。
- o. ロームと褐色土の混在土
- p. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- q. ロームと褐色土の混在土 ロームの割合が多い。
- r. ローム層移層 褐色土のブロックを含む。
- s. ロームと褐色土の混在土
- t. 黒色土

第3章 検出された遺構と遺物



第166図 第75号住居跡出土遺物実測図(1)



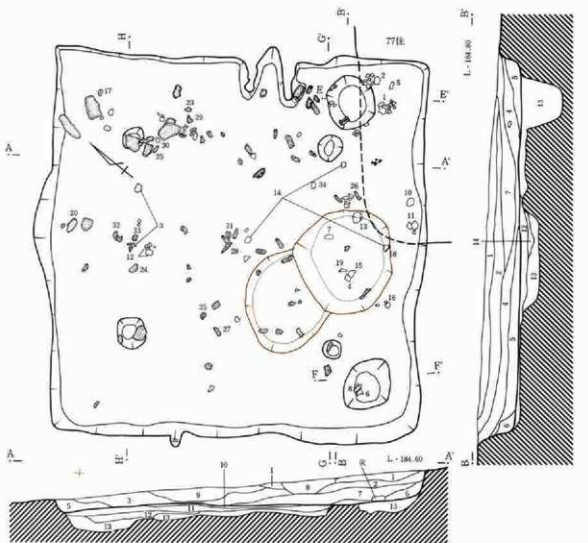
第167図 第75号住居跡出土遺物実測図(2)

第75号住居跡出土遺物観察表 (PL.133, 134)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 大型鉢	+34	口(27.0) 高一底一 口縁~頸部片	①普通・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦捩り。	
2	土師器 甕		口(23.5) 高一底一 口縁部片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・硬 ③黒色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦捩り。	外面黒色処理。
3	土師器 小型甕	+11	口14.8 高10.1 底一 口~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部~底部は横 と斜め捩り。内面 胴部撫で後、暗文。	
4	土師器 小型甕		口(16.0) 高一底一 口~胴 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦捩り。 内面 胴部撫で。	
5	土師器 小型甕	埋没土	口(14.0) 高一底一 口~胴 片	①普通・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦捩り。 内面 胴部撫で。	
6	土師器 甕	+11	口25.7 高29.3 底9.9 口~底 片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦捩り。 内面 胴部縦捩り。	輪横紋あり。
7	土師器 甕	+1	口15.6 高14.5 底6.6 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦捩り。 内面 胴部縦捩り。	
8	土師器 環		口径3.0 高5.0 丸底 口~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦捩り。 底部縦捩り。内面 体部撫で。	
9	土師器 環	+7	口(10.5) 高3.9 丸底 口~底 片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横捩 り。内面 体部撫で。	
10	土師器 環	-3	口(14.5) 高(4.5) 丸底 口~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横捩 り。内面 体部撫で。	
11	土師器 環	+7	口一 径(11.8) 丸底 口縁~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横捩 り。内面 体部撫で。	
12	土師器 環	+18	口(13.0) 高一底一 口~体 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③明褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部斜め捩り。 内面 体部撫で。	
13	土師器 環		口(15.8) 高一底一 口~体 片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦捩り。 内面 体部撫で後、暗文。	
14	土師器 高環		口径12.7 高9.5 底10.0 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部と頸部は横撫で。外面 体部~ 脚部縦捩り。内面 環部は撫で、脚部は捩り。	内面に暗文あり。
15	土師器 高環		口径12.8 高10.1 底8.5 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部と頸部横撫で。外面 環部横捩 り。脚部縦捩り。内面 環部と脚部撫で。	右袖先端に埋め られていた。
16	土師器 高環		口径(13.8) 高9.3 底9.6 口~底 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部と頸部横撫で。外面 環部横捩 り。脚部縦捩り。内面 環部と脚部撫で。	
17	土師器 高環	+7	口一高一 径10.1 脚部 片	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 脚部縦捩り、頸部横撫で。 内面 脚部横撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
18	土師器 高 坏	甕内 口一高一 番10.2 坏底部へ脚部 与		①細・白色紅微量 ②焼 色・普通 ③橙色	外面 脚部縦段削り、裾部横撫で。 内面 坏底部と脚部撫で。	坏底部に暗文あり。
19	須恵器 長頸瓶	+31 口一 頸(5.0) 高一 頸部 与		①細・灰色紅少量 ②濃 元・硬 ③灰オリーブ色	外面 ロタロ整形。 内面 ロタロ整形による撫で。	断面に藍色の帯あり、黒れ込みあり。
20	砥石	柱穴 埋没土	材質 砂岩。長さ8.0cm 幅6.5cm 厚さ4.8cm 重さ300g。自然石の角磨。砥平面の手前小口を除き、金属と思われ、刃ならし傷。ならし痕あり。部分的に研磨面あり。研磨面は小さく、主体の推定は困難。			
21	砥石	埋没土	材質 角閃石安山岩(二ツ岳軽石)。長さ5.6cm 幅3.7cm 厚さ1.7cm 重さ25g。転石の利用。左平面図の右側と上方は、旧時穴眼。使用は、表裏と左上。主体は、金属。			
22	砥石	埋没土	材質 角閃石安山岩(二ツ岳軽石)。長さ10.4cm 幅6.3cm 厚さ3.4cm 重さ200g。転石の利用。図の上下端に原石面あり。その他、研磨面。主体は、夾雑鉱物の凸出がなく、金属。			
23	こもあ み石	-7	材質 雲母石英片岩。長さ13.9cm 幅7.3cm 厚さ4.1cm 重さ600g。図左右側面下方に、敲打されて、剥離した部分あり。これとはほぼ同様の重量の石が、6個集中して出土している。			



土層注記

1. 暗褐色土 混入物なくバサバサした土。
2. 暗褐色土 汚れたロームブロック混入。
3. 暗褐色土 ローム粒少量含み、粘質。
4. 暗褐色土 ローム小ブロック混入。粘質。
5. 明暗褐色土 ロームブロック多く含む。
6. 明暗褐色土 5と類似。やや暗い。
7. 明褐色土 ロームブロックを多量に混入させ、明るく粘質。
8. 暗褐色土 白色軽石(BP)を多量に含む。粗乱層。
9. 明暗褐色土 2と類似。ローム粒多量。
10. 暗褐色土 径1cm大のロームブロック多量に混入。
11. 明暗褐色土 ロームブロックを強く粘った土。
12. ロームブロックと暗褐色土の混合土。
13. 黒褐色土とロームブロックの混合土。
14. 黒褐色土 ローム粒、炭化物少量混入。

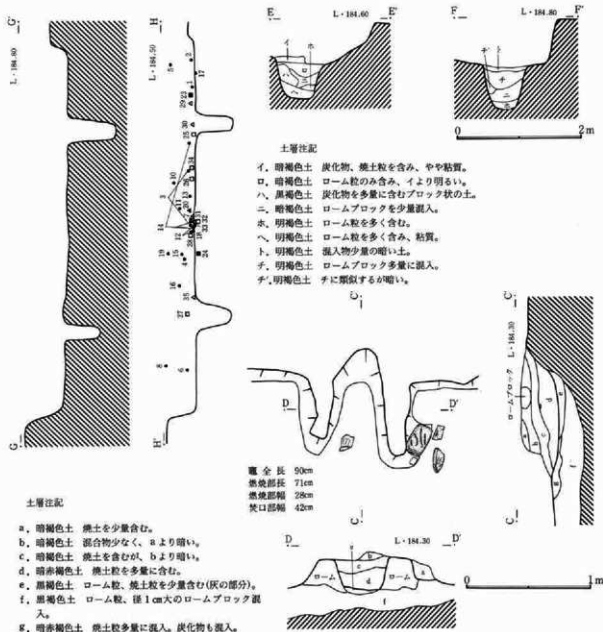
第168図 第76号住居跡実測図(1)

第76号住居跡

位置 4区15B43 写真 PL.40
 形状 長辺6.04m 短辺5.94mのほぼ正方形を呈する。
 面積 36.23㎡ 方位 N-52°-E
 埋没土 ローム粒やロームブロックを混在させた粘性の弱いないしは粘質な暗褐色、明褐色の土が主に堆積している。
 床面 掘りかた面にロームブロックを混在させた暗

褐色、黒褐色土をサンドイッチ状に、床面にはロームブロックを主とした黄褐色土を客土することで貼床を構築し、床面は平坦で、よく踏みしめられ堅くしまっている。なお、住居中央の南寄りに円形の床下土坑が2カ所検出された。掘りかた面はでこぼこしている。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は良好である。焚口部から燃焼部にかけてやや漏斗状にくぼみ、煙道部が急傾斜に立ち上がる。竈の周辺に竈に



第169図 第76号住居跡実測図(2)

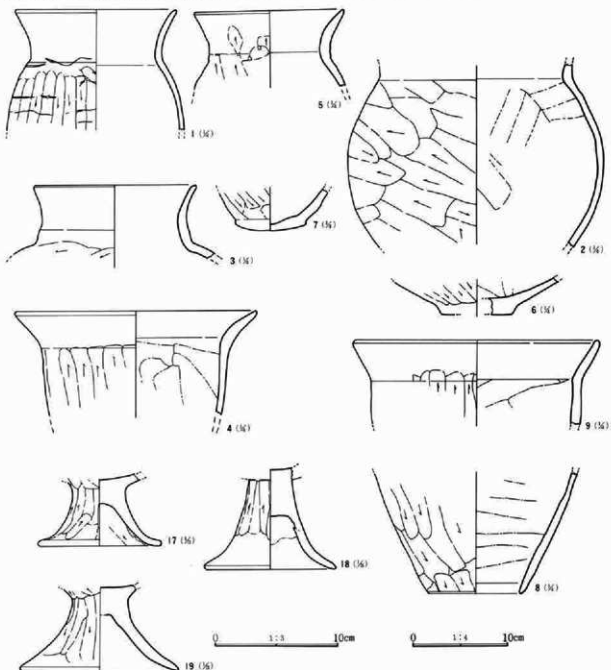
第3章 検出された遺構と遺物

使用されたと思われる石が散在すること等から、焚口部に位置する袖部は、石で鳥居状に組まれていたものと考えられる。袖部はやや暗い黄色ローム土を主に構築材としていた。また、西壁中央に焼土化した部分があり、1次の竈があったものと思われる。
柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴が検出。
貯蔵穴 竈の両側に、長軸86cm短軸74cmを測る楕円形のもの、これに相対する住居南西角に径が72cm

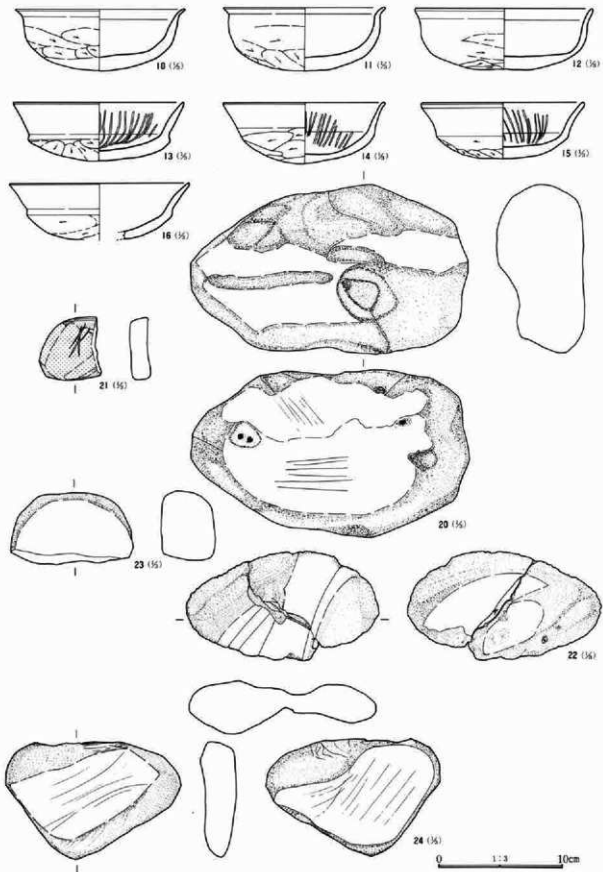
ほどの円形のものがある。

遺物 住居全体に壺・甕・高環・環や砂岩・緑色片岩・角閃石安山岩（榛名ニツ岳軽石）などを利用した多量の砥石等が点在して出土している。

備考 本住居跡の南東部には第77号住居跡が重複しており、この新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面等の状態から、本住居跡の方が新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀前半とした。〔谷藤〕

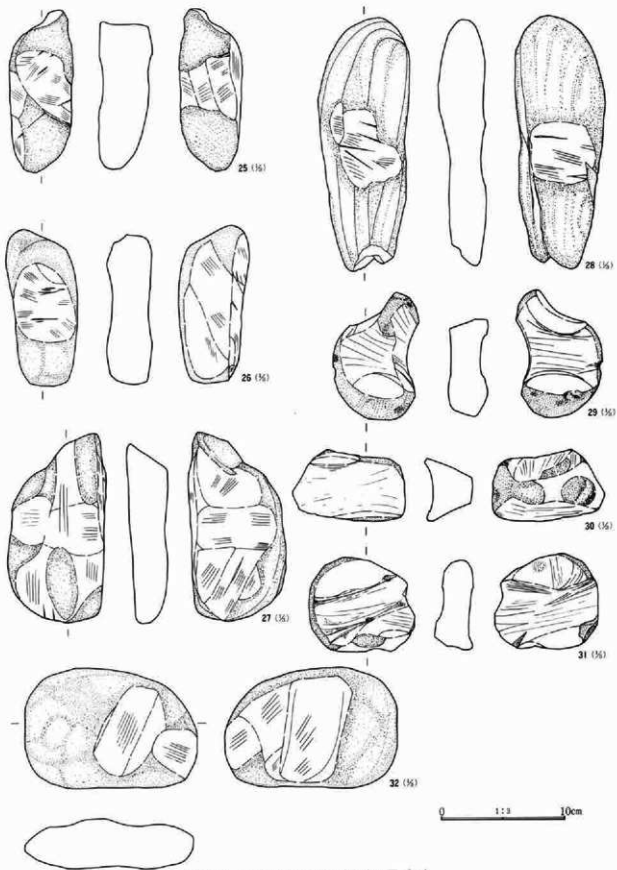


第170図 第76号住居跡出土遺物実測図(1)

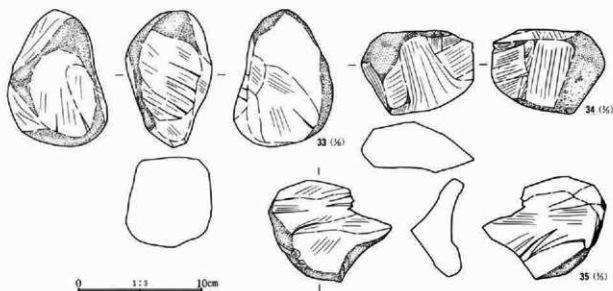


第171図 第76号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第172図 第76号住居跡出土遺物実測図(3)



第173図 第76号住居跡出土遺物実測図(4)

第76号住居跡出土遺物観察表 (PL.135, 136, 137, 138, 139)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	+3	口(17.2) 高一底一 口~胴 ⅜	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部縦撫で。	
2	土師器 甕	+6	頸(20.8) 胴中央部 (27.4) 頸~胴 ⅜	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③黒褐色	外面 胴部斜め筋削り。 内面 胴部縦撫で。	内面 炭灰処理。
3	土師器 甕	+7	口(17.4) 高一底一 口~胴 ⅜	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部斜め筋削り。 内面 頸部撫で。	
4	土師器 甕	+14	口(26.0) 高一底一 口~胴部片	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部縦撫で。	口縁部に黒色部あり。
5	土師器 甕	+49	口(16.0) 高一底一 口~胴 ⅜	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦筋削り。 内面 頸部撫で。	
6	土師器 甕	+8	口~高一 底(7.5) 胴~底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴下半部縦筋削り。 内面 胴下半部縦撫で。	底部~胴部、黒褐色。
7	土師器 甕	-1	口~高一 底8.0 胴~底 ⅜	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴下半部縦筋削り。 内面 胴下半部撫で。	
8	土師器 甕	+43	口~高一 底(9.8) 胴~底 ⅜	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部縦撫で。	
9	土師器 甕 短段土	口(26.0) 高一底一 口~胴部上半 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部~胴上半部 縦筋削り。内面 胴上半部 縦撫で。		
10	土師器 杯	+26	口13.5 高4.8 丸底 ほぼ正形	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部斜め筋削り。 内面 体部撫で。	
11	土師器 杯	+16	口(13.0) 高5.0 丸底 口~底 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。 底部斜め筋削り。内面 体部 撫で。	
12	土師器 杯	床直	口(14.1) 高(4.8) 丸底 口~底 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋 削り。内面 体部撫で。	
13	土師器 杯	+6	口13.6高4.6 丸底 口~底 ほぼ正形	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部不定 方向筋削り。内面 体部撫 で後、暗文。	
14	土師器 杯	+7	口13.0 高4.8 丸底 口~底 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋 削り。内面 体部撫で後、暗文。	
15	土師器 杯	+16	口(13.0) 高4.4 丸底 口~底 ⅜	①細・灰色白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。 底部斜め筋削り。内面 撫 で後、暗文。	
16	土師器 杯	+21	口(14.4) 高一底一 口~底 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋 削り。内面 体部撫で。	
17	土師器 高杯	-2	口~高一 頸9.5 杯底部~脚部 ⅜	①細・灰色紅少量 ②酸化 ・硬 ③明赤褐色	外面 杯底部~脚部縦筋削り。 杯部撫で。 内面 杯底部、脚部縦撫 で。	杯底部(内面)は 内黒。
18	土師器 高杯	+7	口~高一 頸10.4 杯底部~脚部 ⅜	①細・白色紅少量 ②酸化 ・普通 ③褐色	外面 胴部縦筋削り。杯部 撫で。 内面 杯底部撫で、脚部 縦撫で、杯部撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	遺構 形状	出土位置	口徑 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
19	土師砂 高 坏	+40	口一高一 径(12.8) 坏底部一脚部 片	①灰・灰色鉄少量 ②酸 化・青濁 ③褐色	外面 坏底部〜脚部縦削り。 内面 坏底部と脚部磨で。	
20	砥 石	+24	材質 粗粒安山岩。長さ22.0cm 幅13.0cm 厚さ6.8cm 重さ3.1kg。自然石の肉腫。使用は、下面平面に使用箇 の痕あり。さらに、下面の上半に研磨痕あり。巴面にも及ぶため、木などの軟質の物質か。			
21	砥 石	埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ4.7cm 幅4.7cm 厚さ1.5cm 重さ47g。川原石の利用。因平面左端に原石面。右端は旧時 欠損。裏面を除き、使用面が、裏、平面向下あり。表面に刃ならし傷。主体は、金属。			
22	砥 石	埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ15.1cm 幅8.3cm 厚さ4.2cm 重さ400g。川原石の利用。左平面の右下に旧時欠損あり。 使用は、表面と部分的に側部。主体は、夾雑物の凸出あり、木など軟質。減り量から金属か。			
23	砥 石	+ 8	材質 牛伏砂岩。長さ9.7cm 幅5.5cm 厚さ4.3cm 重さ300g。川原石の利用。平面向下は、旧時欠損。側部に原 石面残る。平面削のみに、研磨痕。主体は、金属。			
24	砥 石	+ 2	材質 牛伏砂岩。長さ13.9cm 幅8.8cm 厚さ2.8cm 重さ400g。川原石の利用。部分的に原石面が残る。使用は、 裏面を主として用いる。砥磨は、手持砥。主体は、夾雑物と平と差がなく、金属。			
25	砥 石	+ 1	材質 緑色片岩。長さ11.4cm 幅5.0cm 厚さ4.2cm 重さ400g。川原石の利用。因上方は旧時欠損。ほぼ中央部 を一用するように研磨痕あり。夾雑物の凸出が少なく、主体は、金属。			
26	砥 石	+ 3	材質 緑色片岩。長さ11.9cm 幅5.3cm 厚さ3.6cm 重さ400g。川原石の利用。使用は、左平面中央部と左側部。 裏面に研磨痕と、刃傷がならし傷。主体は、夾雑物の凸出がなく、金属か。			
27	砥 石	+ 2	材質 緑色片岩。長さ14.3cm 幅7.5cm 厚さ3.2cm 重さ600g。川原石の利用。使用は、表面、左平面右端を除 き、原石面が残る。研磨面にはヒケ傷がみられる。主体は、夾雑物の凸出がなく、金属。			
28	砥 石	+ 1	材質 緑色片岩。長さ19.3cm 幅7.2cm 厚さ3.5cm 重さ700g。川原石の利用。下方は旧時欠損。表面中央部 のみ、研磨痕と刃傷がならし傷の痕あり。研磨面には夾雑物の凸出があり、主体は、木など軟質。			
29	砥 石	+13	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ9.2cm 幅5.8cm 厚さ3.2cm 重さ120g。転石の利用。断面因下端側に原 石面が残るほか、研磨面。主体は、夾雑物の凸出が少なく、金属。手持砥。			
30	砥 石	+ 4	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ8.3cm 幅5.2cm 厚さ3.1cm 重さ100g。転石の利用。因上平面右・上・ 左側に原石面。因下平面には、研磨主体幅単位の溝状の凹みあり。主体は、金属。手持砥。			
31	砥 石	床直	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ8.2cm 幅7.4cm 厚さ2.7cm 重さ100g。転石の利用。左平面の右下方上 から左側に原石面。左平面に研磨主体幅単位の溝状の凹み。因中の傷表現はヒケ傷。主体は、金属。			
32	砥 石	+ 3	材質 緑色片岩。長さ13.7cm 幅9.5cm 厚さ3.8cm 重さ700g。川原石の利用。使用は、因平面の点検箇所原 石面。因中の太い糸痕は、研磨段差。主体は、夾雑物の凸出があり、木などの軟質。深さ凹みは金属。			
33	砥 石	+ 8	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ10.7cm 幅7.0cm 厚さ6.9cm 重さ350g。転石の利用。各検部に原石面。 因中の太い糸痕は、研磨の段差。細かい糸痕はヒケ傷。主体は、夾雑物の凸出が少なく、金属。手持砥。			
34	砥 石	+ 4	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ8.9cm 幅6.4cm 厚さ3.6cm 重さ120g。転石の利用。因左平面の左上方 に原石面。右平面右側に原石面。他は研磨面。表面に研磨主体幅単位の溝状の凹み。主体は、金属。手持砥。			
35	砥 石	+ 1	材質 角閃石安山岩(二ツ谷軽石)。長さ9.4cm 幅7.6cm 厚さ3.2cm 重さ100g。転石の利用。因左平面の左平に 原石面。右平面右側に原石面。他は研磨面。表面に研磨主体幅単位の溝状の凹み。主体は金属。手持砥。			

第77号住居跡

位置 4区12B43 **写真** PL.41

形状 長辺5.20m 短辺4.50mの長方形を呈する。

面積 24.25㎡ **方位** N-35°E

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土を主に堆積する。床面近くの層には炭化物が多く含まれている。

床面 掘りかた面にロームブロックを混在する暗褐色土を客土し、床面は平坦で堅くしまっている。また、住居の中央には、円形の浅い床下土坑が検出されている。掘りかた面は、かなりでこぼこしている。

竈 東壁のほぼ中央に位置し、残存状態は比較的良好である。焚口部から燃焼部にかけてやや傾斜状にくぼみ、煙道部がやや急傾斜に立ち上がる。袖部は、ローム・焼土粒を混在する暗褐色土で構築され、堅くしまっている。南側の床面直上に比較的大きな石

が確認されたが、竈の袖石や天井石の可能性はある。

柱穴 数カ所にピットが検出されたが、柱穴は住居外形の対角線にある4本と考えられる。

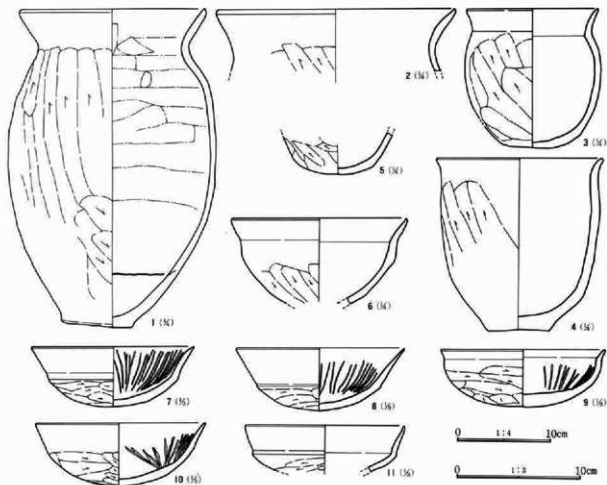
貯蔵穴 竈の右側に位置し、径が80cm、深さが68cmを測り、円形を呈する。

遺物 南壁寄りに土器が集中して出土した。土器には大型・小型の壺、坏がある。

備考 本住居跡の北側には第76号住居跡が、南側には第78号住居跡が重複しており、これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態から、本住居跡は第76号住居跡より旧く、第78号住居跡より新しい。また、本住居跡の床面直上には、多量の炭化材・炭化物が検出されたこと等から、焼失家屋の可能性もある。本住居跡の年代観を出土物より6世紀前半としたい。

(谷藤)

第3章 検出された遺構と遺物



第175図 第77号住居跡出土遺物実測図

第77号住居跡出土遺物観察表 (PL.140)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	+3	口(19.0) 高(33.3) 底(7.4) □~底 ⅔	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴上半部~胴中央 部縦瓦削り、胴下半部斜め瓦削り、内面 瓦削 で。	胴下半部に輪痕 あり。
2	土師器 甕 か	+9	口(25.6) 高一底一 口~胴 ⅔	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 頸部斜め瓦削り、 内面 頸部無で。	
3	土師器 甕	+5	口14.0 高14.6 底5.0 □~底 ⅔	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め瓦削り、 内面 胴部無で。	
4	土師器 小型甕	床直	口17.6 高18.2 底6.5 □~底 ⅔	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め瓦削り、 内面 胴部無で。	表面の厚削りが著 しい。
5	土師器 甕	+3	口一高一 一底7.5 胴一底 ⅔	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 胴下半部斜め瓦削り、 内面 胴下半部無で。	
6	土師器 鉢	+1	口(18.8) 高一底一 口~底 ⅔	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部~体部上半部横撫で、体部斜め 瓦削り、内面 口縁部横撫で、体部無で。	
7	土師器 小皿	+1	口13.0 高4.7 丸底 ほぼ完形	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部瓦削 り、内面 体部無で、暗文。	
8	土師器 鉢	+7	口13.4 高5.0 丸底 □~底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部横瓦 削り、内面 体部無で、暗文。	
9	土師器 鉢	床直	口13.0 高4.6 丸底 □~底 ⅔	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部横瓦削り、 底部縦瓦削り、内面 体部無で、暗文。	
10	土師器 鉢	+6	口13.4 高5.0 丸底 □~底 ⅔	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部縦と 斜め瓦削り、内面 体部無で、暗文。	
11	土師器 鉢	埋没土	口(12.6) 高一底一 口縁~体部 ⅔	①細・黒色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部横瓦削り、 内面 口縁部~体部無で。	

第78号住居跡

位置 4区12B45 写真 PL.41

形状 長辺4.70m 短辺4.18mの長方形を呈する。

面積 18.79m² 方位 N-70°-E

埋没土 ロームブロックを少量混在する暗褐色土や、ローム粒を多量に混在する粘性な黄褐色土を主に堆積する。

床面 第77号住居跡の床面より高い位置に本住居跡の床面があるが、掘りかた面はほぼ同一のレベルにある。床面は、掘りかた面にローム粒を混在する暗褐色土を客土し、上面が堅くしまっている。住居の中央には、楕円形を呈する浅い床下土坑が2カ所検出された。掘りかた面は、でこぼこしている。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態はあまり良くない。焚口部から燃焼部にかけてやや楕円状に

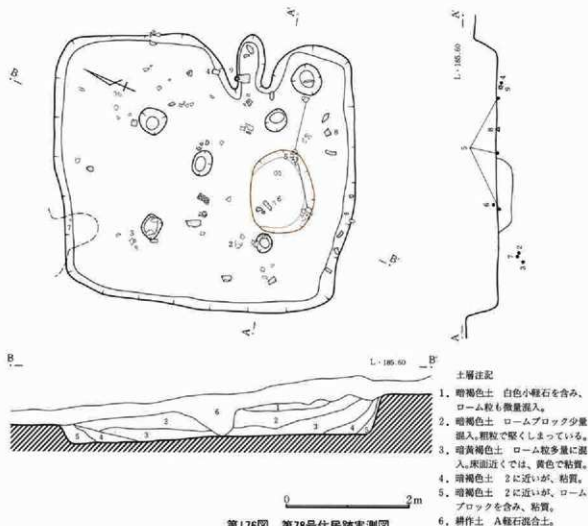
くぼみ、煙道部がやや急斜に立ち上がる。袖部は、ローム・焼土粒を混在する暗褐色土で構築され、堅くしまっている。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の支柱穴が検出された。

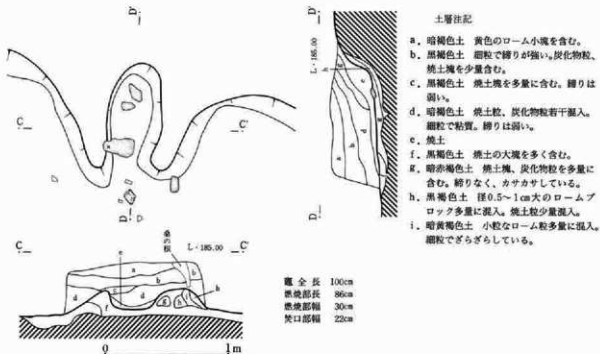
貯蔵穴 竈の右側に位置し、径が50cmで深さが59cmを測り、円形を呈する。

遺物 住居跡全体に、甕・坏等の土器片が点在する。

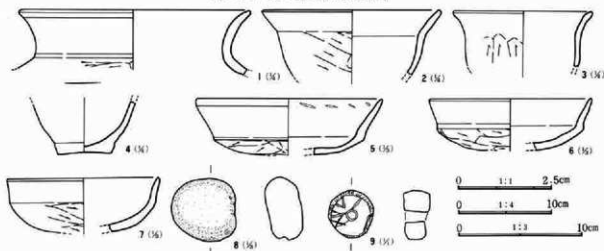
備考 本住居跡の北側には第77号住居跡が、南側には第81号住居跡が重複しており、これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態、さらには第81号住居跡の竈を本住居跡の南壁が壊していることから、本住居跡は第77・81号のいずれの住居跡よりも新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第3章 検出された遺構と遺物



第177図 第78号住居跡竈実測図



第178図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土遺物観察表 (PL.140)

図番号	器類器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	掘りかた	口(24.0) 高一底一 口~頸 ⅞	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 頸部横置削り。 内面 頸部無で。	
2	土師器 鉢	-31	口(19.2) 高一底一 口~体 ⅞	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部斜め置削り。 内面 体部無で。	
3	土師器 小型壺	+29	口(14.5) 高一底一 口~胴 ⅞	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横無で。外面 胴部縦置削り。 内面 胴部無で。	
4	土師器 小型壺	+1	口一高一 底5.8 胴~底 ⅞	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部置削り。 内面 胴部無で。	底部に木炭灰あり。
5	土師器 杯	床直	口14.7 高(4.4) 底一 ほぼ定形	①普通・夾雑物なし ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部~底部不定 方向置削り。内面 体部無で。	
6	土師器 杯	+6	口12.8 高一底一 口~底 ⅞	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部~底部横置 削り。内面 体部無で。	

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
7	土師器 環	-11	口(11.9) 高一底一 口一底 1/4	①胎・白色紅少量 ②構成・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部斜め瓦磨り。内面 体部横で。	
8	砥石	+3	材質 角閃石安山岩(二ツ岳緑石)。長さ5.0cm の全周に原石面。表面の研磨は浅い。主体は、 磨石。長さ1.2cm 幅1.3cm 厚さ0.7cm	幅5.0cm 厚さ2.7cm 重さ68.5g。転石の利用。平面点検部と側 面が浅いため、不明。		
9	白玉 甕		材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.3cm 厚さ0.7cm	重さ1.7g。上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方向。		

第79号住居跡

位置 4区21C01 写真 PL.42

形状 長辺2.81m 短辺2.56mのほぼ正方形を呈するが、角がやや丸状になる。

面積 7.10㎡ 方位 N-100°E

埋没土 ロームブロックを少量混在する粘質で堅くしまった暗褐色土を主にする。

床面 掘りかた面に、ロームブロックを多量に混在する暗褐色土を客土し、堅くしまった平坦な床面をもつ。壁高は、13~35cmを測る。

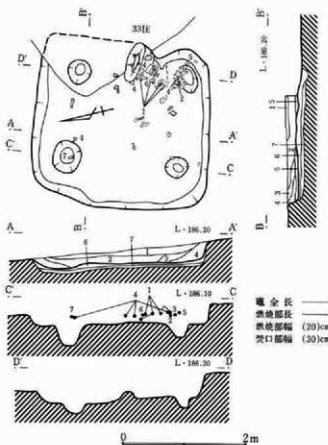
竈 東壁のやや南に位置し、残存状態はあまり良くなく、北側半分は第33号住居跡や掘乱穴によって壊されている。焚口部から燃焼部は平坦で、燃焼部か

ら煙道にかけては緩やかに立ち上がる。残存する右袖部は、堅くしまった暗褐色土で、内壁が焼土化している。

柱穴 住居外形の対角線上に、4本の比較的大きめの主柱穴が確認された。

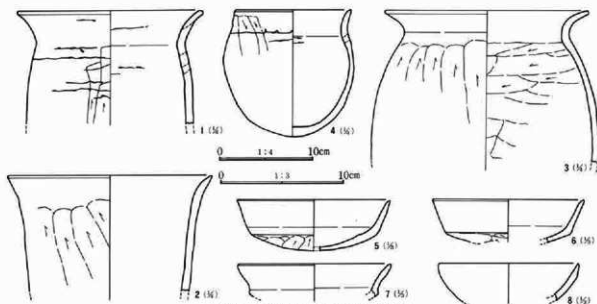
遺物 竈内とその周辺を中心に、甕・甔・坏等の土器が出土している。

備考 本住居跡の東側で甕より北側が、第33号住居跡と重複しており、その新旧関係は、第33号住居跡が本住居跡の竈の一部を壊していることなどから、本住居跡の方が古いと考えられる。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)



第179図 第79号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第180図 第79号住居跡出土遺物実測図

第79号住居跡出土遺物観察表 (PL.140)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甕	竈	□(20.0) 高一底一 口~胴 瓦	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無で。	輪横或、明確に 残る。
2	土師器 甕	+6	□(21.8) 高一底一 口~胴 瓦	①細・白色灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め縦削り。 内面 胴部無で。	
3	土師器 甕	+6	□(21.6) 高一底一 口~胴 瓦	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部縦削り。	
4	土師器 小型甕	床直	□(12.6) 高13.4 丸底 口~底 瓦	①普通・白色灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	内外共口縁部横撫で。外面 口辺部~胴部縦削り。内面 胴部無で。	
5	土師器 環	+19	□(12.2) 高(4.0) 口~底 瓦	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で。体部~底部斜め縦削り。 内面 口縁部~底部磨き。	
6	土師器 環	竈内	□(12.1) 高一底一 口~底 瓦	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で。体部~底部縦削り。 内面 口縁部~底部磨き。	
7	土師器 環	+6	□(12.2) 高一底一 口~底 瓦	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。	
8	土師器 環	埋没土	□(11.1) 高一底一 口~体部片	①細・黒色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部~体部磨き。	

第80号住居跡

位置 4区24C00

写真 PL.42

形状 長辺3.02m 短辺2.60mの長方形を呈する。

面積 8.53m² 方位 N-106°-E

埋没土 ローム粒を含む黒褐色土・灰黒褐色土を主とする。

床面 掘りかた面に、ロームブロックを多量に混在する粘性の強い暗褐色土を客土し、堅くしまった平坦な床面をもつ。また住居跡中央部には、径が1.1m程の円形を呈する床下土坑が検出された。掘りかた面は、全体に凹凸のあるでこぼこした状態である。

壁高は、10~30cmを測る。

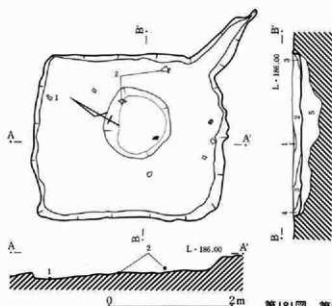
竈 東壁と南壁の角に位置し、煙道部が南東方向に長く延びている。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、煙道部は長く徐々に立ち上がっていく。燃焼部は狭く内壁がやや焼土化している。

貯蔵穴 確認されなかった。

柱穴 1カ所検出されたが、本住居跡に伴うかどうかは、不明。

遺物 埋没土中より、甕・瓶などの破片が数点出土している。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半とした。 (谷藤)

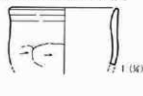
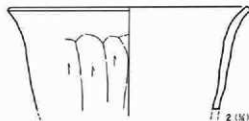


土層注記

1. 褐色土 A 軽石を含む、細粒で締りのある土。
2. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。細粒で締りに欠ける土。
3. 灰暗褐色土 ローム粒を2より多く含む。細粒で、2より締りのある土。
4. 褐色土 ロームブロックを多量に含む、細粒で粘性のある土。壁の崩れたものか。
5. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、粘性が強く、堅くしまっている(床材)。

竈 全長 136cm
 燃焼部長 100cm
 燃焼部幅 24cm
 焚口部幅 30cm

第181図 第80号住居跡実測図



第182図 第80号住居跡出土遺物実測図

第80号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	名称・形状	出土位置	口径	高さ	底径	残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土器器 小型甕	+3	口(11.3)	高一底一		口~胴 ⅔	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋作り。内面 胴部撫で。	
2	土器器 甕	-1	口(25.4)	高一底一		口~胴 ⅔	①濁・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋作り。内面 胴部撫で。	

第81号住居跡

位置 4区12B47 写真 PL.42

形状 長辺4.76m 短辺3.11mの南北軸の短い長方形を呈する。

面積 14.22㎡ 方位 N-33°-W

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土を主に堆積する。

床面 本住居跡の床面は、重複する第78号住居跡より高く、第82号住居跡よりも低い。掘りかた面に、ロームブロックを多量に混在する暗褐色土を客土し、床面は踏みしめられ堅くしまっている。掘りかた面は、ややでこぼこしている。

竈 北壁のやや東側に位置しているが、第78号住居跡と重複し、燃焼部より北側が壊されている。焚口部から燃焼部にかけては平坦となり、焚口部に位置する袖部は、石で島居状に組まれていたものと考え

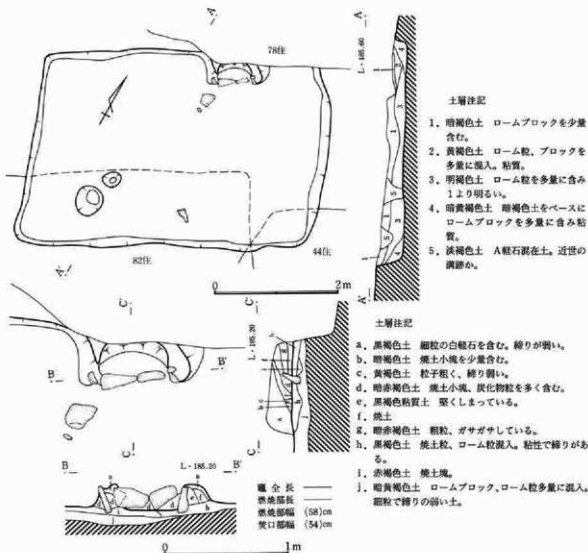
られる。袖部には粘質な黒褐色土を構築材とし、堅くしまっている。

柱穴 住居の南側にピットが2カ所ほど床面上で検出されたが、掘りかた面で検出されたピットをも考え合わせると、住居外形の対角線上に位置するものが主柱穴と思われる。

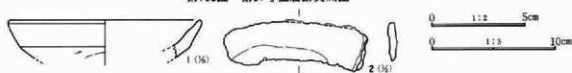
遺物 出土した遺物は少なく、坏の破片と鉄製鎌のみである。鎌は、電作りかた内より出土している。

備考 本住居跡の北側に第78号住居跡が、南側に第82・44号住居跡が重複しており、これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の状態、さらには本住居跡の竈が第78号住居跡に壊されていること等から、第82・44号住居跡よりも本住居跡の方が新しく、第78号住居跡より古い。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半としたい。(谷藤)

第3章 検出された遺構と遺物



第183図 第81号住居跡実測図



第184図 第81号住居跡出土遺物実測図

第81号住居跡出土遺物観察表 (PL.140)

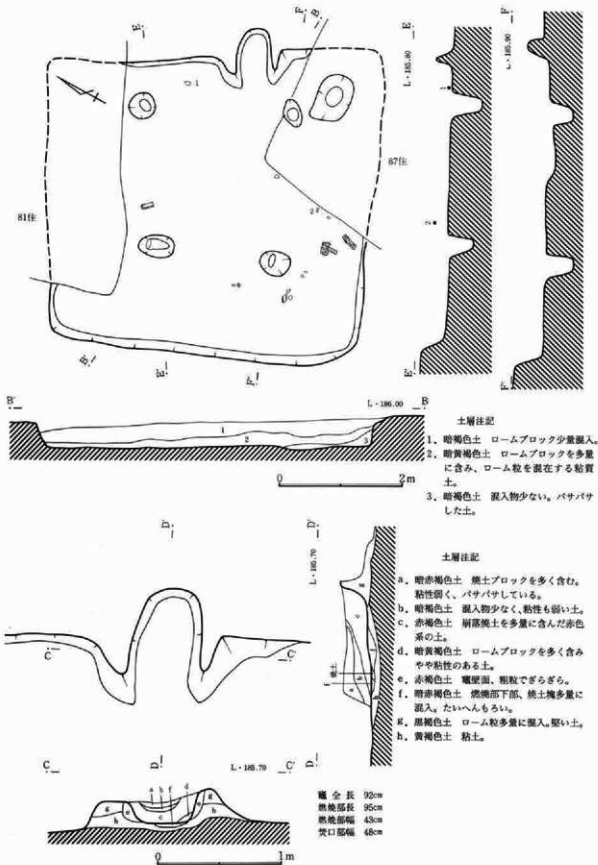
図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	底径 底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・器形の技法	備考
1	土師器 杯	埋没土	口(15.1) 高一底一 口縁部片		①胎・白色軟微量 ②焼成 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横溝で。 外面 体部横溝用。	
2	鉄製品 鏃	埋没土	残存長7.6cm			小型鏃で、欠損はほとんどないが、刃部中央に、やや砥減があり、刃は表面からの砥ぎ出しがあり、両刃。刃区と、耳から推定される柄部径は、1.4cm以下。錆化は少ない。	

第82号住居跡

位置 4区12B49 写真 PL.43
形状 長辺4.98m 短辺4.65mの斜正方形を呈する。
面積 24.66㎡ 方位 N-58°-E
埋没土 混入物の少ない暗褐色土や、ロームブロッ

クを混在させた暗黄褐色土を主に堆積する。
床面 掘りかた面にロームブロックを多量に混在する褐色土を客土し、床面は踏みしめられ堅くしまっている。また、本住居跡の床面は、重複する第81・87号住居跡の床面より高い位置にある。掘りかた面

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第185図 第82号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

は、ややでこぼこしている。

竈 東壁のやや南寄りに位置し、残存状態は比較的良好であった。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、煙道部は急傾斜に立ち上がる。袖部は焼土粒・ロームブロックを混在する暗褐色土及びローム土で構築されている。

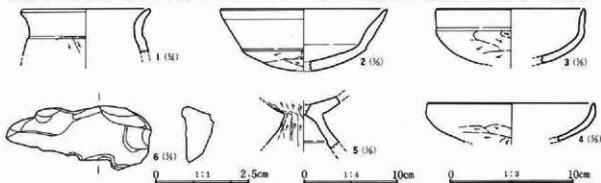
柱穴 住居外形の対角線上に、4本の主柱穴を検出。

貯蔵穴 竈の右側に位置し、長軸80cm短軸56cmの楕

円形を呈し、深さが76cmを測る。

遺物 出土した遺物は少量で、壺・環・高環及び滑石製品の未成品が住居全体に点在する。

備考 本住居跡の北側に第81号住居跡が、南側に第87号住居跡が重複しており、これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や、床面の状態等から、いずれの住居跡よりも本住居跡の方が古い。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀前半とした。(谷藤)



第186図 第82号住居跡出土遺物実測図

第82号住居跡出土遺物観察表 (PL.140, 141)

図号	器種・器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 小型壺	+1	口(13.5) 高一底一 口~胴 3/4	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め底削り。	
2	土師器 環	+15	口(13.3) 高(4.9) 丸底 口~底 3/4	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横削り。内面 体部撫で。	
3	土師器 環	埋没土	口(11.8) 高一底一 口~底 3/4	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部不定 方向削り。内面 体部撫で。	
4	土師器 環	埋没土	口(13.2) 高一底一 口~体 3/4	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部不定方向削 り。内面 撫で。	87住からの流れ 込み。
5	土師器 高環	埋没土	口~高一揃一 坏底部~脚部片 3/4	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い黄色	外面 坏底部~脚部縦削り。 内面 縦撫で。	
6	滑石 壺 チップ	埋没土	材質 滑石。長さ3.9cm 幅1.2cm 厚さ0.7cm まである。何を意図したかは不明。		重さ6g。裏面1個所に刃傷があるほかは、すべて、原石面のま	

第85号住居跡

位置 4区15C18 写真 PL.43

形状 取付道路に確認された住居跡であるため、一部の調査であったが、それより一辺5.15mの方形を呈するものと考えられる。

面積 26.5m² (推定) **方位** N-34°-E

埋没土 床面を覆った土はローム粒を少量含んだ黒褐色土であるが、その上を覆っていた土については確認できなかったので人為的堆積か自然堆積かは、不明である。

床面 暗褐色土の地山の上に約25cm程ロームと黒褐

色土の混合土を客土して床面を形成している。

竈 北側の壁にあり、煙道部が半分外に出る以外はすべて住居内にある。煙道部の残りが良く、径25cmを測る。全体に粘性のある灰褐色土で作られていたと考えられる。燃焼部・焚口部の残りは、あまり良くなく、どのような作りになっていたかは、不明である。

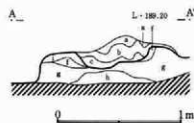
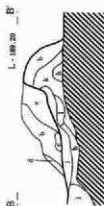
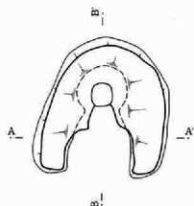
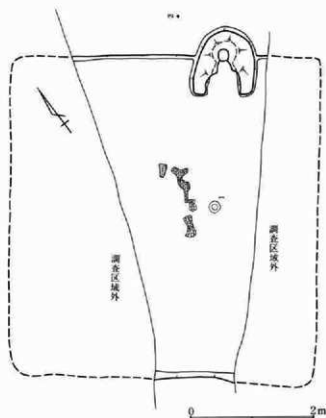
柱穴 床面精査の段階でいくつかのビットを確認することができたが、本住居跡に伴うものかは不明である。

貯蔵穴 確認できなかった。

壁周溝 確認できなかった。

遺物 住居中央の床面直上と竈北より土師器坪が出土した。

備考 住居中央の床面直上より炭化物が出土したが、火災にあったかは不明である。遺物より本住居跡の年代観を6世紀後半としたい。(鹿沼)



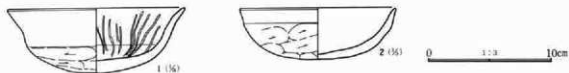
竈全長 (110)cm
 竈口部長 (66)cm
 竈口部幅 (46)cm
 竈口部幅 (48)cm

土層注記

- a. 暗赤褐色土 焼土粒多量に混入。粗粒でもろい土。
- b. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物粒混入。細粒で、締りある土。
- c. 赤褐色土 焼土塊、炭化物粒多量に混入。粗粒でもろい土。
- d. 黒褐色土 焼土粒混入。細粒でもろい土。
- e. 灰暗赤褐色土 焼土粒混入。細粒でもろい土。煙道部にあたるか。
- f. 灰褐色土 白色ローム粒少量混入。細粒で粘性あり。
- g. 暗褐色土 団状の褐色土、ロームブロック混入。細粒で締りの弱い土。
- h. 褐色土 ローム層移層。
- i. 灰赤褐色土 焼土粒多量に混入。cに近い。
- j. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒混入。細粒でもろい土。ピット跡か。
- k. 暗褐色土 ローム粒混入。粗粒でもろい。
- l. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒少量混入。粗粒で締りの強い土。

第187図 第85号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第188図 第85号住居跡出土遺物実測図

第85号住居跡出土遺物観察表 (PL.141)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 総径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 杯	+4	□14.1 高5.1 丸底 ほぼ完形	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横撫 磨り。内面 体部撫で後、磨文。	
2	土師器 杯	甕側住居 外 +11	□(12.4) 高4.0 丸底 口～底 欠	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄棕色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め 磨り。内面 体部撫で。	

第88号住居跡

位置 2区27B41 写真 PL.44

形状 一部が、調査区域外にあるため、推定ではあるが、一辺3.68mの正方形を呈すると考えられる。

面積 11.59㎡ (推定) 方位 N-0°-E

埋没土 粘性の強いロームブロックを含む褐色土が主体をなし、また、炭化物粒を含む暗褐色土も混入床面 確認面で耕作土から35cmほど掘り込み、その上に締りのない黄褐色土を薄く客土して床面を形成している。掘りかたの調査中、3つの床下土坑を確認した。それぞれほぼ円形を呈し、径は、東側1.3m、西側0.9m、南側1.35mを測る。

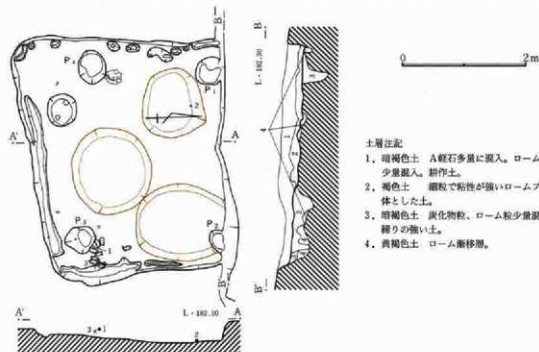
竈・貯蔵穴 検出されなかった。調査区域外にある柱穴P₃に当たる柱穴の位置がずれており、しかも2本ある。それ以外は、住居外形の対角線上にあると思われる。規模(径×深さcm)は、P₁:47×27 P₂:34×73 P₄:40×38を測る。

壁周溝 東から南にかけて、幅16～30cm 深さ12～16cmの規模で確認された。また、西には、壁に添って、小穴群があった。

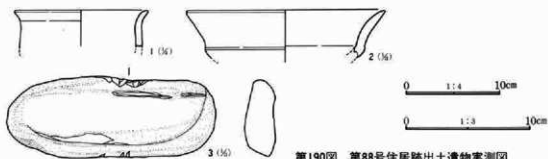
遺物 土師器杯の破片などごくわずか。住居南東部よりこもあみ石と思われる雲母石英片岩が7個集中して出土した。

備考 本住居跡の年代観を7世紀前半としたい。

(鹿沼)



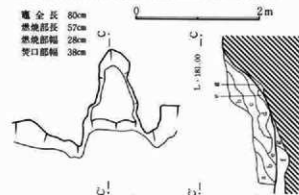
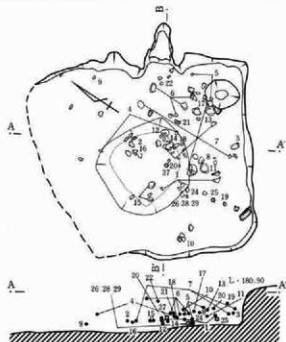
第189図 第88号住居跡実測図



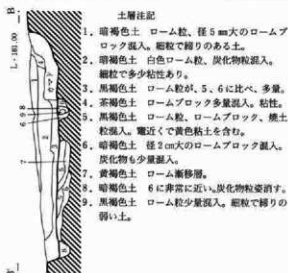
第190図 第88号住居跡出土遺物実測図

第88号住居跡出土遺物観察表 (PL.141)

図中	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+8	口(14.0) 高一底一 口縁部片	①胎・夾雑物なし ②酸化・硬 ③灰褐色	内外共口縁部横断で。	
2	土師器 床瓦	床底	口(16.0) 高一底一 口縁部片	①胎・白色紅褐色 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。 内面 横断無で。	
3	こもあ み石	+7	材質 緑色片岩。長さ16.5cm 幅6.3cm 厚さ2.4cm 重さ400g。図上下側面に、縦行による刻痕部分あり。組を組く時に利用したか。この他に、同様の重量の石が6個集中して出土している。			



竈全長 80cm
 竈壁部長 57cm
 竈壁部幅 26cm
 竈口部幅 38cm



土層注記

1. 暗褐色土 ローム粒、径5mm大のロームブロック混入。細粒で締りのある土。
2. 暗褐色土 白色ローム粒、炭化物粒混入。細粒で多少粘性あり。
3. 黒褐色土 ローム粒が、5、6に比べ、多量。
4. 茶褐色土 ロームブロック多量混入。粘性。
5. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック、機土粒混入。竈近くで黄色粘土を含む。
6. 暗褐色土 径2cm大のロームブロック混入。炭化物も少量混入。
7. 黄褐色土 ローム漸移層。
8. 暗褐色土 6に非常に近い。炭化物粒豪消す。
9. 黒褐色土 ローム粒少量混入。細粒で締りの弱い土。

土層注記

- a. 黒褐色土 ローム粒若干含む。
- b. 黒褐色土 aよりローム粒多い。
- c. 赤褐色土 機土、炭化物粒含む。
- d. 赤褐色土 機土、ローム粒含む。
- e. 赤褐色土 機土、ローム粒、多量に含む。
- f. 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。
- g. 黄褐色土 ローム漸移層。

第191図 第91号住居跡実測図

第91号住居跡

位置 2区33B42 写真 PL.44

形状 西に向かう斜面に構築されており、西壁が明確に残存していないため、推定ではあるが長辺3.32m 短辺3.08mの隅丸長方形を呈すると思われる。

面積 10.08㎡ (推定) 方位 N-51°-E

埋没土 径5cm大のロームブロック・ローム粒・炭化物粒を含む暗褐色土が主体をなす。壁際は三角堆積を、中央はレンズ状堆積を呈する。

床面 確認面でローム層を60cm掘り込み、その上に径2cm大のロームブロックを多量に含む暗褐色土を10~20cm程客土して踏みしめ床面を形成している。掘りかたの調査中に、住居中央より径1mほどの円形の床下土坑を確認した。なお、壁高は、確認面で2~50cmを測る。

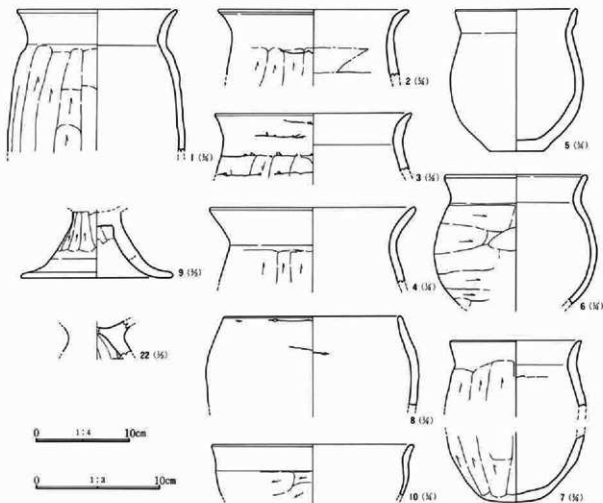
竈 北東壁やや南よりにある。造作材は、黄色粘土が主体をなし、焚口部の構造は、袖石や天井石が残存しておらず、不明である。燃焼部の一部と煙道部が屋外にでる他は、すべて屋内に構築されている。燃焼部はほぼ平坦で、煙道部は緩やかに立ち上がっている。

柱穴・壁周溝 確認されなかった。

貯蔵穴 竈向かって右、東隅に長軸54cm短軸46cm深さ53cmの楕円形で確認された。

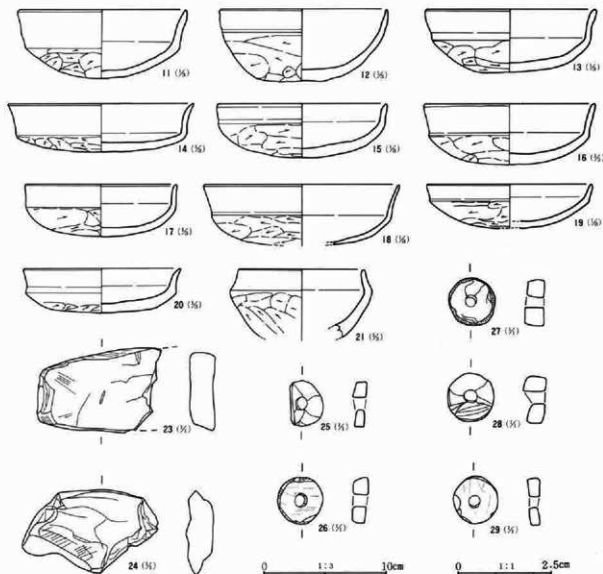
遺物 住居西側を除いて、全体から土師器が出土している。特に中央より完形に近い土師器坏が多く出土している。また、滑石製模造品の白玉5個・剣形未成品1個が出土しているのが特徴である。

備考 本住居跡の年代観を出土遺物から7世紀前半としたい。(鹿沼)



第192図 第91号住居跡出土遺物実測図(1)

第3節 古墳時代の遺構と遺物



第193図 第91号住居跡出土遺物実測図(2)

第91号住居跡出土遺物観察表 (PL.141)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+5	口(17.0) 高一底一 口~胴 ⅔		①普通・白色灰色紅多量② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 胴部撫で。	胴部縦割り。
2	土師器 壺	+36	口(20.4) 高一底一 口~胴 ⅔		①普通・白色灰色紅多量② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 胴部撫で。	胴部縦割り。
3	土師器 壺	+12	口(21.0) 高一底一 口~胴部片		①普通・白色灰色紅多量② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 頸部撫で。	輪横状、明瞭。
4	土師器 壺	+19	口(22.0) 高一底一 口~胴部片		①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 胴部撫で。	
5	土師器 小型壺	+6	口(13.0) 高15.0 底5.7 口~底 ⅔		①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部~胴部撫で(胴部縦割り?) 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	表面の摩耗が著 しい。
6	土師器 小型壺	+11	口(15.0) 高一底一 口~胴 ⅔		①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 胴部撫で。	胴部縦割り。
7	土師器 小型壺	+9	口(14.0) 高一底4.0 口~胴~底 ⅔		①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 胴部撫で。	胴部縦割り。
8	土師器 壺	+15	口(19.2) 高一底一 口~胴 ⅔		①普通・灰色紅多量 ② 酸化・硬 ③明褐色	外面 口縁部~胴部縦割り。 内面 口縁部~胴部撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
9	土器器 高 環	-2	口一高一 幅12.0 脚部 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 脚部縦削り、頸部横削り。 内面 脚部～底部横削り。	
10	土器器 鉢	+24	口(21.3) 高一底一 口～底部片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部縦削り。 内面 体部横削り。	
11	土器器 環	+10	口13.5 高さ5.4 底5.3 完形	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部縦削り。 内面 体部横削り。	
12	土器器 環	+7	口13.5 高さ5.6 完形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部斜め 縦削り。内面 体部横削り。	
13	土器器 環	+20	口13.8 高さ4.8 丸底 完形	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部は斜め縦削り。 内面 体部横削り。	
14	土器器 環	+3	口14.7 高さ3.8 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横削り。体部～底部不定方向 縦削り。内面 体部横削り。	
15	土器器 環	+5	口(13.6) 高さ4.2 丸底 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部不定 方向縦削り。内面 体部横削り。	
16	土器器 環	+33	口(13.6) 高さ4.8 丸底 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部不定 方向縦削り。内面 体部横削り。	内面黒色処理。
17	土器器 環	+17	口12.1 高さ4.1 丸底 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部不定 方向縦削り。内面 体部横削り。	
18	土器器 環	+13	口(15.6) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部横削り。 内面 体部横削り。	
19	土器器 環	+33	口(13.0) 高さ(3.5) 底一 口～底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部斜め 縦削り。内面 体部横削り。	
20	土器器 環	+9	口(12.7) 高さ3.5 丸底 口～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部～底部斜め 縦削り。内面 体部横削り。	
21	土器器 環	+19	口(16.2) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・白色 灰色紅少量 ②酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横削り。外面 体部斜め縦削り。 内面 体部横削り。	
22	土器器 高 環	+33	口一 高一底一 脚部片	①細・黒色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 脚部縦削り。 内面 脚部横削り。	
23	刺形 環状土		材質 滑石。長さ3.1cm 幅2.2cm 厚さ0.7cm 削りによって、調整している。			
24	チップ	+2	材質 滑石。長さ3.6cm 幅3.2cm 厚さ0.7cm 刃部を意図していたか。			
25	白玉	+7	材質 滑石。長さ1.2cm 幅0.9cm 厚さ0.3cm 孔径0.3cm 重さ0.6g。ⅴほど割れている。側面は、研磨による 調整。表面は、割ったまま。成品を切断したものと考えられる。穿孔は、一方向。扁平。			
26	白玉	+2	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.2cm 厚さ0.3cm 孔径0.3cm 重さ0.8g。実測図29と接合する。側面は、研磨による 調整。表は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。扁平。			
27	白玉	+10	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.2cm 厚さ0.5cm 孔径0.2cm 重さ1.3g。上面は、刃物による削り調整。下面は剥 離。側面は、研磨。成品を切断したのか。穿孔は、一方向。扁平。			
28	白玉	+2	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.2cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 重さ1.2g。上・下面とも割れて自然面露出。側面は、 研磨。成品を切断したのか。穿孔は、一方向。扁平。			
29	白玉	+2	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.2cm 厚さ0.3cm 孔径0.3cm 重さ0.9g。実測図26と接合する。側面は、研磨による 調整。表は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。扁平であり、成品をさらに切断したものと考えられる。			

第92号住居跡

位置 2区33B48

写真 PL44

形状 西壁部分が耕作溝や土坑により切られており、明確に残存していなかったが、長辺3.24m 短辺3.02mの隅丸長方形を呈すると思われる。

面積 11.61㎡ (推定) 方位 N-37°-E

埋没土 ローム粒・ロームブロック・炭化微粒を含む黒褐色土が主体をなす。壁際は三角堆積をし、中央はレンズ状堆積を呈する。

床面 確認面でローム層を44cmほど掘り込み、その上に黒褐色土と黄褐色土との混合土を客土して床面

を形成している。竈前面と貯蔵穴付近に特に堅い面を確認した。なお、壁高は、確認面で2～52cmを測った。

竈 北壁ほぼ中央に焼土面を確認した。範囲は、長軸60cm短軸35cm程の楕円形を呈する。ほとんど削り取られており、造作材・構造等は確認できなかった。

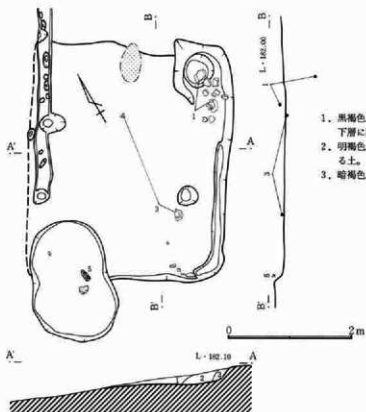
柱穴 床面に不規則にピットが二つ確認できたが、浅く柱穴とはとらえ難い。

貯蔵穴 竈向かって右、北東隅にある。円形を呈し、規模は、径50cm深さ65cmを測る。

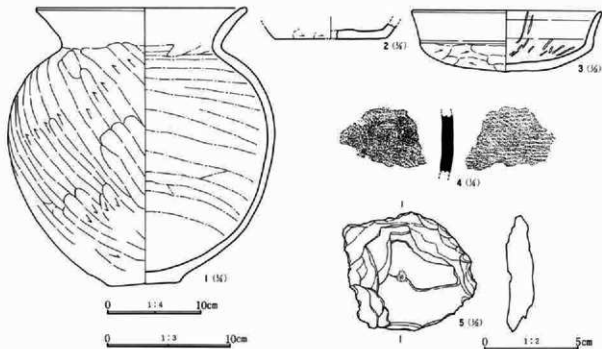
壁周溝 東から南壁にかけて、幅12～20cm深さ4～10cmの規模で確認された。

遺物 貯蔵穴南寄りに土師器壺、東寄りのピットそばより土師器坏・壺、南寄りから中央にくぼみのある緑色片岩製のハンマーストーンが出土している。

備考 第54号土坑と重複。本住居跡の年代観を遺物より7世紀前半とした。(鹿沼)



第194図 第92号住居跡実測図



第195図 第92号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第92号住居跡出土遺物観察表 (PL142)

目録	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	+25	口22.4 高29.2 底7.7 口~底 瓦	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横割で、外面 胴部斜め瓦割り。 内面 胴部直割で。	
2	土師器 壺	埋没土	口一高一 底(12.0) 底部片	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 底部横割削り。	内面黒色処理。
3	土師器 杯	+5	口15.0 高4.8 丸底 口~底 瓦	①細・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横割で、外面 体部~底部斜め 直削り。内面 体部直削で後、暗文。	
4	須恵器 壺	埋没土	口一高一底一 胴部 片(破6.1 横9.5)	①普通・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰白色	外面 斜め格子叩き。 内面 青海波状叩き後、すり消し。	
5	凹み石	+25	材質 緑色片岩。長さ10.2cm 幅9.3cm 厚さ2.1cm 重さ280g。側面部は、すべて、剝離。ほぼ中央に凹みが穿たれている。敲打石としても使用されたか。			

第94号住居跡

位置 3区03C06

写真 PL.44

形状 一辺3.16mの隅丸方形を呈する。

面積 9.84㎡ 方位 N-26°E

埋没土 ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体をなす。レンズ状堆積を呈する。

床面 北西斜面に確認面でローム層をおよそ54cm掘り込み、その上に黄褐色土と黒褐色土の混合土を客土して床面を形成している。住居中央に粘土でできた10cm程の高まりがあった。住居南寄りに堅い部分を検出した。掘りかたの調査をしたが、床下土坑は

確認されなかった。

竈 北東隅の壁際に、幾分か突出部と焼土が検出されたのみで、竈や造作材は確認されなかった。住居の残り方からすると、竈が住居使用時に存在したか、疑問である。

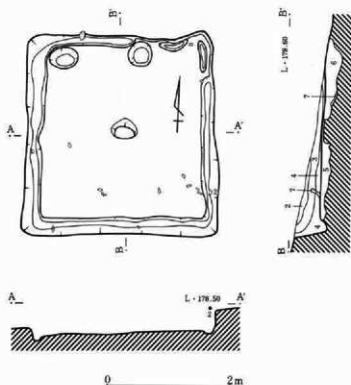
柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

壁周溝 焼土部分を除いて幅18~28cm深さ9~13cmの規模で1周する。

遺物 土師器杯・須恵器壺の破片など数片しか出土しなかった。

備考 本住居跡の年代観を7世紀前半としたい。

(鹿沼)



土層記

1. 暗褐色土 ローム粒、径5mm程度のロームブロック混入。粗粒で締りの強い土。
2. 暗褐色土 ローム粒多量に混入。細粒で締りの強い土。
3. 黒褐色土 ローム粒少量混入。細粒で締りのある土。
4. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に混入。ロームブロック下層に集中。
5. 黄褐色土 多量のロームブロック混入。
6. 黒褐色土 ロームブロックと黒色土を連続に含む。
7. 大きなロームブロック

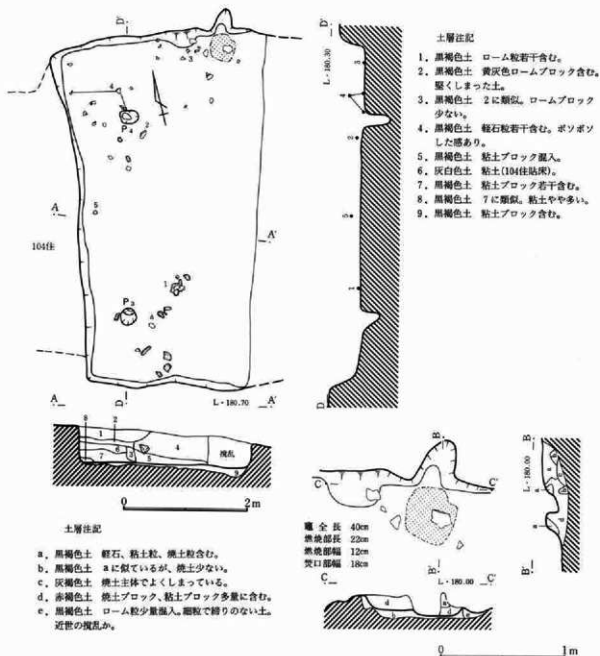
第196図 第94号住居跡実測図



第197図 第94号住居跡出土遺物実測図

第94号住居跡出土遺物観察表 (PL-)

種別	器形	出土位置	口徑 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 環	埋没土	口一 径(14.0) 口辺一体部片	①細・白色紅微量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横滑で。外面 体部縦削り。 内面 体部磨で。	
2	面取器 壺	+33	口一高一直一 胴部 片(縦2.5 横5.1)	①細・黒色紅少量 ②濃 元・硬 ③灰色	外面 斜め格子叩き。 内面 青海波叩き。	



第198図 第105号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第105号住居跡

位置 3区26B40 写真 PL.44

形状 南北5.52m 東西3.86m(現状)であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。東側約半分は失われている。また西壁に関しても第104号住居跡により壊されており不明確である。

面積 16.34㎡(現状) 方位 N-13°-E

埋没土 上部はかなり攪乱されていたが、床面付近にプライマリーな層が残る。地山粘土ブロックを含み粘性を持つ。

床面 白色粘土を地床としている。やや凹凸はあるが比較的平坦である。

竈 北壁に構築されている。上部は道路や桑の根などによりかなり破壊されており、遺存状態は悪い。

竈本体はほとんど壊れており、前面に粘土・ロームブロックに混じり焼土・炭化物が散在していた。

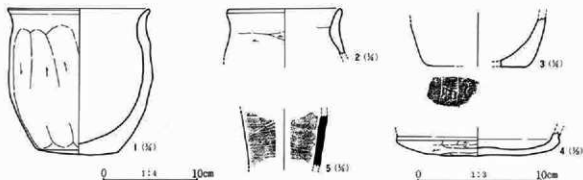
柱穴 北西および南西隅寄りに2カ所確認された。径は20cm程で深さは40cm前後である。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 量は少なく土師器・環などの破片が若干出土している。

備考 台地の東端やや傾斜地にあり、すぐ東側は谷になっており落ち込む。第104号住居跡が西壁部に重複し、さらに東側3分の1程は道路下にあり攪乱を受けているために遺存状態は良好とは言えない。出土遺物などから考えて時期は古墳時代後期、7世紀前半と考えられる。(小野)



第199図 第105号住居跡出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表 (PL.142)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 小皿	+7	口径15.0 高さ15.3 底8.4 口～底 ㄹ	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 割部縦旋削り。内面 割部撫で。	
2	土師器 小皿	+12	口(12.0) 高一底一 口～底(破片)	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 割部縦旋削り。内面 割部撫で。	
3	土師器 壺	+1	口～高一底(10.2) 割～底(破片)	①胎・灰色紅微量 ②酸化・普通 ③暗褐色	内外共、磨耗が激しいため、明確でないが外面旋削り、内面撫でと思われる。	底部に木炭灰あり。
4	土師器 環	+2	口～高一底(13.1) 割～底 ㄹ	①胎・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③黒褐色	外面 体部～底部横旋削り。内面 体部～底部撫で。	
5	須恵系 長頸壺	+14	頸部破片(縦5.5 横2.5)	①胎・白色微紅少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	

第106号住居跡

位置 2区22C09 写真 PL.44, 45

形状 長辺5.82m(推定) 短辺5.02mの長方形を呈す。

面積 30.02㎡(推定) 方位 N-64°-E

埋没土 自然堆積と考えられる。ローム粒子・炭化物粒を混入する土で、かなり粗粒。

床面 大部分はロームの地山面であるが、南西・南東部の一部は混合土の客土である。竈前は部分的に踏みしめられていた。

竈 焚口に石を設置した構造のものであったが北側約半分は第107号住居跡によって削り取られていた。火床面の焼土が若干残る。竈下に大きな円形の落ち込みが見られた。

柱穴 対角線上に3本検出されたが北東の1本は検出できなかった。

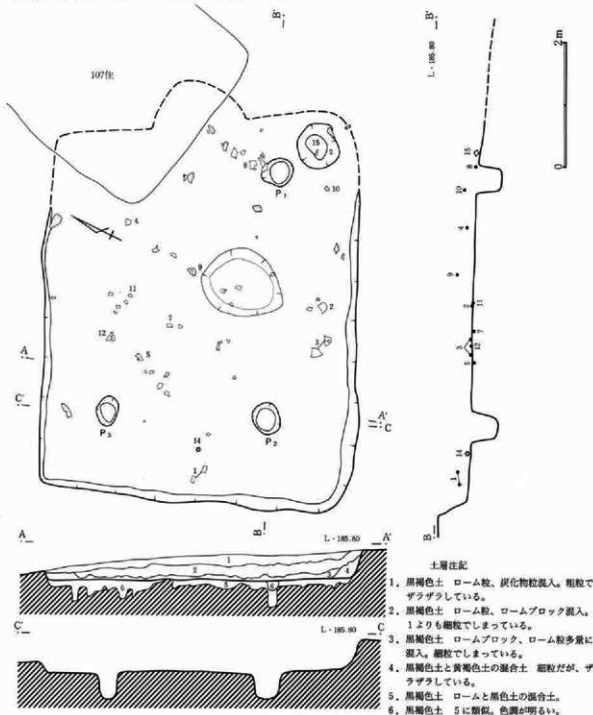
貯蔵穴 南東隅に検出された。円形で径約60cm 深

きは54cmを測る。

壁周溝 確認されなかった。

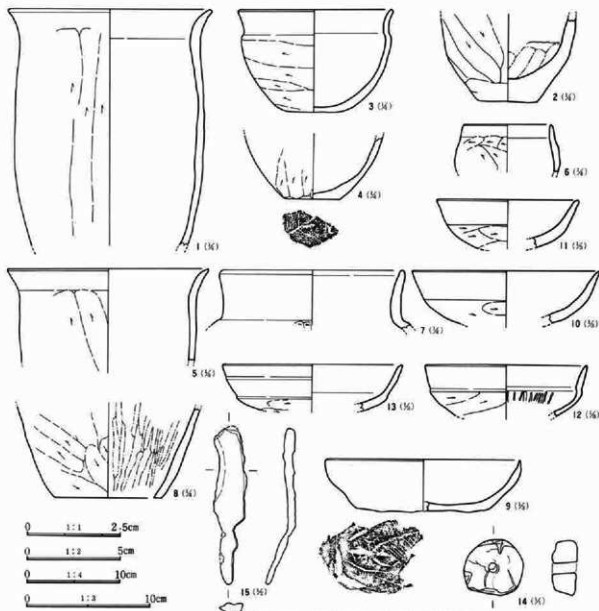
遺物 土師器壺・坏類若干出土。

備考 竈部に第107号住居跡が重複する。東壁部は削平が著しい。本住居跡の年代観を出土遺物より6世紀後半と考えたい。(小野)



第200図 第106号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第201図 第106号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡出土遺物観察表 (PL.142)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+20	口(21.6) 高一底一 口~胴 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦磨削り。	
2	土師器 壺	+16	口一高一 底6.0 口~底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部斜め磨削り。 内面 胴部~底部磨削り。	
3	土師器 小型壺	+11	口16.3 高10.7 底6.5 口~底 片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め磨削り。	
4	土師器 小型壺	+16	口一高一 底6.0 胴~底 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部斜め磨削り。 内面 胴部無で。	底部に木葉痕あり。
5	土師器 瓶	+3	口(21.8) 高一底一 口~胴部片	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部無で。	
6	土師器 小型壺	埋没土	口9.3 高一底一 口~胴部片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部上半部は横 磨削り。中央部は斜め磨削り。内面 胴部無で。	
7	土師器 壺	+4	口(19.4) 高一底一 口縁部片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部横磨削り。	

種別	前掲 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
8	土師器 甕	+7	口一高一 底11.3 胴一底 ⅔	①細・白色藍少量 ②酸 化・硬 ③褐色	外面 胴部斜め篋削り。 内面 胴部篋削り。	
9	土師器 坏	+32	口15.6 高4.3 底一 口一底 ⅔	①細・白色藍微量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で、体部撫で。	底部に木葉灰あり。
10	土師器 坏	+21	口(15.0) 高一底一 口一底 ⅔	①細・白色藍微量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横篋削り。 内面 体部撫で。	
11	土師器 坏	+1	口(11.4) 高一底一 口一底 ⅔	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横篋削り。 内面 体部撫で。	
12	土師器 坏	+5	口(13.0) 高一底一 口一底 ⅔	①細・白色藍少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横篋削り。 内面 体部撫で、職文。	
13	土師器 坏	床直 増設土	口14.3 高一底一 口一底 ⅔	①細・灰色藍微量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横篋削り。 内面 体部撫で。	内外共、黒色結 理。
14	白玉	+8	材質 滑石。長さ1.5cm 幅1.4cm 厚さ0.6cm 孔径0.2cm 重さ2.6g。上・下面は、刃物による削り調整。側面は、研磨。穿孔は、一方向か。比較的大ぶりの白玉。			
15	鉄製品 刀子	+9	残存長8.2cm	両端部ともに旧態。茎部と身部との間で折曲する。平造り。刃区、棟区ともに甘く、穂用刀子。錆化は顕著でなく、具鉄を思わせる。		

第114号住居跡

位置 2区15B33 写真 PL.45

形状 全容は不明である。

面積 不明 方位 不明

埋没土 ロームブロックを少量含んだ暗褐色土。

床面 ほぼ全面凹凸の見られる貼床である。北東コーナーに一部踏みしめられた堅い面が見られた。

竈・柱穴・貯蔵穴・壁周溝 確認されなかった。

遺物 遺物の出土はほとんど無かった。

備考 時期は6世紀後半と考えられる。(小野)

115号住居跡

位置 2区16B35 写真 PL.45

形状 不明である。

面積 不明 方位 N-19°-E

埋没土 ロームブロックを混入する暗褐色土。

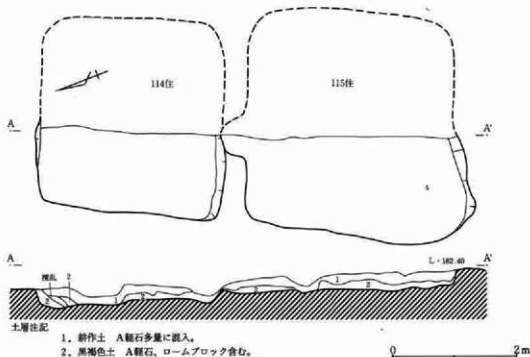
床面 ローム地山を床面としている。一部貼床。

竈 北壁の一部に焼土・粘土を確認。電位置か。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝 確認されなかった。

遺物 床面下より土鍾が1点出土している。

備考 時期は6世紀後半か。(小野)



第202図 第114・115号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第203図 第115号住居跡出土遺物実測図

第115号住居跡出土遺物観察表 (PL.142)

図号	器種	出土位置	特 徴
1	土 鉢	-8	材質 土製品、長さ3.4cm 幅1.7cm 厚さ1.5cm 孔径0.5cm 重さ8.5g。掘りかたの調査中に出土した。全体に黒色をしているが、焼成時のものと考えられる。

第123号住居跡

位置 2区07C03 写真 PL.45

形状 東および南壁は削られており全容は不明であるが隅丸方形を呈すと思われる。

面積 31.70㎡ (推定) 方位 N-40°-W

埋没土 ほとんど床面が露出していた状態であったので、部分的にロームを混入した黒褐色土がわずかに確認されたのみである。

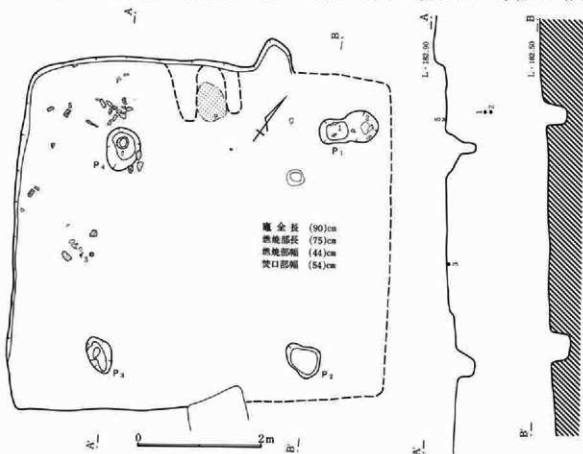
床面 南東に傾斜する場所のため北西部が確認されたのみである。また、耕作による擾乱に因って失わ

れた部分も多い。北西隅および竈の前面で比較的踏みしめられた貼床部が確認された他は、不明瞭である。

竈 北壁の中央部に作られている。上部構造は全く残っていないかったが、住居内に作り出された袖部の形跡が認められた。また、火床面の焼土がわずかに検出されている。壁外への張り出しは見られなかった。

柱穴 対角線上に4本検出された。

貯蔵穴 北東寄りに検出されている。径50cm 深さ



第204図 第123号住居跡実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

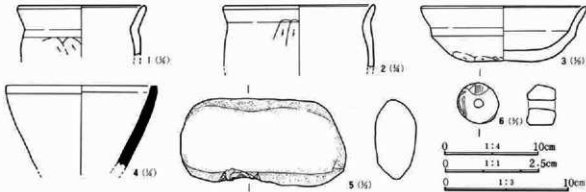
55cmである。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 北西部分において土師器の壺・坏などがわずかに出土している。その他、滑石製白玉が1点出土

している。

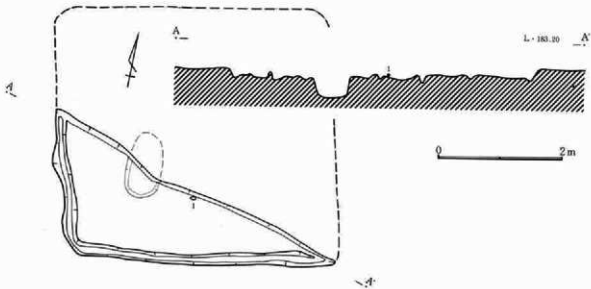
備考 半分以上が削られており、遺存状態は極めて悪かった。本台地では古手の住居である。時期は7世紀前半と考えられる。(小野)



第205図 第123号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡出土遺物観察表 (PL.142)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	-40	□13.6 高一底一 口~胴部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削削り。 内面 胴部撫で。	
2	土師器 壺	-35	□(16.2) 高一底一 口~胴部片	①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部~胴部縦削削り。内面 胴部撫で。	
3	土師器 坏	床直	□13.2 高4.3 口~底 3/6	①細・白色無紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦削削り。内面 体部撫で。	
4	須恵器 鉢	埋没土	□(16.3) 高一底一 口~体 3/6	①細・黒色無紅少量 ② 還元・硬 ③オリーブ灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	自然輪付着。
5	こもあ み石	+3	材質 青緑石英片岩。長さ13.0cm 幅6.6cm 厚さ3.2cm 重さ450g。図下方側面に敲打による割傷が、顯著にみられる。その他、同様の石が、集中して20個確認されている。			
6	白玉	埋没土	材質 滑石。長さ1.1cm 幅1.0cm 厚さ0.7cm 孔径0.2cm 重さ1.6g。上・下面は、刃物による削り調整。側面は、研磨。穿孔は、一方向。比較的大振りの白玉。			



第206図 第126号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第126号住居跡

位置 2区15B42 写真 PL.45

形状 不明。

面積 不明。 方位 不明。

埋没土 ロームブロックを含み締りは弱い。

床面 平坦である。全体に踏み締りは弱い。

竈 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 幅10~15cm、小ピットが50~80cm間隔で見られた。

遺物 須恵器杯の破片が1点出土している。

備考 住居のコーナー部分のみの調査であったため全容は不明である。時期は6世紀後半と思われる。

(小野)



第207図 第126号住居跡出土遺物実測図

第126号住居跡出土遺物観察表 (PL.→)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 杯	床直	口(15.8) 高—底— 口~底部片	①粗・黒色微量少量 敷化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 体部削り。	

第4節 飛鳥・奈良時代の住居跡と遺物

第5号住居跡

位置 5区03B42 写真 PL.46*

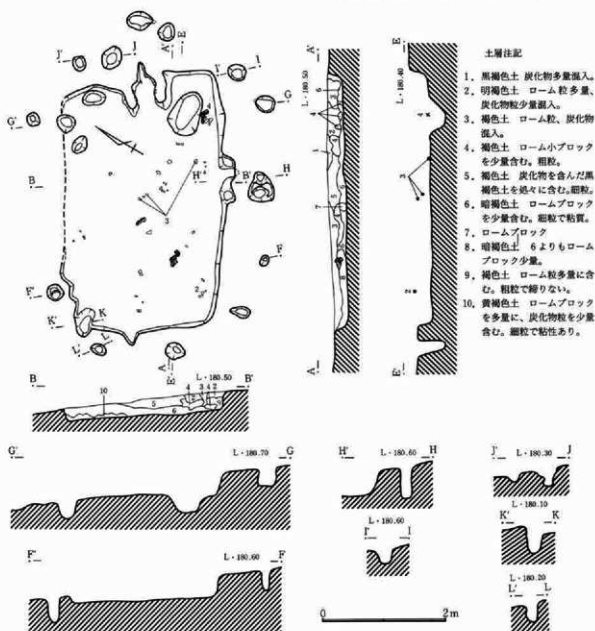
形状 第1号土坑によって西壁が削られているが、長辺4.08m、短辺2.50mを測る長方形と推定される。

面積 9.92㎡ 方位 N-47°-E

埋没土 黒褐色土や褐色土で埋められているが、数多くの大きなブロックに分けられる。このことから短時間に埋められたものとみられる。

床面 確認面のロームから凡そ20~60cm掘り込まれ、ロームを多量に含む黒褐色土を厚さ20~30cm客土して床を造っている。床面は平坦であるが、やや西に傾斜していた。竈前には一部に堅い面が見られた。

竈 北壁のやや東寄りの位置に黄色粘土を用いて屋内に袖を出す形で造られていた。燃焼部はやや左寄りに棒状片岩の支脚が設置され、かなり強く焼けて



第208図 第5号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

いて多量に焼土が残っていた。

柱穴 内部には検出されなかったが、住居の壁中と周囲に14個のピットが検出された。円形のもが主体で規模は径20~30cm、深さ30~50cmである。これらが柱を支える腰壁の柱穴になるものと思われる。

貯蔵穴 電右脇に長軸74cm短軸46cm、深さ28cmの楕

円形で鍋底状のものが検出された。

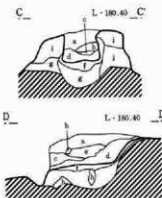
壁周溝 存在しなかった。

遺物 土師器甕・甔・環の破片、及びこもあみ石がごく少量検出された。

備考 本住居跡は7世紀後半と思われる。(小林)



i, 黄色粘土 細粒で粘り気があり、堅い。

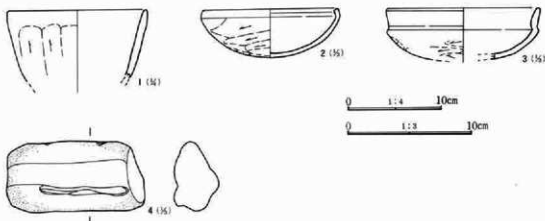


j, 褐色粘質土 黄色粘土や焼土小ブロックを含み、堅くしまっている。

土層注記

- a, 褐色土 粗粒であり締らない。
- b, 褐色土 粘土の塊を含む。細粒。
- c, 暗褐色土 炭化物を少量含む。細粒。
- d, 暗赤褐色土 炭化物粒、焼土粒を多量に含む。
- e, 明褐色土 ロームブロック、焼土を多量に含む。
- f, 焼土 粘土が焼けた土。細粒で堅い。
- g, 暗赤褐色土 ロームブロックを底に含む。やや粗粒であり締りがない。
- h, ロームブロック

第209図 第5号住居跡竈実測図



第210図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (PL.143)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甔 か	埋没土	口(14.9) 高一底一 口縁部片	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横溝で、胴部縦溝削り。 内面 口縁部~胴部横溝で。	
2	土師器 環	+22	口(10.8) 高(3.8) 丸底 □~底 片	①細・灰色紅微量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部~底部横溝削り。内面 体部横溝で。	
3	土師器 環	-1	口(12.1) 高(4.3) 丸底 □~底 片	①細・白色紅微量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部~底部横溝削り。内面 体部横溝で。	
4	こもあ み石	+3	材質 緑色片岩。長さ10.9cm 幅5.4cm 厚さ3.4cm 重さ300g。両側面に若干の磨耗痕あり。紐等を縛った跡の可能性あり。この他に、同様の石が、3個出土している。			

第9号住居跡

位置 4区45B45 写真 PL.46

形状 長辺3.68m、短辺3.30mの隅丸方形。壁は遺存状態良好で垂直に近い状態に掘り込まれており、壁高37~62cmを測る。

面積 11.57㎡ 方位 N-49°-E

埋没土 凡そ10層の褐色土、黒褐色土などによって埋まっている。全体的に塊底型堆積を呈しており、徐々に埋まっていったものとみられる。

床面 確認面の褐色土からローム層まで深さ40~70cm掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土を10cm前後客土して床を造っている。床面は中央がやや窪むがほぼ水平になっている。なお、北西隅に寄った位置に径1.28m、深さ10cmの床下土坑が検出された。

竈 北壁の中央に暗褐色粘質土と細長い板状の雲母

石英片岩を用いて屋内に造り出されていた。石は焚口の両側に突き刺し、この上に架して天井部を作るのに使われていた。また、燃焼部に支脚として使用されていた。燃焼部はかなり強く焼けていた。

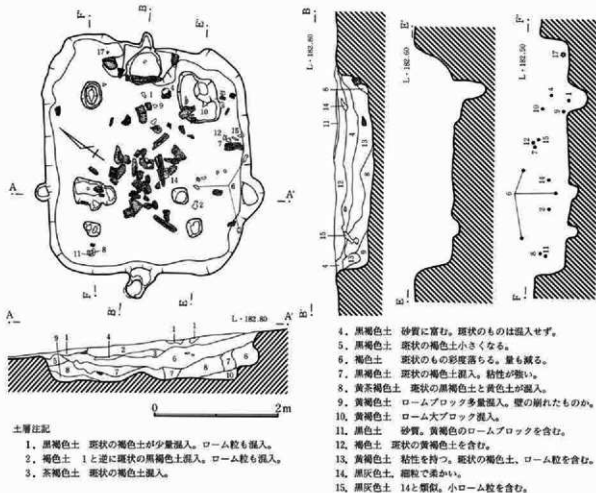
柱穴 ビットは7個検出された。このうち柱穴とみられるものはP₂~P₇である。P₂~P₄は径20~30cm、深さ10~30cmでやや弱い。しかし、P₅~P₇は壁中にあるがしっかりした掘り込みである。

貯蔵穴 竈の右脇に円形で柱穴状のものが存在した。規模は径32cm、深さ50cmである。

壁周溝 存在しなかった。

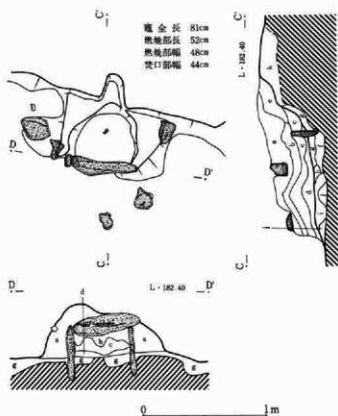
遺物 土師器壺・長埴・甎・環、須恵器壺・蓋、石製紡錘車、金銅製耳環が多量の礫と共に住居全体に散在して出土したが、土器の量は少量であった。

備考 本住居跡は7世紀後半とみられる。(小林)

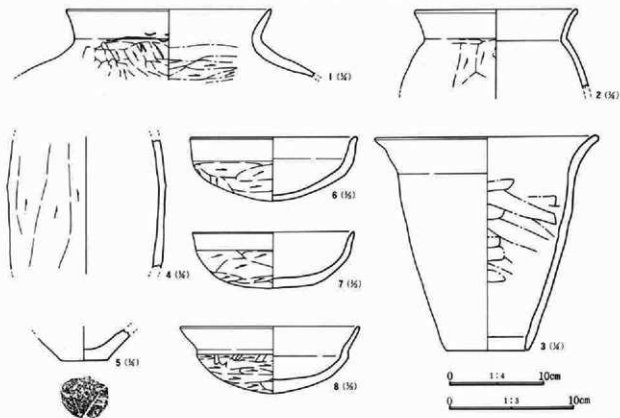


第211図 第9号住居跡断面図

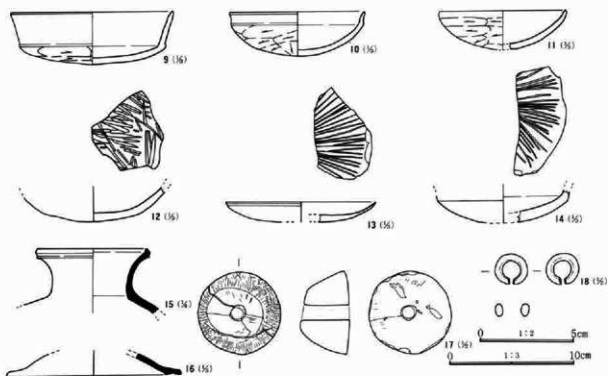
第3章 検出された遺構と遺物



第212図 第9号住居跡竈実測図



第213図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第214図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第9号住居跡出土遺物観察表 (PL.143)

図号	器種 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	-1	口(21.7) 高一底一 口~頸 ㄥ	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横無で、外面 頸部斜の貫削り。 内面 頸部横無で。	
2	土師器 壺	+26	口(16.3) 高一底一 口~頸 ㄥ	①粗・白色灰色灰少量 ②酸化・軟 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で、外面 頸部~胴上半部 縦貫削り。内面 頸部~胴上半部無で。	
3	土師器 壺	埋没土	口(23.9) 高(22.4) 底(8.8) ㄥ	①細・白色微灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横無で、外面 胴部は貫削りと思 われるが単純して不明。内面 胴部横無で。	
4	土師器 長頸壺	+22	口一 高一 底一 胴部(17.0) ㄥ	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部無で。	
5	土師器 壺	埋没土	口一 高一 底5.0 胴~底部片	①粗・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴部は貫削り？。 内面 胴部無で。	底部に木葉痕あり。
6	土師器 杯	+11	口13.2 高5.0 丸底 口~底 ㄥ	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部は横 と縦貫削り。内面 体部無で。	
7	土師器 杯	+51	口(12.9) 高4.4 丸底 口~底 ㄥ	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部縦貫 削り。内面 体部無で。	
8	土師器 杯	+32	口14.1 高5.3 丸底 口~底 ㄥ	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部縦貫 削り。内面 体部無で。	
9	土師器 杯	+12	口(13.0) 高4.2 口~底 ㄥ	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部縦貫 削り。内面 体部無で。	
10	土師器 杯	+42	口(10.6) 高3.5 丸底 口~底 ㄥ	①細・灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部不定 方向貫削り。内面 体部無で。	
11	土師器 杯	+32	口(10.1) 高一底一 口~底 ㄥ	①細・白色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横無で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~底部無で。	
12	土師器 杯	+54	口一 高一 丸底 底部 ㄥ	①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 体部~底部貫削り。 内面 体部~底部無で後、磨き。	内面黒色処理。
13	土師器 蓋形?*	埋没土	口(11.9) 高一底一 坏部 ㄥ	①細・白色微灰少量 ②酸化・硬 ③黒色	外面 口縁部横無で、体部~底部縦削り。 内面 口縁部~坏部無で後、磨文。	16位とよく似て いる。
14	土師器 杯	+30	口一 横(10.5) 高一底一 底~底 ㄥ	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 体部~底部縦貫削り。 内面 体部無で後、磨文。	16位とよく似て いる。
15	銅器 壺	+33	口(11.3) 高一底一 口~頸	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	

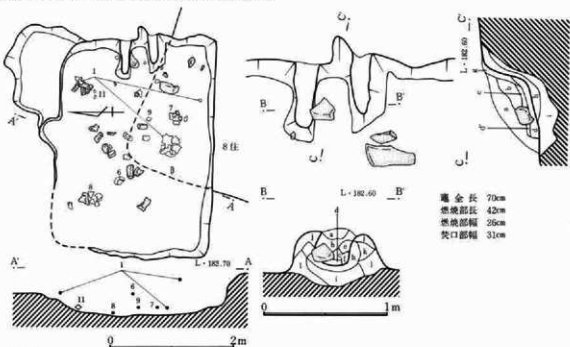
第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
16	須恵器 坏 壺	埋没土 +5	口(14.0) 高一 井部一 天~口 3/4	①普通・白色紙張量 ② 還元・軟③オリーブ灰色	ロクロ整形(右回転)。	
17	紡錘車	堀左	材質 滑石。長軸4.4cm 短軸3.0cm 厚さ2.6cm 孔径0.8cm 重さ70g。全面を刃物による削り調整。穿孔は両方向から行なっており、中心からややずれている。短軸面の縁は、丸く角がとれている。			
18	金銅製 耳環	埋没土	径1.8cm 重5.6g	表面内側に、金が残存しているが、外側は、緑青がふいており、金が剥れてしまった。ほぼ完存している。流れ込みの可能性がある。		

第10号住居跡

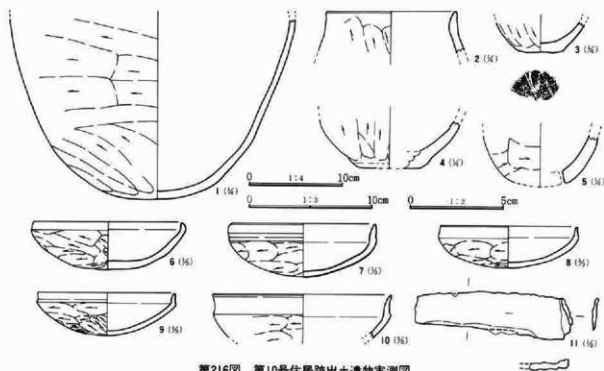
位置 4区49B47 **写真** PL.47
形状 長辺3.42m、短辺2.50mの長方形。
面積 8.63m² **方位** N-85°-E
埋没土 凡そ5層の褐色土、黒褐色土などによって埋められているが、地層断面が塊底型をなすことから徐々に堆積していったものと思われる。
床面 確認面からローム層まで凡そ30~70cm掘り込み、凹凸の著しい掘りかた底面上にロームと褐色土の混合土を10~20cm客土して床面を造っている。なお、床面は中央がやや窪んでいた。
竈 東壁の中央に黄色粘土を用いて屋内に袖を出す形態に造られていた。石も使われたようで燃焼部と

右袖前には長さ20~40cmの棒状石が3個転がっていた。燃焼部には焼土・炭が比較的多く残っていた。
柱穴・貯蔵穴・壁周溝 存在しなかった。
遺物 土師器長壺・壺・甔・坏、鉄製品が少量、住居全体に散在して出土した。また、土器片と共に中央に大小の礫が存在した。竈に使用されたものであろうか。
備考 本住居跡は第8号住居跡と重複しており、これに東南四半部が削られているが、本住居跡の方が深かったために壁の一部(深さ10cm)と床は残存した。本住居跡の年代は出土遺物から7世紀後半と考えられる。(小林)



- 土層注記
- a. 褐色土 黒色土を珪に含む。細粒で粘性あり。
 - b. 暗褐色土 ローム粒少量混入。黒色土も混入。細粒で粘質。
 - c. 淡褐色土 下部に焼土混入。
 - d. 焼土 炭化物、焼けた粘土塊、ロームブロックが混入。まじりけのない焼土を少量含む。細粒で粘質。
 - e. 淡褐色粘土 炭化物、焼土粒を少量含む。細粒で粘質。
 - f. 淡褐色粘土 eと類似。焼土粒を多量に含む。
 - g. 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土、炭化物を含む。
 - h. 焼土 上部に炭化物を含む。
 - i. 暗褐色土 径1~5cm大のロームブロックを含む。
 - j. 黄褐色粘質土 黒褐色土を珪に含み、締りが強い。
 - k. 暗赤褐色土 炭化物を少量含み、細粒で締りが強い。
 - l. 灰黄褐色粘質土 径1~5cm大のロームブロックを含み、細粒で締りが強い。

第215図 第10号住居跡実測図



第216図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (PL.143)

順号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	底径	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	-13	口~胴中央(30.8) 高~ 胴~底 長		①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 胴中央部横溝削り、胴下半部斜め削り。内面 胴部削り。	
2	土師器 壺	埋没土	口(13.8) 高~底一 口~頸部片		①細・白色灰微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部削り、頸部は削り。内面 口縁部~頸部削り。	
3	土師器 壺	埋没土	口~高一 底(5.2) 胴~底部片		①普通・白色灰微量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴下半部斜め削り。内面 胴下半部削り。	底部に木葉痕あり。
4	土師器 壺	埋没土	口~高一 底(5.9) 胴~底 長		①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴下半部横溝削り。内面 胴下半部削り。	
5	土師器 壺	埋没土	口~高一 胴(11.0) 胴~底部片		①細・白色灰微量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 胴下半部横溝削り。内面 胴下半部削り。	
6	土師器 杯	+14	口11.9 高3.7 丸底 は完全形		①細・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横溝で 外面 体部~底部は斜めと横溝削り。内面 体部削り。	
7	土師器 杯	+7	口11.8 高4.2 丸底 口~底 長		①普通・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部~底部横溝削り。内面 体部削り。	外面に黒色の付着物あり。
8	土師器 杯	+5	口11.0 高3.3 丸底 口~底 長		①細・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部~底部横溝削り。内面 体部削り。	
9	土師器 杯	+13	口11.0 高3.4 丸底 口~底 長		①細・灰色灰微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部横溝削り、底部斜め削り。内面 体部削り。	
10	土師器 杯	埋没土	口(14.3) 高~底一 口~底 長		①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横溝で。外面 体部横溝削り。内面 体部削り。	
11	鉄製品 鏝	+9	残存長8.3cm			小型鏝で右端に折り返しの耳あり。穴街・砥成なく旧態を留める。磨面少なく、精緻を思わせる。片刃右きき用。刃区から耳端まで1.9cmを測り、柄部の径が示唆される(1.6~1.7cm)。	

第11号住居跡

位置 4区43C04

写真 PL.47

形状 長辺4.54m、短辺3.94mの長方形。

面積 20.69m² 方位 N-53°-W

埋没土 凡そ7層の褐色土、黒褐色土などによって、

壁際から徐々に埋まっていった様相を呈している。

床面 確認面からローム層まで深さ30~80cm掘り込み、厚さ約20cmロームや暗褐色土の混合土を客土して整地している。床面は平坦であるがやや西側が低く、特に堅い面はない。P₃の北側に径105cm×82cm、深さ30cmの円形の床下土坑が検出された。

竈 西壁の中央に灰黄褐色粘質土を用いて造られて

第3章 検出された遺構と遺物

いたが、破壊が著しく原形を留めていなかった。壁外に残存した部分は燃焼部奥部の一部である。

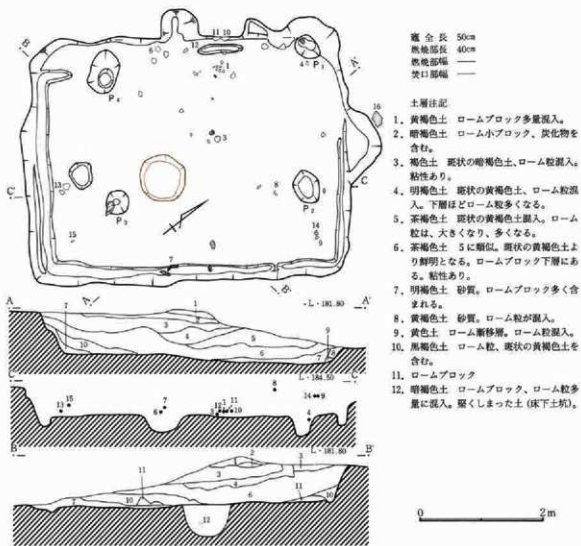
柱穴 5個検出されたが柱穴はP₁～P₅である。柱穴の規模は径35～50cm、深さ25～50cmである。

貯蔵穴 存在しなかった。

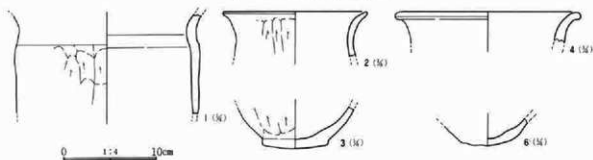
壁周溝 北壁の一部と西壁をほとんど除いて全周していた。規模は幅20～30cm、深さ10～20cmである。

遺物 土師器長壺・小形壺・坏・高坏の破片、磁石が竈前を中心に出土したが、少量であった。

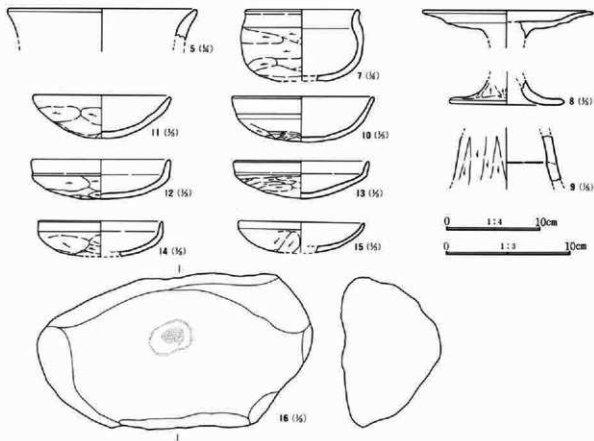
備考 本住居跡は7世紀後半と推定される。(小林)



第217図 第11号住居跡実測図



第218図 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第219図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表 (PL.144)

図番号	器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長割壺	+20	口一 頸(19.0) 高一底一 頸~割 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部縦捩削り。 内面 胴部無。	
2	土師器 埋設土 壺		口(15.5) 高一底一 口縁部破片 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で。頸部縦捩削り。 内面 口縁部横撫で。頸部無。	
3	土師器 壺	+13	口一高一 底(7.0) 割一底 ⅴ	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 胴下半部縦捩削り。 内面 胴下半部無。	
4	土師器 壺	-10	口(19.8) 高一底一 口縁部破片 ⅴ	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③黒色	内外共口縁部横撫で。	2次的な火を受けているか？
5	土師器 壺	埋設土	口(20.1) 高一底一 口縁部破片 ⅴ	①普通・白色紅多量 ② 酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。	
6	土師器 壺	+18	口一高一 底(5.9) 割一底 ⅴ	①粗・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③暗褐色	外面 胴下半~底部縦捩削り。 内面 胴下半~底部縦捩削り。	
7	土師器 鉢	-4	口(12.3) 高一底一 口一底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦捩削り。内面 体部無。	
8	土師器 高 坏	+35	口(13.6) 頸(9.1) 坏部と頸部 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部と頸部横撫で。外面 坏底部と脚部縦捩削り。内面 坏部無。	
9	土師器 高 坏	+23	口一高一 脚(7.3) 脚部片 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸 化・軟 ③鈍い橙色	外面 脚部縦捩削り。 内面 脚部無。	
10	土師器 坏	-3	口11.2 高3.5 丸底 口一底 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部は横と斜め縦削り。内面 体部無。	
11	土師器 坏	-3	口(10.9) 高一 丸底 口一底 ⅴ	①普通・白色黒色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦捩削り。内面 体部無。	
12	土師器 坏	-2	口10.9 高3.1 丸底 口一底 ⅴ	①粗・灰色黒色紅多量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦捩削り。内面 体部無。	
13	土師器 坏	-11	口10.7 高3.0 丸底 口一底 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦捩削り。内面 体部無。	

第3章 検出された遺構と遺物

種別・器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
14 土師器 杯	+23	口(9.9) 高(2.8) 底— 口~底 瓦	①粗・白色紅微量 化・軟 ③明褐色	②焼 内外共口縁部横撫で、外面 体部斜め刮削り、 内面 体部撫で。	底部黒色。
15 土師器 杯	-7	口(10.1) 高—底— 口~底 瓦	①粗・白色紅微量 化・軟 ③鈍い褐色	②焼 内外共口縁部横撫で、外面 体部~ 底部斜め刮削り、内面 体部撫で。	
16 凹み石	住居外	材質 粗粒安山岩、長さ21.9cm 幅12.0cm 厚さ7.8cm 重さ290g。図平面に1箇所、裏面に1箇所、凹みが確認できる。用途は不明。			

第13号住居跡

位置 4区37C09 写真 PL.48

形状 長辺3.30m 短辺2.58mの長方形を呈する。

面積 8.28㎡ 方位 N-32°-W

埋没土 ロームブロックや焼けた粘土ブロックを多量に含む褐色土ないしは黒色土を主体とする。

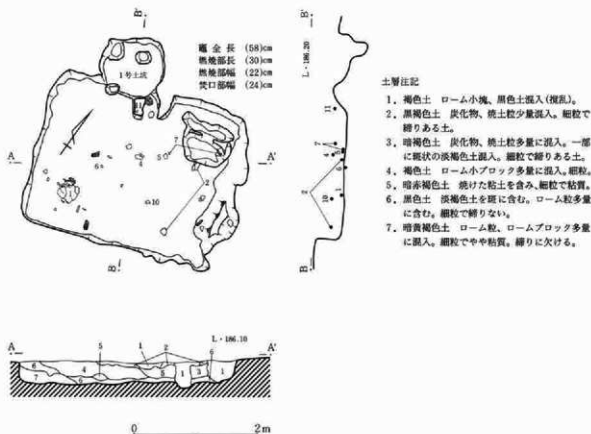
床面 掘りかた面に大粒のロームブロックと黒色・褐色土の混在土を客土し、上面(床面)はかなり堅くしまっている。特に電前の部分は踏み固められ、非常に堅い面になっている。床面は平坦である。なお、壁高は確認面から26~40cmで、東・南壁が高い。竈 一部1号土坑に壊されているのと、電位置が斜

面の低い方にあるため、あまり残りはよくない。袖部には小礫を多量に含む黄色粘質土を構築材としている。燃焼部の袖内側はかなり焼けている。火床面は平坦で、煙道部が緩やかに立ち上がる。

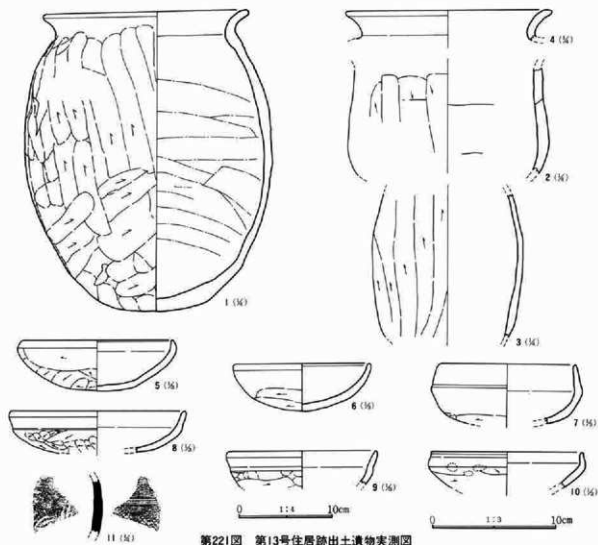
貯蔵穴 竈に向かって右側、北東壁角にあり、底が楕円形となる。

遺物 南西の床面直上より第221図1に示した大型の甕が、また埋没土中から甕・杯等の破片が出土している。

備考 1号土坑と重複するが、その新旧は1号土坑の方が新しい。本住居跡の年代観は、出土遺物より7世紀後半とした。(谷藤)



第220図 第13号住居跡実測図



第221図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 (PL.144)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	-3	口22.0 高31.9 底(9.5) ほぼ完形	①普通・白色紅微量 ② 酸化・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上宇部~中央部 縦筋削り、胴下半部斜め筋削り。内面 筋撫で。	
2	土師器 甕	+18	口~高一 胴(21.0) 胴部 片	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部縦筋削り。 内面 撫で。	
3	土師器 長頸甕	埋没土	口~高一 胴(16.0) 胴部 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	外面 胴部縦筋削り。 内面 撫で。	
4	土師器 甕	+24	口(22.0) 高一底一 口縁部片	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。	
5	土師器 環	+12	口(6.7) 高(4.0) 丸底 口~底 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部不定 方向筋削り。内面 撫で。	
6	土師器 環	-3	口(11.0) 高(3.7) (丸底) 口~体 片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋 削り。内面 体部撫で。	
7	土師器 環	-12	口(11.0) 高(5.0) 底一 口~底 片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋 削り。内面 体部撫で。	
8	土師器 環	埋没土	口(14.0) 高一底一 口~底 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部不定 方向筋削り。内面 体部撫で。	
9	土師器 環	埋没土	口(12.0) 高一底一 口~体部片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。 内面 体部撫で。	
10	土師器 環	+17	口(14.0) 高一底一 口~体 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。 内面 体部撫で。	外面に指取圧痕 あり。

第3章 検出された遺構と遺物

図号	図名	出土位置	口径	高さ	底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
11	須恵器 壺	+22	口一高一底一 片(縦5.1 横5.1)	胴部		①普通・白色灰少量 還元・硬 ③緑灰色	外面は捺子印き。 内面は背割成り。	

第14号住居跡

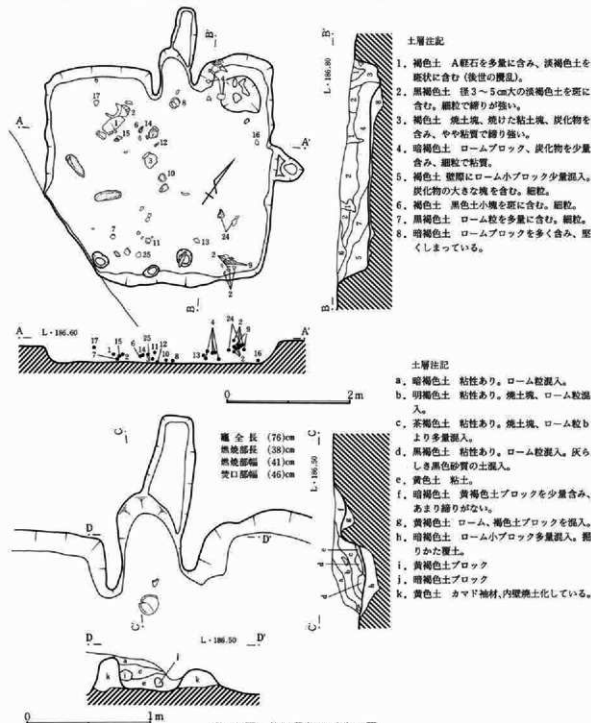
位置 4区34C11 写真 PL.48

形状 長辺3.64m 短辺3.44mのほぼ正方形を呈する。

面積 12.36㎡ 方位 N-40°-W

埋没土 ロームブロックや炭化物を少量含む暗褐色土を主体とする。なお、上面にはAs-A 軽石を多量に含む攪乱土層がみられる。

床面 掘りかた面にロームブロックと暗褐色土の混



在土を客土し、上面（床面）は堅くしまっている。床面は平坦である。なお、壁高は28~47cmで、東・南の壁が高い。

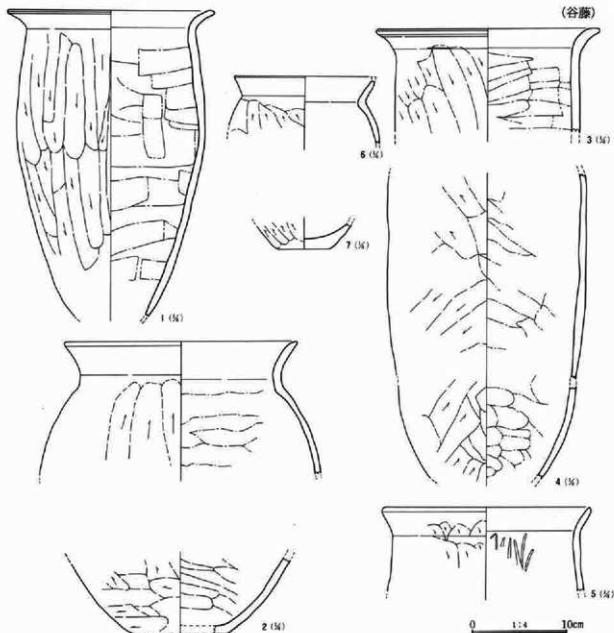
竈 北壁中央よりやや東よりに位置し、煙道部が溝状の攪乱によって壊されている。残存する袖部を見ると、ロームブロックないしはローム粒を多量に含む黄褐色土を構築材としている。焚口部から燃焼部にかけてややくぼみ、燃焼部の奥壁は、北壁と共有しており、燃焼部内は方形となる。なお、袖部内側は焼土化している。

柱穴 南壁際に2カ所検出されたが、主柱穴は不明。
貯蔵穴 竈に向かって右側で、北東壁角に位置し、形状は不整形円形で楕鉢状をなす。

遺物 大型・小型の甕、長脚甕、坏、及び須恵器片や鉄製品が出土している。特に、竈焚口付近から坏が1点床直で出土している。

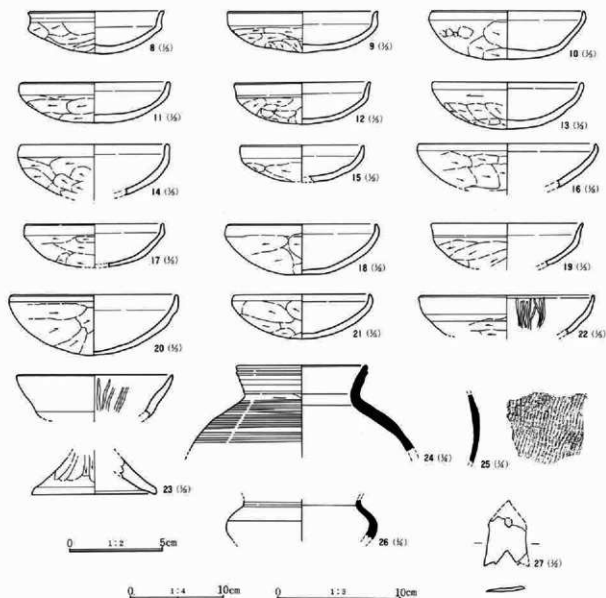
備考 近世以降の攪乱などにより一部壊されていたが、比較的残りはよかった。また、一部南西角については、調査区外のため確認できなかった。本住居跡の年代観を出土遺物より、7世紀後半としたい。

(谷藤)



第223図 第14号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第224図 第14号住居跡出土遺物実測図(2)

第14号住居跡出土遺物観察表 (PL.144, 145)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴鉢	+14	口(22.2) 高一底一 口~胴 ⅴ	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部縦撫で。	
2	土師器 鉢	+15	口25.0高一底10.0 口~胴と胴~底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上半部は縦削り。 下半部は斜めと横削り。内面 縦撫で。	2次のな火を受けた跡あり。
3	土師器 長胴鉢	+5	口(24.0) 高一底一 口~胴 ⅴ	①普通・白色紅多量 ② 酸化・硬 ③灰褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。 内面 胴部縦撫で。	
4	土師器 長胴鉢	+22	口一 胴(21.0) 底一 胴部 ⅴ	①普通・白色灰少量 ②酸化 ③酸化・普通 ④黒褐色	外面 胴部斜め削り。 内面 胴部縦撫で。	
5	土師器 甕 埋没土	口(22.0) 高一底一 口~胴上半部片	①細・白色紅少量 ②酸化 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で。胴部縦削り。 内面 口縁部~胴部撫でと磨き。		
6	土師器 鉢	+14	口(15.2) 高一底一 口~胴 ⅴ	①細・灰色紅少量 ②酸化 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め削り。 内面 胴部縦撫で。	
7	土師器 鉢	+6	口一高一 底部片 底部片	①普通・灰色紅多量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 胴下半部斜め削り。 内面 胴部~底部横撫で。	

図号	断面 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
8	土師器 甕		口10.8 高3.3 丸底 完形	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部横撫で。	
9	土師器 環	+19	口(12.0) 高3.3 丸底 口～底 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横削り、底部斜め削り。内面 体部横撫で。	
10	土師器 環	+1	口12.2 高3.8 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部斜め削り。内面 口縁部～体部横撫で、底部横撫で。	
11	土師器 環	+13	口(12.0) 高3.2 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部横撫で。	
12	土師器 環	+1	口10.8 高3.3 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部不定方向削り。内面 体部横撫で。	
13	土師器 環	+9	口(12.0) 高(3.7) 底— 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部不定方向削り。内面 体部横撫で。	
14	土師器 環	+14	口(12.0) 高一底— 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③灰黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部は横と縦削り。内面 体部横撫で。	
15	土師器 環	+12	口(10.0) 高(2.9) (丸底) 口～底 片	①細・夾雑物なし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め削り。内面 体部横撫で。	
16	土師器 環	+6	口(14.3) 高一底— 口～底 片	①普通・白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部斜め削り。内面 口縁部～底部横撫で。	
17	土師器 環	+25	口(11.0) 高(3.5) (丸底) 口～底 片	①細・夾雑物なし ②酸化・硬 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部横削り。内面 口縁部～底部横撫で。	
18	土師器 環	埋没土	口(12.0) 高(4.9) (丸底) 口～底 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部横削り。内面 口縁部～体部横撫で、底部横撫で。	
19	土師器 環	埋没土	口(12.0) 高一底— 口～底 片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部～底部斜め削り。内面 口縁部～底部横撫で。	
20	土師器 環	埋没土	口(14.5) 高(4.7) 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部は横削り、底部は斜め削り。内面 口縁部～底部横撫で。	
21	土師器 環	埋没土	口(11.0) 高(3.5) 丸底 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面横撫で。	
22	土師器 環	増設土	口(14.0) 高一底— 口～体部片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③灰黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部横削り。内面 口縁部～体部横撫で、暗文。	
23	土師器 高 環	埋没土	口(12.5) 高(10.0) 口縁部と脚部片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明褐色	内外共口縁部横撫で。外面 脚部縦削り、底部横撫で。内面 暗文。	
24	須恵器 壺	+19	口(14.0) 高一底— 口～脚 片	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形。	
25	須恵器 壺	+11	口—高一底— 脚部 片 縦7.5 横8.0	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	外面は平行印き。内面は刺れているため不明。	
26	須恵器 壺	埋没土	口—高一底— 脚 (12.5) 脚—脚部片	①細・白色黒色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形。	
27	鉄製品 鏝	埋没土	最大長2.7cm	無銘 平根鏝片で、上半に円形の小遺しあり。上方の割れ口は、調査時欠損。下方は、旧時欠損。裏面に、さらに小さな遺しあり。		

第16号住居跡

位置 4区36C06

写真 PL.49

形状 長辺4.44m 短辺4.14mのほぼ正方形を呈する。

面積 18.13㎡ 方位 N-26°-W

埋没土 黄褐色土ブロックが斑状にかなり多く混在する黒褐色・褐色土を主体とするが、上層は砂質で黄色土ブロックが淡い黄褐色であるのに対し、下層は粘性で黄色の強いブロックが含まれる。また南壁付近には、炭化物を多く含む焼土が堆積していた。

床面 掘りかた面に、黄色土ロームブロックと黒褐色土との混在土を客土し、さらにその上に床面の構

築材として、ローム土を堅く貼っている。床面は平坦で、壁高は確認面から24～30cmである。

竈 北壁のほぼ中央に位置し、焚口部は平坦で、燃焼部が楕円状に若干くぼみ、燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がっていく。残存する袖部は、ロームと暗褐色土の混在土や、ローム土自体をその構築土に使用している。あまり残存状況はよくない。柱穴 住居外形の対角線上に、4本の支柱穴が検出された。規模は、径が約25～40cm程で、深さが約60～90cmを測る。

壁周溝 南壁際に、幅25cm前後、深さ約8cm程のものが検出された。

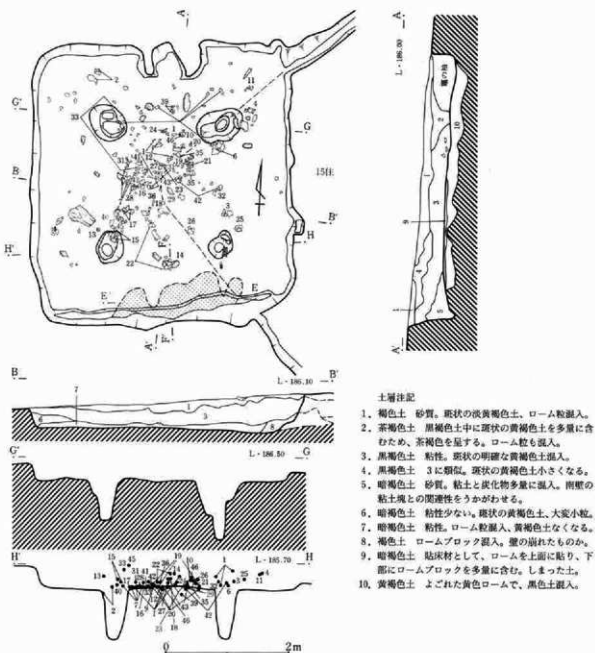
第3章 検出された遺構と遺物

遺物 出土した遺物は比較的多く、特に埋没土中からのものが多い。遺物は甕・坏が主体を占めるが、高坏や手捏土器・鉄製鋸先等もある。

備考 本住居跡の中央部から東壁にかかる4分の1の面積が、東に隣接する第15号住居跡の西角部分と

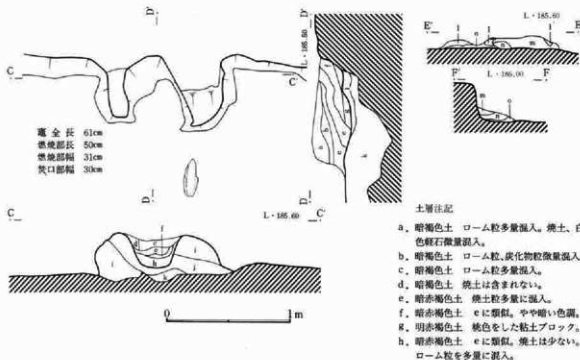
重複している。この新旧関係は、埋没土の堆積状況や、本住居跡の床面などから、第15号住居跡が旧く、本住居跡の方が新しいことが確認された。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀後半としたい。

(谷藤)



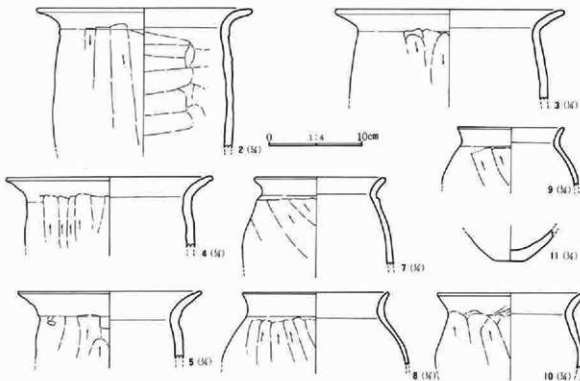
第225図 第16号住居跡実測図

第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

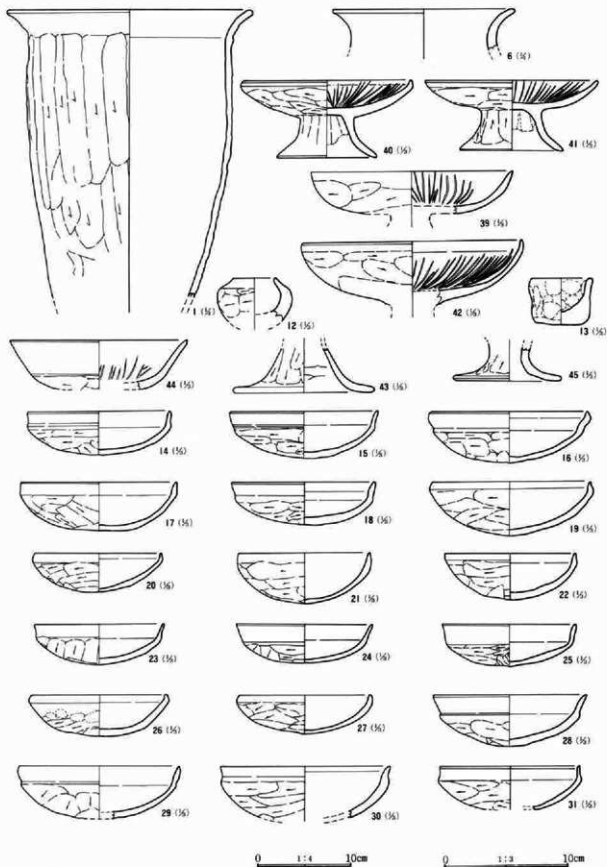


- i. 暗褐色土 よごれたロームを混在させ、よく壓くしまっている(カマド袖材)。
j. 暗褐色土 焼土粒を多量に含み、よくしまっている土。
k. 暗褐色土 ロームブロック多量混入。住居側りかた覆土と同質。カマド側りかた。住居側りかたの覆土と同質。カマド側りかた。ロームブロック少量混入。
l. 赤褐色土 焼土粒、焼土ブロック、炭化物粒多量に混入。
m. 暗褐色土 焼土ブロック、ロームブロック少量混入。
n. 暗褐色土 ロームブロック多量混入。
o. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒少量混入。

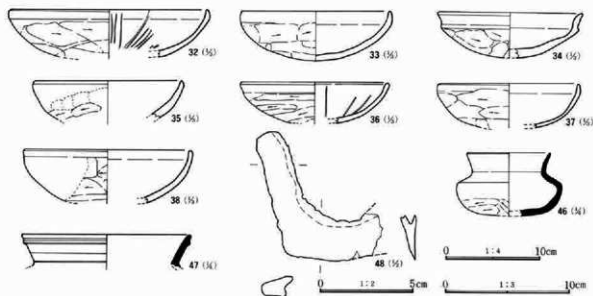
第226図 第16号住居跡実測図



第227図 第16号住居跡出土遺物実測図(1)



第228図 第16号住居跡出土遺物実測図(2)



第229図 第16号住居跡出土遺物実測図(3)

第16号住居跡出土遺物観察表 (PL.145、146)

品名	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴甗	+4	口26.3 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部横撫で。	
2	土師器 長胴甗	+8	口22.8 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部横撫で。	
3	土師器 長胴甗	+13	口(24.2) 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。 内面 口縁部~胴部横撫で。	
4	土師器 長胴甗	+27	口(22.0) 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。 内面 口縁部横撫で、胴部縦貫削り。	
5	土師器 甗	埋没土	口(18.6) 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部縦貫削り。	
6	土師器 甗	+10	口(9.7) 高一底一 口縁部(破片)	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。	
7	土師器 甗	+3	口13.8 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜の縦削り。 内面 胴部横撫で。	
8	土師器 甗	埋没土	口(15.4) 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部横撫で。	
9	土師器 甗	+13	口(19.8) 高一底一 口~胴 ㄩ	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜の縦削り。 内面 胴部横撫で。	
10	土師器 甗	+20	口(15.6) 高一底一 口~胴 ㄩ	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦貫削り。	内面黒色処理
11	土師器 甗	+32	口一高一 底(3.5) 底部 ㄩ	①普通・黒色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	外面 胴下半部削り。 内面 胴下半部横撫で。	
12	手捏土 器	+2	口(3.5) 高一底一 口~体 ㄩ	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で。	
13	手捏土 器	+24	口(4.8) 高(3.6) 底(3.8) 口~底 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共全体が指圧筋。	
14	土師器 坏	+23	口11.4 高3.0 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、体部縦貫削り、底部斜め縦削り。内面 体部横撫で。	
15	土師器 坏	+18	口11.8 高3.7 丸底 完形	①細・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部縦貫削り。内面 体部横撫で。	
16	土師器 坏	+5	口12.6 高4.0 丸底 ほぼ完形	①細・白色赤色灰少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部縦貫削り。内面 体部横撫で。	
17	土師器 坏	+11	口12.4 高3.8 丸底 口~底 ㄩ	①細・白色灰少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部斜め縦削り。内面 体部横撫で。	
18	土師器 坏	+18	口11.6 高3.3 丸底 口~底 ㄩ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部~底部縦貫削り。内面 体部横撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

種別	形態 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②酸化 ③色調	成形・整形の技法	備 考
19	土師器 環	+3	口径12.6 高4.2 丸底 □～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
20	土師器 環	+6	口径10.1 高3.0 丸底 □～底 片	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め削り。内面 体部無で。	
21	土師器 環	+14	口径10.4 高4.0 丸底 ほぼ定形	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
22	土師器 環	+22	口径10.2 高3.6 丸底 ほぼ定形	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
23	土師器 環	+7	口径10.4 高3.2 丸底 定形	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め削り。内面 体部無で。	
24	土師器 環	+10	口径10.8 高3.1 丸底 ほぼ定形	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部不定方向削り。内面 体部無で。	
25	土師器 環	+16	口径10.2 高3.3 丸底 □～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
26	土師器 環	+11	口径10.6 高3.2 丸底 □～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め削り。内面 体部無で。	外面に指圧痕あり。
27	土師器 環	+6	口径10.2 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③明褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
28	土師器 環	+3	口径12.0 高4.0 丸底 □～底 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	内面黒色処理
29	土師器 環	+8	口径12.8 高(4.1) 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部無で、体部～底部縦削り。内面 口縁部横撫で、体部無で。	
30	土師器 環	埋没土	口径13.6 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部無で、体部横削り。内面 口縁部横撫で、体部無で。	
31	土師器 環	+15	口径11.0 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
32	土師器 環	+12	口径16.0 高一底一 口～底 片	①細・赤色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で、暗文。	
33	土師器 環	+6	口径12.0 高(3.9) 底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
34	土師器 環	埋没土	口径11.4 高(3.6) 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め削り。内面 体部無で。	
35	土師器 環	+15	口径11.7 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部斜め削り。内面 口縁部～体部無で。	外面に指圧痕あり。
36	土師器 環	+13	口径12.0 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で、暗文。	
37	土師器 環	埋没土	口径10.6 高一底一 口～底 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
38	土師器 環	埋没土	口径14.4 高一底一 口～底 片	①細・赤色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
39	土師器 高 環	-4	口径16.0 高(3.3) 環部 片	①細・赤色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 環部横削り。内面 環部無で、暗文。	
40	土師器 高 環	+16	口径12.6 高6.1 底8.0 口～脚 片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 環部は横、脚部は縦削り。内面 環部、脚部共に無で。	内面に放射状暗文あり。
41	土師器 高 環	+3	口径13.6 高5.5 脚8.3 口～脚 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、環部は横・脚部は縦削り。内面 環部と脚部共に無で。	内面放射状暗文、脚部指圧痕
42	土師器 高 環	+2	口径17.5 高一底一 口～環底部 片	①細・白色赤色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 環部横削り。内面 環部無で、暗文。	
43	土師器 高 環	+4	口一高一 脚11.4 脚部 片	①普通・赤色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 脚部縦削り、環部無で。内面 脚部削り、環部無で。	
44	土師器 高 環	握りかた 高 環	口径14.2 高一 環部 片	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、環部横削り。内面 口縁部横撫で、環部無で、暗文。	
45	土師器 高 環	+37	口一高一 脚(8.5) 脚部 片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	外面 脚部縦削り、環部横撫で。内面 脚部無で、環部横撫で。	
46	須恵器 短頸数 環	+5	口径8.8 高(6.3) 底一 口～底 片	①細・赤色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形後、底部削り調整。	
47	須恵器 壺	埋没土	口径18.0 高一底一 口縁部(破片)	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③暗灰色	組付後、ロクロ整形。	
48	鉄製品 鉄 先	埋没土	残存長7.1cm		断先で、平欠片。割れ口は調査時。刃先は片刃。耳・刃側の様に、台部用の溝の作り出しあり。銚部は少ない。刃部は、シャープ。	

第21号住居跡

位置 4区22C04 写真 PL.50

形状 長辺3.24m 短辺3.12mのほぼ正方形を呈する。

面積 10.35㎡ 方位 N-44°-E

埋没土 ローム粒を含む暗褐色土を主とする。

床面 掘りかた面は、重複する第22・23号住居跡よりも深い位置にあり、ロームブロックと暗褐色土の混在土を客土し、堅くしまっている。

竈 残存状況は悪く、竈の右袖部分と燃焼部の一部が残るだけであった。

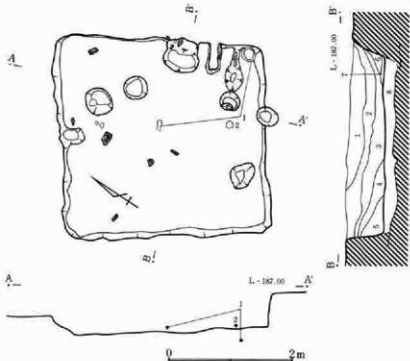
柱穴 数本確認されているが、いずれも本住居跡に伴うものとは断定できない。

貯蔵穴 竈右側に、円形の罫状を呈する穴が確認されたが、貯蔵穴とは確定しがたい。

遺物 出土した遺物は少なく、壺・坏等である。特に壺については、竈右側の壁隅に正位で出土している。

備考 本住居跡の東側には第22号住居跡、西側には第23号住居跡と重複する。これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況や床面の観察から、第22・23号住居跡のいずれよりも本住居跡の方が新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より8世紀前半とした。

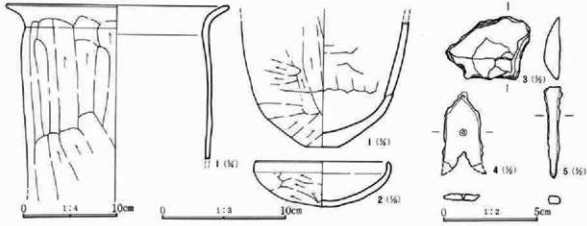
(谷藤)



土層住記

1. 暗褐色土 細粒だが、締りない。
2. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒少量混入。細粒で締りあり。
3. 褐色土 3～5cm大のロームブロック、ローム粒多量混入、粗粒で締りない。炭化物、焼土粒若干混入。
4. 黒褐色土 比較的大粒の炭化物を少量混入。細粒で締りあり。
5. 黒褐色土 燻土塊、ローム粒少量混入。粗粒であり締りない。
6. 褐色土 焼土の大塊、炭化物多量に混入。細粒でやや粘質。
7. ロームと黒褐色土の混合土 上面は堅い(掘りかたの土)。
8. 暗褐色土 ロームブロック多量に混入。上面は、堅く踏みしまっている。

第230図 第21号住居跡実測図



第231図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表 (PL.147)

図号	器物形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土器器 長割壺	-16	口23.7 高一底3.3 口~胴と割一底互	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	内外共口縁部横無で、外面 胴上半部は縦挽削り、胴下半部は不定方向縦削り、内面 撫で。	輪痕病、2次的な火を受けた跡。
2	土器器 環	+6	口10.8 高3.6 丸底 完形	①細・白色灰微量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横無で、外面 体部~底部斜め削削り、内面 体部撫で。	
3	チップ	埋没土	材質 燧石。長さ4.1cm	幅3.3cm 厚さ0.8cm 重さ15g。	板状に削りされている。流れ込みの可能性が高い。	
4	鉄製品 環	埋没土	残存長3.3cm	無柄平根線。欠損は調査時、中央に円形の透しあり。	鍛えは、錆跡が少なく、真鍮を思わせる。	
5	鉄製品 不明	埋没土	残存長4.3cm	鍔の基残欠のようにみえる個体で、旧態を留める。横断面は、丸丸長方形を呈す。	錆化は、不定方向に進み、粗鍛造・真鍮を思わせる。	

第30号住居跡

位置 4区19C02

写真 PL.50

形状 一辺が4.00mの正方形を呈する。

面積 16.20㎡ 方位 N-06°-W

埋没土 ローム粒を多く含むやや明るい暗褐色土を主とする。

床面 掘りかた面にロームブロックを多く混在させる暗褐色土を客土し、床面は平坦で堅くしまっている。また本住居跡の中央部に径が110cm、深さが13cmの規模の円形の床下土坑が検出された。壁高は、

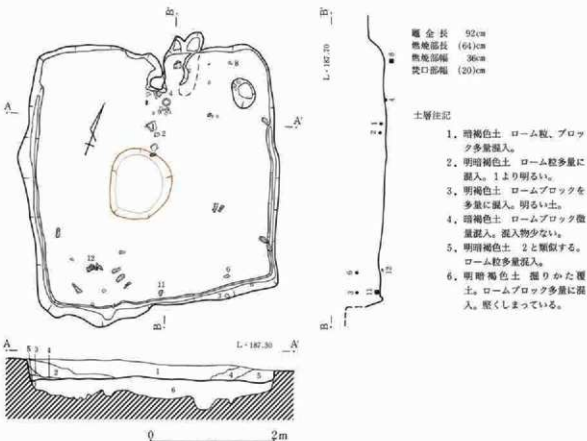
14~34cmを測る。

竈 残存状況は余りよくない。北壁のやや東よりに位置し、焚口部から燃焼部にかけては平坦で、燃焼部の奥は本住居跡の壁位置で立ち上がり煙道部へと続く。

貯蔵穴 円形で柱穴状のものが、竈の右側に検出された。

壁周溝 幅20cm程の溝が、「コ」の字状に東・南・西壁の三方を巡る。

遺物 竈前に土器が多く出土した。遺物には、壺・



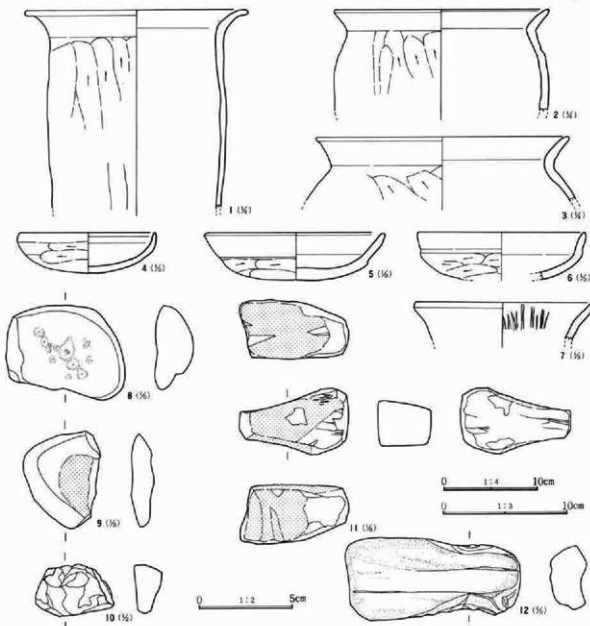
第232図 第30号住居跡実測図

第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

坏が主で、砥石・滑石チップ等の石製品もある。

備考 本住居跡の南側に第31号住居跡、北側に第33号住居跡と重複する。これらの新旧関係は、埋設土

の堆積状況や床面の観察から、第31・33号住居跡のいずれよりも本住居跡の方が新しい。本住居跡の年代観を出土遺物より7世紀後半としたい。(谷藤)



第233図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表 (PL.147)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 長胴壺	+3	口(24.0) 高一底一 口~胴 ⅓	①粗・白色灰少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部横線で、胴部縦直削り。 内面 口縁部~胴部無で。	
2	土師器 壺	+6	口(23.0) 高一底一 口~胴 ⅓	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部縦直削り。 内面 胴部無で。	
3	土師器 壺	+32	口(27.0) 高一底一 口~胴 ⅓	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜の直削り。 内面 胴部無で。	
4	土師器 坏	+2	口10.8 高3.2 丸底 完形	①普通・白色黒色灰少量 ②酸化・軟 ③橙色	内外共口縁部横線で、外面 体部縦直削り。 内面 体部無で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図番号	遺構 名称	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
5	土師器 環	埋没土	口(17.4) 高3.7 丸底 口～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
6	土師器 環	+32	口(13.2) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 体部～底部横削り。内面 体部無で。	
7	土師器 高 環	埋没土	口(14.0) 高一底一 口縁部 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。	
8	砥石	-2	材質 砂岩。長さ9.4cm 幅7.0cm 厚さ2.9cm 重さ200g。川原石の利用。使用は、平面図。砥石の利用の後、工作台として、利用されたと思われる、小さな凹みがある。多数確認される。			
9	砥石	埋没土	材質 砂岩。長さ7.4cm 幅6.0cm 厚さ1.75cm 重さ90g。川原石の割片利用。使用は、平面図。他は砥石面と、仕時の割れ口。研磨の主体は、石の硬質箇所が凸出しているため、木・皮などの軟質物質。			
10	滑石 チャップ	埋没土	材質 滑石。長さ4.1cm 幅2.6cm 厚さ1.4cm 重さ27g。裏面一部分に刃物による削りがある他は、すべて、砥石面。何を磨いた資料かは、不明。			
11	砥石	+8	材質 流紋岩(砥石)。長さ8.7cm 幅5.0cm 厚さ4.7cm 重さ280g。図右下平面の右側に砥石面。他は、使用面。図中の赤痕の大半は、刃ならし傷。左下平面の使用面は、右きき。主体は、金属。手持部。			
12	こもあ み石	+1	材質 黒色片岩。長さ13.7cm 幅6.2cm 厚さ2.7cm 重さ400g。図下側面右側に、敲打による剥離部分がある。紐等を縛るために、剥離したものか。この他、同様の石が、9個確認された。			

第54号住居跡

位置 4区06B42 写真 PL.50

形状 長辺23.18m 短辺2.84mの長方形を呈する。

面積 8.88m² (推定) 方位 N-87°E

埋没土 ロームブロックを含む暗褐色土が主体をなす。壁際は、三角堆積をし、中央は、レンズ状堆積をしている。

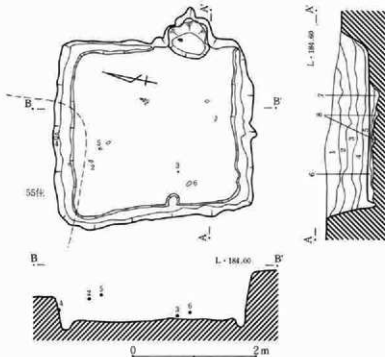
床面 確認面でローム層を90cm程掘り込み、その上に暗褐色土と黄褐色土の混合土を10cm程客土して、床面を形成している。特に、竈前面に堅い部分があ

り、中央には、粘土塊を確認した。掘りかたの調査をしたが、床下土坑は、確認できなかった。

竈 東壁やや南寄りにあり、ほとんど屋外に構築されている。ローム層を方形に掘り、壁に黄色粘土を貼り付けて竈としている。袖部はほとんど無く、天井石は確認できなかったが、支脚には質母石英片岩が1個使用されていた。燃焼部はややくぼみ、煙道部は急激に立ち上がる。

柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。



土層注記

1. 暗褐色土 ローム粒若干混入。粘性弱い。
 2. 暗褐色土 ローム小ブロック混入。
 3. 暗褐色土 ローム小ブロック多量混入。明るい。硬りあり。
 4. 暗褐色土 ローム粒多量混入。3より暗くしまった土。
 5. 暗褐色土 ローム粒、ブロック混入。
 6. 暗褐色土とロームブロックの混合土
 7. ロームブロックと褐色土の混合土
 8. ローム漸層層
- 6, 7は、掘りかた覆土。

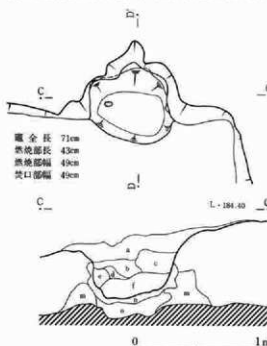
第234図 第54号住居跡実測図

壁周溝 竈周辺を除き、全周する。規模は、幅16~35cm深さ6~9cmである。

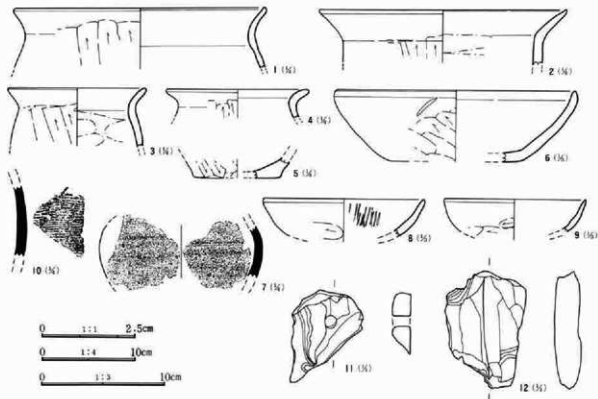
遺物 床面直上のものは、大変少ない。口縁部が内湾する大振りの土師器・土師器製の口縁部などが、

出土している。また、埋没土中ではあるが、滑石製模造品の有孔円板も出土している。

備考 第55号住居跡と重複している。本住居跡の年代観を出土遺物より8世紀前半としたい。(鹿沼)



第235図 第54号住居跡実測図



第236図 第54号住居跡出土遺物実測図

土層注記

- a. 灰褐色土 ローム粒、径5mm大のロームブロック多量混入。細粒で粘質。
- b. 黒褐色土 ローム粒、焼土粒混入。粘質。
- c. 褐色土 ローム粒、炭化物粒混入。粘性に欠ける。
- d. 黄褐色土 黒褐色土ブロック混入。たいへんもろい土。
- e. 黄褐色土 ロームブロック、焼土粒、ローム粒混入。粗粒でもろい。
- f. 暗褐色土 径2~3cm大のロームブロック、焼土粒混入。焼土粒は、下層部に集中している。燃焼部か。

- g. 褐色土 径5mm大のロームブロック多量混入。細粒で粘りあり。
- h. 灰暗褐色土 径1~2cm大の焼土塊、径2cm大のロームブロック混入。
- i. 灰褐色土 灰色粘土(カマド材)、径2cm大の焼土塊混入。
- j. 暗褐色土 焼土粒多量に混入。下層部に径2cm大の粘土ブロック混入。
- k. 黄褐色土 ローム漸移層。
- l. 黄褐色土ブロック m. 粘 粘土
- n. 暗赤褐色土 焼土塊、焼土粒多量に混入。細粒で粘性あり。
- o. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック混入。灰の残存か。
- p. 暗褐色土 ローム粒混入。細粒で粘りない。
- q. 灰暗褐色土 ローム粒混入。細粒。
- r. ローム漸移層

第3章 検出された遺構と遺物

第54号住居跡出土遺物観察表 (PL.147)

図号	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	埋没土	口(26.5) 高一底一 口縁部(破片)	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 口唇部横撫で、口縁部～頸部縦捩削り。 内面 口縁部横撫で、頸部撫で。	
2	土師器 壺	+30	口(26.4) 高一底一 口縁部(破片)	①細・黒色灰微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦捩削り。 内面 頸部縦捩削り。	
3	土師器 壺	+2	口(14.6) 高一底一 口～頸(破片)	①普通・白色灰多量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部斜め捩削り。 内面 頸部縦捩削り。	
4	土師器 壺	+10	口(15.0) 高一底一 口縁部(破片)	①黒黒で黒色灰微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦捩削り。	
5	土師器 壺	+30	口一高一 底(6.0) 底部(破片)	①普通・白色灰多量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 底部斜め捩削り。 内面 底部撫で。	
6	土師器 坏	+5	口(19.0) 高一 底(10.4) 口～底耳	①細・灰雜物はとんどなし ②酸化・硬 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め 捩削り。内面 体部撫で。	
7	須恵器 壺	埋没土	口一 胴(17.5) 胴部 ⅔	①普通・白色灰少量 ② 還元・硬 ③灰色	ロクロ整形。	
8	土師器 坏	埋没土	口(12.8) 高一底一 口～底 ⅔	①細・白色灰微量 ②酸 化・硬 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部横捩削り。 内面 口縁部～体部撫で後、略文。	
9	土師器 坏	埋没土	口(11.2) 高一底一 口～底 ⅔	①細・灰雜物なし ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横捩 削り。	
10	須恵器 壺	埋没土	口一高一 胴部(破片) 縦6.7 横5.4	①細・白色灰少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。外面に、平行叩き痕 あり。	
11	有孔円 板	埋没土	材質 滑石。長さ2.0cm 幅1.9cm 厚さ3.5cm 孔径0.3cm 重さ3.5g。図上方面面は、刃物による削り調整。そ の他は、剝離しているため不明。穿孔は、一方向か。流れ込みの可能性大。			
12	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ3.1cm 幅2.1cm 厚さ0.6cm 重さ6g。全面、原石面。荒削りの時のチップか。			

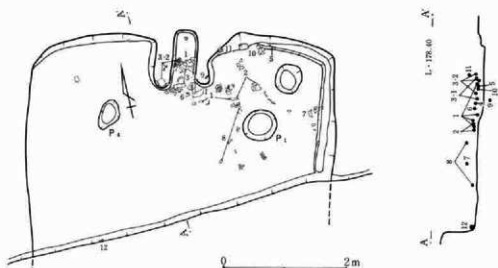
第59号住居跡

位置 5区21C03 写真 PL.51

形状 南側が半分以上調査区域外に出るため形状は不明である。規模は東西長4.94m、南北長不明である。壁も遺存状態不良で、壁高0～34cmである。

面積 不明 方位 N-22°-E

埋没土 凡そ5層の褐色土、暗褐色土などによって埋まっている。壁際から埋まっていた様相を呈しているが、浅いため埋り方は明らかでない。床面 確認面(ローム層)から深さ20～50cm掘り込



第237図 第59号住居跡実測図

み、ロームを多量に含む褐色土を厚さ20cmほど客土して造られている。床面は平坦であるがやや西側に傾斜しており、竈前から住居中央にかけては広範囲に踏み固めてできた堅い面が検出された。なお、床下土坑は存在しなかった。

竈 北壁のほぼ中央の位置に黄色粘土を用いて屋内に袖を出す形態に造られていた。燃焼部下部は床と同様客土によって造作されており、火床面は強く焼けていた。燃焼部裏には支脚とみられる棒状の片岩が1個突き立てられていた。

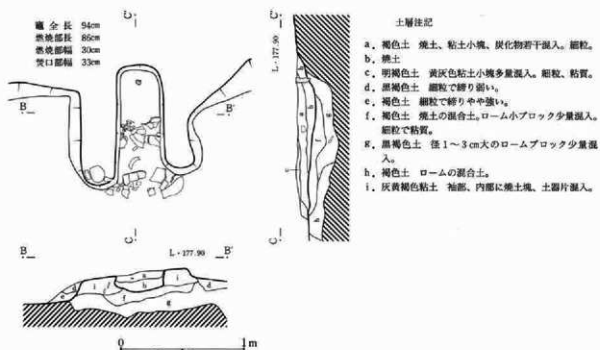
柱穴 柱穴とみられるピットは貯蔵穴の南側に1個検出。P₁：径58cm、深さ63cm。また、掘りかた調査中に竈左側よりP₁に対応するものが検出。

貯蔵穴 竈の右側に径42cm、深さ63cmの円形のものが出された。中からは何も検出されなかった。

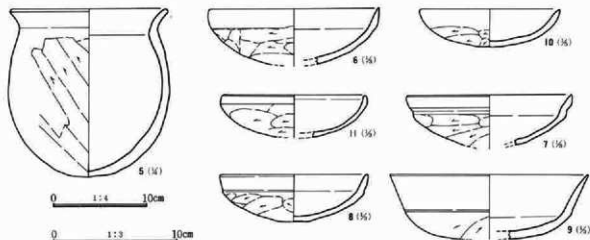
壁周溝 竈の右側から東側にかけて幅22~34cm、深さ7~9cmのものが続っていた。

遺物 土師器長壺・小型壺・坏などの破片、砥石が竈内やその周辺から集中して少量出土した。

備考 本住居跡は7世紀後半と推定される。(小林)

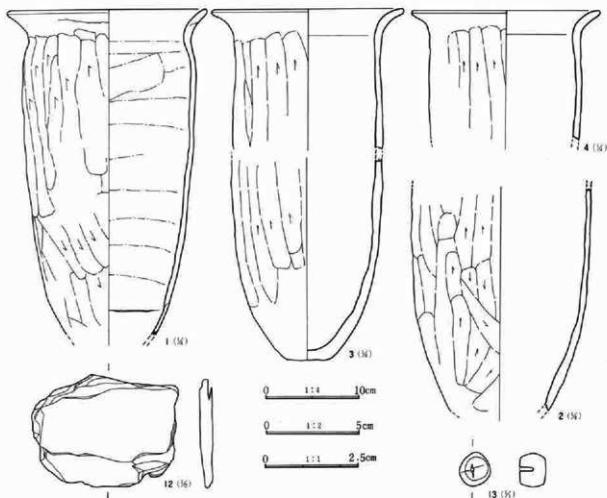


第238図 第59号住居跡竈実測図



第239図 第59号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第240図 第59号住居跡出土遺物実測図(2)

第59号住居跡出土遺物観察表 (PL.147、148)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴壺	甕	□121.3 高一底一 口～胴 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部上半部～中央部は縦筋削り、胴下半部は直撫で、内面 直撫で。	
2	土師器 長胴壺	+1	□一 胴(18.5) 底一 胴部 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴上半部～中央部は縦筋削り、胴下半部は斜め直削り。内面 胴部撫で。	
3	土師器 長胴壺	甕内 -4	□(20.6) 底4.5 口～胴と胴～底 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部縦筋削り。内面 胴部撫で。	
4	土師器 長胴壺	甕	□(20.1) 高一底一 口～胴 ⅴ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。内面 胴部撫で。	
5	土師器 小形壺	+15	□16.9 高17.8 丸底 口～底 ⅴ	①普通・白色灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め直削り。内面 胴部撫で。	
6	土師器 杯	甕	□(13.7) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・灰色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。内面 体部撫で。	
7	土師器 杯	+15	□(13.2) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部は縦・斜め直削り。内面 体部撫で。	
8	土師器 杯	+7	□(11.9) 高3.8 丸底 口～底 ⅴ	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め直削り。内面 体部撫で。	
9	土師器 杯	-20	□(15.8) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部斜め直削り。内面 体部撫で。	
10	土師器 杯	+9	□(11.2) 高(3.0) 口～底 ⅴ	①普通・灰色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横筋削り。内面 体部撫で。	
11	土師器 杯	+5	□(11.6) 高一底一 口～底 ⅴ	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部～底部横筋削り。内面 体部撫で。	

図号	器種 器形	出土位置	特	徴
12	石 核	+ 5	材質 雲母石英片岩。長さ7.6cm 幅5.9cm 厚さ0.7cm 重さ32.6g。雲母のように、非常に薄く割れる。周辺部は、もろく、くずれている。	
13	土 玉	竈埋設土	径0.9cm 厚さ0.8cm 孔径0.1cm 重さ0.6g。暗赤褐色を呈する。孔は、途中で止まっている。	

第62号住居跡

位置 5区36B36 写真 PL.51

形状 長辺3.52m、短辺3.08mの規模の東西に長い長方形。壁は全体的に遺存状態不良で、壁高0～29cmを測る。

面積 10.67㎡ 方位 N-29°-E

埋設土 凡そ3層の暗褐色土によって埋没しているが、浅いため埋まり方は明らかでない。

床面 確認面よりローム層を10～40cm掘り込み、ロームと褐色土の混合土を厚さ5～15cm客土して平坦に整えている。しかし、遺存状態不良で西側の辺ほどはすでに削り取られており、掘りかた下部を残すのみとなっていた。床面の大部分は柔かであるが、竈前には一部分堅い面が見られた。床下土坑はない。

竈 北壁のやや東寄りの位置に黄色粘土を用いて屋

内に袖を出す形態に造られていた。天井部は勿論存在せず、また袖上部もかなり削られていて残り方は不良であった。燃焼部は火床、壁にかかなり強く焼けており、焼土、炭化物も多く残存していた。

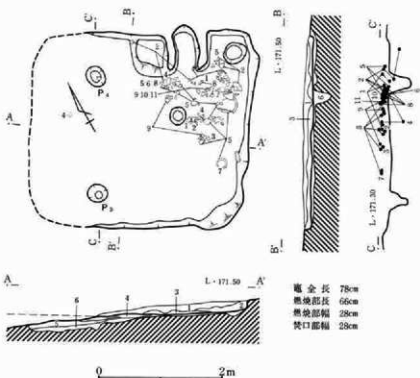
柱穴 貯蔵穴を除いてピットは3個存在したが、このうち柱穴になるものはP₃とP₄である。両者とも円形で掘りかたはしっかりしている。規模はP₃:28cm×24cm、P₄:32cm×30cmを測る。

貯蔵穴 竈の右脇にややいびつな円形のものが存在した。径40cm、深さ38cmを測る。

壁周溝 存在しなかった。

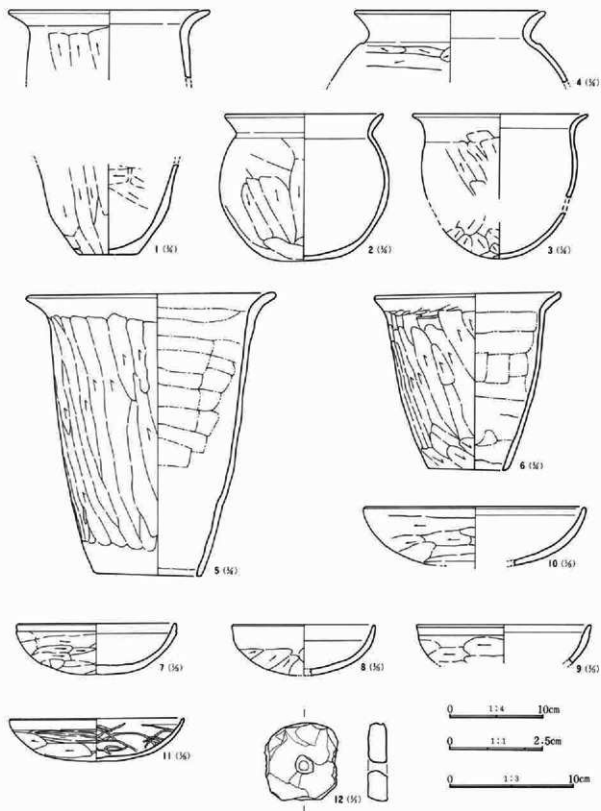
遺物 土師器長甕・壺・小型甕・甔・坏、砥石が竈前から貯蔵穴南側にかけて集中して出土したが、いずれも破片であり、少量であった。

備考 本住居跡は8世紀後半とみられる。(小林)



第241図 第62号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第242図 第62号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡出土土物観察表 (PL.148)

品目	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+7	口(21.6) 高(6.0) 口~胴 口~底 ㄹ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横断で、外面 胴部縦貫削り、 内面 胴上半部は撫で、胴下半部は磨削で。	
2	土師器 小型壺	+2	口(17.0) 高15.4 口~底 ㄹ	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横断で、外面 胴部縦貫削り、 内面 胴部横断で。	
3	土師器 小型壺	+12	口(18.8)高一 丸底 口~胴と胴~底 ㄹ	①普通・灰色紅微量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横断で、外面 胴上半部斜め磨削り、 胴下半部不定方向削削り、内面 胴部横断で。	
4	土師器 壺	+4	口(20.2) 頸(17.6) 口~胴 ㄹ	①細・赤色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い棕色	内外共口縁部横断で、外面 胴部縦貫削り、 内面 胴部横断で。	
5	土師器 瓶	+5	口26.6 高29.0 底11.4 口~底 ㄹ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③棕色	内外共口縁部横断で、外面 胴部縦貫削り、 内面 胴部横断で。	
6	土師器 小型壺	+22	口19.8 高18.7 底8.2 口~底 ㄹ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③棕色	内外共口縁部横断で、外面 胴部斜め削削り、 内面 胴部横断で。	
7	土師器 坏	+9	口12.2 高3.9 底4.0 完形	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③棕色	内外共口縁部横断で、外面 体部~底部横断削削り、 内面 体部横断で。	
8	土師器 坏	+7	口(11.3) 高(4.0) 丸底 口~底 ㄹ	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横断で、外面 体部~底部斜め削削り、 内面 体部横断で。	
9	土師器 坏	+15	口(13.9) 高一底一 口~底 ㄹ	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横断で、外面 体部横断削削り、 内面 体部横断で。	
10	土師器 坏	+13	口(17.5) 高一底一 口~底 ㄹ	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横断で、外面 体部横断削削り、 内面 体部横断で。	
11	土師器 坏	+13	口(14.0) 高3.4 丸底 口~底 ㄹ	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横断で、外面 体部~底部横断削削り、 内面 略す。	
12	有孔円板 埋土板		材質 滑石。長さ2.0cm 幅1.9cm 厚さ0.5cm 穿孔は、両方向から行なっている。		孔径0.3cm 重さ3g。側面四隅を刃物による削り調整している。	

第64号住居跡

位置 5区39B45

写真 PL.52

形状 長辺3.16m、短辺3.02mの方形を呈する。壁の

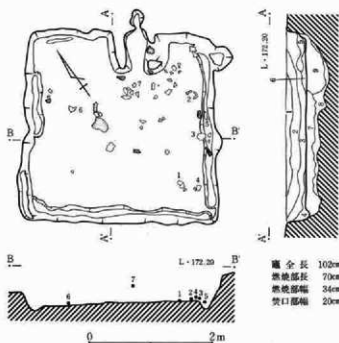
遺存状態は極めて良好で壁高20~52cmを測る。

面積 9.49㎡

方位 N-33°E

埋没土 凡そ6層の黒褐色土や褐色土によって塊底
型に堆積している。徐々に埋まったものと思われる。

床面 確認面の褐色土からローム層まで深さ30~80



第243図 第64号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

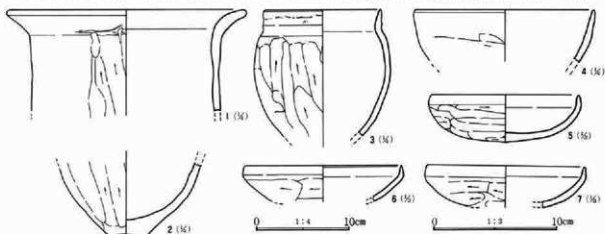
cm掘り込み、黒褐色土とロームの混合土を厚さ10～30cm客土して造られている。床面は平坦であるが、やや西側が低い。電前には一部に堅い面が認められた。なお、掘りかた底面は凹凸が著しかった。
竈 北壁のほぼ中央に黄色粘土を用いて屋内に造り出されていたが、燃焼部奥はやや壁外に出ていた。燃焼部は強く焼けていて、焼土、炭が多量に残っていたが、遺物は長楕片が若干検出されただけである。

柱穴・貯蔵穴 存在しなかった。

壁周溝 東・南壁下では全面的に、西・北壁下では部分的に検出された。幅16～28cm、深さ5～15cm。

遺物 土師器長頸・小型壺・鉢・坏が電前から東壁側にかけて少量の礫と共に散在して出土した。土器はいずれも小破片で、出土量は極めて少量であった。

備考 北東隅壁は後世のピットによって切られていた。本住居跡は8世紀前半と推定される。(小林)



第244図 第64号住居跡出土遺物実測図

第64号住居跡出土遺物観察表 (PL.149)

順号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長頸壺	+10	口(25.2) 高一底一 口～胴 Ⅸ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無。	
2	土師器 長頸壺	+9	口一高一 底4.1 胴～底 Ⅸ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③褐色	外面 胴下平部縦削り。 内面 胴下平部無。	
3	土師器 小型壺	+10	口(12.4) 高一底一 口～胴 Ⅸ	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・硬 ③暗赤褐色	内外共口縁部横断で。外面 胴部縦削り。 内面 胴部無。	口縁部に輪状痕あり。
4	土師器 鉢	+16	口(19.2) 高一底一 口～体 Ⅸ	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横断で。外面 体部縦削り。 内面 体部無。	口縁部に黒褐色の部分あり。
5	土師器 坏	+6	口(13.8) 高3.8 丸底 口～底 Ⅸ	①細・灰色灰微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。外面 体部～底部横削り。 内面 体部無。	
6	土師器 坏	+12	口(12.7) 高一底一 口～体 Ⅸ	①細・黒色灰微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横断で。外面 体部縦削り。 内面 体部無。	
7	土師器 坏	+3	口(12.7) 高一底一 口～体 Ⅸ	①細・白色灰微量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。外面 体部縦削り。 内面 体部無。	

第71号住居跡

位置 5区32C14 写真 PL.52

形状 長辺4.10m、短辺3.92mの方形を呈する。西壁は削られていてほとんど残っていないが、東壁は比較的残りが良好であり、壁高0～35cmを測る。

面積 15.51㎡ **方位** N-20°-E

埋没土 凡そ8層の褐色土や黒褐色土などによって埋められている。全体的に浅いが、壁際から埋まっ

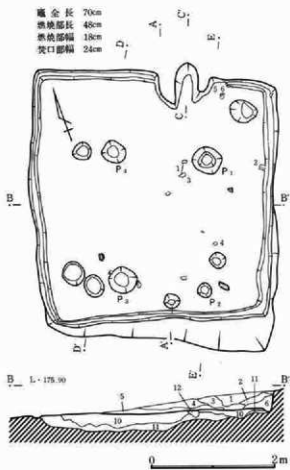
ていった様子が窺われる。

床面 確認面から凡そ10～70cmほど掘り込み、ロームや黒褐色土の混合土を厚さ10～30cmほど客土して水平かつ平坦に整地している。電前には一部踏み固めてきた堅い面が残存していた。床下の底面はかなり凹凸が著しいが、土坑は存在しなかった。

竈 北壁のやや東寄り位置に黄灰色粘土を用いて屋内に袖を出す形態に造られていた。燃焼部は火床、

壁面共に強く焼けており、焼土が少量に残っていた。袖は造りかえが行われたようで、内部に焼土塊を少量に含んでいた。一方、竈下部は径1.09m×75cm、深さ24cmの半円形の土坑が存在した。

柱穴 ビットは9個検出されたが、柱穴になるものはP₁～P₄と思われる。規模はP₁:42cm×53cm、P₂:26cm×15cm、P₃:40cm×33cm、P₄:35cm×38cm。

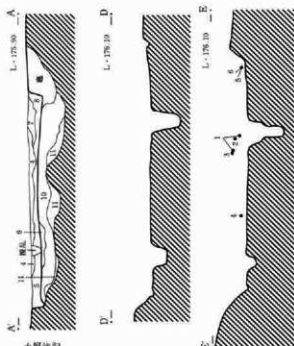


貯蔵穴 竈の右脇に長軸46cm短軸34cm、深さ63cmの楕円形のものが存在した。遺物は検出されなかった。

壁周溝 竈部分を除いて幅15～24cm、深さ3～7cmのものが全周していた。

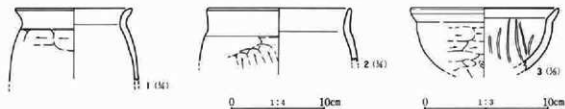
遺物 土師器長甕・坏・高坏、須恵器の破片が少量、住居全体に散在していた。

備考 本住居跡は7世紀後半と推定される。(小林)



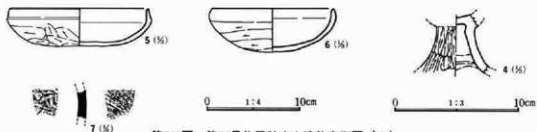
- 土層注記
1. 暗褐色土 ローム粒、炭化物、焼土粒少量混入。粗粒。
 2. 暗褐色土 径1～2cm大のロームブロック多量混入。
 3. 褐色土 径2～3cm大のロームブロック多量混入。粗粒。
 4. 暗褐色土 ローム粒少量混入。細粒で締り強い。
 5. 褐色土 炭化物、焼土粒少量混入。細粒。締りに欠ける。
 6. 暗褐色土 炭化物粒多量混入。粗粒で締り強い。
 7. 褐色土 カマド用の粘土塊少量混入。細粒で締り強い。
 8. 暗褐色土 カマド用の粘土塊、炭化物粒、焼土粒多量混入。粗粒で粘質。
 9. ローム大ブロックと褐色土の混合土(粘土)
 10. 黒褐色土 ローム大ブロック、淡褐色土大ブロック混入。
 11. 黄褐色土 ロームブロック、褐色土の混合土だが、ロームが多いため、黄褐色を呈する。
 12. 黒褐色土 細粒、粘質。焼土小塊少量混入。

第245図 第71号住居跡実測図



第246図 第71号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第247図 第71号住居跡出土遺物実測図(2)

第71号住居跡出土遺物観察表 (PL.149)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 小型碗	+15	口(12.2) 高一底一 口~胴 ㄥ	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部横削り。 内面 口縁部横撫で、胴部撫で。	
2	土師器 小型碗	+15	口(15.2) 高一底一 口~胴 ㄥ	①普通・白色藍少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、胴部斜め削り。 内面 頸部撫で。	
3	土師器 環	+23	口(11.7) 高一底一 口~体 ㄥ	①細・白色藍微量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部横削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で後、暗文。	外面の下半部は黒色、流れ込みみ。
4	土師器 高 環	+10	口一高一底一 脚部 ㄥ	①細・白色藍微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 脚部横削り。 内面 脚部削り。	流れ込みみ。
5	土師器 環	+5	口11.0 高3.0 丸底 口~底 ㄥ	①細・黒色微藍少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部不定 方向削り。内面 体部撫で。	
6	土師器 環	+5	口9.7 高3.3 丸底 口~底 ㄥ	①細・白色藍少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	
7	須恵器 壺	埋没土	口一高一底一 胴部 破片(縦3.1 横3.1)	①細・黒色微藍少量 ② 還元・硬 ③灰白色	外面 平行叩き。 内面 背面叩き。	

第87号住居跡

位置 4区11C00 写真 PL.53

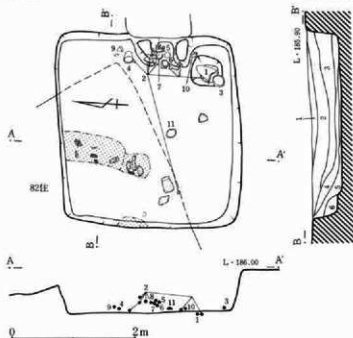
形状 長辺3.01m短辺2.87mのはほぼ正方形を呈する。

面積 8.57m² 方位 N-82°-E

埋没土 焼土・炭化物を多く含む黒褐色土を主に堆積する。

床面 ローム面をそのまま床面とし、よく踏みしめられ堅くしまっている。壁高は、確認面までで40~50cmを測る。

竈 東壁のやや南に位置し、東側にある捜乱穴により煙道部は不明。焚口部から燃焼部にかけては平坦で、両袖部の先端(焚口部)には鳥居状に組まれた



第248図 第87号住居跡実測図

土層注記

- 暗褐色土 白色ローム粒、炭化物較混入。細粒で締りある土。
- 黒褐色土 炭化物粒、ローム粒、焼土粒、全体に混入。細粒で締りある土。
- 黒褐色土 2に類似。細粒だが、さらさらしている土。
- 黒褐色土とロームブロックと焼土塊の混合土 炭化物較混入。細粒。
- 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、ロームブロック、黒褐色土ブロックが混入。細粒で粘性が少々あり。
- 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒多量混入。細粒で締りある土。

と考えられる竈構築材としての石が2本確認され、天井部には石と長胴甕を組ませていたと考えられる。また、燃焼部には支脚の石が確認された。袖部の構築材には、黄色ローム土を主に用いている。

貯蔵穴 竈の右側にあり、一辺が48cmの方形を呈し、深さが74cmを測る。

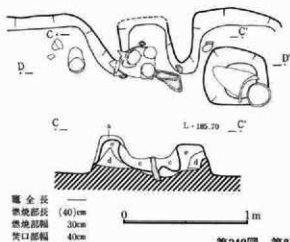
柱穴 確認されなかった。

遺物 貯蔵穴、竈内及びその周辺に壺や坏が多く出土し、住居跡中央より西に竈に使用された石が出土

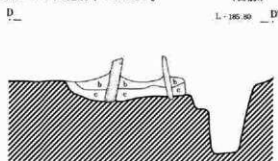
している。

備考 本住居跡の南・東側には、A軒石を埋没土中に含む近世以降の掘乱穴があり、北東角から南西角にいたる北側には、第44・82号住居跡と重複している。これらの新旧関係は、埋没土の堆積状況から本住居跡の方が新しいことが確認された。また、床面北側には炭化物や焼土が集中して出土する部分があり、焼失の可能性がある。本住居跡の年代観を出土遺物より8世紀前半とした。

(谷藤)

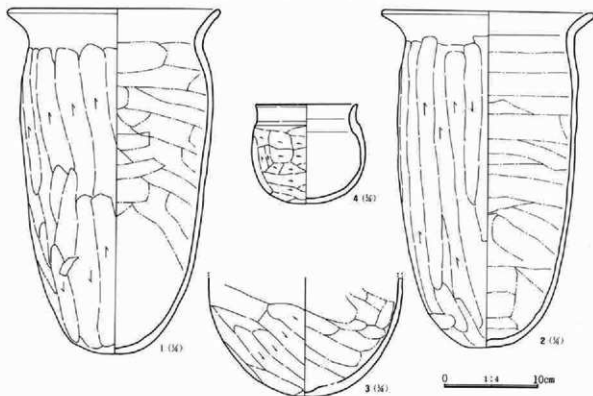


第249図 第87号住居跡竈実測図



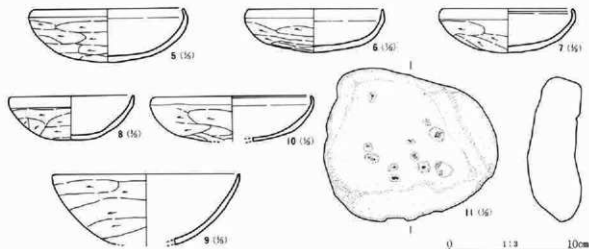
土層注記

- a. 淡褐色土 細粒、砂質。焼土塊少量混入。
- b. 褐色土 焼土粒多量混入。ガサガサしている。
- c. 褐色土 bと類似。炭化物、灰を多量混入。
- d. 黄色粘土 袖部。
- e. 暗赤褐色土 焼土粒多量混入。ガサガサしている。



第250図 第87号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第251図 第87号住居跡出土遺物実測図(2)

第87号住居跡出土遺物観察表 (PL.149)

種別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 長胴壺	-5	口径22.5 高さ36.3 底(4.0) ほぼ完成	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。内面 胴部縦撫で。	
2	土師器 長胴壺	竈	口径22.6 高さ35.5 底4.5 口~底 欠	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。内面 胴部縦撫で。	
3	土師器 壺	+4	口一高一 丸底 胴~底 欠	①普通・白色灰色紅少量②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴部横筋削り。内面 胴部縦撫で。	
4	土師器 小型壺	+1	口径10.8 高10.5 丸底 完形	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部不定方向縦筋削り。内面 胴部縦撫で。	
5	土師器 環	竈内	口径12.2 高4.2 丸底 完形	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋削り。内面 体部縦撫で。	内面に黒褐色の付着物。多量。
6	土師器 環	竈内	口径10.8 高3.4 丸底 完形	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋削り。内面 体部縦撫で。	
7	土師器 環	竈内	口径10.7 高3.5 丸底 完形	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部斜め縦筋削り。内面 体部縦撫で。	内面に、黒褐色の付着物あり。
8	土師器 環	竈内	口径10.0 高3.5 丸底 口~底 欠	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横と斜め縦筋削り。内面 体部縦撫で。	内面に、黒褐色の付着物あり。
9	土師器 環	+5	口径(15.0) 高一底一 口~底 欠	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横筋削り。内面 体部縦撫で。	
10	土師器 環	床直	口径12.7 高一底一 口~底 欠	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横筋削り。内面 体部縦撫で。	
11	工作片	+7	材質 砂粒。長さ13.8cm 幅12.0cm 厚さ4.3cm		器平面に、多数の凹みが、確認される。器破断内は万物により、削られている部分。	

第101号住居跡

位置 2区29C33 写真 PL.54

形状 長辺4.74m 短辺3.32mの隅丸長方形を呈すが、削平が進み、各壁の確認はほとんどできない状態であった。

面積 14.98㎡(推定) 方位 N-12°E

埋没土 堆積はほとんど観察されず、ローム混じりの黒褐色土が住居の形に広がる状況であった。

床面 中央部がやや盛り上がり、全体的に緩やかな凹凸が見られた。北西側はほとんど削られて下がっ

ている。

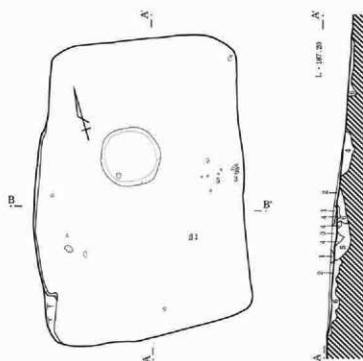
竈 削平されており確認されなかった。

柱穴・貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 床面上に壺の口縁部片、環類の破片が散在していた。

備考 竈を含め住居施設はほとんど残っていないかった。床下土坑が計5基検出されたが、いずれも形状・掘りかたは余り明確ではない。時期は出土遺物から見て8世紀後半と考えられる。(小野)

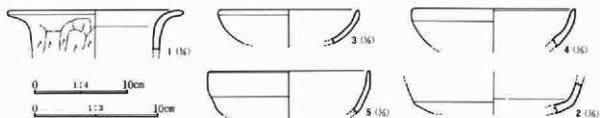


土層注記

1. 褐色土 黄色軽石を少量含む。粗粒。
2. 明褐色土 ロームブロック少量混入。細粒でやや粘質。
3. 黒褐色土 細粒、粘質。炭化物若干混入。
4. 暗褐色土 ローム粒、炭化物粒混入。細粒で粘りある土。
5. 黒褐色土 ローム粒、黄色軽石粒多量混入。細粒で堅くしまった土。
6. 褐色土 ローム層移積。



第252図 第101号住居跡実測図



第253図 第101号住居跡出土遺物実測図

第101号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	-16	口(19.0) 高一底一 口~頸 ⅓	①普通・黒色、白色鉄鉱少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部横撫で。	表面、口縁部に 黒褐色の付着物。
2	土師器 土師器 環	床下	口一高一底一 口縁部片	①細・白色鉄鉱量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部直削り。 内面 内黒。	内黒。
3	土師器 土師器 環	+2	口(11.0) 高一底一 口~体 ⅓	①細・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部は、準削りがはげしく明確でないが、直削り。内面 体部は横撫で。	
4	土師器 土師器 環	床下	口(13.0) 高一底一 口~体 ⅓	①細・灰色鉄鉱量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部直削り。 内面 口縁部横撫で、体部横撫で。	
5	土師器 土師器 環	-3	口(13.0) 高一底一 口縁部片	①細・夾層物なし ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部~体部横撫で。 内面 口縁部~体部横撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

第113号住居跡

位置 2区17C20 写真 PL-54

形状 長辺5.44m 短辺3.45mを測り、不整な隅丸長方形を呈する。壁高は最大80cmを測る。

面積 18.78㎡ 方位 N-46°-E

埋没土 微粒な炭化物・ローム粒を多く混入し比較的粘性のある土が主体をなす。特に南東部は掘り込まれた地山が黒色土であるために、壁の確認が困難であった。

床面 竈前面には灰白色粘土・焼土がかなり広い範

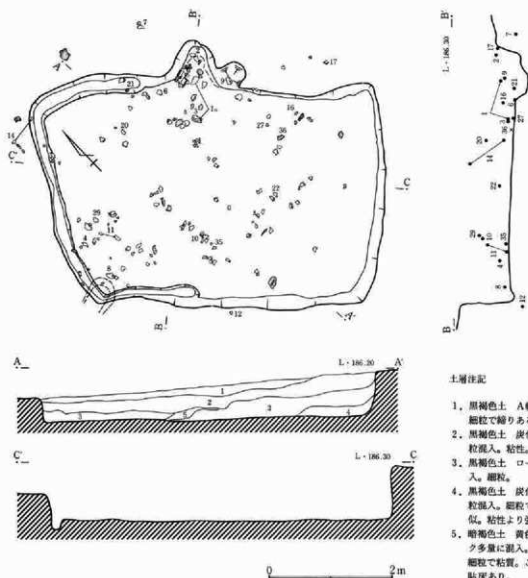
囲に厚く堆積していた。この粘土の下面はかなり硬化していた。

竈 北東壁のほぼ中央に位置する。軽石を多量に混入する灰白色粘土を造作材として馬蹄形に壁外に作り出されていた。焼土は多く残り、内面壁もかなり強く焼けた状況が観察された。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

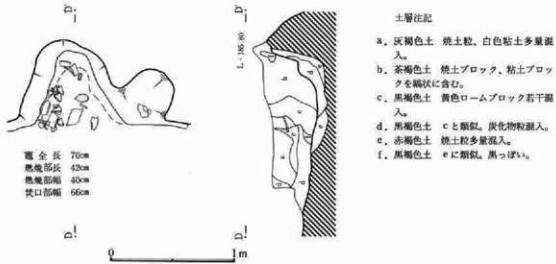
壁周溝 西側に約半周する。幅15~18cm 深さ10~18cmである。



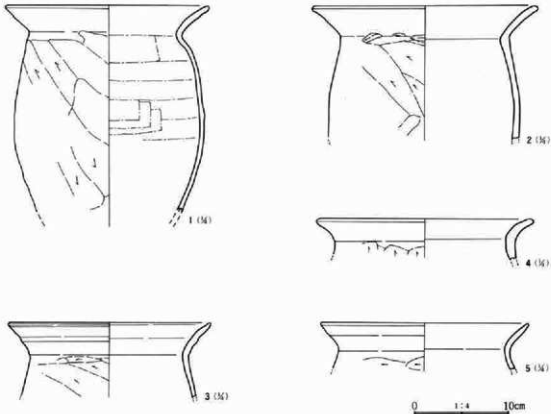
第254図 第113号住居跡実測図

遺物 土師器壺・坏が多く出土。須恵器類は盤・坏・蓋・高坏などが出土している。

備考 第111号住居跡が重複している。出土遺物から見て時期は8世紀後半と考えられる。(小野)

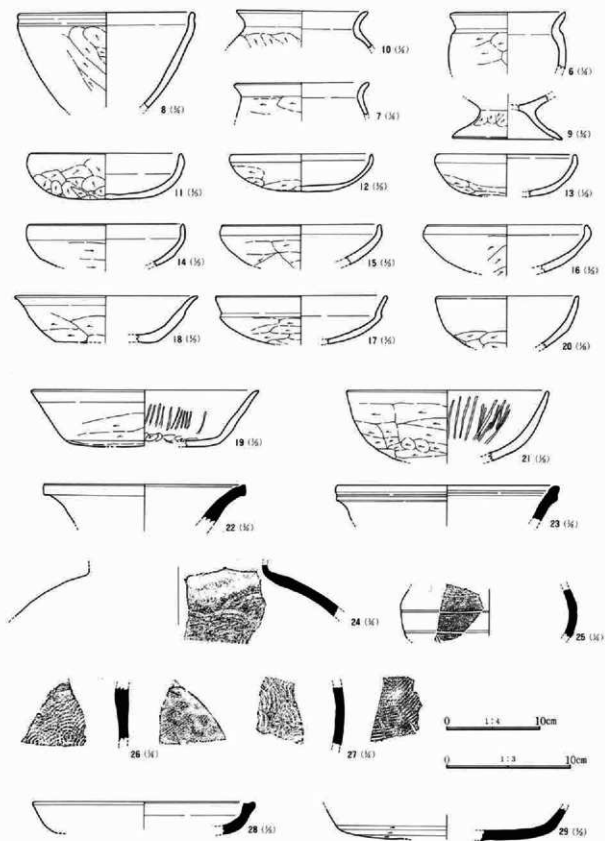


第255図 第113号住居跡壺実測図

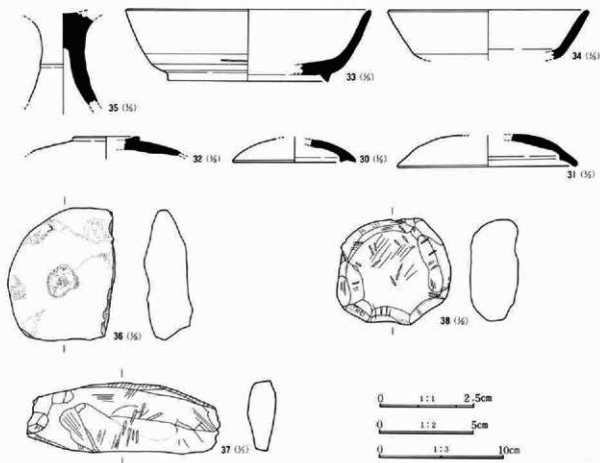


第256図 第113号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第257図 第113号住居跡出土遺物実測図(2)



第258図 第113号住居跡出土遺物実測図(3)

第113号住居跡出土遺物観察表 (PL.150)

図形	出土位置	口径	高さ	底径	残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1 土師器 甕	甕	□21.6	高一底一	□~胴 ⅔		①細・灰色灰質微量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め握削り、内面 胴部横撫で。	
2 土師器 甕	甕内	□23.5	高一底一	□~胴 ⅔		①普通・白色灰質少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め握削り、内面 胴部横撫で。	
3 土師器 甕	甕	□(21.4)	高一底一	□~胴 ⅔		①細・灰色灰質少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、頸部斜め握削り、内面 口縁部横撫で、頸部横撫で。	
4 土師器 甕	+17	□(22.7)	高一底一	□~胴 ⅔		①普通・白色灰色灰多量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、頸部斜め握削り、内面 口縁部横撫で。	
5 土師器 埋没土	埋没土	□(22.0)	高一底一	□~胴 破片		①細・灰色灰質少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、頸部横握削り、内面 口縁部横撫で、頸部横撫で。	
6 土師器 小型甕	甕	□(12.0)	高一底一	□~胴 ⅔		①普通・白色灰質微量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部横握削り、内面 口縁部横撫で、胴部横撫で。	
7 土師器 小型甕	住居外	□(14.2)	高一底一	□~胴 ⅔		①細・灰色灰質少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部横握削り、内面 胴部横撫で。	
8 土師器 鉢	+8	□(18.4)	高一底一	□~体 ⅔		①細・灰色灰質微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部斜め握削り、内面 体部横撫で。	
9 土師器 台付甕	+11	□~高一	端部11.6	台部 ⅔		①細・灰色灰質微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 台部斜め握削り、内面 台部横撫で。	
10 土師器 甕	+42	□(14.0)	高一底一	□~胴 ⅔		①細・灰色灰質少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 頸部斜め握削り、内面 頸部横撫で。	
11 土師器 坏	+7	□(12.0)	高3.6	□~底 ⅔		①細・灰色灰質少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部不定方向握削り、内面 体部横撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	図形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
12	土師器 環	-16	口11.2 高2.9 丸底 口~底 ⅴ	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	
13	土師器 環	埋没土	口(10.9) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・黒色微鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	
14	土師器 環	+9	口(12.5) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・黒色微鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横削り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
15	土師器 環	埋没土	口(12.4) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色鉄微量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部横削り。 内面 体部撫で。	
16	土師器 環	+16	口(12.6) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・黒色微鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部斜め削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	111住よりの混入か？
17	土師器 環	住居外 +25	口(13.6) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横削り。内面 体部撫で。	
18	土師器 環	埋没土	口(14.5) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横削り。内面 体部撫で。	111住よりの混入か？
19	土師器 環	埋没土	口(18.0) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色鉄少量 ②酸化・硬 ③褐色	外面 口縁部~体部上半部横撫で、体部下半部横削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	内面に暗文あり。混入か。
20	土師器 環	+41	口(11.3) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・黒色微鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横削り。内面 体部撫で。	
21	土師器 環	-2	口(15.5) 高一底一 口~底 ⅴ	①細・白色鉄少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部横削り。内面 体部撫で。暗文。	
22	須恵器 壺	+16	口(21.3) 高一底一 口縁部片	①細・白色鉄微量 ②還元・硬 ③オリーブ黒色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
23	須恵器 壺	埋没土	口(23.3) 高一底一 口縁部片	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
24	須恵器 壺	埋没土	頸~肩部片(縦10.5 横8.5)	①細・白色黒色鉄少量 ②還元・硬 ③黄色	内面 布敷で。 外面 自然釉。	
25	須恵器 壺	埋没土	胴部片 (縦6.0 横4.5)	①細・白色微鉄少量 ②還元・硬 ③暗灰色	組作り後、ロクロ整形。	
26	須恵器 壺	埋没土 上部	胴部片 (縦7.0 横6.5)	①細・灰色鉄微量 ②還元・硬 ③灰色	外面 叩き。 内面 青海緑印き。	
27	須恵器 壺	-4	胴部片 (縦6.3 横4.8)	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③暗灰色	外面 平行叩き。 内面 青海緑印き。	
28	須恵器 壺	埋没土	口(17.5) 高一底一 口~底部片	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③暗灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
29	須恵器 壺	+49	口~高一底一 底部片 ⅴ	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形。 回転削り。	
30	須恵器 壺	振りかた 環	端(9.8) 高一 天井部~端 ⅴ	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
31	須恵器 壺	埋没土 環	端(14.5) 高一 天井部~端 ⅴ	①細・黒色微鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
32	須恵器 壺	埋没土 環	端~天井部 ⅴ	①細・灰色鉄微量 ②酸化・普通 ③灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
33	灰釉陶 器	埋没土 環	口(19.4) 高(5.5) 底(12.7) 口~底 ⅴ	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	高台付。
34	須恵器 壺	埋没土	口(16.0) 高一底一 口~底 ⅴ	①普通・灰色鉄少量 ②還元・軟 ③オリーブ灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
35	須恵器 壺	+6	脚部(3.3) ⅴ	①細・白色微鉄微量 ②還元・硬 ③暗灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	
36	凹み石	+5	材質 牛伏砂岩。長さ10.3cm 幅8.4cm 厚さ4.0cm 重さ400g。表面に1箇所、凹みあり。右側は、旧時欠損。形迹不明。			
37	削形 未成品	埋没土	材質 滑石。長さ5.1cm 幅1.8cm 厚さ0.7cm 重さ10.6g。全面、刃物による削り調整をしている。ところどころに原石面残る。両端部は剝離。穿孔はなし。			
38	紡輪車 未成品	埋没土	材質 粗粒安山岩。長さ6.0cm 幅5.5cm 厚さ2.5cm 重さ100g。図表面および側面を研磨による整形をほどこしている。そのため、磨痕が明確に残る。手紙破の可能性もある。			

第118号住居跡

位置 2区18C10

写真 PL.54, 55

形状 一辺4.8mのほぼ正方形を呈する。

面積 23.66㎡

方位 N-67°E

埋没土 ローム粒・炭化物を多く混入し、かなりし

まっている。特に甕付近はロームに黄白色粘土粒が多量に含まれている。

床面 部分的に粘土とロームの混合土で作られた2

〜3枚の貼床が認められた。柱穴4本は貼床最下層面で確認されている。

竈 東壁中央やや南寄りに作られている。焚口部幅約50cmで壁外へ約60cm程掘り出されている。両袖は粘土およびロームを用いて作られているが、ほとんど崩落している。竈前面の崩落土中より多くの土器片が出土している。煙道部ははっきりしない。

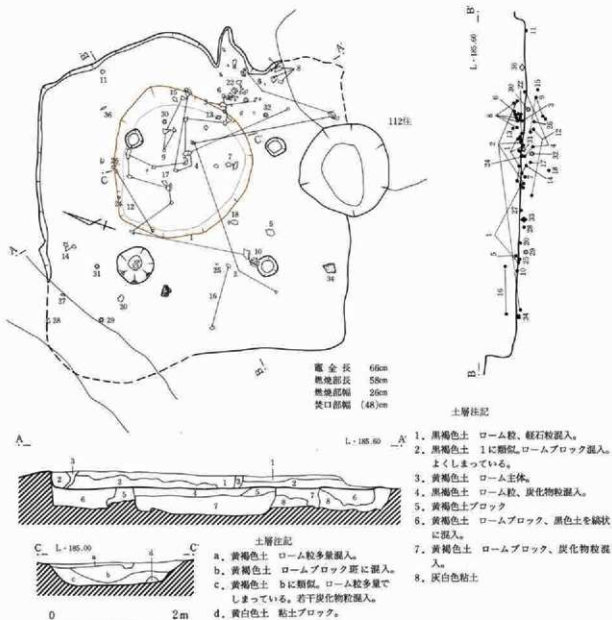
柱穴 対角線上に4本を検出した。規模はP₁が径34cm深さ36cm P₂が径32cm深さ38cm P₃が径58cm深さ61cm P₄が径28cm深さ59cmを測る。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

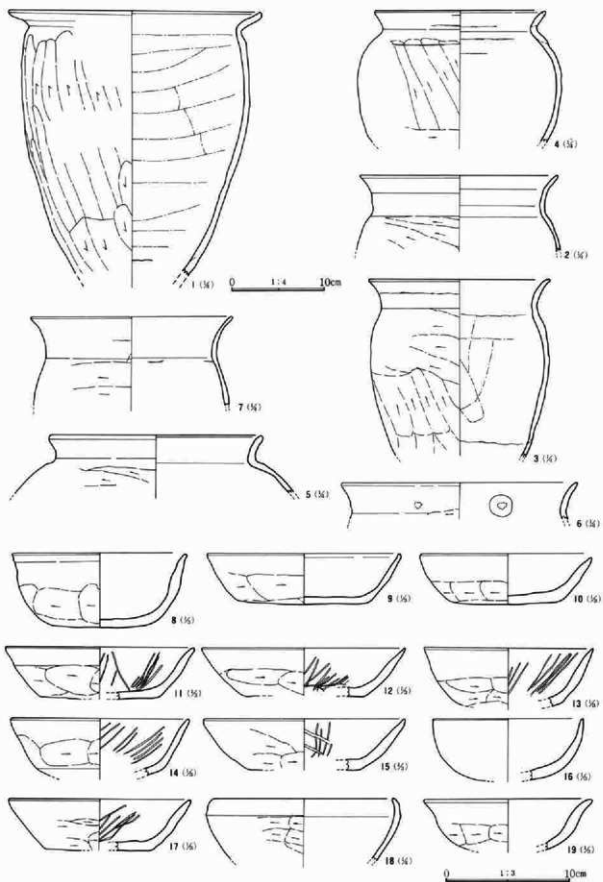
遺物 埋没土中より土師師製・環、須恵器環・蓋および円面硯の破片が出土している。また掘りかた内より多くの土器片が出土した。その他の遺物としては紡錘車が3点・鉄製型状工具などが出土。

備考 南東コーナー部に第112号住居跡が、南壁に第61号土坑が重複する。時期は出土遺物からみて8世紀後半と考えられる。(小野)



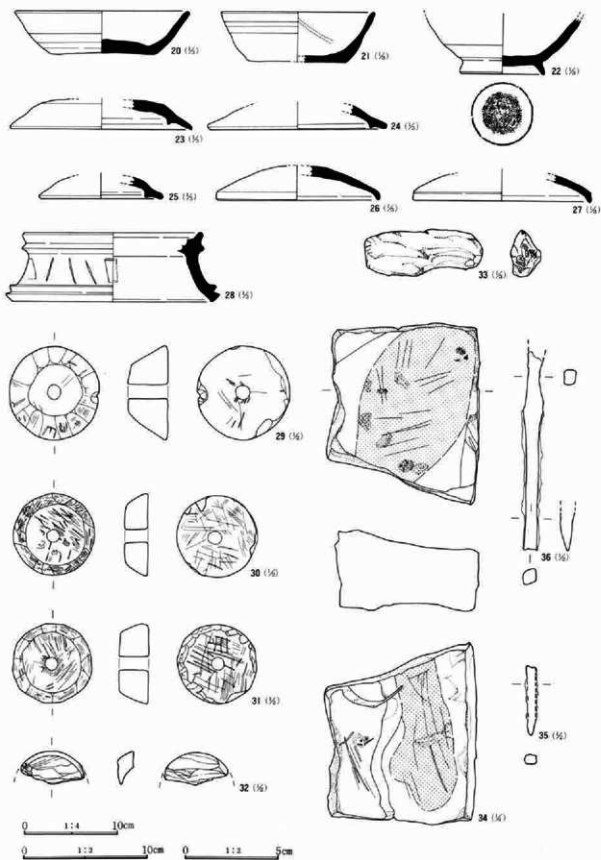
第259図 第118号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物



第260図 第118号住居跡出土遺物実測図(1)

第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物



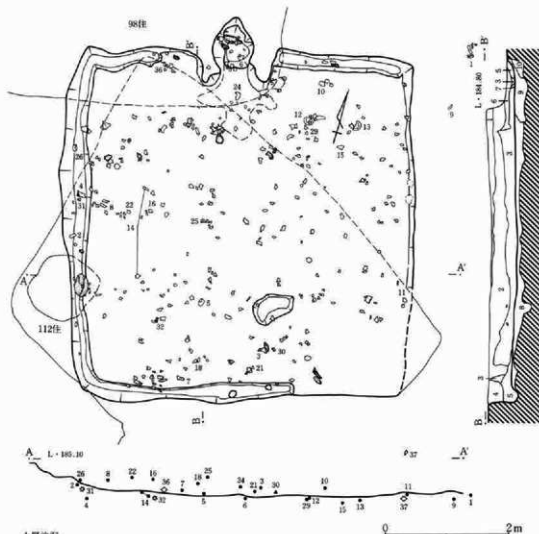
第261図 第118号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

第118号住居跡出土遺物観察表 (PL.150、151、152)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	-4	□27.0 高一底一 口~胴 瓦	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦貫削り。 内面 縦撫で。	
2	土師器 壺	-3	□21.0 高一底一 口~胴 瓦	①細・白色微減少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め底削り。 内面 胴部撫で。	
3	土師器 壺	+11	□(19.1) 高一底一 口~胴 瓦	①細・黒色微減少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴上半部は横、 中央部は斜め底削り。内面 胴部横撫で。	輪痕あり。
4	土師器 甕	-19	□(18.2) 高一底一 口~胴 瓦	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部斜め底削り。 内面 胴部撫で	輪痕あり。
5	土師器 壺	+5	□(22.4) 高一底一 口~胴 瓦	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③鈍い橙褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部撫で。	
6	土師器 壺	+16	□(25.0) 高一底一 口縁部(破片)	①普通・白色微減少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部縦貫削り。	孔は補修孔か調査時欠損か。
7	土師器 壺	-8	□(21.6) 高一底一 口~胴 瓦	①細・黒色微減少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦貫削り。 内面 胴部撫で。	輪痕あり。
8	土師器 杯	+10	□(14.0) 高5.8 口~底 瓦	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	
9	土師器 杯	-32	□(15.3) 高(4.0) 底(10.3) 口~底瓦	①細・黒色微減少量 ②酸 化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~底部撫で。	
10	土師器 杯	+5	□13.4 高4.0 口~底 瓦	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~底部撫で。	
11	土師器 杯	-5	□(15.0) 高(4.1) 底(9.0) 口~底瓦	①細・灰色微減少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部~底部縦貫 削り。内面 体部撫で後、暗文。	
12	土師器 杯	-13	□(16.3) 高一 口~底 瓦	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で後、暗文。	
13	土師器 杯	+20	□(13.4) 高一底一 口~体 瓦	①細・黒色微減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で後、暗文。	
14	土師器 杯	-2	□(14.1) 高一底一 口~底 瓦	①細・白色微減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦貫削り。 内面 体部撫で後、暗文。	
15	土師器 杯	-21	□(15.9) 高(4.0) 底一口~底瓦	①細・黒色微減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で後、暗文。	
16	土師器 杯	+18	□(12.0) 高一底一 口~底 瓦	①細・白色減少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で。	
17	土師器 杯	-11	□(14.7) 高(4.0) 底一口~底 瓦	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	
18	土師器 鉢	-44	□(19.0) 高一底一 口~体 瓦	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦貫削り。 内面 口縁部~体部横撫で。	
19	土師器 杯	埋没土	□(13.2) 高一底一 口~底 瓦	①細・灰色減少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部縦貫削り。 内面 磨き。	内黒。
20	須恵器 杯	+1	□(13.6) 高(3.2) 底(8.2) 口~底 瓦	①細・灰色微減少量 ②還元・硬 ③オリーブ灰色	ロクロ整形(右回転)。 底部に貫削り。	
21	須恵器 杯	掘りかた埋没土	□(12.1) 高(3.9) 底(7.8) 口~底 瓦	①細・白色減少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。 底部に貫削り。	
22	須恵器 壺	+8	□高一底6.8 体~台 瓦	①細・白色減少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
23	須恵器 杯	掘りかた埋没土	□(14.4) 天井部~端 瓦	①細・白色微減少量 ②還元・硬 ③オリーブ灰色	ロクロ整形(右回転)。	
24	須恵器 杯	+6	□(14.0) 体~端 破片	①細・黒色微減少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
25	須恵器 杯	+1	□(9.1) 体~端 破片	①細・白色微減少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	表面に自然熱付着。
26	須恵器 杯	-16	□(13.0) 天井部~端 瓦	①細・白色微減少量 ②還元・硬 ③鈍い橙褐色	ロクロ整形(右回転)。	
27	須恵器 杯	+1	□(14.1) 天井部~端部(破片)	①細・黒色微減少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	
28	須恵器 門面瓶	-3	□(14.1) 高(5.5) 底(16.0) 胴部 瓦	①細・白色減少量 ②還元・硬 ③オリーブ黒色	瓶作り後、ロクロ整形。	
29	紡錘車	-8	材質 滑石。長軸4.9cm 短軸2.7cm 厚さ2.1cm	口径0.7cm 重さ70g。全面、刃物による削り調整の後、研磨している。長軸面に新銅部分あり。側面に縦刺で「山」と書かれている。穿孔は、一方向。	口径0.7cm 重さ70g。全面、刃物による削り調整の後、研磨している。長軸面に新銅部分あり。側面に縦刺で「山」と書かれている。穿孔は、一方向。	

図号	御器 器形	出土位置	特	備
30	紡錘車	-8	材質 蛇紋岩。長軸4.3cm 短軸3.1cm 厚さ1.3cm 孔径0.7cm 重さ42g。全面、刃物による削り調整の後、研磨。短軸面に文字らしきもの3文字線刻されている。長軸面、側面にも、多量の線刻あり。穿孔は、一方。向。	
31	紡錘車	+1	材質 滑石。長軸4.2cm 短軸3.2cm 厚さ1.5cm 孔径0.7cm 重さ50g。刃物による削り調整の後、全面、研磨。長軸面端部に刺痕部分あり。穿孔は、一方。向。	
32	紡錘車 未成品	-7	材質 滑石。長軸(4.0)cm 短軸(1.7)cm 厚さ0.9cm 孔径— 重さ6g。長軸面短軸面ともに、刺痕している。側面部は、研磨による仕上げ。	
33	銀打石	+5	材質 緑色片岩。長さ9.2cm 幅3.7cm 厚さ2.6cm 重さ100g。図右端部に敲打した時に刺痕した部分が集中している。手のひらの中に、ちょうど納まる大きさ。	
34	砥石	+3	材質 砂粒。長さ18.7cm 幅16.2cm 厚さ8.2cm 重さ3.1kg。左平面上小口と平面右上の原材加工時点の削り目(金風)あり。使用は、表裏にあり。左平面の条痕はヒケ傷。右平面の大半は、刃傷。金風置破。	
35	鉄製品 釘か鎌	増設土	残存長3.6cm	基部の残欠で、上方は調査時欠損。横断面形は方形を呈し、長鉄を思わせるので、鎌の基の可能性あり。
36	鉄製品 釘か鎌	+3	残存長10.4cm	基部は調査時欠損。茎と身部との間に、区が作り出される。刃部は、裏面もわずかに研磨されているが、全体的には表側の研磨面が強いため、片刃となる。刺痕は、長方向にあり。



土層注記

- | | | | | | |
|---------|-----------------------|----------|--------------------------|-----------|------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒、ブロック、炭化物
粒混入。 | 4. 黒褐色土 | 3に類似、黒味強い。 | 7. 暗黒褐色土 | 6に類似、斑に混入。やや
粘性を持つ。 |
| 2. 黄褐色土 | 炭化物粒、黄白色粘土ブロッ
ク混入。 | 5. 黒褐色土 | ローム粒、焼土粒、炭化物粒
混入。 | 8. 暗黒褐色土 | 粘土ブロック若干混入。 |
| 3. 黒褐色土 | 炭化物粒、焼土粒混入。 | 6. 暗黒褐色土 | 焼土粒、炭化物粒、白色粘
土ブロック混入。 | 9. 暗黒褐色土 | 粘土ブロック、軽石若干混入。 |
| | | | | 10. 淡黄褐色土 | 黄白色粘土ブロック主体。 |

第262図 第122号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第122号住居跡

位置 2区15C13 写真 PL.55

形状 一辺約5.5mの隅丸方形を呈す。東側を除き壁はしっかりしており、特に北壁はほぼ垂直に立ち上がる。

面積 30.06㎡ 方位 N-15°-E

埋没土 かなりしまった土でロームブロック・軽石に混じって多量の炭化物を含む。上面に第117号住居跡が重複する。

竈 北壁のほぼ中央に作られている。袖部・本体共にかなり壊れており、前面に粘土ブロック・ロームブロックおよび焼土が多く見られた。煙道部は残っていないが、燃焼部の落ち込みが確認された。内部には焼土・粘土塊などが多量に詰まった状態であった。川原石が1個横に渡された状態で出土して

いる。

床面 やや凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。部分的に地山の粘性土を含む床下が認められた。

柱穴 確認されなかった。

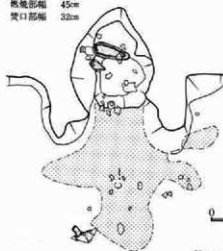
貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 南壁・西壁および北壁下に検出された。幅は16~30cm 深さは5~11cmである。

遺物 土師器の壺・坏類、須恵器の坏・蓋などが出土している。その他には砥石・鉄製型工具などが出土している。

備考 第117号住居跡が重複してはいたが、掘り込みが浅かったため、削平を受けていた南東部を除き壁などの遺存状態は比較的良好であった。出土遺物などから見て時期は8世紀後半と考えられる。(小野)

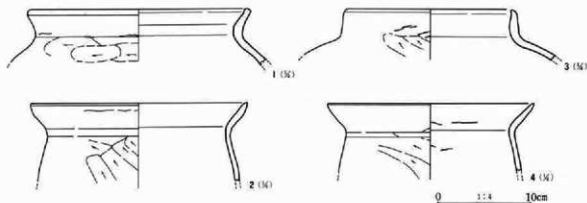
竈 全長 100cm
 煙道部長 66cm
 燃焼部幅 45cm
 焚口部幅 32cm



土層注記

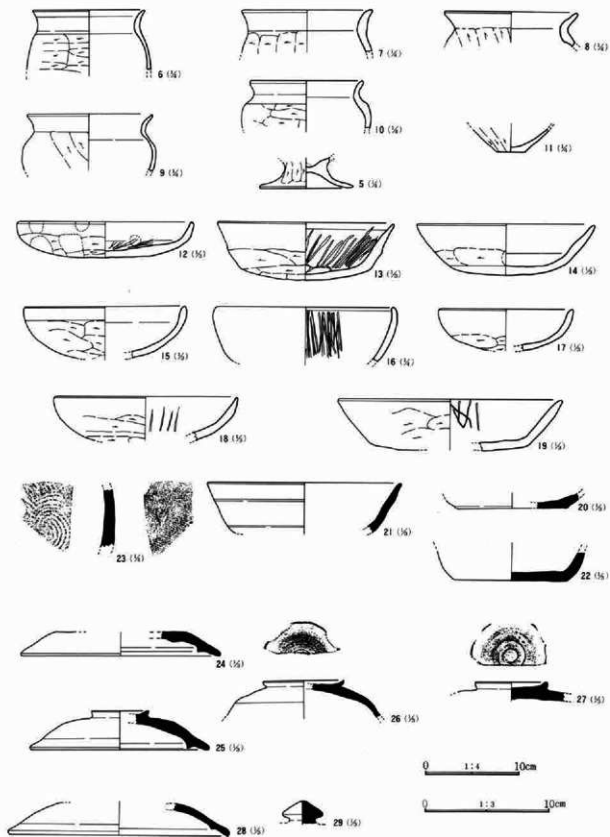
- a. 黒褐色土 ローム粒、粘土粒若干混入。
- b. 黒褐色土 aに類似。黒味を帯びる。
- c. 黒褐色土 粘土粒、焼土粒混入。よくしまった土。
- d. 淡黄褐色土 粘土ブロック多量混入。

第263図 第122号住居跡竈実測図



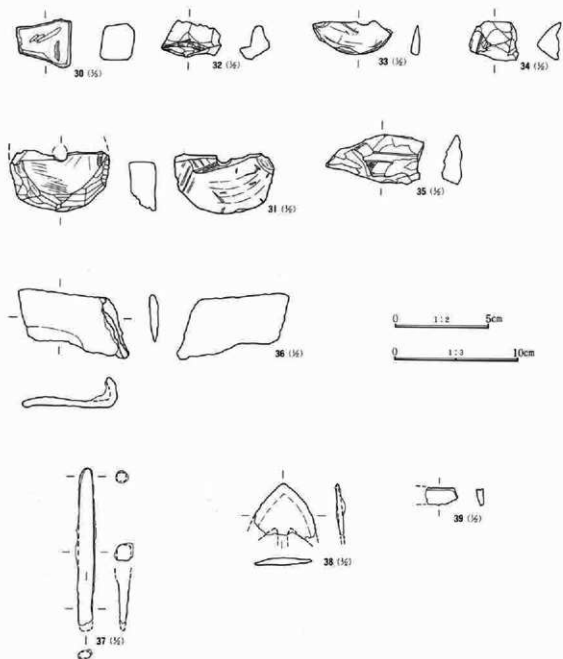
第264図 第122号住居跡出土遺物実測図(1)

第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物



第265図 第122号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第266図 第122号住居跡出土遺物実測図(3)

第122号住居跡出土遺物観察表 (PL.152、153)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 罎	住居外 +13	口(23.5) 高一底一 口縁部 瓦	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横線で、外面 頸部横線削り。 内面 頸部横線で。	
2	土師器 罎	+8	口(23.1) 高一底一 口～胴 瓦	①普通・黒色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部横線で、外面 胴部斜め削り。 内面 胴部横線で。	
3	土師器 罎	+2	口(17.8) 高一 口縁部 破片	①普通・白色微灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 頸部斜め削り。 内面 頸部横線で。	
4	土師器 罎	-7	口(22.0) 高一底一 口～胴 瓦	①普通・黒色灰色灰少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横線で、外面 頸部斜め削り。 内面 胴部横線で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器物 形状	出土位置	特 徴
35	チップ	埋没土	材質 緑色片岩。長さ5.3cm 幅2.5cm 厚さ1.0cm 重さ14.5g。糸状のもの、刃物の先の跡、何を裏面したのかは、不明。
36	鉄製品 鏝	+9	残存長5.1cm 中原鏝である。刃部の半分は田時欠損で、さらに裏面にわずかに曲げられている。そのため、転用工具が考えられる。折曲面に刃はない。刃部は裏面の研磨面が強い。錆化は、少ない。
37	鉄製品 鏝 か	-32	残存長8.2cm 両端部は旧態のまま。上方側の先端部は、横断面・内形を呈するが、以下は、隅丸方形から長方形となる。先端部はわずかながら、錆化消滅するため、明確でないが、両刃入りか。
38	鉄製品 鏝	埋没土	残存長2.7cm 有柄平根鏝で茎・腹快部を欠損する。欠損は調査時。基部は、鉄元がわずかに残存する。錆化は顕著でなく、良鉄を思わせる。腹快部には小さな返りあり。
39	鉄製品 刀子か	埋没土	残存長1.7cm 刀子の茎を思わせる小片で、片断が薄く、一方が厚い。図左側の割れ口は調査時欠損。錆化は不定方向の割れて、精緻を思わせる。

第124号住居跡

位置 2区00C03 写真 PL.56

形状 南東部が削られており、全容は不明であるが、隅丸長方形を呈すと思われる。壁は、北西側が比較的良く残っており、約30cmの高さを測る。

面積 16.08㎡ 方位 N-47-E

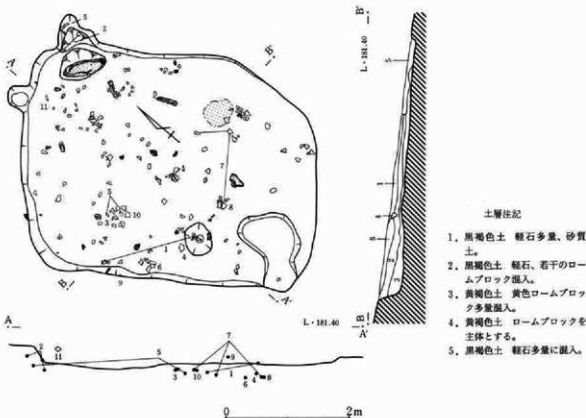
埋没土 黄褐色粘土塊を含む層や暗褐色粘質土層が2～3層堆積する。

床面 南東側一部を除きやや凹凸が見られるものの、比較的平坦である。黄色粘質土と褐色土との混

合土を貼床としている。北東隅に焼土がまとまって検出された。

竈 北東壁の北西壁寄りに存在する。黄色粘質土が火床面となっており、かなり強く焼けた様子が観察された。壁面には部分的に黄褐色粘土が残っている。構築材にもこの黄褐色粘土が多く用いられている。焚口部手前にわずかな落ち込みがあり、長さ50cm程の緑色片岩が出土している。規模は焚口部幅50cm 全長約60cmを測る。

柱穴 確認されなかった。



第267図 第124号住居跡実測図

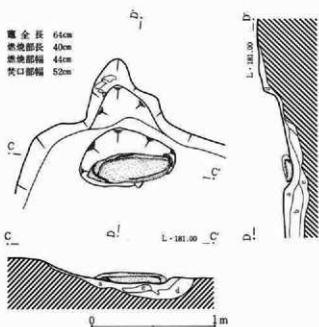
第4節 飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 住居内全体より散在する状況で土師器の壺・
坏類が出土している。

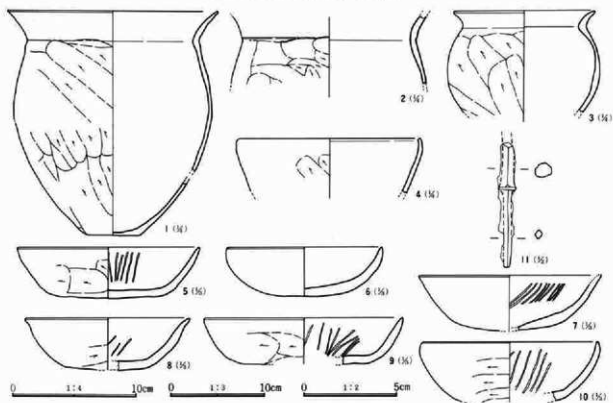
備考 住居の南西寄りに径50cm程の小ピットが検出
され、中より土師器の破片がややまとまって出土
している。時期は出土遺物から見て8世紀後半と考え
られる。(小野)



土層注記

- a. 黒褐色土 若干の焼土、粘土混入。
- b. 黒褐色土 aに類似。aより粘性強
い。
- c. 黒褐色土 焼土、粘土、炭化物粒を
多量に混入。
- d. 黄褐色土 黄白色粘土多量混入。

第268図 第124号住居跡竈実測図



第269図 第124号住居跡出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第124号住居跡出土遺物観察表 (PL.154)

順号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	-13	口(22.3) 高(5.7) 口~胴 胴~底 残	①普通・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜の捩り。 内面 胴部撫で。	内面に黒色付着物あり。
2	土師器 壺	竈内	口一 頸(18.8) 頸~胴 残	①普通・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜の捩り。 内面 胴部撫で。	
3	土師器 小型甕	-3	口(15.0) 高一 底一 口~胴 残	①普通・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜の捩り。 内面 胴部撫で。	
4	土師器 鉢	-19	口(18.8) 高一 底一 口~体 残	①普通・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部斜の捩り。 内面 体部撫で。	
5	土師器 坏	-8	口(14.4) 高4.0 口~底 残	①細・白色微紅少量 ②酸化・普通 ③明褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部横捩り。 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	内面に暗文あり。
6	土師器 坏	-19	口(12.4) 高(3.8) 口~底 残	①細・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で、体部捩り？ 内面 口縁部~体部横撫で、底部撫で。	摩耗している。
7	土師器 坏	-17	口(14.4) 高(4.4) 口~底 残	①普通・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③灰褐色	外面 口縁部横撫で、体部捩り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で後、暗文。	
8	土師器 坏	-17	口(13.0) 高4.1 口~底 残	①細・白色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部捩り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で。	
9	土師器 坏	+9	口(15.8) 高一 底一 口~底 残	①細・白色微紅少量 ②酸化・普通 ③黒褐色	外面 口縁部横撫で、体部~底部捩り。 内面 口縁部横撫で、体部撫で後、暗文。	油煙付着か？
10	土師器 坏	-2	口(14.0) 高一 底一 口~底 残	①細・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部横捩り。 内面 口縁部~体部横撫で後、暗文。	
11	鉄製品 鏃	+23	残存長6.6cm		鏃の下半部片で、上半は田時欠損。鏃基部と基部間に区が残っている。横断面形は、鏃頭・茎ともに隅丸方形を呈する。鏃化は、不定方向である。	

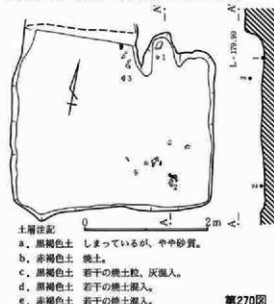
第129号住居跡

位置 2区00C06 写真 PL.56

形状 竈の左壁は不明瞭である。やや不整形ではあるが、隅丸長方形を呈す。各壁はほぼ垂直に立ち上がる。

面積 8.81m² 方位 N-13°-E

埋没土 比較的しまりが良く、粘性が強いローム分の混入が多く見られる褐色土が主体である。

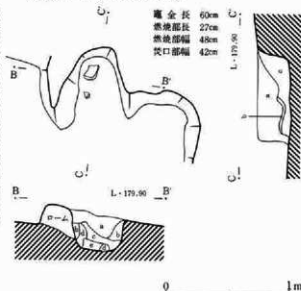


床面 掘り込んだ粘土層を地床としており、凹凸は少ない。

竈 北壁の中央やや東寄りに作られている。両袖はロームを多く含む土で作られており、燃焼部の壁外への掘り出しは短い。内面はかなり強く火を受けた状況が観察された。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

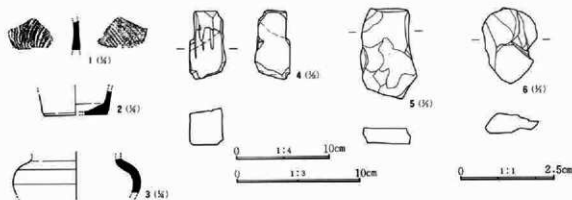


第270図 第129号住居跡実測図

壁周溝 確認されなかった。

遺物 須恵器の環・甕類の破片がわずかながら出土している。その他磁石などが見られた。特に、竈周辺と南東隅に集中して出土した。

備考 東斜面部に検出された住居であり、黒色土中に掘り込まれていた。時期は8世紀後半と考えられる。(小野)



第271図 第129号住居跡出土遺物実測図

第129号住居跡出土遺物観察表 (PL.154)

図番号	遺物 図形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 甕	竈内	胴部片 (縦3.0 横4.5)	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 格子叩き。 内面 背舟叩き。	
2	須恵器 小型壺	+10	口一高一 底(6.8) 底部 片	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 底部回転整形。	
3	須恵器 短頸壺	+18	口一 胴(13.5) 胴部片	①細・黒色微灰少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
4	磁石	埋設土	材質 牛伏砂岩。長さ5.4cm 幅3.0cm 厚さ2.5cm 残存状態 左平面側にならずに頭か、刀傷。主体は、尖錐状物の凸出がなく、金風。			
5	チップ	埋設土	材質 滑石。長さ2.4cm 幅1.4cm 厚さ0.4cm 重さ2g。図上方側のみ。刃物による削り調整。他は、すべて原石面。			
6	チップ	埋設土	材質 滑石。長さ1.9cm 幅1.4cm 厚さ0.5cm 重さ1.6g。1箇所、刃傷あるほかは、すべて、原石面。			

第131号住居跡

位置 1区47C04 写真 PL.56

形状 長辺2.57m 短辺2.46mでわずかに隅丸長方形を呈す。

面積 6.46㎡ 方位 N-11°-E

埋設土 粘性を持つブロックおよび炭化物の粒子が目立つ。

床面 掘り込んだ粘性土をそのまま地床としている。中央に粘土を含む円形の落ち込みが見られた。また、焼土化した凝灰岩質の礫も見られる。全体としてやや凹凸が見られる。床面直上、部分的に炭化材の出土が見られる。

竈 北壁のほぼ中央に作られている。両袖に石を据

えている。焚口部幅に比べ住居外への掘り出しは短い。燃焼部内より土師器甕の上半部が伏せられた状態で出土している。焚口部前面に天井石と思われる長さ40cm程の川原石が落ちた状態で検出されている。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 北西の隅に検出された。ほぼ円形で径は約50cm 深さは20cmを測る。中から土師器甕の上半部が出土している。

壁周溝 西壁下に見られた。幅は20cm程 深さは10cmを測るが、北壁・貯蔵穴寄りには不明瞭となる。

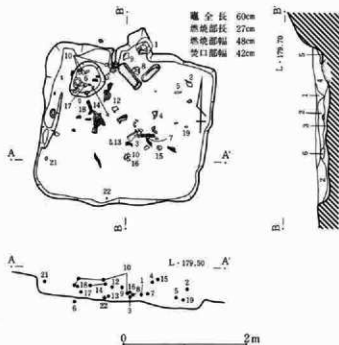
遺物 埋設土の上層より土師器の甕・環類が多く出土している。また、滑石製の有孔円板やチップ、瑪

第3章 検出された遺構と遺物

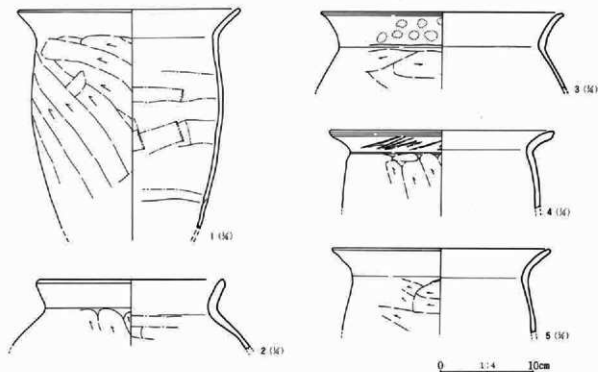
環の原石、滑石製模造品を製作するときの工具の可能性のある鉄製品も出土している。

備考 当初プランがはっきりと掴めず、また上層部より多くの土器の出土があった。それらをほぼ掘りあげた段階で住居の掘り込み範囲を確認した。上層

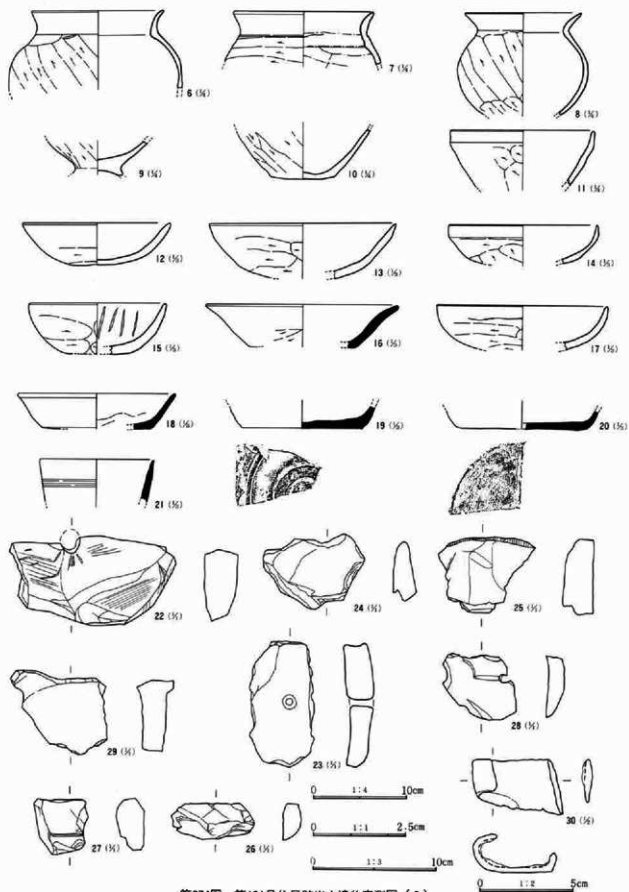
部より出土した土器類は投げ入れられた状況が伺われた。滑石製模造品およびチップ、工具らしい鉄製品等の出土から本住居跡付近に製作した場所があるものと思われる。時期は出土遺物から見て8世紀後半と考えられる。(小野)



第272図 第131号住居跡実測図



第273図 第131号住居跡出土遺物実測図(1)



第274図 第131号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

第131号住居跡出土土物観察表 (PL.154, 155)

図号	種類 形状	出土位置	口径 高さ 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	竈内	口径23.7 高一 底一 口~胴 ㄥ	①細・黒色微紅少量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
2	土師器 壺	+21	口径(20.6) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
3	土師器 壺	+5	口径(25.5) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部横削り。 内面 胴部旋撫で。	口縁部に微細な凹 痕あり。
4	土師器 壺	+33	口径(24.0) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①普通・白色微紅量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
5	土師器 壺	+5	口径(22.8) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
6	土師器 壺	-12	口径(14.6) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
7	土師器 小壺 型	+16	口径(15.0) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①普通・灰色微紅量 ② 酸化・普通 ③暗赤褐色	外面 口縁部横撫で、胴部 横削り。 内面 口縁部横撫で、胴部 旋撫で。	内面 黒色 処理。
8	土師器 壺	竈	口径(12.2) 高一 底一 口~胴 ㄥ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 胴部斜め旋削り。 内面 胴部旋撫で。	
9	土師器 台付 壺	竈内	口径一 高一 底4.8 底~台部 ㄥ	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	外面 胴底部斜め旋削り。 内面 胴底部旋撫で。	
10	土師器 壺	+9	口径一 高一 底(7.0) 胴~底 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 胴下半部斜め旋削り。 内面 胴下半部旋撫で。	
11	土師器 鉢	埋没土	口径(15.1) 高一 底一 口~体 ㄥ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部斜め旋削り。 内面 体部旋撫で。	
12	土師器 杯	+22	口径(11.8) 高一 底一 口~底 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部旋削り。 内面 体部旋撫で。	
13	土師器 杯	+8	口径(15.0) 高一 底一 口~底 ㄥ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部横削り。 内面 体部旋撫で。	
14	土師器 杯	+26	口径(12.0) 高一 底一 口~体 ㄥ	①細・黒色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で、外面 体部旋削り。 内面 体部旋撫で。	
15	土師器 杯	+38	口径(10.9) 高一 底一 口~底 ㄥ	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③赤褐色	外面 口縁部横撫で、体部~ 底部横削り。 内面 口縁部~体部横撫で、 底部旋撫で。	内面に暗文あり。
16	須恵器 杯	+13	口径(15.3) 高一 底一 口~底 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形。 体部~底部旋削り。	
17	土師器 杯	柱穴中	口径(13.4) 高一 底一 口~体 ㄥ	①細・黒色微紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、体部 横削り。内面 口 縁部~体部上半は横撫で、 体部下半は旋撫で。	
18	須恵器 杯	+17	口径(12.4) 高一 底一 口~底 ㄥ	①細・黒色微紅少量 ② 還元・軟 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。 底部旋削り。	
19	須恵器 杯	+5	口径一 高一 底(9.5) 底部 ㄥ	①細・黒色微紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回 転)。底部は回転 旋削り。削り出し高台。	
20	須恵器 杯	埋没土	口径一 高一 底(10.5) 底部 ㄥ	①細・灰色微紅少量 ② 還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回 転)。底部は回転 旋削り。	
21	須恵器 杯	-6	口径(12.0) 高一 底一 口縁部片	①細・白色微紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回 転)。	
22	有孔円 板	+9	材質 滑石。長さ4.2cm 幅2.3cm 厚さ0.8cm	孔径0.5cm 重さ13.3g。約半分は割れている。上・下平面、右側 面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向から。大型の有孔円板である。		
23	有孔円 板	埋没土	材質 滑石。長さ3.2cm 幅1.6cm 厚さ0.6cm	孔径0.2cm 重さ6.3g。裏面に若干の削り痕があるほかは、平面、 側面とも原石面。穿孔は、一方より。		
24	有孔円 板破片	埋没土	材質 滑石。長さ2.7cm 幅1.8cm 厚さ0.6cm	重さ3.3g。上平面に若干の削り痕があるほかは、すべて、原石面、 穿孔は、一方から。		
25	有孔円 板破片	埋没土	材質 滑石。長さ2.4cm 幅2.0cm 厚さ0.8cm	重さ3.8g。上・下平面、側面を刃物によって削り調整している。 割れているため、明確でないが、側面の弧の状態でより有孔円板と判断した。穿孔部分は、なし。		
26	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ2.2cm 幅0.9cm 厚さ0.5cm	重さ1.4g。すべて、原石面。割断片の可能性が高い。		
27	チップ	埋没土	材質 滑石。長さ1.5cm 幅1.4cm 厚さ0.7cm	重さ2g。上面と右側面は、刃物による削り調整をしている。割 断したものと思われるが、もとの製品は、不明。		
28	有孔円 板	埋没土	材質 滑石。長さ1.9cm 幅1.7cm 厚さ0.4cm	孔径0.2cm 重さ2g。すべてが原石面。割断したものと思われる。 穿孔は、一方より行なわれている。		
29	磁器 破片	埋没土	材質 瑪瑙。長さ2.4cm 幅2.0cm 厚さ0.9cm	重さ5.2g。板状に定刻りされている。何を意図したのかは、不明。		
30	鉄製品 鎌	埋没土	残存長4.5cm	中腰鎌の転用工具で、図のように曲げられている。刃部の鋸出しは、裏側先端部にわずか もうけられ、表側は、鎌刃端での砥出し面がみられる。錆化は少なく、良鉄と思われる。		

第133号住居跡

位置 1区44C01 写真 PL.56

形状 東側半分は削られており、正確な形は不明。

面積 現状で7.98㎡。 方位 N-52°-W

埋没土 白色粘土ブロックを多く含む土である。

床面 西側部にわずかに認められたに過ぎない。地山白色粘土面を床面としている。

竈 西壁やや南寄りに作られている。火床面・側面

共に良く焼土化している。中より土師器甕、須恵器蓋の破片が若干出土している。

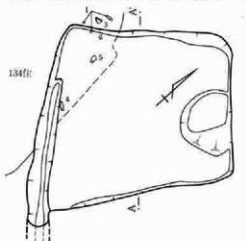
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 竈内・埋没土中より甕・蓋・坏の破片が出土。

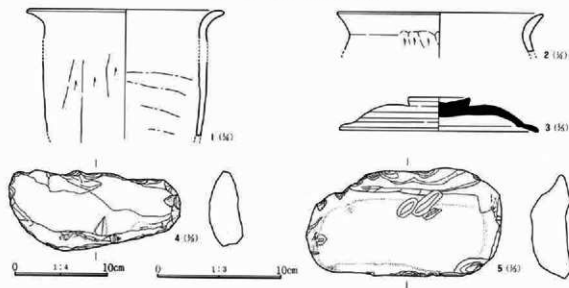
備考 第134号住居跡が北西隅に重複して、本住居跡を切る。時期は8世紀後半と考えられる。(小野)



土層注記

1. 黒色土 A 軽石混入。攪乱層。
2. 黒色土 B 軽石。粘土粒少量混入。
3. 黒褐色土 若干の焼土、粘土粒混入。
4. 黒褐色土 焼土粒、白色粘土ブロック混入。

第275図 第133号住居跡実測図



第276図 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表 (PL.155)

図号	器種 器形	出土位置	口径	高さ	底径	高径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	住居外 +7	口(21.4) —	高 —	底 —	高径	①普通・灰色灰少量 酸化・普通 ③暗赤褐色	内外共口縁部無縁で。外面 胴部縦溝あり。 内面 胴部無縁で。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
2	土師器 壺	+16	口(21.7)	①青濁・灰色灰少量 ② 酸化・青濁 ③鈍い橙色	内外共口縁部横溝で、外面 頸部斜の摺削り。	
3	須恵器 坏 蓋	住居外 +10	口(15.8) 高(2.6) 胸～幅 写	①細・黒色微灰少量 ② 還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。	表面に墨のよう なものの付着。
4	敲打石	-49	材質 雲母石英片岩。長さ13.5cm 幅6.3cm 厚さ2.5cm 重さ310g。側面全体に敲打したときの剝離痕がある。			
5	敲打石	-46	材質 緑色片岩。長さ15.4cm 幅8.6cm 厚さ2.8cm 重さ690g。側面全体に敲打したときの剝離痕があるが、特に上方側面は、大きく剝離している。			

第134号住居跡

位置 1区45C02

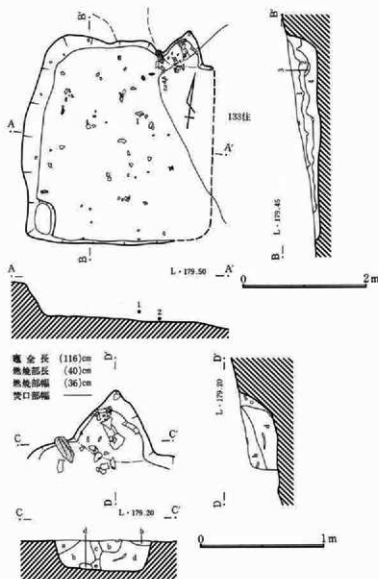
写真 PL.56

形状 現状は一辺3.2mのほぼ正方形を呈す。北および西壁はかなり良好に残り、ほぼ垂直に立ち上がる。北側部は他の住居に切られており、不明。

面積 10.16㎡ 方位 N-15°-W

埋没土 上層はやや砂質で堅くしまる。多くの土器片が混入している。下層は粘土ブロックを多く含む粘質土である。

床面 地山の粘質土を踏みしめて床面としており、



土層注記

1. 黒褐色土 細粒、緻密でかなり粘質、堅くしまっている。土器片含む。
2. 暗褐色土 1と類似。黄白色粘質土の小塊混入。
3. 黒色土 細粒、かなり粘質。締り強い。
4. 淡黄色土 細粒、粘質。黄白色粘土小塊多量に混入。

土層注記

- a. 黒色土 B層石混入(溝の一部)。
- b. 黒褐色土 焼土、粘土粒多量混入。よくしまっている土。
- c. 黒褐色土 粘質。若干の粘土粒混入。
- d. 赤褐色土 bと類似。焼土粒多量。
- e. 黒褐色土 cと類似。粘性のロームブロック若干混入。

第277図 第134号住居跡実測図

全体的には比較的平坦である。

竈 北壁の東寄りに作られている。第133号住居跡に一部を切られている。燃焼部より多量の焼土に混じり多くの土器片が出土している。

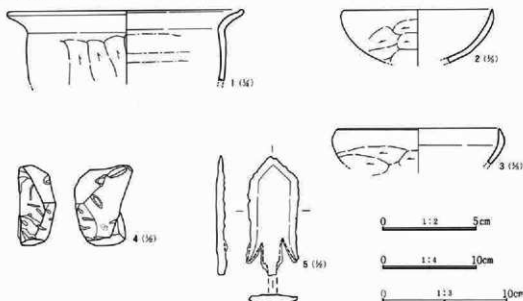
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 竈内・埋設土中より土師器壺・坏の破片が出土している。

備考 第133号住居跡が重複している。時期は8世紀後半と思われる。(小野)



第278図 第134号住居跡出土遺物実測図

第134号住居跡出土遺物観察表 (PL.155)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+16	口(25.0) 高一 底一 口~胴 長	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部縦筋削り。 内面 胴部直撫で。	
2	土師器 坏	+1	口(12.0) 高一 底一 口~底 長	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦筋削り。 内面 体部直撫で。	
3	土師器 坏	埋設土	口(13.0) 高一 底一 口~体 長	①細・白色微灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部縦筋削り。 内面 体部直撫で。	
4	紡錘車 未成品	埋設土	材質 かんらん岩。長軸4.1cm 短軸2.7cm 厚さ1.9cm 重さ30g。形削りされた状態で、右半分が欠けてしまっ たらしい。形状より、紡錘車未成品か。			
5	鉄製品 鏃	埋設土	残存長6.3cm		有柄平根鏃で、大根鏃。茎側は、調査時欠損。貫被は短く、茎との間に区がもうけられる。 錆化は顕著でなく、良鉄を思わせる。	

第5節 平安時代の住居跡と遺物

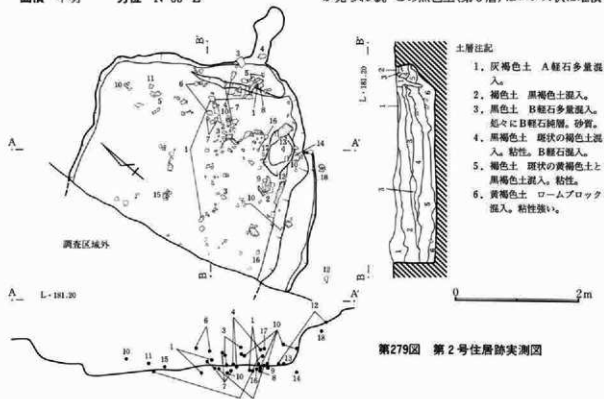
第2号住居跡

位置 5区15C08 写真 PL.57

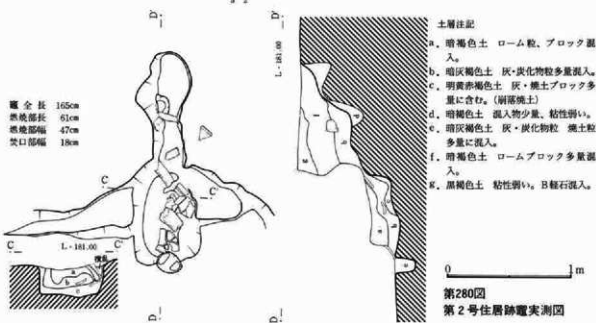
形状 南壁が道路下に入り、未掘のため明確ではないが、南北に長い長方形と推定。(東西長は3.52m)

面積 不明 方位 N-66°-E

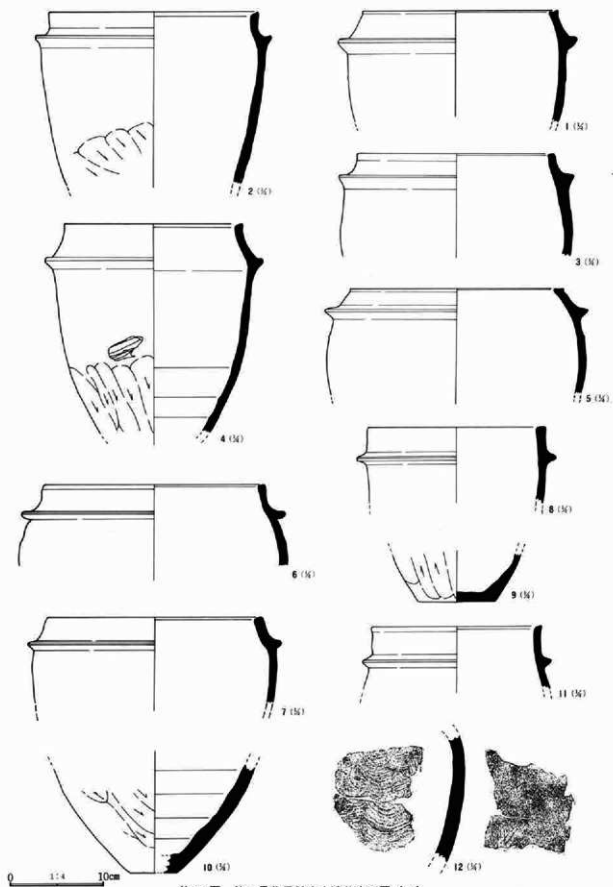
埋没土 凡そ6層の褐色土や黒色土などにより埋没。各層の厚さは10~20cmで縞状を呈し、壁際から徐々に堆積した様相を示している。これらの層の中で床から50~60cm上の黒色土中に浅間山B軽石の純層が見られる。この黒色土(第3層)はレンズ状に堆積



第279図 第2号住居跡実測図



第280図
第2号住居跡電気実測図



第281图 第2号住居跡出土遺物実測图(1)

第3章 検出された遺構と遺物

しており、これによって住居の年代は限定される。
床面 確認面から凡そ60cm掘り込み、水平かつ平坦に整地して床面を造っている。下部に第29号住居跡が存在する関係で客土しているかどうかは明らかでない。床面は竈前から住居中央にかけてかなり広範囲に踏み固めてできた堅い面が存在した。また、竈の燃焼部の両側と東壁の外側に幅30~50cmの構状の中段が存在した。

竈 北壁の中央、やや東側に黄色粘土と角礫を用いて壁外に造り出されていた。焚口から燃焼部奥にかけてはかなり大きな掘りかたが掘られ、壁面に角礫

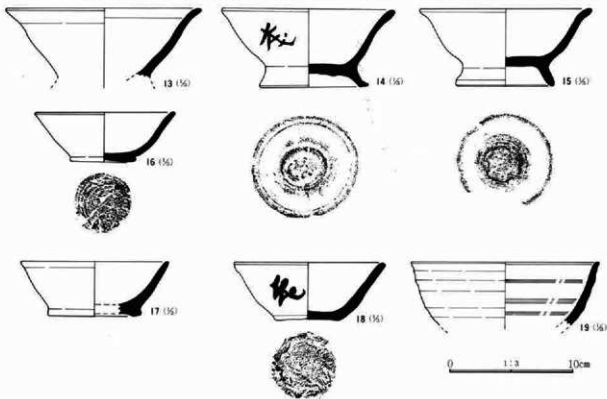
や羽蓋片が貼り付けられ、これを固定するように粘土が付けられていた。煙道は燃焼部奥から約60cm外側に繞って立ち上がっている。

柱穴・壁周溝 存在しなかった。

貯蔵穴 竈の斜め右前に楕円形で浅い播鉢状のものが存在した。規模は長軸144cm短軸80cm、深さ80cm。

遺物 羽釜、須恵器大甕・埴、土師器埴、墨書土器が竈前から東壁寄りにかけて多く出土した。

備考 本住居跡は前述の如く第29号住居跡と重複これを切っている。本住居跡の年代は出土遺物の様相、浅間山B軽石のあり方から10世紀後半。(小林)

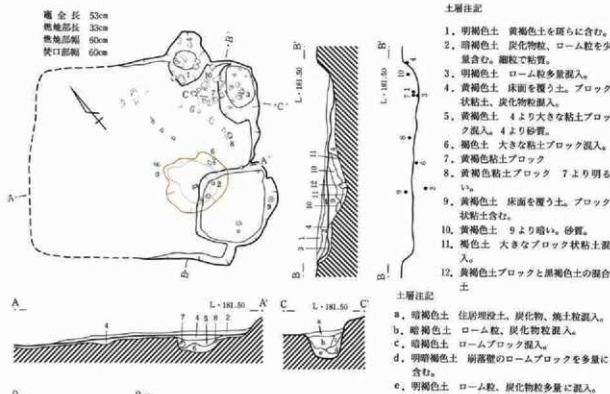


第282図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡出土遺物観察表 (PL.156、157)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽釜	床直	□(20.9) 高一 底一 □~割片	①普通・黒色微塵少量 ②酸化・普通 ③浅黄色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は内傾する。踵は貼り付け。	一部電材として転用。
2	須恵器 羽釜	+5	□(22.4) 高一 底一 □~割片	①普通・灰色微塵少量 ②酸化・普通 ③黒褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は直立。踵は貼り付け、胴部下半・底部は削り。	
3	須恵器 羽釜	+12	□(21.0) 高一 底一 □~割片	①普通・白色灰色微塵少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、内傾する。踵は貼り付け。	
4	須恵器 羽釜	竈内	□(18.8) 高一 底一 □~割片	①普通・灰色微塵少量 ②還元・普通 ③灰黄色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、内傾。踵は貼り付け、胴部下半・底部は削り。	電材として転用。
5	須恵器 羽釜	竈内	□(22.4) 高一 底一 □~割片	①普通・灰色微塵少量 ②酸化・普通 ③浅黄色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、内傾する。踵は貼り付け。	電材として転用。

種別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
6	須恵器 羽釜	+35	口(23.5) 高一 底一 口縁部 残	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、 内傾する。踵は貼り付け。	
7	須恵器 羽釜	+2	口(23.1) 高一 底一 口縁部 残	①普通・白色灰色減少量 ② 酸化・普通 ③黒褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、 内傾する。踵は貼り付け。	
8	須恵器 羽釜	境内	口(19.0) 高一 底一 口縁部 残	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、 ほぼ直立する。踵は貼り付け。	電材として転 用。
9	須恵器 羽釜	+1	口一 高一 底(8.0) 体~底 残	①普通・灰色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部下半・ 底部は寛削り。	
10	須恵器 羽釜	+1	口一 高一 底(5.0) 胴~底 残	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部下半・ 底部は寛削り。	
11	須恵器 羽釜	+17	口(18.0) 高一 底一 口縁部 残	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、 ほぼ直立する。踵は貼り付け。	
12	須恵器 大瓶	+3	胴部片 縦10.2 横8.5	①細・白色減少量 ②還元 元・硬 ③赤灰色	外面 斜め格子叩き。 内面 青黄皮叩き。	
13	須恵器 埴	+5	口(13.7) 高一 底一 口~底 残	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。高台欠損。	
14	須恵器 埴	-9	口13.9 高16.3 底8.7 口~台 残	①細・白色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	墨書あり「度」。
15	須恵器 埴	+12	口13.8 高6.1 底7.8 口~台 残	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
16	須恵器 坏	-5	口11.2 高3.8 底5.0 口~底 残	①細・灰色減少量 ②還元 元・普通 ③黒色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
17	須恵器 坏	+32	口(11.8) 高(4.3) 口~台 残	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
18	須恵器 坏	住居外 +58	口12.1 高4.4 底5.2 ほぼ完形	①細・白色灰色減少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	墨書あり「深」。
19	須恵器 埴	埋没土	口15.0 高一 底一 口~体 残	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	



第283図 第4号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第4号住居跡

位置 5区08C02 写真 PL.58

形状 長辺3.62m、短辺3.18mの長方形。西半分の壁は削り取られているため、壁高は0~18cm。

面積 11.43㎡ 方位 N-50°-E

埋没土 3層あるが浅いため埋まり方は不明である。

床面 確認のローム層から5~20cm掘り込み、ほぼ平坦に整地しているが客土はない。電前から住居中央にかけては壁面が見られた。また、貯蔵穴の南側には径70cm、深さ25cmの円筒状の床下土坑が検出

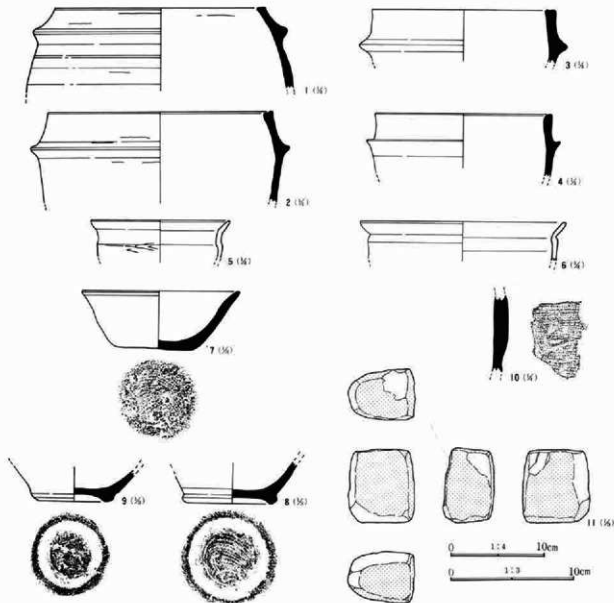
された。内部から土器片が数点出土した。

竈 北壁の東寄りの位置に壁外に造り出されていたが、粘土は特別使わなかったものとみられる。燃焼部はかなり強く焼けており、焼土が多く残っていた。柱穴・壁周溝 存在しなかった。

貯蔵穴 北東隅角部に縦98cm横62cm、深さ74cmの長方形のものが検出された。

遺物 羽釜、土師器長壺、須恵器埴、砥石が出土。

備考 東壁は後世の長方形の掘り込みによってかなり削られていた。本住居跡の年代は10世紀前半であろう。(小林)



第284図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

品目	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽 釜	+1	口(22.2) 高一 底一 口~羽 欠	①胎土・白色灰少量 ②還元・軟 ③鈍い褐色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、内傾する。罫は貼り付け。	
2	須恵器 羽 釜	-23	口(24.0) 高一 底一 口~羽 破片	①普通・白色灰少量 ②還元・軟 ③暗灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、内傾する。罫は貼り付け。	火をうけて、暗灰色になっている。
3	須恵器 羽 釜	貯蔵穴中 -6	口(19.6) 高一 底一 口縁部 破片	①普通・白色灰少量 ②還元・軟 ③鈍い褐色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、ほぼ直立する。罫は貼り付け。	
4	須恵器 羽 釜	竈内	口(19.0) 高一 底一 口縁部 破片	①普通・白色灰少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。口縁部は、ほぼ直立する。罫は貼り付け。	
5	土師器 壺	埋没土 -1	口(14.8) 高一 底一 口縁部 破片欠	①細・黒色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 頸部斜め縦磨り。	
6	土師器 壺	-4	口(22.0) 高一 底一 口縁部 破片	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横撫で。	
7	須恵器 坏	+1	口12.1 高4.5 底6.0 宛形	①普通・灰色灰少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
8	須恵器 埴 壇	+5	口一 高一 台6.5 体~台 欠	①普通・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
9	須恵器 埴 壇	+9	口一 高一 台5.5 体~台 欠	①普通・白色灰少量 ②還元・硬 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
10	須恵器 大 埴 壇	+11	胴部 破片(縦8.0 横6.0)	①粗・白色灰少量 ②還元・硬 ③鈍い赤褐色	組作り後、ロクロ整形。外面 格子目叩き。内面 撫で。	
11	磁 石	埋没土	材質 角閃石安山岩(ニッポ岩群)。長さ5.8cm		幅5.3cm 厚さ3.9cm 重さ100g。転石の利用。左平面の左側に原石面が残るほか、方形ぎみに成形され、それが磁石利用の結果であるのかわ不明。成形加工は、金気。	

第7号住居跡

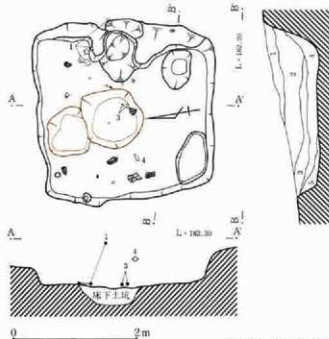
位置 5区05C02 写真 PL.58

形状 東西2.84m、南北2.24mを測る正方形。壁は残りが比較的良好で、壁高23~56cmを測る。

面積 7.43m² 方位 N-106°E

埋没土 凡そ5層の黒褐色土や褐色土によって埋没しているが、自然埋没の様相を示している。

床面 確認面の褐色土層からローム層まで25~60cm



土層注記

1. 黒褐色土 よごれた暗褐色土少量混入。粘性弱い。
2. 暗褐色土 褐色土ブロック多量混入。ローム粒も少量混入。
3. 暗褐色土 ローム粒多量混入。全体的に黄色系。
4. 暗褐色土 3よりさらに多量にローム粒混入。
5. 暗褐色土 壁崩落のロームブロック多量混入。

第285図 第7号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

掘り込み、ローム層をそのまま水平かつ平坦に整地して床面としている。従って客土はなく、特に堅い面もなかった。住居中央に2個の床下土坑が検出された。中央の径は1m、深さ30cm。

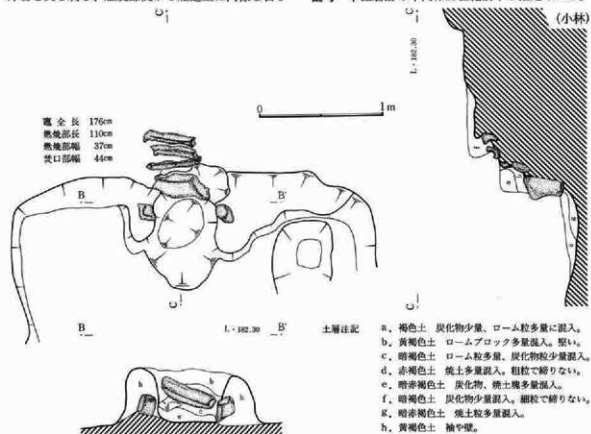
竈 東壁の中央に石と黄色粘土を用いて壁外に造り出されていた。即ち、焚口の南側に棒状の雲母石英片岩を突き刺し、燃焼部奥から煙道上に同様な石5

個を並べている。燃焼部はあまり焼けていなかった。**柱穴・壁周溝** 存在しなかった。

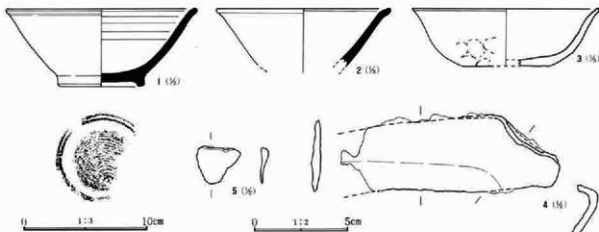
貯蔵穴 竈の右脇に長軸60cm短軸40cm、深さ28cmの楕円形で楯鉢状のものが存在した。

遺物 土師器長甕・坏、須恵器埴、鉄製鏝が住居全体に散らばって出土したが、極めて少量である。

備考 本住居跡の年代は10世紀前半と推定される。



第286図 第7号住居跡竈実測図



第287図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

種別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 碗	+1	口(15.4) 高6.1 底7.0 口~台 尾	①細・黒色微紅少量 ② 酸化・普通 ③黄灰色	ロクロ整形(右回転)。	
2	須恵器 碗	埋没土	口(14.0) 高— 底— 口~体 尾	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
3	土師器 杯	+4	口(15.0) 高(4.5) 底— 口~底 尾	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部横撫で。外面 体部は指頭正直、 底部は荒削り。内面 体部撫で。	
4	鏝	+45	残存長11.6cm	大型鏝で右端に折り返しの耳あり。左側欠損は調査時。柄部、わずかにあり。刃区から耳の折り返しまでの長さは、3.3cm。(推定 柄部2.8cm以下)。砥減は少ない。		
5	不明	埋没土	最大長1.9cm	硝化の方向性は不定方向で、精緻を思わせる。図天側のみには旧輪部が残り、他は裏面と共に、調査時欠損。製作年代は不詳。		

第8号住居跡

位置 4区49B49 写真 PL.59

形状 長辺3.96m、短辺3.04mのややいびつな南北に長い長方形である。残存壁高は20~33cm。

面積 11.96㎡ 方位 N-102°-E

埋没土 凡そ5層の黒色土、黒褐色土などによって埋没している。壁際から徐々に自然に堆積していった様相を呈している。

床面 確認面からローム層まで深さ30~50cm掘り込み、凹凸のある掘りかた底面上に厚さ10~20cm客土して水平かつ平坦に整地して床面を作っている。床は全体的に柔らかであった。竈前には径90cm、深さ

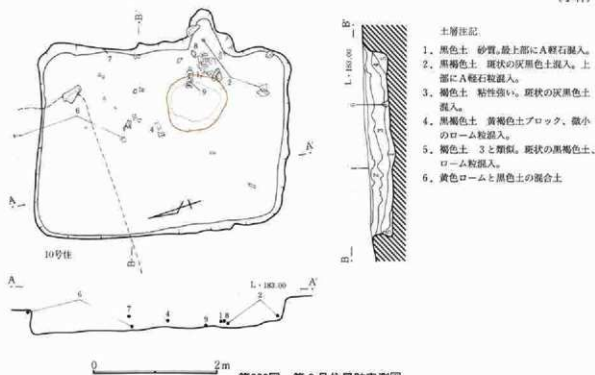
26cmの円形の床下土坑が存在した。

竈 東壁の南寄りの位置に黄色粘土を用いて壁外に造り出されていた。燃焼部には火床上に長斐片が多く出土し、やや上位の埋没土中に角礫が3個存在した。燃焼部はあまり焼けていなかった。この下部には長軸75cm短軸57cm、深さ10cmの楕円形の窪みが存在した。埋土中より斐片が数点まとまって出土した。柱穴・貯蔵穴・壁溝溝 存在しなかった。

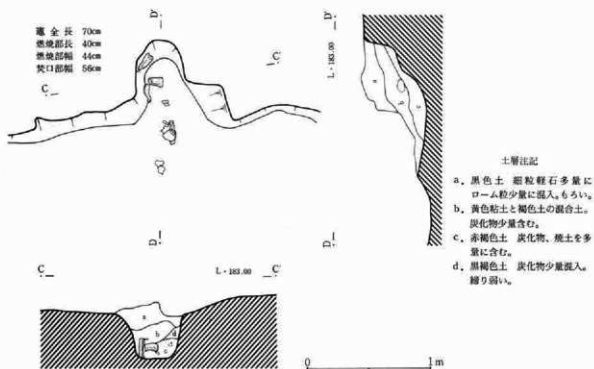
遺物 土師器長甕、須恵器羽釜・甕・埴・皿・蓋・灰釉瓶等が竈前から住居左側にかけて少量出土した。

備考 本住居跡は第10号住居跡と重複するが、これに先行する。年代は10世紀前半と考えられる。

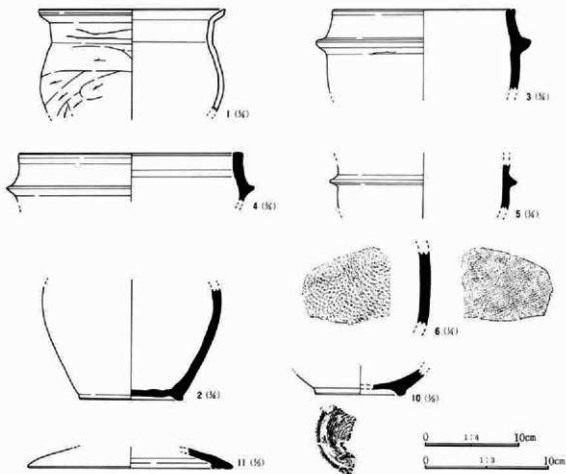
(小林)



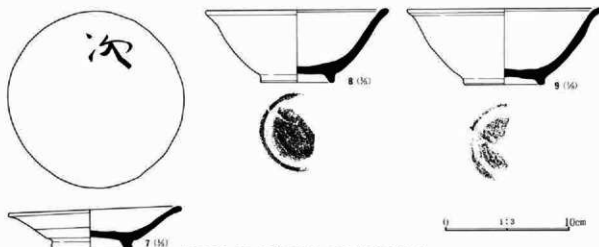
第3章 検出された遺構と遺物



第289図 第8号住居跡竈実測図



第290図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	底径 底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	+10	口(20.0) 高一 底一 口~胴径		①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③暗褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は磨削 り、口縁部は横敷で、内面胴部は磨削で。	
2	須恵器 甕	竈内	口一 高一 底(11.0) 胴~底径		①細・白色紅少量 ②還元 元・硬 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。	
3	須恵器 羽 釜	埋没土	口(19.1) 高一 底一 口~胴部径		①粗・白色紅少量 ②酸 化・軟 ③明オリープ色	口縁部は、ほぼ直立する。紐作り後、ロクロ 整形(右回転)。踵は貼り付け。	
4	須恵器 羽 釜	+12	口(24.0) 高一 底一 口縁部径		①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③灰白色	口縁部は、ほぼ直立する。紐作り後、ロクロ 整形(右回転)。踵は貼り付け。	
5	須恵器 羽 釜	埋没土	口 底径 高 破片		①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	口縁部は、ほぼ直立する。紐作り後、ロクロ 整形(右回転)。踵は貼り付け。	
6	須恵器 壺	+6	胴部径 (縦8.5 横9.6)		①普通・黒色紅少量 ②還元 元・焼 ③明オリープ灰色	外面 斜め格子叩き。 内面 青黄焼叩き。	
7	須恵器 皿	+15	口13.8 高さ3.0 底6.3 完形		①細・白色紅少量 ②還元 元・軟 ③残黄色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	墨書「次」。
8	須恵器 甕	竈内	口(14.6) 高(5.7) 底(5.9)口~台径		①細・灰色紅少量 ②還元 元・普通 ③灰褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
9	須恵器 甕	+4	口(15.4) 高(6.0) 底(6.4) 口~台径		①細・灰色紅少量 ②還元 元・硬 ③灰褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
10	須恵器 甕	埋没土	口一 高一 底(7.2) 体~台径		①細・白色微紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
11	須恵器 坏 蓋	埋没土	口径(16.4) 底~体径		①細・夾雑物なし ②還元 元・硬 ③灰オリープ色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	置れ込みか。

第18号住居跡

位置 4区31C02 写真 PL.59

形状 長辺3.36m短辺2.96mのほぼ正方形を呈する。

面積 9.74m² 方位 N-50°-E埋没土 本住居跡全体の残存状況が悪く、暗褐色土
がうっすらと確認されただけである。床面 ローム面がそのまま床面に使用されており、
堅く踏みしめられている。掘りかた面は検出されな
かった。

竈 東壁のかなり南によった位置にあり、袖の一部

と燃焼部から焚口部にかけての灰層が確認された。

貯蔵穴 竈の右側に位置するため、東南角部分がや
や張り出す。形状は楕円形をなし、開口部で50×30
cm、深さ28cmを測る規模である。

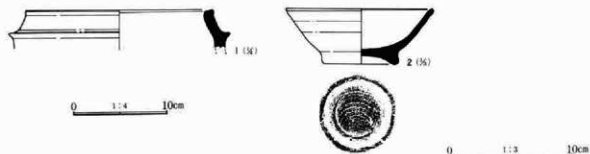
柱穴 確認されなかった。

遺物 貯蔵穴の南に、竈の構築材に使用されたと考
えられる石がまとまって出土した。出土した土器は
少量である。備考 本住居跡の年代観を出土遺物より10世紀前半
としたい。(谷藤)

第3章 検出された遺構と遺物



第292図 第18号住居跡実測図



第293図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

図号	遺物 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽釜	+4	口(29.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色鉄少量 ② 還元・軟 ③明赤褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	
2	須恵器 甕	+4	口(11.7) 高4.3 底5.6 口~高台 片	①粗・黒色鉄少量 ②還 元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	

第20号住居跡

位置 4区42C09

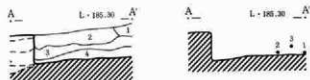
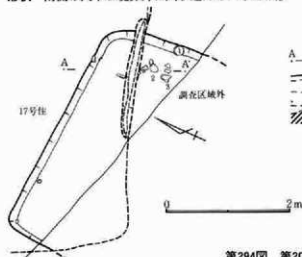
写真 PL.59

形状 南側の大半が境界外に入り込んでいるため形

状は不明。東西長3.66m。

面積 不明 方位 N-80°-E

埋没土 凡そ3層の褐色土、黒褐色土などによって



土層注記

1. 灰黒褐色土 全体に斑状の灰褐色土混入。
2. 褐色土 斑状の黄褐色土混入。
3. 灰褐色 2に類似。斑状の黄褐色土、ローム粒混入。
4. 黒褐色土 粘性あり。ローム小ブロック混入。

第294図 第20号住居跡実測図

埋まっているが、自然堆積とみられる。

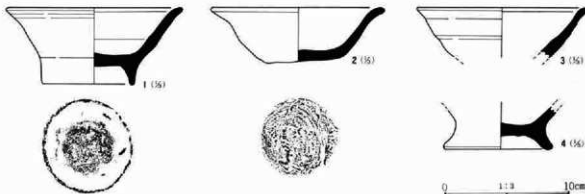
床面 確認面からローム層まで50cmほど掘り込み、水平かつ平坦に整地されていた。北壁側が第17号住居跡の上に乗っているため、この部分の床下の構造ははっきりしないが他では客土はない。

竈 調査区外に存在すると思われるが明らかでない。

柱穴・壁周溝 存在しなかった。

遺物 土師器長甕、須恵器埴輪・坏等が東壁寄りのところにとまどまって出土したが、量は少ない。

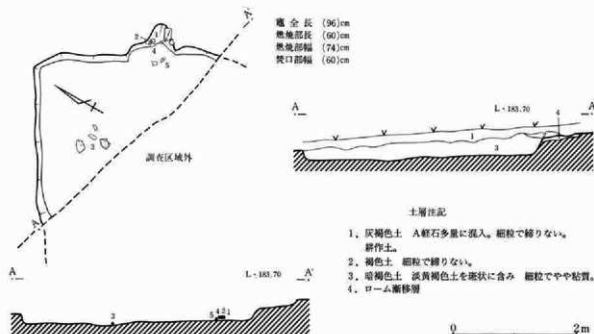
備考 本住居跡は10世紀前半と推定される。(小林)



第295図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 埴輪	+2	□13.9 高さ6.0 底7.1 完形	①普通・白色少量 還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。回転磨削後、高台を付ける。	
2	須恵器 坏	+5	□13.6 高さ4.2 底5.5 ほぼ完形	①普通・白色少量 還元・軟 ③灰黄色	ロクロ整形後、回転未切り(右)。	
3	須恵器 埴輪	+6	□(13.4) 高一 底一 口~体 1/2	①普通・白色少量 還元・軟 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
4	須恵器 埴輪	埋没土	□一 高一 底(8.5) 高台部 1/2	①普通・黒色少量 還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	



第296図 第26号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第26号住居跡

位置 5区02C06 写真 PL.59

形状 長方形と推定されるが大半が調査区外になるため明らかでない。従って規模も不明である。

面積 不明 方位 N-66°-E

埋没土 耕作土(第1層)の下は褐色土の1層しか確認されていないので、埋まり方は明らかでない。

床面 確認面(ローム層)からは5~10cm掘り込まれ水平かつ平坦に整地されているが、客土した形跡は

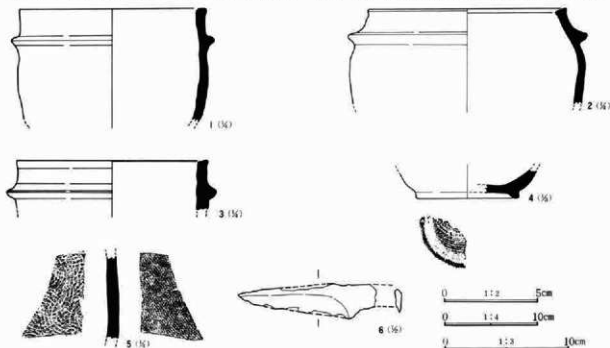
ない。床面は全体的に柔らかであった。

竈 東壁に黄白色粘土を用いて壁外に造り出されていた。石が燃焼部右壁上に2個存在したが何に使用されたかは明らかでない。燃焼部は強く焼けていた。柱穴・壁溝 存在しなかった。

貯蔵穴 調査が一部のため不明である。

遺物 須恵器羽釜・甕・埴、鉄製刀子が竈前を中心にごく少量出土した。

備考 本住居跡は10世紀後半と推定される。(小林)



第297図 第26号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観表 (PL.158)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	底径 底形状	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	竈	口(20.0) 高一 底一 口~胴 片		①普通・白色軟微量 還元・軟 ③灰黄色	口縁部は、ほぼ直立する。紐作り後、ロクロ 整形(右回転)。罫は貼り付け。	
2	須恵器 羽釜	竈	口(21.2) 高一 底一 口~体 片		①普通・白色軟微量 ② 還元・軟 ③明黄褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	
3	須恵器 羽釜	+6	口(20.2) 高一 底一 口縁部 片		①普通・白色軟少量 ② 還元・軟 ③黒色	ロクロ整形。	
4	須恵器 埴	竈	底部 片		①普通・白色軟少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。 付高台。	
5	須恵器 甕	竈	胴部 破片 (縦8.5横9.5)		①普通・黒色軟微量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。外面 格子叩き。 内面 青陶状の叩き目。	
6	刀子	埋没土	残存長7.3cm			平造りで刃部に顕著な砥成が認められる。両端部共、田畑のまま。区は、刃側にあり、その込みは、丸くあまい。鞘用刀子か。穀類が目立つ跡化。	

第29号住居跡

位置 5区15C09 写真 PL.57

形状 東西長3.03mを測る長方形と推定されるが、

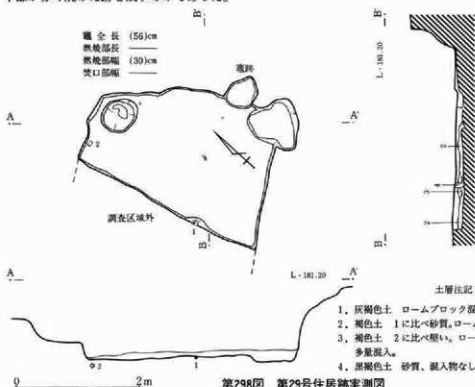
大半が道路下に入り込むため明確ではない。

面積 不明 方位 N-60°-E

埋没土 凡そ3層の褐色土や黒褐色土などによって

埋まっているが薄いために埋まり方は不明である。
床面 第2号住居跡の確認面からは80cm、第2号住居跡の床面からは10~20cm下部にある。掘り込まれたローム層がそのまま床面となっていて客土はない。全体的に堅い面を呈していた。
竈 北壁の東寄りの位置に黄色粘土を用いて壁外に造り出されていたが、第2号住居跡の床面造成時にほとんど上部を削平されてしまっていて、燃焼部の下部が赤く焼けた跡を残すのみであった。

柱穴・壁周溝 存在しなかった。
貯蔵穴 北西隅に存在。円形。径50cm、深さ15cm。
遺物 須恵器羽釜・坏、石製鉈尾が出土したが、極めて少量であった。鉈尾は西壁際から出土した。
備考 本住居跡は第2号住居跡とほとんど重なるように下部にあり、第29号住居跡の造り直しが第2号住居跡になる可能性がある。年代は10世紀後半と推定される。(小林)



第29号住居跡出土遺物観察表 (PL.158)

図号	遺物 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②織成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 坏	+5	□11.7 高4.1 底6.0 □~底 互	①細・灰色灰少量 ②還元・軟 ③黒色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
2	石帯 鉈尾	-9	長さ7.9cm 幅4.5cm 厚さ0.7cm 材質 理質頁岩?。上面は、極めて、丁寧に滑面している。下面には、3箇所に草などに取り付ける際の承渡し孔があいている。側面は、斜めに面取りしてある。外国からの輸入材の可能性はある。			

第38号住居跡

位置 3区47B43 写真 PL.59

形状 長辺2.98m 短辺2.44mの長方形を呈する。

面積 7.51m² 方位 N-68°-E

埋没土 ロームブロックを少量含む黒色土が主体をなす。人為的堆積の可能性が高い。

床面 確認面で9~12cmローム層を掘り込み、褐色土とロームブロックの混合土を客土して床面としている。

竈 東側の壁にあり、残り方が悪いため明確ではないが、住居外に構築されている。火床面はほぼ平坦で煙道部は緩やかに立ち上がる。

柱穴 住居内には確認されなかった。住居外に住居

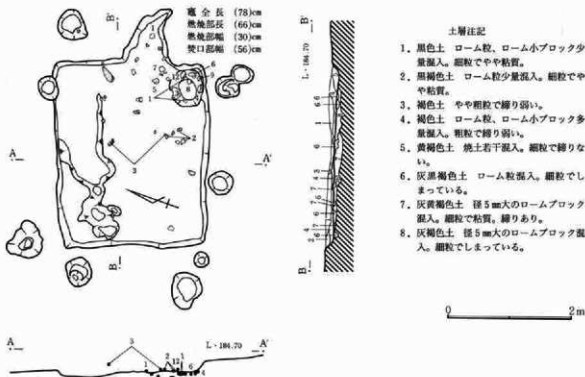
を取り囲むようにピットが9個確認されたが、この近辺より多くのピットが確認されており、この住居の柱穴かどうかは不明である。

貯蔵穴 竈向かって右に確認された。ほぼ円形で径58cm深さ15cmを測る。ロームブロック・炭化物粒を少量含む褐色土が埋まっている。

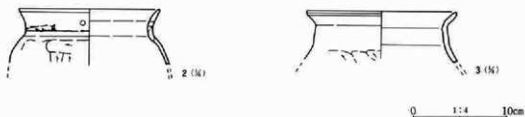
壁周溝 確認されなかった。

遺物 竈・貯蔵穴付近から集中して出土している。土師器「コ」の字状口縁の甕・須恵器碗などが出土している。No4の境の外面には「加」と読める墨書が画かれてあった。

備考 本住居跡の年代観を遺物より10世紀前半としたい。(鹿沼)

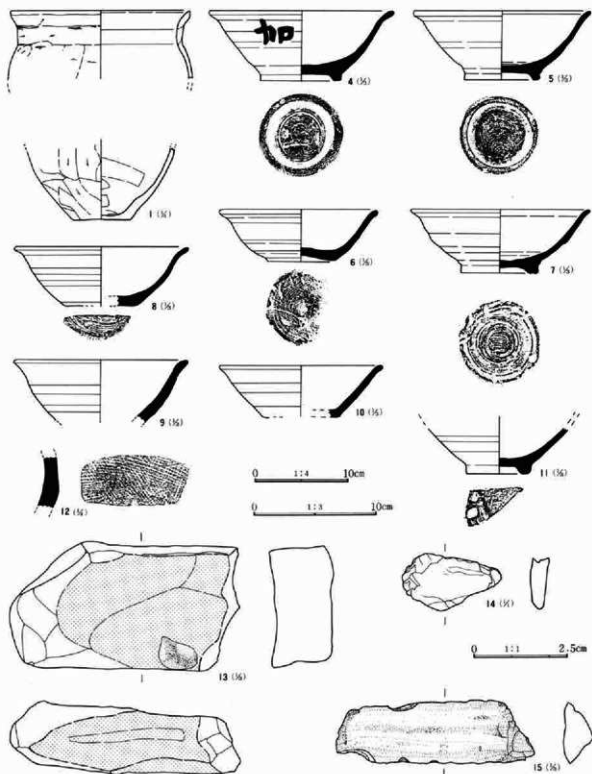


第300図 第38号住居跡実測図



第301図 第38号住居跡出土遺物実測図(1)

第5節 平安時代の住居跡と遺物



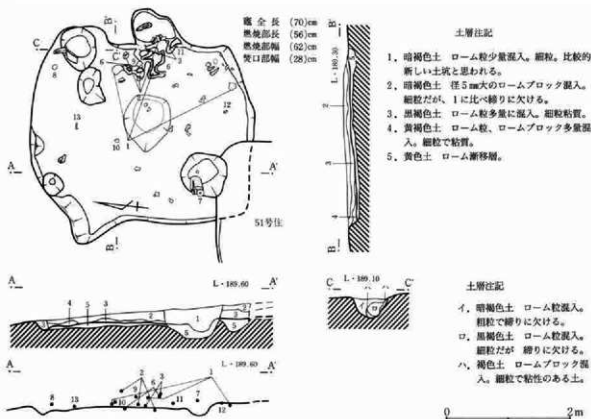
第302図 第38号住居跡出土遺物実測図(2)

第38号住居跡出土遺物観察表 (PL.158)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	堀内	口(19.2) 高— 底— — 口—割—底%	①普通・白色紅黄土 ②酸化・硬 ③褐色	「コ」の字状口縁。組作り、外面胴部は費用り、口縁部は横断で、内面胴部は貫断で。	輪痕あり。

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
2	土師器 壺	-3	口(15.0) 高1 高1 口~胴 残	①細・白色紅微量 ②酸化・硬 ③褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は置削り、口縁部は横撫で、内面胴部は荒撫で。	輪痕あり。
3	土師器 壺	+8	口(16.0) 高1 高1 口~胴 破片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は、斜め荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は置削り。	墨書入り「加」。
4	須恵器 埴	貯蔵穴内 +4	口14.8 高5.5 底6.4 完形	①細・白色紅少量 ②還元・軟 ③灰オリーブ色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。付高台。	
5	須恵器 埴	+4	口(14.0) 高5.4 底6.0 口~高台 残	①細・白色紅少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。付高台。	
6	須恵器 埴	貯蔵穴内 +1	口12.5 高4.1 口~底 残	①細・灰色紅微量 ②還元・軟 ③暗灰黄色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
7	須恵器 埴	床直	口(14.2) 高5.0 底6.0 口~高台 残	①普通・赤色紅微量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。付高台。	炭化物付着、油、うるしか？。
8	須恵器 埴	貯蔵穴内 +4	口14.0 高(4.7) 口~底 残	①細・白色紅少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
9	須恵器 埴	貯蔵穴内 +2	口(14.0) 高1 底1 口~体 残	①細・白色紅少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
10	須恵器 埴	竈 埋没土	口(13.0) 高(4.1) 底1 口~底 残	①細・灰色紅少量 ②還元・軟 ③黄灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	内外に黒色有機物付着。油煙か？。
11	須恵器 埴	埋没土	口 高1 底(5.2) 体~高台 破片	①普通・白色紅微量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。付高台。	
12	須恵器 壺	貯蔵穴内 +8	胴部 破片 (縦5.3 横11.5)	①普通・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 平行叩きの上をカキ目。 内面 青海波印きの後、撫で。	
13	砥石	床直	材質 牛伏砂砂。長さ18.0cm 幅10.0cm 厚さ4.5cm 重さ1.3kg。原材は転石で、平面左側に原石面を留めるが、裏面に成形時の削り加工(金風)。表面と側面に研磨面。主体は金属。側面裏面は金属。置砥。			
14	石核	埋没土	材質 滑石。長さ7.8cm 幅4.1cm 厚さ1.3cm 重さ100g。板状に高割りされている。何を意図した高割りかは不明。流れ込みであろう。			
15	敲打石	埋没土	材質 黒色片岩。長さ15.8cm 幅4.9cm 厚さ2.4cm 重さ530g。側面とところどころに敲打した時にできたと思われる割離痕あり。流れ込みか。			



第303図 第50号住居跡実測図

第50号住居跡

位置 4区06C13 写真 PL.60

形状 長辺3.60m 短辺2.80mの南北に長い隅丸長方形を呈する。

面積 10.04㎡ 方位 N-77-E

埋没土 暗褐色土を主体とし、径5cm大のROOMブロックを含む。

床面 確認面でROOM層を30cm程掘り下げ、その上に10cm程黄褐色土を客土して床面としている。壁高は10~20cmと、残りが悪かった。掘りかたの調査中、住居中央より径75cm深さ14cm程を測る床下土坑を確認した。

竈 東側の壁にあり、燃焼部がほとんど住居外へ出る。焚口部前に竈材として使用されたとと思われる粘土塊が出土した。残りが悪いので、形態を明確に確

認することはできないが、竈壁際に小穴があり、また、住居内から片岩が数個出土していることや隣の第51号住居跡の竈が石組であることなどから、この竈も石組の可能性が高い。

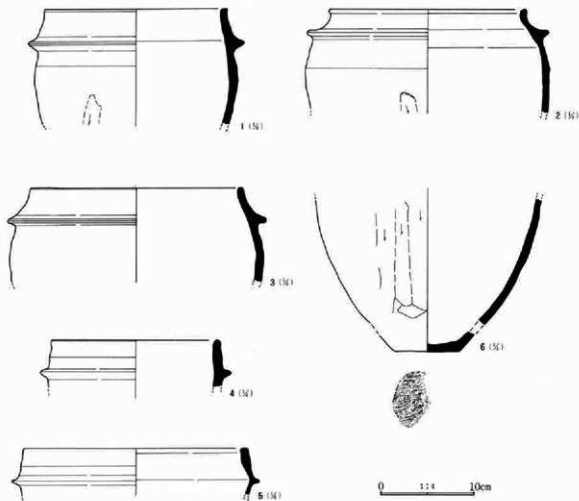
柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 竈に向かって左側に確認された。長軸70cmの楕円形を呈する。深さは、30cmを測る。

壁周溝 確認できなかった。

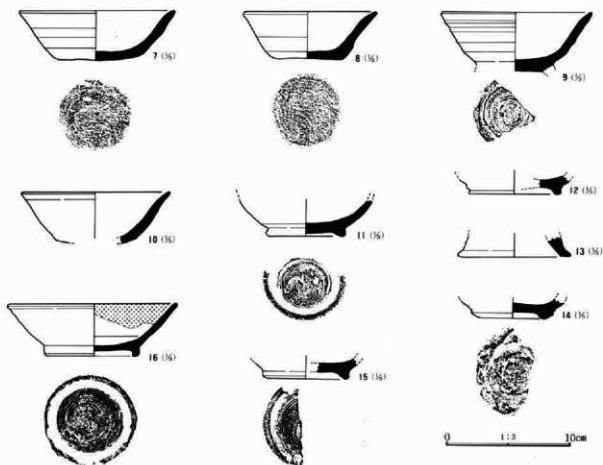
遺物 住居東半分に遺物が集中していた。特に竈前面から羽釜片が出土し、また、北東隅より完形の灰釉壺が出土している。

備考 本住居跡は南側の第51号住居跡と重複しており、第51号住居跡より古いものである。時期的には、遺物より10世紀前半の年代観を与えたい。(鹿沼)



第304図 第50号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

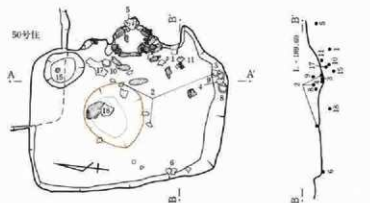


第305図 第50号住居跡出土遺物実測図(2)

第50号住居跡出土遺物観察表 (PL.158、159)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽蓋	+5	口(19.5) 高一 底一 口~胴部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け、胴部下半は寛削り。	
2	須恵器 羽蓋	電	口(20.9) 高一 底一 口~胴片	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け、胴部下半は寛削り。	2次焼火の跡。
3	須恵器 羽蓋	電内	口(22.6) 高一 底一 口~胴片	①普通・灰色紅少量 ② 還元・軟 ③オリーブ灰色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形。 罫は貼り付け、胴部下半は寛削り。	
4	須恵器 羽蓋	埋没土	口(18.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形。 罫は貼り付け。	
5	須恵器 羽蓋	埋没土	口(23.9) 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色紅微量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部はやや内傾する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。罫は貼り付け。	
6	須恵器 羽蓋	電	胴(23.6) 底(6.8) 胴部・底部 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部・底部 は寛削り。	
7	須恵器 埴	+9	口12.3 高3.9 口~底(高台穴)	①普通・白色紅少量 ② 還元・普通 ③黒色	ロクロ整形(右回転)。高台穴損(付高台)。	
8	須恵器 埴	+10	口10.5 高3.6 宛形	①普通・白色紅少量 ② 還元・普通 ③暗灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	内面に未が付着。
9	須恵器 埴	電	口(12.0) 高一 底一 口~底片	①細・黒色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。高台穴損(付高台)。	
10	須恵器 埴	+5	口(10.0) 高一 底一 口~底片	①細・白色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍黄色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
11	須恵器 埴	電	口一 高一 底(6.2) 体~高台 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
12	須恵器 埴	+2	高台部片	①細・実物ほとんどな し ②還元・軟 ③鈍黄色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	

種別	器形	出土位置	口径 高さ 底径	残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
13	酒壺	7	高台部片		①青濁・灰色紅少量 ②還元・鉄 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
14	酒壺	埋没土	口一高一底(5.2) 底~高台 与		①細・黒色白色紅少量 ②還元・鉄 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
15	酒壺	埋没土	口一高一底(6.8) 底~高台 与		①細・黒色紅微量 ②還元・普通 ③灰オリーブ色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
16	灰軸陶器 残	住居外 北東部	口13.2 高4.1 底7.1 ほぼ完形		①細・夾雜物なし ②還元・硬 ③灰白色	内面に 軸付着。 付高台。	北東隅の壁立上りより外から出土。



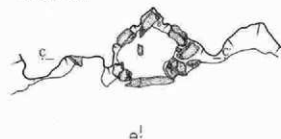
土層住記

1. 暗褐色土 径5mm大のロームブロック混入。ローム粒も混入。細粒。
2. 黒褐色土 ローム粒多量に混入。細粒で粘性があり しまっている。
3. 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック多量に混入。細粒で粘性。締りあり。
4. 黄色土 ローム漸移層。



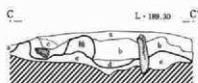
0 2m

竈全長 62cm
熱地部長 40cm
熱地部幅 44cm
焚口部幅 25cm



土層住記

- a. 暗褐色土 ローム粒混入。細粒だが、締りに欠ける土。
- b. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒混入。細粒だが締りに欠ける土。
- c. 黄褐色土 ロームブロック。
- d. 黒褐色土 少量の焼土粒、炭化物粒ローム粒混入。細粒で締りない土。
- e. 黄褐色土 ローム漸移層。
- f. 黒色土 焼土塊、ローム粒、少量混入。締りのないブロック土。



0 1m

第306図 第51号住居跡実測図

第51号住居跡

位置 4区07C14 写真 PL.60, 61

形状 長辺3.19m 短辺2.25mの南北に長い隅丸長方形を呈する。

面積 6.84㎡ 方位 N-85°-E

埋没土 径5cm大のロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

床面 確認面でローム層を30cm程掘り下げ、その上に黄褐色土を客土して床面を形成している。掘りかたの調査中、住居中央より径95cm深さ5cm程の円形の床下土坑を確認した。また、南壁際に長軸1.30m短軸1.02m深さ25cmを測る楕円形の床下土坑も確認した。

竈 東側の壁にあり、施設は住居外に出ている。石組竈であり、現状で12個の雲母石英片岩と1個の黒

色片岩で形成されていた。また、床面にも数個の雲母石英片岩があり、それらも含めて、石組みしていたと考えられる。煙道部は確認できなかった。さらに、燃焼部中央左寄りに支脚1本を確認した。

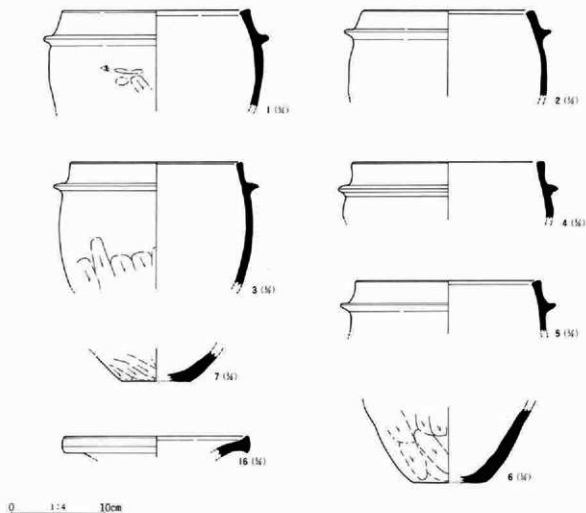
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 竈に向かって左側に径64cmの円形を呈する。深さは、22cmを測る。

壁周溝 確認されなかった。

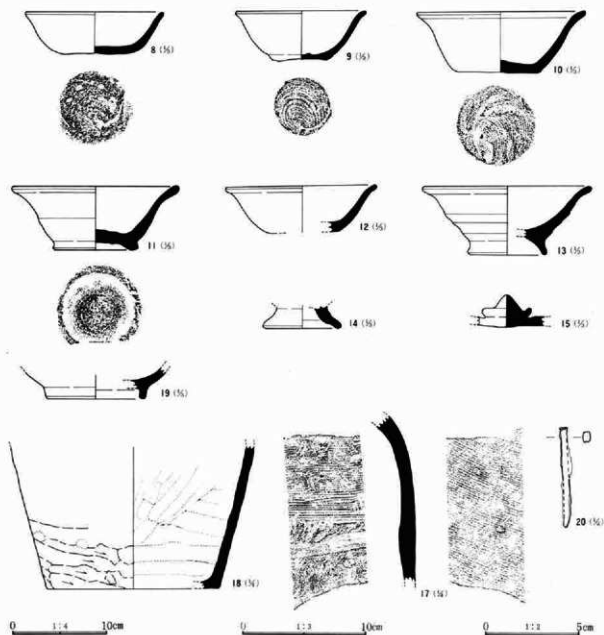
遺物 竈付近より羽釜が、南壁に張り付くように須恵器境が2個出土した。

備考 第50号住居跡と北側で重複している。第50号住居跡とは主軸方位がほぼ一致していることや、第50号住居跡の竈の石を利用して竈を形成しているらしいことから密接な関係が考えられる。時期は遺物より10世紀後半の年代観を与えたい。(鹿沼)



第307図 第51号住居跡出土遺物実測図(1)

第5節 平安時代の住居跡と遺物



第308図 第51号住居跡出土遺物実測図(2)

第51号住居跡出土遺物観察表 (PL.159)

図号	器名・器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	-11	口(20.4) 高一 底一 口~脚 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・普通 ③灰色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。脚は貼り付け、割部は寛削り。	
2	須恵器 羽釜	-1	口(18.2) 高一 底一 口~脚 片	①普通・白色灰少量 ② 還元・普通 ③暗褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。脚は貼り付け。	
3	須恵器 羽釜	-1	口(18.4) 高一 底一 口~脚 片	①普通・灰色灰微量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。脚は貼り付け、割部下半は斜め削り。	
4	須恵器 羽釜	-1	口(20.5) 高一 底一 口~脚 片	①普通・灰色灰微量 ② 還元・軟 ③灰白色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。脚は貼り付け。	
5	須恵器 羽釜	電	口(20.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色灰少量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。脚は貼り付け。	
6	須恵器 羽釜	+1	口一 高一 底(7.8) 脚~底部片	①普通・灰色灰少量 ② 還元・軟 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。割部下半・ 底部は寛削り。	

第3章 検出された遺構と遺物

時期	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
7	須恵器 羽 蓋	埋没土	口一 高一 底(7.8) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部下半・ 底部は置削り。	
8	須恵器 透明皿	+8	口10.9 高3.3 底5.5 宛形	①普通・白色紅少量 ② 還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転永切り。 内面 口縁部に油が付着している。	
9	須恵器 杯	+13	口10.4 高3.8 底4.4 宛形	①普通・白色紅少量 ② 還元・軟 ③オリーブ灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転永切り。	
10	須恵器 杯	-1	口13.3 高4.8 底6.7 ほぼ宛形	①普通・白色紅少量 ② 還元・軟 ③灰黄色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転永切り。 およそ外は火をうけて黒褐色になっている。	
11	須恵器 椀	+1	口(13.4) 高5.0 底6.7 口~高台 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
12	須恵器 杯	埋没土	口12.1 高(3.7) 底一 口~底 片	①普通・白色紅少量 ② 還元・軟 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転永切り。 体部下半~底部は火をうけて薄灰色。	
13	須恵器 椀	埋没土	口(13.4) 高5.4 底(6.2) 口~高台 片	①細・黒色紅微量 ②還元 元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
14	須恵器 台付甕	埋没土	口一 高一 台(8.2) 台部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	
15	須恵器 杯 蓋	-10	胴部	①細・白色紅少量 ②還元 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形。	
16	須恵器 大 壺	埋没土	口縁部片	①細・黒色紅微量 ②還元 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
17	須恵器 大 壺	+3	胴部片 (縦18.0 横10.1)	①細・白色紅少量 ②還元 元・硬 ③暗青灰色	外面 回転カキ目。 内面 上半部旋削で、下半部青陶化叩き?	
18	須恵器 壺	-3	口一 高一 底(18.4) 胴一底 片	①細・白色紅少量 ②還元 元・硬 ③暗褐色	外面 胴部下半は斜め旋削り、指頭圧痕あり。 内面 胴部下半は指撫で。	
19	須恵器 椀	埋没土	体~高台部片	①細・夾雑物なし ②還元 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。 内面 釉。	
20	釘か敷	埋没土	残存長5.3cm			細部は、田圃のまま。横断面は、方形を呈する。錆化は顕著でなく、精緻を思わせる。 そのため、蘇葉とも考えられる。釘にしては、錆の凝縮が少ないため、釘には見えない。

第52号住居跡

たい。

(鹿沼)

位置 4区12C15 写真 PL.61

形状 長方形と思われる。

面積 不明 方位 N-65°E

埋没土 黒褐色土を主体とし、ローム粒・斑状の褐色土・炭化物粒を含む。

床面 竈前面に堅くしまった面を確認したほかは、埋没土と区別がつかなかった。黒褐色土中に床面を形成した住居である。掘りかたも確認できなかった。

竈 東側の壁にあったものと思われる。焼土塊・粘土塊・白色の灰・炭化物が集中して出土したので竈と判明した。その他の造作材は確認できなかった。

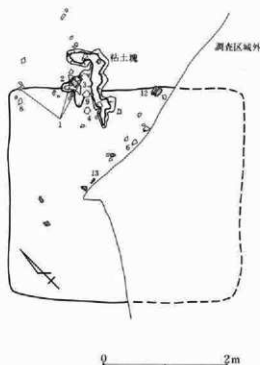
柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

壁溝溝 確認できなかった。

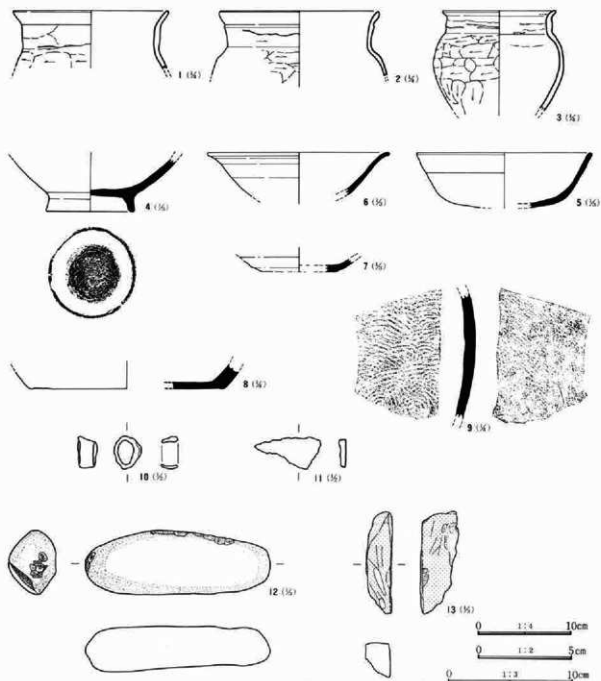
遺物 土師器の「コ」の字状口縁の甕・高台付塊、須恵器の甕破片などが出土しているが、みな散在している。

備考 遺物より本住居跡の年代観を10世紀前半とし



第309図 第52号住居跡実測図

第5節 平安時代の住居跡と遺物



第310図 第52号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡出土遺物観察表 (PL.160)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	壺内	口(16.6) 高一 底一 口~胴 片	①胎・灰色紅少量 ②焼 化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面口縁部は横撫で、 胴部は横尻削り。内面口縁部~胴部は無で。	
2	土師器 壺	壺内	口(17.1) 高一 底一 口~胴部片	①胎・白色紅微量 ②焼 化・硬 ③暗褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は尻削 り、口縁部は横撫で。内面胴部は横撫で。	
3	土師器 小型壺	壺内	口(12.2) 高一 底一 口~胴 片	①胎・灰色紅少量 ②焼 化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横と縦 尻削り、口縁部は横撫で。内面胴部は横撫で。	
4	須恵器 埴	壺	口一 高一 底7.0 体一高台 片	①胎・灰色紅微量 ②焼 化・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。 付高台。内面は磨き。	内黒。

第3章 検出された遺構と遺物

図号	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
5	須恵器 坏	埋没土	口(14.0) 高(4.4) 底一 口~底部片	①細・赤色灰少量 ②酸 化・軟 ③橙色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。 内面は磨き。	内面黒色処理。
6	須恵器 埴	-1	口(14.5) 高一 底一 口~体 長	①細・白色灰微量 ②滑 元・軟 ③灰黄色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
7	須恵器 坏	竈 埋没土	口一 高一 底(6.0) 体~前部片	①普通・灰雑物なし ② 還元・硬 ③オリーブ灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
8	須恵器 罎	-1	口一 高一 底(20.6) 前部片	①細・灰雑物なし ②滑 元・普通 ③灰黄色	紐作り後、ロクロ整形。	
9	須恵器 罎	竈内	胴部片 (縦13.3 横9.0)	①細・白色灰微量 ②滑 元・硬 ③暗緑灰色	紐作り後、外面は平行叩き。内面は背向叩き。	
10	竈	埋没土	径1.7cm		刀子の、おそらく佩用刀子の類と考えられる個体で、正面観側面を呈する。錆化は不定方向である。内面に木質の遺存はなく、あわせて、刀子も残存しない。	
11	不明	埋没土	最大長3.6cm		用途不明。板状の鉄片で、製品の残欠のように思える。錆化は顕著でなく、きわめて良質の鉄か、または鋳物鉄を思わせるため、火打金の可能性がある。	
12	磨打石	-14	材質 雲母石英片岩。長さ14.6cm 幅5.1cm 厚さ3.7cm 重さ40g。図上方側面及び左端面に磨打時の剥離が明顯に残っている。図中央部分、磨らかくなっており、砥石として利用した可能性もある。			
13	砥石	+3	材質 流紋岩(砥沢石)。長さ8.1cm 幅2.9cm 厚さ2.7cm 重さ52.5g。自然石の利用で図平面上方に原石面。左側部は旧時欠損。使用は、表面左側部。表面はヒゲ傷。主体は夾雑物粒の凸出がなく、金属。			

第55号住居跡

位置 4区07B40 写真 PL.61

形状 黒色土の中に構築されたため、堅い床面を追いながらの調査をしたが明確につかめなかった。

面積 不明 方位 不明

埋没土 下層部にローム粒の多い締まった黒褐色土が主体をなす。

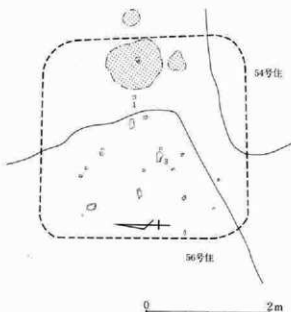
床面 確認面は黒褐色土を10cm程掘り下げたところで堅い床面を一部で確認した。

竈 堅い床面とはほぼ同じレベルに焼土面2カ所・粘土塊1カ所を確認した。竈の残骸の可能性がある。

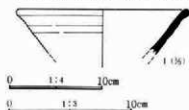
柱穴・貯蔵穴・壁周溝 確認されなかった。

遺物 焼土面と同じレベルに須恵器境などが出土。

備考 本住居跡の年代観を10世紀後半としたい。本住居跡は、平地式住居の可能性はある。(鹿沼)



第311図 第55号住居跡実測図



第312図 第55号住居跡出土遺物実測図

第55号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	遺構 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 埴	+1	口(15.6) 高一 底一 口~体 長	①普通・白色灰少量 ② 還元・軟 ③黒褐色	ロクロ整形(右回転)。	

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
2	須恵器 坏	埋没土	底面片	①普通・白色灰微量 還元・普通 ③灰色	回転糸切り状。	
3	須恵器 壺	+65	胴部片 (縦9.3 横11.6)	①細・黒色灰少量 ②還元・硬 ③灰褐色	紐作り後、青海波文様の当て目後、無で酒し。	

第60号住居跡

位置 5区24C05 写真 PL.61

形状 隅丸方形になるであろうが、一部の調査のため形状は不明。規模は東西長2.97mである。

面積 不明 方位 N-101°-E

埋没土 表土から5層の黒褐色土や褐色土などによって埋没しているが、自然堆積の様相を示している。

床面 表土下3層目の暗褐色土よりローム層まで30~55cm掘り込み、ローム層をそのまま床としてお

り、客土はない。床面は水平かつ平坦になっていて、全体的に柔らかい。

窟 存在が予想されるが、調査範囲内では未確認。

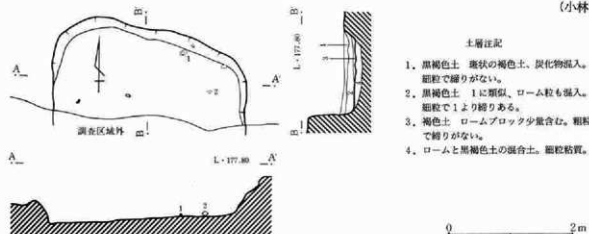
柱穴・壁周溝 存在しなかった。

貯蔵穴 存在は予想されるが未確認。

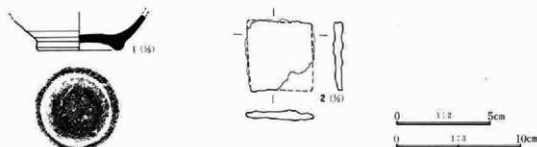
遺物 須恵器壺、鉄製刀子が散在して出土していたがいずれも破片であり、極めて少量であった。

備考 本住居跡は半分以上が南側境界外に出ているため不明部分が多いが、10世紀前半とみられる。

(小林)



第313図 第60号住居跡実測図



第314図 第60号住居跡出土遺物実測図

第60号住居跡出土遺物観察表 (PL.160)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 壺	+3	口一 高一 底7.0 体一高台 3/4	①細・灰色灰微量 ②還元・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
2	板状 鉄製品	+3	最大長3.7cm			図石下は、調査時欠損。全体観は、方形を呈する板状の鉄で、機能は不明である。錆化は、錆層が若干みられるが、不定方向に割れる。

第69号住居跡

位置 5区30C05 写真 PL.62, 63

形状 長辺4.08m、短辺3.52mを測る長方形。全体的に壁の残りは良好で、残存壁高は20~60cmである。

面積 15.33㎡ 方位 N-94°-W

埋没土 確認面からは4層の暗褐色土や淡褐色土などによって埋まっていた。塊底型堆積をしており、徐々に埋まっていた様相を呈している。

床面 確認面(ローム層)から30~70cm掘り込み、部分的に若干の客土を行い、水平かつ平坦に整地して床面としている。竈前から住居中央にかけてはかなり広範囲に堅い面が検出された。また、床面の中央部には床下土坑の上に径45cm×33cm、厚さ15cmの工作台とみられる扁平な石が置かれていた。床下土坑は2個存在した。住居中央にあるのは頭の小さいダルマ型で最大径1.41m、深さ30cmを測る。竈前のは中央のよりは一回り小さいが、形は同様なダルマ型を

している。両者共内部から何も出土しなかった。

竈 東壁の南寄りの位置に角礫と黄色粘土を用いて壁外に造り出されていた。即ち、焚口から燃焼部にかけて扁平で大きめな角礫を縦に突き刺し、この上部に小さな角礫を並べて煙のかけ口を作っている。

焚口部の天井は既に取り去られていた。燃焼部には土師器長甕がかけられた状態で出土していた。

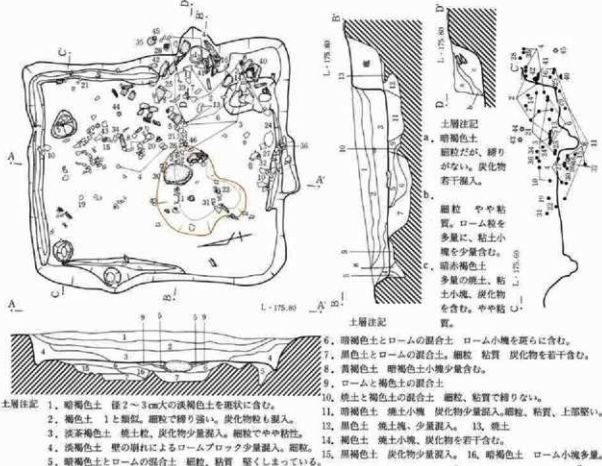
柱穴 西・北壁際に3個検出。P₁:径27cm、深さ25cm、P₂:径28cm、深さ26cm、P₃:径35cm、深さ33cm。

貯蔵穴 竈の右脇に径54cm×48cm、深さ69cmの円形のものが出されたが、作り替えが行われている。

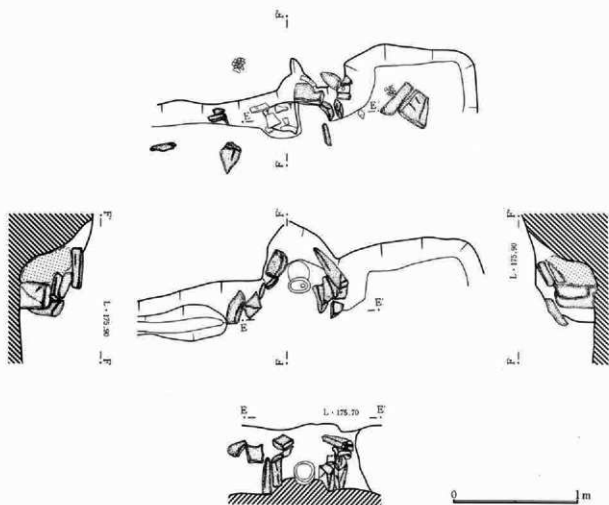
壁周溝 南東と南西の隅角部を除いて存在した。幅18~26cm、深さ5~9cmである。

遺物 土師器長甕・脚付甕、須恵器甕・埴・皿、石製紡錘車、砥石、鉄製刀子・鑿などが竈前を中心に多量に出土した。土器の中に墨書「橋口家」がある。

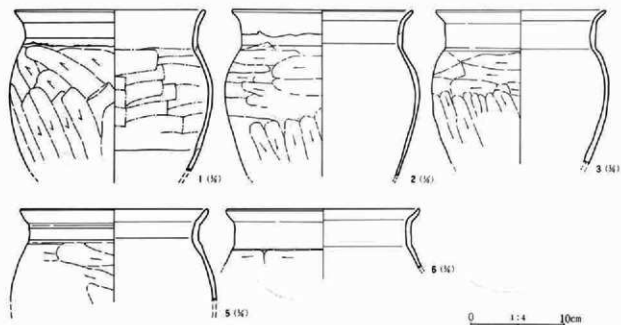
備考 本住居跡は10世紀前半と推定される。(小林)



第315図 第69号住居跡実測図

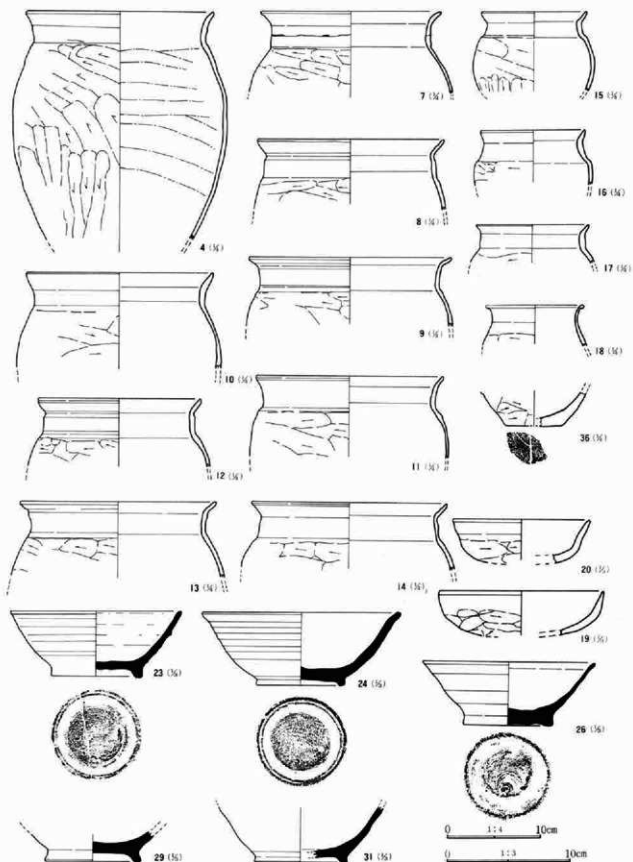


第316図 第69号住居跡遺実測図



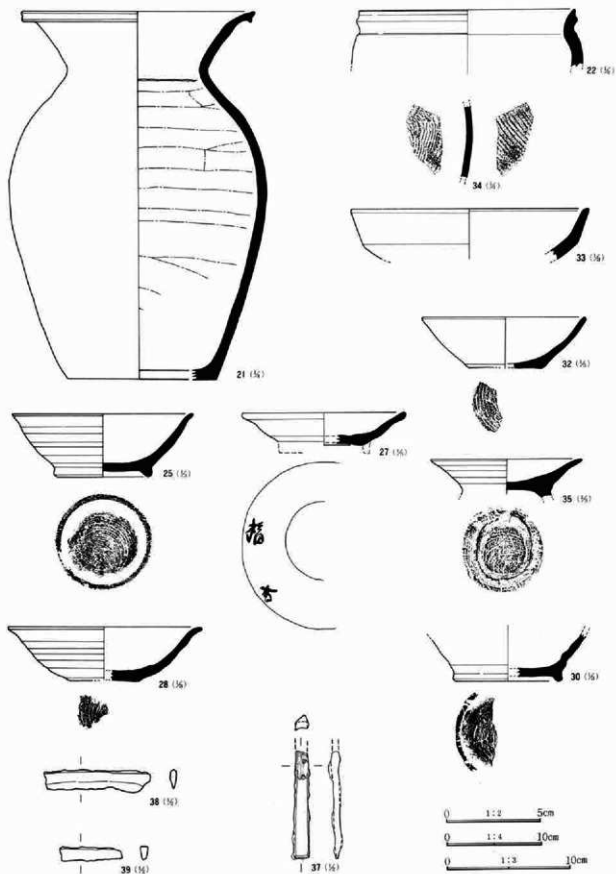
第317図 第69号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



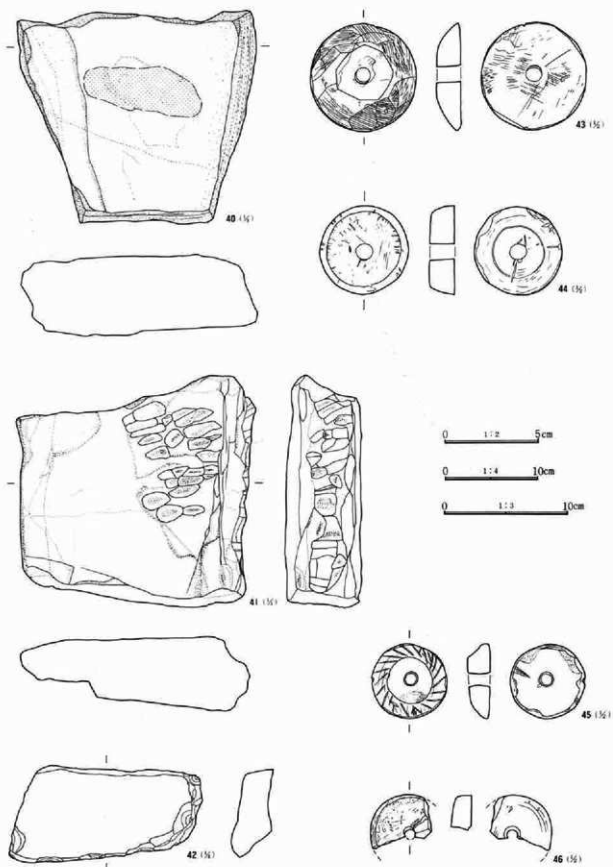
第318図 第69号住居跡出土遺物実測図(2)

第5節 平安時代の住居跡と遺物



第319図 第69号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第320図 第69号住居跡出土遺物実測図(4)

第69号住居跡出土遺物観察表 (PL.160, 161, 162)

種別	部類	出土位置	口径	高さ	底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	竈内	口20.4 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部は斜め荒削り。内面 胴部は荒撫で。	
2	土師器 甕	+14	口19.4 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。	
3	土師器 甕	+15	口(18.2) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で、内面胴部は撫で。	
4	土師器 甕	-4	口20.2 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横撫で。外面胴部上半は斜め、下半部は荒削り。内面胴部は横撫で。	
5	土師器 甕	+15	口(20.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・白色微紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
6	土師器 甕	+15	口20.5 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
7	土師器 甕	+51	口(19.2) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①普通・白色灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
8	土師器 甕	-41	口(20.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
9	土師器 甕	埋没土	口(21.6) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・白色微紅少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
10	土師器 甕	+8	口(20.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①普通・黒色微紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
11	土師器 甕	-9	口(20.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
12	土師器 甕	埋没土	口(17.4) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①普通・灰色微紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
13	土師器 甕	+14	口(21.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
14	土師器 甕	+48	口(21.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・白色灰色微紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
15	土師器 小型甕	-22	口(11.2) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色微紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
16	土師器 小型甕	+8	口(11.2) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①普通・灰色微紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は荒削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
17	土師器 小型甕	埋没土	口(12.0) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色微紅少量 ②酸化・硬 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り、外面胴部は横撫削り、口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
18	土師器 小型甕	埋没土	口(19.4) 口~胴 ㄎ	高一 底一	底一	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③灰褐色	内外共口縁部は横撫で、外面胴部は横撫削り、内面胴部は撫で。	
19	土師器 土師器	+14	口(13.2) 口~底 ㄎ	高一 底一	底一	①細・赤色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部横撫で、胴部~底部荒削り。内面 口縁部横撫で、胴部~底部撫で。	
20	土師器 土師器	埋没土	口(11.0) 口~底 ㄎ	高一 底一	底一	①細・白色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部横撫で、胴部~底部荒削り。内面 口縁部横撫で、胴部~底部撫で。	内面黒色地用。
21	須恵器 鉢	+16	口(25.0) 口~底 ㄎ	高(38.8)		①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③暗灰色	口クロ整形(右回転)。 内面 荒撫で。	
22	須恵器 鉢	+6	口(21.1) 口~底 ㄎ	高一 底一	底一	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③褐色	紐作り後、口クロ整形(右回転)。	
23	須恵器 鉢	+6	口13.7 底7.3	高5.1	完形	①細・白色微紅少量 ②還元・普通 ③オリーブ灰色	口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り付高台。	
24	須恵器 鉢	+18	口16.0 底7.0	高5.8	完形	①普通・白色紅少量 ②還元・軟 ③オリーブ灰色	紐作り後、口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り付高台。	
25	須恵器 鉢	-6	口14.4 底7.2	高5.0	口~高台 ㄎ	①細・白色紅少量 ②還元・普通 ③黒色	口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り付高台。	
26	須恵器 鉢	-15	口(13.8) 底7.0	高5.0	口~底 ㄎ	①細・灰色微紅少量 ②還元・普通 ③褐色	口クロ整形(右回転)。底部は回転糸切り付高台。	
27	須恵器 鉢	-17	口(13.0) 口~底 ㄎ	高2.5		①普通・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③灰色	口クロ整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
28	須恵器 鉢	住居外	口(15.4) 口~高台 ㄎ	高4.3		①細・灰色微紅少量 ②還元・普通 ③暗灰色	口クロ整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
29	須恵器 鉢	-11	口一 底一	高(7.9)	口~高台 ㄎ	①普通・灰褐色なし ②還元・普通 ③黒色	口クロ整形(右回転)。付高台。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
30	須恵器 埴	-11	□一 高一 底(8.4) 体～台耳	①細・灰色微塵量 ②還元・普通 ③暗灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
31	須恵器 埴	+20	□一 高一 底(7.6) 体～台耳	①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③暗灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
32	須恵器 坏	-17	□(13.0) 高4.0 底(6.0) □～底耳	①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③暗緑灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転赤切り。	
33	須恵器 盤	埋没土	□(19.0) 高一 底一 □～体部片	①細・褐色白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
34	須恵器 壺	+27	胴部片 (縦7.5 横4.0)	①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、外面は平行叩き、ナリ消し。内面は青釉被叩き。	
35	須恵器 皿	住居外 +52	□(12.0) 高一 底一 □～底耳	①細・灰色微塵量 ②酸化・硬 ③鈍い青褐色	ロクロ整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
36	土師器 壺	+28	□一 高一 底6.0 底部 破片	①普通・白色灰色微塵少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴下半部横削り。内面 底部無で。	底部に木葉痕あり。
37	土師器 壺	埋没土	残存長5.7cm		小型細頸状の個体で、上方は調査時欠損。刃先は、片側は鈍角、片側が鋭角にもうけられ、片対称向の強い形状をなす。茎区はないが、上方に、柄の本質が遺存する。	
38	刃物	埋没土	残存長5.5cm		刀子の物打ちから釧元の間を思わせるが、両端部は旧時欠損のため、種は明瞭でない。平造り。錆化は顕著でない。	
39	刀子	埋没土	残存長3.2cm		柄の右側が厚く、左側が薄いため、刃物の茎が考えられる。刀子であろう。上方は、調査時欠損。錆化は少なく、良鉄を思わせる。	
40	砥石	-3	材質 砂岩。長さ22.4cm 幅25.7cm 厚さ8.5cm 重さ5.85kg。原石を削り石たらししく、平面上に削り石痕あり。その他側部は、旧時の割れ。使用は、平面側中央破線内のみ。主体は、金属、燧石。			
41	砥石	甕内	材質 砂岩。長さ24.5cm 幅25.9cm 厚さ7.9cm 重さ5.65kg。図平面右側部、裏面に成形時の削り石加工(金属)。全体は、被熱のため、わずかに風化しており、研磨痕の有無は、不明瞭。			
42	敲打石	+29	材質 雲母石英片岩。長さ14.2cm 幅7.6cm 厚さ3.0cm 重さ500g。左側面を除く側面に敲打時の割傷痕あり。			
43	紡錘車	住居外 +67	材質 蛇紋岩。長軸5.7cm 短軸3.9cm 厚さ1.3cm 孔径0.8cm 重さ59g。刃物による削り調整後、研磨仕上げ。穿孔は、一方から。長軸面縁辺部、面取りあり。			
44	紡錘車	住居外 +60	材質 蛇紋岩。長軸4.7cm 短軸4.0cm 厚さ1.3cm 孔径0.9cm 重さ56g。刃物による削り調整後、研磨仕上げ。穿孔は、一方から。長軸面に、同心円状の線刻あり。			
45	紡錘車	-3	材質 蛇紋岩。長軸4.9cm 短軸2.4cm 厚さ1.2cm 孔径0.7cm 重さ52g。刃物による削り調整後、研磨仕上げ。穿孔は、一方から。側面に、斜め放射状の線刻あり。長軸面に、割傷部分あり。			
46	紡錘車 破片	-16	材質 蛇紋岩。長軸(4.1)cm 短軸(3.6)cm 厚さ1.1cm 孔径(0.5)cm 重さ15g。刃物による削り調整後、研磨仕上げ。穿孔は、一方から。半分欠損。長軸面に同心円状の線刻あり。短軸面に敲打されたと思われる線痕あり。			

第83号住居跡

位置 4区02C13 写真 PL.63

形状 近・現代の芋穴による攪乱があり、明確につかめないが推定で一辺3.2mの正方形を呈する。

面積 9.45㎡(推定) 方位 N-81°-W

埋没土 不明。

床面 確認面で北西隅に一部堅い面が残っていたのみである。褐色土をしており、すぐ下はローム層になる。

竈 西側の壁に焼土が辛うじて残っており、竈の位置を確認できたが、形状・諸施設については不明。

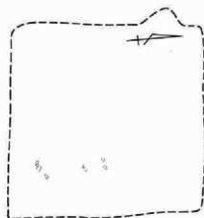
柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

壁周溝 確認できなかった。

遺物 南東隅に羽釜片・須恵器埴片など数点出土した。

備考 出土した遺物より本住居跡の年代観を10世紀後半としたい。(鹿沼)



0 2m

第321図 第83号住居跡実測図



第322図 第83号住居跡出土遺物実測図

第83号住居跡出土遺物観察表 (PL.一)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽釜	埋没土	口(19.8) 高一 底一 口径部 破片	①普通・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	口径部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	
2	須恵器 坏	埋没土	口(11.5) 高一 底一 口径部 破片	①細・黒色灰微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	

第84号住居跡

位置 4区07C16 写真 PL.63

形状 住居半分以上が調査区域外にあり、また、残りが大きく悪いため、形状をつかむに至らなかった。

面積 3.77m² 方位 N-118°E

埋没土 不明。

床面 確認面でルーム層を6~10cm掘り下げて暗褐色土を客土して床面を形成していた。明確に堅い面は確認できなかった。

竈 住居東側の壁の北側にいる。若干の焼土と支脚として使用されたであろう石が立った状態で出土したため、竈であることを確認できた。そのほかの諸施設については不明であるが、壁の外側に構築されていたのであろう。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 竈左に径1m程の円形を呈する。

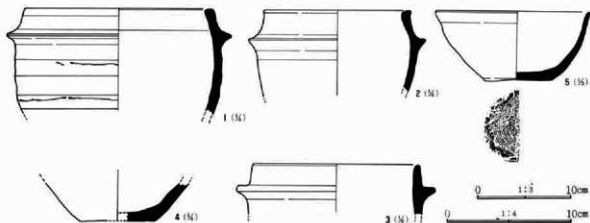
壁周溝 確認されなかった。

遺物 竈前面に集中して羽釜・須恵器片が出土した。

備考 遺物より本住居跡の年代観を10世紀前半としたい。(鹿沼)



第323図 第84号住居跡実測図



第324図 第84号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡出土遺物観察表 (PL.162)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽釜	一3	口(29.0)高一 口~胴 片	①普通・白色灰色灰少量 ②酸化・硬 ③褐色	口径部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
2	須恵器 羽 釜	-3	口(15.6) 高一底 一 口~胴部片	①普通・灰色鉄燻量 ② 酸化・硬 ③灰白色	口縁部は内傾する。組作り後、ロクロ整形(右 回転)。肩は貼り付け。	
3	須恵器 羽 釜	埋没土	口(15.8) 高一底 一 口~胴部片	①普通・白色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄色	口縁部は、ほぼ直立する。組作り後、ロクロ 整形(右回転)。肩は貼り付け。	
4	須恵器 羽 釜	床直	口一 高一底(8.0) 胴一底 基	①普通・白色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部は原則 り。	
5	須恵器 環	床直	口12.2 高5.4 底5.0 ほぼ寛形	①細・白色鉄微量 ②温 光・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	

第86号住居跡

位置 4区00C17 写真 PL.63

形状 ほとんどが調査区域外にあるため、不明。

面積 (2.54㎡) 方位 N-0°E

埋没土 ほとんど残りがなく、不明。

床面 確認面で5cm程ローム層を掘り込み、褐色土を
客土している。

竈 確認できなかった。

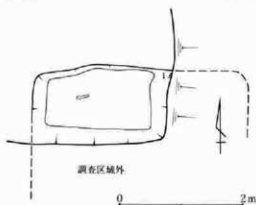
柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。

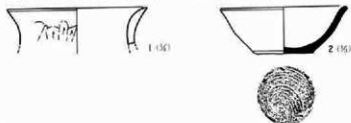
壁周溝 確認できなかった。

遺物 焦口縁部片・須恵器塊などが出土している。

備考 出土遺物より本住居跡の年代観を9世紀後半
としたい。(鹿沼)



第325号 第86号住居跡実測図



第326図 第86号住居跡出土遺物実測図

第86号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	+11	口縁部 破片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い黄色色	外面 口縁部横側で、頸部縦方向。 内面 口縁部横側で。	
2	須恵器 環	埋没土	口(10.0) 高3.8 底4.7 口~底 列	①細・白色鉄少量 ②酸 化・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	

第89号住居跡

位置 4区15C11 写真 PL.63

形状 長辺3.18m 短辺2.72mの長方形を呈する。

面積 8.87㎡ 方位 N-97°E

埋没土 耕作土による破壊がひどく、残存状態はよ
くない。ローム粒を含む暗褐色土が薄く堆積してい
るだけである。

床面 掘りかた面にロームブロックを混在する暗褐
色土を客土し、床面は平坦で堅くしまっている。壁
は、東・南側で最高10cm程を残すのみで、北・西側
ではあまり明瞭ではなかった。

竈 壁の東側角に造られており、住居跡の外へ張り
出す形となる。焚口部はややくぼみ、焚口部から燃
焼部にかけては平坦で煙道部が緩やかに立ち上が

る。

貯蔵穴 確認されなかった。

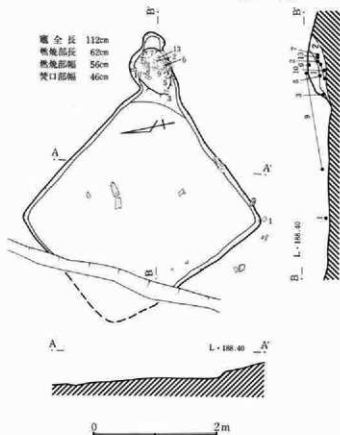
柱穴 確認されなかった。

遺物 住居跡中央部に、竈に使用されたと考えられる石が検出されたが、それ以外の遺物は大方竈内から出土した。出土した土器は、甕・壺・羽釜・埴等

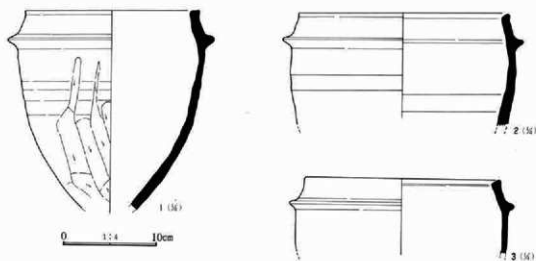
である。

備考 西側角は、近世以降の耕作による段差によって削られているため、不明である。本住居跡の年代観を出土遺物より10世紀後半としたい。

(谷藤)

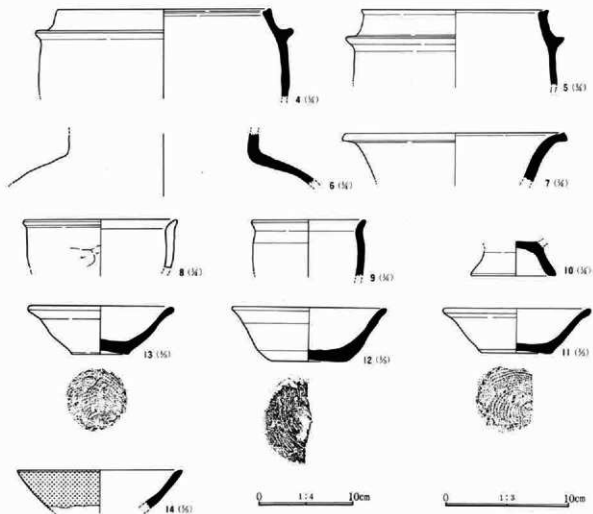


第327図 第89号住居跡実測図



第328図 第89号住居跡出土遺物実測図 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



第329図 第89号住居跡出土遺物実測図(2)

第89号住居跡出土遺物観察表 (PL.162、163)

図中	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	+5	口(18.9) 高一 底一 口~胴 片	①普通・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部はほぼ直立。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。胴部下半・底部は削削り。	
2	須恵器 羽釜	竈内	口(22.2) 高一 底一 口~胴 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
3	須恵器 羽釜	竈内	口(20.8) 高一 底一 口~胴 片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・硬 ③褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
4	須恵器 羽釜 埋没土	竈	口(22.5) 高一 底一 口~胴 片	①普通・灰色灰少量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
5	須恵器 羽釜	竈内	口(19.9) 高一 底一 口~胴 片	①細・黒色微灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
6	須恵器 壺	竈内	口一 頸(20.5) 頸~肩 破片	①細・白色灰少量 ②還元 元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
7	須恵器 壺	竈内	口(23.3) 高一 底一 口縁部 破片	①細・黒色微灰少量 ② 還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
8	土師器 壺 埋没土	竈	口(16.0) 高一 底一 口~胴 片	①普通・白色灰少量 ② 酸化・硬 ③明赤褐色	ロクロ整形(右回転)後、外面口縁部は無く、胴部は削削り。内面口縁部は無く、胴部削削り。	
9	須恵器 小型壺	+10	口(12.0) 高一 底一 口~胴	①細・灰色微灰少量 ② 還元・軟 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
10	須恵器 台付埴	竈内	口一 高一 台9.0 台部	①細・白色灰少量 ②還元 元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	

種別	器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
11	須恵器 坏	竈 埋設土	口(11.3) 高3.7 底4.9 口~底 片	①胎・灰色紅少量 ②焼 化・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
12	須恵器 塊	埋設土	口(12.1) 高4.2 口~底 片	①胎・灰色紅少量 ②選 元・軟 ③黒褐色	ロクロ整形(右回転)。高台欠損(付高台)。	
13	須恵器 坏	竈内	口(11.5) 高3.5 口~底 片	①胎・灰色紅少量 ②焼 化・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
14	灰輪陶 器	埋設土	口(13.0) 高一 底一 口縁破片	①胎・夾雑物なし ②選 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	

第90号住居跡

位置 2区32B43 写真 PL.64

形状 南側に長軸2m 短軸1.5mの楕円形の張り出し部をもつ長辺4.10m 短辺2.90mの隅丸長方形を呈する。

面積 13.73㎡ 方位 N-77°-E

埋設土 軽石粒・炭化物粒を含む黒褐色土が主体。

床面 確認面でローム層を30cm程掘り込み、その上に径2cm大のロームブロックを多量に含む暗褐色土を薄く客土して床面を形成している。住居西側は、

削平されている。掘りかたの調査中に住居中央より径80cm程の円形の床下土坑を確認した。また、それとは別に、数個のビットも検出したが、その性格については不明である。

竈 東壁の南寄りにある。すべてが、屋外に構築されており、焚口部両方および竈左壁に貼り付くように雲母石英片岩が出土した。石組竈の可能性もある。さらに、燃焼部中央には、やはり雲母石英片岩が1個支脚として利用されていた。燃焼部はほぼ平坦で煙道部出口が支脚より70cm離れたところにある。

柱穴・壁溝 検出されなかった。

貯蔵穴 南壁沿いほぼ中央にある。長辺80cm短辺70cmの長方形を呈し、深さは40cmを測る。

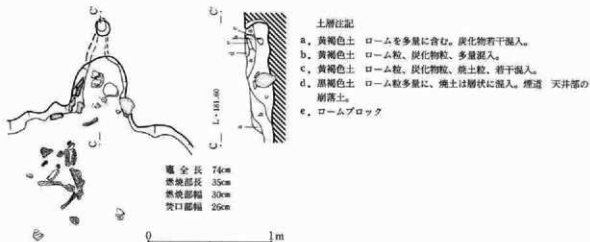
遺物 南壁沿い、特に貯蔵穴周辺に集中して出土した。須恵器の羽釜・塊・甕の胴破片などが多く、特にNo.4の底部には「山」と線刻されていた。また、床面中央部および張り出し部から炭化材が多く出土した。同定は、附編第3節参照。住居中央からは竈の羽口破片・砥石・鉄滓などが出土している。滑石製模造品の白玉は流れ込みである。

備考 本住居跡は、出土遺物から小鍛冶跡の可能性もある。また、第110号住居跡との関連性もある。年代観は、10世紀後半としたい。(鹿沼)

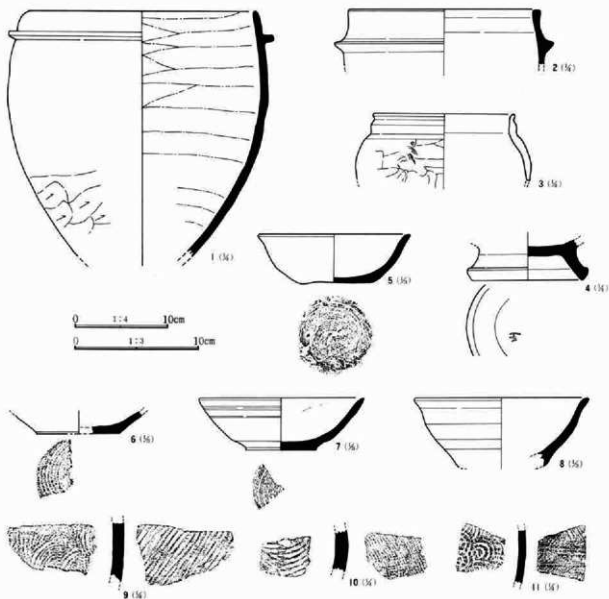


第330図 第90号住居跡実測図

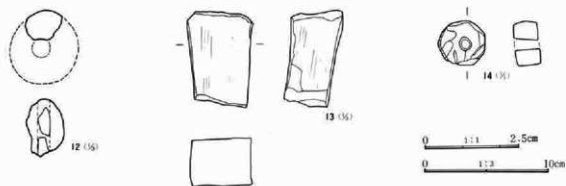
第3章 検出された遺構と遺物



第331図 第90号住居跡竈実測図



第332図 第90号住居跡出土遺物実測図(1)



第333図 第90号住居跡出土遺物実測図(2)

第90号住居跡出土遺物観察表 (PL.163)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	+4	口径25.2 高一底 (12.4)口~胴と底写	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍赤褐色	口縁部はやや内傾。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。胴部下平・底部は足削り。	
2	須恵器 羽釜	+5	口縁部片	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は、ほぼ直立する。紐作り後、ロクロ 整形(右回転)。罫は貼り付け。	
3	土師器 小型壺	+17	口径(15.2) 高一 底- 口~胴 写	①細・白色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横無で。外面 胴部は足削り。 内面 胴部は無で。	
4	須恵器 台付壺	-5	口径- 高一 底(12.0) 台部 写	①細・灰色鉄少量 ②選 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	刻み文字「山」 流れ込みか。
5	須恵器 環	+3	口径12.0 高3.8 底6.0 口~底 写	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
6	須恵器 環	埋没土	口径(6.4) 高一 底- 体~底 写	①細・白色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
7	須恵器 環	-4	口径(13.1) 高(4.1) 底(5.6) 口~底 写	①細・灰色鉄少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	
8	須恵器 環	-1	口径(14.0) 高一 底- 口~体 写	①細・白色鉄少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	ロクロ整形(右回転)。	
9	須恵器 壺	-23	胴部片 (縦6.4 横10.0)	①細・白色鉄少量 ②選 元・硬 ③黒褐色	外面 胴部平行叩き。 内面 胴部背側叩き。	流れ込みか。
10	須恵器 壺	-6	胴部片 (縦5.0 横6.0)	①細・灰色鉄少量 ② 還元・硬 ③灰色	外面 胴部格子叩き。 内面 胴部背側叩き。	流れ込みか。
11	須恵器 壺	+3	胴部片 (縦5.8 横5.1)	①細・白色鉄少量 ② 還元・硬 ③灰色	外面 胴部格子叩き。 内面 胴部背側叩き。	流れ込みか。
12	土師器 輪切口	+11	口径- 高一 底- 破片	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③黒褐色		
13	磁石	+3	材質 砂岩。長さ7.3cm 幅5.3cm 厚さ3.7cm 重さ200g。因上方と下方は、旧時の割れ口。使用は、表面胴部の 4面。研磨面は少なく、ていねいな使用。主体は、金属。手持磁。			
14	白玉	-10	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.3cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 重さ2g。上・下平面は、刺織のまま。側面は、研磨。 穿孔は、一方向。管玉を割ったと思われる敲打痕あり。91号住居よりの流れ込み。他に円板1、チップ1あり。			

第93号住居跡

位置 2区30C10

写真 PL.65

形状 長辺4.26m 短辺3.18mで隅丸長方形を呈
す。東および西壁は立ち上がりやや不明瞭である。

面積 13.56m² 方位 N-108°-E

埋没土 上層は細粒で白色灰物の混入がかなり多く
若干の炭化物を混入。他に目立った粒子はあまり見
られない。下層はロームブロックおよび炭化物・焼

土粒をかなり混入する。

床面 中央部分は比較的平坦であったが、周辺部に行くとつれて一様でなくなる。床面や竈の状況から作り直している可能性がある。中央やや南西寄りに径約1m深さ0.3mの円形の床下土坑を検出した。

竈 東壁の中央やや南よりに作られており、本体はやや不定形な形に壁外へ作り出されている。焚口部に石は見られなかったが、奥まった部分には両壁に

第3章 検出された遺構と遺物

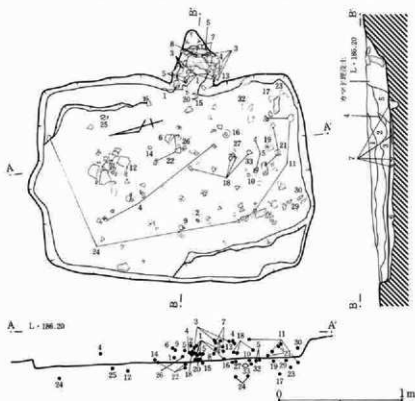
砂岩が、これらを渡すように長さ50cm程の河原石が載せられていた。また左側には羽釜の破片を補強材として用いた状況が見られた。その他にも構築材として用いられていた礫が内部に崩れた状態で検出されている。煙道部の立ち上がりは比較的低角度を示

していた。

柱穴 確認されなかった。

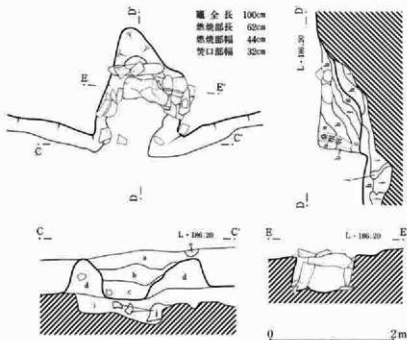
貯蔵穴 南東隅に確認された。約0.3mの深さを持ち中から少量の土器片が出土している。

壁周溝 確認されなかった。



土層注記

1. 黒褐色土 白色軽石混入。細粒で締り強い。
2. 暗褐色土 炭化物、焼土粒少量混入。細粒で締り強い。
3. 褐色土 黄褐色土大ブロック炭化物、焼土粒含む。細粒で締り強い。
4. 黄褐色土ブロック
5. 暗褐色土 炭化物、焼土粒多量を含む。細粒でやや粘質。
6. 黒褐色土 細粒、粘質。炭化物、焼土粒、ローム小ブロック含む。
7. 黒褐色土とロームの混合土



竈 全長 100cm
燃焼部長 62cm
燃焼部幅 44cm
焚口部幅 32cm

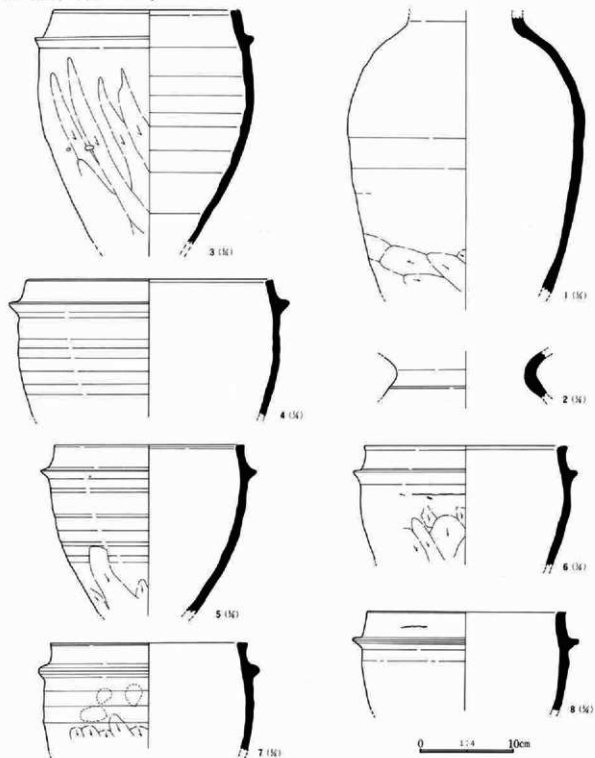
土層注記

- a. 黒褐色土 細粒で粘質。炭化物少量混入。堅い。
- b. 褐色土 細粒で粘質。炭化物ローム小ブロック混入。
- c. 明褐色土 bに類似。下部に焼土、炭化物を多量に含む。
- d. 暗褐色土 細粒で粘質。炭化物若干含む。堅くしまっている。
- e. ロームと褐色土の混合土
- f. 褐色土 焼土、炭化物多量混入。細粒、粘質。
- g. 暗赤褐色土 焼土塊、炭化物多量混入。
- h. 暗赤褐色土 焼土の大塊多量。
- i. 暗褐色土 ローム小塊少量混入。
- j. ロームブロック

第334図 第93号住居跡実測図

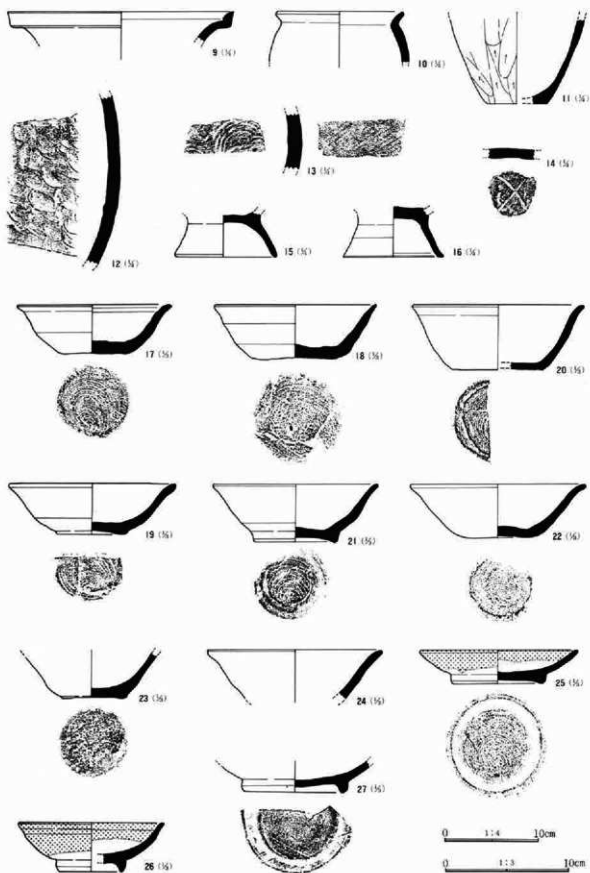
遺物 埋設土中からかなり多くの土器類が出土している。多くは床面よりやや浮いており床面直上からのものは少ない。土師器の甕・坏類に混じり灰釉陶器片・緑釉陶器片が見られる。さらに窠内からは複数の羽釜片が出土している。

備考 比較的調査区の高い位置にあり、平安時代のものとしてはかなり遺存状態の良かった住居跡である。出土遺物もややまとまっている。本住居跡の年代観は出土遺物より10世紀後半と考えられる。(小野)

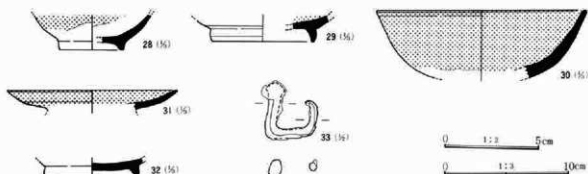


第335図 第93号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第336図 第93号住居跡出土遺物実測図(2)



第337図 第93号住居跡出土遺物実測図(3)

第93号住居跡出土遺物観察表 (PL.163, 164, 165)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 壺	竈内	頸(12.2) 胴(25.0) 口~胴 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	粗作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 胴部 寛削り。内面 胴部無で。	甕材として転用。
2	須恵器 壺	+29	頸(15.0) 胴部片	①普通・白色減少量 ② 酸化・硬 ③褐色	粗作り後、ロクロ整形(右回転)。	
3	須恵器 羽釜	竈内	□29.0 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・白色減少量 ② 酸化・普通 ③褐色	口縁部はやや内傾する。粗作り後、ロクロ整形 (右回転)。罫は貼り付け。胴部は斜め削り。	甕材として転用。
4	須恵器 羽釜	竈内	口(26.0) 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・白色減少量 ② 酸化・硬 ③灰褐色	口縁部は内傾する。粗作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	甕材として転用。
5	須恵器 羽釜	竈内	口(20.2) 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③褐色	口縁部はほぼ直立する。粗作り後、ロクロ整形 (右回転)。罫は貼り付け。胴部下半は寛削り。	甕材として転用。
6	須恵器 羽釜	+25	口(21.4) 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部は内傾する。粗作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。胴部は寛削り。	
7	須恵器 羽釜	竈内	口(21.0) 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	口縁部は直立する。粗作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。胴部は斜め削り。	指圧痕あり。甕材として転用。
8	須恵器 羽釜	竈内	口(21.0) 高一 底一 口~胴 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は直立する。粗作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	甕材として転用。
9	須恵器 大甕	+25	口(24.0) 高一 底一 口縁部片	①細・白色減少量 ②還元 元・硬 ③灰色	粗作り後、ロクロ整形。断面が3層になっ ている(内外が灰色、中央が灰黄色)。	
10	須恵器 壺	+6	口(13.4) 高一 底一 口~胴 破片	①普通・白色減少量 ② 還元・軟 ③褐色	粗作り後、ロクロ整形。	
11	須恵器 羽釜	-6	口一 高一 底6.3 胴~底 ⅴ	①普通・灰色減少量 ② 酸化・硬 ③褐色	粗作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部下半~底 部寛削り。	
12	須恵器 大甕	-8	胴部片 ⅴ	①細・白色減少量 ②還元 元・硬 ③黒褐色	粗作り後、ロクロ整形。外面は無で、内面は 叩き後、無で削し。	
13	須恵器 大甕	竈内	胴部片	①細・白色減少量 ②還元 元・硬 ③灰色	外面 斜め格子叩き。 内面 背面叩き。	
14	須恵器 壺	+8	底部片	①細・白色減少量 ②酸化 元・硬 ③鈍い黄褐色		背に「×」のへう摺り と文。空凹。
15	須恵器 台付壺	竈	口一 高一 胴10.5 台部	①普通・白色減少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	粗作り後、ロクロ整形。	
16	須恵器 台付壺	-2	口一 高一 胴10.7 台部	①細・灰色減少量 ②酸化 元・硬 ③無色	粗作り後、ロクロ整形。	
17	須恵器 坏	貯蔵穴中	□12.4 高3.8 底5.4 口~底 ⅴ	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③灰黄色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
18	須恵器 坏	+15	□13.0 高4.2 底7.0 口~底 ⅴ	①細・灰色減少量 ②還元 元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
19	須恵器 坏	-2	口(13.0) 高3.7 底5.5 口~底 ⅴ	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
20	須恵器 竈	竈内	口(13.7) 高5.0 底(7.2) 口~底 ⅴ	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。高台穴損(付高台)。	
21	須恵器 竈	+12	□13.1 高4.5 底6.4 口~台 ⅴ	①細・白色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
22	須恵器 竈	-4	口(14.0) 高一 底一 口~底 ⅴ	①細・灰色減少量 ②酸化 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。高台穴損(付高台)。	内外共底面は黒 褐色。

第3章 検出された遺構と遺物

図号	別称 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
23	須恵器 環	貯蔵穴中 -14	口一 高一 底5.2 体~底 3/4	①細・灰色底微量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
24	須恵器 環	-23	口(14.0) 高一 底一 口~体 1/4	①細・灰色底少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
25	灰釉陶 器 皿	-2	口12.4 高2.7 底7.0 口~底 1/4	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
26	灰釉陶 器 埴	+11	口(11.4) 高3.9 底(4.9) 口~底 3/4	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
27	灰釉陶 器 皿	+3	口一 高一 底7.8 体~底 3/4	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
28	灰釉陶 器 埴	埋没土	口一 高一 底(5.2) 体~台 破片	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
29	灰釉陶 器 皿	床直	高台部片	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
30	灰釉陶 器 埴	+18	口(16.4) 高一 底一 口~底 3/4	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。	
31	灰釉陶 器 皿	埋没土	口(13.6) 高一 底一 口~体部片	①細・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	②選 ロクロ整形(右回転)。	
32	緑釉陶 器 埴	-7	口一 高一 底7.3 高台部 3/4	①細・夾雑物なし 元・硬 ③緑色	②選 ロクロ整形(右回転)。付高台。	
33	鉄製品 不明	-2	合成長7.1cm	全体が、「コ」の字状に曲げられ、先端部は尖る。横断面形は、隅丸長形を呈するため、釘を曲げたかかもしれない。しかし、左方向の錆跡は少なく、精緻を思わせる。		

第95号住居跡

位置 3区07C09 写真 PL.65

形状 一部分のみの検出であり、不明。

面積 不明。 方位 不明。

埋没土 谷地に堆積した黒褐色土中に確認したため、埋没土と同様と思われる。また、黒褐色土を掘り込んだ形跡は確認されなかった。

床面 竈残骸の前面に堅く踏みしめられた面を検出した。床の形成は、客土によるものでなく、地山をそのまま利用したものと考えられる。

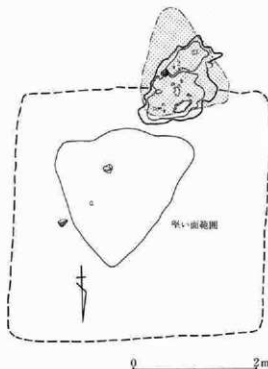
竈 住居南側にあったと考えられる。調査時にはほとんど原型を留めていなかったが、形成時には床面より25cm程掘り込み、その上に灰色粘土を主体とした土と石材で構築したものと思われる。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝 検出されなかった。

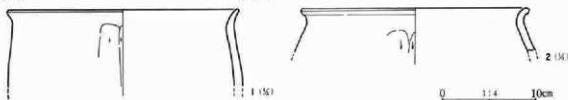
遺物 土釜・須恵器埴底部など、遺物は少なかった。

備考 本住居跡の年代観を遺物より10世紀後半とした。

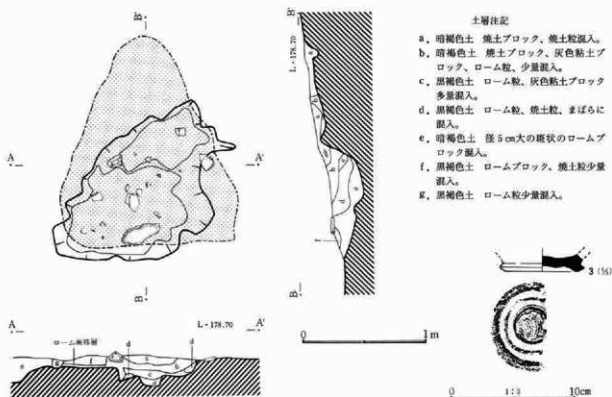
(鹿沼)



第338図 第95号住居跡実測図



第339図 第95号住居跡出土遺物実測図(1)



第340図 第95号住居跡竈実測図及び出土遺物実測図(2)

第95号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	遺物 器形	出土位置 残存状態	口径 高さ 底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	埋没土	口(24.6) 高一 底一 口径~胴部片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横溝で。外面胴部は縦溝磨り。 内面胴部は撫で。	
2	土師器 土 釜	竈内	口(24.6) 高一 底一 口径~胴部片	①普通・灰色白色紅少量 ②酸 化・硬 ③褐色	内外共口縁部横溝で。外面胴部は縦溝磨り。 内面胴部は撫で。	
3	須恵器 甕	埋没土	口一 高一 台(5.5) 高台部	①細・灰色紅微量 ②酸 化・硬 ③明赤褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	

第96号住居跡

位置 2区49B48

写真 PL.65

形状 谷地に面した緩斜面にあり、住居西端を溝などにより削平されており、明確ではないが、推定で一辺が3.40mの隅丸方形を呈すると思われる。

面積 10.87㎡(推定) 方位 N-180°-W

埋没土 ローム粒を含む黒褐色土が主体をなす。東側の壁付近では三角堆積をしている。

床面 住居東側端に確認された。確認面でローム層を28cm程掘り込み、その上に薄く黒褐色土と黄褐色土の混合土を客土して床面としている。なお、壁高は、確認面で18~27cmを測る。

竈 南西隅に斜面を利用する形で構築されている。

施設は、すべて屋外に出ており、燃焼部に支脚と天井井石として利用された雲母石英片岩が残されていた。竈埋没土中に粘土ブロックが出土していることから、造作材として粘土を竈壁に貼り付けるようにしていたことが推測される。

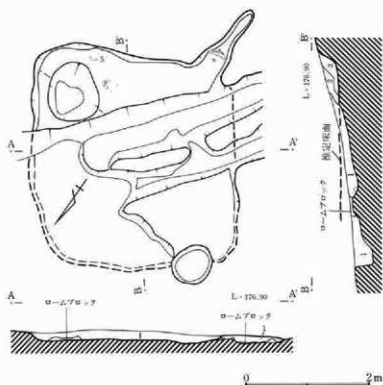
柱穴・壁周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 北東隅に径92cm深さ23cmの規模で円形のもものが確認された。

遺物 埋没土中ではあるが、灰釉陶器碗の底部が出土している。また、砥石として利用されている緑色片岩も出土している。

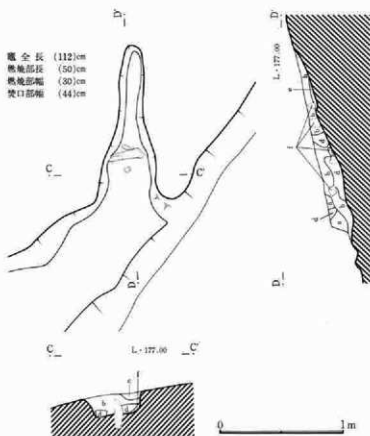
備考 本住居跡の年代観を出土遺物より11世紀前半としたい。(鹿沼)

第3章 検出された遺構と遺物



土層注記

1. 茶褐色土 A軽石、ローム粒多量混入。新しい遺跡か。
2. 黒褐色土 ローム粒混入。
3. 黒褐色土 2に類似。ローム粒多量。

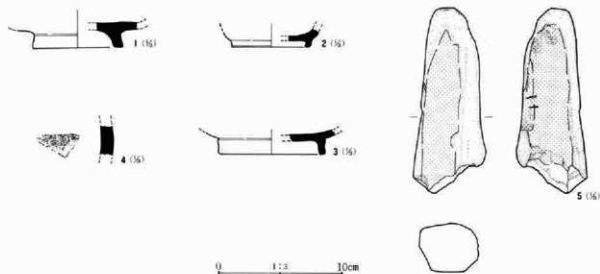


壘全長 (112)cm
 壘幅部長 (50)cm
 壘幅部幅 (30)cm
 壘口部幅 (44)cm

土層注記

- a. 黒褐色土 A軽石、ローム粒、焼土粒混入。細粒だが、締りの弱い土。
- b. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、粘土ブロック混入。炭化物粒少量混入。粘性強い。
- c. 灰褐色土 焼土粒混入。カマド材 粘質。
- d. 黒褐色土 ローム粒少量混入。もろい。
- e. 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒、粘土ブロック混入。細粒。
- f. 焼土ブロック

第34|図 第96号住居跡実測図



第342図 第96号住居跡出土遺物実測図

第96号住居跡出土遺物観察表 (PL-)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 埴	埋没土	高台部片	①胎・夾雑物なし 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2	須恵器 埴	埋没土	高台部片	①胎・白色藍微量 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。覆り出し高台。	
3	灰輪陶 器 埴	埋没土	高台部片	①胎・夾雑物なし 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
4	須恵器 埴	埋没土	頸部片 (縦2.5 横3.2)	①普通・灰色藍微量 元・硬 ③灰白色	② 紐作り。表状蓮瓜文。	
5	砥石	+15	材質 緑色片岩。長さ14.4cm 幅5.1cm 厚さ4.2cm 重さ450g。自然石利用。図下方は旧時欠損。使用は、表面のみ。図中の傷は刃ならし傷。主体は、夾雑物の凸出がないため、全無。			

第97号住居跡

位置 2区44B45 写真 PL.65

形状 推定ではあるが、一辺が4.20mの隅丸方形を呈すと思われる。

面積 17.12㎡ (推定) 方位 N-58°-E

埋没土 ローム粒・炭化物粒を若干含む黒褐色土が主体をなす。

床面 谷地部の試掘トレンチのため、宍程が削り取られており、南東部でかろうじて、黒色土中に堅い面を確認した。特に、電前面に堅い部分があった。掘りかたの調査中に円形をした土坑を確認したが、床下土坑かは、不明である。壁高は、確認面で18~34cm程であった。

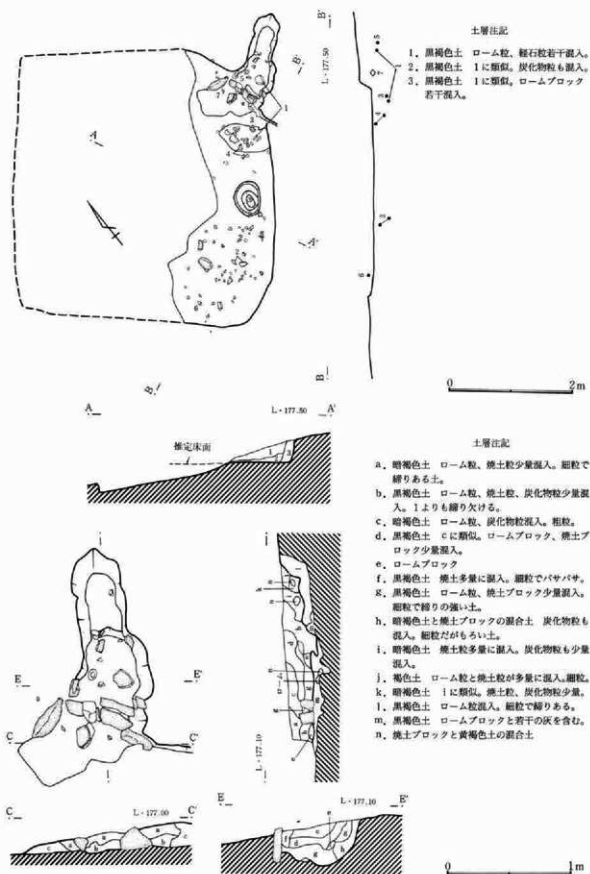
竈 住居南東隅にある。施設は、すべてが屋外に構築されており、壁のラインに沿って鳥居状に焚口部が形成されている。天井石は、3つに割れて出土し

ている。燃焼部の壁にも石が数個あり、一部石組を呈している。燃焼部は、ほぼ平坦で、煙道部は斜面に沿って緩やかに立ち上がっている。

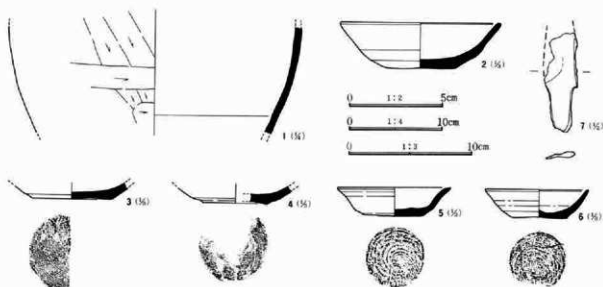
柱穴・貯蔵穴・壁周溝 検出されなかった。

遺物 竈周辺および南西部よりの出土が多かった。竈内から酸化焙焼成の須恵器小皿が出土している。また、床面全体より粒状の鉄滓が大変多く出土し、電前面からは鉄製刀子の破片が出土しているのも特徴である。

備考 谷地に面した緩斜面に占地した住居跡であり、その谷地では現在でも少量ながら水が流れている。多量の鉄滓出土状況より本住居跡が小鍛冶遺構である可能性か、あるいは、付近に小鍛冶遺構の存在が伺える。その意味では、尾根の上にある第90号・110号住居跡との何等かの関連性が考えられる。年代観は、出土遺物より11世紀前半としたい。(鹿沼)



第343図 第97号住居跡実測図



第344図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表 (PL.165)

図番	器物 器形	出土位置	口径 高さ 残存状態	底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽蓋	竈内	胴部 残		①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。胴部は原形 り。	
2	須恵器 杯	-20	口径12.8 高さ3.6 底5.5 ほぼ完形		①普通・灰色白色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
3	須恵器 杯	-17	口径 高一 底(6.3) 体~底 欠		①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
4	須恵器 杯	-12	口径 高一 底(5.0) 体~底 欠		①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
5	須恵器 皿	竈内	口径9.0 高さ2.2 底4.8 完形		①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	内面に黒褐色の 付着物あり。
6	須恵器 皿	+10	口径8.2 高さ2.1 底4.4 ほぼ完形		①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
7	刀子	竈	残存長5.2cm				両端部は、旧態のまま。平造り。基部の基泥は丸味を帯び、特徴的。刃区、棟区ともあり。刃部側におずかながら、砥ぎ出しの種あり。錆化は顕著でなく、良鉄を思わせる。

第98号住居跡

位置 2区16C12 写真 PL.66

形状 長辺4.82m短辺4.74mの隅丸長方形を呈する。

面積 24.37㎡(推定) 方位 N-73°-E

埋没土 淡褐色土の小塊を斑に含む細粒で粘質の褐色土が主体をなす。調査の途中で住居範囲が広がられたため、北側・西側は明確につかめなかった。

床面 確認面でローム層を60cm程掘り込み、その上に淡褐色土と黒褐色土の混合土を15~20cm程貼って床面を形成している。掘りかたの調査中に住居中央から円形の床下土坑を1つ確認した。なお、壁高は、確認面で16~47cmを測った。

竈 東壁やや南寄りにある。すべて屋外に構築されており、壁に沿って焚口部の石が2個確認できた。

材質は雲母石英片岩。造作材は粘土を貼って構築したと考えられる。燃焼部は播鉢状にへこんでおり、煙道部にかけて、緩やかに立ち上がっている。

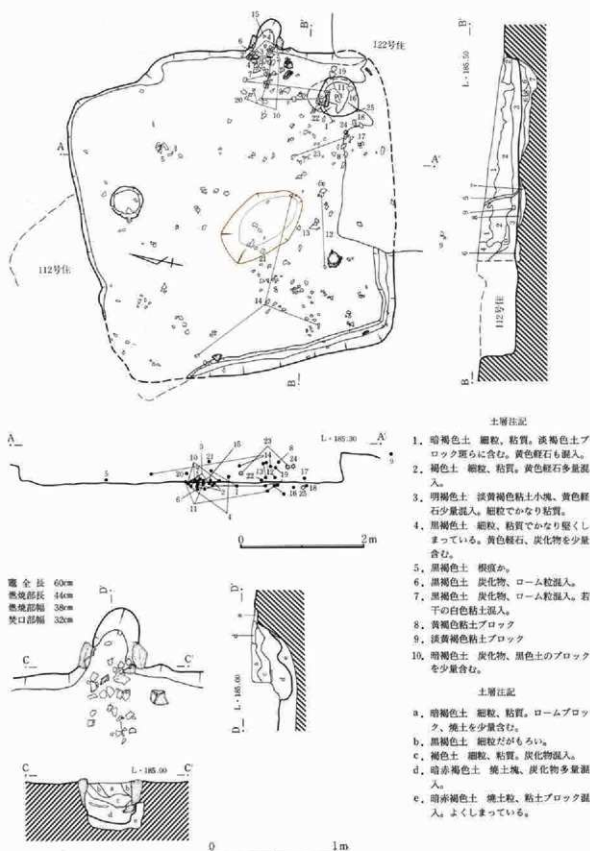
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 竈向かって右、南東隅に確認された。形状は長軸84cm短軸64cmを測る楕円形で深さは27cm。

壁周溝 南西から西にかけて幅20~34cm深さ3~5cmの規模で確認された。

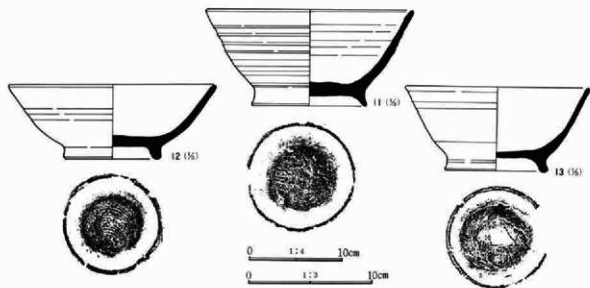
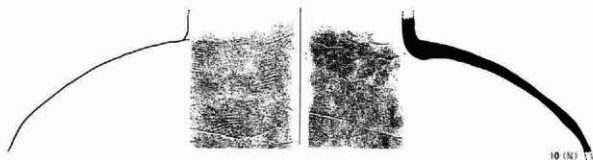
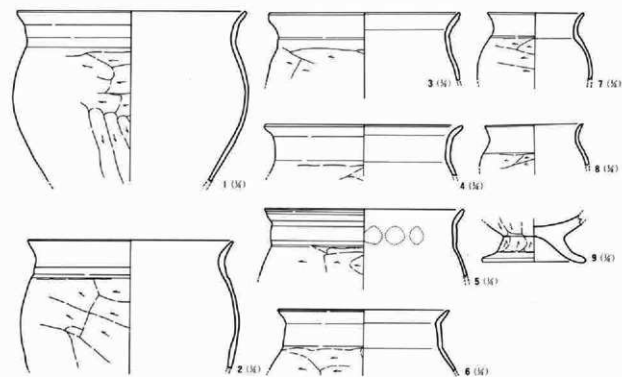
遺物 床面全体から比較的多く出土した。土師器・須恵器塊類が多かったが土製の紡錘車・土鍾・蛇紋岩製の紡錘車なども出土した。

備考 第112号・第122号住居跡と重複。新旧関係は第112号・第98号・第112号の順に古い。本住居跡の年代観は出土遺物より9世紀後半とした。(鹿沼)



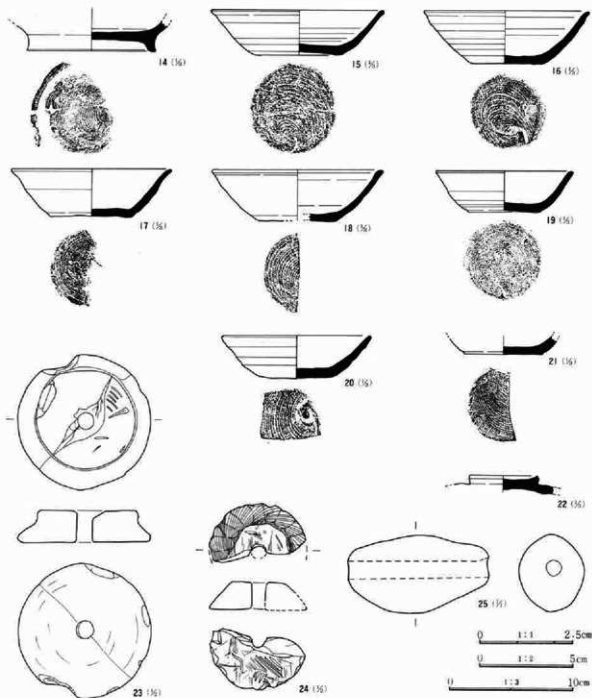
第345図 第98号住居跡実測図

第5節 平安時代の住居跡と遺物



第346図 第98号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第347図 第98号住居跡出土遺物実測図(2)

第98号住居跡出土遺物観察表 (PL.165、166)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 壺	-2	口(24.1) 高一 底一 口~胴 瓦	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
2	土師器 壺	竈内	口(22.0) 高一 底一 口~胴 瓦	①細・黒色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は斜め篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
3	土師器 壺	+9	口(20.5) 高一 底一 口~胴 瓦	①細・黒色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は横篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は篋撫で。	
4	土師器 壺	竈内	口(20.8) 高一 底一 口~胴 瓦	①細・黒色灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	

種別	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
5	土師器 壺	+4	口(21.1) 高一 底一 口~底 互	①細・灰色微少量 ②微 化・普通 ③鈍い褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は横篋形。口縁部は横溝で。内面胴部は撫で。	内面に指圧痕あり。
6	土師器 壺	壺内	口(18.2) 高一 底一 口~底 互	①細・黒色微少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は横篋形。口縁部は横溝で。内面胴部は撫で。	
7	土師器 小壺	壺前	口(10.1) 高一 底一 口~底 互	①細・黒色微少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部は横溝で。外面胴部は横篋形。内面胴部は撫で。	
8	土師器 小壺	+23	口(10.5) 高一 底一 口縁部片	①細・黒色微少量 ② 酸化・普通 ③灰褐色	内外共口縁部は横溝で。外面胴部は横篋形。内面胴部は撫で。	
9	土師器 台付壺	住居外	口一 高一 底8.2	①普通・黒色微少量 ②酸化・普通 ③灰褐色	外面 底部~台部は縦篋形。内面 底部・台部は撫で。	
10	須恵器 大 壺	+10	頸~肩	①細・灰色微少量 ②混 元・硬 ③暗灰色	紐作り後、口口整形(右回転)。外面 一部平行叩き。内面 指押え。	
11	須恵器 壺	-12	口16.3 高7.6 底9.0 口~台 互	①細・黒色微少量 ② 混元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。付高台。	
12	須恵器 壺	+1	口(16.3) 高5.8 底7.6 口~台 互	①細・白色微少量 ②混 元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。付高台。	
13	須恵器 壺	+9	口14.5 高6.5 底8.1 口~台 互	①細・灰色微少量 ②混 元・軟 ③暗灰色	口口整形(右回転)。付高台。	
14	須恵器 壺	+4	口一 高一 底10.1 体~台 互	①細・黒色白色微少量 ②混元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。付高台。	
15	須恵器 坏	壺内	口13.6 高3.5 底6.7 口~底 互	①細・灰色微少量 ②微 化・硬 ③暗赤褐色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
16	須恵器 坏	床直	口13.0 高4.1 底5.7 口~底 互	①細・白色微少量 ②混 元・軟 ③黒褐色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
17	須恵器 坏	+9	口12.8 高3.6 底6.4 口~底 互	①細・灰色微少量 ②混 元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
18	須恵器 坏	+1	口(13.5) 高一 底一 口~底 互	①細・白色灰色微少量 ②混元・軟 ③灰黄褐色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
19	須恵器 坏	+24	口(19.9) 高3.2 底6.0 口~底 互	①細・灰色微少量 ②混 元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
20	須恵器 坏	+24	口(12.0) 高3.4 底(6.0) 口~底 互	①細・白色微少量 ②混 元・軟 ③灰色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
21	須恵器 坏	+28	口一 高一 底(6.2) 体~底 互	①細・白色微少量 ②混 元・硬 ③灰色	口口整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
22	須恵器 坏 蓋	+11	胴部	①細・黒色微少量 ② 混元・硬 ③灰白色	口口整形(右回転)。柄は貼り付け。	
23	紡輪車	+14	材質 土製品。長軸7.1cm 短軸5.3cm 厚31.7cm 孔径0.8cm 重さ28g。発見時には、平分に割れた状態で出土。長軸面に、同心円状の溝あり。使用痕み。穿孔は、焼成時以前。粘土に、白色粉物少量混入。鈍い黄褐色。			
24	紡輪車	+29	材質 総絞岩。長軸5.2cm 短軸3.0cm 厚31.3cm 孔径0.7cm 重さ86g。平欠損。刃物による削り調整後、研磨仕上げ。穿孔は、一方向。長軸面には傷が多い。側面は、研磨時の擦痕が、無数にある。			
25	土 鏝	+3	材質 土製品。長さ3.8cm 幅2.0cm 厚さ1.8cm 孔径0.4cm 重さ10g。鈍い黄褐色。穿孔は、焼成以前か。			

第99号住居跡

位置 3区44C12 写真 PL.66

形状 長辺3.46m(推定) 短辺2.76mの南北にやや長い隅丸長方形を呈する。東に下がる斜面部にあるため、約半分は削平されている。

面積 9.12㎡ 方位 N-140°-W

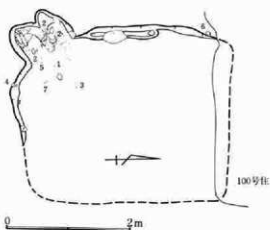
埋没土 上部層は東に流れる二次堆積土と考えられ、下層は地山の粘土粒子を若干混入する軟粘質土である。

床面 壁高は西壁側が最も高く約15cm程である。南壁および床面については傾斜地にあるため、谷側の

東半分は欠失している。遺存が確認された部分についてはほぼ平坦で、掘り込んだ地山を踏みしめて床面としている。

竈 南西隅に首を振るように接して、2カ所を検出した。作り替えを行っており左が古く、右のものが新しい。古い方の竈奥部には構築材として用いられていたと思われる石が出土しており、埋土も人為的に埋められた状況が観察されている。新しい竈も両袖部はかなり壊れており、前面には葉・羽蓋の破片が見られた。両者とも内面の焼土化は著しく、埋土下層に多量に認められた。

第3章 検出された遺構と遺物



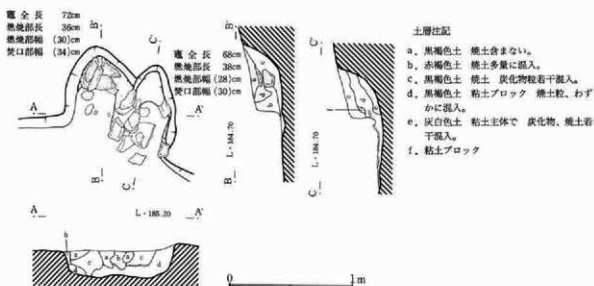
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

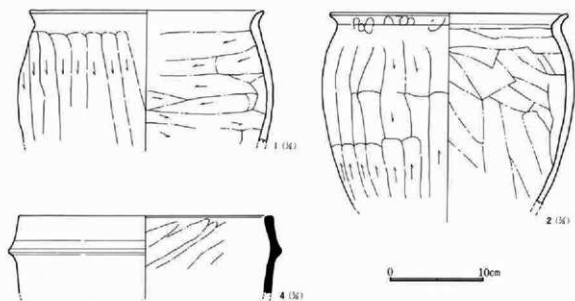
壁周溝 西壁、竈寄りに最大幅24cm 深さ約3cm 長さ1.5m程のものが確認されている。

遺物 竈焚口部より羽釜・埴類が出土している。

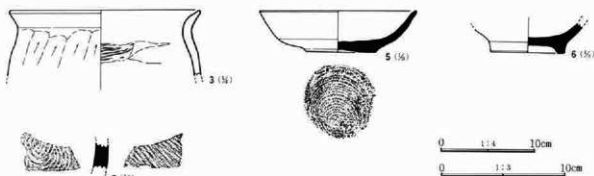
備考 北側に第100号住居跡が僅かに重複しているが、主軸方向・形態・規模等が良く似ている。出土遺物から見て、本住居跡の年代観は11世紀初前半と思われる。(小野)



第348図 第99号住居跡実測図



第349図 第99号住居跡出土遺物実測図 (1)



第350図 第99号住居跡出土遺物実測図(2)

第99号住居跡出土遺物観察表 (PL.166, 167)

図録	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 土釜	+14	口(25.2) 高一 底一 口~胴片	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部は縦篋作り。 内面 胴部は縦撫で。	
2	土師器 土釜	電内	口(25.2) 高一 底一 口~胴片	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・普通 ③暗褐色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部は縦篋作り。 内面 胴部は縦撫で。	
3	土師器 土釜	+16	口(30.3) 高一 底一 口~胴部片	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い橙色	内外共口縁部横撫で。外面 胴部は斜め篋作り。 内面 胴部は縦撫で。	
4	須恵器 羽釜	+20	口(27.1) 口~胴部片	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍い橙色	口縁部はやや内傾する。底作り後、ロクロ整形 (右回転)。脚は貼り付け。	
5	須恵器 坪	+24	口12.6 高4.2 底5.2 丸形	①細・白色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
6	須恵器 埴	+3	口一 高一 台6.0 底部片	①普通・黒色鉄少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付台白。	
7	須恵器 壺	+15	胴部片 (底3.0 横6.0)	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 胴部平行叩き。 内面 胴部背側叩き。	

第100号住居跡

位置 3区44C10 写真 PL.66

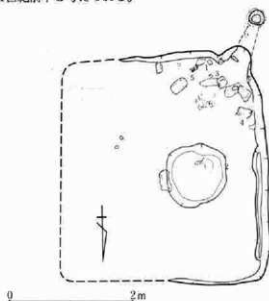
形状 長辺3.68m 短辺3.32m(推定)の南北に長い
隅丸長方形を呈す。面積 11.73m² 方位 N-159°-W埋没土 地山の軟粘質土および炭化粒子を若干混入
する黒褐色土であるが、上層は攪乱土の混入も多い。
床面 地山の粘土層を掘り込み、そのまま地床とし
ている。中央に埋土中に粘土を含む円形の落ち込み
あり。その他焼土化した凝灰岩が床面上にあり、若
干の凹凸を持つ。竈 南西隅に設けられている。前面に粘土ブロッ
ク・石などが散在し、中に袖材として用いられてい
たと思われる埴輪片が検出されている。竈の壁外へ
の掘り出しは少なく煙道・煙だし孔が観察され、遺存
状態は良好であった。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

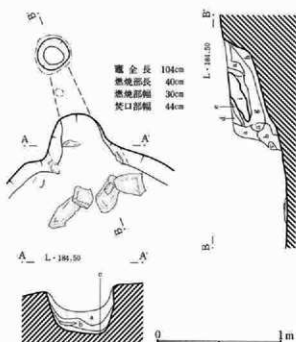
壁周溝 一部(西壁下)に長さ1.7m程見られた。

遺物 埴輪片の他に羽釜・壺の破片が僅かに出土。

備考 第99号住居跡の北側に一部重複する。時期は
11世紀前半と考えられる。

第351図 第100号住居跡実測図

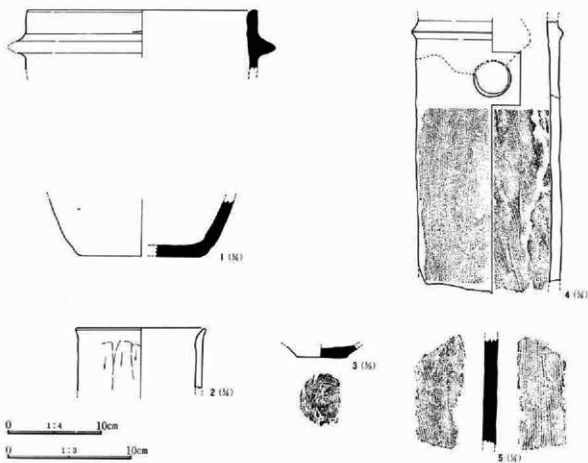
第3章 検出された遺構と遺物



第352図 第100号住居跡竈実測図

土層往記

- a. 黒褐色土 ローム粒、炭土粒若干混入。
- a'. 黒褐色土 aを基調とするが、ボロボロした感じの土。
- b. 黒褐色土 炭化物、炭土粒混入。堅い。
- c. 赤褐色土 粘土ブロック、焼土塊が主体。
- d. 黒褐色土 炭化物若干混入。粘質で堅い。
- e. 暗赤褐色土 やや硬土化した地山の粘土。
- f. 赤褐色土 焼土。
- k. 黄褐色土 ローム粒若干混入。
- h. 明褐色土 ローム粒、粘土ブロック混入。
- i. 黄灰白色土 地山粘土。



第353図 第100号住居跡出土遺物実測図

第100号住居跡出土遺物観察表 (PL.167)

品名	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①土質 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽 釜	-5	口縁部片と底部片	①粗・灰色鉄多量 ②酸化・普通 ③鈍い棕色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。罫は貼り付け。	
2	土師器 壺	+21	口(14.0) 高一 底一 口一割 破片	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部横断で、外面割部は縦筋有り。内面割部は撫で。	
3	須恵器 皿?	+10	底部片	①細・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
4	須 輪	床直	体部	①普通・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共刷毛目。	付近の古墳より運びこみ、甕材として使用したらしい。
5	須 輪	+5	体部片	①普通・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共刷毛目。	

第102号住居跡

位置 2区20C14 写真 PL.67

形状 長辺3.58m 短辺3.10mのやや南北に長い隅丸長方形を呈す。各壁共にほぼ垂直に立ち上がり壁高は30~50cmあり、遺構そのものとしてはかなり遺存状態は良好であった。

面積 11.0m² 方位 N-140°-E

埋没土 上層は比較的細粒でやや粘性を持ち、かなりしまっている。自然埋没で下層にはロームブロックの混入が見られる。

床面 かなり平坦で、一部黒色土混じりのロームで

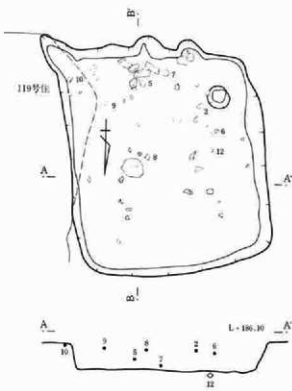
貼床を行っている。

竈 南東隅に設けられている。0.7m程の長さを持つ。内部には袖などの構築材としての石や粘土はほとんど検出されなかった。内面は側面・下面共に良く焼けており、炭化物の混入も見られた。支脚等の施設は見られなかった。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 南西隅寄りに径36cm深さ16cmの円形の掘り込みが見られ、その可能性があるが断定しがたい状況である。

壁周溝 確認されなかった。



第354図 第102号住居跡実測図



土層記

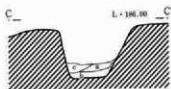
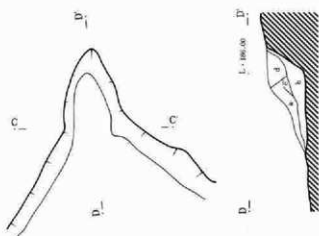
1. 暗褐色土 細粒で粘性が強い。堅くしまっている。細粒の白色軽石を多量に含む。(目軽石ではない)
2. 褐色土 ローム小塊、黄色軽石を比較的多く含む。細粒で粘質に富み、堅くしまっている。
3. 暗褐色土 処々に大きなロームブロック混入。細粒で粘性に富む。
4. 黒色土 細粒、粘質。

0 2m

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 埋没土中、床面上より羽釜・甕・坏類の破片が若干出土している。小片ではあるが布目瓦も1点出土している。さらに砂岩の砥石状製品、鉄製品も見られる。

備考 東側に接する第119号住居跡を一部切って作られている。出土遺物などから見て帰属時期は11世紀の前半と考えられる。 (小野)



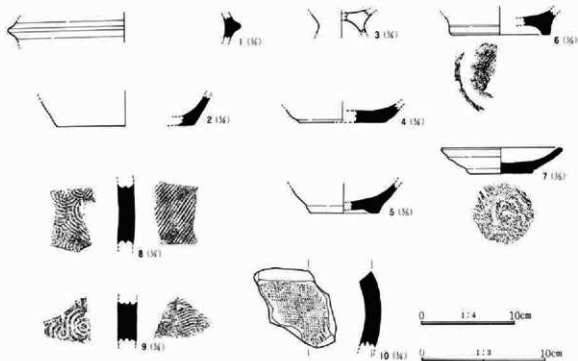
竈全長 70cm
 竈壁部長 50cm
 竈壁部幅 24cm
 竈口部幅 30cm



土層注記

- a. 褐色土 細粒、粘質。焼土塊、炭化物混入。
- b. 暗褐色土 細粒、粘質。黄色軽石少量混入。
- c. 褐色土 細粒、粘質。焼土の大塊多量に混入。
- d. ロームと褐色土の混合土
- e. 焼土 ローム、褐色土の混合土。

第355図 第102号住居跡竈実測図



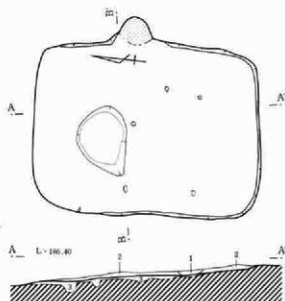
第356図 第102号住居跡出土遺物実測図(1)



第357図 第102号住居跡出土遺物実測図(2)

第102号住居跡出土遺物観察表 (PL.167)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	埋没土	胴部片	①細・灰色灰少量 ②酸化・硬 ③灰褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。筒は貼り付け。	
2	須恵器 羽釜	+32	底(14.5) 底部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・硬 ③暗褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)、その後焼成。	
3	土師器 台付壺	埋没土	台部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 台部荒削り。 内面 底部・台部無。	
4	須恵器 坏	埋没土	底部片	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。底部は荒削し。	
5	須恵器 埴	+22	底(5.4) 底部片	①細・白色灰少量 ②還元・軟 ③灰黄色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
6	須恵器 埴	+31	底(7.8) 底部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
7	須恵器 皿	+10	□19.8 高2.0 底5.0 完形	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。底部回転削り。	
8	須恵器 壺	+38	胴部片 (縦5.5 横4.5)	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 胴部平行叩き。 内面 胴部背面叩き。	流れ込みか。
9	須恵器 壺	+39	胴部片 (縦5.5 横4.5)	①細・灰色灰少量 ②還元・硬 ③灰褐色	外面 胴部平行叩き。 内面 背面叩き。	流れ込みか。
10	布目瓦	+41	破片	①普通・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	側面 荒切り。裏面 布目跡。	流れ込みか。
11	紙石	埋没土	材質 砂岩。長さ5.3cm 幅4.5cm 厚8.9, 9.0cm 重さ21g。底面下方に原石面があり、自然石利用証。使用は、それを除き、表面側面に及ぶ。主体は、夾雑物の凸出があり、金属のほか、木など軟質。			
12	罎子 (毛抜)	-1	残存長4.7cm		端部は調査時欠損。横断面は、片側が楕円形。もう一方が、平行形を呈する。鍛えは、縦方向に錆割れがみられ、やや粗鍛造を思わせる。	



土層法記

1. 灰褐色土 細粒。締り弱い。
2. 褐色土 径2~5cm大のロームブロック少量混入。粘質で堅くしまっている。
3. ロームと褐色土の混合土(粘床)



第358図 第103号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第103号住居跡

位置 2区28C12 写真 PL.67

形状 長辺3.66m 短辺2.70mの南北に長い隅丸長方形を呈す。

面積 9.57㎡ 方位 N-85°E

埋没土 遺構上部の削平が著しく層としての堆積は極めて薄い。ロームブロックを含む粗粒で比較的にまりの良い土である。

床面 遺構確認時点で壁および竈はほとんど削平されていた。また床面も一部北側部分は欠失している。

貼床は認められなかった。

竈 東壁中央やや北よりに火床部の焼土痕が確認されたが上部構造は不明である。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 土師器環類の破片がわずかに出土している。

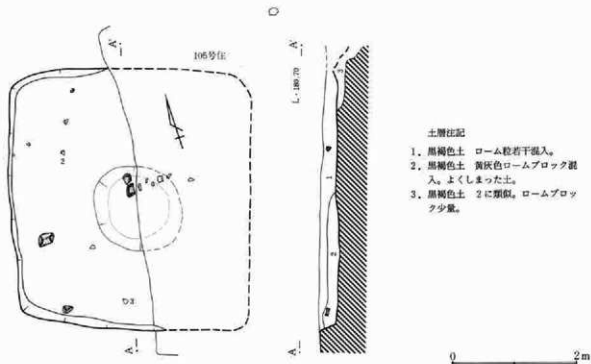
備考 耕作などにより遺存状態は極めて悪く、出土遺物も少ない。時期は9世紀前半と考えられる。



第359図 第103号住居跡出土遺物実測図

第103号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

種別	器類 形状	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 杯	埋没土	口(14.0) 高一 底一 口一底部片	①胎・灰色微鉄少量 ②胎化・普通 ③橙色	外面 口縁部は横撫で、体部は磨削り。 内面 口縁部一底部撫で。	
2	須恵器 杯	埋没土	口(13.0) 口縁部片	①胎・黒色微鉄少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	
3	須恵器 杯	埋没土	底(4.4) 底部片	①胎・白色鉄少量 ②還元・軟 ③暗灰色	ロクロ整形(右回転)。高部は回転糸切り。	



第360図 第104号住居跡実測図

第104号住居跡

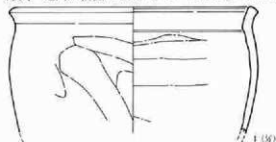
位置 3区27B41 写真 PL.67

形状 北壁は削平されており全容は不明であるが、西壁は垂直に立ち上がりしっかりしている。一辺4m程と思われる。

面積 15.03㎡(推定) 方位 N-20°-E

埋没土 2層に分層でき、上層はロームを若干含み良くしまっている。下層は地山の灰黄色粘土ブロックを含む。

床面 地山の粘性土を用い、5～10cmの厚さで貼床



としている。ほぼ平坦であるが東側は削平されている。

竈 削平されており確認されなかった。

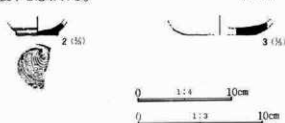
柱穴・貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 土師器の甕、須恵器の坏片がわずかに出土したのみである。

備考 ほぼ中央に床下土坑と考えられる掘り込みが確認されている。径は90cm 深さは40cm程である。

第105号住居跡の西側に重複している。時期は10世紀後半と思われる。(小野)



第361図 第104号住居跡出土遺物実測図

第104号住居跡出土遺物観察表 (PL.157)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 土 基	+14	口径(24.4) 高一 底一 口～胴 互	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で、胴部は撫で。	
2	須恵器 坏	+3	口径一 高一 底(4.5) 底部片	①細・灰色鉄微量 ②酸 化・普通 ③橙褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
3	須恵器 甕	+7	底部片	①細・灰色鉄少量 ②潮 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	

第107号住居跡

位置 2区21C08 写真 PL.67

形状 不明

面積 不明 方位 不明

埋没土 ほとんど削平されているが、若干ローム混入土を確認できた。

床面 ロームを含む褐色土である。残存部分は平坦で、あまり堅くはない。

竈 推定位置は溝と重複しており不明であるが、北壁の位置が最も可能性がある。

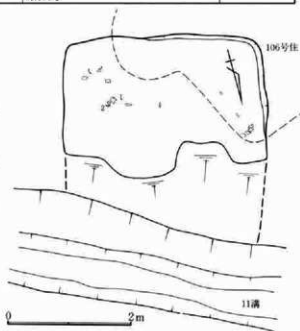
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

壁周溝 検出されなかった。

遺物 土師器甕類。

備考 第106号住居跡の北東部分に重複している。ま



第362図 第107号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

た、第11号溝とも重複しており、これらの遺構により 出土遺物より9世紀後半としたい。(小野)
り北側半分ほど削られている。本住居跡の年代観を



第363図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	-1	口(19.2) 高一 底一 口縁部片	①普通・黒色微紅少量 ②酸化・普通 ③赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
2	土師器 甕	+5	口(18.4) 高一 底一 口縁~胴部片	①普通・灰色微紅少量 ②酸化・普通 ③赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面胴部は篋削り。口縁部は横撫で。内面胴部は撫で。	
3	須恵器 環	埋没土	口(14.0) 口~胴 片	①胎・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③暗赤褐色	ロタロ整形(右回転)。	

第108号住居跡

位置 2区37C04 写真 PL.67

形状 遺構確認時と床面精査時で住居の方・規模が変化した。また、明確に床面範囲・壁などをつかむことができなかったため、推定ではあるが、長辺3.10m 短辺2.30mの隅丸長方形を呈する。

面積 7.10㎡ (推定) 方位 N-46°-E

埋没土 白色ローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む暗褐色土が主体をなす。

床面 確認面で北に向かう斜面を平らに掘り込み、地山の上を床面として使用している。北側の一部分

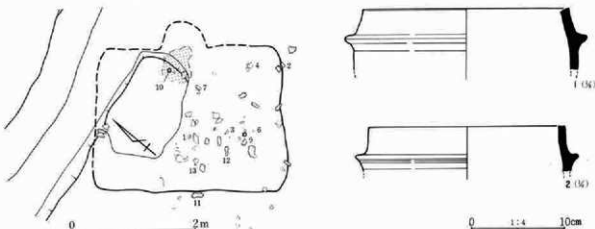
に踏みしめられた面を確認した。

竈 東壁ほぼ中央に焼土・炭化物が集中する範囲があり、セクションの調査の結果、灰も確認した。しかし、残存状態が実に悪く、構造・規模・造作材など把握することができなかった。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝 検出されなかった。

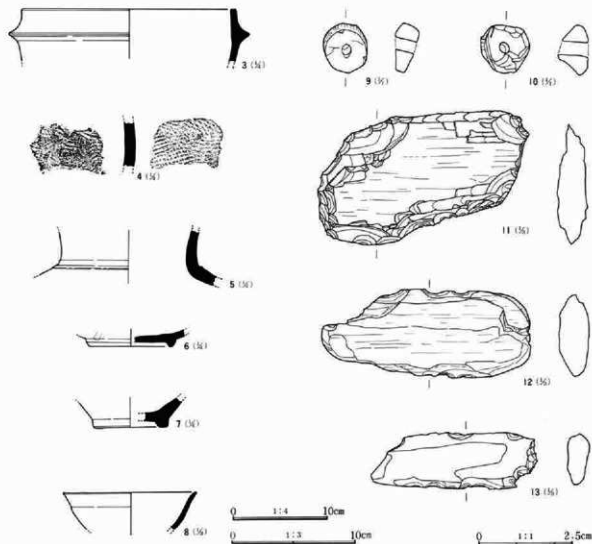
遺物 全体に床面直上よりの出土は少なかった。須恵器羽釜・灰軸陶器底部などがある。また、流れ込みと思われるが、滑石製模造品の白玉2個・雲母石英片岩製のハンマーストーンも出土している。

備考 本住居跡の年代観は10世紀後半。(鹿沼)



第364図 第108号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)

第5節 平安時代の住居跡と遺物



第365図 第108号住居跡出土遺物実測図(2)

第108号住居跡出土遺物観察表 (PL.167)

図番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽 釜	+5	口(22.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色鉄少量 ② 還元・軟 ③灰白色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	
2	須恵器 羽 釜	+36	口(21.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色鉄少量 ② 還元・軟 ③灰色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。罫は貼り付け。	
3	須恵器 羽 釜	+24	口(23.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。罫は貼り付け。	
4	須恵器 要	+18	胴部片 (縦4.5 横7.5)	①普通・白色鉄少量 ② 還元・硬 ③暗灰色	外面 胴部平行叩き。 内面 胴部背面被叩き。	
5	須恵器 要	埋没土	胴部片	①細・白色鉄少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	胴部に自然釉あり。
6	灰釉陶 器	+15	底(6.4) 底部片	①細・夾雑物なし ②還 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	自然釉。
7	須恵器 魂	+6	底(6.0) 底部片	①細・白色鉄少量 ② 還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
8	須恵器 坏	埋没土	口(10.6) 高一 底一 口一割 片	①細・灰色鉄少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
9	白玉	+17	材質 磨石。長さ1.3cm 幅1.1cm 厚さ0.6cm		孔径0.3cm 重さ1.1g。上・下平面は、刺摩面。側面は、研磨。 穿孔は、一方向。流れ込みの可能性が大きい。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種 器形	出土位置	特 徴
10	白玉 床瓦		材質 滑石。長さ1.3cm 幅1.3cm 厚さ0.8cm 孔径0.3cm 重さ1.6g。残存状態が悪い。上・下平面は割離面。側面は、研磨。穿孔は、一方向。流れ込みの可能性が大きい。
11	敲打石	+3	材質 緑色片岩。長さ15.6cm 幅9.8cm 厚さ2.3cm 重さ500g。表・裏の側面に敲打時の割離痕あり。流れ込みの可能性が大きい。
12	敲打石	+10	材質 雲母石英片岩。長さ16.4cm 幅6.8cm 厚さ2.5cm 重さ400g。左右側面に敲打時の割離痕あり。流れ込みの可能性が大きい。
13	敲打石	-1	材質 雲母石英片岩。長さ12.1cm 幅4.4cm 厚さ1.7cm 重さ100g。左右側面に敲打時の割離痕あり。流れ込みの可能性が大きい。

第109号住居跡

位置 2区39C04 写真 PL.69

形状 推定で一辺3.3mの正方形を呈する。

面積 10.26㎡ (推定) 方位 N-88°-E

埋没土 ローム粒が少量混入する黒褐色土が主体。

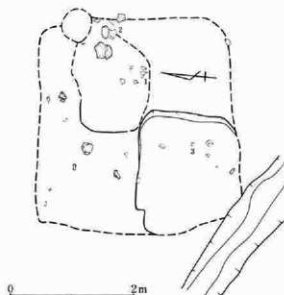
床面 谷地に向かう西下りの緩やかな斜面の黒色土中に占地して床面を形成している。南東部および北東部に踏みしめられた部分を確認したのみで他の床面は確認できなかった。

竈 東壁にあたるところにろうじて焼土を確認した。造作材として使用された可能性のある石がすぐ前面から出土しているが、形状は不明である。

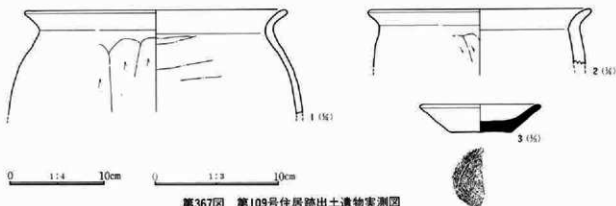
柱穴・貯蔵穴・壁周溝 検出されなかった。

遺物 土釜口縁部・須恵器小皿が出土している。

備考 本住居跡の年代観は遺物より11世紀前半。(鹿沼)



第366図 第109号住居跡実測図



第367図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土遺物観察表 (PL.168)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土釜 土釜	+1	口(27.7) 高一 底一 口~割 ¾	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・硬 ③黒褐色	内外共口縁部模撫で。外面 割部は絞貫削り。 内面 割部は撫で。	
2	土釜 土釜	+1	口(23.3) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色灰色藍少量 ②酸化・硬 ③灰黄褐色	内外共口縁部模撫で。外面 割部は斜め貫削り。 内面 割部は撫撫で。	
3	須恵器 皿	+5	口(9.3) 高(2.2) 底(5.0) 口~底 ¾	①細・灰色藍少量 ②軟 化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は別転糸切り。	

第110号住居跡

位置 2区33C05 写真 PL.68

形状 南西部に長軸1.5m 短軸1.2mの楕円形の張り出し部を持つ長辺3.45m 短辺2.14mの隅丸長方形を呈する。近世の溝により、住居北側を削り取られている。

面積 8.11m² (推定) 方位 N-90°-E

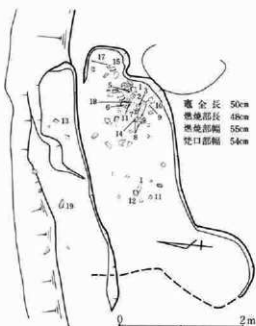
埋没土 ローム粒・炭化物粒を少量含む黒褐色土が主体をなす。

床面 確認面でローム層を30cm程掘り込み、その上に暗褐色土を客土して床面としている。竈前面に堅い面を確認したほかは、残存状況が悪く、明確につかむことができなかった。壁高は、一部では10~12cmを測る。

竈 東壁南寄りにあり、すべて屋外に構築されている。焼土面があるほかは造作材・構造など不明である。ただ、住居中央に石材があり、竈に使用された可能性はある。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝 検出されなかった。

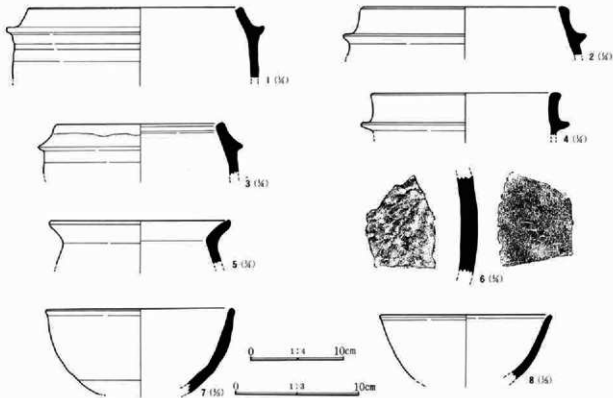
遺物 住居東側に集中して須恵器羽釜・埴等が出土



第368図 第110号住居跡実測図

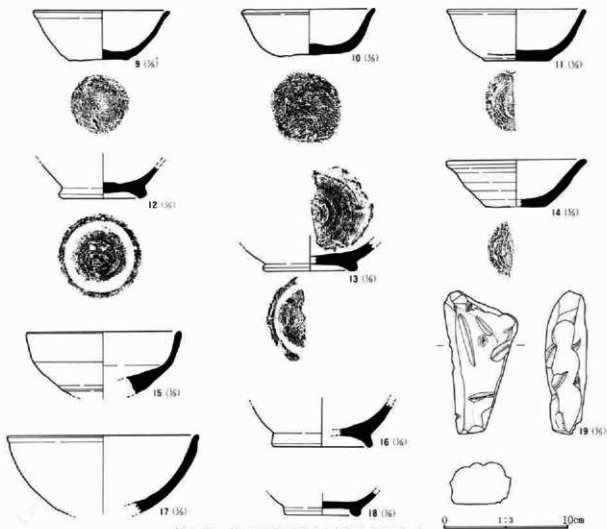
している。また、刃ならし傷のある砂岩製の砥石も出土している。

備考 住居の形状が第90号住居跡に似ている。何等かの関連性を伺わせる。本住居跡の年代観を出土遺物より10世紀後半としたい。(奥沼)



第369図 第110号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第370図 第110号住居跡出土遺物実測図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表 (PL.168)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 羽 釜	-8	口(22.6) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。甕は貼り付け。	
2	須恵器 羽 釜	+21	口(21.2) 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色紅微量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。甕は貼り付け。	
3	須恵器 羽 釜	+4	口(17.8) 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③明赤褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。甕は貼り付け。	
4	須恵器 羽 釜	埋没土	口(19.4) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。甕は貼り付け。	
5	須恵器 壺	+3	口(18.9) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	口縁部は傾斜で。	
6	須恵器 壺	-1	胴部片 (縦10.0 横8.0)	①細・白色紅微量 ②還元 元・硬 ③灰色		指環圧痕あり。
7	須恵器 杯	+2	口(14.2) 高一 底一 口~体 片	①細・灰色紅少量 ②酸化 元・普通 ③明赤褐色	ロクロ整形(右回転)。	
8	須恵器 杯	床面	口(13.5) 高一 底一 口~体 片	①細・白色紅少量 ②還元 元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
9	須恵器 杯	+2	口10.2 高3.8 底4.2 口~底 片	①細・灰色紅少量 ②酸化 元・普通 ③明褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り。	
10	須恵器 杯	-1	口(10.4) 高3.5 底5.9 口~底 片	①細・白色紅微量 ②酸化 元・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転余切り。	

種別	器形	出土位置	①口径②高さ③底径 ④残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
11	須恵器 坏	-10	口(10.8) 高(4.0) 台(5.1) 口~底 互	①胎・灰色紅微量 元・軟 ③灰白色	②還元 ④滑	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。 高台付。
12	須恵器 碗	-1	口一 高一 台(6.1) 体~台 互	①胎・灰色紅少量 元・軟 ③黒褐色	②還元	ロクロ整形(右回転)。付高台。
13	須恵器 碗	-12	口一 高一 台(7.0) 台部 互	①胎・白色紅少量 化・普通 ③鈍い黄褐色	②還元	ロクロ整形(右回転)。付高台。
14	須恵器 坏	+1	口(10.9) 高(3.7) 底(4.9) 口~底 互	①胎・白色紅少量 化・硬 ③鈍い褐色	②還元	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。
15	須恵器 坏	窟内	口(12.1) 高一 底一 口~底 互	①胎・白色紅微量 化・硬 ③灰黄褐色	②還元	ロクロ整形(右回転)。
16	須恵器 埋没土	口一 高一 台(7.1) 体~台 互	①普通・灰色紅微量 ②還元 ③鈍い黄褐色	④普通 ⑤鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
17	須恵器 坏	窟内	口(15.1) 高一 底一 口~底 互	①胎・黒色紅少量 ②還元 ③褐色	④普通 ⑤褐色	ロクロ整形(右回転)。
18	須恵器 碗	+1	口一 高一 台(5.3) 台部 互	①胎・灰色紅微量 元・軟 ③灰白色	②還元	ロクロ整形(右回転)。付高台。
19	織石 礎	住居外 -29	材質 砂岩。長さ11.2cm 幅5.7cm 厚さ3.2cm	重さ150g。自然石の利用。使用は、図上方、裏面を除いて使用。 図中の条痕は、刃傷・ならし痕。研磨面は、夾雑物の凸出がなく、金属。		

111号住居跡

位置 2区19C20 写真 PL68

形状 長辺3.72m 短辺3.24mで隅丸長方形を呈す。各壁の遺存状態は良好で、壁高は30~40cmを測る。

面積 8.11m² 方位 N-73°-E

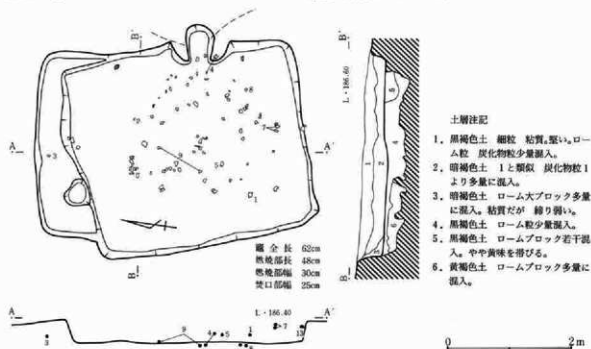
埋没土 自然堆積と考えられ、上層・下層で顕著な差異は見られない。細粒でローム・若干の炭化粒を混入する。

床面 比較的平坦で、かなり踏みしめられている。

掘りかたは全体に深く、ロームブロックを多量に混入した軟粘質土で充填されていた。

竈 東壁中央やや南寄りに作られている。全長50cmで壁外にやや丸みをもって作り出されている。焚口幅は25cmとかなり狭い。埋土は炭化物・焼土・粘土の混合土で、側面部・天井部の崩落状況が観察される。袖石などは検出されなかった。

柱穴 確認されなかった。



第371図 第111号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

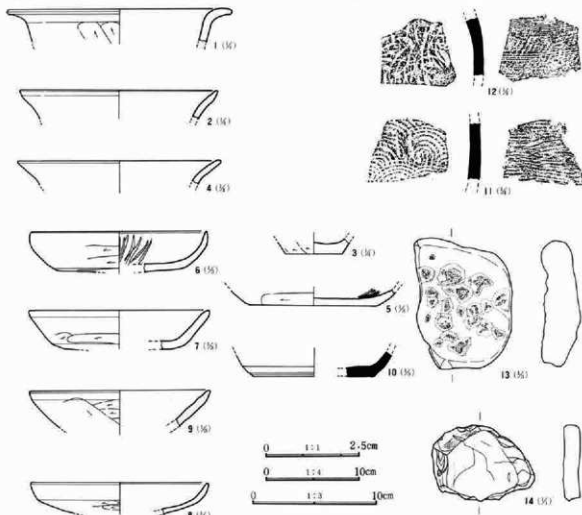
貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 住居の中央部分を中心に土師器甕・坏、須恵器坏・甕の破片が出土している。その他使用痕のある砂岩などが見られる。住居の床面からやや浮いた

状態のものが多い。

備考 住居の北側に張り出しを持つが住居の壁とややずれていることなどから本住居跡に伴うものか疑問である。出土遺物から見て時期は9世紀前半と考えられる。(小野)



第372図 第111号住居跡出土遺物実測図

第111号住居跡出土遺物観察表 (PL.168)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 甕	+9	口(24.0) 高一 底一 口縁部片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で。外面 胴部は斜め刮削り。内面 胴部は直撫で。	
2	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①普通・白色灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部は横撫で。	
3	土師器 甕	+14	口一 高一 底6.0 底部片	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 胴部下半横刮削り。 内面 底部撫で。	
4	土師器 甕	竪	口一 高一 底一	①普通・灰色灰少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部は横撫で。	
5	土師器 坏	+9	口一 高一 底(10.0) 底部片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③明赤褐色	外面 底部は刮削り。	内面に暗文あり。
6	土師器 坏	+9	口(14.0) 高(3.1) 口一底片	①細・灰色灰少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で。外面 体部～底部は横刮削り。内面 体部は撫で。	内面に暗文あり。

図番号	遺物 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
7	土師器 坏	+22	口(14.4) 高一 底一 口~底 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で、外面 体部は荒削り、内面 体部は撫で。	
8	土師器 坏	-6	口(7.1) 高一 底一 口~体 片	①細・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で、外面 体部は横削り、内面 体部は撫で。	
9	土師器 坏	-2	口(14.4) 高一 底一 口~体 片	①細・夾雑物なし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で、外面 体部は荒削り、内面 体部は撫で。	
10	須恵器 坏	埋没土	口一 高一 底(9.3) 体~底部片	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③暗灰色	ワクロ整形(右回転)、底部は回転削り。	
11	須恵器 坏	埋没土	胴部片 (縦5.0 横6.2)	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 胴部平行叩き、内面 胴部青銅波叩き。	流れ込みか。
12	須恵器 坏	埋没土	胴部片 (縦5.0 横6.2)	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰白色	外面 刷毛目 斜め格子叩き、内面 青銅波叩き。	流れ込みか。
13	工作台 か?	+23	材質 牛伏砂岩、長さ10.1cm 幅7.5cm 厚さ2.9cm 重さ300g。上平面に多くの凹みあり。下平面にも2箇所の凹みあり。			
14	チップ	床直	材質 燧石、長さ2.6cm 幅2.0cm 厚さ0.4cm 重さ3.9g。板状に形削りされている。形状から、有孔門板か紡錘車を意図したものと思われる。			

第112号住居跡

位置 2区17C11 写真 PL.69

形状 一辺約3.5mの隅丸方形を呈するがやや不定形である。

面積 10.53㎡ 方位 N-166°-W

埋没土 上層は比較的細粒で白色紅物を多く含む比較的しまりが良い。床面近くになるにつれ炭化物の混入量が多くなり、地山ロームブロックの混入が目立つようになる。

床面 平坦であるが、中央部がやや低くなる。あまり踏みしめられた状況ではなかった。床面下は他の

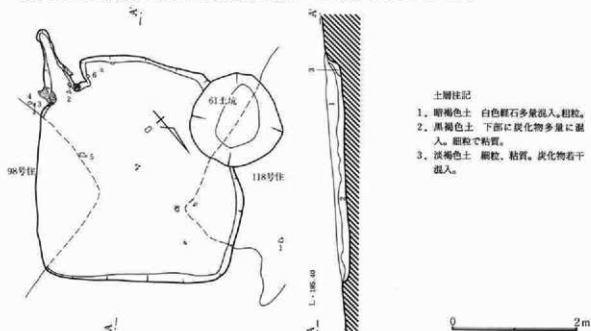
住居の埋没土となっており、掘りかた面の検出はできなかった。

竈 南西隅に作られている。住居内への袖部の張り出しは少なく、竈口両側に石を据えている。燃燒部から煙道部にかけてはやや狭まりながら真つすぐに延びており、長さ1.14mを測る。埋土中には炭化物に混じり多くの焼土塊が混入。本体の崩落状況が看取される。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。



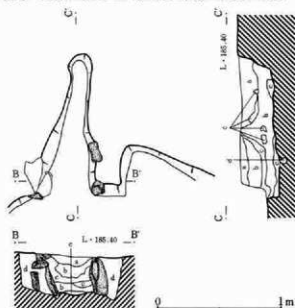
第373図 第112号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

遺物 埋設土中より土師器甕・須恵器甕・坏類の破片が若干出土している。他に滑石製の白玉が1点出土している。

備考 住居の2/3以上が第98号住居跡の西側に重複

している。また西側一部は第118号住居跡に重複する。さらに西側隅に61号土坑が重複する。時期は出土遺物から見て9世紀前半と考えられる。(小野)

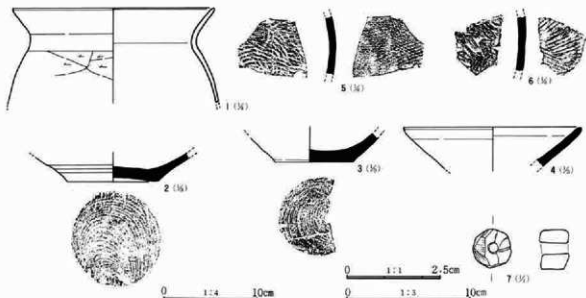


竈 全長 114cm
 奥壁部長 100cm
 奥壁部幅 46cm
 焚口部幅 64cm

土層注記

- a. 黒褐色土 白色軽石多量混入。粗粒で締り強い。
- b. 暗褐色土 粗粒で締り強い。焼土、炭化物を少量含む。
- c. 暗赤褐色土 地々に鮮明な焼土塊混入。
- d. 暗褐色土 粗粒、粘質。締り強い。

第374図 第112号住居跡観測図



第375図 第112号住居跡出土遺物実測図

第112号住居跡出土遺物観察表 (PL.一)

目録	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	住居外 +30	口(21.6) 高一 底一 口一割 片	①普通・黒色薄灰少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共口縁部横断で。外面 刷部横貫削り。 内面 割部施で。	
2	須恵器 坏	竈内	口一 高一 底(7.3) 体一底 片	①細・白色灰少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	

図号	器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
3	須恵器 坏	住居外 +22	口一 高一 底(6.1) 体~底互	①胎・白色微少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
4	須恵器 坏	住居外 +27	口(14.1) 高一 底一 口~底互	①胎・灰色微少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。	
5	須恵器 甕	+7	胴部片 (縦6.0 横9.2)	①胎・黒色微少量 ②還元・硬 ③灰オリーブ色	外面 胴部斜め格子印き、自然釉。 内面 胴部背面波印き。	流れ込みか。
6	須恵器 甕		胴部片(縦5.0 横5.0)	①胎・灰色微少量 ②還元・軟 ③灰黄色	外面 胴部平行印き。 内面 胴部背面波印き。	流れ込みか。
7	白玉 埋没土		材質 滑石。長さ1.0cm 幅1.0cm 厚さ0.7cm	孔径0.2cm 重さ1.4g。上・下平面は、割離面。一部、刃物により削られている。側面は、研磨。穿孔は、一方向。		

第117号住居跡

位置 2区15C15 写真 PL.69

形状 やや不整ではあるが、一边5m程の隅丸方形である。東壁は削られており、不明。遺存状態の良好な西壁で壁高は約15cmである。

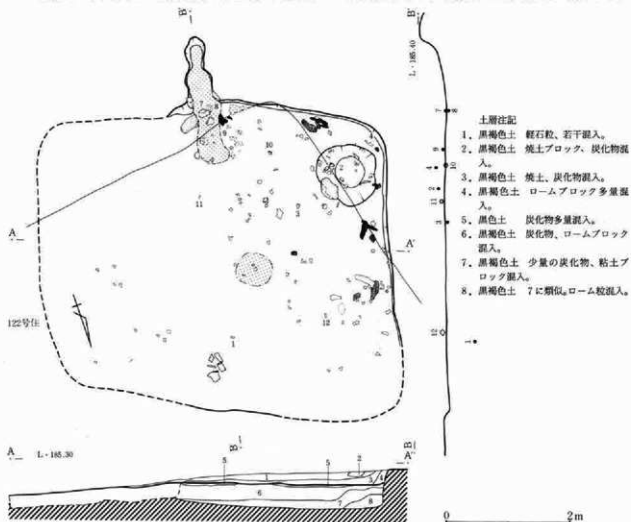
面積 26.10m² 方位 N-167°-W

埋没土 ややざらついた黒褐色土である。下層は若

干の炭化物が層をなして検出されている。住居のほぼ中央に厚さ2~3cmで、径1m程の広がりを持つ焼土層が見られた。

床面 ほぼ平坦であるが、東側は削平されており、不明瞭。

竈 南壁ほぼ中央に位置する。住居内への袖部の張り出しは少なく、竈前面には石・粘土塊が見られる。



第376図 第117号住居跡実測図

第3章 検出された遺構と遺物

煙道部は燃焼部から緩やかに立ち上がり、わずかに狭まる。袖石は壁のラインに位置しており、しっかり埋め込まれている。

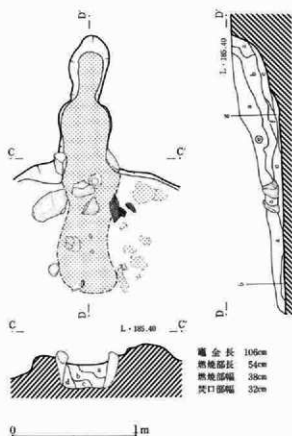
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 南西隅に検出された。ほぼ円形楕円状を呈す。直径は95cm 深さ24cmである。中より若干の土器が出土している。

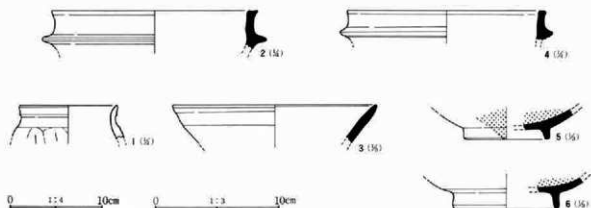
壁周溝 確認されなかった。

遺物 窠内より小型で浅い環が出土した他、羽釜口縁部片、灰袖端の底部片などが出土した。また、埋没土内より碧玉製管玉が1点出土している。

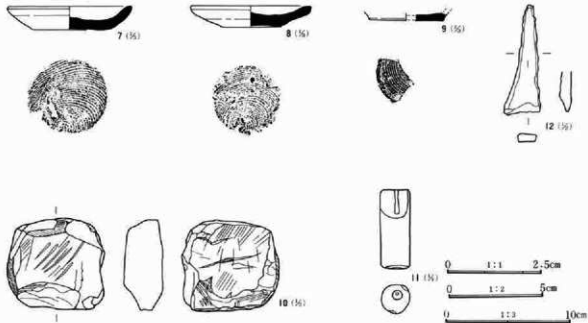
備考 第122号住居跡の上に載る状態で重複している。北および南部分は不明瞭である。出土遺物から見て時期は11世紀前半と考えられる。(小野)



第377図 第117号住居跡竈実測図



第378図 第117号住居跡出土遺物実測図(1)



第379図 第117号住居跡出土遺物実測図(2)

第117号住居跡出土遺物観察表 (PL.166)

図番	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 小型甕	-48	口(10.4) 高一 底一 口~胴部片	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部傾倒で、外面 胴部縦貫削り、 内面 胴部無で。	
2	須恵器 羽 蓋	+5	口(21.2) 高一 底一 口縁部片	①細・灰色鉄少量 ② 還元・軟 ③白色	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。罫は貼り付け。	
3	須恵器 環	-7	口(16.2) 高一 底一 口縁部片	①細・白色鉄微量 ②酸 化・硬 ③暗赤褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
4	須恵器 羽 蓋	+8	口(11.0) 高一 底一 口縁部片	①細・灰色鉄少量 ②酸 化・硬 ③淡黄褐色	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。罫は貼り付け。	
5	灰釉陶 器 埴	埋没土	口一 高一台(6.9) 体~台部片	①細・夾雜物なし ②還 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
6	長尾筒 埴	埋没土	口一 高一台(8.4) 体~台部片	①細・夾雜物なし ②還 元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
7	須恵器 燈明皿	甕	口9.8 高2.3 底6.2 ほぼ完形	①細・灰色鉄微量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
8	須恵器 燈明皿	甕	口9.5 高1.7 底5.4 完形	①細・灰色鉄微量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
9	須恵器 環	+3	口一 高一 底(7.8) 底部片	①細・白色鉄少量 ②還 元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
10	紡錘車 未成品	床直	材質 蛇紋石。長さ5.8cm 幅5.3cm 厚さ2.1cm 重さ100g。形割りの段階から、上・下平面、3箇面研磨。ところ どころに原石面あり。			
11	管 玉	+6	材質 碧玉。長さ2.1cm 幅0.8cm 厚さ0.7cm 孔径2.8cm 重さ2g。全面、精削磨後、穿孔は、一方向。穿孔時 に欠損した部分あり。			
12	鉄製品 不明	+3	残存長5.6cm	欠損少なく、旧態を留める。酸化は顕著でなく、きわめて良質の鉄を思わせる。そのため、 火打金の可能性もあり。器肉は、やや厚い。		

第119号住居跡

位置 2区19C14 写真 PL.70

形状 各辺は直線的では無いが、一辺約3.5mの隅丸
方形を呈す。壁はかなり垂直に近く立ち上がる。壁
高は20~50cmを測る。

面積 14.10㎡ 方位 N-125°E

埋没土 黒褐色土でローム粒子・ブロックを斑に混
入する。

床面 ほぼ平坦である。ローム粒子を多く含んだ土
を薄く貼り、床面を作っているが、あまり堅い状況

第3章 検出された遺構と遺物

ではなかった。貼床面下の中央部分に径90cm 深さ30cm程の床下土坑が検出されている。

竈 2カ所検出されている。1つは南東隅に作られている。袖部を構築していたと思われる石・粘土は見られなかったが、煙道が残っていた。煙道部を含めて長さ137cmである。火床面には多量の焼土層の堆積が見られた。他の1つは東壁中央にあり、幅50cm 長さ42cm程で住居外への張り出しは短い。火床面に焼土および若干の炭化物の広がりを検出した。何等か

の事情により作り替えが行われたものと考えられる。

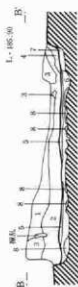
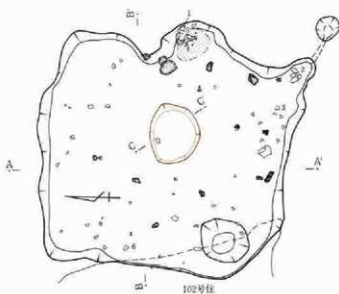
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 南西隅に検出された。やや長門で規模は78cm×68cm 深さ39cmである。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 量は少なく、土師器の甕、羽釜片及び坏類が出土している。

備考 第102号住居跡の東側に一部重複する。出土遺物から見て時期は11世紀前半と考えられる。(小野)



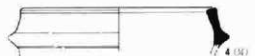
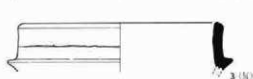
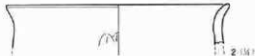
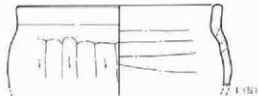
- 土層記
1. 黒褐色土 ローム粒混入。
 2. 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック混入。
 3. 黒褐色土 ローム粒多量混入。
 4. 黒褐色土 ロームブロック横状に混入。
 5. 黒褐色土 ローム粒若干混入。
 6. 黄褐色土 ローム粒、黒色土をブロック状に含む。
 7. 黄褐色土 ローム粒多量混入、砂質。
 8. 黄褐色土 黄色粒子。
 - イ、褐色土 黄色粒子、ローム小ブロック混入する。
 - ロ、明褐色土 黄色粒子、ローム小ブロックまじらに含む。
 - ハ、明褐色土 灰白色粘土を多量に混入する。



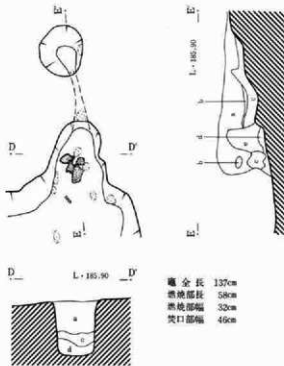
第380図 第119号住居跡実測図



0 1m

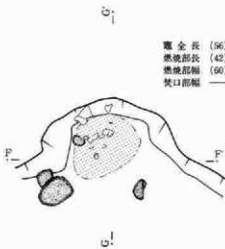


第381図 第119号住居跡出土遺物実測図(1)

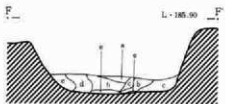
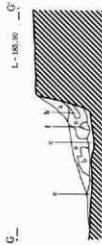


竈 全長 137cm
 燃焼部長 58cm
 燃焼部幅 32cm
 焚口部幅 46cm

- 土層注記
 a. 黒褐色土 ローム粒多量混入。
 b. 赤褐色土 ローム粒、焼土粒多量混入。
 c. 灰褐色土 灰黄色粘土を主体とする。
 d. 赤褐色土 焼土ブロック多量混入。
 e. 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒、若干の炭化物混入。



竈 全長 (56)cm
 燃焼部長 (42)cm
 燃焼部幅 (50)cm
 焚口部幅



- 土層注記
 a. 黄褐色土 ローム粒混入。
 b. 黄褐色土 ローム粒、焼土粒若干混入。
 c. 黒褐色土 ローム粒、黒色土、斑状混入。
 d. 赤褐色土 焼土ブロック、ロームを塊状に含む。
 e. 灰黒色土 炭化物、焼土多量混入。
 f. 焼土ブロック

0 1:3 10cm

0 1m

第382図 第119号住居跡竈実測図及び出土遺物実測図(2)

第119号住居跡出土土物観察表 (PL.169)

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 土 釜	竈内	口径(21.4) 高一 底一 口縁~胴部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③褐色	内外共口縁部横断で、外面胴部は縦貫削り、内 面胴部は笠型で。	
2	土師器 土 釜	竈内	口一 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横断で。	
3	須恵器 羽 釜	竈	口径(20.6) 高一 底一 口縁部片	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③灰黄褐色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。踵は貼り付け。	
4	須恵器 羽 釜	埋没土	口径(21.2) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・硬 ③褐色	口縁部はやや内傾する。紐作り後、ロクロ整 形(右回転)。踵は貼り付け。	
5	須恵器 須 壺	竈内	口径8.6 高2.1 底4.6 口~底 片	①細・黒色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	
6	須恵器 埴	-29	口一 高一 底(6.0) 底部 片	①細・黒褐色紅少量 ② 還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	

第120号住居跡

位置 2区13C10 写真 PL.70

形状 北東部分の半分以上を欠失しているために全容は不明だが、推定では一辺約4.6mの隅丸方形を呈すと思われる。壁は西側が確認されたのみであり、立ち上がりも不明瞭な部分が多い。

面積 20.73㎡(推定) **方位** N-1°-E

埋没土 上層はB軽石の混入が見られる。下層については地山の粘土ブロックを多く含み、かなりしまっている。

床面 住居の西側約1/3程が検出されたのみであり、地山をそのまま用いて使用面としているが、一部粘

土ブロックを混入する土を客土している。全体に凹凸が見られる。

竈 削られており、不明である。

柱穴 確認されなかった。

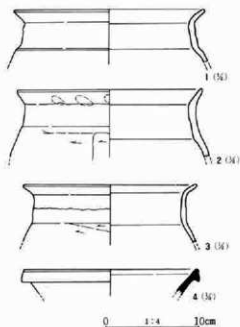
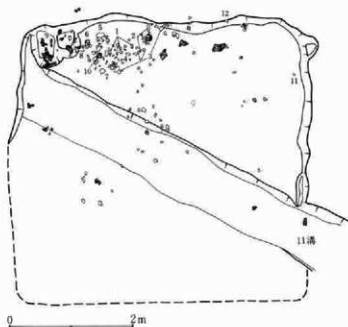
貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

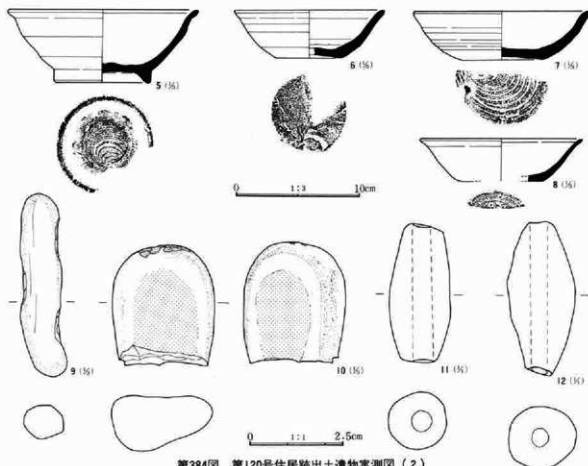
遺物 比較的遺存状態の良いかった西壁際において土師器の壁、須恵器の坏類が若干出土している。その他の遺物として土釜が1点出土している。

備考 前述したように北東側半分以上を第11号溝などにより削られており、遺存状態の悪い住居である。時期は出土遺物から見て9世紀後半と考えられる。

(小野)



第383図 第120号住居跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第384図 第120号住居跡出土遺物実測図(2)

第120号住居跡出土遺物観察表 (PL.169)

図号	器物 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 壺	+13	口(20.2) 高一 底一 口~底 片	①細・黒色微鉄少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面割部は横削り。口縁部は横撫で。内面割部は無で。	
2	土師器 壺	+2	口(19.7) 高一 底一 口~底 片	①細・白色黒色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面割部は横削り。口縁部は横撫で。内面割部は横撫で。	輪横状、指圧痕あり。
3	土師器 壺	+4	口(18.3) 高一 底一 口~割片	①細・黒色微鉄少量 ② 酸化・普通 ③赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。外面割部は横削り。口縁部は横撫で。内面割部は横撫で。	
4	須恵器 壺	-6	口(18.5) 高一 底一 口縁部片	①細・白色微鉄少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。	
5	須恵器 埴	+19	口(14.3) 高さ7 底(7.5) 口~底 片	①細・灰色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
6	須恵器 埴	+7	口(12.0) 高さ7 底(5.2) 口~底 片	①細・灰色鉄少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
7	須恵器 埴	+8	口(13.8) 高さ(3.5) 底(6.1) 口~底 片	①細・黒色微鉄少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
8	須恵器 埴	+4	口(13.0) 高一 底一 口~底 片	①細・白色鉄少量 ②還元・軟 ③暗灰色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
9	こもあ み石	-3	材質 黒色片岩。長さ14.1cm 幅3.0cm 厚さ2.6cm 重さ200g。細長い形状を呈する。側面に、若干の磨痕あり。この他に、9個、ほぼ同重量の石出土。			
10	砥石	+6	材質 粗粒安山岩。長さ9.4cm 幅6.15cm 厚さ4.35cm 重さ500g。上下平面及び側面に、金属以外の物質を研磨したと思われる部分あり。また、図上端及び両面に線打痕あり。下方は、調査時欠損。			
11	土 鉢	+17	材質 土。軸長3.6cm 最大径1.6cm 孔径0.5cm 重量3.5g。円筒形を呈する。			
12	土 鉢	+13	材質 土。軸長4.05cm 最大径1.8cm 孔径0.45cm 重量9.5g。ラグビーボール状を呈する。			

第125号住居跡

形状 ほぼ正方形を呈す。

位置 2区03C05

写真 PL.70

面積 12.89㎡

方位 N-138°-W

埋没土 B軽石を含む黒褐色土が堆積。2～3層に分けられる。

床面 西側1/3は黄色粘土、東側2/3は黄色粘質土のブロックを含む堅い面が認められたが、他はあまりしまっていない。全体的には東に緩く傾斜している。中央やや東寄りに径約80cmの床下土坑があり、10個程の川原石が出土している。

竈 住居の南西隅に位置し袖部の一部は攪乱を受けている。火床面は黄色粘質土、部分的にはかなり強く焼けている。壁面は主として黒褐色土であるが、中に焼けた黄色粘質土塊が入っている。このことか

ら構築材には黄色粘質土を用いていたものと見られる。

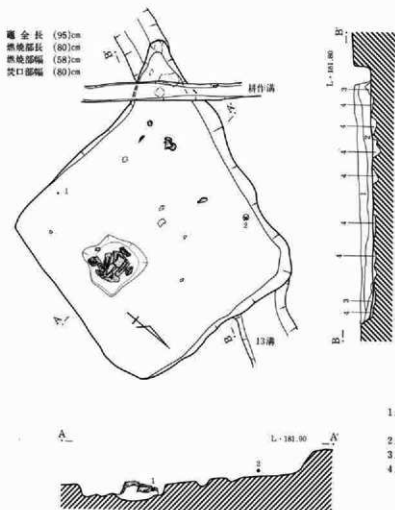
柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

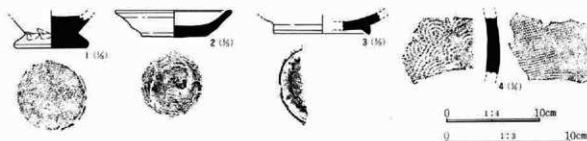
壁周溝 確認されなかった。

遺物 床面より5cm程浮いた状態で小型のかわらけ状の土師器片が出土した他には、破片がわずかに見られたのみである。

備考 第13号溝が西側を一部切っている。竈袖部も東西に走る耕作溝により壊されている。時期は11世紀前半と考えられる。(小野)



第385図 第125号住居跡実測図



第386図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土遺物観察表 (PL.169)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 台付壺	-15	台底部7.6	①黒・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③明褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
2	須恵器 燈明皿	+6	口9.3 高2.1 底5.2 ほぼ完形	①黒・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	金管母混入。
3	灰釉陶 器 埴	埋没土	竈~高台部片	①夾雑物なし ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
4	須恵器 埋没土 壺	埋没土	胴部片 (縦6.2 横8.5)	①黒・灰色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 胴部格子叩き。 内面 胴部青濁波叩き、自然釉。	流れ込みか。

第127号住居跡

位置 1区47B49 写真 PL.70

形状 長辺3.62m 短辺2.80m(推定)の隅丸長方形を呈すと思われる。

面積 10.76㎡(推定) 方位 N-73°-W

埋没土 耕作土下~床面までは褐色土が2~5cm堆積していたに過ぎない。

床面 残っていた部分は竈寄りのごく一部で、他は削られている。

竈 西壁の中央に位置。粘土を用いて作られていたと思われるが下部が、一部残存していたのみで、はっきりしない。火床部の中央に支脚石が見られた。内面の焼け方は著しい。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 羽釜・須恵器埴の破片が若干出土している。



第387図 第127号住居跡実測図

備考 東側半分以上が削られており、全容は不明である。第15号溝が住居南部を東西に走り、重複関係は本住居跡の方が新しい。時期は11世紀後半と考えられる。(小野)



第388図 第127号住居跡出土遺物実測図

第127号住居跡出土遺物観察表 (PL-1)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①土質 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 羽釜	埋没土	口一高一底一 胴部片	①黒・白色微鉄少量 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右 回転)。胴は貼り付け。	
2	須恵器 埴	竈内	口(16.2) 口一底 長	①普通・白色鉄少量 ② 酸化・普通 ③明褐色	紐作り後、ロクロ整形。	

第128号住居跡

位置 2区11C05 写真 PL.70

形状 隅丸長方形を呈す。上面を削平されており各壁の高さは数cmである。

面積 10.10㎡ 方位 N-80°-E

埋没土 上面にローム主体の堅くしまった層が確認された。以下炭化物を含む黒色土が見られる。

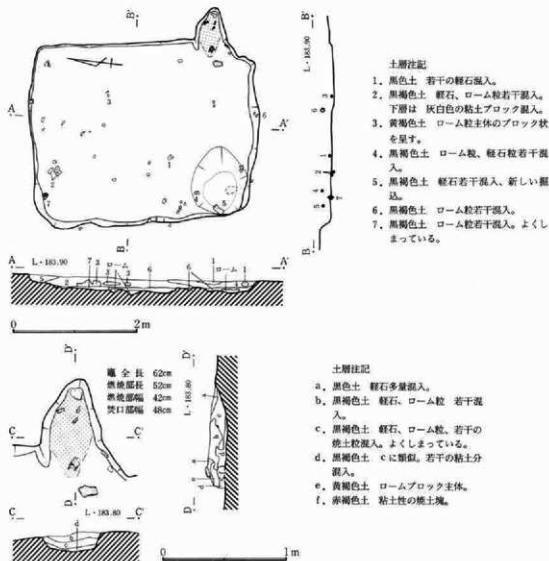
床面 非常に堅く踏みしめられた、かなり粘性に富

む土を床面としており、全体的にやや凹凸が見られた。

竈 東壁の南隅寄りに作られている。上部構造は大平削られていた。袖部の住居内への張り出しはほとんど見られず、燃焼部内面には若干の焼土が見られた。

柱穴 確認されなかった。

貯蔵穴 南西隅に掘り込まれていた。平面形はほぼ



第389図 第128号住居跡実測図

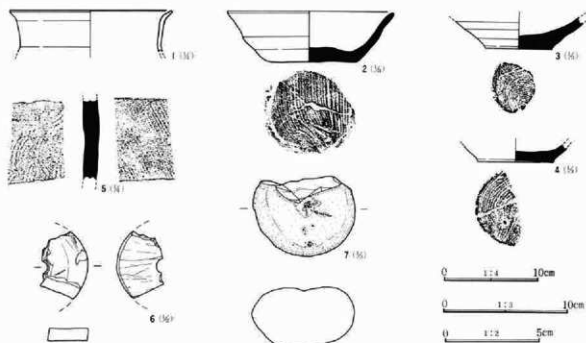
円形を呈し、断面は楕円状となる。規模は径55cm 深さ19cmを測る。底面に青灰色の粘土塊が出土している。

壁周溝 確認されなかった。

遺物 土器器壁の口縁部片、須恵器環類がわずかに出土している。

備考 出土土器から見て時期は9世紀後半と思われる。

(小野)



第390図 第128号住居跡出土遺物実測図

第128号住居跡出土遺物観察表 (PL.169)

図号	器種・器形	出土位置	口径 高さ 底径	取経 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	土師器 罍	-6	口(17.4) 高一底一	口縁部 破片	①細・黒色微塵微量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	「コ」の字状口縁。紐作り。口縁部は横割で。	
2	須恵器 環	-2	口13.2 高4.0 底7.0 口~底 5		①細・夾雑物なし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。整形後、静止未切り、最後に回転未切り	底部に粘土板使用の様子が確認。
3	須恵器 環	+6	口一 高一 底(5.2) 底部 長		①細・黒色微塵少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
4	須恵器 環	+18	口一 高一 底6.0 底部 長		①細・黒色微塵少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転未切り。	
5	須恵器 罍	+9	胴部 破片 (縦9.0 横7.7)		①細・白色微塵多量 ②還元・硬 ③オリーブ黒色	外面 胴部平行叩き。内面 胴部青海波叩き。	
6	鈿鍬車 破片	+14	材質 緑色片岩。長さ3.5cm 幅2.4cm 厚さ0.6cm 孔径(0.6cm) 重さ8.1g。長軸面、側面に研磨面が残る。製作時に剝離したもののか。穿孔は、一方より。				
7	敲打石	+1	材質 粗粒安山岩。長さ6.9cm 幅8.1cm 厚さ4.6cm 重さ300g。円平面に敲打時にできた凹みあり。上方は、田跡穴留か。				

第132号住居跡

位置 2区06C12 写真 PL.71

形状 竈部分のみ検出。面積 不明 方位 不明
埋没土 竈の手前部分に若干のロームおよび焼土の混合土層がわずかに見られた。

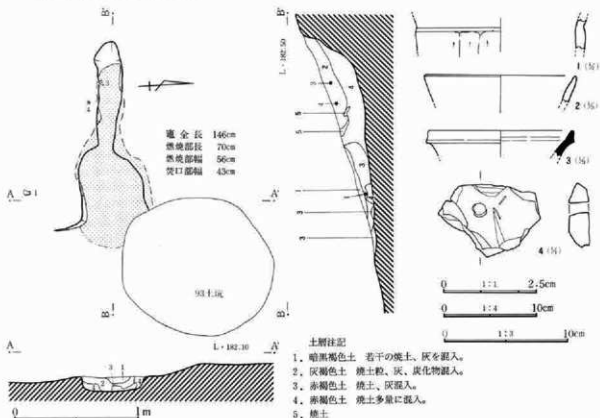
床面 ほとんどが失われている。

竈 火床面・煙道部に良く焼けている。煙道部はかなり形状を留めている。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝・遺物 確認されなかった。

備考 東傾斜地に位置しており、壁・床面は殆ど削られていた。形状・規模等は不明であり、竈のみ残存する住居跡である。時期は10世紀後半か。(小野)

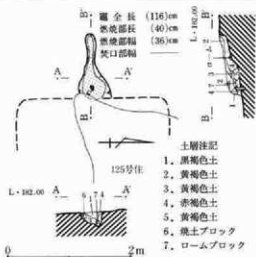
第3章 検出された遺構と遺物



第391図 第132号住居跡踏査実測図及び出土遺物実測図(1) 第392図 第132号住居跡出土遺物実測図(2)

第132号住居跡出土遺物観察表 (PL.169)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状況	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土製器 壺	扉部~胴部片		①普通・灰色微少量 酸化・硬 ③暗褐色	外面 胴部破面削り。 内面 胴部削で。	
2	土製器 坏	口縁部 破片		①細・灰色微少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部削で。	金雲母混入。
3	灰志器 壺	壺外 -6	口径部 破片	①細・灰色微少量 ② 元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形。	流れ込みか。
4	有孔門 板	-10	長さ2.7cm 幅1.7cm 厚さ0.5cm 孔径0.4cm	重さ3.6g。裏裏面・側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方 向より。図上半及び下方左側は、調整時以降の欠損と思われる。古墳時代後期の所産であろう。		



第393図 第135号住居跡実測図

第135号住居跡

位置 2区04C06 写真 PL.71

形状 不明。竈のみ検出した。

面積 不明 方位 N-95°-W

埋没土 竈部を除きほとんど残存しない。

床面 残っていない。

竈 西を向いている。燃焼部・煙道部は良好に残る。

燃焼部内に高さ15cm程の片岩製の支脚を検出した。

柱穴・貯蔵穴・壁周溝 確認されなかった。

遺物 出土は微量。

備考 竈手前に第125号住居跡が重複。時期は11世紀前半か。(小野)

第136号住居跡

位置 4区15C07

形状 不明

面積 不明 方位 不明

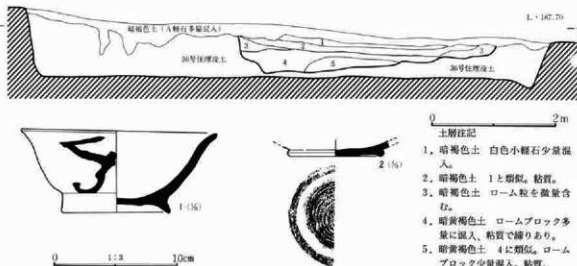
埋没土 暗褐色土を主体とする土。白色小軽石を少量含む。

床面 確認面で第36号住居跡埋没土を60cm程掘り下げ、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を客土して床面を形成している。

竈・柱穴・貯蔵穴・壁溝溝 確認できなかった。

遺物 内黒の須恵器境(外面に墨書)・灰釉陶器底部を出土している。

備考 本住居跡は、第36号住居跡のセクション調査中に確認された住居跡で平面調査は行えなかった。第36号住居跡の埋没土中に本住居跡に伴うと考えられる遺物が出土した。その遺物より本住居跡の年代観を10世紀前半としたい。(廣沼)



第394図 第136号住居跡断面実測図及び出土遺物実測図

第136号住居跡出土遺物観察表 (PL.169)

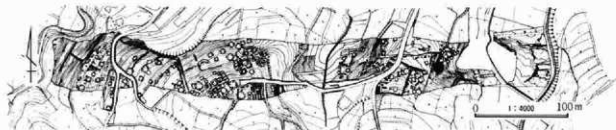
図録中	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	須恵器 境	埋没土	口径15.5 高さ6.6 底8.5 口～底	①細・白色灰少量 ②酸化・硬 ③黒色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	内面は黒色地埋墨書「得」か。
2	灰釉陶 器 皿	埋没土	口径一 高一 底(7.4) 底部 尾	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	

第6節 祭祀遺構と遺物

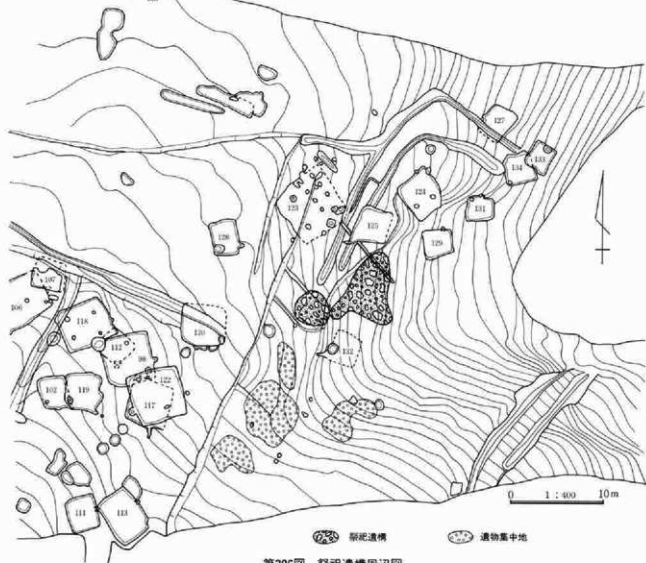
昭和62年度に行った調査において、2区02C07～2区08C10の範囲に土器片・滑石製模造品・滑石チップ・工作用石器類が、多量に出土した。特に、滑石製模造品の中には白玉・有孔円板・剣形・勾玉とともに全国でも類例の少ない馬形が出土してお

り、この場所が祭祀と何等かの関係があることが判明した。

この地は、本遺跡内に2つある舌状台地の、東側の台地の東斜面肩部分に位置しており、本遺跡東端の「田ノ入」という小字の小谷田（調査によってB



第395図 遺跡全体図



第396図 祭祀遺構周辺図

軽石に覆われた水田跡が確認された)に面した所にある。

調査の当初、西側の部分を2号土器集積と、また、東側の部分を住居跡として処理して130号住居跡と命名した。しかし、調査途中で、130号は、住居跡ではないことが判明したため、整理事業の段階で3号土器集積と変更した(第397図、第398図参照)。以下、2号土器集積・3号土器集積として記載を進めて行く。

本項では、1. 出土状況 2. 遺物数と組成 3. 各遺物の特徴 に分けて事実記載のみ報告し、本遺構のもつ特徴や時代的・全国的な位置付け、滑石製模造品の製作工程については、項を改めて、第4章で考察することとする。

1. 出土状況

出土状況の特徴は、次のようにまとめられる。

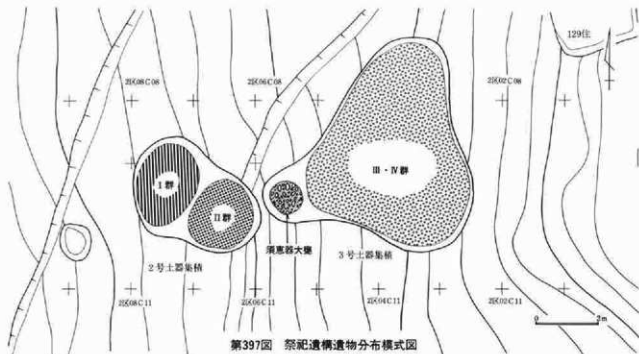
- ① 第398図をみて解るとおり、2号土器集積・3号土器集積共に大変多くの土器片を中心に滑石製模造品・滑石チップ・工作用石器類が分布している。
- ② 第399図のエレベーションを見るとそれぞれの遺物が層をなして分かれておらず、混在して

出土していることが解る。また、2号土器集積の最も標高の高い部分の遺物分布が土坑のような掘り込み状を呈している。

- ③ 分布図をよく見ると2号土器集積は、2群に分かれている。
- ④ 2号土器集積と3号土器集積の中間に須恵器大甕が1個体潰れた形で、あたかも2つの遺構の境界を意味するが如く、出土しており、その東隣には須恵器大甕を支えるように石が集中して出土した。
- ⑤ それぞれの遺構の出土土器は、そのほとんどが粉々に割れた状態で出土している。
- ⑥ 2号土器集積の調査の過程で、遺物を1点1点取り上げていき、遺物が出土しなくなった段階で楕円形の掘り込みが確認されたが、それが明確な遺構かは不明である。
- ⑦ 3号土器集積の遺物は、須恵器大甕を中心に扇形に広がっているが、特に集中する部分は円形を呈している。

2. 遺物数と組成

2号土器集積と3号土器集積の遺物数は、第6表の通りである。両方とも同様の遺物が出土している



第397図 祭祀遺構遺物分布模式図

第3章 検出された遺構と遺物

が、詳しく見ると遺物の組成に違いがみられる。また、1-③で示したとおり、2号土器集積は、2つの群に分かれており、さらに、3号土器集積は、分布状況では区別ができないが、土器の年代のピークが2つあることから、全体を4群に分けて遺物数と組成の違いを記したい。したがって、2号土器集積をI群とII群に、3号土器集積をIII群とIV群に分ける。

I群（2号土器集積に含まれる）

滑石製模造品	馬形	12
	完形と思われるもの	7
	頭部のみ	5
(完形品の中に馬形と思われるもの2点ある)		
	白玉	1
	有孔円板	7
	刺形	3
	チップ・未成品	68

土師器片	環・甕・手捏土器
須恵器片	環・甕・盤
工作用石器	敲打石 2
	砥石 3

II群（2号土器集積に含まれる）

滑石製模造品	有孔円板	5
	刺形	3
	チップ・未成品	47

土師器片	環・甕・手捏土器
須恵器片	環・甕
工作用石器	工作台 3
	敲打石 12
	砥石 1

III群（3号土器集積に含まれる）

滑石製模造品	勾玉	6
	白玉	1
	有孔円板	53
	刺形	17
	チップ・未成品	142

土師器片	環・甕・手捏土器
須恵器片	環・甕・盤・壺・高環・平瓶
工作用石器	工作台 1
	敲打石 2
	砥石 5

IV群（3号土器集積に含まれる）

土師器片	環・甕
須恵器片	環・甕

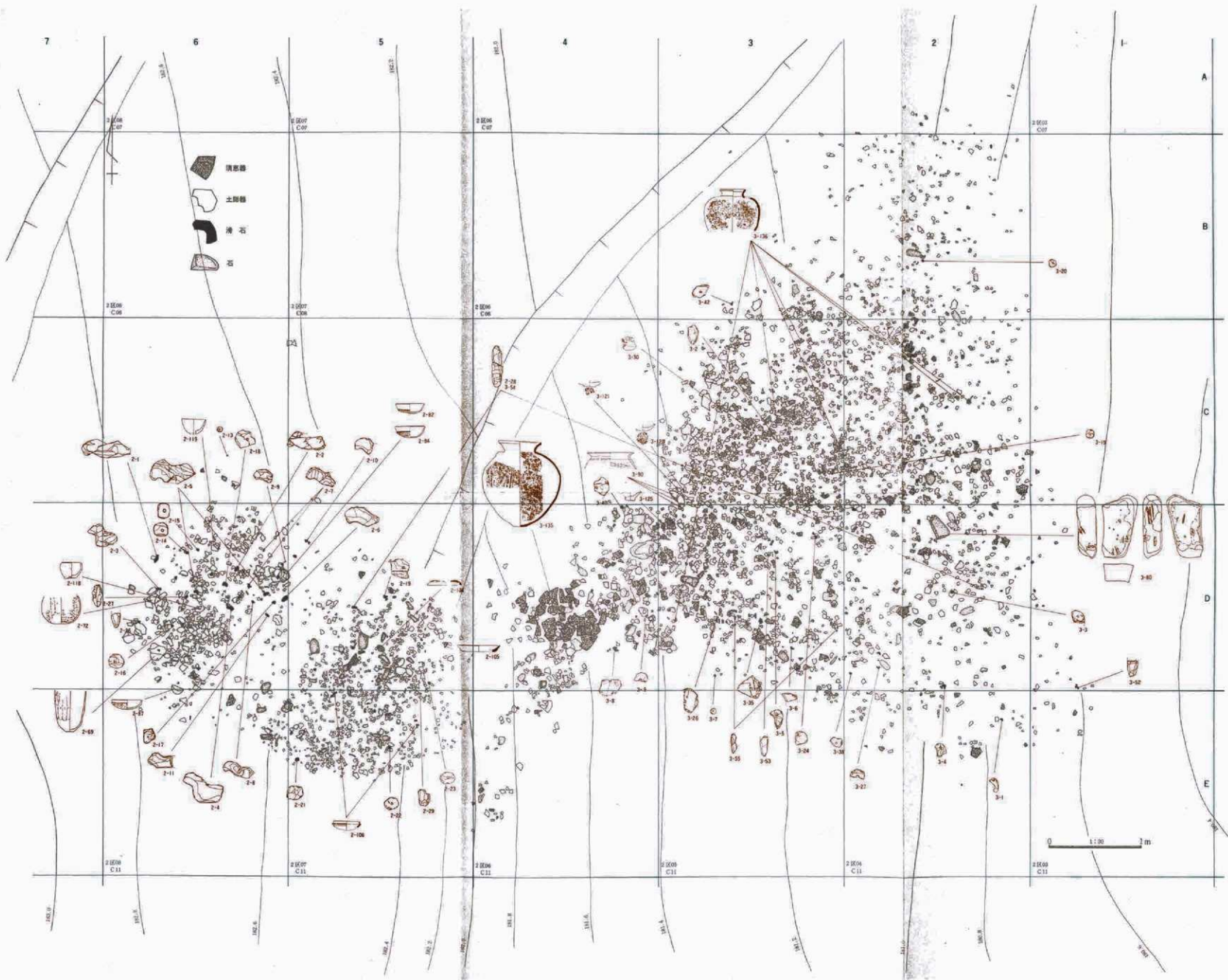
※ 2号と3号土器集積の中間の須恵器大甕はIII群に含めてある

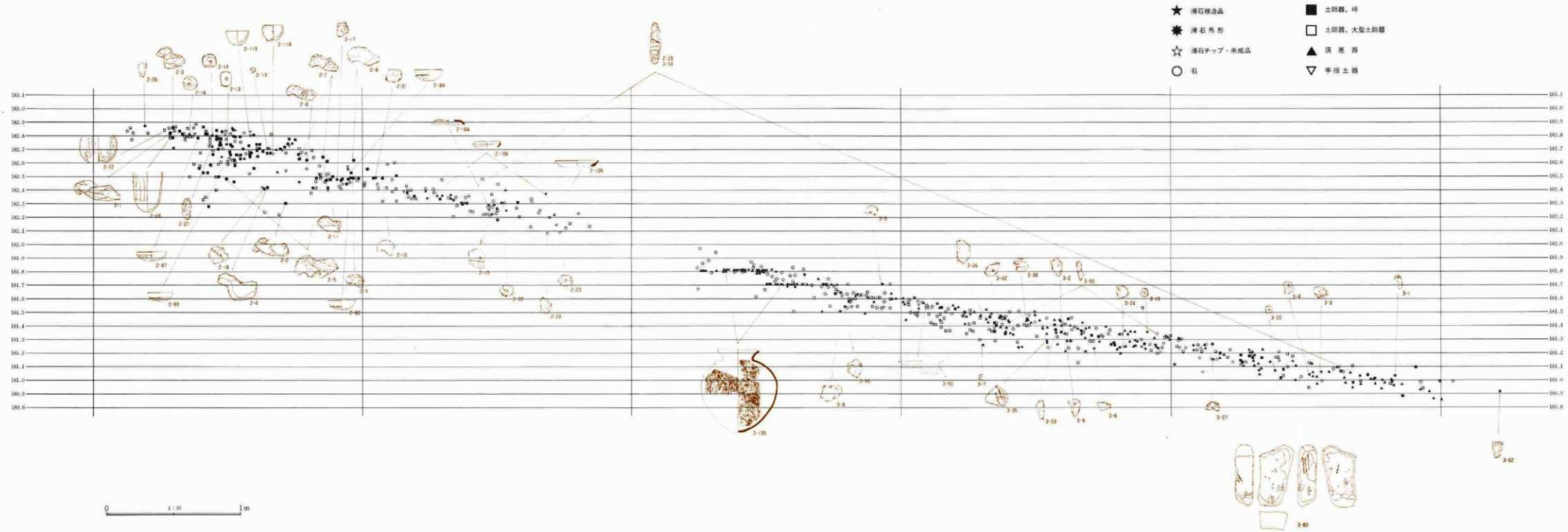
2号土器集積に注目すると、第398図にみられるとおり、土師器環が3枚重なった状態で出土したり、土師器甕の下半部が出土しているなど、概して、I群のD-6に残りの良い土器が集中し、II群は、小破片がほとんどであり、D-5、E-5に集中していると言える。また、I群では、環類が集中している地点を中心に滑石製模造品も集中しており、馬形もすべて、そのまわりから出土している。

さらに、遺物のレベルを投影した第399図エレベーション図を見る限り、滑石製模造品と土器は、層で分かれず混在している。したがって、滑石製模造品の年代と土器のそれとは、同一と考えたほうが良いであろう。また、馬形の中に、レベル差が50cmほどあるものがあり、これは、1回ではなく、数回の祭祀行為を示唆するものであろうか。

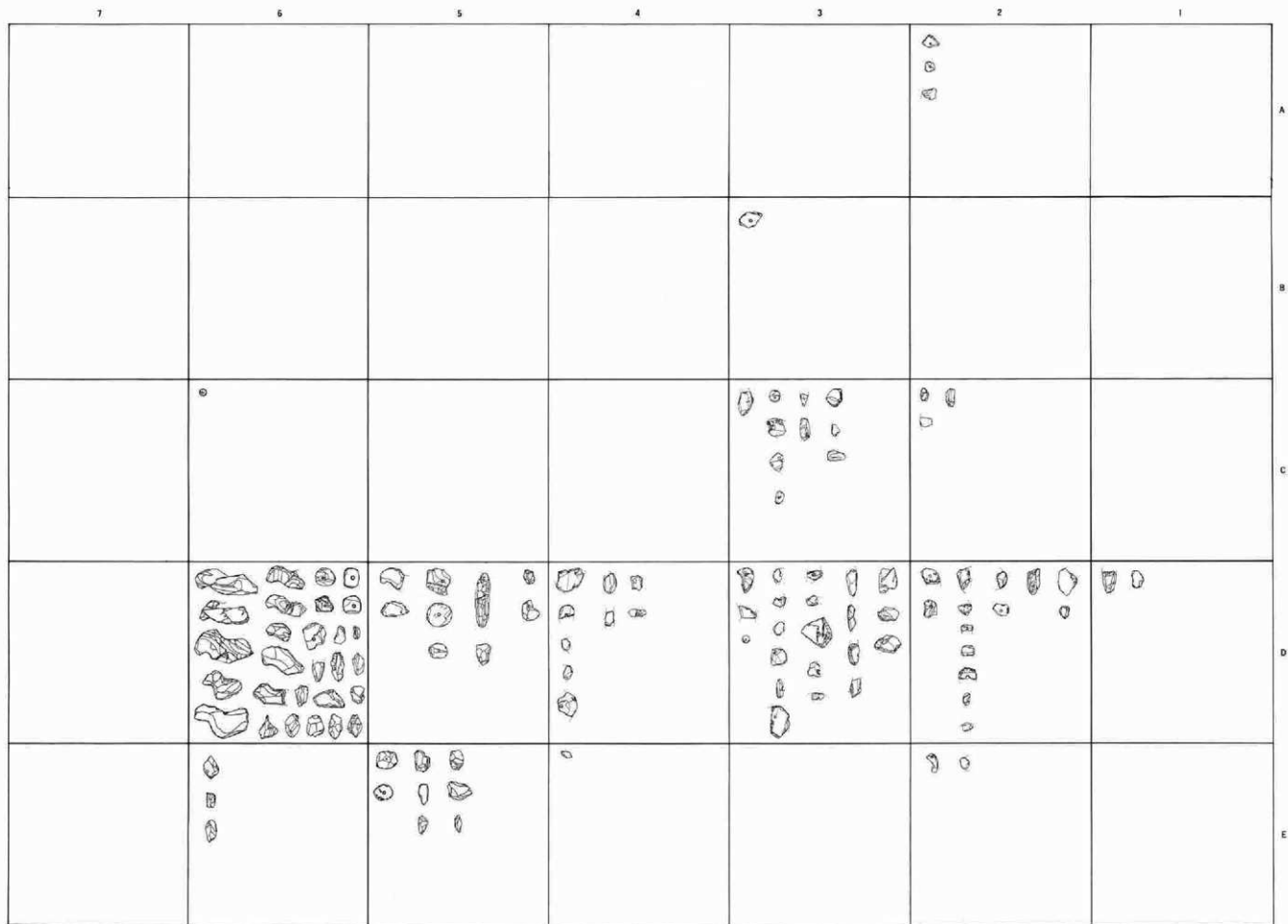
II群には滑石製模造品を製作する時に使用されたと考えられる敲打痕や磨耗痕のある石が集中して出土している。これらの石は、エレベーションで見ると、全体に土器や滑石製模造品より浮いた状態で出土していることがわかる。これは、土器や滑石製模造品の堆積と工作用石器の堆積には時間差があることを意味しているであろう。

また、I群とII群の中から出土した土器のうち、接合したものがあり、地形や遺物出土状態から、それらは、本来は、I群にあった土器片がII群に流れ





第399図 祭祀遺構遺物エレベーション図



第400回 祭祀遺構滑石製模造品出土状況模式図

0 1:100 3m

第6表 祭祀遺構出土遺物数一覧

種類 遺構	馬形	勾玉	白玉	有孔円板	剣形	未成品・チップ	土師器	須恵器	工作用石
2号 土器集積	12	0	1	12	6	115	1,533	131	21
3号 土器集積	0	6	1	53 (フクド10)	17 (フクド4)	142	3,050	502	8
合計	12	6	2	65	23	257	4,583	633	29

第7表 祭祀遺構グリッド別出土遺物数一覧

種類 グリッド	馬形	勾玉	白玉	有孔円板	剣形	未成品・チップ	工作用石
B-2				3			
B-3				2			
C-2				2		7	2
C-3		1		5	2	15	1
C-6			1				1
D-1					1	2	
D-2		2		10	2	19	2
D-3		2	1	13	6	30	3
D-4				5	2	16	
D-5	2			3	1	26	11
D-6	10			7	3	65	4
E-2		1		2		2	
E-4				1			
E-5				2	2	21	1
E-6						3	4
フクド				10	4	51	
合計	12	6	2	65	23	257	29

込んで行ったものと考えられる。

次に、3号土器集積に目を向けると、土器は、土師器も須恵器も完形品あるいは完形品に近いものはほとんど無く、接合するのが困難なほど、細片に割れていた。特に、C-2、C-3、D-2、D-3に集中している。また、そのうち、須恵器片の土器片全体に占める割合は、14%であり、非常に高い出土量ということが言え、1点1点の破片の大きさも土師器に比べると大きいものが多い。

滑石製模造品については、2号土器集積が、馬形を出土しているのに対して、3号土器集積は、勾玉を出土していることが特徴である。また、共に白玉は1個ずつであるが、剣形は2号の3倍、有孔円板に至っては5倍ほどの量を出土している。その分布状況に至りに詳しく見ると、第7表のようにC-3、D-2、D-3、D-4からの出土が多く、これは、土器の場合とほぼ一致する。また、エレベーションを確認すると、2号土器集積と同様に土器と滑石製模造品が混在していることがわかる。

前述したとおり、3号土器集積は、土器の年代のピークに2つあることから、III群とIV群の2群に分けたが、概して、IV群の土器は、エレベーションの上方に位置しており、あとからの流れ込みの可能性が強い。また、2号土器集積出土の滑石製模造品と3号のそれは、整形技法が双方とも刃物による削り調整であり、中には形がよく似た製品もあることなどから、双方の滑石製模造品は、ほぼ同時期に製作された可能性が強い。また、2号と3号の滑石製模造品の接合を試みたところ、およそ6m離れた剣形状製品が接合した。したがって、3号の滑石製模造品はIII群に引かれることになる。また、土器の年代観からもI群、II群、III群は、ほぼ同時期のものと言うことができる。

工作用石器類は、2号に比べて、数が少ないが、工作台・敲打石・砥石とセットが揃って出土しており、特に、工作台兼砥石の中に、滑石製模造品の穿孔時に用いたと思われる逆円錐形を呈した使用痕を持つものが存在する。

3. 各遺物の特徴について

2号土器集積・3号土器集積より出土している遺物について、種類別に分け、滑石製模造品・工作用石器類・土器の順にそれらの特徴を記していきたい。尚、個々については、遺物観察表を参照されたい。

(1) 滑石製模造品

① 馬形

滑石製馬形には大きく分けて裸馬形（鞍無馬形）と飾馬形（鞍付馬形）の2種類があると言われている。2号土器集積のI群より出土した馬形の数は、完形品あるいは完形品に近いもの7 頭部5であるが、そのうち、完形品の馬形は、裸馬形である。頭部だけの馬形は、裸馬形か飾馬形か判別し兼ねる。また、すべて、足の表現はない。さらに、頭部を表現した馬形について接合を試みたが、馬形頭部と胴部が接合したものが3点、頭部の接合したものが1点あった。総数12点の馬形について整形技法で分類してみると4形態に分けることができる。以下に、その形態毎に特徴を述べておく。

A類（第401図 1・2・4）

実測図1に代表されるように背部と顎下端部に深い切り込みを入れて頭部・頸部・胴部を表現している馬形であり、さらに、頭部・胴部側面の一部を削ってあるほかは自然面が残っている。目・口の表現は見られない。また、A類に関する限り、断面でも明らかのように、頭部を左に向けた場合、手前側面がほぼ平らにできているのに対して、裏面は、やや張り出している。

B類（第401・402図 3・6・9・11）

背部と顎下端部に切り込みを入れて頭部・頸部・胴部を表現している点はA類と同じであるが、調整の段階で削りの技法で全面を小刻みに面取りしている点は大きく違う。目・口の表現は無い。

C類（第401・402図 5・7・8・10）

背部・顎下端部に切り込みを入れた後、頭部・頸部・胴部の外周をぐるりと1周、削りで調整している。また、両側面も削りでほぼ平らに調整してある。

D類（第402図 12）

おそらく、頭部を意識していると思われるが、顎下端部だけに削りをいれている馬形である。ただ、剥離片の可能性が多分にあり、A～C類のいずれかに含まれるものかもしれない。

これらの整形技法の違いは、製作者の癖としてとらえるべきであり、祭祀の回数や馬形の意味の違いを示すものと考えないほうがよいであろう。

ただ、B類の3・A類の4の馬形は、他の馬形と器形が違う。1や2のような完形品の馬形が基本的な形状であるとするならば、わざわざ3・4のような馬形を作るのは不自然である。そこで、ここでは、他の遺跡より出土している木製品の器形と類似していることから、3・4は鳥形の可能性を上げておきたい。

また、頭部だけの馬形が、5点あることについては、6・9のように、頭部端部も刃物による削りを入れているものがあることから、頭部のみで馬形を表現しているものと、10・11・12のように頭部から胴部にかけて削れており、調整時には、ほぼ完形品であったと思われるものの2通りがあることと解釈できる。さらに、接合した馬形が4点あるが、すべて調整した後に、割れたか割ったかしたものと考えられる。滑石の拱理に沿って割れているもの、拱理に反して割れているもの両方あり、故意に割ったか否かについては不明である。

② 勾玉

- 3号土器集積より6点出土しているが、そのうち、
完形品と思われるもの 1
破損しているもの 5

である。それらのすべては、断面が板状を呈しており、全体の形も偏平をしている。整形は、刃物による削りで仕上げている。穿孔は、1は、一方向であるが、他の5点は両方向から行っている。破損している5点に関しては、調整時以降や穿孔時以降に割れたと考えたほうが、スムーズに理解できるものばかりである。

③ 白玉

2号・3号両方とも、1個ずつ出土している。共に径8mmを測る、比較的大きな製品である。整形は、上・下面は、刃物による削り調整であり、側面は、研磨による調整である。管玉を切断して白玉とした可能性が高い。

④ 有孔円板

2号・3号とも出土している滑石製模造品の中では最も量の多いものである。概して、2号のほうが完形品が多く、3号の方に欠損品が多い。形状について分類すると以下のようになる。

A類（2号—18・20、3号—18・8・26・35・40）

比較的大振りなもの。上下平面や側面を比較的丁寧に削り調整してある。

B類（2号—24、3号—19・20）

小振りなもの。上下平面や側面を比較的丁寧に削り調整してある。

C類（2号—16・21・22・23、3号—9・24・27）

A類とB類のほぼ中間の大きさのもの。上下平面と側面は、比較的丁寧に削り調整してある。

D類（2号—14・15、3号—10・14・28・43）

有孔円板と言うよりも有孔方板と言った方が適切と思えるもの。上下平面と側面は、比較的丁寧に削り調整してある。

E類（2号—17・19、3号—15・21・30）

板状に形削りしてあるものに穿孔を施してあるもの。上下平面は、部分的に削り調整してあるが、側面は、ほとんど削り調整していない。ただ、側面は、調整後に欠損している可能性もある。

穿孔方向は、一方向穿孔と両方向穿孔と一方向穿孔したのちに終孔部の欠けを反対面から修正しているものの3通りがある。また、特に、完形品は少なく、半分が割れているもの、縁辺部が割れているものなどが多く出土している。削り調整時や穿孔時に割れたというよりも、それら以降に割れたと考えたほうがスムーズに理解できるものがほとんどである。

る。

⑤ 剣形

ほとんど完形品といえるものがなく、みなどこか欠損している。また、穿孔してあるものは、全くない。それらを形状で分類すると以下ようになる。

A類（2号—26・30、3号—55・56・61）

断面が板状を呈しているもの。上下平面や側面は丁寧に削り調整してある。

B類（2号—28・29、3号—52・53・54・58）

断面が板状というよりも楕円形というようにA類よりも厚く丸みを帯びた形状をしているもの。上下平面や側面は小刻みに削り調整してある。

C類（2号—27、3号—64）

形削りの段階でほぼ終了しており、上下平面や側面の一部に若干の削り痕が見られるもの。

⑥ 滑石製未成品

一部分に削り調整した面があるものの、成品としてとらえたいものがある。成品の中に欠損しているものが多く、接合を試みたが、接合しなかった。しかし、未成品の削り面から察するに、これらは、削り調整以後に欠損したものと考えられる。

(2) 工作用石器類

2号・3号共に工作时に利用したと思える石器類が出土している。それらを分類すると以下のようになる。

① 敲打石

2号から14点、3号から2点出土している。すべて両端部に敲打した時の剝離痕が見られ、中には側面にまで及んでいるものもある。長さは、最小8cm最大でも16cmであり、みな、大人の手でちょうど持ちやすい大きさを呈している。おそらく、荒削りや形削りの段階で使用されたものと考えられる。材質は、雲母石英片岩・黒色片岩・デイサイトなどである。

② 工作台

2号から3点、3号から1点出土している。上平面や側面に敲打された時のくぼみ痕や剝離痕がある。大きさや重さから地面に据えて使用した可能性が高い。材質は、粗粒安山岩・黒色片岩・牛伏砂岩などである。

③ 砥石

2号から5点、3号から5点出土している。材質は、砂岩・粗粒安山岩・デイサイト・流紋岩である。研磨面のあるもの、刃ならし傷のあるもの、穿孔に関連するものなど、主に金属を主体とするものが目立つが、金属以外のものもある。これらの中には工作台としても、兼用されたものがある。

(3) 土器類

2号・3号土器集積は、「土器集積」と名付けたとおり、土器が多量に出土している。2号からは、破片数にして1,664点、3号からは、3,552点である。また、それらの組成は、2号は土器壺・環・手捏土器・須恵器壺・環・盤、3号は、土器壺・環・手捏土器・須恵器壺・環・盤・壺・高環・平瓶である。全体的に粉々に破砕しているため、形をとらえることのできる個体は少ない。また、それぞれ土器の中の須恵器の占める割合は、2号は8%弱、3号は14%強であり、特に3号には壺類を中心として大きな破片が多い。その中から、本遺構を代表するような須恵器を抽出して、胎土分析を行った。その詳細については附編第1節を参照されたいが、地元の栗附・秋間・吉井・藤岡の各窯跡群からの搬入の他に、精緻な須恵器の中に東海からの搬入の可能性のあるものも含まれていた。

これらの年代観については、2号では、土器器環が比較的残りがよく、926点の内、明らかに時期の違うものは、僅かに5点のみであり、あとは、すべて、鬼高Ⅱ・Ⅲの時期に比定することができるものである。須恵器器環も陶色TK-209からTK-217の間に比定できるものであり、実年代を6世紀末から7

世紀第2四半期におさえることができる。TK-217は最近の研究で年代を下げる見解がでていますが、7世紀第3四半期を下ることはないと思われる。また、TK-217に比定されるものは、No104の須恵器坏蓋・No105須恵器盤と数が少なく、全体として見た場合、7世紀前半にピークがあると思われる。さらに、No104は、3号土器集積フクドの須恵器坏蓋と接合している。

3号では、土師器や須恵器に時期的に2つのピークがある。1つは、2号とほぼ同じ7世紀前半の時期(Ⅲ群)、もう1つは、8世紀にはいるような時期(Ⅳ群)であるが、数量的な面では7世紀前半のものが多く、また、8世紀代の土器は、エレベーションで見ると、全体に比較的上方より出土している。

さらに、2号・3号とも、手握土器が出土しているが、器形が、双方とも大振り、底部に木葉痕があるものが多いなどよく似ている。

以上から本遺構を次のようにまとめることができる。

- ① 土器と滑石製模造品を祭祀時に神に供献していること。
- ② 滑石製模造品の中では、5世紀以来の勾玉・白玉・剣形・有孔円板を用いた祭祀の中に、馬形という新しい要素が導入されたこと。なお、整形・調整技法は、すべて同様で、基本的に削り調整である。

③ 滑石製模造品は、全体に丁寧な作り方をされていないこと。

④ 滑石製模造品は、祭祀終了時あるいは終了時以降に破損しており、製作途中で割れたものではないと思われること。

⑤ 滑石製模造品を製作するときに使用された工作用石器類も同じ場所より出土していること。

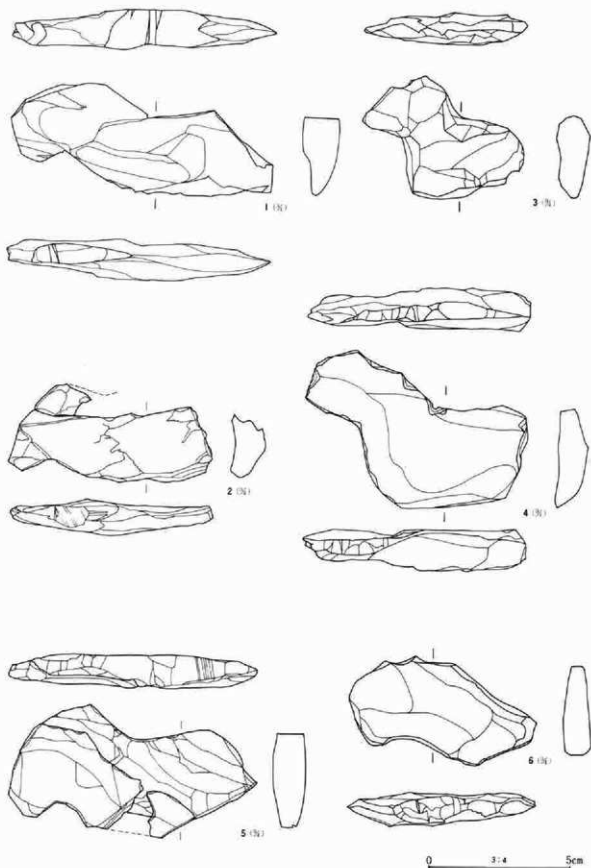
⑥ 土器類は、全体的に残りが悪く、粉々に破砕して出土していること。その中で2号土器集積からは、土師器坏が数枚重ねられた状態で出土しているものがあつたこと。

⑦ 本遺構は、祭祀行為の最終段階、すなわち、祭祀時に使用した祭祀用品を棄てた場所であることは間違いないが、一方、この場所で祭祀を行ったのかどうかについては、出土状況からは、判断することができなかった。

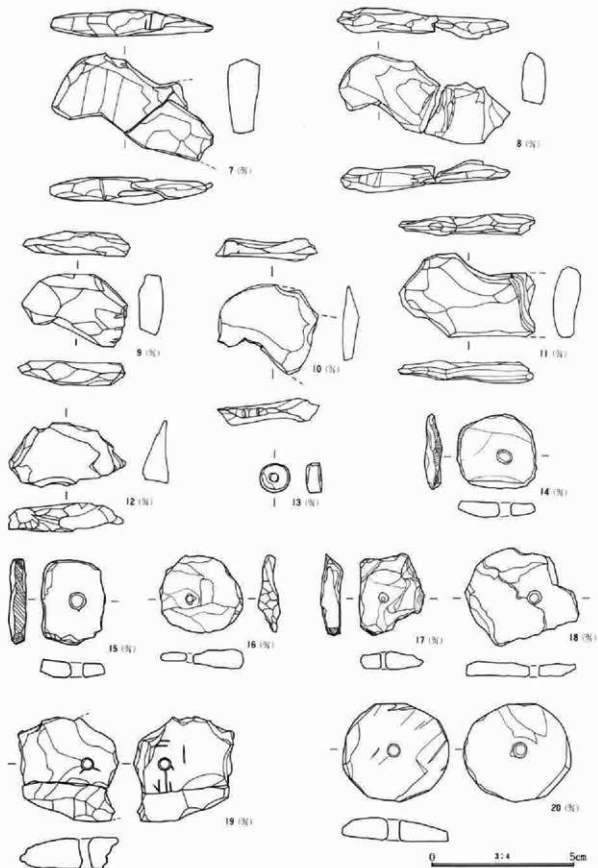
⑧ 遺物量や出土状況、若干の土器形式の違いなどから、祭祀行為は、1回のみでなく、少なくとも数回行われていると言える。すなわち、この場所が、祭祀用品を廃棄あるいは遺棄する場所であるということを当時の人々は意識していたといえる。

⑨ 2号土器集積と3号土器集積は、出土遺物の共通性から同一の神を対象とした祭祀遺物の集積であり、この祭祀が行われた時期は、出土土器から7世紀前半と思われること。 (鹿沼)

第3章 検出された遺構と遺物

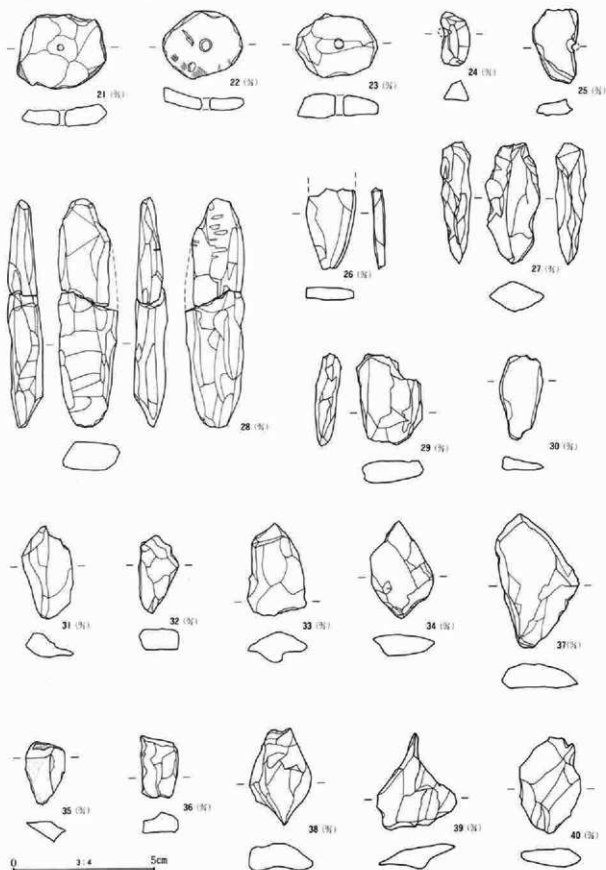


第401図 2号土器集積出土遺物実測図(1)



第402図 2号土器集積出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物

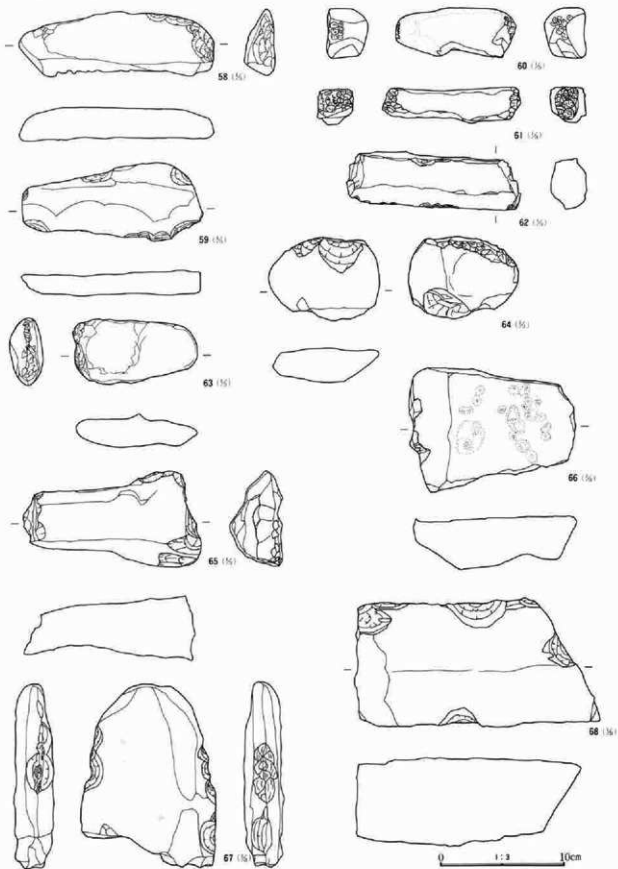


第403図 2号土器集積出土遺物実測図(3)



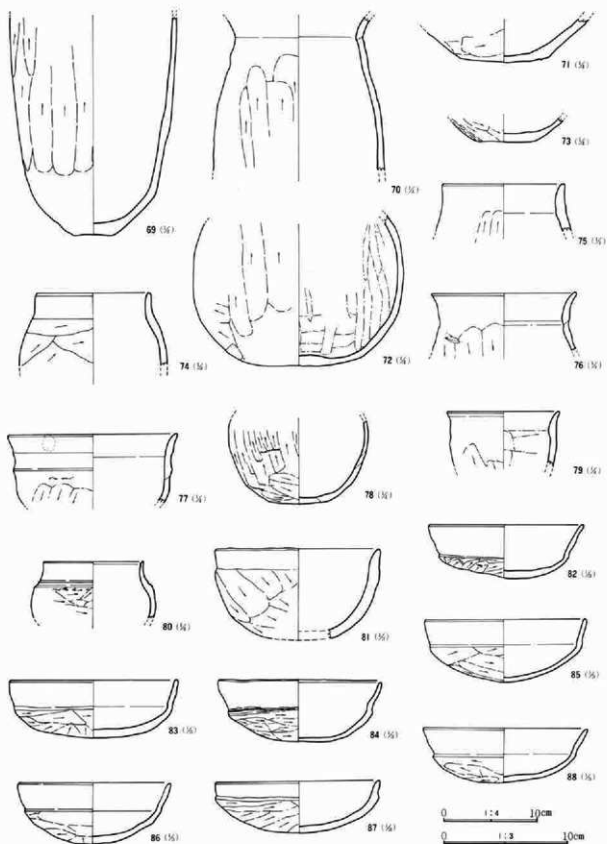
第404图 2号土器墓積出土遺物実測図(4)

第3章 検出された遺構と遺物



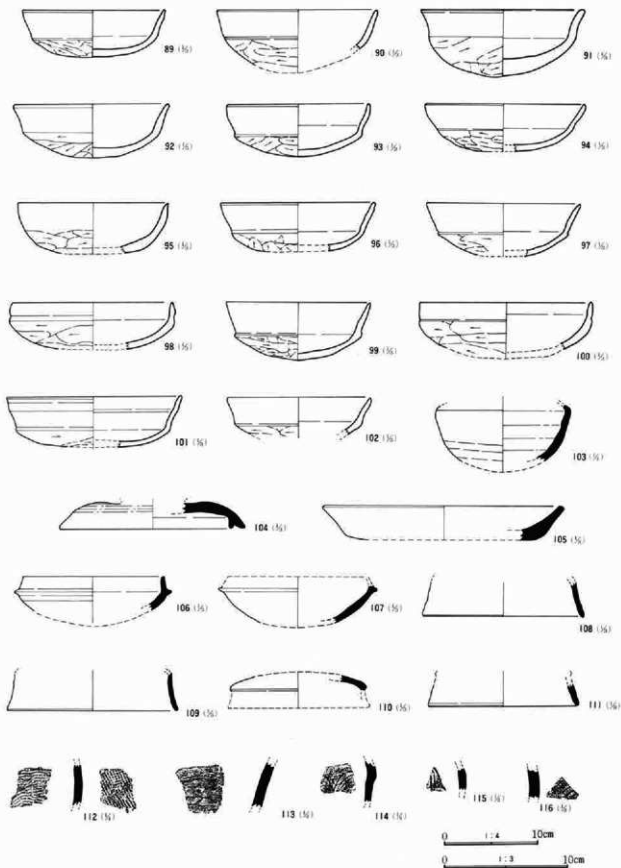
第405図 2号土器集積出土遺物実測図(5)

第6節 祭祀遺構と遺物

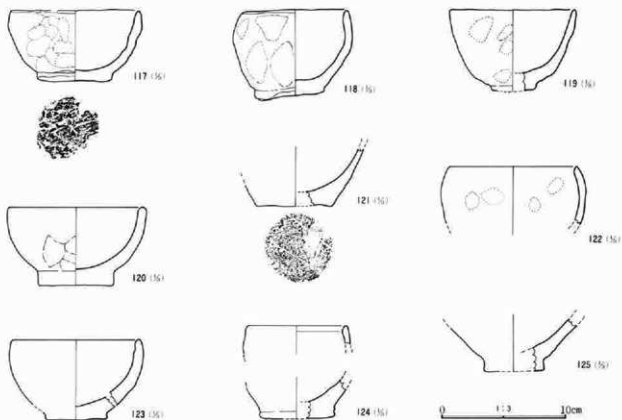


第406図 2号土器集積出土遺物実測図(6)

第3章 検出された遺構と遺物



第407図 2号土器集積出土遺物実測図(7)



第408図 2号土器集積出土遺物実測図(8)

2号土器集積出土遺物(滑石)観察表(PL.171, 172, 173, 174, 175)

図号	図種名称	出土位置	特	備(単位cm)
1	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 9.4 幅 3.2 厚さ 1.4 重さ 55.1g。板状に形削りされた滑石の上方側面中央と下方側面左側に刃物によって切り込みを入れ、馬の頭部・頸部・胴部を表現。頭部側面、上・下平面は、一部削り。他は、原石面。	
2	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 7.3 幅 2.9 厚さ 1.2 重さ 28.6g。板状に形削りされた滑石の下方側面左側に刃物による切り込みを入れ、馬の頭部・頸部を表現。背面は、原石面。頭部側面、上・下平面一部に削り調整。胴部は、一部接合。	
3	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 5.8 幅 2.8 厚さ 1.1 重さ 29.1g。板状に形削りされた滑石の上方側面中央と下方側面左側に刃物で切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。全面、小刻みに削りによる面取り調整。鳥形の可能性もある。	
4	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 7.9 幅 5.5 厚さ 1.1 重さ 51.6g。板状に形削りされた滑石の上方側面ほぼ中央と、下方側面右側に切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。右端部は刺磨。上・下平面、一部削り調整。鳥形の可能性あり。	
5	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 8.8 幅 4.3 厚さ 1.2 重さ 60.2g。板状に形削りされた滑石製の右側面を除き、側面、上・下平面を削り調整。3個体、接合。3個体とも、出土位置は、1m以内の距離。上方側面ほぼ中央と、下方側面右側に、切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。接合面は、ほぼ板状に形削りされた、彫理に沿っている。削りは、調整時以降と思われるが、どのような方法で削れたのかは不明。	
6	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 6.7 幅 3.0 厚さ 1.0 重さ 34.3g。板状に形削りされた滑石の側面全周を削り調整している。図下方側面は、切り込みを入れ、頭部と頸部を表現。上・下平面は、一部を除き、削り調整。胴部のみで馬を表現。	
7	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 5.8 幅 2.6 厚さ 1.1 重さ 20.6g。板状に形削りされた滑石の右上方側面と下方側面の2箇所にて切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。右端部、接合。側面、上下平面、削り調整。欠損は、調整時以降。	
8	馬形 滑石製	2区08C 09(D-7)	長さ 6.1 幅 2.1 厚さ 0.8 重さ 14.7g。板状に形削りされた滑石の右上方側面、下方左側面に刃物で切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。さらに、頭部側面、上・下平面一部を削り調整。胴部は、一部で接合。	
9	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 3.8 幅 2.1 厚さ 0.8 重さ 10.3g。板状に形削りされた滑石の上方側面は、削り調整。下方側面は、切り込みを入れて、頭部・頸部を表現。胴部表現はしていない。上・下平面は、削り調整。右端は、刺磨。	
10	馬形 滑石製	2区06C 09(D-5)	長さ 3.6 幅 2.7 厚さ 0.6 重さ 10.0g。板状に形削りされた滑石の上方側面は、削り調整。下方側面は、切り込みを入れて、頭部・頸部を表現。胴部表現はしていない。上平面は、刺磨面。下平面は、一部削り調整。	
11	馬形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 4.8 幅 3.0 厚さ 0.9 重さ 17.3g。板状に形削りされた滑石の上方側面・下方側面左側に刃物で切り込みを入れ、頭部・頸部・胴部を表現。全面を刃物による削り調整。右端部は、調整時、刺磨欠損か。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器種名称	出土位置	特 徴	鑑 (単位cm)
12	馬形 滑石製	2区06C 09(D-5)	長さ 4.3 幅 2.2 厚さ 0.9 重さ 8.5g。上・下平面は、剥離がなはだしいため、明確ではないが、下方側面に、他の馬形と同様な、切り込みや、削り調整があり、馬形の頭部であると思われる。	
13	白玉 滑石製	2区07C 08(C-6)	径 1.1 厚さ 0.6 孔径 0.4 重さ 1.1g。上・下平面は、刃物による削り調整。側面は、研磨。穿孔は、一方。比較的大振りの商品。	
14	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 2.8 幅 2.6 厚さ 0.5 孔径 0.5 重さ 5.8g。図下面の一部を削り調整。側面は、図下部分を除いて、削り調整。剥離は、整形後か。穿孔は、両方向より。	
15	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 3.0 幅 2.2 厚さ 0.6 孔径 0.4 重さ 6.8g。図下面の一部を削り調整。側面は、図右下部を除いて、削り調整。剥離は、整形後か。穿孔は、両方向より。	
16	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 3.0 幅 2.7 厚さ 1.1 孔径 0.2 重さ 6.3g。平面は、上・下とも、原石面。側面は、図の左右部分を削り調整。他は、原石面。穿孔は、両方向より。	
17	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 2.7 幅 2.3 厚さ 0.7 孔径 0.2 重さ 6.4g。側面の一部は、削り調整。他は、すべて、原石面。穿孔は、両方向より。	
18	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 3.0 幅 3.4 厚さ 0.5 孔径 0.3 重さ 9.3g。上・下平面の一部、側面の一部を削り調整。他の部分は、剥離のため、不明。穿孔は、両方向より。	
19	有孔円板 滑石製	2区06C 09(D-5)	長さ 4.5 幅 3.4 厚さ 1.1 孔径 0.3 重さ 18.6g。上・下平面は、削り調整。側面は一部に削り痕がある他は、すべて、欠損か。穿孔は、両方向より。取上番号S-155と整合。	
20	有孔円板 滑石製	2区06C 10(E-5)	長さ 3.7 幅 3.4 厚さ 0.8 孔径 0.4 重さ 15.0g。上・下平面、側面、すべて、削り調整。有孔円板の中で、最も形状が整っている。穿孔は、両方向より。	
21	有孔円板 滑石製	2区06C 10(E-5)	長さ 3.0 幅 2.6 厚さ 0.6 孔径 0.2 重さ 7.8g。上・下平面は、原石面。側面の半分程に削り調整が施こされ、整形されている。穿孔は、一方向からで、非常に小さな孔である。	
22	有孔円板 滑石製	2区06C 10(E-5)	長さ 2.8 幅 2.3 厚さ 0.5 孔径 0.3 重さ 4.9g。上・下平面は、原石面。上平面一部に、U字状の刃物の傷痕残存。側面は、削り調整。穿孔は、両方向より。	
23	有孔円板 滑石製	2区06C 09(D-5)	長さ 3.0 幅 2.2 厚さ 0.8 孔径 0.2 重さ 5.2g。上・下平面の一部に削り調整。他は、原石面。側面は、一部に削り調整。穿孔は、両方向より。	
24	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 1.9 幅 1.0 厚さ 0.8 重さ 1.3g。平欠。下平面、右側面は、削り調整。穿孔は、一方向からか。	
25	有孔円板 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 2.6 幅 1.6 厚さ 0.5 孔径 一 重さ 3.1g。平欠。上・下平面は、原石面。側面は、半分程、削り調整。穿孔は、両方向より。平削りは、整形後か。	
26	剣形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 2.9 幅 1.8 厚さ 0.4 重さ 3.4g。上・下平面、左右側面、削りによる調整。鍔の表現はなく、扁平である。上方側面、下方側面は、整形後、欠損か。	
27	剣形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 4.3 幅 2.0 厚さ 1.1 重さ 9.8g。上平面一部に、削り調整。他は、すべて、形削りの状態。鍔の表現があり。また、全体の形状から、剣形と考えられる。	
28	剣形 滑石製	2区06C 09(D-5)	長さ 8.1 幅 2.1 厚さ 1.1 重さ 26.3g。上・下平面、左右側面は、削り調整。部分的に原石面が残る。上方側面は、3号土器集積%54と整合。調整時以降の割れか。穿孔はなし。%54に敲打された痕あり。	
29	剣形 滑石製	2区06C 10(E-5)	長さ 3.0 幅 2.2 厚さ 7.5 重さ 8.1g。上・下平面、左右側面、削りにより、小刻みに面取りがされている。図上方は、整形後、欠損か。穿孔は、なし。	
30	剣形 滑石製	2区06C 10(E-5)	長さ 3.0 幅 1.5 厚さ 4.5 重さ 2.6g。図左右側面は、削り調整。他はすべて、原石面。形状から、剣形と思われる。穿孔は、なし。	
31	剣形 滑石製	2区07C 09(D-6)	長さ 3.3 幅 1.7 厚さ 0.8 重さ 4.9g。上・下平面とも、削り調整。鍔の表現があり、剣形と思われる。穿孔は、なし。	
32	滑石 未成品	2区06C 10(E-5)	長さ 2.7 幅 1.4 厚さ 0.8 重さ 4.1g。上・下平面とも、削り調整。左右側面は、剥離。なにかの製品の一部分の可能性あるが、不明。	
33	滑石 未成品	2区06C 09(D-5)	長さ 3.3 幅 2.0 厚さ 1.1 重さ 8.3g。図左側面のみ、刃物による削り痕があるほかは、すべて、原石面。形状より、剣形を意図したもののか。	
34	滑石 未成品	2区07C 10(E-6)	長さ 3.5 幅 2.2 厚さ 0.7 重さ 6.8g。上・下平面、右側面は、削り調整。形状から、剣形の未成品の可能性が大きい。	
35	滑石 未成品	2区07C 09(D-6)	長さ 2.2 幅 1.4 厚さ 0.7 重さ 2.0g。上・下平面は、削り調整。右側面は、剥離。鍔があることから剣形の未成品の可能性が大きい。	
36	滑石 未成品	2区07C 10(E-6)	長さ 2.1 幅 1.3 厚さ 0.7 重さ 2.7g。上・下平面、右側面は、削り調整。左側面は、整形後、欠損か。形状から、剣形の未成品の可能性が大きい。	
37	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 4.7 幅 2.7 厚さ 0.8 重さ 14.9g。荒削りの状態で、削り痕はなく、原石面のみである。	
38	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.4 幅 2.2 厚さ 0.8 重さ 8.3g。荒削りの状態で、削り痕はなく、原石面のみである。	
39	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.3 幅 2.8 厚さ 0.7 重さ 5.9g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。	
40	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.4 幅 2.1 厚さ 0.7 重さ 6.0g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。形状から、剣形を意図した荒削りか。	
41	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.2 幅 2.5 厚さ 9.5 重さ 9.6g。荒削りの状態。形状から、有孔円板か、剣形を意図したもののか。	

第6節 祭祀遺構と遺物

図号	器種名称	出土位置	特	数(単位cm)
42	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.6 幅 2.0 厚さ 0.8 重さ 6.8g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。形状から、削形を意図した荒削りか。	
43	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 2.6 幅 1.8 厚さ 1.0 重さ 5.5g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。	
44	滑石 チップ	2区07C 09(D-6)	長さ 3.1 幅 2.1 厚さ 0.9 重さ 6.8g。荒削りの状態。形状から、削形を意図したものが。	
45	滑石 チップ	2区07C 10(E-6)	長さ 3.2 幅 1.6 厚さ 0.8 重さ 4.5g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。形状から、削形を意図した荒削りか。	
46	滑石 未成品	2区06C 09(D-5)	長さ 2.2 幅 1.5 厚さ 0.5 重さ 3.2g。図上・下平面及び右側面に、刃物による削り調整。その他は、原石面。何かの製品から、削離した可能性が高い。	
47	滑石 チップ	2区06C 09(D-5)	長さ 2.8 幅 2.2 厚さ 1.1 重さ 8.5g。上・下平面の一部を削り調整。他は、原石面。	
48	滑石 チップ	2区06C 10(E-5)	長さ 2.9 幅 2.1 厚さ 0.7 重さ 6.4g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。形状から有孔円板か削形を意図した荒削りと思われる。	
49	滑石 チップ	2区06C 10(E-5)	長さ 3.8 幅 2.6 厚さ 1.3 重さ 14.3g。荒削りの状態で、削り痕はなく、すべて、原石面のままである。	
50	滑石 未成品	2区06C 10(E-5)	長さ 2.4 幅 1.0 厚さ 0.5 重さ 1.8g。図右側面に、刃物による削り調整がある。左側面は、削離面。形状から、有孔円板から、削離したものが。	

2号土器集積出土遺物(工作用石器)観察表(PL.176, 177, 178)

図号	器種名称	出土位置	特	数(単位cm)
51	用途不明	2区06C 09(D-5)	材質 黒色片岩。長さ 6.8 幅 5.9 厚さ 2.0 重さ 117g。左側平面はほぼ中央に1箇所凹みあり。側面に若干の剝離痕あり。工作台、敲打石として、利用された可能性がある。	
52	砥石	2区07C 08(C-6)	材質 粗粒安山岩。長さ 8.5 幅 6.6 厚さ 4.3 重さ 298g。川原石の利用。使用面は、表裏にあり、他は原石面。使用面は、滑沢があり、凹みにも及ぶため、主体は、木・皮などの軟質物質。	
53	砥石	2区07C 09(D-6)	材質 デイサイト。長さ 6.4 幅 3.6 厚さ 1.6 重さ 47g。川原石の利用。円縁の表裏の破線内に滑沢の箇所あり。研磨面が少ないため、主体は、不明。	
54	砥石	2区06C 10(E-5)	材質 砂岩。長さ 6.1 幅 4.0 厚さ 2.0 重さ 52g。川原石の利用。図上方に黒石面あり。図中の乗痕は、むしろし痕。金属研磨については、全体に付着していて、不明瞭。	
55	砥石	2区06C 09(D-5)	材質 炭灰岩。長さ 4.3 幅 2.6 厚さ 1.1 重さ 18g。川原石の利用。右側部は、旧時欠損。使用面は、表裏にあり。表側は、ヒケ傷。裏側は、刃傷、ヒケ傷。主体は、小型のため、不明。	
56	敲打石	2区07C 09(D-6)	材質 黒色片岩。長さ 12.1 幅 5.1 厚さ 4.5 重さ 454g。側面の両端部に敲打時の剝離痕あり。裏面側面にも、剝離痕あり。	
57	敲打石	2区06C 09(D-5)	材質 雲母石英片岩。長さ 16.6 幅 6.3 厚さ 3.9 重さ 577g。図両端部及び平面上方側面に敲打時の剝離痕あり。	
58	敲打石	2区06C 09(D-5)	材質 黒色片岩。長さ 15.5 幅 4.7 厚さ 2.2 重さ 272g。図両端部及び平面上方側面に敲打時の剝離痕あり。	
59	敲打石	2区06C 09(D-5)	材質 雲母石英片岩。長さ 14.3 幅 6.1 厚さ 1.9 重さ 226g。図上・下側面に敲打時の剝離痕あり。左端部にも剝離痕あり。	
60	敲打石	2区06C 09(D-5)	材質 デイサイト。長さ 9.6 幅 4.2 厚さ 3.3 重さ 175g。図両端部に敲打時の剝離痕あり。手のひらにちようど入る。納まりのよい石である。	
61	敲打石	2区07C 10(E-6)	材質 実質安山岩。長さ 10.9 幅 2.6 厚さ 2.8 重さ 16.5g。図両端部に敲打時の剝離痕あり。手のひらにちようど入る。手ごろな石である。	
62	敲打石	2区07C 10(E-6)	材質 雲母石英片岩。長さ 13.7 幅 4.3 厚さ 2.8 重さ 227g。図両端部及び上・下側面に敲打時の剝離痕あり。手のひらにちようど入る。手ごろな石である。	
63	敲打石	2区07C 10(E-6)	材質 デイサイト。長さ 9.4 幅 4.9 厚さ 2.5 重さ 149g。図左端部から上方側面にかけて、敲打時の剝離痕あり。手のひらにちようど入る。手ごろな石である。	
64	敲打石	2区07C 09(D-6)	材質 粗粒安山岩。長さ 8.9 幅 6.5 厚さ 2.7 重さ 190g。図上側面及び、左図右端部に敲打時の剝離痕あり。	
65	敲打石	2区06C 09(D-5)	材質 緑色片岩。長さ 13.7 幅 7.5 厚さ 4.8 重さ 512g。図両端部に敲打時の剝離痕あり。以上、あげた10個の敲打石の他に、6個、敲打石と考えられる、剝離痕をもった、持ちやすい手ごろな石が出土している。	
66	工作台	2区07C 10(E-6)	材質 粗粒安山岩。長さ 13.0 幅 9.8 厚さ 3.9 重さ 1010g。図平面上、敲打時の凹み多数あり。左端部に剝離痕あり。	
67	工作台	2区06C 09(D-5)	材質 黒色片岩。長さ 14.0 幅 10.5 厚さ 2.6 重さ 690g。図左右側面に敲打時の剝離部分あり。平面上に敲打された時の凹み、剝離部分あり。工作台、敲打石両方の利用が考えられる。	
68	工作台	2区06C 09(D-5)	材質 黒色片岩。長さ 19.0 幅 10.9 厚さ 5.5 重さ 1820g。図の側面に数箇所、敲打された時の剝離部分あり。	

第3章 検出された遺構と遺物

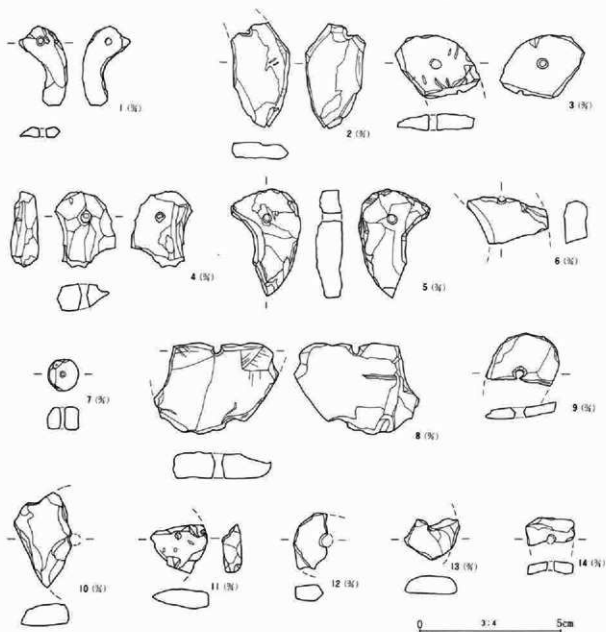
2号土器集積出土遺物（土器類）観察表（PL.179）

通称	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 底形状	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
69	土師器 長脚壺 09(D-6)	2区07C	口一高一底4.0 胴一底 片	①普通・白色灰青色少量 ②酸化・硬③鈍い赤褐色	外面 胴部は寛削り。 内面 胴部は撫で。	
70	土師器 長脚壺 09(D-6)	3区07C	口一高一底(13.6) 底一 胴一 片	①普通・灰色系少量 ② 酸化・普通③鈍い赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 寛削り。内面 胴部は撫で。	
71	土師器 壺 09(D-6)	2区07C	口一高一底(9.2) 胴部下半一底 片	①普通・白色系少量 ② 酸化・普通③鈍い赤褐色	外面 胴部下半は寛削り。 内面 胴部下半一底部は撫で。	
72	土師器 壺 09(D-6)	2区07C	口一高一底7.0 胴一底 片	①細・白色系微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 胴部は寛削り。 内面 胴部は寛削り。	内面は黒色処 理。
73	土師器 壺 09(D-5)	2区06C	口一高一底6.1 胴部下半一底 破片	①細・夾雑物ほとんどな し ②酸化・普通③褐色	外面 胴部下半は斜め寛削り。 内面 胴部下半一底部は撫で。	内面は黒色処理。
74	土師器 小壺 09(D-6)	2区07C	口(12.4)高一底一 口一 胴一 片	①細・夾雑物ほとんどな し ②酸化・普通 ③明 赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。 外面 胴部は寛削り。 内面 胴部は撫で。	
75	土師器 小壺 09(D-6)	2区07C	口(13.0)高一底一 口縁部一 胴部 片	①細・灰色系少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	外面 口縁部は横撫で、胴部、底削り。 内面 口縁部は横撫で、胴部、撫で。	
76	土師器 壺 09(D-6)	2区07C	口(15.5)高一底一 口一 胴一 片	①普通・白色系微量 ② 酸化・普通③鈍い黄褐色	外面 口縁部は撫で、胴部は縦寛削り。 内面 口縁部は横撫で、胴部は撫で。	
77	土師器 小壺 09(D-6)	2区07C	口(13.6)高一底一 口一 胴一 片	①細・白色系微量 ②酸 化・普通③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は寛 削り。内面 胴部は撫で。	
78	土師器 小壺 09(D-6)	2区07C	口一高一底6.2 胴一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 胴部一底部は寛削り。 内面 胴部は撫で。	
79	土師器 小壺 09(D-6)	2区07C	口(12.0)高一底一 口一 胴一 破片	①細・白色系少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 寛削り。内面 胴部は寛削り。	
80	土師器 小壺 09(D-5)	2区06C	口(10.7)高一底一 口一 胴一 破片	①細・白色系微量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 口縁部は横撫で、胴部は寛削り。 内面 口縁部一底部は横撫で。	
81	土師器 壺 09(D-6)	2区07C	口(13.3) 高(7.2) 底一 口一底 片	①普通・白色系少量 ② 酸化・普通③鈍い褐色	外面 口縁部は横撫で、底部は寛削り。 内面 口縁部一底部は横撫で。	内面。
82	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径13.2高4.2丸底 完形	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	3枚重ねの一番 下。
83	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径13.5高4.6丸底 完形	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、底部一底部は寛削り 。内面 口縁部一底部は横撫で。	
84	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径13.4高4.8丸底 ほぼ完形	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	3枚重ねの一番 上。底部は黒色。
85	土師器 杯 09(D-6)	3区08C	口径12.8高4.9丸底 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	底部は黒色。
86	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径12.1高4.9丸底 口一底 片	①細・灰色系微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	
87	土師器 杯 10(E-6)	2区07C	口径13.2高4.0丸底 口一底 片	①細・灰色系微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	金雲母混入。
88	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径12.9高4.3丸底 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	
89	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径11.3高3.7丸底 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	
91	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径(13.1) 高5.2 丸底 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は寛削り。内面 底部一底部は撫で。	厚手。
92	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口径12.4高4.2丸底 口一底 片	①細・灰色系微量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、底部一底部は寛削り 。内面 口縁部一底部は横撫で。	
93	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(11.5) 高(4.1) 丸底 口一底 片	①細・灰色系少量 ②酸 化・普通 ③灰褐色	外面 口縁部は横撫で、底部は寛削り。 内面 口縁部一底部は横撫で。	底部は黒色。
94	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(12.8)高一底一 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③明褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部一底 部は横寛削り。内面 底部一底部は撫で。	内面黒色処理。
95	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(12.0)高一底一 口一底 片	①細・白色系微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部は撫で、底部は寛削り。 内面 口縁部一底部は撫で。	
96	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(12.3)高一底一 口一底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部は寛 削り。内面 底部は撫で。	
97	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(12.2)高一底一 口一底 片	①細・白色系微量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部は寛 削り。内面 底部は撫で。	
98	土師器 杯 09(D-6)	2区07C	口(12.8)高一底一 口一底 片	①細・白色系微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 底部は寛 削り。内面 底部は撫で。	

第6節 祭祀遺構と遺物

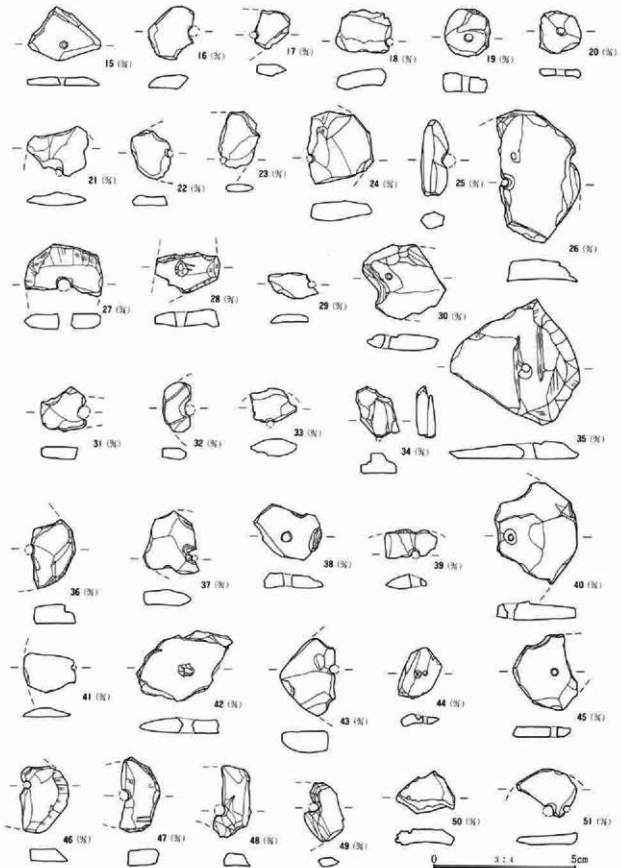
図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
99	土師器 土師器 環	2区07C 09(D-6)	口(11.5) 高(4.5) 丸底 口～底 互	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部は無で、体部～底部は削削り。 内面 口縁部は横撫で、体部～底部は撫で。	
100	土師器 土師器 環	2区07C 09(D-6)	口(13.7) 高一 底一 口～体 互	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部は横撫で、体部は横削削り。 内面 口縁部～体部は横撫で。	
101	土師器 土師器 環	2区07C 09(D-6)	口(13.9) 高一 底一 口～底 互	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 口縁部は無で、体部は削削り。 内面 口縁部～体部は横撫で。	
102	土師器 土師器 環	2区06C 08(C-5)	口(11.5) 高一 底一 口～体 互	①酸化・黒色紅少量 ② 酸化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部は無で、体部は横削削り。 内面 口縁部は横撫で。	
103	須恵器 須恵器 短頸壺	2区06C 09(D-5)	口一 高一 底一 肩～胴 互	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③褐色	ロクロ整形後、回転削削り調整。	
104	須恵器 須恵器 環蓋	2区06C 09(D-5)	口(14.8) 高(2.6) 天井部～肩部 互	①細・灰色紅少量 ②還元・硬 ③褐色	ロクロ整形(右回転)。	3号土器集積出土 破片と接合。
105	須恵器 須恵器 環	2区06C 09(D-5)	口(19.4) 高(3.7) 底 (15.2) 口～底 破片	①細・白色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	表面に自然釉付着。
106	土師器 土師器 環身	2区06C 10(E-5)	口(11.4) 高一 底一 口～体 互	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。体部～底部 削削り調整。	
107	須恵器 須恵器 環身	2区06C 09(D-5)	口一 高一 底一 体部片	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。体部削削り調整。	
108	須恵器 須恵器 環蓋	2区06C 09(D-5)	口一 高一 体部～口縁部片	①細・白色微砂粒少量 ②還元・普通 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
109	土師器 土師器 環蓋	2区07C 09(D-6)	口(13.6) 高一 体部～口縁部片	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
110	須恵器 須恵器 環蓋	2区06C 09(D-5)	口一 高一 体部片	①細・黒色微砂粒少量、白 色微砂粒少量②還元・硬	ロクロ整形(右回転)。	表面は灰色。
111	須恵器 須恵器 環蓋	2区06C 10(E-5)	口(12.0) 高一 口縁部片	①細・白色微砂粒少量② 還元・硬③灰褐色	ロクロ整形(右回転)。	
112	須恵器 須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦3.5 横4.1)	①細・白色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 斜め格子印。内面 青海波印。	
113	須恵器 須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦5.0 横3.8)	①普通・白色微砂粒少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 内面 撫で。	
114	須恵器 須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦3.0 横3.5)	①普通・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 内面 青海波印。	
115	須恵器 須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦2.0 横2.0)	①普通・白色黒色微砂粒少 量 ②還元・軟 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 内面 青海波印。	中間に鈍い黄褐色帯あり。
116	須恵器 須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦2.1 横3.0)	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 格子印。	
117	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口(10.3) 高5.6 底5.9 口～底 互	①普通・夾雑物なし ② 酸化・硬 ③黒色	指頭圧痕、内面・外面にあり。	底部に木炭痕あり。
118	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口18.4 高7.1 底5.6 口～底 互	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。	
119	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口9.9 高6.3 底一 口～底 互	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。内面に一部 指痕あり。	
120	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口(11.0) 高(6.0) 底(6.0) 体～底	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。	底部に木炭痕あり。
121	手捏土器 手捏土器	2区06C 09(D-5)	口一 高一 底6.0 体～底	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。	底部に木炭痕あり。
122	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口(10.1) 高一 底一 口～体	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。外面 口縁 部横撫で。	
123	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口(10.2) 高一 底一 口～体・底部	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③灰褐色	指痕あり、内面・外面にあり。	
124	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口(8.0) 高一 底 (6.0) 口縁部・底部片	①粗・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	指痕あり、内面・外面にあり。口縁部、横 撫で。	底部に木炭痕あり。
125	手捏土器 手捏土器	2区07C 09(D-6)	口一 高一 底(4.8) 体～底	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③褐色	指頭圧痕、内面・外面にあり。	

第3章 検出された遺構と遺物



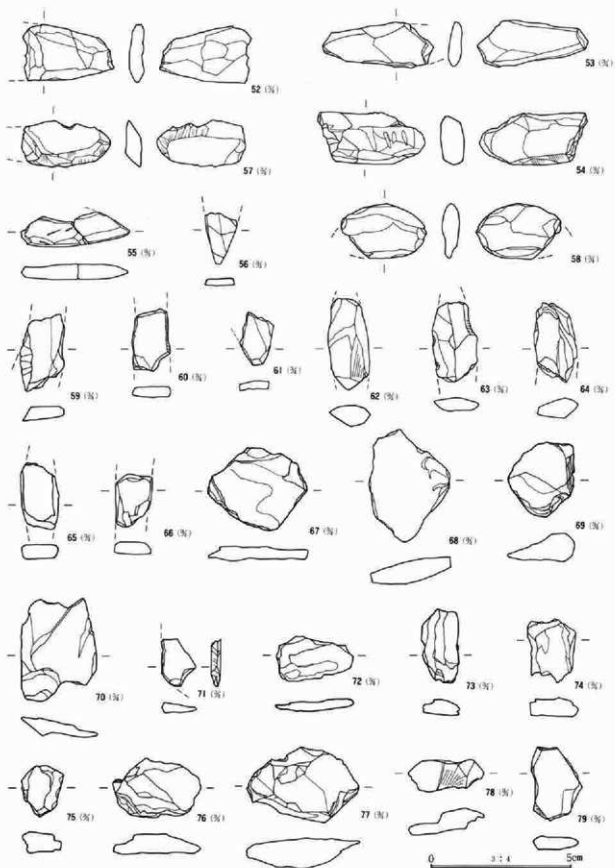
第409図 3号土器集積出土遺物実測図(1)

第6節 祭祀遺構と遺物

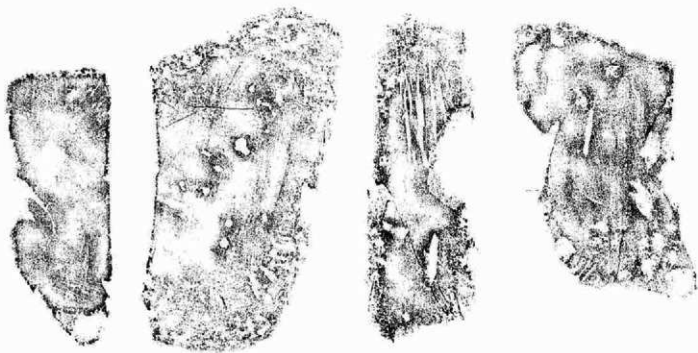
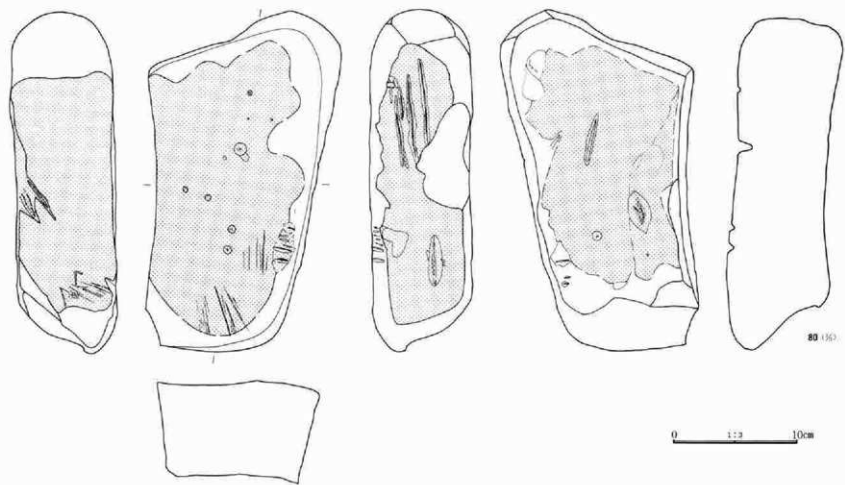


第410図 3号土器集積出土遺物実測図(2)

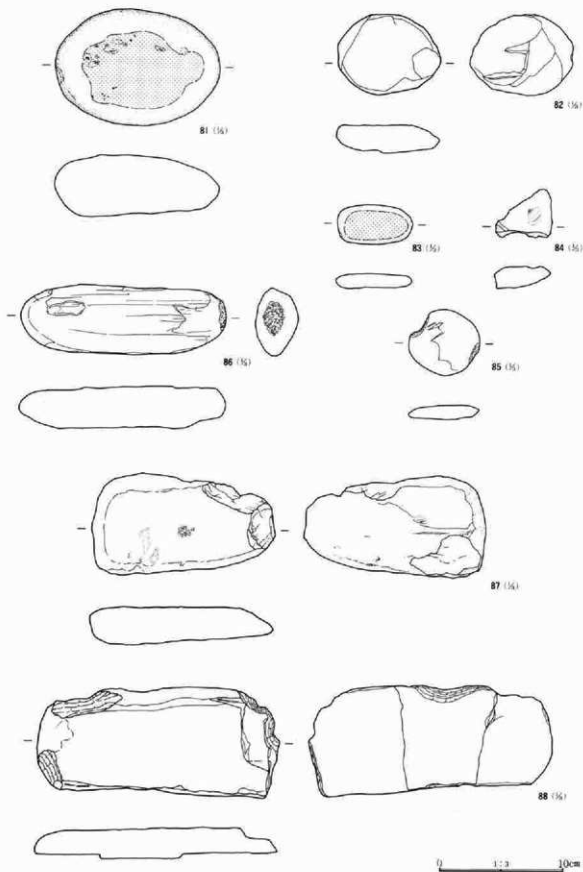
第3章 検出された遺構と遺物



第411図 3号土器集積出土遺物実測図(3)

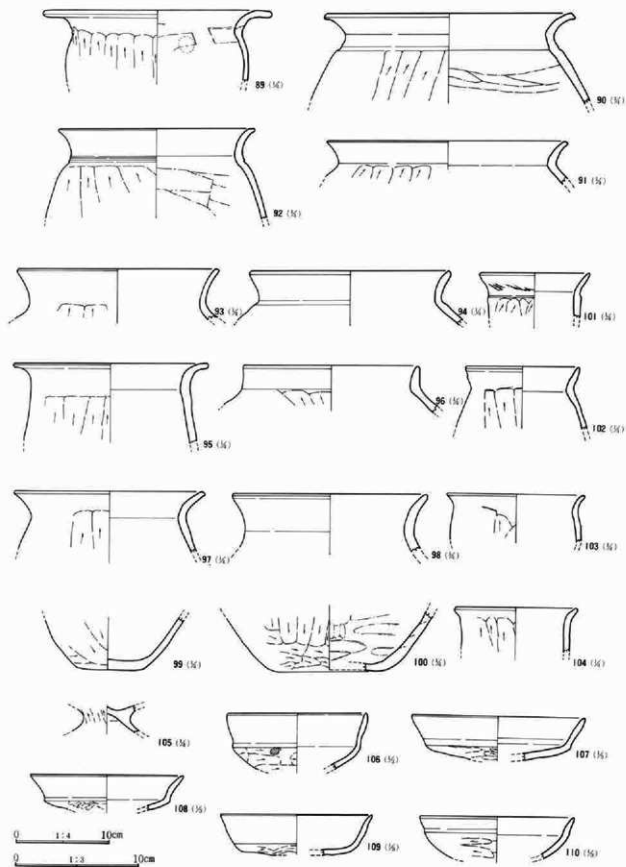


第412图 3号土器集積出土遺物実測図(4)



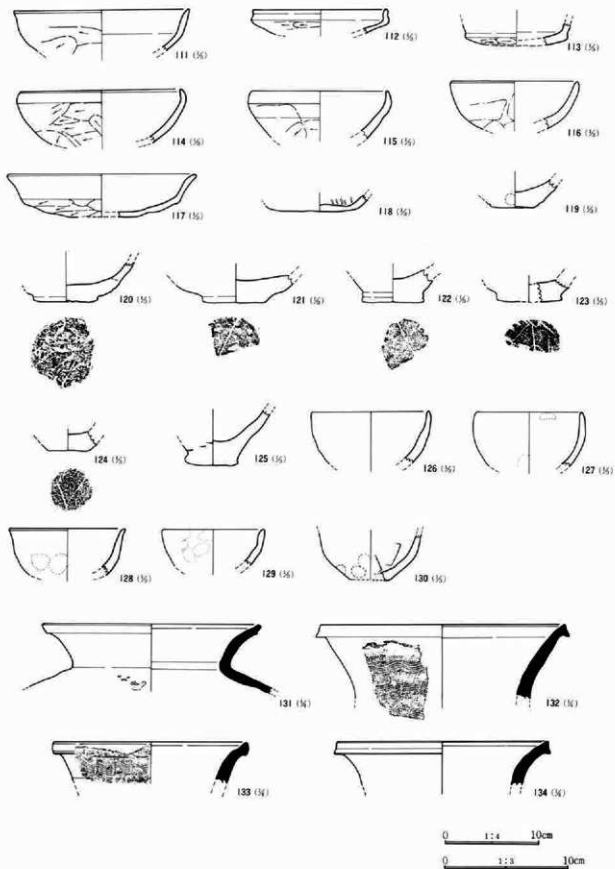
第413図 3号土器集積出土遺物実測図(5)

第3章 検出された遺構と遺物

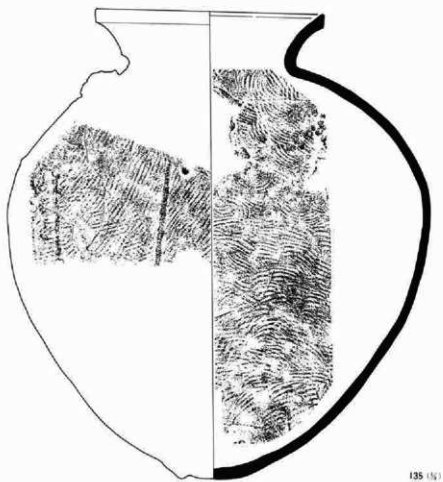


第414図 3号土器集積出土遺物実測図(6)

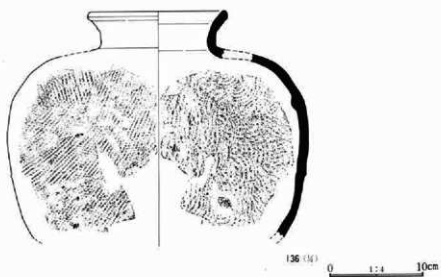
第6節 祭祀遺構と遺物



第415図 3号土器集積出土遺物実測図(7)



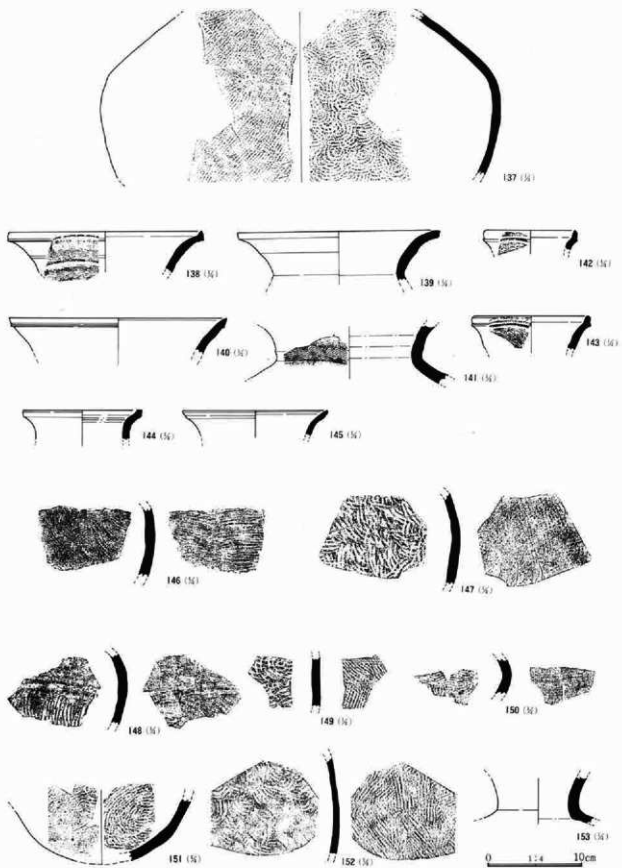
135 (3)



136 (3)

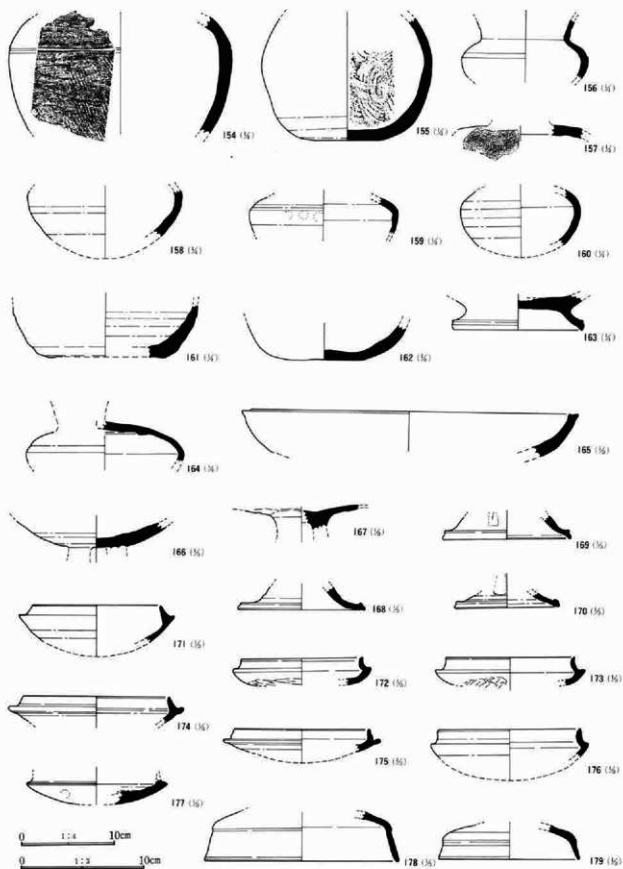
0 1:4 10cm

第416図 3号土器集積出土遺物実測図(8)

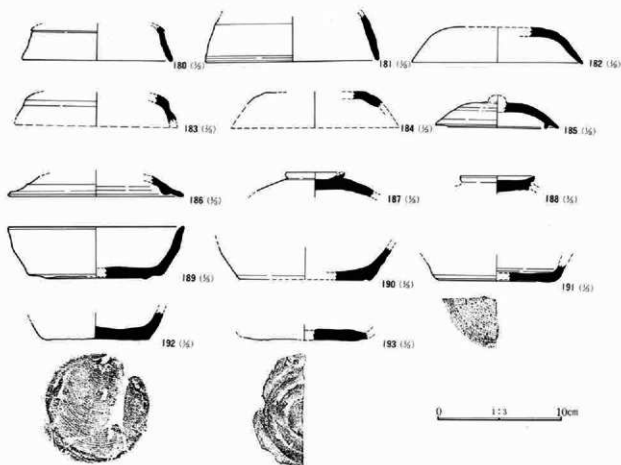


第417図 3号土器集積出土遺物実測図(9)

第3章 検出された遺構と遺物



第418図 3号土器集積出土遺物実測図(10)



第419図 3号土器集積出土遺物実測図(11)

3号土器集積出土遺物(滑石)観察表(PL.180, 181, 182, 183)

図番号	器種名称	出土位置	特	径(単位cm)
1	勾玉 滑石製	2区03C 10(E-2)	長さ 2.8 幅 1.4 厚さ 0.4 孔径 0.2 重さ 1.5g。図上下平面は、原石面のまま。左右側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。非常に薄い、板状の勾玉である。	
2	勾玉 滑石製	2区04C 08(C-3)	長さ 3.6 幅 1.9 厚さ 0.5 孔径 (0.2) 重さ 7g。図上下平面は、原石面のまま。左右側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。薄い板状の勾玉である。上部欠損。刀子状工具の先端で、穿孔している。	
3	勾玉 滑石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.7 幅 2.1 厚さ 0.6 孔径 (0.3) 重さ 7.5g。図上下平面は、原石面のまま。左右側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。板状の勾玉である。下部欠損。	
4	勾玉 滑石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.6 幅 1.9 厚さ 1.0 孔径 0.2 重さ 8.1g。図上下平面及び左右側面、すべて、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。比較的、肉厚の勾玉である。下部欠損。刀子状工具の先端による穿孔。	
5	勾玉 滑石製	2区04C 09(D-3)	長さ 3.8 幅 2.4 厚さ 0.9 孔径 0.3 重さ 15g。図上下平面及び左右側面、すべて、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。比較的、肉厚の勾玉である。下部一部欠損。縁孔部に刻痕あり。	
6	勾玉 滑石製	2区04C 09(D-3)	長さ 3.0 幅 1.7 厚さ 0.7 孔径 0.3 重さ 5.1g。図上下平面及び左右側面、すべて、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。比較的、肉厚の勾玉である。上部及び下部欠損。	
7	白玉 滑石製	2区04C 09(D-3)	径1.1 厚さ0.8 孔径0.2 重さ1.6g。図上平面は、刃物による削り調整。下平面は、原石面。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方向。比較的大振りの商品。	
8	有孔円板 滑石製	2区05C 09(D-4)	長さ 4.5 幅 3.1 厚さ 0.9 孔径 0.3 重さ 17g。図上下平面及び側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。半分欠損。大よりの有孔円板である。刀子状工具の先端で、穿孔している。	
9	有孔円板 滑石製	2区05C 09(D-4)	長さ 2.5 幅 1.6 厚さ 0.4 孔径 0.3 重さ 2.6g。図上下平面は、原石面。側面は刃物による削り調整。穿孔は、両方向。図下方欠損。刀子状工具の先端で、穿孔している。	
10	有孔円板 滑石製	2区03C 09(D-2)	長さ 3.1 幅 1.9 厚さ 0.7 孔径 一 重さ 5.8g。図左側面一部を、刃物による削り調整。図上下平面は、原石面。穿孔は、一方向。図右側は欠損。	
11	有孔円板 滑石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.1 幅 1.7 厚さ 0.6 孔径 一 重さ 2.8g。図右側面を、円周状に刃物による削り調整。図上下平面は、原石面。穿孔部分はない。ほぼ径を欠損しているが、側面の削りにより、有孔円板と判明。	
12	有孔円板 滑石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.9 幅 1.2 厚さ 0.6 孔径 一 重さ 1.5g。図上下平面は、原石面。図左側面は、刃物による削り調整。右側は欠損。穿孔は、両方向。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	図名	出土位置	特 徴	図 (単位cm)
13	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.7 幅 1.1 厚さ 0.6 孔径 — 重さ 2.0g。図上下平面は、原石面。図右側面は、刃物による削り調整。左側は欠損。穿孔は、不明。	
14	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 1.7 幅 0.9 厚さ 0.3 孔径 — 重さ 0.8g。図上下平面は、原石面。図上方側面は、一部、刃物による削り調整。下方は欠損。穿孔は、両方向。	
15	有孔円板 磨石製	2区03C 07(B-2)	長さ 2.6 幅 1.9 厚さ 0.3 孔径 0.2 重さ 2.2g。図上下平面及び側面は、すべて原石面。穿孔は、両方向。側面は、使用時に隣に剥離欠損した可能性がある。	
16	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.8 幅 1.5 厚さ 0.5 孔径 — 重さ 1.7g。図上下平面及び側面は、すべて原石面。穿孔は、両方向。右側は欠損。側面は、使用時に隣に剥離欠損した可能性がある。	
17	有孔円板 磨石製	2区03C 10(E-2)	長さ 1.4 幅 1.3 厚さ 0.4 孔径 — 重さ 1.0g。図上下平面及び側面は、すべて原石面。図左側は欠損。穿孔は、一方向。	
18	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.9 幅 1.4 厚さ 0.6 孔径 — 重さ 2.8g。図上下平面は、原石面。図左側面は、刃物による削り調整。右側及び下方は欠損。穿孔は、両方向。	
19	有孔円板 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 1.7 幅 1.6 厚さ 0.7 孔径 0.3 重さ 2.6g。図上下平面は、原石面。側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。	
20	有孔円板 磨石製	2区03C 07(B-2)	長さ 1.5 幅 1.4 厚さ 0.2 孔径 0.3 重さ 2.6g。図上下平面は、原石面。側面は、一部、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。	
21	有孔円板 磨石製	2区03C 07(B-2)	長さ 2.2 幅 2.1 厚さ 0.4 孔径 — 重さ 3.6g。半分に割れている。図上下平面及び側面は、すべて原石面。剥離した可能性がある。穿孔は、一方向。	
22	有孔円板 磨石製	2区05C 09(D-4)	長さ 1.7 幅 1.4 厚さ 0.4 孔径 — 重さ 1.1g。図上下平面は、原石面。側面は、一部、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。半分に割れている。	
23	有孔円板 磨石製	2区05C 09(D-4)	長さ 1.9 幅 1.4 厚さ 0.3 孔径 — 重さ 1.3g。図上下平面、側面とも、原石面。穿孔は、両方向および半分に割れている。	
24	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 2.8 幅 2.7 厚さ 0.7 孔径 (0.3) 重さ 11.5g。図上下平面、右側面とも、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。左側及び下方は、欠損。	
25	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 2.7 幅 1.4 厚さ 0.6 重さ 2.4g。図上平面及び左側面は、刃物による削り調整。下平面及び右側面は、剥離欠損。穿孔は、両方向の可能性が高い。刀子状工具の先端にて、穿孔している。	
26	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 4.7 幅 2.8 厚さ 0.7 孔径 (0.3) 重さ 12.0g。図上下平面は、原石面。右側面は、一部、刃物による削り調整。穿孔は、一方向で、終端部は、面取りで修正。半分欠損。大板りの有孔円板。	
27	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.8 幅 1.6 厚さ 0.5 孔径 (0.4) 重さ 3.9g。図上下平面、上方側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。半分に割れている。下方欠損。	
28	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-3)	長さ 2.2 幅 1.4 厚さ 0.6 孔径 0.3 重さ 2.9g。図上下平面及び右下方側面は、刃物による削り調整。左方及び上方は、欠損。穿孔は、両方向。刀子状工具の先端を使用。	
29	有孔円板 磨石製	2区05C 10(E-4)	長さ 1.5 幅 0.9 厚さ 0.3 孔径 — 重さ 0.8g。図上下平面及び下方側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向。上方及び右側は、欠損。	
30	有孔円板 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 2.6 幅 2.4 厚さ 5.5 孔径 0.2 重さ 6.1g。図上下平面及び側面は、原石面。剥離による欠損の可能性が高い。穿孔は、両方向。	
31	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.5 幅 1.5 厚さ 0.4 孔径 — 重さ 1.4g。図上下平面は、原石面。左側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方向で、刀子状工具による。半分に割れている。	
32	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 1.7 幅 1.0 厚さ 0.4 孔径 — 重さ 1.0g。図上下平面は、原石面。左側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。半分に割れている。剥離欠損。	
33	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 1.7 幅 1.2 厚さ 0.6 孔径 — 重さ 1.4g。図上平面一部、刃物による削り調整。他は、すべて、原石面。穿孔は、両方向。半分に割れている。剥離欠損。	
34	有孔円板 磨石製	2区03C 08(C-2)	長さ 2.2 幅 1.4 厚さ 0.7 孔径 — 重さ 2.4g。図下平面、刃物による削り調整。他は、すべて原石面。穿孔は、両方向。下方及び左側は、調整時以降の欠損。	
35	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 4.5 幅 4.2 厚さ 0.6 孔径 0.4 重さ 13g。図上下平面は、原石面。側面は、一部、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。接合部は、上平面に刃物あり。大板りの有孔円板。	
36	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.6 幅 1.6 厚さ 0.7 孔径 — 重さ 5g。図上平面及び右側面は、刃物による削り調整。下平面は、原石面。穿孔は、一方向で、終端部は、面取りで修正。半分欠損は、調整時以降。	
37	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 2.1 幅 1.7 厚さ 0.5 孔径 — 重さ 3g。図上下平面は、原石面。左側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。右側及び下方は、欠損。	
38	有孔円板 磨石製	2区03C 09(D-2)	長さ 2.5 幅 1.6 厚さ 0.5 孔径 0.3 重さ 5g。図下方側面一部、刃物による削り調整。他は、すべて、原石面。側面部分は、調整時以降の欠損。穿孔は、両方向。	
39	有孔円板 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 1.9 幅 0.9 厚さ 0.6 孔径 — 重さ 2.3g。図上方側面は、刃物による削り調整。他は、すべて、原石面。調整時以降の欠損。穿孔は、一方向。	
40	有孔円板 磨石製	2区05C 09(D-4)	長さ 3.6 幅 2.8 厚さ 0.7 孔径 0.2 重さ 9g。図上下平面は、原石面。剥離欠損。側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。右側は、調整時以降の欠損。	
41	有孔円板 磨石製	2区03C 08(C-2)	長さ 1.8 幅 1.3 厚さ 0.3 孔径 — 重さ 0.8g。剥片。剥離欠損したものが。図上下平面、側面とも、原石面。一方向。	
42	有孔円板 磨石製	2区04C 07(B-3)	長さ 3.6 幅 2.1 厚さ 0.5 孔径 0.3 重さ 7.0g。図上下平面及び側面は、すべて、原石面。穿孔は、両方向で、2度行っている。刀子状工具の先端で穿孔か、欠損は、調整時以降。	

第6節 祭祀遺構と遺物

図番号	器種名称	出土位置	特 徴	数 (単位cm)
43	有孔円板 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 2.7 幅 1.9 厚さ 0.7 孔径 — 重さ 6.1g。図上下平面は、原石面。左側面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。右側は、調整時以降の欠損か。	
44	有孔円板 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 1.9 幅 1.2 厚さ 0.3 孔径 0.2 重さ 1.4g。図上下平面及び側面は、すべて、原石面。穿孔は、両方向。1箇所、途中でやめた穿孔部分あり。	
45	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.7 幅 2.1 厚さ 0.4 孔径 0.3 重さ 3.8g。図上下平面及び側面は、すべて、刃物による削り調整。穿孔は、一方。右側は、調整時以降の欠損。	
46	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.4 幅 1.7 厚さ 0.4 孔径 (0.3) 重さ 5.0g。図上下平面は、原石面。側面は、一部、刃物による削り調整。穿孔は、一方。左側は、調整時以降の欠損。	
47	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.7 幅 1.4 厚さ 0.6 孔径 (0.3) 重さ 5.0g。図上下平面及び側面は、すべて、刃物による削り調整。穿孔は、一方。左側は、調整時以降の欠損。	
48	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.5 幅 1.2 厚さ 0.5 孔径 (0.4) 重さ 3.1g。図上下平面は、原石面。右側面一部に刃物による削り調整。穿孔は、一方。左側は、調整時以降の欠損。	
49	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.1 幅 1.3 厚さ 0.3 孔径 (0.3) 重さ 3.1g。図上下平面及び側面すべて、原石面。穿孔は、両方向。左側は、調整時以降の欠損か。	
50	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.1 幅 1.3 厚さ 0.6 孔径 — 重さ 4.0g。図上下平面及び側面は、すべて、刃物による削り調整。1箇所、穿孔を途中でやめた痕あり。左側及び下方は、調整時以降の欠損。	
51	有孔円板 磨石製	埋没土	長さ 2.2 幅 1.6 厚さ 3.5 孔径 — 重さ 4.0g。図上平面一部及び側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方。下方は、調整時以降の欠損か。	
52	銅 形 磨石製	2区02C 09(D-1)	長さ 3.2 幅 2.0 厚さ 0.6 重さ 4.8g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。上方及び下方側面は、調整時以降の欠損。	
53	銅 形 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 3.9 幅 1.6 厚さ 0.4 重さ 3.8g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。上方及び下方側面は、調整時以降の欠損。	
54	銅 形 磨石製	2区03C 08(D-2)	長さ 3.5 幅 1.7 厚さ 8.5 重さ 10.0g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。2号土器集積No.28と接合。欠損時にできた傷あり。	
55	銅 形 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 3.8 幅 1.2 厚さ 0.5 重さ 3.6g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。2個体が接合した。左側面も欠損した部分であり、接合を試みたが、接合しなかった。上方に穿孔状の傷あり。	
56	銅 形 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 1.7 幅 1.1 厚さ 0.2 重さ 0.8g。図上平面及び左右側面は、刃物による削り調整。下方平面は銅離面。上方側面は、調整時以降の欠損。銅形の変態部。	
57	銅 形 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 3.2 幅 1.7 厚さ 5.5 重さ 4.2g。図左右平面の半分ほどを刃物による削り調整している。左平面の右側面に、刃物による刻みが、1箇所入る。上方は、銅離欠損か。	
58	銅 形 磨石製	2区05C 09(D-4)	長さ 3.1 幅 1.9 厚さ 0.6 重さ 4.7g。図左右平面は、原石面。左右側面は、刃物による削り調整。上方は、銅離欠損か。	
59	銅 形 磨石製	2区04C 09(D-3)	長さ 2.4 幅 1.5 厚さ 0.5 重さ 2.5g。図下平面及び右側面に刃物による削り調整がある他は、すべて原石面。銅離欠損したものか。	
60	銅 形 磨石製	2区05C 09(D-4)	長さ 2.1 幅 1.8 厚さ 0.4 重さ 1.7g。図下平面及び左右側面に刃物による削り調整。上平面は、銅離面。上下端面は、調整時以降の欠損か。	
61	銅 形 磨石製	埋没土	長さ 1.9 幅 1.1 厚さ 0.3 重さ 1.2g。図上平面及び左右側面に刃物による削り調整。上下端面は、調整時以降の欠損。	
62	銅 形 磨石製	2区04C 08(C-3)	長さ 3.2 幅 1.4 厚さ 0.7 重さ 6.0g。図上平面に一部分、刃物による削り調整あり。他は、すべて原石面。下方端面は、調整時以降の欠損か。	
63	銅 形 磨石製	埋没土	長さ 2.8 幅 1.5 厚さ 0.5 重さ 5g。図上下平面一部を刃物による削り調整。他は、原石面か。上下端面は、調整時以降の欠損か。	
64	銅 形 磨石製	埋没土	長さ 2.7 幅 1.4 厚さ 0.7 重さ 5.1g。図上平面の一部、刃物による削り調整。他は、原石面。銅形を意図した彫りの可能性あり。	
65	銅 形 磨石製	埋没土	長さ 2.2 幅 1.2 厚さ 0.5 重さ 5.6g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。上下端面は調整時以降の欠損。	
66	銅 形 磨石製	埋没土	長さ 1.8 幅 1.3 厚さ 0.4 重さ 3.0g。図上下平面及び左右側面は、刃物による削り調整。上下端面は調整時以降の欠損か。	
67	磨 石 チップ	埋没土	長さ 3.6 幅 3.0 厚さ 0.5 重さ 6.5g。緑色片岩の可能性。板状に荒削りされている。有孔円板を意図した荒削りか。	
68	磨 石 チップ	2区03C 09(D-2)	長さ 4.0 幅 3.0 厚さ 0.8 重さ 11.0g。板状に荒削りされている。側面一部に刃物による削り痕あり。有孔円板を意図した荒削りか。	
69	磨 石 未成品	2区04C 08(C-3)	長さ 2.7 幅 2.4 厚さ 1.1 重さ 7.0g。図上平面及び側面の一部に刃物による削り調整。有孔円板の製作途中で放棄したものか。	
70	磨 石 チップ	2区04C 09(D-3)	長さ 3.6 幅 2.8 厚さ 0.6 重さ 5.1g。緑色片岩の可能性あり。板状に薄く荒削りされている。	
71	磨 石 未成品	2区04C 08(C-3)	長さ 1.7 幅 1.3 厚さ 0.4 重さ 1.1g。左側面を刃物による削り調整。他は、銅離面。調整時以降の欠損か。	
72	磨 石 チップ	2区04C 08(C-3)	長さ 3.2 幅 1.6 厚さ 0.4 重さ 3.1g。薄い銅片。荒削りの段階で、銅離したものか。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	御種名称	出土位置	特	微 (単位cm)
73	滑石 チップ	2区03C 08(C-2)	長さ 2.7 幅 1.3 厚さ 0.6 重さ 5.0g。荒削りの状態。形状からは、銅形を意図したとも考えられるが不明。	
74	未成品 滑石製	2区05C 09(D-4)	長さ 2.2 幅 1.8 厚さ 0.6 重さ 5.0g。形削りの状態。形状から、銅形を意図したものと考えられる。	
75	未成品 滑石	2区03C 09(D-2)	長さ 1.8 幅 1.4 厚さ 0.7 重さ 4.0g。図下平面に刃物による削り調整。溝状の傷もある。他は、原石面。調整時以降の欠損か。	
76	滑石 チップ	2区04C 09(D-3)	長さ 3.2 幅 2.5 厚さ 0.8 重さ 8.0g。図上平面に一部、刃物による削り痕がある他は、すべて、原石面。荒削りの状態。	
77	滑石 チップ	2区04C 09(D-3)	長さ 4.0 幅 2.8 厚さ 1.3 重さ 10.5g。荒削りの状態。何を意図したのかも不明。	
78	未成品 滑石製	2区05C 09(D-4)	長さ 2.7 幅 1.1 厚さ 0.7 重さ 2.1g。図上平面全体を刃物による削り調整。他は、原石面。	
79	未成品 滑石製	2区02C 09(D-1)	長さ 2.5 幅 1.7 厚さ 0.5 重さ 3.0g。図上平面及び上方側面を刃物による削り調整。他は、銅線面。	

3号土器集積出土遺物 (工作用石頭) 観察表 (PL.183, 184, 185)

図号	御種名称	出土位置	特	微 (単位cm)
80	砥石	2区03C 09(D-2)	材質 砂岩。長さ 25.6 幅 15.0 厚さ 8.2 重さ 4.1kg。川原石の利用砥で、上平面右側部と左側部の一部に原石面。使用は、表裏、手前と奥の部。表裏には、時として、もみ切りの製作台として、用いられたらしく、円錐形の小穴が、表面に2、裏面に9個所認められ、他は研磨面となる。上側面図では、破線曲線に研磨面があり、条痕は、刃ならし傷。下側面は、上方の切れ込みの調査時欠損を除き、研磨となり、右側に細かな刃ならし傷あり。各面は、置き紙として使用され、表裏は中凹みとなっているため、小型金属の研磨主体、または、小石材の研磨に用いられ、両側部のうち、下側は、横断面が直線的であるため、太身の金属が主体と考えられる。上側の側面は、中凹み箇所やいく分凸った箇所があるため、小型の研磨主体が考え得る。	
81	砥石	2区03C 08(C-2)	材質 粗粒安山岩。長さ 13.1 幅 9.2 厚さ 4.8 重さ 830g。川原石の利用。図平面の破線内に使用がみられる。主体は、硬質の材質でありながら、磨耗が、天地方向に残されており、硬質の物質。	
82	砥石	2区04C 08(C-3)	材質 牛伏砂岩。長さ 8.3 幅 6.3 厚さ 2.2 重さ 126g。川原石の利用。側部に原石面が残される。図中破線が使用面で、裏面に太めのならし傷あり。研磨の主体は、突地物の突出があり、軟質の物質。	
83	砥石	2区04C 09(D-3)	材質 緑色片岩。長さ 6.0 幅 3.1 厚さ 1.1 重さ 36g。川原石の利用。面全体に石英粒が多く浮き出ており、それが、風化のように見え、研磨使用面について、判然としなない。	
84	砥石	2区03C 09(D-2)	材質 砂岩。長さ 4.5 幅 4.2 厚さ 1.7 重さ 20g。川原石の利用。図上平面に原石ならし箇所あり。使用は、表面に傷あり。研磨は、小型のため、不明瞭。	
85	用途不明	2区03C 08(D-2)	材質 緑色片岩。長さ 5.6 幅 5.2 厚さ 1.1 重さ 45.0g。側面に、敲打による割離あり。凹形を呈する。	
86	敲打石	2区03C 08(D-2)	材質 黒色片岩。長さ 16.4 幅 5.3 厚さ 3.3 重さ 479g。図右端部に敲打時に割離したと思われる部分あり。	
87	敲打石	2区04C 09(D-3)	材質 緑色片岩。長さ 14.5 幅 7.8 厚さ 2.9 重さ 508g。右側面、左端部に敲打時に割離したと思われる部分あり。また、中央に、同心円状の小穴があり、工作台として利用した可能性もある。	
88	工作台	2区04C 08(D-3)	材質 雲母石英片岩。長さ 19.5 幅 8.4 厚さ 2.4 重さ 564g。図上下平面の側面を中心に敲打時に割離したと思われる部分あり。大ききから、工作台と思われる。	

3号土器集積出土遺物 (土器類) 観察表 (PL.186, 187)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
89	土器器 壺	2区04C 09(D-3)	口(24.4)高一底一 口~胴長	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い橙褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。内面 胴部は横撫で。	
90	土器器 壺	2区04C 08(C-3)	口(26.2)高一底一 口~胴長	①普通・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③明褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は斜 め削り。内面 胴部は横撫で。	
91	土器器 壺	2区04C 08(C-3)	口(25.7)高一底一 口~胴部上手	①普通・白色灰色鉄多量 ②酸化・普通 ③赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。内面 胴部は横撫で。	
92	土器器 壺	2区04C 08(C-3)	口(21.0)高一底一 口~胴長	①細・灰色鉄少量 ②酸 化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。内面 胴部は横撫で。	
93	土器器 壺	糠扱土	口(21.1)高一底一 口~胴長	①細・灰色鉄少量 ②酸 化・硬 ③橙褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。	
94	土器器 壺	2区05C 10(E-4)	口(21.0)高一底一 口~胴長	①普通・白色灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③明赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。内面 胴部は横撫で。	
95	土器器 壺	2区05C 09(D-4)	口(20.8)高一底一 口~胴長	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は縦 削り。内面 胴部は横撫で。	
96	土器器 壺	2区04C 08(C-3)	口(18.5)高一底一 口~胴長	①細・白色灰色鉄少量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共、口縁部は横撫で。外面 胴部は斜 め削り。内面 胴部は横撫で。	

第6節 祭祀遺構と遺物

番号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
97	土師器 壺	2区05C 09(D-4)	口(20.6)高一底一 口~胴 片	①普通・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 胴部は縦 長削り。内面 胴部は撫で。	
98	土師器 壺	2区04C 08(C-3)	口(20.8)高一底一 口~胴部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③橙褐色	内外共、口縁部は横線で。	
99	土師器 壺	2区05C 09(D-4)	口一高一底7.3 胴~底 片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴部は縦削り。 内面 胴部は無で。	
100	土師器 壺	2区05C 09(D-4)	口一高一底(11.6) 胴~底 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 胴部は縦削り。 内面 胴部は撫で。	
101	土師器 小壺	2区04C 08(C-3)	口(11.8)高一底一 口~胴	①細・白色紅微量 ②酸 化・硬 ③鈍い橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 胴部は縦 長削り。内面 胴部は無で。	
102	土師器 小壺	2区05C 09(D-4)	口(12.2)高一底一 口~胴	①普通・白色紅少量 ③ 酸化・普通 ③鮮褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 胴部は縦 長削り。内面 胴部は無で。	
103	土師器 小壺	2区05C 09(D-4)	口(14.7)高一底一 口~胴	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 胴部は横 撫で。内面 胴部は無で。	
104	土師器 小壺	2区04C 09(D-3)	口(12.5)高一底一 口~胴	②酸化・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③黒褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 胴部は縦 長削り。	内面黒色処理。
105	土師器 台付甕	2区04C 09(D-3)	口一高一底一 台部片	①細・黒色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 甕削り。 内面 撫で。	
106	土師器 環	2区05C 09(D-4)	口(11.0)高一底一 口~底 片	①細・夾雑物なし ②酸 化・普通 ③橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は横 長削り。内面 体部は無で。	
107	土師器 環	2区03C 07(B-2)	口(13.8)高一底一 口~底 片	①細・灰色紅少量 ②酸 化・硬 ③鈍い黄褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は縦 削り。内面 体部~底部は無で。	
108	土師器 環	2区04C 09(D-3)	口(12.1)高一底一 口~体 片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は縦 削り。内面 体部は撫で。	
109	土師器 環	埋没土	口(12.4)高一底一 口~体 片	①普通・夾雑物なし ② 酸化・普通 ③鈍い橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は横 長削り。内面 体部は無で。	
110	土師器 環	2区03C 09(D-2)	口(12.0)高一底一 口~底 片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③黒褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部~底 部は縦削り。内面 体部~底部は無で。	
111	土師器 環	2区04C 08(C-3)	口(14.0)高一底一 口~体 片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は縦 削り。内面 体部は無で。	
112	土師器 環	2区04C 08(C-3)	口(10.7)高一底一 口~体 片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部は横撫で、体部は縦削り。 内面 口縁部~体部は無で。	
113	土師器 環	2区04C 09(D-3)	口一高一底一 口~体部片	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・硬 ③鈍い橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は横 長削り。	
114	土師器 環	2区04C 08(C-3)	口(12.7)高一底一 口~体 片	①細・白色紅少量 ②酸 化・普通 ③橙褐色	外面 口縁部は横撫で、体部は縦削り。 内面 口縁部~体部は無で。	
115	土師器 環	2区04C 09(D-3)	口(11.0)高一底一 口~体 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は縦 削り。内面 体部は無で。	
116	土師器 環	2区03C 09(D-2)	口(10.0)高一底一 口~体 片	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部は縦 撫で。内面 体部は無で。	
117	土師器 環	2区05C 09(D-4)	口(15.0)高一底一 口~底 片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・普通 ③橙褐色	内外共、口縁部は横線で。外面 体部~底 部は縦削り。内面 体部~底部は無で。	
118	土師器 壺	2区03C 08(C-2)	口一高一底7.6 底部 片	①普通・白色赤色紅少量 ②酸化・普通 ③橙褐色	外面 底部は縦削り。 内面 底部は無で。	底部に火をうけた跡あり。
119	手製土器	2区05C 09(D-4)	口一高一底5.2 底部 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰黄褐色	外面・内面に指頭圧痕あり。	
120	手製土器	2区04C 08(C-3)	口一高一底(4.9) 底部 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 指頭圧痕あり。 内面 撫で。	底部に木炭灰あり。
121	手製土器	2区04C 09(D-3)	口一高一底(5.2) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・軟 ③鈍い黄褐色	外面・内面に指頭圧痕あり。	底部に木炭灰あり。
122	手製土器	埋没土	口一高一底(14.9) 底部片	①普通・白色紅微量 ② 酸化・普通 ③鈍い黄褐色	外面 指頭圧痕あり。 内面 撫で。	底部に木炭灰内面 黒色処理。
123	手製土器	2区04C 09(D-3)	口一高一底(5.1) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③明赤褐色	摩耗が激しいため、不明確であるが、指頭 で整形したものと思われる。	底部に木炭灰あり。
124	手製土器	2区04C 08(C-3)	口一高一底(3.3) 底部片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 不明。 内面 撫で。	底部に木炭灰あり。
125	手製土器	2区04C 09(D-3)	口一高一底(4.1) 胴~底 片	①普通・灰色紅少量 ② 酸化・硬 ③淡紫色	外面 指頭圧痕あり。 内面 撫で。	
126	手製土器	2区04C 09(D-3)	口(9.4)高一底一 口~体 片	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③灰黄色	外面 指頭圧痕あり。 内面 撫で。	

第3章 検出された遺構と遺物

種別	器 形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
127	手捏土器	2区04C 09(D-3)	口(7.5)高一底一 口～体部片	①普通・白色黒色少量 ②酸化・青濁 ③鈍い棕色	外面 指撫で。 内面 口縁部に指頭圧痕あり。	
128	手捏土器	2区04C 09(D-3)	口(9.2)高一底一 口～体部片	①普通・白色黒色少量 ②酸化・青濁 ③灰オリーブ色	外面 体部に指頭圧痕あり。 内面 指撫で。	
129	手捏土器 埋没土	口(8.2)高一底一 口～体部片	①普通・白色黒色少量 ②酸化・普通 ③鈍い棕色	外面 口縁部～体部に指頭圧痕あり。 内面 指撫で。		
130	手捏土器	2区04C 08(C-3)	口一高一底(3.2) 体～底部片	①普通・白色黒色少量 ②酸化・普通 ③鈍い棕色	外面 体部に指頭圧痕あり。 内面 体部は指撫で。	
131	須 志 器 大 壺	2区04C 09(D-3)	口(23.4)高一底一 口～胴部片	①細・黒色黒少量 ②還元・焼締 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 黒色斑点多量。内面 撫で。指頭圧痕あり。	自然輪付着。 秋間・乗附。
132	須 志 器 壺	口(26.2)高一底一 口縁部片	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 波状文 3段。		
133	須 志 器 壺	2区03C 09(D-2)	口(20.6)高一底一 口縁部片	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 波状文 1段。	
134	須 志 器 大 壺	2区04C 09(D-3)	口(22.5)高一底一 口縁部片	①普通・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	自然輪付着。 吉井
135	須 志 器 大 壺	2区05C 09(D-4)	口(24.4) 高(49.5) 底一 口～底 瓦	①細・黒色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 紐作り後、口縁部横撫で、胴部格子叩き 内面 口縁部横撫で、胴部は青海波叩き。	外部に自然輪付着。 乗附・兼入(東海)
136	須 志 器 壺	2区02C 08(C-2)	口(14.2)高一底一 口～胴 瓦	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 斜格子叩き。内面 青海波様叩き。	全体に自然輪付着。 乗附・兼入(東海)
137	須 志 器 大 壺	2区04C 08(C-3)	口一 高一 底一 胴部 瓦	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 縦平行叩き。内面 青海波様叩き。	胴部に自然輪付着。 秋間・乗附
138	須 志 器 壺	口(20.6)高一底一 口縁部	①普通・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰オリーブ色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 波状文 2段。		
139	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口(21.8)高一底一 口縁部片	①細・夾雑物ほとんどなし ②還元・硬 ③黒色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	兼入(東海)
140	須 志 器 壺	2区03C 08(C-2)	口(23.4)高一底一 口縁部片	①細・白色黒少量 ②還元・焼締 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	内面 自然輪付着。 乗附
141	須 志 器 壺	2区03C 09(D-2)	口一(類15.8)底一 胴部片	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。頸部、波状文 1段。	乗附
142	須 志 器 壺(破)	口(9.4)高一底一 口～胴	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 波状文。	自然輪付着。 兼入(東海)	
143	須 志 器	2区03C 08(C-2)	口(12.1)高一底一 口縁部	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 波状文。	兼入(東海)
144	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口(12.6)高一底一 口縁部	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	新入 3層 吉井
145	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口(15.6)高一底一 口縁部片	①普通・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	吉井
146	須 志 器 壺	2区03C 08(D-1)	口一高一底一胴部片 縦10.2 横6.8	①普通・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 平行叩き。内面 青海波様叩き後、すり消し。	吉井・海間・秋間
147	須 志 器 壺	2区04C 08(C-2)	口一高一底一胴部片 縦9.5 横12.0	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 格子叩き後、すり消し。内面 青海波様叩き。	乗附・秋間
148	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口一高一底一胴部片 縦9.5 横7.5	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 胴部下半格子叩き。内面 胴部下半青海波。	新入3層 吉井
149	須 志 器 壺	2区03C 09(D-2)	口一高一底一胴部片 縦5.2 横4.5	①細・黒色黒少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 斜格子叩き後回転カキ目。内面 青海波叩き。	秋間・乗附
150	須 志 器 壺	2区04C 07(B-3)	口一高一底一胴部片 縦3.7 横6.5	①粗・白色黒少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 回転カキ目。内面 青海波様叩き。	自然輪付着。 秋間・乗附
151	須 志 器 壺	2区04C 08(C-2)	口一高一底一胴部片 縦9.0 横5.4	①細・黒色黒少量 ②還元・硬 ③オリーブ灰	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 平行叩き。内面 青海波様叩き。	自然輪付着。 乗附・秋間
152	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口一 高一 底一 胴部 瓦	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 平行叩き。内面 青海波様叩き。	秋間
153	須 志 器 壺	埋没土	口一高一底(7.5) 底～胴部片	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間
154	須 志 器 壺	2区04C 09(D-3)	口一 高一 底一 胴部 瓦	①細・黒色黒少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。 外面 波状文。平行叩き。	吉井・東附・藤岡
155	須 志 器 壺	2区05C 09(D-4)	口一 高一 底7.0 胴～底 瓦	①細・白色黒少量 ②還元・硬 ③灰オリーブ色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 内面 青海波叩き。	底部に自然輪付着。吉井

第6節 祭祀遺構と遺物

図号	器 種 形 式	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
156	須恵器 短頸直 瓶	2区03C 09(D-2)	口一頸(9.5)底一 口～体 互	①細・白色黒色紅少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	自然輪付着。 葉附
157	須恵器 壺	2区04C 08(C-3)	口一 高 一 底一 胴部片	①細・黒色紅少量 ② 還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間・搬入(表面) 自然輪付着。 葉附・秋間
158	須恵器 壺	2区03C 09(D-2)	口一 高 一 底一 胴部片	①細・黒色紅少量 ②還 元・硬 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	自然輪付着。 葉附・秋間
159	須恵器 壺	2区04C 09(D-3)	口一 高 一 底一 肩～胴部片	①細・白色紅微量 ②還 元・軟 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
160	須恵器 壺	埋没土	口一 高 一 底一 肩～胴部片	①細・黒色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。外面 回 転カキ目。	葉附
161	須恵器 壺	埋没土	口一高一底(12.5) 胴～底片	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。高部は回転蔑削り。	吉井
162	須恵器 壺	2区03C 08(C-2)	口一 高 一 底8.2 胴～底 互	①普通・白色黒色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。内面 青 海波様叩き。	底部 自然輪付 着。吉井
163	須恵器 付蓋 土壺	2区03C 08(C-2)	口一 高 一 底13.8 台部	①細・灰色紅少量 ② 還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	自然輪付着。 吉井・藤岡
164	須恵器 平瓶	2区04C 08(C-3)	口一 高 一 底一 胴～体 互	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。内面に粘 土板接合部あり。頸部は、肩部にずれる。	葉附
165	須恵器 壺	2区03C 07(B-2)	口(27.0)高一底一 口縁部片	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	内面 自然輪付 着。吉井
166	須恵器 高 杯	2区03C 10(E-2)	口一 高 一 底一 坏底部	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③暗青灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)。 外面 透しあり。内面 無で。	外面 自然輪付 着。葉附
167	須恵器 高 杯	埋没土	口一 高 一 底一 坏底部	①細・黒色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 坏底部蔑削で。	葉附
168	須恵器 高 杯	2区04C 08(C-3)	口一高一頸(13.6) 胴部片	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
169	須恵器 高 杯	2区03C 08(C-2)	口一高一頸(13.8) 胴部片	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。 (右回転)。外面 透しあり。	外面 自然輪付 着。葉附
170	須恵器 高 杯	2区05C 09(D-4)	口一高一頸(11.0) 胴部片	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 外面 透しあり。	葉附
171	須恵器 坏 身	2区04C 09(D-3)	口(10.2)高一底一 口～体部片	①細・白色黒色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間
172	須恵器 坏 身	2区04C 09(D-3)	口(10.8)高一底一 口～底片	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。 外面 底部は手持ち蔑削り。	縁に自然輪付 着。葉附
173	須恵器 坏 身	2区04C 09(D-3)	口(10.3)高一底一 口～体 互	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③青灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。 底部、手持ち蔑削り調整。	葉附
174	須恵器 坏 身	2区03C 09(D-2)	口(11.6)高一底一 口～体部 互	①普通・黒色紅微量 ② 還元・普通 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
175	須恵器 坏 身	2区03C 09(D-2)	口(10.7)高一底一 口～体部片	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	吉井
176	須恵器 坏 身	2区03C 08(C-2)	口(11.4)高一底一 口～体部片	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
177	須恵器 坏 身	埋没土	口一 高 一 底一 受部～底	①細・白色紅微量 ②還 元・普通 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
178	須恵器 坏 蓋	2区04C 09(D-3)	口(15.4) 高一 体～端 互	①細・黒色紅微量 ②還 元・硬 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間・搬入?
179	須恵器 坏 蓋	2区05C 09(D-4)	口(11.2) 高一 体～端 互	①細・黒色紅少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間
180	須恵器 坏 蓋	埋没土	口(12.0) 高一 体～端	①細・黒色白色紅少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	秋間・搬入?
181	須恵器 坏 蓋	埋没土	口(14.0) 高一 体～端	①粗・灰色紅微量 ②還 元・普通 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
182	須恵器 坏 蓋	2区03C 09(D-2)	口(13.5) 高一 天井部～端部 互	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③緑灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
183	須恵器 坏 蓋	埋没土	口一 高 一 体部片	①細・黒色紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
184	須恵器 坏 蓋	2区03C 08(C-2)	口一 高 一 体部片	①細・黒色紅少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	葉附
185	須恵器 坏 蓋	埋没土	口(9.3) 高一 天井部～端 互	①普通・白色紅少量 ② 還元・硬 ③暗青灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。天井部損 欠損。	吉井

第3章 検出された遺構と遺物

図号	器 形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
186	須恵器 環 蓋	埋没土	口一高一 口縁部片	①普通・黒色白色鉄鉱少量 ②還元・硬 ③オリーブ灰	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
187	須恵器 環 蓋	2区03C 08(C-2)	口一高一 横4.6 横部	①普通・黒色鉄微量 ② 還元・硬 ③青灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	東附・秋岡
188	須恵器 環 蓋	2区02C 10(E-1)	口一高一 横(5.7) 横部	①細・白色鉄微量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。横部は貼り付け。	東附
189	須恵器 環 身	2区04C 09(D-3)	口(13.9) 高4.0 底(10.8)口～底 長	①普通・白色鉄少量 ②還元・軟 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。底部は回転削り。	新田3層 藤岡・東附
190	須恵器 埴 輪?	2区04C 09(D-3)	口一高一 底(10.5) 体～底 長	①細・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。削り出し高台、回転削り。	秋岡
191	須恵器 環	2区03C 09(D-2)	口一高一 底(9.2) 底部	①普通・白色鉄少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。底部は、回転削り。	吉井・藤岡
192	須恵器 埴 輪	2区04C 08(C-3)	口一 高一 底8.0 体～底 長	①細・黒色鉄微量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。底部回転未切り。	吉井・藤岡
193	須恵器 埴 輪	埋没土	口一 高一 底一 底部片	①普通・白色鉄微量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。底部回転削り。	藤岡・東附

第7節 掘立柱建物遺構

概要 本遺跡では合計11棟の掘立柱建物遺構を確認できた。分布状況は、4区より7棟、5区より4棟である。本遺跡ではピット群が4カ所確認されているが、掘立柱建物遺構は共にそのピット群の中より検出されており、さらに数棟の掘立柱建物遺構の存在の可能性もある。ただ、ピット群が調査区域外へ広がる部分もあり、現状では11棟の確認にとどまった。そのうち、総柱の遺構は3号掘立柱建物遺構の1棟だけであった。また、1号掘立柱建物遺構のように南側に入口部の可能性を伺わせるものもあった。庇を設けた掘立柱建物遺構は確認されなかった。

第1号掘立柱建物遺構

位置 4区29C07 **写真** PL.76

平面形 2間×2間で比較的均整のとれた長方形を呈する東西棟である。

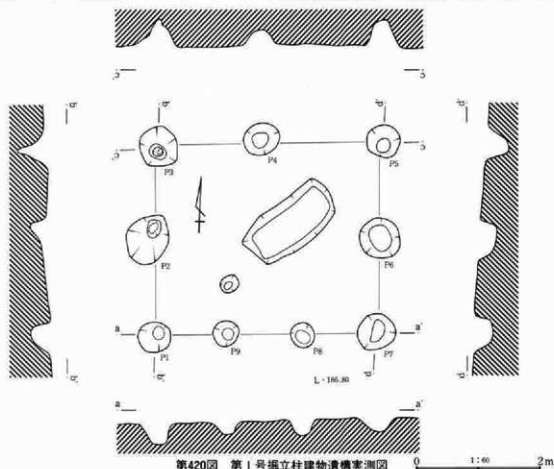
規模 桁方向3.60m・梁方向3.00mを測り、棟の走向は、N-17°-Wである。

柱穴 径42～65cm・深さ20～45cmの円形の掘りかたを呈し、四隅の柱穴が比較的大きい。

備考 南辺だけが3間となっており、出入口を意図したものと考えられる。重複はなく、単独で検出されている。構築年代を推測させる遺物の出土はない。

第8表 第1号掘立柱建物遺構柱間計測値

$P_1 \sim P_2$	$P_2 \sim P_3$	$P_3 \sim P_4$	$P_4 \sim P_5$	$P_5 \sim P_6$	$P_6 \sim P_7$	$P_7 \sim P_8$	$P_8 \sim P_9$	$P_9 \sim P_{10}$
168	120	162	192	150	145	120	125	110



第420図 第1号掘立柱建物遺構実測図

第2号掘立柱建物遺構

位置 4区26C07 写真 PL.76

平面形 現況で2間×2間の比較的均整のとれた長方形を呈するが、東辺の中間に位置するはずの柱穴が確認されず、桁が東側に伸びる可能性があるので東西棟であったと考えられる。

規模 桁方向(3.10m+α)・梁方向4.30mを測り、棟の走向はN-33°-Wである。

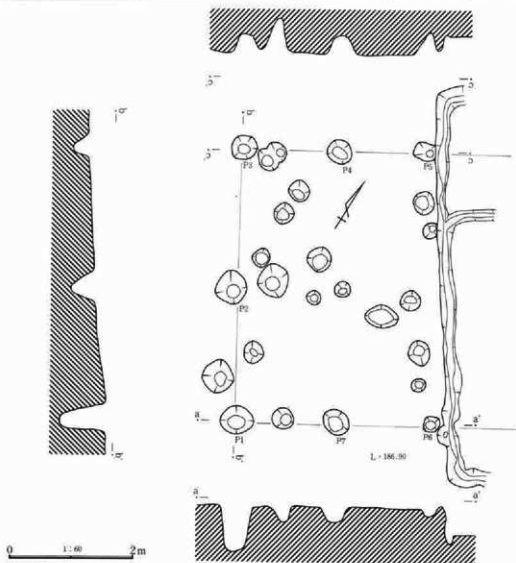
柱穴 径25~55cm・深さ10~76cmの円形の掘りかた

第9表 第2号掘立柱建物遺構柱間計測値

P ₁ ~P ₂	P ₂ ~P ₃	P ₃ ~P ₄	P ₄ ~P ₅	P ₅ ~P ₇	P ₇ ~P ₁	(P ₅ ~P ₆)
210	215	158	150	150	156	(434)

を呈しており、それぞれの規模には、統一性がない。P₁・P₇の断面実測で中央に15cm程の幅で、砂質でもろい灰褐色土を確認した。柱の直径を推測させるものと思われる。

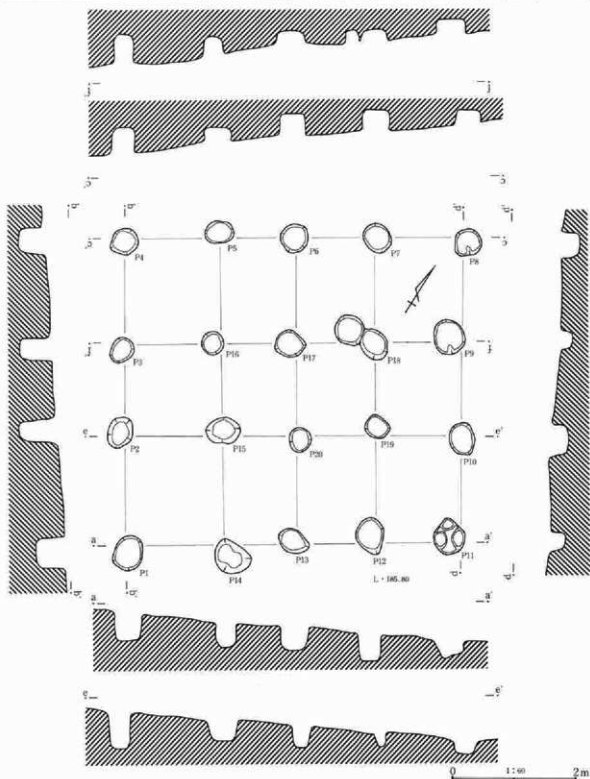
備考 23号住居跡と重複しており、桁が東方向に数間伸びる可能性がある。西辺の内側に一列柱穴列が確認されたが、別棟か建て直しは不明である。また、構築年代を推測できる遺物は出土しなかった。



第421図 第2号掘立柱建物遺構実測図

第10表 第3号獨立柱建物遺構柱間計測值

$P_1 \sim P_2$	$P_2 \sim P_3$	$P_3 \sim P_4$	$P_4 \sim P_5$	$P_5 \sim P_6$	$P_6 \sim P_7$	$P_7 \sim P_8$	$P_8 \sim P_9$	$P_9 \sim P_{10}$	$P_{10} \sim P_{11}$	$P_{11} \sim P_{12}$	$P_{12} \sim P_{13}$	$P_{13} \sim P_{14}$	$P_{14} \sim P_{15}$	$P_{15} \sim P_{16}$	$P_{16} \sim P_{17}$	$P_{17} \sim P_{18}$	$P_{18} \sim P_{19}$	$P_{19} \sim P_{20}$	$P_{20} \sim P_{21}$	$P_{21} \sim P_{22}$	$P_{22} \sim P_{23}$	$P_{23} \sim P_{24}$		
180	134	170	155	122	131	142	165	150	163	138	126	112	160	190	138	175	163	125	125	132				



第422図 第3号獨立柱建物遺構実測図

第3号掘立柱建物遺構

位置 4区00B47 写真 PL.76

平面形 4間×3間の東辺と北辺がやや歪んだ長方形の東西棟の総柱建物跡である。

規模 桁方向5.60m・梁方向5.00mを測り、棟の走向はN-45°-Wである。

柱穴 径35~50cm・深さ20~60cmの円形の掘りかたを呈しており、ほぼ統一性のある形状をしている。埋没土は総ての柱穴で黒褐色土が主体であり、明らかに同時期に掘られたものと考えられる。P₁₃は2つの柱穴があるが建て直し不明である。

備考 重複遺構がなく、単独で検出された。構築年代を推測できる遺物は出土しなかった。本遺跡では唯一で、しかも最大規模の総柱の掘立柱建物遺構である。周辺に本遺構も含めて4棟の掘立柱建物遺構を

確認したが、走向も一致せず、埋没土も異なるので同時期の遺構とは判断できない。

第4号掘立柱建物遺構

位置 5区34B48 写真 PL.76

平面形 2間×1間の南辺がやや歪んだ長方形を呈する東西棟である。

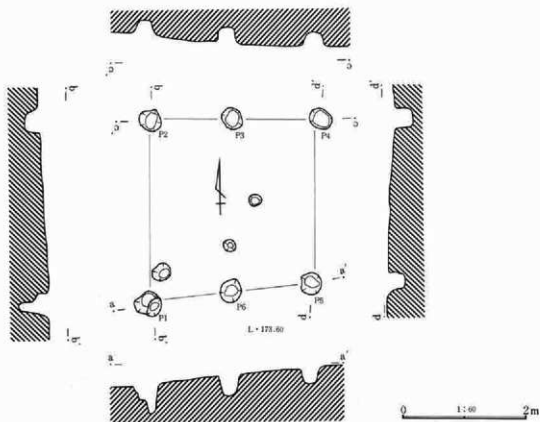
規模 桁方向2.70m・梁方向2.60mを測る。

柱穴 径35~35cm・深さ25~50cmの円形の掘りかたを呈しており、P₁を除き統一性のある形状をしている。ただ、P₁はビットが重複しており、深いビットは、後の作り替えと考えられる。棟の走向は、N-2°-Eとほぼ東西に向いている。

備考 本遺構と重複する遺構はなく、西下がりの緩やかな斜面に単独して検出された。本遺構の構築年代を推測させる遺物の出土はなかった。

第11表 第4号掘立柱建物遺構柱間計測値

P ₁ ~P ₂	P ₂ ~P ₃	P ₃ ~P ₄	P ₁ ~P ₅	P ₅ ~P ₆	P ₄ ~P ₁
290	132	140	260	130	130



第423図 第4号掘立柱建物遺構実測図

第5号掘立柱建物遺構

位置 5区28B48 写真 PL.77

平面形 1間×1間の比較的歪みのない方形を呈する。南辺ほぼ中央や内側に1つピットがあるが、本遺構に伴うものか不明である。従って、どちらの方向に出入口があったのか確認できなかった。

規模 一辺が2.30mを測り、棟の走向はN-18°-Eと

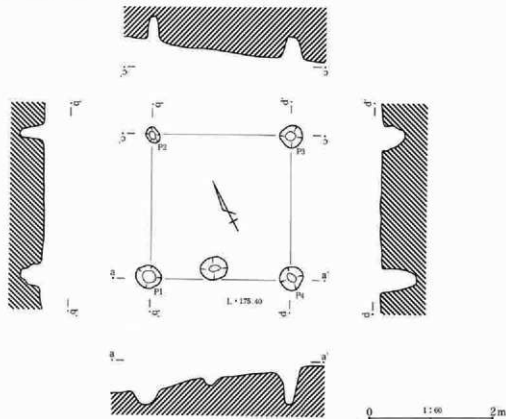
しておく。

柱穴 径22~40cm・深さ25~60cmを測る円形の掘りかたを呈し、それぞれの形状をしている。

備考 本遺構は6号掘立柱建物遺構の内側に存在する。新旧関係は不明である。構築年代を推測させる遺物の出土はなかった。

第12表 第5号掘立柱建物遺構柱間計測値

$P_1 \sim P_2$	$P_2 \sim P_3$	$P_3 \sim P_4$	$P_4 \sim P_1$
240	225	230	240



第424図 第5号掘立柱建物遺構実測図

第6号掘立柱建物遺構

位置 5区29B49 写真 PL.77

平面形 2間×1間の北辺と西辺に歪みのある不正四角形を呈する東西棟と考えられる。

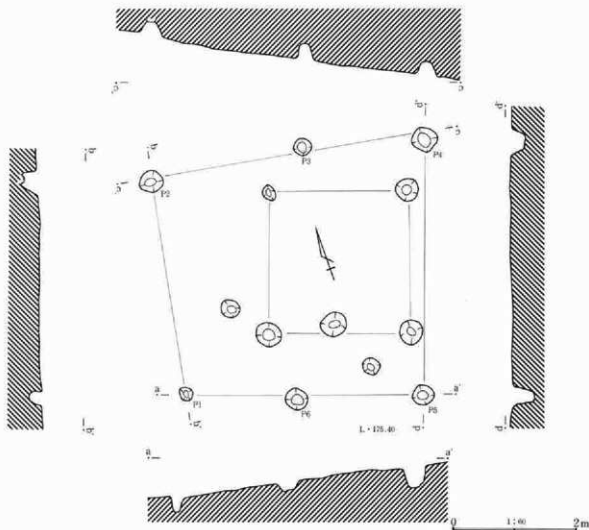
規模 桁方向3.90m・梁方向4.05mというように梁方向がやや長くなってしまふ。棟の走向はN-19°-Eである。

柱穴 径20~35cm・深さ15~35cmを測る円形の掘りかたを呈し、 P_1 を除き、ほぼ統一性のある形状をしている。また、 P_2 には根石が存在した。

備考 本遺構は5号掘立柱建物遺構を取り巻く形で西下がりの緩やかな斜面に確認された。新旧関係は不明である。構築年代を推測させる遺物の出土はなかった。

第13表 第6号掘立柱建物遺構柱間計測値

$P_1 \sim P_2$	$P_2 \sim P_3$	$P_3 \sim P_4$	$P_4 \sim P_5$	$P_5 \sim P_6$	$P_6 \sim P_7$
344	250	196	410	206	190



第425図 第6号掘立柱建物遺構実測図

第7号掘立柱建物遺構

位置 5区40B42 写真 PL.77

平面形 4間×3間のほぼ均整のとれた長方形を呈する東西棟である。

規模 桁方向4.20m・梁方向3.00mを測り、棟の走向はN-1°-Eである。

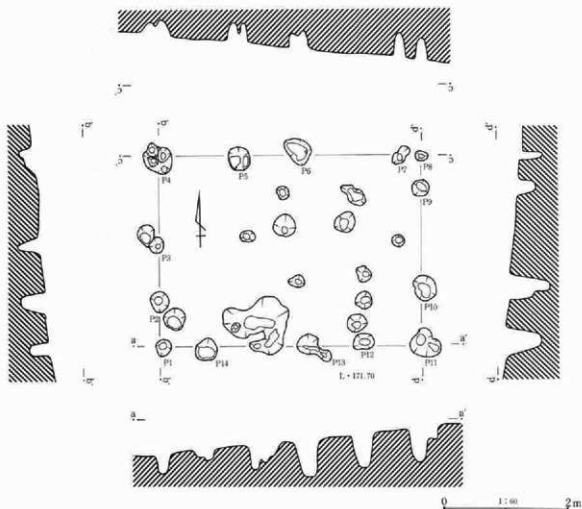
柱穴 径15～55cm・深さ20～60cmを測る円形の掘りかたを呈する。形状は、まばらで統一性に欠ける。また、掘りかたの中に作り替えをしたような形状をし

たものもある。

備考 本遺構は緩やかな斜面から比較的急な斜面へ変換する肩の部分に占地していた。まわりには多数のピットが存在し、現地で土層を確認しながら遺構の検出を試みたが本遺構のみに留まってしまった。したがって、重複する遺構はなかった。また、南辺は狭いながらも5間あり、出入り口の可能性を伺わせる。本遺構の構築年代を推測させる遺物の出土はなかった。

第14表 第7号掘立柱建物遺構柱間計測値

P ₁ ~P ₂	P ₂ ~P ₃	P ₃ ~P ₄	P ₄ ~P ₅	P ₅ ~P ₆	P ₆ ~P ₇	P ₇ ~P ₈	P ₈ ~P ₉	P ₉ ~P ₁₀	P ₁₀ ~P ₁₁	P ₁₁ ~P ₁₂	P ₁₂ ~P ₁₃	P ₁₃ ~P ₁₄	P ₁₄ ~P ₁₅	P ₁₅ ~P ₁₆
72	98	150	120	120	160	36	63	153	93	89	78	102	70	70



第426図 第7号掘立柱建物遺構実測図

第8号掘立柱建物遺構

位置 4区04B45 写真 PL.77

平面形 2間×2間の北辺が歪んだ長方形を呈する南北棟である。

規模 桁方向3.00m・梁方向2.90mを測り、棟の走向はN-72°-Wである。

柱穴 径23~45cm・深さ12~60cmを測る円形の掘りかたを呈し、形状は統一性に欠ける。

備考 本遺構の西辺は不規則ながら4間あり、出入口の可能性を伺わせる。重複はなく、構築年代を推測させる遺物の出土もなかった。

第9号掘立柱建物遺構

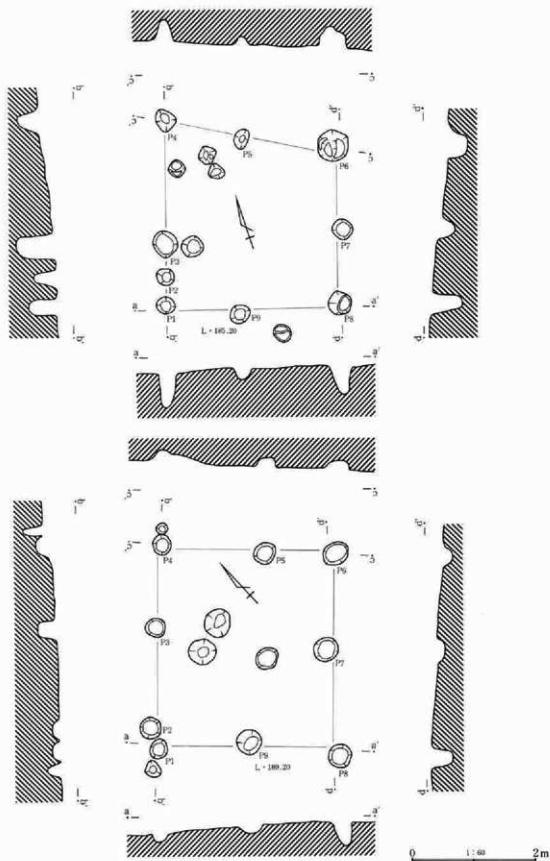
位置 4区04C12 写真 PL.77

平面形 2間×2間の比較的均整のとれた長方形を呈する南北棟である。

規模 桁方向3.20m・梁方向2.80mを測り、棟の走向はN-47°-Eである。

柱穴 径30~40cm・深さ15~40cmを測る円形の掘りかたを呈し、形状は比較的統一性がある。

備考 本遺構は北下りの緩やかな斜面に占地され、重複する遺構はなかった。構築年代を推測させる遺物の出土もなかった。



第427図 第8号・第9号掘立柱建物遺構実測図

第15表 第8・9号掘立柱建物遺構柱間計測値

No	P ₁	P ₁ ~P ₂	P ₂ ~P ₃	P ₃ ~P ₄	P ₄ ~P ₅	P ₅ ~P ₆	P ₆ ~P ₇	P ₇ ~P ₈	P ₈ ~P ₉	P ₉ ~P ₁
第8号	50	50	180	110	150	135	135	150	136	
第9号	50	130	120	120	155	140	180	150	155	

第10号掘立柱建物遺構

位置 3区49B42 写真 PL.77

平面形 2間×2間の比較的均整のとれた長方形を呈する南北棟である。

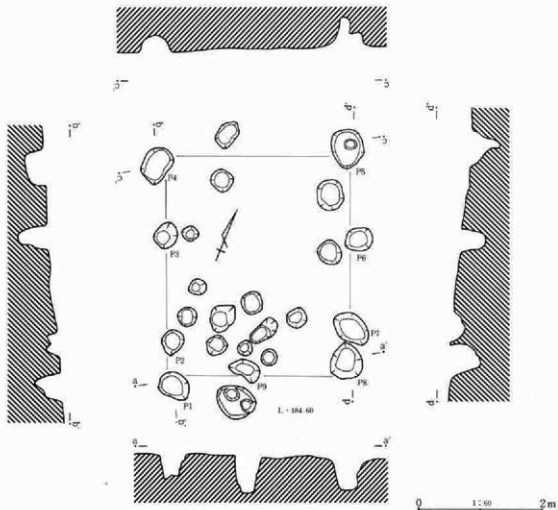
規模 桁方向3.50m・梁方向3.00mを測り、棟の走向は、N-63°-Eである。

柱穴 径40~65cm・深さ30~60cmを測る円形の掘りかたを呈し、形状はやや不統一である。また、中心線に微妙にずれが生じている。

備考 本遺構の西辺は3間になっており、出入り口の可能性を伺わせる。重複する遺構はなく、構築年代を推測させる遺物の出土もなかった。

第16表 第10号掘立柱建物遺構柱間計測値

P ₁ ~P ₂	P ₂ ~P ₃	P ₃ ~P ₄	P ₄ ~P ₅	P ₅ ~P ₆	P ₆ ~P ₇	P ₇ ~P ₈	P ₈ ~P ₉	P ₉ ~P ₁
60	180	100	300	150	140	50	160	130



第428図 第10号掘立柱建物遺構実測図

第3章 検出された遺構と遺物

第11号掘立柱建物遺構

位置 3区47B45 写真 PL.77

平面形 柱穴列の中心線が微妙にずれているため、
明確ではないが、5間×2間の長方形を呈する南北

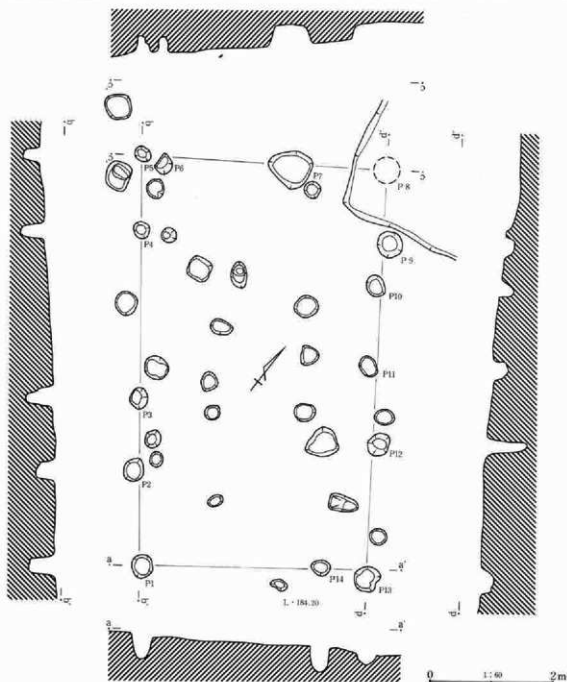
棟である。

規模 桁方向6.50m・梁方向3.60~4.00mを測り、棟
の走向は、N-46°Eである。

柱穴 径25~75cm・深さ15~70cmを測る円形の掘り

第17表 第11号掘立柱建物遺構柱間計測値

P ₁ ~P ₂	P ₁ ~P ₃	P ₂ ~P ₄	P ₃ ~P ₅	P ₄ ~P ₆	P ₅ ~P ₇	P ₇ ~P ₈	P ₈ ~P ₉	P ₉ ~P ₁₀	P ₁₀ ~P ₁₁	P ₁₀ ~P ₁₂	P ₁₁ ~P ₁₂	P ₁₁ ~P ₁₃	P ₁₂ ~P ₁₃
150	110	265	120	44	230	100	80	70	135	120	220	75	290



第429図 第11号掘立柱建物遺構実測図

かたを呈し、形状はやや不統一である。

備考 本遺構は、38号住居跡と重複しており、北側のピットが確認できなかった。また、出入口の位置も不明である。まわりには3号・10号掘立柱建物遺

構やピット群が集中していたが、他の遺構の検出はできなかった。本遺構の構築年代を推測させる遺物の出土はなかった。

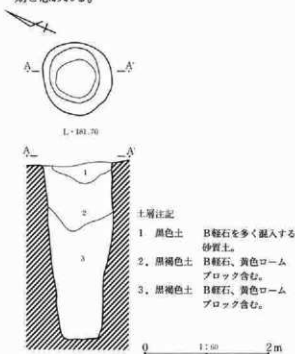
第8節 井戸跡と遺物

第1号井戸跡

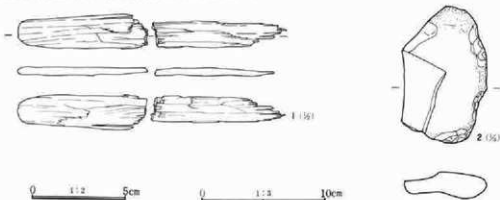
本遺構は、2区03C14に位置しており、舌状台地の東側の斜面にある北東方向に向かった谷地の右肩に占地している。本遺構の周辺は黒色土が厚く堆積しており、遺物は縄文時代から平安時代にかけての土器片が数箇所ままとまって出土しているが、住居等の遺構は確認できなかった。ただ、3カ所にわたり、およそ径60cmを呈する赤褐色の焼土面が確認され、そのうち、本遺構のすぐ西では、焼土面とともにローム層を貼った部分があった。

本遺構の形状は、平面形が径1.1mを測る円形を呈し、上方は円筒状に落ち込み、下方は徐々に細くなっている。埋没土は、3層にわれており、砂質で全体にB軽石が混入している。深さは、2.25mまで確認して底となった。遺物は、下方よりヘラ状木製品が、中層より雲母石英片岩製のハンマーストーンが、また、上方からは実測不可能な土器片が出土している。ヘラ状木製品以外は、本遺構の使用時に伴わないも

のと考えられる。本遺構の使用時期は、平安時代末期と思われる。



第430図 第1号井戸跡実測図



第431図 第1号井戸跡出土遺物実測図

井戸跡出土遺物観察表 (P.L. 188)

図番号	器種名称	出土位置	特	備
1	匙	底	材質 木、長さ14.1cm 幅1.9cm 厚さ0.45cm、2つに割れて出土。両平面の左端部は、刃物状の工具で、丸く削ってある。また、平面全体も削り調整。赤外線写真にて、墨書を確認したが、なにも描れなかった。	
2	敲打石	井戸中層	材質 雲母石英片岩。長さ17.0cm 幅6.4cm 厚さ1.9cm 重さ200g。図右側面を中心に、敲打時の剥離痕が明確に残る。流れ込みの可能性が高い。	

第9節 土坑と遺物

本遺跡では93基の土坑番号をカウントしたが、そのうち、2号土坑は縄文時代の落とし穴であり、22・28号土坑は弥生時代のものとしてそれぞれ前節で扱い、また、46・47・92号土坑の3基については現代の芋穴であり、この項では削除した。したがって、残り87基の土坑について記載することとする。遺跡での分布状況は、2つの舌状台地を画する谷地部と東端の水田部分を除いて、ほぼ全発掘区域に広がっており、その形態は、およそ円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形・不定形の5つに分類することができる。本項では個別の土坑の記載は表にまとめ、先述した形態分類ごとに述べていくことにする。

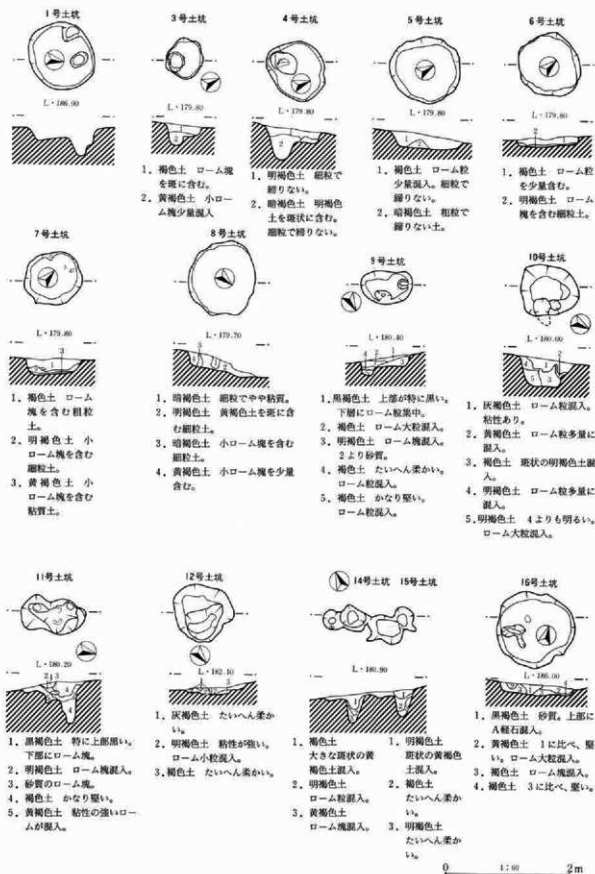
円形の土坑 43基の土坑が分類された。径40～150cm・深さ15～110cmというようにたいへんバラエティに富んだ規模や断面形を呈している。そのうち、数カ所に集中して偏在するものが確認されている。即ち、5区の3・4・5・6・7・8号土坑は、ほぼ2m間隔で1列に並んでおり、4区の17・18・19号土坑も集中しており断面形も似ている。さらに4区の29・30・31・32・33・34号土坑、2区の75・76・78号土坑も共通の意識の中で構築されたものと考えられる。特に75・76・78号土坑の埋没土の上層にはB軽石と見られる白色軽石が含まれ、下層には炭化物粒・焼土粒が含まれており、75・78号からは羽釜の銅片が、76号からは須恵器境の破片が出土しており、平安時代の土壇墓の可能性が高い。2区の60号土坑も形状、炭化物粒の混入、須恵器境の出土などから平安時代の土壇墓の可能性が高い。5区の13・14・15号土坑は、ピットとして扱ってもよいような小さな土坑であり、14号土坑より羽釜片が出土しており、平安時代以降に構築されたものと考えられる。61・93号土坑は、調査当初井戸の可能性があったが、深さが浅く、土坑となったものとともに須恵器境が出土しており、平安時代以降の構築と思われる。88号土坑からも羽釜口縁部・土釜などが出土しており、平安時代以降の構築と考えられる。

楕円形の土坑 15基が分類された。この形状の土坑は円形のように偏在傾向を示さなかった。規模は、長径80～325cm・深さ10～85cmというようにばらつきがある。9・11号土坑は、5区の3～8号および11号13～15号土坑との関連性を考える必要がある。39号土坑は、本遺跡の西端の緩斜面にあり、形状から土壇墓の可能性が高い。51号土坑は90号住居跡の張り出し部として位置付けられるべきものである。54号からは、古墳時代後期の土師器坏片・平安時代と思われるボタン状つまみの須恵器蓋片などが、また、90号からは、奈良時代の土師器坏がそれぞれ出土している。

隅丸方形の土坑 4基分類された。すべて、東側の舌状台地より検出されている。規模は、一辺75～180cm・深さ20～40cmを呈し、ばらつきがある。遺物の出土はなく、年代は不明である。

隅丸長方形の土坑 11基分類された。21号土坑は、南北に長い長方形で西側に張り出し部をもち「凸」という文字をつぶしたような形状で、断面型は箱形である。古墳時代後期の土師器坏片が出土しており、この時期以降の土壇墓の可能性が高い。43号土坑は、上部に焼土塊が出土している。2区の63・66・67・69号土坑は、近接しており、断面形が大変よく似ているので同じ時期に構築された可能性がある。そのうち、63号土坑は、南北に細長い箱形の土坑であり、底部近くまでA軽石が入り込んでいるのでこれらの構築年代は江戸の後期であろう。79・80号土坑は1号土器集積のまわりにあり、81号とともに同じ意識で構築されたと考えられる。79号からは、底部に糸切り痕のある須恵器境が、80号からは、羽釜・土師器小型壺の口縁部、高台付塊などが出土しており、構築年代は、平安時代以降である。

不定形の土坑 14基分類できた。20・23・50・58・78号土坑は、風倒木痕と考えられ、特に20号は43号住居跡と重複しており、古墳時代後期以降の風倒木痕である。40号土坑は、石の集積があり特長的である。



第432図 土坑実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第433図 土坑実測図(2)



L・170.70



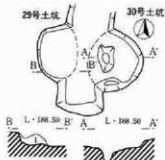
1. 黒色土 底部は皿状になっており、壁に少量の焼土が残っている。この場所では火を燃やしたものとみられる。



L・170.70



1. 黒色土 炭化物を多量に含む。細粒で粘質。下部に若干焼土がある。



1. 黒褐色土 ローム粒、径1cm大のローム塊混入。細粒で締りのない土。



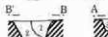
L・188.60



1. 暗褐色土 炭化物多量に混入。細粒でしまった土。
2. 褐色土 ローム粒混入。1に比べ、もろい土。



L・188.50



1. 黒褐色土 径1cm大のローム塊、炭化物粒混入。
2. 黒褐色土とローム塊の混合土



L・188.50



1. 暗褐色土 炭化物粒混入。一度に埋まった形跡あり。



L・188.70



1. 黒褐色土 斑状の暗褐色土混入。
2. 黒褐色土 1によく似ているが、1よりしまった土。
3. 暗褐色土 斑状の黄褐色土混入。締りに欠ける土。



L・188.70



1. 黒褐色土 径1~2cm大のローム塊混入。
2. 黒褐色土 径2~3cm大のローム塊、斑状に混入。
3. 暗褐色土 ローム粒多量に混入。粘性あり。



L・170.50



L・184.30



1. 灰黒褐色土 炭化物粒、多量に混入。細粒で締りのない土。
2. 暗褐色土 ローム塊、炭化物粒も混入。細粒で1よりしまった土。
3. 暗褐色土とローム塊の混合土粘質。
4. ローム層移層



L・187.50



1. 灰暗褐色土 締りのない土。
2. 褐色土 斑状の暗褐色土少量混入。
3. 暗褐色土 締りのある土。
4. 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒少量混入。粘質。
5. 黒褐色土 4以上に堅い土。



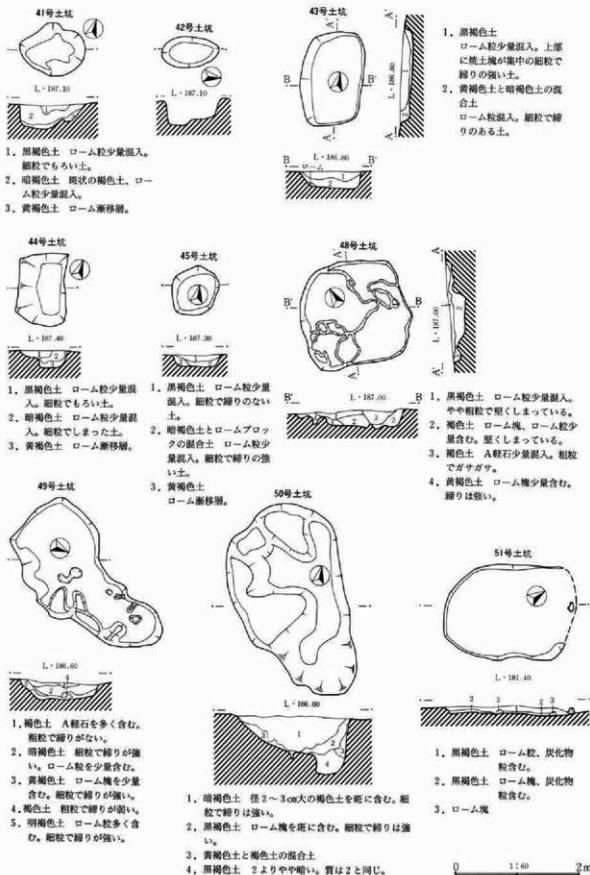
L・184.30



0 1:50 2m

第434図 土坑実測図(3)

第3章 検出された遺構と遺物



第435図 土坑実測図(4)

第9節 土坑と遺物



L・181.20



1. 黒褐色土 ローム粒多く含む。



L・181.00



1. 黒褐色土
ローム粒多く含む。



L・181.70



1. 黒褐色土 A軽石、ローム粒混入。粗粒で締り弱い。
2. 黒褐色土 ローム粒、ローム塊混入。細粒で締りのある土。
3. 暗褐色土 ローム塊混入。粗粒で締りのある土。



L・181.90



1. 黒褐色土 ローム粒少量混入。細粒で締りのある土。
2. 黄褐色土 ローム粒多量に混入。粗粒。



L・182.00



1. 黒褐色土 ローム粒混入。細粒で締りの弱い土。
2. 暗褐色土 ローム塊、ローム粒混入。粗粒で締りの弱い土。



L・182.60



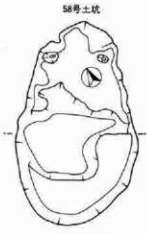
1. 黒褐色土 ローム粒混入。細粒。締りの弱い土。
2. 褐色土 ローム粒多量に混入。細粒で締りの弱い土。
3. 黄褐色土 ローム漸移層。



L・178.30



1. 黒褐色土 細粒。上層は黒。
2. 黒褐色土 ローム塊若干含む。ややアカカサする。
3. 黄褐色土



L・180.20



1. 黒褐色土 ローム粒、軽石粒含む。やや黒っぽい。
2. 黒褐色土 ローム塊、軽石粒含む。しまった土。
3. 黒褐色土 2と似ているが、よごれたローム含む。
4. 灰褐色土 粘性の強いローム塊。



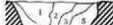
L・187.20



1. 黒褐色土 焼土塊、黄色軽石を少量、褐色土塊を多量に含む。
2. 暗褐色土 黄色軽石。炭化物粒を多く含む。粘質で堅い。
3. 褐色土 ローム塊、黄色軽石含む。
4. 暗褐色土 黒褐色土塊を多く含む。



L・185.30



1. 黒褐色土 細粒で粘質。黄色軽石、ローム粒を少量含む。
2. 黒色土 細粒で粘質。ローム粒、炭化物、焼土塊を多量に含む。
3. 黒褐色土 細粒で粘質。径1cmの黄灰色粘土塊も含む。
4. 暗褐色土 ローム粒、褐色土塊を斑に含む粘質土。
5. 暗褐色土 4に似ているが、色が暗い。
6. 暗褐色土 粘土。
7. 褐色土 細粒粘質土。1〜5に比べると柔らかい。

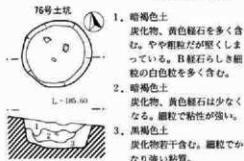
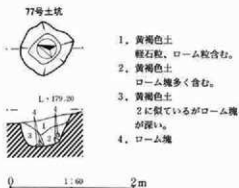
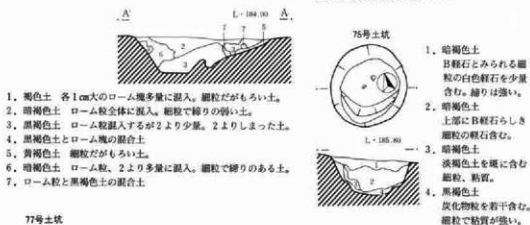
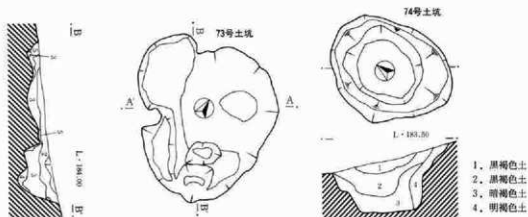
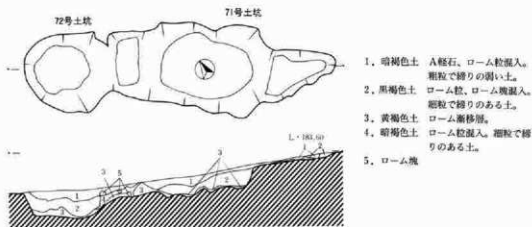
0 1:60 2m

第436図 土坑実測図(5)

第3章 検出された遺構と遺物

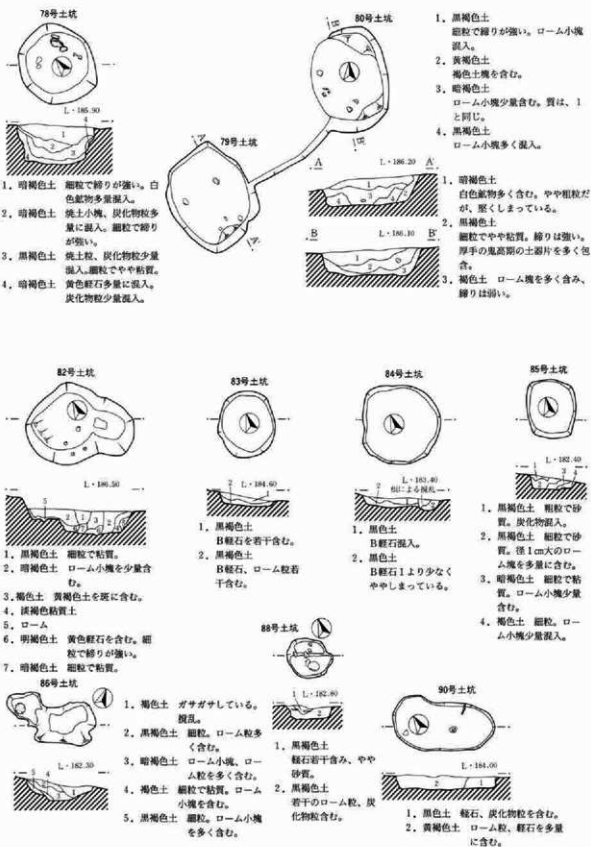


第437図 土坑実測図(6)



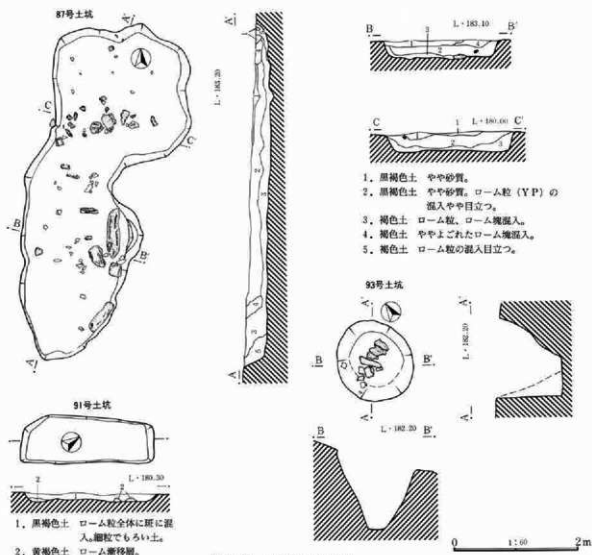
第438図 土坑実測図(7)

第3章 検出された遺構と遺物



0 1:60 2m

第439図 土坑実測図(8)



第440図 土坑実測図(9)

第18表 土坑計測値一覧表

遺構名	位置	規 模			形 状	備 考
		長辺	短辺	深さ		
1号土坑	4区37C08	110	105	56	円形	
3号土坑	5区00B39	65	60	35	円形	
4号土坑	5区01B39	98	93	37	円形	
5号土坑	5区02B39	110	108	27	円形	ほぼ2m間隔で櫛状に並んでいる。
6号土坑	5区03B40	100	96	13	円形	
7号土坑	5区04B41	94	84	24	円形	
8号土坑	5区05B41	114	106	12	円形	
9号土坑	5区01B42	82	54	21	楕円形	土師器高坏の脚部出土。
10号土坑	5区05B42	92	82	43	円形	

第3章 検出された遺構と遺物

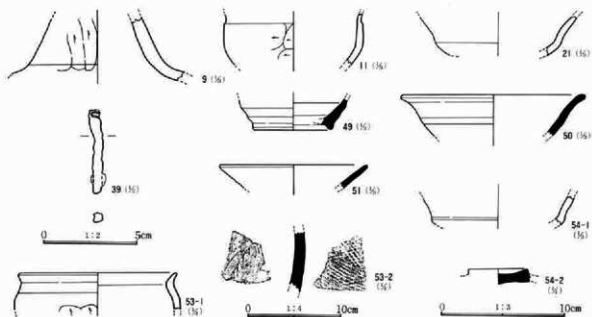
遺構名	位置	規 格			形 状	備 考
		長辺	短辺	深さ		
11号土坑	5区05B42	104	56	65	槽 円 形	土師器等の刷出出土。
12号土坑	5区02B48	94	92	12	円 形	
13号土坑	5区03B43	44	42	41	円 形	
14号土坑	5区02B43	40	38	45	円 形	羽蓋片出土。
15号土坑	5区02B44	58	48	38	円 形	
16号土坑	4区29C03	122	120	15	円 形	
17号土坑	4区20C07	110	108	31	円 形	
18号土坑	4区19C07	62	60	21	円 形	
19号土坑	4区20C07	90	84	12	円 形	
20号土坑	4区05B49	248	160	92	不 定 形	風割木板か。43号住居跡と重複。43号住居跡を切っている。
21号土坑	4区04B44	270	122	47	異形長方形	「凸」の文字をつぶしたような形状。断面形は、箱形。古墳時代後期の土師器坏片出土。
23号土坑	4区03B46	212	64	65	不 定 形	風割木板か。
24号土坑	4区04B42	210	150	47	槽 円 形	
25号土坑	5区34B34	152	90	41	不 定 形	
26号土坑	5区41B39	110	92	21	円 形	
27号土坑	5区42B41	98	94	14	円 形	
29号土坑	4区01C12	48	(48)	18	円 形	
30号土坑	4区02C12	60	(60)	45	円 形	
31号土坑	4区11C11	98	96	19	円 形	
32号土坑	4区04C10	70	64	21	円 形	
33号土坑	4区05C10	62	58	33	円 形	
34号土坑	4区10C10	76	70	16	円 形	
35号土坑	4区01C12	48	46	59	円 形	
36号土坑	4区02C12	106	96	52	円 形	
37号土坑	5区42B39	100	85	20	円 形	
38号土坑	6区04B32	140	110	17	異形長方形	
39号土坑	6区08B27	234	110	30	槽 円 形	鉄製釘出土。
40号土坑	6区06B48	168	117	32	不 定 形	集石あり。
41号土坑	4区23C09	114	86	37	槽 円 形	
42号土坑	4区19C08	94	50	38	槽 円 形	

第9節 土坑と遺物

遺構名	位置	規模			形状	備考
		長辺	短辺	深さ		
43号土坑	4区20C12	150	102	18	黒丸長方形	上部に焼土塊出土。
44号土坑	4区22C12	114	80	25	黒丸長方形	
45号土坑	4区23C12	80	74	17	円形	
48号土坑	2区23C20	174	164	23	黒丸長方形	
49号土坑	2区20C17	250	140	26	不定形	須恵器地底部出土。
50号土坑	2区27C11	318	174	84	不定形	風倒木痕か。須恵器境口縁部出土。
51号土坑	2区33B45	208	150	9	楕円形	第90号住居跡の張り出し部。第90号住居跡は、小段台跡の可能性が高い。須恵器境口縁部出土。その際、炭化物も出土。
52号土坑	2区32B42	204	94	8	楕円形	
53号土坑	2区32B41	92	90	21	円形	土師器小壺蓋、須恵器蓋の破片が出土。
54号土坑	2区35B49	188	124	22	楕円形	古墳時代後期の土師器坏片、平安時代と思われる須恵器蓋面出土。
55号土坑	2区34C01	121	112	10	円形	
56号土坑	2区35C02	146	130	22	円形	土師器壺口縁部・底部出土。
57号土坑	2区35B47	100	90	48	不定形	
58号土坑	2区38B49	324	192	42	楕円形	風倒木痕。
59号土坑	3区01B48	70	64	29	円形	
60号土坑	2区25C20	154	132	28	円形	炭化物粒混入。須恵器境・蓋出土。
61号土坑	2区18C12	147	140	103	円形	須恵器境、土師器境出土。
62号土坑	2区32C17	60	60	38	円形	羽蓋の踵部分出土。
63号土坑	2区27C10	250	108	53	黒丸長方形	底面近くまでA軽石混入。江戸後期以降。
64号土坑	2区25C09	164	130	40	黒丸長方形	
65号土坑	2区21C11	152	120	40	不定形	
66号土坑	2区25C11	216	94	52	黒丸長方形	
67号土坑	2区24C11	142	86	32	黒丸長方形	
68号土坑	2区36C16	136	114	33	楕円形	
69号土坑	2区23C16	178	96	52	黒丸長方形	
70号土坑	2区23C22	152	150	61	不定形	半分調査区域外へ出る。
71号土坑	2区29C03	210	134	31	楕円形	
72号土坑	2区30C02	140	130	41	円形	
73号土坑	2区32C05	266	224	49	不定形	風倒木痕か。
74号土坑	2区35C07	184	168	83	楕円形	

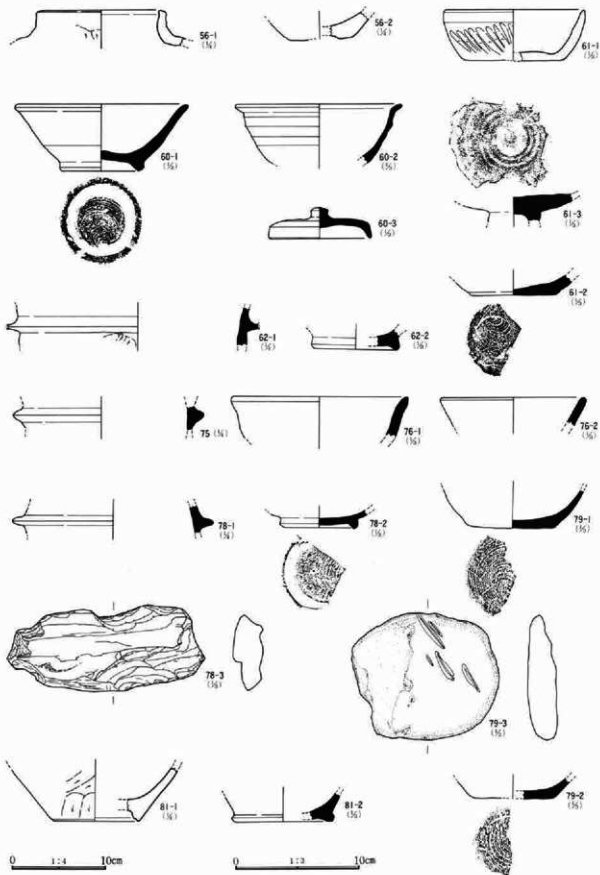
第3章 検出された遺構と遺物

遺構名	位置	規模			形状	備考
		長辺	短辺	深さ		
75号土坑	2区17C17	130	120	55	円形	埋没土上層に、B軽石とみられる白色軽石混入。下層には、炭化物粒・焼土粒混入。羽釜の断片出土。
76号土坑	2区17C16	112	108	40	円形	埋没土上層に、B軽石とみられる白色軽石混入。下層には、炭化物粒・焼土粒混入。羽釜の断片・砥石出土。
77号土坑	3区02C07	76	74	44	隅丸方形	
78号土坑	2区18C17	138	130	61	円形	埋没土上層に、B軽石とみられる白色軽石混入。下層には、炭化物粒・焼土粒混入。羽釜の断片・砥石出土。
79号土坑	2区33C13	154	134	41	隅丸方形	底部に赤切り痕のある須恵器塊出土。刃ならし傷のある石出土。
80号土坑	2区32C12	166	130	37	隅丸方形	羽釜、土師器小型壺口縁部、高台付塊出土。
81号土坑	2区34C12	(130)	150	68	不定形	須恵器高台付塊底部など出土。一部、調査区域外にある。
82号土坑	2区19C18	174	132	35	不定形	須恵器壺口縁部・胴部出土。
83号土坑	2区14C12	106	92	15	円形	
84号土坑	2区09C11	126	124	13	円形	
85号土坑	2区06C06	94	88	18	隅丸方形	
86号土坑	2区05C04	144	78	25	不定形	
87号土坑	2区18B45	545	244	30	不定形	
88号土坑	2区17B43	70	68	21	円形	羽釜口縁部、土釜出土。
89号土坑	2区17B42	54	40	12	楕円形	土師器「コ」の字口縁の壁出土。半分調査区域外に出る。
90号土坑	2区17C03	160	96	23	楕円形	奈良時代の土師器不出土。
91号土坑	2区34B42	210	72	8	隅丸方形	
93号土坑	2区04C12	135	130	110	円形	須恵器塊出土。須恵器壺胴部出土。



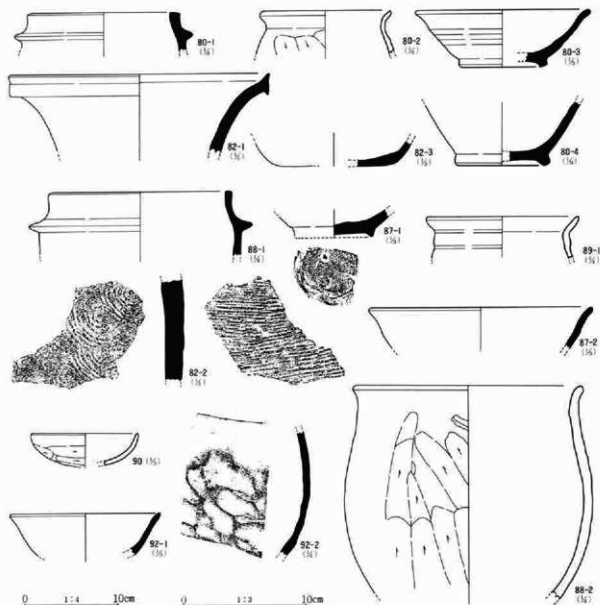
第44|図 土坑出土遺物実測図(1)

第9節 土坑と遺物



第442図 土坑出土遺物実測図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第443図 土坑出土遺物実測図(3)

土坑出土遺物観察表 (PL.188)

品目	器種 器形	出土位置	口径 高さ 残存状況	底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
80土坑 1	土師器 高 杯	床直	胴部片		①細・白色灰少量 ②酸化・普通 ③褐色	外面 胴部縦削り。 内面 胴部削り。頸部無で。	
80土坑 1	土師器 杯	埋没土	頸部～体部片		①細・灰色微灰少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 体部横削り。 内面 体部横削り。	
82土坑 1	土師器 杯	埋没土	口縁～体部片		①細・白色微灰微量 ② 酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横削り。	
82土坑 1	土師器 杯	埋没土	全長4.4cm			中途部分は、調査時欠損。 胴部は折り返し。酸化は、柱方向に錆割れがあり、粗造を思 わせる。	
82土坑 1	須恵器 埴	埋没土	体部～高台		①細・白色微灰微量 ② 還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
82土坑 1	須恵器 杯	埋没土	口縁～体部片		①細・灰色灰少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
82土坑 1	灰輪陶 器	- 2	口縁部片		①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	

第9章 土坑と遺物

種別	遺物	出土位置	口径 高さ 底径 保存状態	①胎土 ②酸化 ③色調	成形・整形の技法	備 考
Ⅱ坑	土師器 1 壺	-2	口縁~胴部片	①細・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③褐色	内外共口縁部は横断で。外面胴部は篋削り。	
Ⅱ坑	須恵器 2 壺	埋没土	胴部片 (縦6.0 横5.7)	①細・白色微紅少量 ②還元・硬 ③暗灰色	外面 斜め格子叩き。内面 青釉施すり消し。	
Ⅱ坑	土師器 1 坏	埋没土	口縁~体部片	①細・黒色微紅微量 ②酸化・普通 ③橙色	内外共口縁部は横断で。外面体部は篋削り。	
Ⅱ坑	須恵器 2 坏 蓋	埋没土	胴部	①細・黒色微紅少量 ②酸化・硬 ③灰黄色	ロクロ整形(右回転)。	
Ⅱ坑	土師器 1 壺	-1	口縁部片	①普通・白色微紅量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横断で。外面胴部は篋削り。	
Ⅱ坑	土師器 2 壺	-9	底部片	①普通・灰色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 篋削り。内面 削で。	
Ⅱ坑	須恵器 1 塊	+26	口(13.6) 高さ2 底6.0 口~底 残	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	須恵器 2 坏	埋没土	口(13.2) 高一 底一 口縁~体部 残	①細・白色微紅量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
Ⅱ坑	須恵器 3 坏 蓋	+3	口一 高(2.4) 胴~底部 残	①細・白色微紅量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
Ⅱ坑	土師器 1 坏	+65	口(11.1) 高(4.0) 底(8.6) 口~底	①細・灰色微紅量 ②酸化・硬 ③橙色	外面 口縁部は横断で、体部は篋削削り。内面 口縁部~体部は横断で、底部は無で。	
Ⅱ坑	須恵器 2 坏	埋没土	口一 高一 底(7.1) 底部片	①細・白色微紅量 ②酸化・普通 ③橙色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
Ⅱ坑	須恵器 3 高 坏	+55	坏底部~脚部片	①細・白色微紅量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。	
Ⅱ坑	須恵器 1 羽 釜	埋没土	脚片	①普通・灰色紅多量 ②酸化・普通 ③黒褐色	口縁部は直立する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。胴部上は篋削り。	
Ⅱ坑	須恵器 2 塊	埋没土	高台部片	①普通・灰色紅少量 ②酸化・普通 ③淡褐色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	須恵器 1 羽 釜	埋没土	脚片	①普通・灰色微紅量 ②還元・普通 ③鈍い橙色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
Ⅱ坑	須恵器 1 坏	埋没土	口縁部片	①細・白色微紅量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
Ⅱ坑	須恵器 2 坏	埋没土	口縁部片	①細・黒色微紅少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
Ⅱ坑	須恵器 1 羽 釜	+35	脚片	①細・白色微紅量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
Ⅱ坑	灰輪陶 2 器 皿	+34	口一 高一 底(5.1) 底~高台	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	敲打石	埋没土	材質 滑石英片岩。長さ15.7cm 幅6.4cm 厚さ2.6cm 重さ340g。図上下断面に敲打時の剝離部分あり。裏面に敲打時の突き込み痕あり。			
Ⅱ坑	須恵器 1 坏	+15	底(6.8) 体~底	①細・黒色微紅少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
Ⅱ坑	須恵器 2 坏	埋没土	底(6.1) 体~底	①細・白色微紅量 ②酸化・硬 ③黒褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	
Ⅱ坑	磁 石	+7	材質 牛伏砂岩。長さ11.7cm 幅10.1cm 厚さ2.3cm 重さ310g。自然石の利用。図上方は旧時欠損。図中の条痕は、中に凹凸があり、ならし底ではない。表面の研磨面に夾雑物の凹凸が少なく、主体は金属。			
Ⅱ坑	須恵器 1 羽 釜	+12	口縁部片	①普通・白色紅少量 ②酸化・硬 ③暗灰色	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
Ⅱ坑	土師器 2 壺	埋没土	口縁~胴部片	①細・灰色微紅量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部は横断で。外面胴部は篋削り。内面胴部は篋削で。	
Ⅱ坑	須恵器 3 塊	+25	口縁~高台部片	①細・白色微紅量 ②酸化・普通 ③橙色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	須恵器 4 塊	+22	体部~高台	①細・白色紅少量 ②還元・軟 ③黒色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	土師器 1 壺	埋没土	胴部~底部片	①細・白色紅少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴部下半は篋削り。	
Ⅱ坑	須恵器 2 塊	埋没土	底部~高台部片	①細・白色微紅少量 ②還元・軟 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
Ⅱ坑	須恵器 1 壺	+9	口縁部片	①細・灰色紅少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。	

第3章 検出された遺構と遺物

種別	遺物	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
社址	須恵器	+8	胴部片 (底9.5 横6.8)	①細・白色胎少量 元・硬 ③灰色	②選	外面 胴部平行引き。 内面 胴部背薄被叩き。
社址	須恵器	+8	底部片	①細・白色胎少量 元・硬 ③灰色	②選	ロクロ整形(右回転)。外面底部は寛削り。
社址	須恵器	+9	底部片	①細・白色胎少量 元・硬 ③灰色	②選	ロクロ整形(右回転)。付高台。
社址	須恵器	+18	口縁部片	①細・白色胎少量 元・軟 ③灰色	②選	ロクロ整形(右回転)。
社址	須恵器	+17	口(19.6) 口縁部片	①普通・灰色胎少量 元・硬 ③鈍い褐色	②選	口縁部はほぼ直立する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。罫は貼り付け。
社址	土師器	+17	口(24.0) 高一 底一 口一胴片	①普通・灰色胎少量 元・硬 ③暗褐色	②選	内外共口縁部は横削で。外面胴部は寛削り。 内面胴部は無で。
社址	土師器	+1	口縁部片	①細・黒色胎少量 元・硬 ③明赤褐色	②選	「コ」の字状口縁。紐作り。内外共口縁部は横削で。
社址	土師器	埋没土	口(11.3) 高3.6 丸底 口一底片	①細・灰色胎少量 元・普通 ③褐色	②選	内外共口縁部は横削で。外面胴部は横削り。 内面胴部は無で。
社址	須恵器	+47	口縁一底部片	①細・白色胎少量 元・軟 ③灰色	②選	ロクロ整形(右回転)。
社址	須恵器	+34	胴部片	①細・白色胎少量 元・硬 ③灰色	②選	外面 胴部無で。 内面 胴部指押え。

第10節 水田跡と遺物

1. 水田の地形

本遺構は、遺跡の東端、神保富土塚遺跡との境に位置する「田ノ入」という字名の場所に確認された谷地水田である。標高171.0～173.7mの範囲にあり、南から北へ向かって緩やかに傾斜している地形である。調査面積は、2,590㎡で、そのうち、1,409㎡が水田部分であり、その他が水田面より一段高い、弧を描く広場状になっている。その水田面と広場状の部分との間には境界を示すように石が集積されている。

2. 調査方法

昭和61年度(調査1年目)の後半に1区・2区の遺構範囲を明確にするため、2m幅の試掘トレンチを10m間隔で6本東西方向に平行に入れた。その折、この水田部分にも同様にトレンチを入れ断面の実測・観察を行い、土層がほぼ平行に堆積している中にNa17の土層が波状を呈していることを観察できたが、水田の可能性はあるものの確実に水田であると結論は出せなかった。そこで12月9日、群馬大学の新井房夫教授を招聘してこの部分の堆積土を観察して戴いた。その結果、

- ① Na17の土層のすぐ上にB軽石が降下し、更に、その上4層くらいにB軽石が混入していること。

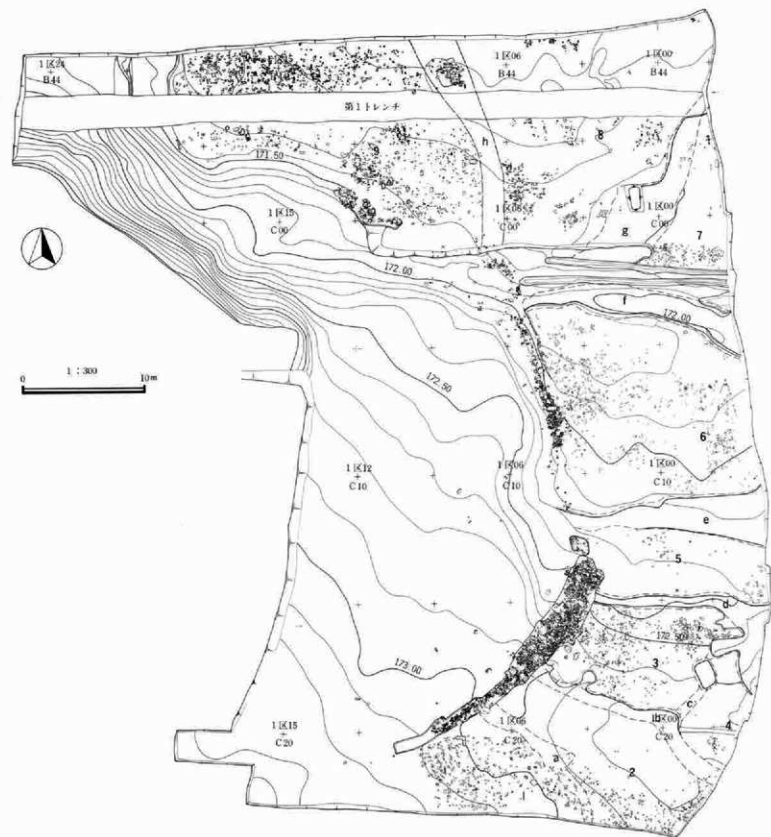
- ② 湿地のような自然のままの所ならば、B軽石は層をなして堆積するが、ここはそうなっていない。人為的なものが働いているとしか考えられない。

- ③ Na17の土層の波状の部分にB軽石のブロックの溜まりが残っていることから、天仁元年(1108年)のB軽石降下後、水田を放棄せず、すぐ後に耕したことが伺われる。そして、耕しきれなかった所にB軽石のブロックの溜まりが残ったのであろう。

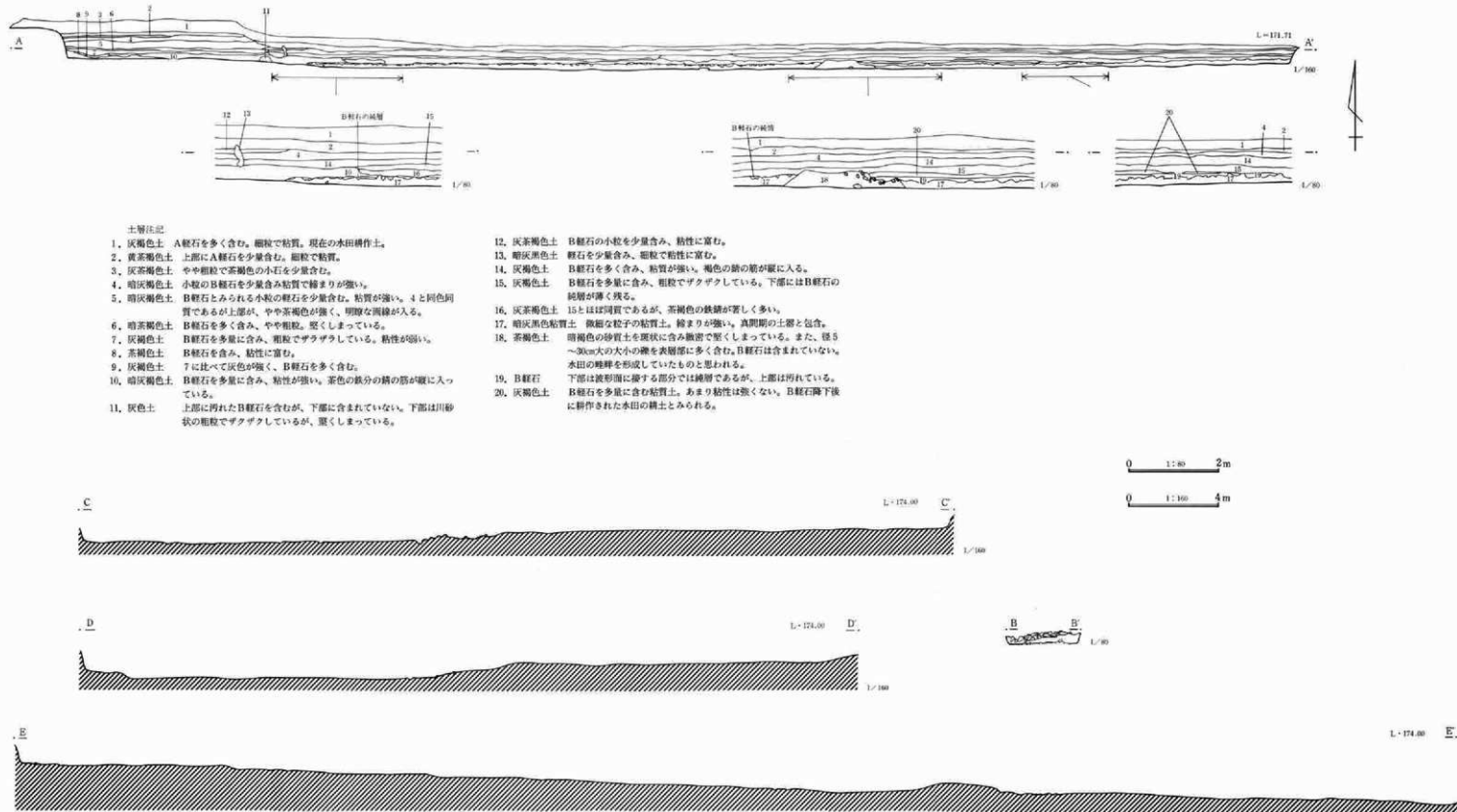
- ④ オレンジ色の層(Na18)のすぐ上の鼠色の層(Na17)は耕作してある。その色の違いは、水の影響で下層には鉄分が多く付着しているのではあろう。

- ⑤ B軽石は、10cm程積もった可能性があり、降った翌年にはもう耕作している可能性もある。

などのコメントをいただき、担当者も明確に水田であることを確認し、保護課・道路公団との3者会談を経て、全面調査することになった。さらに、科学的な分析として、調査の最終段階の翌昭和62年5月13日に古環境研究所に依頼してプラント・オパール分析をおこない、特に北側部での水田跡の可能性の高い結果を得ることができた。(第5章第2節参照)



第444図 水田跡平面図



第445図 水田跡セクション図・エレベーション図

土層記号

1. 灰褐色土 A軽石を多く含む。粗粒で粘質。現在の水田耕作土。
2. 黄茶褐色土 上部にA軽石を少量含む。細粒で粘質。
3. 灰茶褐色土 やや粗粒で茶褐色の小石を少量含む。
4. 暗灰褐色土 小粒のB軽石を少量含む粘質で締まりが強い。
5. 暗灰褐色土 B軽石とみられる小粒の軽石を少量含む。粘質が強い。4と同色同質であるが上部が、やや茶褐色が強く、明瞭な間層が入る。
6. 暗茶褐色土 B軽石を多く含む。やや粗粒。密くしまっている。
7. 灰褐色土 B軽石を多量に含む。粗粒でザクザクしている。粘性が弱い。
8. 茶褐色土 B軽石を含む。粘性に富む。
9. 灰褐色土 7に比べて灰色が強く、B軽石を多く含む。
10. 暗灰褐色土 B軽石を多量に含む。粘性が強い。茶色の鉄分の筋が縦に入っている。
11. 灰色土 上部に汚れたB軽石を含むが、下部に含まれていない。下部は川砂状の粗粒でザクザクしているが、密くしまっている。
12. 灰茶褐色土 B軽石の小粒を少量含む。粘性に富む。
13. 暗灰褐色土 軽石を少量含む。粗粒で粘性に富む。
14. 灰褐色土 B軽石を多く含む。粘質が強い。褐色の筋が縦に入る。
15. 灰褐色土 B軽石を多量に含む。粗粒でザクザクしている。下部にはB軽石の脱層が強く残る。
16. 灰茶褐色土 15とは河質であるが、茶褐色の鉄筋が著しく多い。
17. 暗灰褐色粘質土 微細な粒子の粘質土。締まりが強い。河原砂の土層と包含。
18. 茶褐色土 暗褐色の砂質土を基底に含む礫層で堅くしまっている。また、径5〜30mmの大小の礫を表面部に多く含む。B軽石は含まれていない。水田の畦畔を形成していたものと思われる。
19. B軽石 下部は被形層に露する部分では純層であるが、上部は汚れている。
20. 灰褐色土 B軽石を多量に含む粘質土。あまり粘性は強くない。B軽石降下後に耕作された水田の耕土とみられる。

3. アゼの走行と区画

水田を区画する明確なアゼは、確認されなかったが、鉄分を含んだ部分が帯状に赤褐色をしながら若干の高まりを確認することができ、また、その部分には小穴が殆ど無いことから、アゼであった可能性が強い。それをアゼと見た場合、第444図のとおり、a～hまでのナンバーをふることができ、そのうち、cを除くと弧を描く集石部から放射状に伸びている。等高線と比較するとほぼ平行していることが解り、自然の地形をうまく利用して耕作していたといえる。そのアゼにより、大小9つの水田面を確認することができ、形状は、統一性がない。面積は、それぞれ

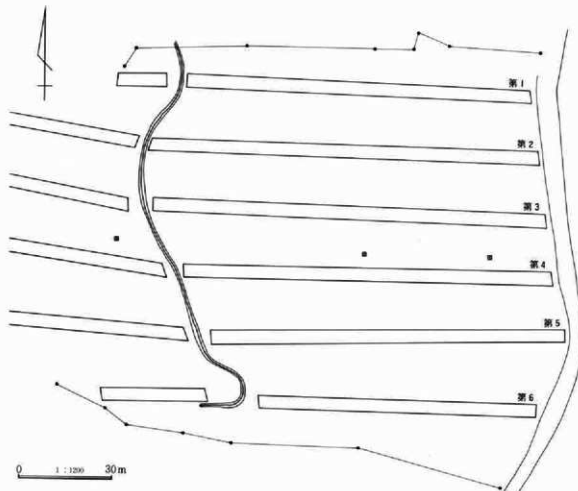
- ① 68.5㎡ ② 96.9㎡ ③ 80.9㎡ ④ 28.2㎡
⑤ 68.1㎡ ⑥ 217.5㎡ ⑦ 39.1㎡ ⑧ 240.5㎡

- ⑨ 261.6㎡ を測る。

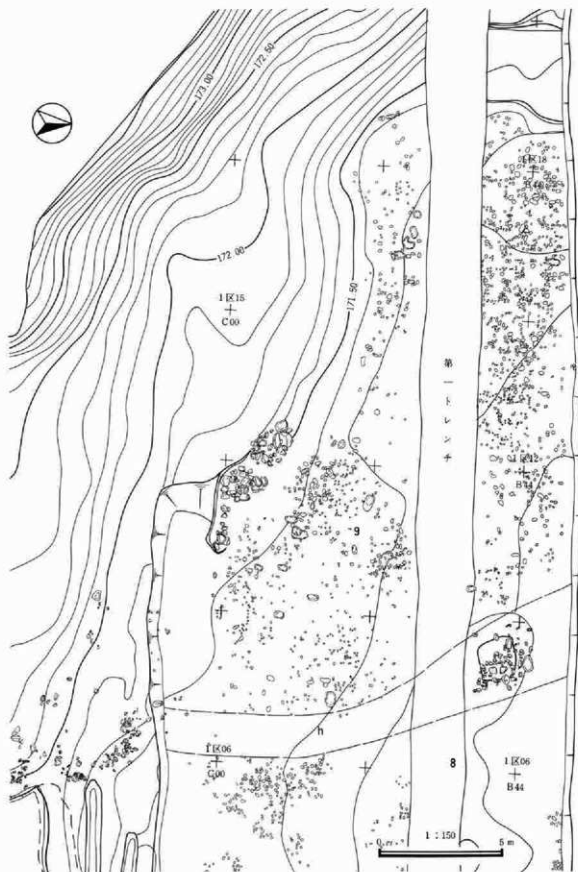
4. 石組と広場状遺構

石組は、水田部と広場状遺構とを画するかのようには弧状にある。全体で3カ所に分かれており、最大幅で3mを測り、中でも最も南側が多量の石を使用している。一見、初めから水田部と広場状遺構を明確に分けるためという意識が働いているように思えるが、水田面にボーリング棒を差し込んでみると10～30cmの深さに石が確認され、そのことから、耕作当時、水田面にかなりの転石があり、邪魔なのでそれらを広場状遺構の縁辺部に寄せたに過ぎないものであると言う結論に達した。

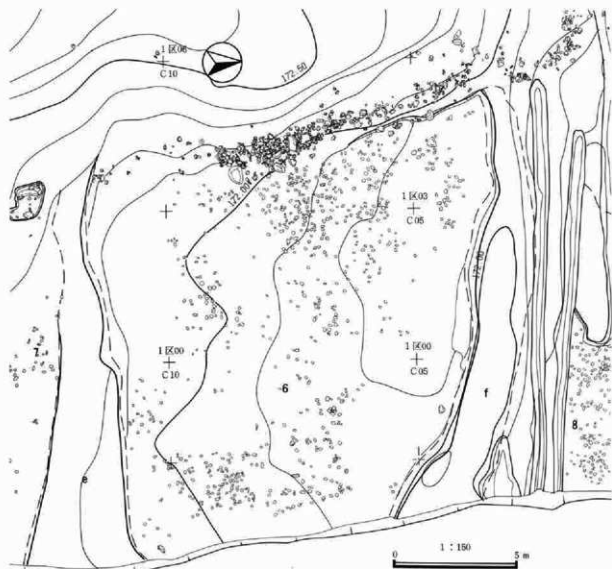
広場状遺構は、土質が大変堅く、また、水田面よりも1mほど高く、その面が当時の地表面とする耕作には適さない地形と土質であったと言える。



第446図 水田試掘トレンチ概念図



第447図 水田跡部分平面図(1)



第448図 水田跡部分平面図(2)

遺物もほとんど出土しておらず、その性格は不明であるが、そこで、耕作にかかわる作業をした可能性はあると考えられる。

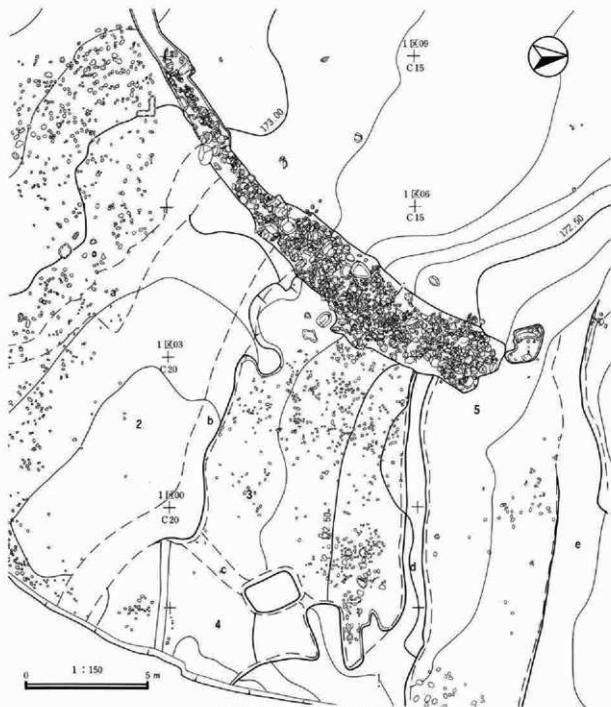
5. 取配水方法

この谷地には水田の両側に南側から流れてくる天の宮川という小水路があり、その水は上流に築かれた大入塚から流れてくる。大入塚はまわりの上位段丘の伏流水を溜めたものであり、当時この塚が存在したことは不明であるが、おそらく耕作当時も伏流水を集めたこの小水路は存在していたものと推測される。この水路からの取水については調査区域内に取水口は確認されなかったが、南側の調査区域外に現在の取水口があり、まわりの地形から耕作当

時も同じ位置からの取水が行われた可能性を伺わせる。また、各水田の配水については、調査の中ではアゼの水口を検出することができなかった。それが、水口が閉ざされていたためか、水口を作る必要がなかったためかは不明である。水が水口から落下する際に侵食によってできるくぼみも確認できなかった。

6 水田面における小穴群

水田面の精査の段階でブロック状に溜まったB軽石を丁寧に取り除いた時に9面の水田面のほとんどに小穴群が確認された。水田面の全体にあるというのではなく、部分部分に集中する傾向があり、規格性はない。形状は、ほとんどの小穴が径長10～15cm・



第449回 水田跡部分平面図(3)

短径5~10cm程の楕円形を呈しており、深さも5~10cm前後である。その中には明確に人の足跡と確認できるものもあったがごく一部である。ほとんどは性格が不明であるが、人の足跡か、獣等の足跡か、あるいは、稲の切り株跡の可能性を考えることができる。

7 遺物出土状況と内容

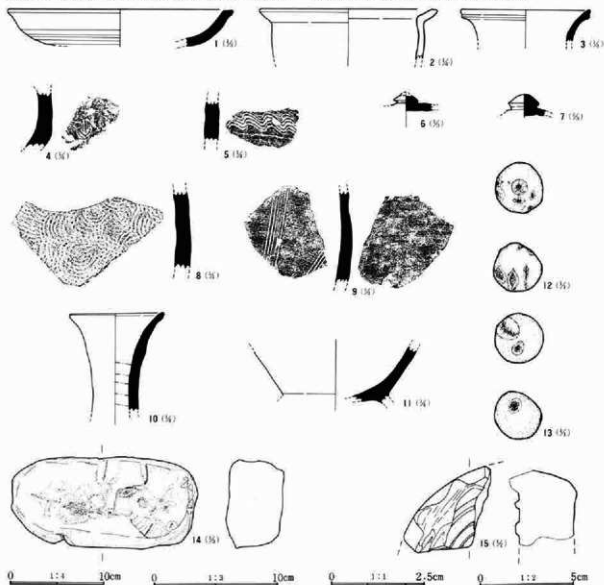
水田部より出土した遺物のうち、実測できたものを下図に表したが、そのうち、明確に水田使用時のものと考えられる遺物は確認できなかった。ここではプラント・オパール分析(附編第2節)でも明らかのように天仁元年(1108年)以降から現在まで断続的に水田として使用されていたことが想定され、そのことは様々な時期の遺物が出土していることが

らも伺われる。また、天仁元年以前と思われる長頸瓶の頸部や軒丸瓦片等も出土しているが、流れ込みの可能性が高い。

8 まとめ

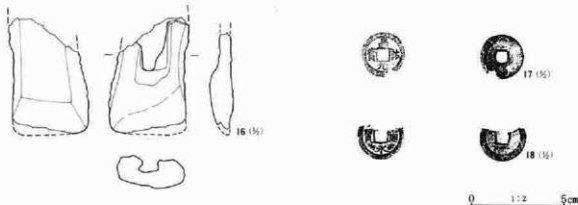
本遺構は、天仁元年(1108年)に爆発した浅間山より噴出した軽石(B軽石)により覆われた谷地水田跡であり、その年前後に耕作されていたと考えられる。この水田の耕作者については、長根羽田倉遺跡側に求めるべきか、あるいは、神保富士塚遺跡側に求められるか、さらには、別の場所に居住していたかは不明としきれない。ただ、この水田跡の大字は神保であり、神保とは神領の村、つまり、

莊園を意味するというのが定説で、辛科神社がこの地に鎮座している。『吾妻鏡』25巻 承久3年6月13日の条に多くの上野武士団と推定される中に神保と三の名がみえることから神保の苗字を有する武士は、ここの神保の地名によったものであるとの説が有力である。この説が正しいとするならば、神保という名は、13世紀前半までさかのぼることができる。さらに、吉井町誌ではこの地が韓級郷の比定地であるとしたうえで「韓級郷から、莊園としての神保への移行は、平安時代後半ごろに推定される」としておりこの説が正しいとするならば、本水田跡は、神領の中にあつた可能性があるといえる。



第450図 水田跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



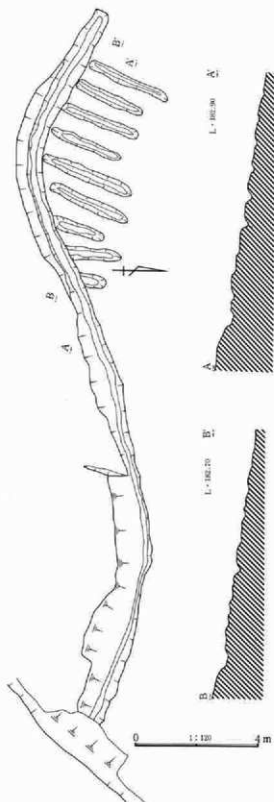
第45図 水田跡出土遺物実測図(2)

水田跡出土遺物観察表 (PL.188)

番号	器種 胎形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 盤	埋没土 0区C	口(18.0) 高一 底一 口縁~底部	①細・白色微紅少量 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。体部~底部は回転削り。	
2	土師器 甕	埋没土 1区C	口(19.0) 高一 底一 口縁~胴	①普通・白色紅少量 ② 酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部は横削で。外面 胴部は貫削り。 内面 胴部は削で。	
3	須恵器 甕	埋没土 1区C	口(13.8) 高一 底一 口縁部	①細・灰色微紅少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。	
4	須恵器 甕	埋没土 1区B	胴部片 (縦5.0 横3.5)	①普通・灰色紅微量 ② 酸化・硬 ③赤褐色	紐作り後、ロクロ整形。	
5	須恵器 甕	埋没土 1区C	胴部片 (縦3.8 横7.4)	①細・白色微紅少量 ② 還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。外面 波状文。	
6	須恵器 坏蓋	埋没土 1区	宝珠状胴部片	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
7	須恵器 坏蓋	埋没土 1区C	宝珠状胴部分	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。	
8	須恵器 甕	埋没土 6区	胴部片 (縦12.0 横10.8)	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。内面は青海波印き。	
9	須恵器 壺	埋没土 6区	胴部片 (縦10.3 横7.5)	①細・白色紅少量 ②還 元・硬 ③暗赤褐色	ロクロ整形(右回転)。	
10	須恵器 長頸壺	埋没土 1区C	口(9.8) 口縁~頸部	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。内面 自然軸。工具 による整形痕あり。	
11	須恵器 台付甕	埋没土 集石部	胴部~底部	①細・白色紅微量 ②還 元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。	
12	鉄砲玉	埋没土	径1.25cm 重量10.9g	材質 鉛。産地 埼玉県秩父の蔵山産。色調 灰白。鉄造をふまえた近似値が、2個体とも、同一蔵山産出の鉛で、同一時期に製作されたものと思われる。№12は、真正面部分が、平らにつぶれており、全体に、ゆがんだ球状をしているのに対し、№13は、2箇所、欠落した部分があるものの、ほぼ球状を呈している。(註1)		
13	鉄砲玉	埋没土	径1.30cm 重量12.0g			
14	くぼみ石	埋没土	材質 牛伏砂岩。長さ14.8cm 幅7.3cm 厚さ4.3cm 重さ600g。即平面に2箇所、凹みあり。工作台として利用されたか。側面一部と、底面は、砥石として利用された可能性がある。			
15	軒丸瓦	埋没土	長さ4.1cm 幅3.8cm 厚さ3.3cm 重さ56g。外区のみ破片で内区は不明。2重瓦文が残る。側面に、平行印きと、指撫で調整の痕跡のこる。胎土は、白色微紅物を含み、色調は暗灰色。焼成は、硬質。7世紀代のものか。			
16	鉄 葬	埋没土	残存長6.2cm	片側に鼻部を残し、両表面では、左方鼻部が残る。紙ぎししの後は、内外共に両方に研磨されている。錆化は不定方向に進み、粗粒を思わせる。両端部は、調査時欠損。		
17	鉄 貨	埋没土	嘉祐元寶。銅。宋の仁宗(1056)。下方一部欠損。裏面、摩耗はげく、ほぼ、平坦となっている。径2.35cm 厚さ1.5mm 孔6mm×6mm。			
18	鉄 貨	埋没土	寛永通寶。銅。江戸。上方、一部欠損。全体に曲っている。径2.45cm 厚さ1.5mm 孔6mm×6mm。			

註1 産地同定は、東京国立文化財研究所 高瀬久夫・平尾良光両氏のご協力による。

第11節 畑 跡



第452図 第1号畑跡実測図

概要 本遺跡では3カ所の畑跡が確認された。そのすべてが、天明3年（1873）の浅間山爆発の際に降下したA軽石の純層によって覆われており、その直前まで耕作していたことを伺わせる遺構である。3カ所すべて1区2区という本遺跡の東側の舌状台地より検出されており、さらに、等高線にそって畝を形成しており、地形をうまく利用して耕作している様子が伺われる。また、3カ所の畑跡とも大変面積が小さい。そのうち、2号畑跡はその部分で完結しているようであるが、1号・3号畑跡は、南側あるいは北側に広がっていた様相を呈している。おそらく、A軽石降下直後に畑の軽石をそれらの遺構の上に掻き集めて耕作を再開したため、1号・3号畑跡が軽石に覆われた状態で残ったものと考えられる。

第1号畑跡

位置 2区36C04～2区40C05

面積 29.7㎡ **写真** PL.81

立地 本遺跡の東側の舌状台地の西側に傾斜した緩斜面の上部に占地している。

形状 確認面で東西方向に細長い形状をしている。

畝は、長短8本あり、畝と畝の間隔は25～30cmの範囲で、高さは8～10cm前後である。畝の方向は等高線の方向とほぼ一致する。

備考 確認されたときは浅間山のA軽石がかなり厚く堆積しており、おそらくは、A軽石降下直後に軽石を本遺構の上に掻き集めたものと考えられる。また、畝に小穴が幾つも確認され、中には一列に並んだものもあることからおそらくは栽培されていた作物の根跡と考えられる。種類は不明である。さらに、この畑跡南脇に溝状の遺構が畑の長さの倍以上、確認されているが、当時の畑と畑の間のあぜ道と考えられる。これらのことから、江戸時代後期にはこの緩斜面のほとんどを利用して広く畑作が行なわれていたことが想像される。

第2号畑跡

位置 2区37C16～2区39C18

面積 66.4m² 写真 PL.81

立地 本遺跡の東側の舌状台地上の一段高い平坦部に占地している。

形状 確認面で南北方向に長い三角形で北側が鋭角になった形状をしている。畝は、3.4～5.4mの長さのものが14本あり、畝と畝の間は30～40cmの範囲で高さは5～8cm前後である。畝の方向は、N-81°-Wで等高線の方向とほぼ一致する。また、北側部は畝が確認されなかったが、高さは畝とほとんど変わらず、耕作痕も見られることから同様に耕作していたと考えられる。

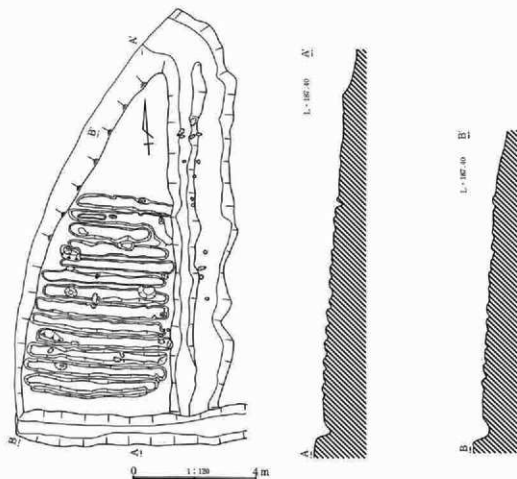
備考 確認されたときは、浅間山のA軽石の純層とその上のA軽石と黒色土との混合土に覆われており、A軽石降下時に耕作を中断したことを伺わせる。各畝の上に数カ所ずつ小穴が確認されているが、そ

れが、栽培されていた作物の根跡かは不明である。また、ところどころに径40cm前後のピットが見られるが、それは、この畑跡に伴うものでなく、後世の所産であろう。本遺構の西側は道路であり、南側は9号溝が走り、東側も溝状に低くなっている。本遺構は、現状で完結していると思われるが、東側には溝上のあぜ道状遺構があり、その北側の11号溝にA軽石をかき集めた形跡が見られ、あぜ道状遺構を挟んでさらに畑がつづいていたものと考えられる。これらのことから、江戸時代後期にはこの台地平坦部を利用して、畑作が行なわれていたことが想像される。

第3号畑跡

位置 1区45C02～1区46C03

面積 21.2m² 写真 PL.81



第453図 第2号畑跡実測図

立地 本遺跡の東側の舌状台地の東側に傾斜した傾斜角9°の緩斜面の中間に占地している。

形状 確認面で東西に長い形状で検出された。畝は、1.9～4.5mの長さのものが8本確認され、畝と畝の間は、55～60cmの範囲で、高さは10～14cmを測る。畝の方向は、N-4°-Wであり、等高線の方角とほぼ一致する。北東側は、段差があり、それによって、切られている。

備考 確認されたときは、浅間山のA軽石の純層で覆われており、A軽石降下時に耕作を止めたことを伺わせる。下方の畝に小穴が数カ所確認できたが、それが、栽培されていた作物の根跡かは不明である。畝の両端が切られている状態で検出されたため、おそらく耕作当時は、畑が両側に広がっていたと考え

第12節 溝跡と遺物

概要 本遺跡では17条の溝が検出された。すべてが、舌状台地の平坦部や緩斜面にあって、人為的に作られた溝であり、旧河川といった自然の流路は考えられない。分布状況は1区の水田部と3区の谷地を除いて、ほぼ全体に散らばっているが、東側の台地では、東斜面に、西側の台地では西斜面に多い傾向がある。

第1号溝

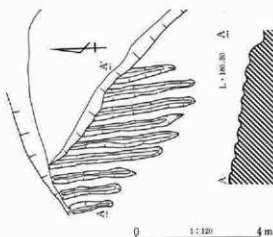
位置 4区46B41～5区20B28 **写真** PL.78
規模 長さ68.5m・最大幅1.6m・最大深さ32cmをそれぞれ測る。

立地 西側の舌状台地の西緩斜面にある。

形状 断面形は、皿・堦型を呈し、N-67°-Wの方向へ若干北へ偏りながら走っている。

埋没土 ローム小塊・ローム粒が混入する細粒でやや粘質の褐色土が主体をなす。層の上部は砂質で下部へいくに従い、粘質となる。

備考 2号溝・5号溝と重複しており、2号溝との新旧関係は同じ時期の可能性が高い。5号溝とは埋没土がほとんど同一であり、また、5号溝は、1号溝のほぼ中間より始まっているので、両溝は同時期に掘削されたものと考えられる。さらに3号・4号



第454図 第3号畑跡実測図

られる。時期は、江戸時代後期。

土坑とも重複しており、3号・4号土坑の方が新しい。出土遺物は、大変少ないが、須臾器小型壺・小柄穂先などがある。構築年代は、同時期と考えられている2号溝が平安時代の可能性が強いため、平安時代以前ということが言える。明確な流水の痕跡はなく、また、浅いため、土地の区割りとも考えにくく、使用目的は不明である。

第2号溝

位置 4区46B40～4区42C09 **写真** PL.78
規模 長さ40.5m・最大幅4.2m・最大深さ1.25mをそれぞれ測る。

立地 西側の舌状台地西斜面の上部に位置する。

形状 断面形は、薬研状（逆台形）になっており、底面は、幅90cmを測る。また、肩の部分が、2段ないし3段になっている。方向は、N-12°-Wである。両端は、調査区域外に伸びると考えられるが、特に北側は、後世において削り取られている。

埋没土 おおよそ4層に分かれており、概して、下層のほうに暗い色をした褐色土が主体をなす。層の中間に浅間山のB軽石が混入している。

備考 1号溝・3号溝と重複している。3号溝は本溝が切っているため、本溝のほうに新しいといえる。

第3章 検出された遺構と遺物

また、1号溝は同時期であろう。出土遺物は、上層から羽釜等の平安時代の遺物が多く、また、下層からは、古墳時代後期のものが少量出土している。さらに石製品では、出土位置は不明であるが、滑石製の紡錘車末成品が1点、縄文時代の石斧2点、弥生時代の石斧1点も出土している。構築年代については、土層の中間よりB軽石が出土しており、平安時代以前であろうが、古墳時代まではさかのぼらないであろう。使用目的は、底面に明らかな流水の痕跡が見受けられないことから、土地の区割りの可能性が強いと考えられる。また、底面が堅く踏み締められていたため、道としても使用された可能性がある。

第3号溝

位置 4区34B46～4区43B47

規模 残存状態が悪く、また、2号溝により、切られているため、明確ではないが、確認された範囲で長さ20m・最大幅1.4m・最大深さ18cmをそれぞれ測る。

立地 西側の舌状台地西斜面の肩部に立地する。

形状 断面形は、皿状を呈する。途中が平らされており明確ではないが、方向は、N-105°-Wであるが2号溝との重複部分で45°ほど北へ曲がる。

備考 2号溝と重複しており、本溝の方が古い。出土遺物はない。築造年代は、平安時代以前であろう。

第4号溝

位置 4区12C10～4区13C15

規模 長さ9.8m・最大幅0.7m・最大深さ10cmを測る。

立地 西側の舌状台地の最も高い部分に位置する。

形状 断面形は皿状を呈する。方向はN-8°-Eである。

埋没土 ローム粒を少量含む黒褐色土が主体をなす。

備考 53号住居跡と重複しており、本溝の方が新しい。遺物は出土していない。年代は、古墳時代後期以降であろう。使用目的は、不明である。

第5号溝

位置 5区08B36～5区18B44 **写真** PL.80

規模 長さ28m・最大幅1.6m・最大深さ33cmを測る。

立地 西側の舌状台地のほぼ中間に位置し、1号溝の中間より始まっている。

形状 断面形は、皿状を呈し、方向は、N-64°-Eで、南西に行くに従い、南側にずれて、しかも先細りしていき、浅くなる。

埋没土 ローム粒を少量含む暗褐色土が主体をなす。

備考 6号住居跡と重複しており、本溝の方が古い。遺物は出土していない。等高線と同方向に走っており、排水を意識して掘削されているようである。構築年代は、古墳時代後期の可能性が高い。

第6号溝

位置 5区36B43～5区40B41

規模 長さ10.9m・最大幅60cm・最大深さ18cmを測る。

立地 西側の舌状台地の西斜面下方に位置し、等高線に対して直交する。

形状 断面形は、薄い箱形を呈し、平面形は、中央部がやや膨らむほかは、ほとんど同じ幅である。方向は、N-61°-Wで直線的に走っている。

埋没土 上部にはB軽石を含み細粒で砂質な暗褐色土が、下部にはローム小塊を少量含む細粒でしまりの強い褐色土が、それぞれ堆積している。

備考 まわりには多数のピットが存在しているが、その中の1つと重複しており、本溝の方が新しい。埋没土の上部にB軽石が入り込んでいることから、本溝の構築年代は、平安時代以前ということになる。また、まわりのピット群がすべて同時期に作られたとしたら、それらのピット群も平安時代以前の構築となる。本溝の使用目的については不明である。遺物は出土していない。

第7号溝

位置 5区44B38～6区00B33

規模 長さ15.7m・最大幅1.3m・最大深さ18cmを測る。

立地 西側の舌状台地の西斜面最下方にあり、等高線に対してほぼ直交して、8号溝にぶつかる。

形状 断面形は、皿状を呈し、平面形は、ほぼ直線的であるが、斜面下方にいくに従い、細くなってき、8号溝と合流する部分が最も細い。

埋没土 ローム粒・炭化物粒を少量含む細粒でしまりのない黒褐色土が堆積している。

備考 先端で8号溝と重複しているが、埋没土がよく似ており、同時期の構築の可能性が高い。位置的にみて、6号溝と同一線上にあるので、本来は、1つの溝であった可能性が高い。そこから、構築年代は、平安時代以前と考えられる。遺物は、出土していない。使用目的は不明である。

第8号溝

位置 5区46B28～6区06B42 **写真** PL.80

規模 長さ36.3m・最大幅1.2m・最大深さ22cmを測る。

立地 西側の舌状台地の最下部・最西端に位置し、等高線に対して、平行に走っている。

形状 断面形は、皿状を呈し、平面形は、ほぼ同じ幅であり、方向は、N-36°Eである。

埋没土 ローム粒・炭化物粒を少量含む細粒でしまりのある暗褐色土が主体をなす。

備考 7号溝と中央やや北よりで合流する。埋没土もほぼ同様であり、同時期の構築と考えられる。したがって、年代を平安時代以前としたい。遺物は出土していない。使用目的は不明である。

第9号溝

位置 2区25C21～2区39C19 **写真** PL.80

規模 長さ29.8m・最大幅1m・最大深さ20cmを測る。

立地 東側の舌状台地の最上部に位置し、等高線に沿った形で走っている。

形状 断面形は、逆台形を呈し、平面形は、ほぼ同じ幅である。方向は、N-94°Eでほぼ中央で南側へ12°曲がる。

埋没土 A軽石・ローム粒を多量に含む褐色土。

備考 A軽石に覆われた畑のすぐ南側を東西に走っており、おそらく、畑と何等かの関係があるものと思われる、同時期の構築と考えられる。遺物は出土していない。

第10号溝

位置 1区42C12～1区48C19 **写真** PL.79

規模 長さ17.2m・最大幅4.9m中央部の石敷までの深さ60cm石敷を取り除いた後の深さ77cmを測る。

立地 東側の舌状台地の東斜面に位置する。

形状 傾斜角20°程の斜面を箱型に掘削して中央部に石・鉄滓等を敷いている。また、石敷の両側には側溝状小溝を構築してある。東側の側溝状小溝の幅は60cm深さ30cm西側のそれは、幅50cm・深さ30cmを測る。方向は、N-38°Eである。

埋没土 上部は、B軽石と見られる細粒の灰白色軽石を含み、全体に細粒でかなり粘性である。石敷の上面の土は鉄分の錆による褐色が斑に加わる灰褐色粘性土であり、さらに、側溝部分の土は、黄褐色粘土のブロックを少量含む黒褐色土である。

備考 当初、溝として調査したが、全貌を出してみると溝というよりも道路状の遺構と考えたほうが適切であろう。中央の石敷は、歩くときに都合がよい様に人為的に敷かれたものであろう。その石の間には鉄滓がかなりの量出土した。その中には埴壇の底部に溜まった鉄滓も含まれている。他の遺物としては須恵器羽釜口縁破片が側溝の底から、また、覆土として、灰釉陶器底部片、13世紀の龍泉系の青磁片3点、中世の大甕口縁部、錘鉢破片、鳴滝に西敵する砥石、籠の羽口破片なども出土している。これらから本遺構の構築年代は平安時代（10世紀頃）と考えられ、使用されていた時期は、平安～中世までといえる。

第11号溝

位置 2区11C10～2区25C04 **写真** PL.80

規模 長さ35m・最大幅1.1m・最大深さ60cmを測る。

立地 東側の舌状台地の平坦部中央に位置し、段差に沿って東西に走っている。

形状 断面形は、上部が削平されているため明確でないが、浅い箱型を呈している。平面形は、ほぼ同じ幅で直線的である。方向は、N-116°Eである。

埋没土 B軽石を若干含む黒褐色土が主体である。

備考 120号住居跡と重複しており、本溝が切っ

第3章 検出された遺構と遺物

る。出土遺物は、須恵器壺口縁部・須恵器壺底部などがある。構築年代は、120号住居跡の遺物より、9世紀後半であり、本溝の埋没土にB軽石が含まれていることから平安時代中期と考えられる。使用目的は排水関係か。

第12号・第13号溝

位置 2区00B49～2区06C08 **写真** PL.78

規模 12号 長さ13m・最大幅1m・最大深さ21cm。

13号 長さ12.5m・最大幅1m・最大深さ18cm。

立地 東側の舌状台地の東斜面の肩部に位置し、等高線に沿って南北に走っている。

形状 12号・13号溝とも道路状遺構の側溝部分と考えられる。断面形は、両方とも上面が削平されているが、現状で12号が逆台形を、13号が皿状を呈し、平面形は、中央道路部分に沿ってほぼ同じ幅で走っており、方向は、N-28°-Eである。

埋没土 12号は、ローム粒を少量含む細粒で粘質な暗褐色土が主体をなす。13号は、ローム小塊を少量含む褐色土が上部に、暗褐色土が下部に堆積する。

備考 12号・13号溝が、自然消滅している北側の部分には10号溝と同様の石敷部分があり、また、12号・13号溝の中央には幅1.5m前後の平坦部分が存在し、以上の状況から、この部分は、道路状遺構とその側溝部分であるとの結論に達した。本遺構は、11世紀初頭から前半の住居である125号住居跡・135号住居跡と重複しており、本遺構を住居跡が切っていることから本遺構の方が古いと言える。すなわち、本遺構の構築年代は、11世紀より前であり、出土状況から10号溝との強い関連性を考えることができる。遺物は、須恵器壺の肩部片が出土している。

第14号・第15号溝

位置 1区45C02～2区00B49 **写真** PL.78

規模 14号 長さ8.7m・最大幅1.4m・最大深さ22cm

15号 長さ19.7m・最大幅70cm・最大深さ18cm

立地 東側の舌状台地の東斜面上部に位置する。

形状 12号・13号溝から続く道路状遺構の側溝部分と考えられる。断面形は、両方とも上部が削平され

ているため、明確ではないが、現状で14号は皿状を15号は浅い葉研状を呈している。平面形は、中央の道路状遺構に沿って、ほぼ直線状に平行に走っている。方向は、14号は、N-123°-Eであり、15号は、N-46°-Eで走っていたものが2区00B48グリットで南へ79°曲がってN-125°-Eを呈する。

埋没土 14号・15号共に細粒で粘性の強い暗褐色土が主体をなすが、特に15号では上層にB軽石が少量含まれる。

備考 15号溝は、11世紀後半の年代観を示す127号住居跡と重複し、127号住居跡の方が15号を埋めて床面を形成しているのが15号溝の方が古いといえる。構築年代は12号・13号溝と同じ遺構と考えられるので11世紀より前ということが出来る。出土遺物は確認されなかった。

第16号溝

位置 2区13B48 **写真** PL.80

規模 長さ6.9m・最大幅90cm・最大深さ15cmを測る。

立地 東側の舌状台地の北側よりの平坦部にある。

形状 断面形は、箱型を呈し、平面形は、ほぼ同じ幅で走っており、方向は、N-108°-Eである。

埋没土 径2～3cm大の黄色軽石を多く含む暗褐色土が主体をなす。

備考 本溝と重複する遺構はないが、すぐとなりの17号溝と形状・埋没土等が大変似ており、同時期の構築と考えられる。年代は、出土遺物もなく、不明である。

第17号溝

位置 2区11B48 **写真** PL.80

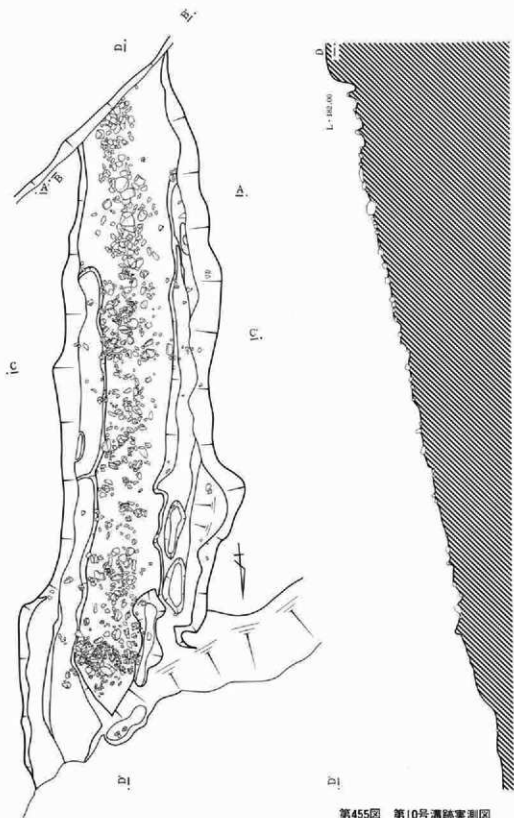
規模 長さ6.7m・最大幅1.2m・最大深さ28cmを測る。

立地 東側の舌状台地の北側よりの平坦部にある。

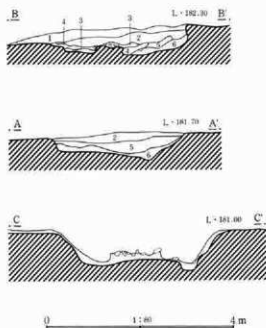
形状 断面形は、箱型を呈し、平面形は、ほぼ同じ幅で走り、方向は、N-106°-Eである。

埋没土 淡褐色粘質土の小塊を少量含む細粒の暗褐色土が主体をなす。

備考 16号溝と形状・埋没土等が似ており、同時期の構築と考えられる。年代は、不明である。

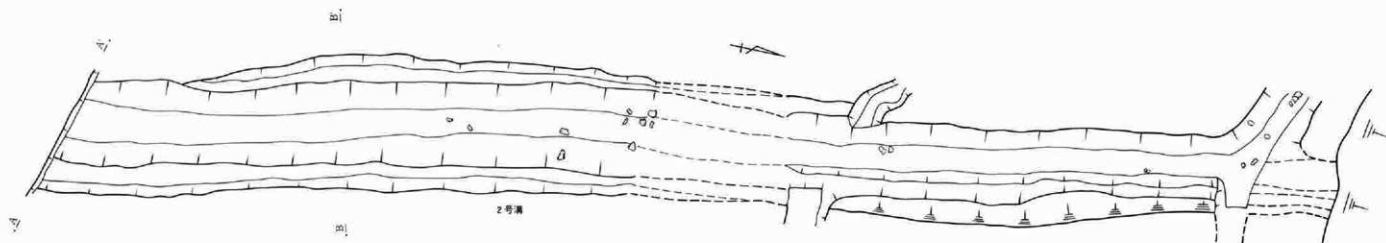


第455図 第10号溝跡実測図



土層詳記

1. 灰褐色土 耕作土。粗粒でガサガサしている。
2. 暗褐色土 目録石とみられる細粒の灰白色焼石を多量に黄色焼石を少量含む。細粒でかい粘質。
3. 淡灰褐色粘質土 目録石とみられる細粒の焼石を含む。
4. 灰褐色粘質土、灰色をベースとして鉄分の多い褐色が際に加わる。
5. 暗褐色土 2とほぼ同質だが、これに3層が一帯加わり部分的に淡灰色を呈する。
6. 黒褐色土 細粒で強い粘質土。黄褐色粘土のブロック(大小)を少量含む。

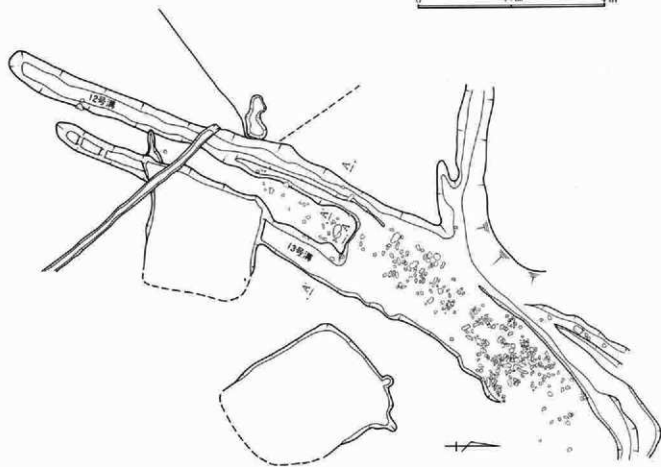


0 1:80 4 m

土層注記

1. 表土 (耕作土) A 軽石を多分に含む締りのない灰褐色土。
2. 褐色土 耕作土を越えに含む細粒だがあまり締りがない。
3. 褐色土 黄褐色土を底らに含む粗粒であり締りがない。
(羽庭片等平安時代の土器片を含む)
4. 明褐色土 黄褐色土を底らに含む細粒で締りがある。
5. 黒褐色土 黄褐色土を底らに含む細粒で締りがある。炭化物を少量含む。

6. ロームと黒色土の混土層 細粒が締りがない。
7. 暗褐色土 黄褐色土を底らに含む細粒で締りが強い。古墳時代(墳高式)の土器片を少量含む。
8. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。あまり締りがない。
9. 黄褐色土 ロームが風化して腐食土が混った土にローム粒が目立つ。古墳時代の土器片を少量含む。



0 1:120 4 m

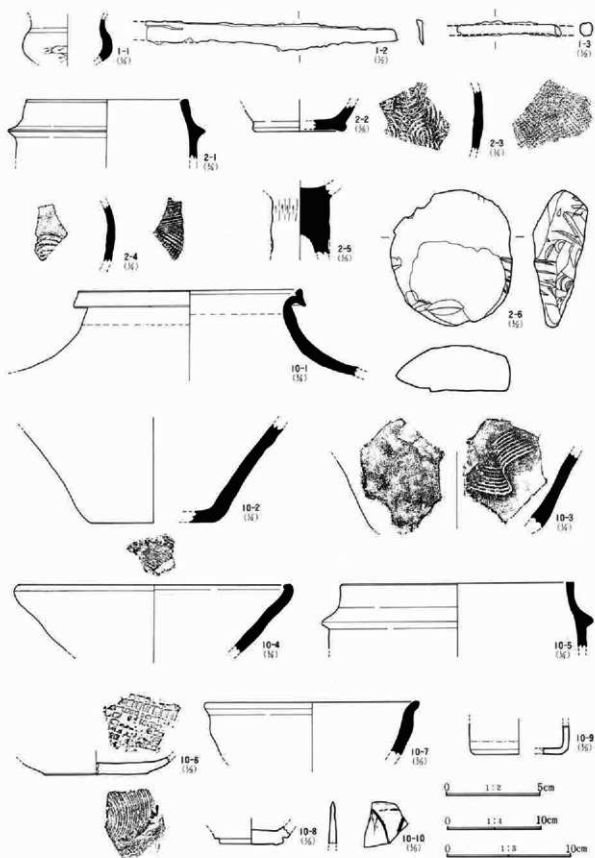
土層注記

1. 暗褐色土 やや粗粒だが粘質で締まりは強い。ローム粒をごく少量含む。
2. 暗褐色土 赤根層。
3. 暗褐色土と黄褐色粘質土の混土 粘質がかなり強く締まりが強い。
4. 暗褐色土 1よりやや明るく細粒で粘質。

土層注記

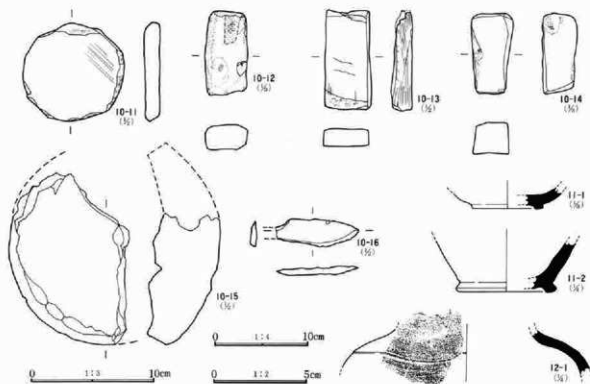
1. 黒褐色土 細粒だがあまり締りがない。
2. 褐色土 ローム小塊を少量含む。細粒で粘質。
3. 暗褐色土 ローム小塊を少量含む。細粒で粘質。

第456図 第2号・第12号・第13号溝跡実測図



第457図 清跡出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第458図 溝跡出土遺物実測図(2)

溝出土遺物観察表 (PL.189)

種別	器形	出土位置	口径	高さ	底径	①粘土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
1	須恵器 小型壺	埋没土	頸部~胴部			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。胴部は尻削り。	水田表土。
1	小形櫛 先	埋没土	残存長13.6cm			某灰は、旧時欠損。切先は、調査時欠損。全体に、錆はがれが顕著で、不明瞭であるが、わずかながら、刃区、棟区位置を確認することができる。さらに、小刃区あり。内面片方。		
1	棒状	埋没土	残存長5.5cm			横断面形は、ほぼ円形をなし、錆化は少なく、磨蝕を思わせる。両端部は、旧時欠損。		
2	須恵器 羽釜	埋没土	口縁部			①普通・白色微塵少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
2	須恵器 壺	埋没土	底部~高台部			①普通・灰色微塵少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2	須恵器 壺	埋没土	胴部片 (縦6.2 横8.5)			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	①外面 格子叩き。 ②内面 青銅液叩き。	
2	須恵器 壺	埋没土	胴部片 (縦6.5 横3.2)			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
2	須恵器 高坏	埋没土	胴部片			①細・灰色微塵少量 ②酸化・普通 ③橙色	①外面 脚部縦削り。 ②内面 坏底部は削で、脚部は尻削り。	
2	紡錘車 未成品	埋没土	材質 滑石。長さ7.1cm 幅6.6cm 厚さ2.3cm			重さ170g。平面図下部に剝離欠損あり。側面に工具の痕跡がめだつ。紡錘車製作の途中でやめたものと思われる。		
10	須恵器 壺	底	口縁部			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰赤色	軸が、外面と内面一部に付着。ロクロ整形(右回転)。	
10	須恵器 壺	+48	胴部~底部			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	①外面 指押え。 ②内面 撫で。	
10	土師器 罌鉢	埋没土	胴部片 (縦10.0 横9.0)			①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。内面に、カキ目状磨痕あり。	
10	須恵器 壺	-5	口縁~胴部			①細・黒色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	内外共撫で。断面が3層(茶色・灰色・茶色)になっている。	
10	須恵器 羽釜	-3	口縁部			①細・白色微塵少量 ②還元・軟 ③灰色	口縁部はやや内傾する。紐作り後、ロクロ整形(右回転)。脚は貼り付け。	
10	中世陶 磨瑠鉢	埋没土	底部			①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り。	

図号	器種・器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
10-7	須恵器 鉢	埋没土	口縁～体部	①細・黒色白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。内面は自然軸。	
10-8	中世陶 甕	埋没土	台(5.0) 底部～高台	①細・白色微塵量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	
10-9	胎土陶 甕	埋没土	体部～底部	①細・夾雑物なし ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。外面に軸付着。	
10-10	磁 器	埋没土	口縁部片		外面に、蓮弁文あり。内・外面に、青磁軸がほどこされる。発色は、やや青みがかるが、胎土は薄い。青磁。	龍泉窯系 13C
10-11	未成品	埋没土	材質 緑色片岩、長さ5.5cm 幅5.2cm 厚さ0.9cm 重さ51g。板状に荒削りした石の断面を円板状に磨いている。			
10-12	磁 石	埋没土	材質 泥岩。長さ6.7cm 幅3.3cm 厚さ2.6cm 重さ56g。自然石の利用品。手前小口、奥小口は凹み欠損。使用は、平面図中の破線内。研磨面は狭く、磁石であるか、不明瞭。主体は、金属。			
10-13	磁 石	埋没土	材質 頁岩。長さ5.3cm 幅2.6cm 厚さ0.9cm 重さ25g。定型の磁石で、裏面は、全面割傷。使用は平面図と断面図。質は、精緻で磁石に匹敵。主体は、金属。手持磁。中世か。			
10-14	磁 石	埋没土	材質 炭酸岩(砥沢石)。長さ6.4cm 幅3.4cm 厚さ2.5cm 重さ90g。定型の磁石で、原石面は残っていない。使用は、主に表裏にあり、主体は、金属。中世以降か。手持磁。			
10-15	鉋 滓	+5	最大径9.6cm 重さ252g		塊形鉋滓状を呈する。周囲は凹みをなし、径10.7cmを測る。割れ口の底面は、灰緑々緑色の律物があり、約1cmの厚みでカマボコ成にあり、その上方は、あざ色の律物がある。	
10-16	刃 物	埋没土	残存長4.4cm		茎部は、調査時欠損。他は旧態を留める。刃区部があり、縁部は肉厚となる。小型・異形のため、転用、再生刀子か。錆化は少なく、良鉄を思わせる。	
11-1	須恵器	埋没土	底部～高台	①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。削り出し高台?	
11-2	須恵器	+70	胴部～底部	①細・白色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
12-1	須恵器 甕	埋没土	肩部～胴部	①細・白色微塵・黒色微塵少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。	

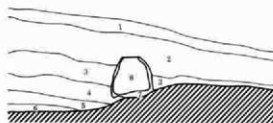
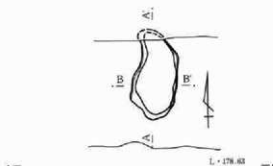
第13節 その他の遺溝と遺物

竈跡状遺構

位置 3区28C10 写真 PL.86

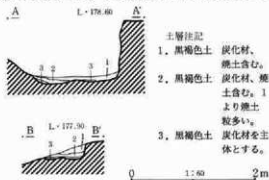
形状 平面形は北側がやや歪んだ楕円形を呈し、断面形は釣鐘状で上部が開いた形をしている。

規模 長径140cm・短径70cm・高さ70cm・開口部22cm



第459図 竈跡状遺構実測図

備考 本遺構は、3区の遺構確認における試掘トレンチを掘削した際に検出され、その折、主体部をほとんど削り取ってしまい、かろうじて底部のほとんどと北側の立ち上がり部分を調査することができたに留ってしまった。その状況の中から判明したこと



土層注記

1. 表土 黒色土。
2. 黒褐色土 B 軽石若干含む(やや粘性あり)
3. 黒褐色土 軽石較若干含む(粘性強い)
4. 黒褐色土 軽石較若干含む(3と似るが臭味を持つ)
5. 黄褐色土 ローム層移層。
6. 黒褐色土 粘性を持つ。
7. 赤褐色土 やや焼土化している。
8. 赤褐色土 焼土ブロック、灰、炭化物の混合土。

第3章 検出された遺構と遺物

は、①底部全体に焼土粒と炭化物粒の混合土が22cmほど堆積していたこと ②釣鐘状に立ち上がった部分は5～7cmの幅で火を受けて赤褐色に焼けていること ③開口部は、焼土化されていないこと ④釣鐘状の中は焼土ブロック・灰・炭化物粒が混入していることなどであった。以上のことから釣鐘状の遺構の中で火を燃やしたことは確実であるが、何を目的としたものかは不明である。また、本遺構からは、全く遺物の出土が無かったため、使用年代も明確ではないが、まわりの土層に浅間山のB軽石が含まれていることから、平安時代以降と考えられる。

第1号土器集積

位置 2区32C11 写真 PL.71

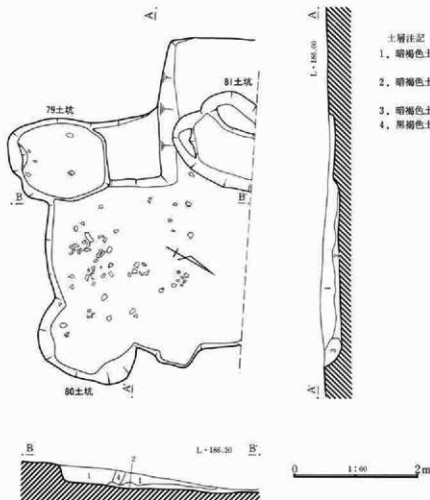
立地 西側の舌状台地の南側最上部にあり、そこから北西へ向かう小さな谷地の谷頭に位置し、まわり

を囲むように79号・80号・81号土坑が存在する。

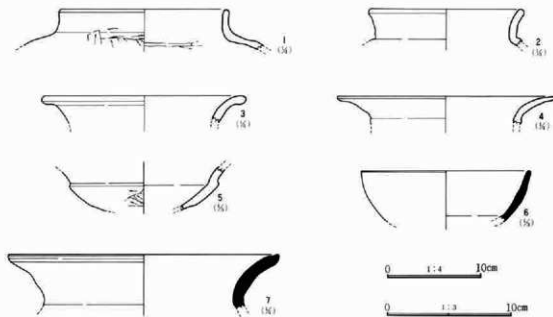
形状 上記の土坑と重複しているため、明確ではないが方形の落ち込みがある。

埋没土 ローム粒・炭化物粒を少量含む暗褐色土が主体をなす。

備考 方形の落ち込みの中に遺物が集中して出土しているが、住居跡とは考えられない。遺物は落ち込みの底面より浮いた状態で出土している。特に東側に集中しており、位置も上方が多い。器種は、土師器壺口縁部・坏口縁部・底部、須恵器壺口縁部などである。時期的には古墳時代後期から奈良時代にかけてのものが出土している。おそらく、この落ち込みができた後に土器捨て場として投げこまれた可能性が高い。



第460図 第1号土器集積実測図



第46図 第1号土器集積出土遺物実測図

第1号土器集積出土遺物観察表 (PL.一)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。外面 内面 荒撫で。	輪痕あり。
2	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。	
3	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①普通・灰色藍少量 ② 酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口縁部横撫で。	
4	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①細・白色藍少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。	
5	土師器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①細・灰色藍少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部横撫で。外面体部は 磨り。内 面体部は撫で。	
6	須恵器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①細・白色藍少量 ②選 元・軟 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	
7	須恵器 甕	埋没土	口一 高一 底一 口縁部片	①細・白色藍少量 ②選 元・硬 ③褐色	紐作り後、ロクロ整形(右回転)。	内面に自然釉。

ピット群

本遺跡では4カ所のピット群が確認された。そのすべてが西側の舌状台地にあり、ともに1棟から数棟の掘立柱建物跡をいっしょに検出している。また、4カ所すべてが竪穴住居跡と重複しており、中には調査区域外にピット群が広がっているものもあり、それらの性格を明確にすることはできなかった。

① 3区B・4区Bピット群

位置 3区47B41～4区08B45

西側の舌状台地の東側の緩斜面に位置し、このピット群には3・8・10・11号の4棟の掘立柱建物跡がある。北側と東側にはまだピット群が広がる様

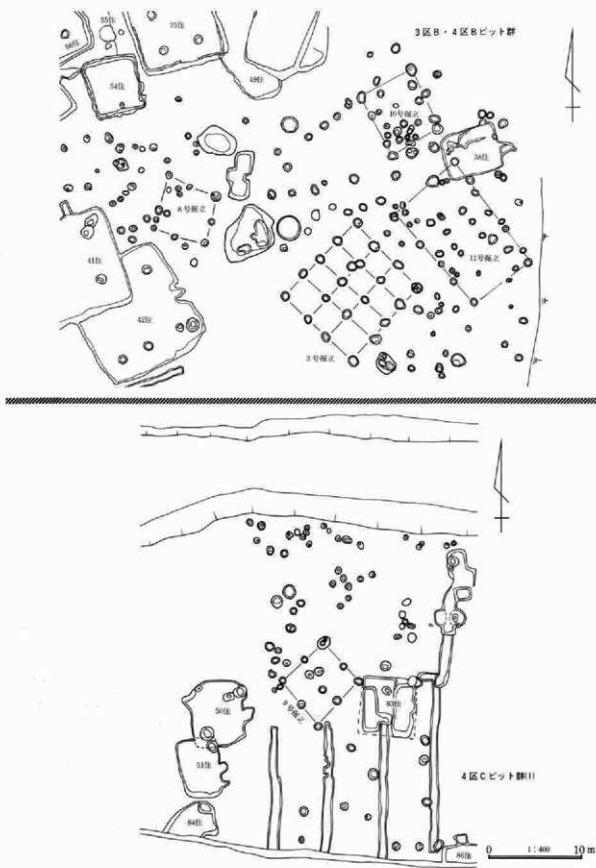
相を呈しているが、後の耕作のために1段低く削平されており、確認できなかった。付近には古墳時代から平安時代までの住居跡があるが、それらとの重複関係をつかむことはできず、年代はほとんど不明である。ピット506からは古墳時代後期と思える土師器小型甕の底部が出土している。

② 4区Cピット群(1)

位置 4区00C09～4区05C15

西側の舌状台地の最も高いところに位置する。このピット群には9号掘立柱建物跡がある。付近には平安時代を中心とした住居跡があり、また、北側には土坑群がある。性格や年代は不明。

第3章 検出された遺構と遺物



第462図 3区B・4区Bおよび4区Cピット群実測図



第463図 4区Cピット群(2)実測図

③ 4区Cピット群(2)

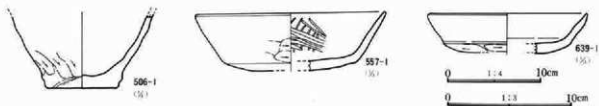
位置 4区18C07～4区31C12

西側の舌状台地の西緩斜面の高いところに位置し、この中には1・2号掘立柱建物跡がある。ピット群の中で最もピットの集中したところであるが、南側の調査区域外にさらに広がる様相を呈しており、性格や年代をつかむことはできなかった。

④ 5区B・Cピット群

位置 5区27B30～5区45C02

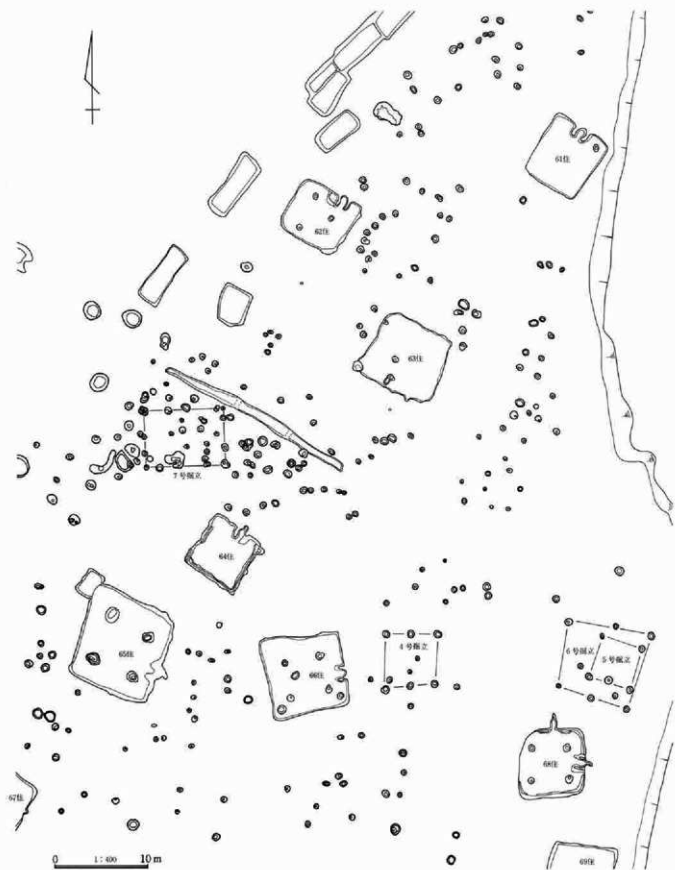
西側の舌状台地の西緩斜面の最も低い部分に位置する。広範囲にピットが広がっており、そのなかに4・5・6・7号掘立柱建物跡もある。付近には古墳時代前期から平安時代までの住居跡が確認されているが、それらとの関係は不明である。南側の調査区域外に広がる様相を呈しており、このピット群の性格や年代は不明である。



第464図 ピット出土遺物実測図

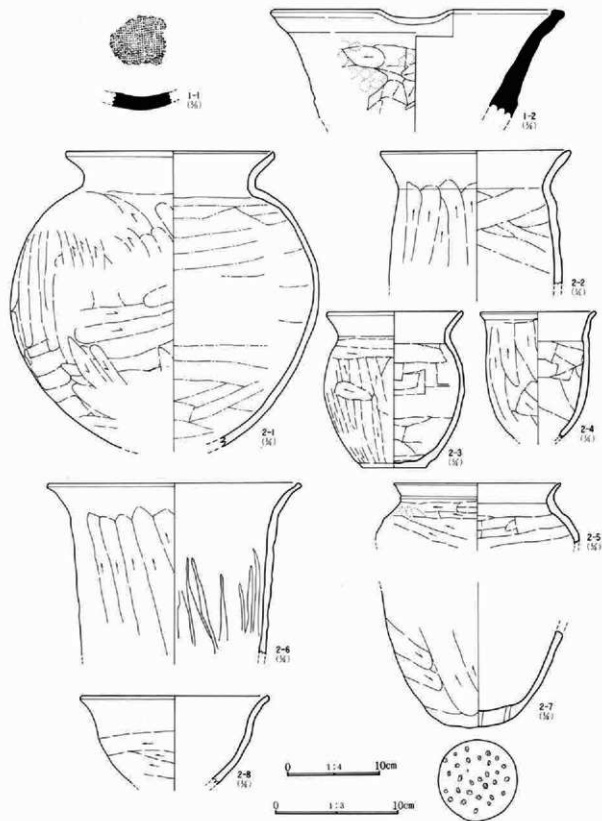
ピット出土遺物観察表(PL-)

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
506 -1	土師器 -1 壺	埋没土	口径 高一 底径 7.4 胴～底	①普通・灰色鉄少量 ② 酸化・硬 ③鈍い褐色	外面 胴部は篋削り。 内面 胴部は篋削り。	
557 -1	土師器 -1 杯	埋没土	口径(15.1) 高(4.5) 底～口径	①細・白色鉄微量 ②酸化 ・普通 ③褐色	外面 口径部は篋削り、体部～底部は篋削り。 内面 口径部～底部は篋削り。	内面に暗文あり。
639 -1	土師器 -1 杯	埋没土	口径(12.5) 高一 底～	①細・夾雑物ほとんどなし ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内外共口径部は篋削り、体部～底部は篋削り。 内面体部は篋削り。	



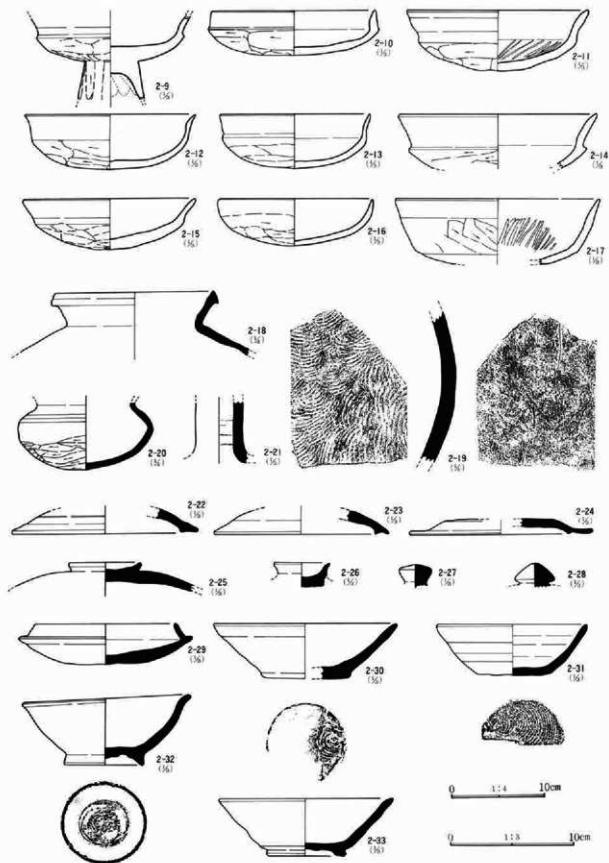
第465図 5区ビット群実測図

第14節 遺溝外出土の遺物

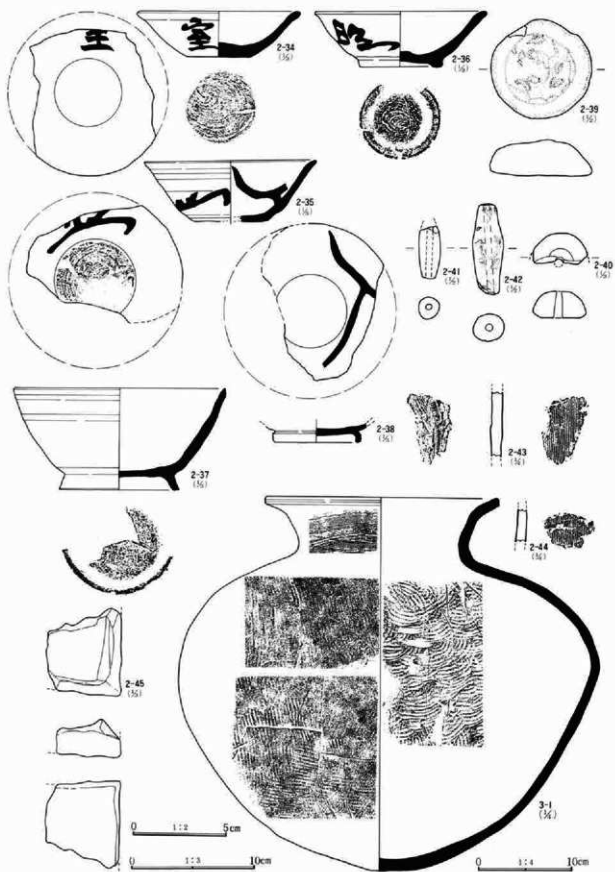


第466図 遺構外出土遺物実測図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

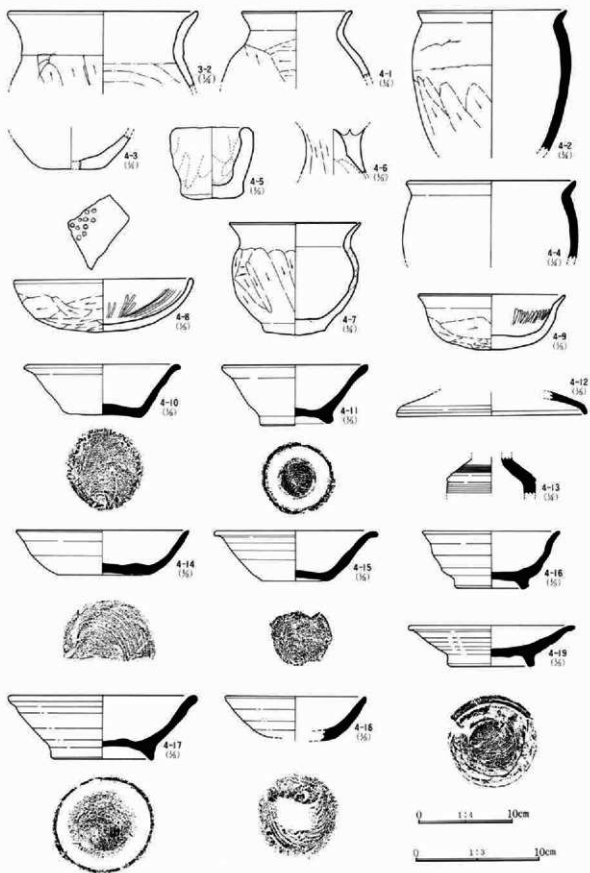


第467図 遺構外出土遺物実測図(2)

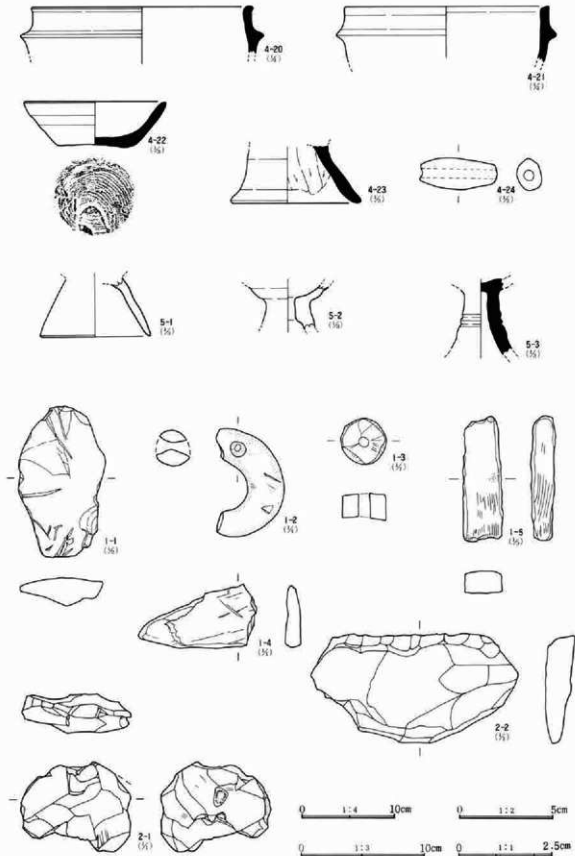


第468図 遺構外出土遺物実測図(3)

第3章 検出された遺構と遺物

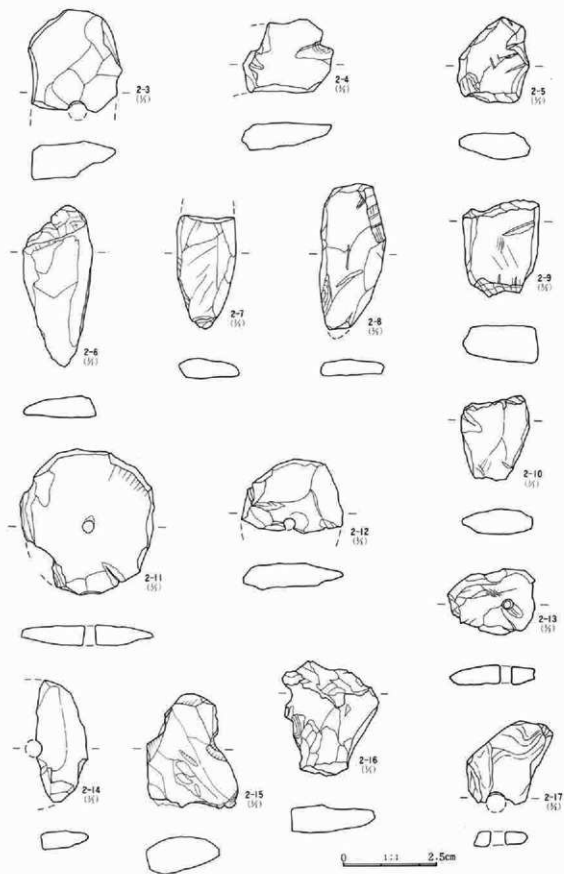


第469図 遺構外出土遺物実測図(4)

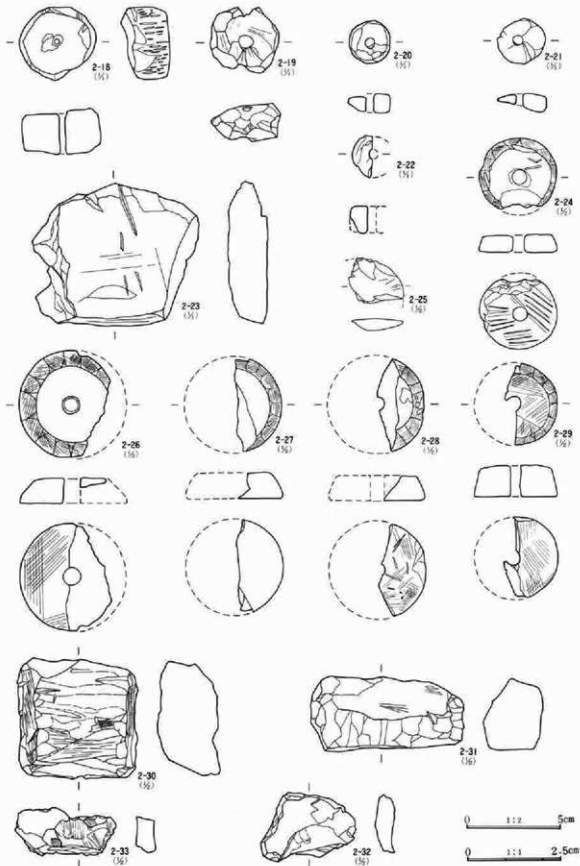


第470図 遺構外出土遺物実測図(5)

第3章 検出された遺構と遺物



第471図 遺構外出土遺物実測図(6)

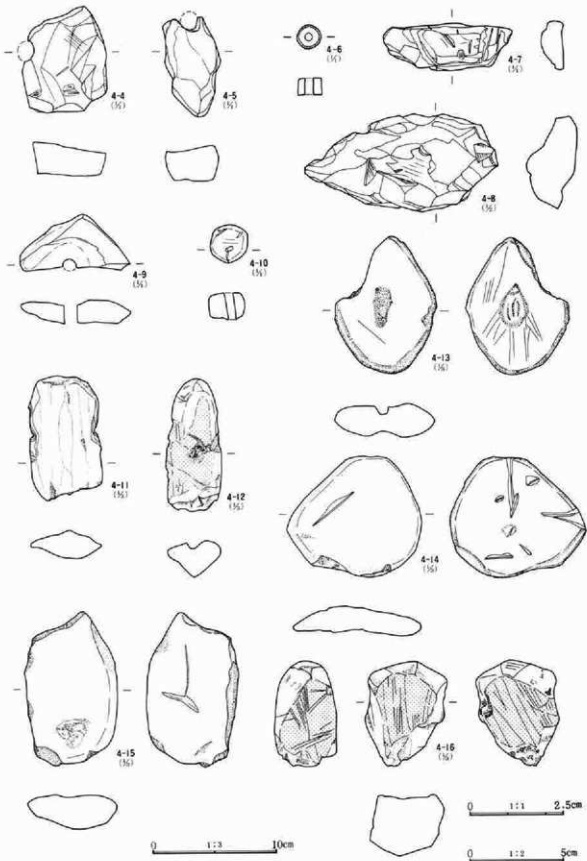


第472図 遺構外出土遺物実測図(7)

第3章 検出された遺構と遺物

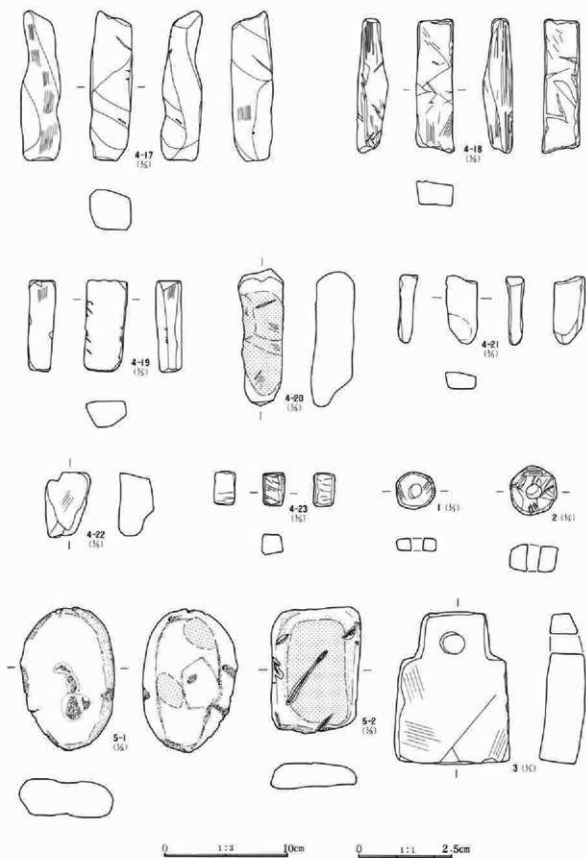


第473図 遺構外出土遺物実測図(8)

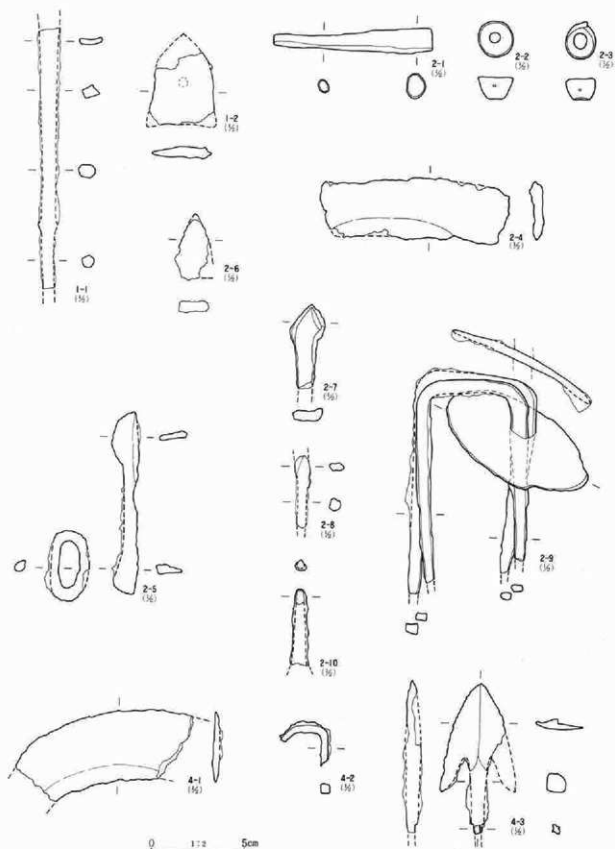


第474図 遺構外出土遺物実測図(9)

第3章 検出された遺構と遺物

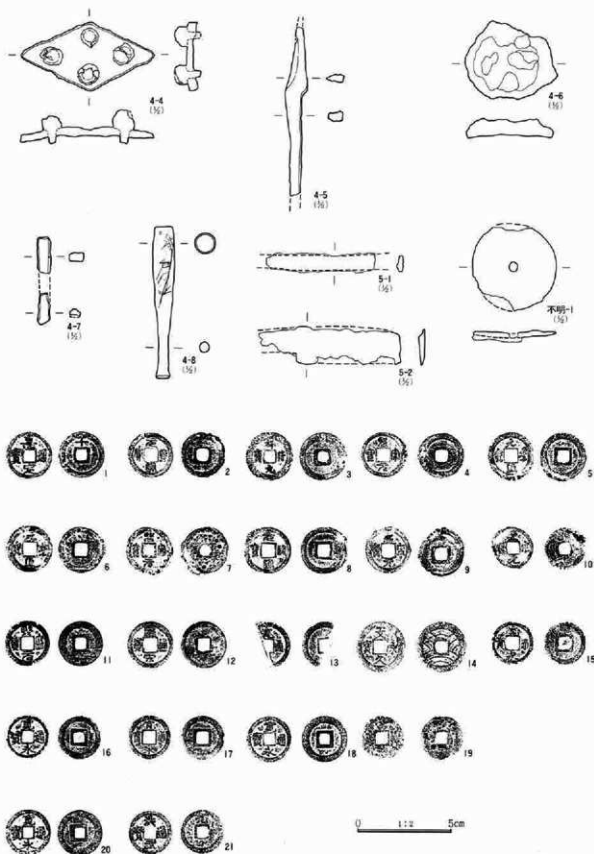


第475図 遺構外出土遺物実測図 (10)



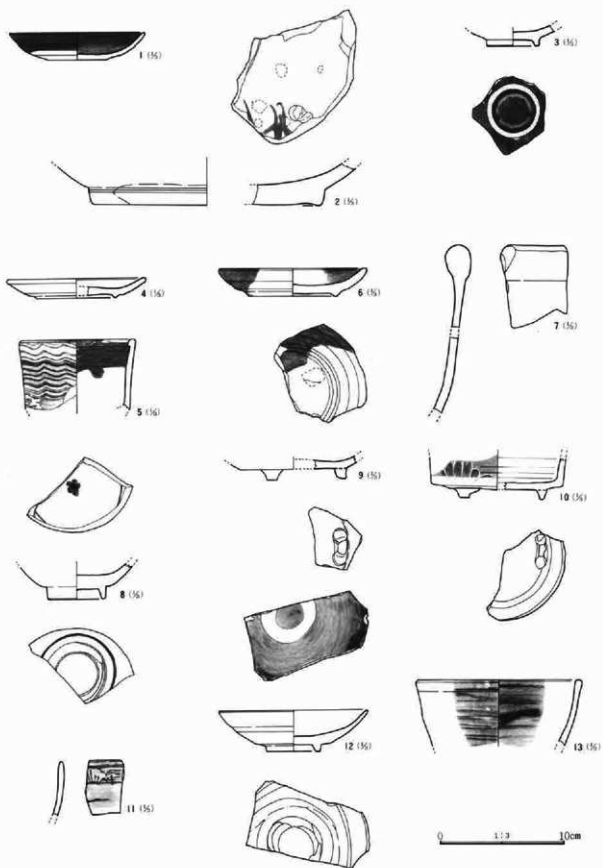
第476図 遺構外出土遺物実測図(11)

第3章 検出された遺構と遺物



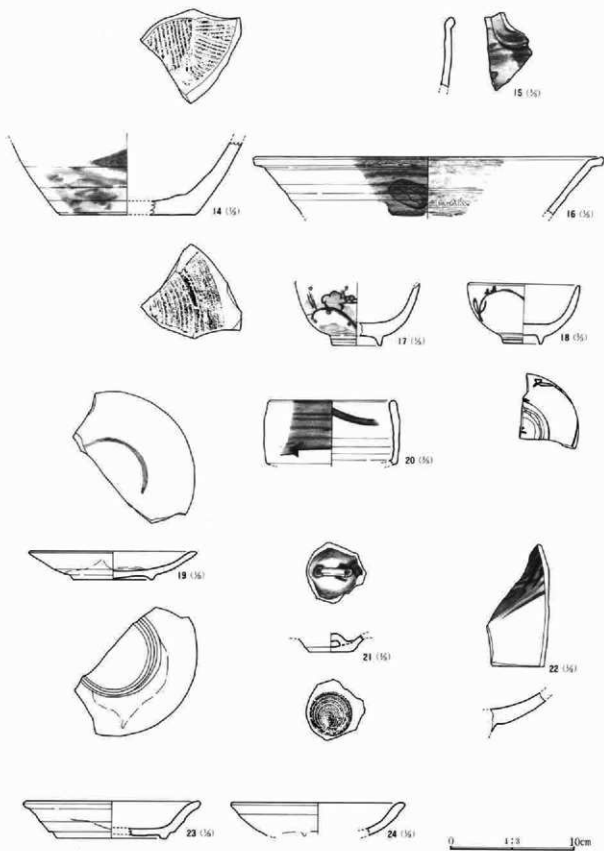
第477図 遺構外出土遺物実測図 (12)

第14節 遺構外出土の遺物

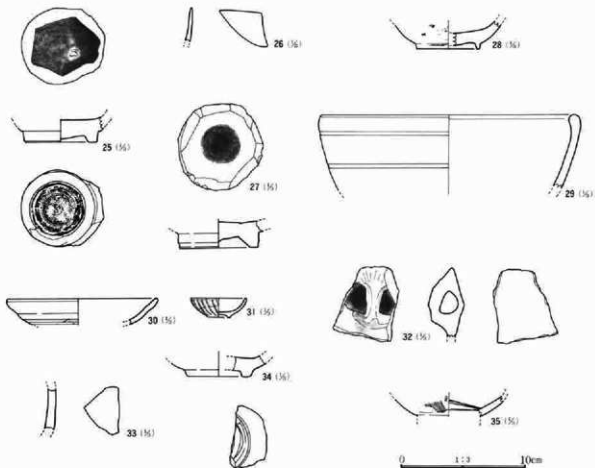


第478図 遺構外出土遺物実測図 (13)

第3章 検出された遺構と遺物



第479図 遺構外出土遺物実測図 (14)



第480図 遺構外出土遺物実測図 (15)

遺構外出土遺物 土器・瓦・土製品観察表 (PL.190, 191)

説明	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
1	布目瓦	埋没土 C	破片	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③灰色	凸面は、覆削り調整。凹面は、細かな布目痕。胎土は、白色灰物少量混入。色調は灰。硬質。	
-2	土 鍋	埋没土 32C20	□(30.3)	①細・灰色灰微量 ②還元・硬 ③灰褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は覆削り。指圧痕あり。	内面、摩耗している(使用痕)。
-1	土師器 小壺	埋没土	□22.2 高一 □~底 瓦	①細・灰色灰微量 ②還元・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部上半は斜め覆削り。胴部下半は横削り。内面割部は覆削り。	
-2	土師器 長胴壺	埋没土 09C14	□(29.3) 高一 底一 □~割 瓦	①普通・白色灰少量 ②還元・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は覆削り。内面割部は撫で。	
2	土師器 小壺	埋没土 09C14	□(14.6) 高16.3 底(6.8) □~底 瓦	①細・灰色灰少量 ②還元・普通 ③鈍い黄褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は覆削り。内面は覆削り。	
-3	土師器 小壺	埋没土 09C14	□(12.0) 高一 底一 □~割 瓦	①普通・灰色灰微量 ②還元・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は覆削り。内面割部は覆削り。	
-4	土師器 小壺	埋没土 09C14	□(17.6) 高一 底一 □~割 瓦	①細・白色灰少量 ②還元・硬 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は覆削り。内面割部は覆削り。	
-5	土師器 瓶	埋没土 09C	□(26.6) 高一 底一 □~割 瓦	①細・白色灰色灰微量 ②還元・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は斜め覆削り。内面割部は撫で。	内面に暗文あり。
-6	土師器 瓶	埋没土 08C15	□一 高一 底(16.0) 胴~底 瓦	①普通・白色灰色灰多量 ②還元・硬 ③鈍い赤褐色	外面 割部は覆削り。内面 割部は撫で。	多孔。
-7	土師器 鉢	埋没土 09C14	□(20.0) 高一 底一 □~体 瓦	①細・白色灰少量 ②還元・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で。外面割部は横削り。内面割部は撫で。	
2	土師器 高 杯	埋没土	□一 腰(11.8) 高一 杯部~脚部 瓦	①細・灰色灰少量 ②還元・普通 ③褐色	外面 杯部~脚部は覆削り。内面 杯部は撫で。脚部は指圧痕あり。	

第3章 検出された遺構と遺物

図号	遺構 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
2-10	土師器 環	埋没土 09C14	口(13.2) 高3.5 丸底 口～底 丸	①胎・白色微少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、体部～底部は横削り。内面 口縁～体部は横撫で、底部は撫で。	表面は黒色処理。
2-11	土師器 環	埋没土 09C15	口(14.6) 高(4.7) 丸底 口～底	①胎・白色微少量 ②酸 化・普通 ③褐色	内外共口縁部は横撫で、外面体部～底部は旋削り。内面は撫で。	昭文あり。
2-12	土師器 環	埋没土 09C13	口(13.6) 高4.3 丸底 口～底 丸	①胎・白色微少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、体部～底部は横削り。内面 口縁～体部は横撫で、底部は撫で。	
2-13	土師器 環	埋没土 C谷地	口(12.0) 高4.3 丸底 口～底	①胎・白色微少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、体部～底部は旋削り。内面 口縁～体部は横撫で、底部は撫で。	
2-14	土師器 環	埋没土 09C13	口(15.8) 高一 底一 口～底	①胎・灰色微少量 ②酸 化・普通 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、体部は横撫で。内面 口縁部～体部は横撫で。	
2-15	土師器 環	埋没土 C谷地	口(13.7) 高4.0 丸底 口～底	①胎・白色微少量 ②酸 化・硬 ③鈍い褐色	内外共口縁部は横撫で、外面体部～底部は旋削り。内面体部は撫で。	内外共、黒色処理の跡あり。
2-16	土師器 環	埋没土 09C14	口(12.5) 高(3.7) 丸底 口～底	①胎・白色微少量 ②酸 化・普通 ③鈍い赤褐色	外面 口縁部は横撫で、外面体部～底部は横削り。内面 口縁～体部は横撫で、底部は撫で。	
2-17	土師器 環	埋没土 2層	口(16.3) 高一 底一 口～底	①胎・灰色微少量 ②酸 化・硬 ③褐色	外面 口縁部は横撫で、体部は斜め削り。内面 口縁部～体部は横撫で、底部は撫で。	内面に昭文あり。
2-18	須恵器 甕	埋没土 09C14	口(17.0) 高一 底一 口～肩	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	組作り後、ロクロ整形。	
2-19	須恵器 甕	埋没土 13C21	胴部片 (縦16.3 横16.0)	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰オリーブ色	外面 斜め格子叩き。内面 背骨叩き。	
2-20	須恵器 短頸甕	埋没土 06C15	口一 頸10.5 体 14.5 丸底 頸～底	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	組作り後、ロクロ整形。外面 胴部～底部は横削り。	
2-21	須恵器 短頸甕	埋没土 C2層	口一 頸5.0 高一 底一 胴部片	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③オリーブ黒色	組作り後、ロクロ整形。内面 工具による整形痕あり。	
2-22	須恵器 環蓋	埋没土 C2層	口(15.0) 高一 口縁部片	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	組作り後、ロクロ整形。	
2-23	須恵器 環蓋	埋没土 B P上層	口一 高一 天井部～口縁部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	
2-24	須恵器 環蓋	埋没土 C2層	口一 高一 天井部～口縁部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。天井部は旋削り。	
2-25	須恵器 環蓋	埋没土 06C15	口一 高一 胴～天井部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	ボタン状痕。
2-26	須恵器 環蓋	埋没土 環蓋	口一 高一 胴部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	中くぼみの調。
2-27	須恵器 環蓋	埋没土 C2層	口一 高一 胴部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③鈍い褐色	ロクロ整形(右回転)。	定珠状痕。
2-28	須恵器 環蓋	埋没土 環蓋	口一 高一 胴部	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。	
2-29	須恵器 環	埋没土 09C14	口11.2 高3.1 口～底 丸	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	組作り後、ロクロ整形。底部は回転削り。	
2-30	須恵器 環	埋没土 C	口(14.8) 高(4.3) 底一 口～底	①胎・灰色微少量 ②酸 化・普通 ③鈍い黄褐色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転削り。	
2-31	須恵器 環	埋没土 C	口(12.0) 高4.0 底一 口～底 丸	①胎・白色微少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転削り。	
2-32	須恵器 環	埋没土 底6.2 ほぼ球形	口(13.1) 高5.1 底6.2 ほぼ球形	①胎・白色微少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2-33	須恵器 環	埋没土 15B45	口(14.0) 高4.5 底6.5 口～底	①胎・白色微少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2-34	須恵器 環	埋没土 環	口(13.0) 高3.6 底5.0 口～底	①胎・灰色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転削り。	墨書「室」(内外に2箇所)。
2-35	須恵器 環	埋没土 15B45	口(13.2) 高14.7 底(5.8) 口～底	①胎・灰色微少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。底部は回転削り。	墨書入り。
2-36	須恵器 環	埋没土 15B45	口(13.0) 高(4.4) 底(6.4) 口～底	①胎・灰色微少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	内「人」外「明」。
2-37	須恵器 環	埋没土 C2層	口(16.8) 高(6.9) 底(9.6) 口～底	①胎・白色微少量 ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2-38	灰胎陶器 底	埋没土 21C19	口一 高一 底6.8	①胎・実物なし ②還元・硬 ③灰白色	ロクロ整形(右回転)。付高台。	
2-39	土製品 環	埋没土 05C14	長さ5.3cm 幅5.3cm 厚さ1.9cm 重さ43.7g。紡錘車未成品か、蓋の調か、台部か。不明。全体に、暗褐色を呈する。酸化。細粒で、白色微粒子、少量混入。			

第14節 遺構外出土の遺物

図号	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・器形の技法	備考
2 -40	紡輪車	埋没土 01C163	土製品。長軸4.4cm	厚さ2.3cm 孔径0.6cm 重さ20.7g。平分欠損。		
2 -41	土 鉢	埋没土 03C15	土製品。長さ一 幅1.7cm 孔径0.5cm 重さ8.6g。頂上方欠損。穿孔は、模成前。須恵質。還元・硬質。暗灰色。			
2 -42	土 鉢	埋没土 08C14	土製品。長さ8.47cm	最大幅1.6cm 孔径0.3cm 重さ11.1g。穿孔は、焼成前。灰褐色。細粒で、灰色鉱物微量含む。酸化、硬質。		
2 -43	円筒埴輪	埋没土	割部片 (縦6.7 横4.0)	①細・灰色鉱物微量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	紐作り後、縦方向に刷毛目。	
2 -44	円筒埴輪	埋没土	割部片 (縦3.4 横5.3)	①細・灰色鉱物微量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	紐作り後、縦方向に刷毛目。	
2 -45	須恵窯 火 舎 C 2 罎	埋没土	口一 高一 底一 破片	①細・灰色鉱物微量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	底部に、厚砂の痕跡あり。他は、研磨による仕上げ。	15世紀。
3 -1	須恵窯 大 罎	埋没土	口一 高(40.0) 口一底 互	①細・白色鉄鉱少量 ②還元・硬 ③灰色	外面 紐作り後、口縁部は波状文。平行叩き。内面 口縁部は横溝で、割部～底部は青海波印	
3 -2	土師窯 罎 C	埋没土	口(20.3) 高一 底一 口一割部片	①普通・灰色白色鉄少量 ②酸化・普通 ③黄褐色	内外共口縁部は横溝で、外面割部は斜め鈍削り。内面割部は直削り。	
4 -1	土師窯 罎 C	埋没土	口(11.7) 高一 底一 口一割部片	①細・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部横溝で。外面割部は鈍削り。内面割部は直削り。	内面は黒色処理。
4 -2	須恵窯 罎 C	埋没土	口(16.0) 高一 底一 口一割	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は直削り。	火をうけて全体にすぼんでいる
4 -3	土師窯 罎 C	埋没土	口一高一底(6.2) 割一底	①細・白色鉄微量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	外面 割部は直削り。内面 割部は撫で。	多孔。
4 -4	須恵窯 罎 C	埋没土	口(18.1) 高一 底一 口一割	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い褐色	口縁部は直削り。	
4 -5	手取土 罎 C	埋没土	口(6.6) 高5.6 底(5.0) 口一底	①普通・灰色鉄少量 ②酸化・普通 ③鈍い褐色	内面・外面共に、指頭圧痕あり。	
4 -6	土師窯 高 坏 C	埋没土	口一 高一 底一 割部片	①細・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	外面 脚部は縦溝削り。内面 脚部は直削り。	
4 -7	土師窯 小罎	埋没土	口(14.0) 高11.8 底6.5 口一底 互	①粗・白色鉄少量 ②酸化・普通 ③褐色	内外共口縁部は横溝で。外面割部は斜め鈍削り。内面割部は撫で。	
4 -8	土師窯 坏 C	埋没土	口14.6 高4.1 丸底 口一底	①細・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部は横溝で。外面体部～底部は直削り。内面体部は撫で。	暗文あり。
4 -9	土師窯 坏 C	埋没土	口(11.7) 高4.2 丸底 口一底	①細・灰色鉄少量 ②酸化・硬 ③鈍い赤褐色	内外共口縁部は横溝で。外面体部～底部は直削り。内面体部～底部は撫で。	暗文あり。
4 -10	須恵窯 坏 C31	埋没土	口12.4 高3.9 底6.0 突形	①細・灰色鉄少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り。	
4 -11	須恵窯 坏 C31	埋没土	口11.6 高4.7 底5.8 突形	①細・灰色鉄少量 ②還元・軟 ③灰黄色	口縁部は直削り。付高台。	
4 -12	須恵窯 坏 蓋	埋没土	口(15.2) 高一 体一 口 互	①細・黒色鉄少量 ②還元・硬 ③灰黄色	口縁部は直削り。	
4 -13	須恵窯 罎 C	埋没土	口一 高4.3 高一 頭一割	①細・黒色鉄少量 ②還元・硬 ③灰白色	口縁部は直削り。	
4 -14	須恵窯 坏 C	埋没土	口13.8 高3.5 底7.2 口一底 互	①細・黒色鉄少量 ②還元・硬 ③灰黄色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り。	
4 -15	須恵窯 坏 C	埋没土	口13.1 高3.9 底5.2 口一底	①細・白色鉄少量 ②還元・軟 ③黒色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り。	
4 -16	須恵窯 坏 C	埋没土	口(10.7) 高(4.5) 口一底	①細・黒色鉄少量 ②還元・軟 ③灰白色	口縁部は直削り。付高台。	
4 -17	須恵窯 坏 C	埋没土	口(15.2) 高5.0 底8.2 口一底 互	①普通・白色鉄少量 ②還元・軟 ③黄灰色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り後、付高台。	
4 -18	須恵窯 坏 C	埋没土	口(11.2) 高(3.5) 口一底	①普通・白色鉄少量 ②還元・軟 ③褐色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り。	
4 -19	須恵窯 罎 C	埋没土	口13.4 高3.2 底6.9 口一底	①細・灰色鉄少量 ②還元・硬 ③灰黄色	口縁部は直削り。付高台。	
4 -20	須恵窯 羽 蓋	埋没土	口(18.6) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色鉄少量 ②還元・軟 ③灰白色	紐作り後、口縁部は直削り。脚は、張り付け。	32位に流れ込み付け。
4 -21	須恵窯 羽 蓋	埋没土	口(17.0) 高一 底一 口縁部片	①普通・白色鉄少量 ②還元・軟 ③鈍い黄褐色	紐作り後、口縁部は直削り。脚は、張り付け。	32位に流れ込み付け。
4 -22	須恵窯 坏 C	埋没土	口11.4 高3.4 底6.1 突形	①普通・白色鉄少量 ②還元・硬 ③褐色	口縁部は直削り。底部は回転糸切り。	

第3章 検出された遺構と遺物

図録	器種 器形	出土位置	口径 高さ 底径 残存状態	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備考
4	土師器 土付壺	埋没土 台座	口一 高一 端10.5 C	①普通・白色紅少量 ② 酸化・硬 ③鈍い黄褐色	外面 台座は横撫で 内面 台座は削削り、端部は横撫で	
4	土 罐	埋没土 C	材質 土。軸長4.1cm 最大幅1.7cm 口径0.5cm 化。色調は、鈍い赤褐色。穿孔は、軸先端。		重さ9.6g。細粒で、灰色微結物、少量混入。焼成は、普通で酸	
-1	土師器 土付壺	埋没土 B	口一 高一 端8.8 C	①細・白色紅微量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 台座は磨き 内面 台座は磨で。	壺台か？
-2	土師器 壺台	埋没土 B	口一 高一 底一 脚部	①細・灰色紅少量 ②酸 化・普通 ③鈍い褐色	外面 脚部磨き 内面 受け部と脚部は磨で。	
-5	須恵器 高 杯	埋没土 脚部	口一 高一 底一	①細・白色紅微量 ②薄 元・硬 ③灰色	組作り後、ロクロ整形(右回転)。	

遺溝外出土遺物 石頭観察表 (PL.192, 193)

図録	器種名称	出土位置	物	数
-1	石 杖	埋没土	材質 滑石。長さ8.0cm 幅4.6cm 厚さ1.5cm 重さ72g。ところどころに、刃物による痕あり。何を意図した ものか、不明。	
-2	袂状耳飾	埋没土	材質 滑石。長さ2.8cm 幅1.0cm 厚さ0.8cm 口径0.5cm 重さ6.3g。図上方端部は、欠損。穿孔は、両方向、 全面。磨きによる調整。穿孔部は、補修のためである。	
-3	白 玉	埋没土 49C08	材質 滑石。長さ1.2cm 幅1.2cm 厚さ0.7cm 口径0.3cm 重さ1.9cmg。側面は、磨きによる調整。上下平面 は刃物による調整か。穿孔は、一方向。	
-4	刺 形	埋没土 C	材質 滑石。長さ3.0cm 幅1.6cm 厚さ0.5cm 重さ2.8g。平面及び側面共に、刃物による調整。図右端は、刺 離欠損か。	
1	砥 石	埋没土 03C	材質 流紋岩(砥沢石)。長さ9.8cm 幅3.2cm 厚さ1.7cm 重さ95g。定型砥で、横断面の下方面のみが使用面。 図平面・両側面に成形時のなすたがね痕が残される。主体は、金属。近世以降。	
-1	馬 形 首座？	埋没土 谷地	材質 滑石。長さ2.9cm 幅2.5cm 厚さ1.0cm 重さ7.2g。図上部側面及び、平面一部に刃物による削り調整あ り。裏面、ほぼ中央に、穿孔しようとした跡か。	
-2	馬 形 胴 部	埋没土 谷地	材質 滑石。長さ5.5cm 幅2.9cm 厚さ0.7cm 重さ182g。図上方側面、左端部は、欠損。他は、すべて、刃物 による削り調整。	
-3	勾 玉	埋没土	材質 滑石。長さ2.7cm 幅2.4cm 厚さ0.9cm 重さ8g。図右側面は、刺離欠損。下方端は、欠損。他は、 磨きによる削り調整。穿孔は、一方向。欠損は、整形後か。	
-4	勾 玉	埋没土 各 地	材質 滑石。長さ3.1cm 幅2.4cm 厚さ0.7cm 重さ3.5g。上下端部、欠損。他は、刃物による削り調整。穿孔 部分なし。勾玉の可能性が最も大きい。	
-5	勾 玉	埋没土	材質 滑石。長さ3.2cm 幅1.8cm 厚さ0.6cm 重さ3.6g。下端部、欠損。他は、刃物による削り調整。穿孔部 分なし。勾玉の可能性が最も大きい。	
-6	刺 形	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ4.2cm 幅1.8cm 厚さ0.5cm 重さ5.7g。図上方端部は、欠損。裏面、刺離。他は、すべて、 刃物による削り調整。	
-7	刺 形	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ3.0cm 幅1.5cm 厚さ0.5cm 重さ3.7g。図上方端部は、欠損。他は、すべて、刃物による削り 調整。	
-8	刺 形	埋没土	材質 滑石。長さ3.8cm 幅1.7cm 厚さ0.4cm 重さ3.6g。図上方端部は、欠損。裏面は、刺離。他は、すべて 刃物による削り調整。	
-9	刺 形？	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ2.4cm 幅2.0cm 厚さ1.0cm 重さ8g。図上下端部は、欠損。裏面、両側面は、原石面。図 平面のみ、刃物による削り調整。	
-10	刺 形？	埋没土	材質 滑石。長さ3.2cm 幅1.8cm 厚さ0.7cm 重さ4g。上下端部、右側面下方は、欠損。他は、すべて、刃 物による削り調整。	
-11	有孔円板	埋没土	材質 滑石。長さ3.8cm 幅3.5cm 厚さ0.5cm 口径0.3cm 重さ11g。図下方に一部欠損。他は、すべて、刃物 による削り調整。穿孔は、一方向。	
-12	有孔円板	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ2.6cm 幅1.9cm 厚さ0.6cm 口径0.3cm 重さ3.1g。図下方は半分欠損。他は、すべて、刃 物による削り調整。穿孔は、一方向。	
-13	有孔円板	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ2.3cm 幅1.7cm 厚さ0.5cm 口径0.3cm 重さ2g。表面は、すべて、刺離面。側面は、欠損。 穿孔は、一方向。	
-14	有孔円板	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ3.32cm 幅1.3cm 厚さ0.4cm 重さ2.9g。図左半分、欠損。表面は、刺離面。右側面は、刃物 による削り調整。穿孔は、一方向。穿孔部分の下に、もう一個所、途中でやめた部分あり。	
-15	未 成 品	埋没土 05C14	材質 滑石。長さ3.0cm 幅2.4cm 厚さ0.9cm 重さ8.7g。平面一部に、刃物による削り痕あり。右側面部分に 穿孔痕か。	
-16	未 成 品	埋没土 C 2層	材質 滑石。長さ3.0cm 幅2.5cm 厚さ0.7cm 重さ6g。図上下端部及び左側面は欠損。他は刃物による削り 調整。勾玉の未成品か。	
-17	有孔円板	埋没土 C 2層	材質 滑石。長さ3.22cm 幅1.7cm 厚さ0.4cm 重さ3g。図右側面は、欠損。他は、すべて、刃物による削り 調整。穿孔は一方向。	
-18	白 玉	埋没土 谷 地	材質 滑石。長さ2.0cm 幅1.9cm 厚さ1.2cm 口径0.1cm 重さ6.7g。側面一部、欠損。他の側面は、磨き調 整。上下平面は、刃物による削り調整。穿孔は、両方向。大型の白玉。	

第14節 遺構外出土の遺物

図録	器種名称	出土位置	特	備
2-19	白 玉	埋没土 09C15	材質 滑石、長さ1.8cm 幅1.7cm 厚さ0.9cm 重さ3.3g、形磨り後、部分的に刃物による削り調整。穿孔は一方。	
2-20	白 玉	埋没土 06C15	材質 滑石、長さ1.1cm 幅1.1cm 厚さ0.5cm 孔径0.2cm 重さ0.9g。側面は、磨き調整。上下平面は、削り調整。穿孔は、一方。	
2-21	白 玉	埋没土 09C15	材質 滑石、長さ1.3cm 幅1.2cm 厚さ0.5cm 重さ0.8g。側面は、磨き調整。上下平面は、剥離。穿孔は、一方。管玉を割ったものか。	
2-22	白 玉	埋没土 1C163	材質 滑石、長さ1.1cm 幅0.5cm 厚さ0.7cm 重さ0.4g、半分欠損。側面は、磨き調整。上下平面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方。	
2-23	米 成 品	埋没土 09C15	材質 滑石、長さ4.4cm 幅3.2cm 厚さ1.0cm 重さ24g。図下方側面及び右側面は、刃物による削り調整。他は、原石面。板状に形磨りされている。何を意図したものかは不明。	
2-24	紡 錘 車	埋没土 05C00	材質 滑石、長軸4.1cm 短軸3.3cm 厚さ0.9cm 孔径0.8cm 重さ23g。図上方側面、一部欠損。長軸面、短軸面共に、割離面あり。磨きによる調整か。側面も磨きによる調整。穿孔は、一方。	
2-25	紡 錘 車 破 片?	埋没土 谷地	材質 滑石、長軸(2.8cm) 短軸(2.4cm) 厚さ0.6cm 重さ6.3g。図平面のみ、削りによる調整。他は、割離欠損。穿孔部分は、不明。推定の種類、厚さより、紡錘車と思われる。	
2-26	紡 錘 車	埋没土 1C163	材質 蛇紋石、長軸5.7cm 短軸3.9cm 厚さ1.3cm 重さ47.3g。長軸面、短軸面、側面すべて、磨きによる調整。短軸面の縁辺部一周、敲打された痕あり。穿孔は、一方。	
2-27	紡 錘 車 破 片	埋没土 15C10	材質 蛇紋石、長軸(5.2cm) 短軸(4.0cm) 厚さ1.3cm 重さ21g。長軸面、短軸面、側面すべて、磨きによる調整。穿孔部分は、不明。	
2-28	紡 錘 車 破 片	埋没土	材質 蛇紋石、長軸(5.1cm) 短軸(3.8cm) 厚さ1.3cm 孔径(0.7cm) 重さ17g。使用時に欠損か。長軸面、短軸面、側面すべて、磨きによる調整。穿孔は、一方。	
2-29	紡 錘 車	埋没土 05C12	材質 蛇紋石、長軸(4.3cm) 短軸(3.6cm) 厚さ1.7cm 孔径(0.8cm) 重さ27g。使用時に欠損か。長軸面、短軸面、側面すべて、磨きによる調整。穿孔は、両方。	
2-30	石 核	埋没土 18C19S	材質 滑石、長さ6.2cm 幅6.3cm 厚さ3.2cm 重さ252g。斜線部分は、刀子等で削った跡。刀形に荒磨りしたのち、部分的に刃物によって削ってある。大ききより、紡錘車を意図したものか。	
2-31	石 核	埋没土	材質 滑石、長さ8.1cm 幅4.0cm 厚さ3.0cm 重さ171g。荒磨りした後、刃物によって、部分的に削ってある。何を意図したものかは不明。	
2-32	石 核	埋没土	材質 滑石、長さ5.0cm 幅3.5cm 厚さ1.0cm 重さ23g。一部分削ってある他は、すべて原石面。	
2-33	チ ッ プ	埋没土 10C18	材質 滑石、長さ5.3cm 幅2.4cm 厚さ0.9cm 重さ21g。一部分削ってある他は、すべて原石面。釧か型に削られると思われる刃あり。幅 8mm。	
2-34	敲 打 石	埋没土 05C14	材質 雲母石英片岩、長さ8.9cm 幅3.3cm 厚さ1.2cm 重さ52g。両側面に、敲打時にできた割離痕あり。	
2-35	敲 打 石	埋没土	材質 雲母石英片岩、長さ8.9cm 幅4.6cm 厚さ2.8cm 重さ158g。両側面に、敲打時にできた割離痕あり。	
2-36	工 作 台	埋没土	材質 細粒安山岩、長さ13.5cm 幅9.9cm 厚さ6.6cm 重さ1420g。図下方右側に敲打されてきたと思われる凹み1箇所あり。工作台として利用されたと思われる。	
2-37	砥 石	埋没土 北沢塚部	材質 流紋岩(砥沢石)、長さ6.8cm 幅3.1cm 厚さ2.6cm 重さ107g。定型砥。図平面左側に成形時のノコギリ目跡あり。図中の横方向傷は、刃傷。主体は、金属。ノコギリの目跡から、製作は、近代以降。手持砥。	
2-38	砥 石	埋没土 C2層	材質 流紋岩(砥沢石)、長さ6.8cm 幅3.5cm 厚さ3.2cm 重さ118g。定型砥。両小口に磨痕があり、成形の当初が示される。使用は、両小口を除く。図中の条痕は主に刃傷。手持砥。中世以降か。	
2-39	砥 石	埋没土 02C01	材質 流紋岩(砥沢石)、長さ4.9cm 幅3.6cm 厚さ3.3cm 重さ100g。平面上方は、2次転削のため、円柱状に作り出しがある。定型砥であつたらしく、平面右側面にのらした削り目あり。使用面は、表面、手持砥。	
2-40	砥 石	埋没土 C2層	材質 砂岩、長さ5.4cm 幅4.4cm 厚さ4.7cm 重さ125g。角礫で図平面側のみ研磨面が残される。図中の傷は、ヒケ傷。主体は、金属。	
2-41	砥 石	埋没土 C谷地	材質 砂岩、長さ5.9cm 幅3.6cm 厚さ2.0cm 重さ56g。川原石の利用。平面右側面に例込様の平面面があり、砥石とも思えるが、例込に削りの段差があり、研磨面には見えない。平面中央に金属突込み凹あり。	
2-42	砥 石	埋没土	材質 砂岩、長さ5.2cm 幅2.4cm 厚さ1.4cm 重さ18g。川原石の利用。平面左側に旧時欠損。平面の傷は、刃ならし傷か、または、刃らし痕。その主体は、金属。研磨面不明瞭。	
3-1	砥 石	埋没土	材質 砂岩、長さ3.0cm 幅6.2cm 厚さ3.8cm 重さ180g。川原石の利用。平面中央に金属面によると思われるなだらかな凹みあり。	
3-2	砥 石	埋没土	材質 砂岩、長さ10.6cm 幅6.0cm 厚さ3.3cm 重さ220g。角礫。図平面左側と、手前小口は旧時欠損。右側面と小口は、原石面か。表面が使用され、表に研磨面と太い条痕。裏面に刃ならし痕。主体は、金属。	
4-1	勾 玉	埋没土 4区C	材質 滑石、長さ3.6cm 幅1.8cm 厚さ0.5cm 孔径0.3cm 重さ4.1g。上下平面は、刃物による削り調整。側面、一部削り調整。穿孔は、一方。	
4-2	白 玉	埋没土 4区B	材質 滑石、長さ2.0cm 幅1.3cm 厚さ1.8cm 孔径0.3cm 重さ5.4g。削り後、磨きによる調整。ほぼ中間まで穿孔した時、半分に割れた可能性が大きい。	
4-3	円 板	埋没土	材質 滑石、長さ3.3cm 幅2.1cm 厚さ0.7cm 重さ6.1g。上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨きによる調整。穿孔はなし。一部欠損。	
4-4	有 孔 円 板?	埋没土	材質 滑石、長さ2.8cm 幅2.3cm 厚さ0.8cm 孔径0.5cm 重さ7g。図左側は、欠損。上下平面、側面は、刃物による削り調整。穿孔は、一方。	

第3章 検出された遺構と遺物

図例	器種名称	出土位置	特	徴
4	有孔円板?	埴段土 4区C	材質 滑石。長さ2.7cm 幅1.5cm 厚さ0.8cm 孔径0.5cm 重さ5.7g。形削りした後、穿孔したものとと思われる。表面は、原石面。穿孔は、一方。	
5	白玉	埴段土 4区B	材質 滑石。長さ0.6cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm 孔径0.2cm 重さ0.3g。上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方。	
4	石核	埴段土 4区C	材質 滑石。長さ6.9cm 幅2.6cm 厚さ1.1cm 重さ25g。円平面に、刃傷あり。形状より、削形を意図したと思われる。左端部に刃物による削り痕あり。	
4	石核	埴段土 4区C	材質 滑石。長さ10.3cm 幅5.1cm 厚さ2.5cm 重さ142g。円平面とところどころに刃物による削り痕あり。その他はすべて、原石面。	
4	有孔方板	埴段土 4区C	材質 土。長さ3.0cm 幅1.4cm 厚さ0.6cm 孔径0.6cm 重さ2g。平分に割れている。細粒で灰色磁物、少量混入。焼成は普通で、酸化。鈍い黄褐色をしている。穿孔は、焼成前か。	
4	土玉	埴段土 4区C	材質 土。長さ1.0cm 厚さ0.6cm 孔径0.2cm 重さ0.7g。細粒で、夾雑物なし。酸化、普通。色調は、鈍い赤褐色。穿孔は、焼成前。	
4	こもあし石	埴段土	材質 雲母石夾片岩。長さ9.7cm 幅5.7cm 厚さ2.2cm 重さ100g。図四角面に縦打による割線。紐でしばる時のひっかかりとなる部分か。	
4	凹石	埴段土	材質 牛伏砂岩。長さ10.4cm 幅4.5cm 厚さ2.2cm 重さ120g。川原石の利用。表面と右側部に使用面。表面の中ほどに穴込みの凹みあり。研磨面は凹凸があり、主体は、木や皮などの軟質物質。	
4	凹石	埴段土	材質 牛伏砂岩。長さ10.8cm 幅8.0cm 厚さ2.7cm 重さ195g。川原石の利用。表裏中央に凹みがあり、なにかの突起込みに用いられたらしい。研磨面は、不明。	
4	砥石	埴段土 C	材質 牛伏砂岩。長さ9.4cm 幅10.6cm 厚さ2.0cm 重さ210g。川原石の利用。表裏に使用面あり。裏側の使用は主として刃ならし傷か刃傷。表面には、硬直個所の凸出があり、木など軟質の研磨主体か。	
4	砥石	埴段土 C	材質 砂岩。長さ12.3cm 幅7.1cm 厚さ2.6cm 重さ250g。川原石の利用。表裏に使用面あり。表に金属で削った跡と突き込みの跡。裏には、刃傷あり。	
4	砥石	埴段土 C	材質 角閃石安山岩(二ツ岳軽石)。長さ7.9cm 幅6.3cm 厚さ4.4cm 重さ140g。砥石の利用。図上方小口に原石面あり。手前の割れは旧時。使用は、表裏、左側部にあり。主体は、金属。	
4	砥石	埴段土	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ11.5cm 幅3.2cm 厚さ3.6cm 重さ160g。定型砥。裏の小口は旧時欠損。手前小口、左側部に磨目状のならしがね痕あり。残る面は複雑な使い跡が生じている。手持砥。	
4	砥石	埴段土 B	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ10.5cm 幅2.9cm 厚さ1.7cm 重さ93g。定型砥。手前小口奥小口は旧時欠損。裏・両側面に磨目状のならしがね痕あり。使用は表裏左側部の一部。手持砥。近世以降。	
4	砥石	埴段土	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ7.1cm 幅3.2cm 厚さ2.0cm 重さ67g。定型砥。裏の小口は旧時欠損。手前小口は、成形時の削り痕あり。裏面、両側面に磨目状のならしがね痕あり。主体は金属。手持砥。	
4	砥石	埴段土	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ10.5cm 幅3.1cm 厚さ3.6cm 重さ142g。自然石の角縁の利用砥で、手前小口に原石面。左側部に成形の削り目あり。使用は表面のみ。砥ぎ癖は、右きき。主体は金属。手持砥。	
4	砥石	埴段土	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ4.9cm 幅2.4cm 厚さ1.3cm 重さ23g。手前小口に未使用面あり。奥の小口は、旧時欠損。左側部にわずかならし削り目跡あり。表裏の研磨面は、凹凸があり、研磨主体は、小型の金属。	
4	砥石	埴段土	材質 角閃石安山岩(二ツ岳軽石)。長さ4.7cm 幅3.2cm 厚さ2.7cm 重さ35g。砥石の利用。左側部に原石面あり。裏面上下小口は、旧時欠損。表面の砥ぎ癖は右きき。手持砥。主体は、金属。	
4	石製品	埴段土 4区C	材質 流紋岩(磁沢石)。長さ2.6cm 幅1.7cm 厚さ1.6cm 重さ10g。小型長方形に成形された石製品で、各々削り目跡あり。用途不明。	
5	凹石	埴段土 4区C	材質 牛伏砂岩。長さ11.1cm 幅7.5cm 厚さ2.9cm 重さ300g。表裏面に、金属によると思われる突き込み痕あり。	
5	砥石	埴段土 4区B	材質 牛伏砂岩。長さ9.7cm 幅7.1cm 厚さ1.9cm 重さ205g。円平面に刃傷あり。手持砥。主体は、木・皮。	
不明	白玉	土坑	材質 滑石。長さ1.0cm 幅1.1cm 厚さ0.4cm 重さ0.7g。上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方。管玉状のものを輪切りしたものか。	
不明	白玉	トレンチ	材質 滑石。長さ1.3cm 幅1.3cm 厚さ0.8cm 重さ2.2g。上下平面は、刃物による削り調整。側面は、磨きによる調整。穿孔は、一方。	
不明	斧状 根製品	事務所 敷地内	材質 蛇紋岩。長さ4.0cm 幅3.0cm 厚さ1.0cm 重さ25.6g。全面を磨きによる調整。表面に調整時以後の刃傷あり。穿孔は、一方。	

遺構外出土遺物 鉄器類観察表 (PL.194, 195)

単位cm

図例	器種名称	出土位置	残存状態	特	徴
1	鎌か	埴段土 1区	残存長13.8	有柄尖根錐の中でも、大根に属するとみられる。横断面は上方に鈍い、長方形を呈し、区以下は円形となる。莖部の長い距離で10+cmを測る。	
1	鎌か	埴段土 1区	残存長 3.6	無柄平根錐で破線部分のうち、上方は調査時、下方は旧時欠損である。柄筋は顕著でなく、良鉄を思わせる。	
2	喉口部	埴段土 2区	長さ 8.4 径 1.3 重さ 1.3	銅素材。全体的に、おしつぶされ、ろう付面である。	
2	肩首部	埴段土 2区	径 1.8 重さ 2.6	銅素材。大きな肩首部である程度、時代色を反映している。江戸前期。	

第14節 遺構外出土の遺物

単位cm

図号	器種名称	出土位置	残存状態	特 徴	備 考
2-3	雁首部	埋没土 2区	径 1.5 重さ 2.6		銅素材。大きな雁首部である程度、時代色を反映している。江戸前期。
2-4	刃物	埋没土 2区	残存長 10.0		左右端部は、旧態のまま。錆化は、層状に剥落し、和鉄を思わせる。片側に棟があり、一方が刃部となる。平作り。
2-5	鉄か	埋没土 2区	全長 9.6		図の軸状金具と、軸状の細長い部分と結合していたと思われるが、現状では接合できない。結合したとすれば、正倉院に現存の駒子の関連を思わせる。錆化は不定方向に進み、良鉄を思わせる。軸部は、先端部の両方に半円形の作り出しをもっており、図上方の半円形の右側は刃状に薄くなる。
2-6	刃物か	埋没土 2区	残存長 3.2		錆化の方向性は不定方向で、精鍛造を思わせる。横断面形は、片側が尖り、刃物を思わせる。
2-7	不明	埋没土 2区	残存長 4.3		欠損はなく、旧態のままであるが、異形のため機能は不明である。図上右側に、折り返しが見られるが、刃部に相当する箇所はみとめられない。錆化は、不定方向。
2-8	不明	埋没土 2区	残存長 3.8		欠損はなく、旧態を留める。刃部とみられる箇所は、図上左側にわずかに、それらしき箇所があるため、刃物か。錆化は、不定方向。
2-9	不明	埋没土 2区	残存長 11.9		座金物と、門状の金具2個が、いっしょにとりついた状態で、ゆがんでいる。座金物に本質はみられない。錆化は不定方向に割れ、良鉄を思わせる。錆化の状態は、古代鉄に類似。
2-10	不明	埋没土 2区	残存長 3.9		銅を主体とした合金芯。(横断面形は隅丸三角形を鉄でつつみ込み、棒状にした物体で、用途は不明。錆化は顕著でなく、良鉄を思わせる。きわめて特殊な製品。
4-1	鎌	埋没土 4区	残存長 9.8		大型鎌で、図左側は旧時欠損。右側は調査時欠損。刃部は、表面側を多く研ぎ出し、裏側をわずかに研ぎ込む。錆化は顕著でなく、良鉄。棒形形態と身幅がある点から、奈良・平安産か。
4-2	不明	埋没土 4区	残存長 4.6		強く曲げられた個体で、横断面形は方形を呈し、錆化は、直方向に進行しているため、釘を思わせる。
4-3	鎌	埋没土 4区	残存長 8.0		有柄大型鎌。欠損は調査時。茎と鍔との間に区あり。鍔部は短いため、製作は、奈良・平安時代か。茎部の断面形は、方形を呈する。錆化は不定方向に割れ、やや粗鎌か。
4-4	銅・座金物	埋没土 4区	全長 7.1		地金は鉄主体で、飾り銅の表面に緑青をみるので、銅は、鉄地銅か。錆化の方向性は不定方向で、精鍛造を思わせる。銅釘は突出して裏面に突き出し出ている。古代の産物で高貴か。
4-5	刀子	埋没土 4区	残存長 8.9		先端は、調査時欠損。研削痕の顕著な刀子で、刃区を失い、研ぎ出しの跡は、茎元に至る。極区あり。刃区を失う点から、使用は、平安時代以前か。
4-6	鉄素材	埋没土 4区	最大長 4.9		図表面側は、凹凸があり、部分的に鋳造鉄様の肌があり、裏面はやや平滑。部分的に、しっかりとした地金が遺存する。地金のみえる箇所は割れているため、炭素量の多さを思わせる。
4-7	不明	埋没土 4区	合成長 3.4		同一個体と思われる断片が2つあり、中途は調査時欠損。錆化は不定方向である。横断面形は方形を呈し、茎部片か。
4-8	瓶口部	埋没土 4区	長さ 8.0 径 1.1 重さ 14.1		銅素材。ろう付の接合面あり。上面側にろう座山本を両切形で形成。
5-1	不明	埋没土 5区	残存長 5.8		断面は、隅丸長方形を呈する細長い鉄器で、両小口は調査時欠損。錆化は、不定方向である。割れ口に、中空部があり、粗鍛造を思わせる。
5-2	刃物	埋没土 5区	残存長 7.5		錆化は不定方向に割れ、精鍛造を思わせる。剣落が顕著で、それは調査時の欠損、図の下方は旧態を留める。片側に刃部あり。時代不詳。
不明	胡鈴車か	不明	径 4.4		紡錘車の門部に類似するが、小型である。中央に丸い連りあり。片面に彫刻、板状の個体がゆがんで着いている。錆化は、方向性なく膨れる。銅製の個体の種は不明。
1	銭貨	2区10C 15	径 2.5 厚 0.15 孔 0.6×0.6		材質 銅。嘉定通宝。南宋・寧宗(1208)。10枚塚着のうちの1枚。裏面に、「+」がある。縁辺部に緑青付着。
2	銭貨	2区10C 15	径 2.35 厚 0.15 孔 0.65×0.65		材質 銅。元豊通宝。宋・神宗(1078)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。
3	銭貨	2区10C 15	径 2.5 厚 0.1 孔 0.6×0.6		材質 銅。祥符元宝。宋・真宗(1008)。10枚塚着のうちの1枚で最も外側のもの。文字面に全面、緑青が付着。
4	銭貨	2区10C 15	径 2.45 厚 0.15 孔 0.65×0.65		材質 銅。聖宋元宝。宋・徽宗(1101)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。横にひずんだ円形をしている。
5	銭貨	2区10C 15	径 2.45 厚 0.15 孔 0.7×0.7		材質 銅。元豊通宝。宋・神宗。(1078)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。
6	銭貨	2区10C 15	径 2.45 厚 0.15 孔 0.7×0.7		材質 銅。元豊通宝。宋・神宗。(1078)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。「宝」の字の下に、小穴あり。
7	銭貨	2区10C 15	径 2.45 厚 0.15 孔 0.6×0.6		材質 銅。聖宋元宝。宋・徽宗。(1101)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。特に上部に多く付着。
8	銭貨	2区10C 15	径 2.45 厚 0.15 孔 0.7×0.7		材質 銅。元祐通宝。宋・哲宗。(1186)。10枚塚着のうちの1枚。縁辺部に緑青付着。

第3章 検出された遺構と遺物

単位:cm

図録	器種名称	出土位置	残存状態	特 徴	備 考
9	鉄 貨	2区10C	径 2.40 厚 0.15 孔 0.7×0.7	材質 銅。新寧元宝。宋・神宗。(1068)。10枚検出のうち1枚。縁部に緑青付着。特に上部に多く付着。	
10	鉄 貨	2区10C	径 2.30 厚 0.1 孔 0.65×0.65	材質 銅。聖宋元宝。宋・徽宗。(1101)。10枚検出のうち1枚で、最も外側のもの。裏面と縁部に緑青付着。	
11	鉄 貨	2区90C	径 2.35 厚 0.15 孔 0.65×0.65	材質 銅。新寧元宝。宋・神宗。(1068)。裏面は、摩耗して、ほぼ平坦。部分的に緑青付着。	
12	鉄 貨	2区 埋没土	径 2.50 厚 0.15 孔 0.7×0.7	材質 銅。皇宋通宝。宋・仁宗。(1039)。裏面は、摩耗して、ほぼ平坦。裏面縁部と表面部分的に緑青が付着。	
13	鉄 貨	109住 埋没土	径 2.45 厚 0.1 孔 0.7×0.7	材質 銅。寛永通宝。江戸。平分に割れていいる。表面全体に緑青が付着。	
14	鉄 貨	2区C 埋没土	径 2.65 厚 0.1 孔 0.65×0.65	材質 銅。文久元宝。江戸。裏面に背面改換痕あり。全体に薄く緑青付着。	
15	鉄 貨	2区B 埋没土	径 2.25 厚 0.1 孔 0.65×0.65	材質 銅。寛永通宝。江戸。径が、非常に小さい。全体に薄く緑青付着。	
16	鉄 貨	89住 埋没土	径 2.25 厚 0.1 孔 0.6×0.6	材質 銅。寛永通宝。江戸。径が、非常に小さい。「宝」の文字の上部に小穴あり。全体に薄く緑青が付着。	
17	鉄 貨	4区C 埋没土	径 2.30 厚 0.1 孔 0.7×0.7	材質 銅。寛永通宝。江戸。全体に薄く緑青が付着。	
18	鉄 貨	4区C 埋没土	径 2.40 厚 0.1 孔 0.6×0.6	材質 銅。寛永通宝。江戸。全体に薄く緑青が付着。	
19	鉄 貨	4区C 埋没土	径 2.35 厚 0.1 孔 0.65×0.65	材質 銅。全体に緑青が付着し、腐食しており、文字の判読が困難であるが、「寛永通宝」か。	
20	鉄 貨	6住 埋没土	径 2.45 厚 0.1 孔 0.55×0.55	材質 銅。寛永通宝。江戸。全体に緑青が付着。	
21	鉄 貨	5区C	径 2.30 厚 0.15 孔 0.65×0.65	材質 銅。洪武通宝。明・太祖。(1368)。裏面に、「光」か?。全体に緑青が付着して、判読しにくい。	

陶磁器出土遺物観察表 (PL.196、197、198)

単位:cm

図録	器形	出土位置	量 目 残存状態	特 徴	備 考
1	陶 器	1区水田	口10.6 高2.2 底4.8 口縁~底部片	外面体部下平を除いて、鉄軸がほどこされる。体部外面下方~底面にかけて、回転痕残りとなされる。	不評 18~19C
2	陶 器	埋没土 大皿	口一 高一 底(17.8) 口縁~底部片	高台外面と、底面の一部は露胎となる。長石軸を主体とするが、内面に、鉄軸がほどこされ、さらに、トチン痕あり。	不評 18C
3	陶 器	埋没土 小碗	口一 高一 底4.2 底部片	内面に長石軸。外面は、高台端部を除き、鉄軸がほどこされる。そのため、損分か。	美濃 18~18C
4	陶 器	埋没土 皿	口(19.0) 高1.5 底(6.4) 口縁~底部片	高台端部と、高台内側ぎわに目跡を残し、志野釉にちかい長石軸が、ほどこされる。削り出し高台。	美濃 17C
5	陶 器	埋没土 香炉	口(9.2) 高一 底一 口縁~体部片	内面下方を除いて、施胎(暗褐色釉)がほどこされ、外面側に刷毛による、浅い波状の施胎あり。	唐津系 17C
6	陶 器	埋没土 皿	口(11.8) 高2.2 底(7.0) 口縁~底部片	高台端部と、高台内側ぎわに目跡を残し、志野釉にちかい長石軸が、ほどこされてる。削り出し高台。	美濃 17C
7	陶 器	埋没土 鉢	口一 高一 底一 口縁部片	口縁部は大きな玉縁となり、その曲率から、一尺鉢と考えられる。内外共、長石軸が施胎される。	不評 18~19C
8	陶 器	埋没土 碗	口一 高一 底(4.5) 体部~底部片	内面に、呂洞によるこんやく柄、外面に開線あり。高台端部を除き、白磁軸がほどこされる。	伊万里系 18C
9	陶 器	埋没土 香炉	口一 高一 底一 底部片	内面に、鉛軸がほどこされ、外面は露胎となる。胴部一部の残存。	瀬戸・美濃 18C
10	陶 器	埋没土 香炉	口一 高一 底(10.4) 体部~底部片	体部外面に、淡い鉛軸がほどこされ、さらに、菊花様の割文がほどこされる。内面は露胎となる。胴の一部残存。	瀬戸・美濃 18C前半
11	陶 器	埋没土 碗	口一 高一 底一 口縁部片	陶胎の染付碗で外面に沈んだ青色を呈する絵付があり、内・外面に、白土掛けがなされ、さらに透明釉がほどこされる。	唐津系 18C
12	陶 器	埋没土 皿	口(12.0) 高3.3 底4.3 口縁~底部片	内面に、緑色釉を用い、蛇目とし、外面上平に灰軸をほどこす。	唐津系 18C前半
13	陶 器	埋没土 皿?	口(12.8) 高一 底一 口縁片	内・外面に、衝軸がほどこされる。外面に、工具によるロクロ目あり。	瀬戸・美濃 18C
14	陶 器	埋没土 摺鉢	口一 高一 底(10.6) 底部片	内面と外面に、暗い色調の錆軸がほどこされ、外面下平と底面の軸は、拭かれる。底面、永切り。内面に、12+α条のおろし目あり。	瀬戸・美濃 17~18C
15	陶 器	埋没土 片	口一 高一 底一 口縁部片	片口の一部が残存。内面に鉛軸がほどこされ、口縁部は肥厚する。外面下平に部分的に露胎あり。	瀬戸・美濃 18C

第14節 遺構外出土の遺物

単位mm

種別	器形	出土位置	景観 残存状態	特 徴	備 考
16	陶器 鉢	埋没土 4区C	口一 高一 底一 口縁部	口折れの尺皿片と考えられ、内面に、印文白土掛象嵌があり、内・外面に、透明釉がほどこされる。	唐津系 17C
17	磁器 埋没土 3区B	口(10.0) 高(5.0) 底(4.0) 体部～底部		外面に、梅花文が染付される。高台端部を除き、白磁釉がほどこされる。	唐津系 18C後半
18	磁器 埋没土 2区C	口(8.9) 高(4.7) 底(3.1) 口縁～底部		外面に、草花文様の染付あり。高台端部を除き、白磁釉がほどこされる。底面に鉛線の染付文があるが、判読不明。	伊万里系 18C後半
19	陶器 埋没土 4区B	口113.3 高2.2 底6.2 口縁～底部		内面に重ねねまきの痕跡あり。外面体部上半に、桜掛の釉境あり。高台は削り出し。	瀬戸・美濃 17C
20	陶器 埋没土 香炉 4区C	口(9.9) 高一 底一 口縁部片		体部外面上半に鉄釉がほどこされる。体部下半は露胎となる。内・外面に、ロクロ目あり。	瀬戸・美濃 18C
21	陶器 埋没土 蓋 0区C	口一 高一 底一 体部～底部片		蓋し蓋状の蓋で、調が付される。天井側外面に、鉄釉と透明釉が、ほどこされる。	瀬戸・美濃 18C
22	陶器 埋没土東 皿 3号道跡	口一 高一 底一 体部下片		口折山の尺皿片と考えられ、内面に鉄絵あり。内・外面に、長石釉が、ほどこされる。内面に目跡あり。	唐津系 17～18C
23	陶器 埋没土 皿 23号住	口(14.0) 高3.0 底一 口縁～底部片		釉反皿片。体部外面下半を除き、鉄釉がほどこされる。高台は、削り出し。	瀬戸・美濃 17C
24	陶器 埋没土 皿 4区C	口(13.5) 高一 底一 口縁部片		体部外面、下半を除き、志野風の長石釉がほどこされる。細貫入あり。	美濃 17C
25	陶器 埋没土 碗 4区C	口一 高一 底5.7 底部片		二次的な円形加工品。内面に鉛釉がほどこされ、他は露胎となる。	瀬戸・美濃 17～18C
26	磁器 埋没土 碗 4区C	口一 高一 底一 口縁部片		内・外面に、乳白濁した青磁釉がほどこされる。口縁部は紫口となる。	伊万里系 17～18C
27	陶器 埋没土 碗 3区	口一 高一 底6.3 底部片		二次的な円形加工品。内面に、総の目で緑色釉がほどこされ、外面の高台まで、鉄釉に似た長石釉がほどこされる。	唐津系 17C
28	磁器 埋没土 小碗 4区C	口一 高一 底(5.0) 体部～底部		体部外面に、染付施文あり。高台端部を除き、白磁釉がほどこされる。	伊万里系 18C
29	陶器 埋没土 片口 113住	口(20.2) 高一 底一 口縁部片		内・外面に、鉄釉に似た長石釉がほどこされる。外面口縁部に、洗線1条あり。	製作地不詳 18C
30	陶器 埋没土 皿 4区C	口(12.0) 高一 底一 口縁部片		外面体部下半を除き、鉄釉がほどこされる。外面体部下半に、回転彫り目あり。	瀬戸・美濃 17C
31	磁器 埋没土 罌口 2区B	口5.0 高1.5 底1.9 口縁～底片		型物の白磁皿で、外面体部下半が露胎となる。外面に細かい銅彫あり。	伊万里系 17C中
32	軟質陶 器盤状	埋没土 5区B	口一 高一 底一 口縁部片	内面に耳が付され、内耳となる。耳下の屈曲が少なく、盤状と考えられる。外面にわずかな漆がかかる。	在地製 16～17C
33	磁器 碗	1区水田 表土	口一 高一 底一 体部片	青磁釉が、内・外面にほどこされ、貫入あり。釉は薄く、発色は洗みがちで良くない。	龍泉窯系 13C
34	磁器 埋没土 碗 2区B	口一 高一 底一 底部片		高台周辺を除き、青磁釉がほどこされる。体部外面下方に、わずかながら、銅手蓮弁文あり。発色は、沈んだオリーブ色。	龍泉窯系 13C
35	磁器 埋没土 碗 1区B	口一 高一 底一 体部片		内面に割花文あり。外面に雲漢文あり。外面下方を除き、オリーブ色の青磁釉がほどこされる。	龍泉窯系 13C

第4章 成果と問題点

第1節 出土遺物について

(1) 出土土器について

本遺跡から出土した土器は古墳時代から平安時代まで亘っており、これらを分類すると凡そ12の時期に分けられる。以下に、年代順にその特色を述べる。

第1期

器種は土師器壺・台付壺・壺・片口・高坏・器台。壺の67-1は器壁が厚く大型であり、肩部に細かい縄文が施文されている。しかし、小型の壺(67-3)はやや扁平な球体の胴部にくの字形に外反する口縁が付く。形態で無文ある外面上半部から口縁部内面にかけては丹塗彩。片口鉢(67-2)は平底の底部から立ち上がる胴部は中央部で最も膨れ、口縁に小さな口が付く。高坏(63-1)は脚部を欠損するが、坏部は研磨された丹塗彩の薄手の口縁部が内湾しながらラッパ状に開く形態である。器台(63-4~6)も器受部を欠損するが、台部は廣で研磨されている。台部はやや外反気味で円形の透孔を有る。

以上のように本期は樽式的な特徴を残す^{注1}古式土師器の段階にあるが、胎土・焼成の面から非在地的な感じを有する土器も含まれる。

第II期

器種は土師器長壺・壺・小型壺・小型壺・甗・坏・高坏、須恵器壺である。

長壺(53-4他)は胴の中央部がかなり膨らんでおり、くの字形に強く外反する口縁が付く。壺(6-3・6他)は平底を有する球体の胴部にあまり外反しない口縁が付く。小型壺(53-7他)は平底で、上半部にやや膨らみをもつ胴部に外反する口縁が付く形態である。小型壺(53-6他)は、胴部は小型壺と殆ど同じであるが頸部が著しくつぼまっている。甗は大型と小型の2種類があり、大型(53-8)はやや膨らみのある胴部に外反する口縁が付き、かなり大きな孔を有するが、小型(6-11)はやや膨らみのある胴部に短く外反する口縁が付き、底部に小孔を1個有する形態である。以上の土器は全て共

小林 敏夫

通した整形技法で胴部外面は寛削り、口へ胴部内面は撫でによっている。坏は3種類ある。即ち、浅い鉢形(53-16・17)のもの、丸底で内湾する体部に内斜する口縁が付くもの(53-23・24)と所謂須恵器坏蓋を模倣した稜段のあるもの(53-26~28)である。高坏は脚部は欠損のため不明確であるが、坏部は2種類あることが判明した。一つ(53-18)は模倣坏に類似のもの、一つ(53-19)はほぼ直線的にラッパ状に口縁が開く形態のものである。須恵器壺(53-29)は重厚な造りの口唇部をもち、頸部には波状文、沈線文、肩部には格子目引き文が施されている。

以上の土器群は鬼高I期後半の特徴を備えている。

第III期

器種は土師器長壺・壺・小型壺・小型壺・甗・坏、須恵器坏であり、II期と殆ど同じである^{注2}。

長壺(66-1・2)はII期と同様な造りであるが、胴の膨らみがやや小さくなっているところに違いが見られる。壺、小型壺・壺はII期と殆ど同様である。甗(66-5、17-9他)は大型と小型の2種類があるが、大型のはI期に比べて胴部に膨らみが少なくなっている。坏は3種類(1~3類)ある。1類(66-9~13、17-11~14、16-7~9)は須恵器坏蓋を模倣したもので、大小はあるが全体的にはI期に比べて短い口縁を付する形態となっている。2類(17-16・19・23)は須恵器有蓋坏の身部を模倣したもので短い口縁が直立か、内傾している形態である。3類(17-15・22・24・25)はラッパ状に開く口縁が付するもので稜段が無い形態であり、ものによっては内面に放射状の暗文がある。須恵器坏(17-27)は比較的深く、尖り気味の底部から続く体部に内傾しながら直線的に延びる口縁が付く形態である。

以上の土器群は鬼高Ⅱ期の特徴を備えている。

第Ⅳ期

器種は土師器長甕・小型甕・小型壺・甔・鉢・坏
須恵器短頸甕である。

長甕(34-1他)はいっそう胴の膨らみが無くなり、円筒型に近くなってきている。小型甕(74-3他)、小型壺(34-4他)は然程大きな変化はないが、Ⅲ期に比すれば底部に丸底気味のものが増加し、口縁が短く、開きが少なくなっている。甔(72-3)はⅢ期と殆ど変わりが無い。鉢(34-3、74-9)はこの時期になって初めて明確に登場してくる。しかし、Ⅲ期にも坏の大型のもの(66-8)があり、これを鉢と捉えられないでもない。本期の鉢は半球形の体部に大きくラック状に開く口縁が付く形態である。坏は3種類ある。即ち、1類(74-10)は体部が著しく深い。2類(34-6、74-9・12・14・15・17・18)はⅢ期の1類と殆ど同じ形態。3類(74-11・13・16、73-6~9、72-4)は口縁が短く、底が浅いため全体的に浅い形態である。須恵器短頸甕(73-10・11)は胴の張った扁球体の胴部に短くやや外反する口縁が付する形態である。

第Ⅴ期

器種は土師器長甕・小型甕・坏・高坏・手捏ね、
須恵器小型壺である。

長甕(59-1他)はⅣ期に比して更に胴部の膨らみがこけ、底部が丸くなるが、大きさに変化はない。小型甕(59-5他)は然程変化はないが、底部は丸底になってきている。坏は3種類ある。即ち、1類(59-9)はⅣ期に見られたのと同じ形態である。2類(59-7・8、16-14~18他)はⅣ期まで主流であった稜段のある模倣坏が萎小化したものである。3類(16-19~22・26・27・33・35・37・38)は短い口縁部が内傾し、底部が丸底になっている形態である高坏(16-40他)は内面に放射状の暗文がある盤状の肩部に張りの弱い、短い脚が付く形態である。手捏ね(16-12・13)は2種類見られる。一つは丸底で口縁が内傾する形態であり、一つは厚い平底から薄い口縁が直線的に立ち上がる形態であ

る。須恵器短頸甕(16-46)は胴の強く張った扁球体の胴部にやや外反する口縁が付く形態である。

以上は鬼高Ⅲ期と真間期が混在する土器群である。

第Ⅵ期

器種は土師器長甕・壺・小型甕・脚付甕・鉢・坏、
須恵器坏・蓋・盤である。

長甕はⅤ期と殆ど同形態のもの(87-1・2)と薄い器壁でやや胴に丸味を帯びた形態のもの(113-1・2)の2種類がある。後者はⅥ期の後半段階に出現するものと思われる。壺(87-3)は丸底の胴下半部のみ残存するがⅥ期に初出ではない。小型甕(87-4、113-7・10)は丸底で短い口縁が直立するものとの字形に強く外反する口縁を付するものの2種類がある。脚付甕(113-6他)はハの字形に大きく開く脚部に小型甕がのる形態であり、本期に初めて出現してくる器種である。鉢(113-8)は楕円状を呈するもので深い。坏は3種類ある。即ち1類(87-5~8、113-16)はⅤ期3類と同様なものである。2類(87-9、113-21)はかなり大型で口縁が外傾し、ものによっては内面に放射状の暗文が付く。3類(113-11~14)は平底になり、口縁がほぼ直立している形態である。須恵器坏(133-33・34)は口径に比べて底径が大きく浅いもので、短くて小さい高台が付く。蓋(113-30~32)は、大小があるがいずれにもかえりが付くものである。盤(113-28)は破片のため脚が付くものかどうかは明らかでないが、あまり大型品ではない。

以上の土器群には土師器、須恵器共に器種が多くなり、須恵器の量もⅤ期に比べると俄然増加してくるという特色が見られる。

第Ⅶ期

器種は土師器長甕・壺・小型甕・甔・脚付甕・鉢・坏、
須恵器坏・蓋・碗である。

長甕(131-1・4他)は全体的にはⅥ期の後半で出現したものに酷似するが、後半ではやや薄手になり、頸基部が立ってきて口唇部近くの部分が外反する形態に変わってきている。壺(131-2・3他)は

第4章 成果と問題点

くの字形に強く外反する短い口縁が付くものでかなり大型である。小型甕(131-8)はくの字形に外反する口縁をもつもので胴部は球体となっている。甕(118-1)はやや膨らみのある厚手の胴部に強くくの字形に外反する口縁が付く形態である。脚付甕(131-6・9)は胴下部と脚部を欠損するが、VII期と殆ど同じ形態とみられる。鉢(118-18)は平に近い丸底から立ち上がって内湾する体部に内傾する口縁が付するものであまり大型品ではない。環は3種類ある。1類(118-6・8・13)は比較的深い形態。2類(131-13~15・17)は丸底で浅い形態。3類(118-11~15)は平底で浅い形態で大部分のものに放射状の暗文が施されている。須恵器環(131-21・16、118-20他)は口径の大きいものや小さいものなど様々であるが、全体的には118-21のように口径に対する底径の割合が大きいものが多い傾向にある。なお、底部は回転削りが行われている。蓋(118-23他)は1例のみかえりを欠くが他は全てかえりを有する。口縁端部にやや平坦面が現出しており、かえりに形態化の様相が窺える。罎(118-28)は四角形の透孔をもつ脚の付いた円面罎である。

以上の土器群はVI期に比べて器形の変化はあまりないが、須恵器の量はかなり多くなっている。

第VIII期

器種は土師器長甕・環のみである。当然他にも器種はあるであろうが、本期の住居軒数が少なく遺存状態の悪いものばかりであったために少ない提示になってしまった。

長甕(121-1)は口縁部の中ほどがくびれ、コの字形化の萌芽を見せている。肩部はやや張っている。環は2種類ある。1類(111-6~8)は平底の底部からやや内湾しながらあまり開かず立ち上がる口縁を付する形態である。2類(111-9)は強く外傾する口縁が付く形態である。

第IX期

器種は土師器長甕・脚付甕、須恵器環・壺・甕。長甕(98-1他)は口縁が明瞭なコの字形となり、胴部上半に膨らみが出てきている。脚付甕(98-9)

はVII期に出現を見るが、その時の形態とあまり差がない。須恵器(98-15~20)はVIII期のものに比べて底径の割合が小さくなり、口縁部の開きがやや大きくなっている。底部は回転糸切りの末調整である。壺(98-11~13)は、回転糸切り底にしっかりした造りの高台を有する底部にあまり開かない体・口縁部が付く形態でかなり深い。甕(98-10)は口縁を欠損するため形態は不明だが、肩部外面には平行叩き文が施されている。

この時期になると須恵器の量が土師器の量をはるかに上まわる。

第X期

器種は土師器長甕・小型甕・環、須恵器環・壺・皿・羽釜・甕である。

長甕は前半(69-1他)では器壁が薄く定形化したコの字形となり、胴上部が最大径となっているが、後半(8-1)では器壁が厚くなり、胴部が球体化してくる。小型甕(69-15・16)は脚付甕の上半部とも見られるが、長甕を小型化した形態になっている。環(69-19・20)は平底で直立又は外反する口縁を有する形態で、体部は削りによって整形されている。須恵器環(69-28・32他)は口径に対する底径の割合がIX期よりも更に小さくなり、体・口縁部の開きが大きくなる。壺(69-23、38-4他)はIX期に比べて底径が小さくなり、横断面が四角形のしっかりした造りの高台が付いている。体部が内湾、口縁部がやや外反しているものが最も多い。焼成面から見ると酸化焙焼による土師器質のものが多く見うけられる。皿(69-35他)は本遺跡ではX期に初めて登場してくる。あまり反りのない口縁をもつもので、全体的に浅い。羽釜(8-3)はX期の後半に登場する。内傾する口縁に断面三角形の上向き加減の厚い鈿が付く。甕(69-21)は平底、長胴で口がラッパ状に大きく開く状態で、内外面無文である。

第Ⅹ期

器種は須恵器羽釜・坏・埴・甕、灰釉皿である。羽釜は2種類見られる。1類(93-3~6他)は上半部が張った胴部に内傾する重厚な口縁が付き、断面三角形の罫が回る形態である。2類(2-2・8)は膨らみのない胴部に筒素な造りの口縁が直立して付く形態であるが、罫は殆ど変わりがない。この時期が羽釜の全盛期である。坏は前半(93-17・22他)ではX期とあまり変わりがないが、後半(2-16・18)では底部を幾分突出させて台状になっている点に特徴がある。深さは全体的にX期よりも深くなっている。埴(2-14・15)は高台が著しく延びた所謂足高高台の形態に大きく変化している。甕(93-1)は胴下半部に寛削りが入るが、形態はX期と殆ど同じである。灰釉皿(93-25・26)は三日月形の高台で、口縁部が内湾気味に開く形態である。

第Ⅺ期

器種は須恵器羽釜・坏・埴、土師器土釜・皿。羽釜(99-4)は膨らみのない胴部に直立した口縁が付き、形骸化した罫が回る形態である。坏(99-5、97-2)は浅くなり、底部は糸切り末調整で台状の突出が見られる。埴(125-1)は高い平底の台が付く。土師器土釜(99-1~3)は胴部上半が膨らみ、くの字形に外反する口縁を付ける。整形は篋削りによる所が多い。皿(97-5・6、125-2)は糸切り底に短くて外反する口縁が付き、小型である。

以上、各時期の特徴について述べた。次にこれらの実年代について考えてみたい。

第Ⅰ期は弥生時代から古墳時代初頭への過渡期の頃と考えられるもので4世紀初頭頃と思われる。

第Ⅱ期は既に述べたように鬼高Ⅰ期の後半段階の特徴をもっており、6世紀前半とみられる。

第Ⅲ期は鬼高Ⅱ期の特徴をもつものである。これまでの研究成果や共伴する須恵器有蓋坏が陶邑編年のMT85型式に比定されることから6世紀後半と推定される。

第Ⅳ期は鬼高Ⅱ期の後半的な特徴を示しており、共伴する須恵器短頸壺がT K46型式に比定できること、また、飛鳥Ⅰ~Ⅱ期の中間的位置と考えられる畿内産土師器坏を出土する上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡J区第14号住居跡の一括遺物に酷似していることから7世紀前半と考えられる。

第Ⅴ期は共伴する須恵器短頸壺がT K48型式に比定されることから7世紀後半と考えられる。

第Ⅵ期は大久保A遺跡出土土器Ⅱ-A類型に大部分が重なることから8世紀前半と考えられる。

第Ⅶ期後半段階の118号住居出土の坏類は9世紀初頭と考えられる松井田町愛宕山遺跡第4号住居跡出土の坏より若干先行する様相が窺えることからⅦ期全体としては8世紀後半と考えられる。

第Ⅷ期は決め手を欠くが、前後の関係から9世紀前半とみられる。

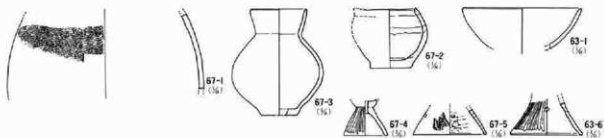
第Ⅸ期の埴の中には高崎市観音山古墳周堀内に検出された墓塚より出土した埴に類似したものがあることから9世紀後半とみられる。

第Ⅹ期は実年代を知る手掛りはないが、前後の関係から10世紀前半とみられる。

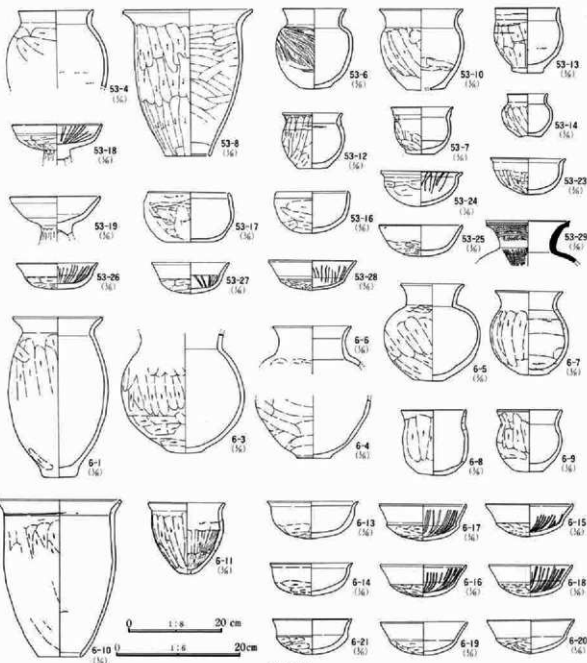
第Ⅺ期は2号住居跡の覆土上部に浅間山B軽石(1108年)の純層がレンズ状に堆積していること、93号住居出土の灰釉陶器が虎渓山1号窯式に類似することを考慮すると10世紀後半と推定できる。

第Ⅻ期は実年代を知る手掛りはないが、前期との関係から11世紀と推定される。

- 註1 第Ⅰ期の土器については春山芳幸氏の御教示を得た。
 2 高坏はまだ存在すると思われるが、提示した遺構の資料中には見当たらなかった。
 3 「特集・火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』No.157 ニューサイエンス社 昭和54年
 4 田辺四三 「須恵器大成」 角川書店 昭和58年
 5 前掲書3
 6 板岡正信 「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土畿内産土師器」『群馬文化』No.218 群馬県地域文化研究協議会 平成元年4月
 7 前掲書3
 8 小林敏夫 「出土土器の編年」『大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡』吉岡村教育委員会 昭和61年



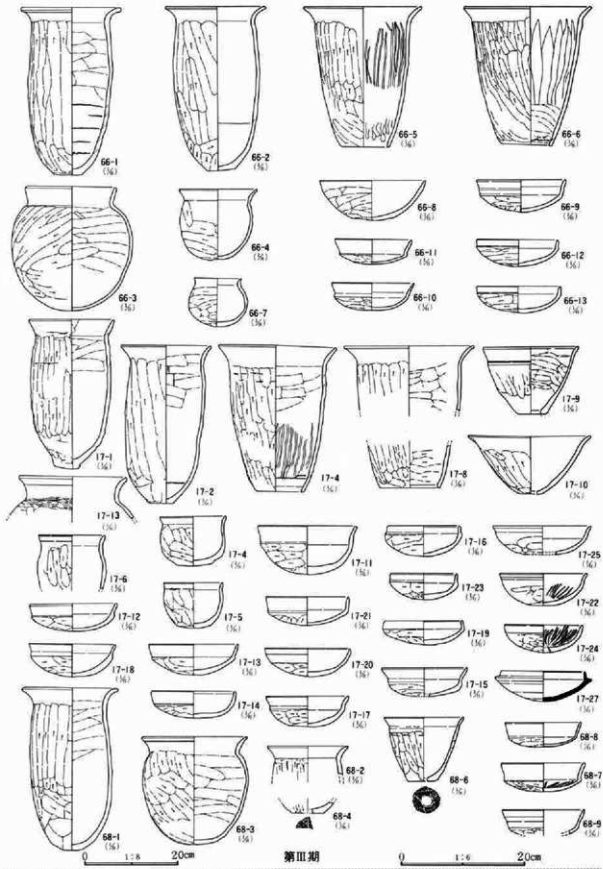
第I期



第II期

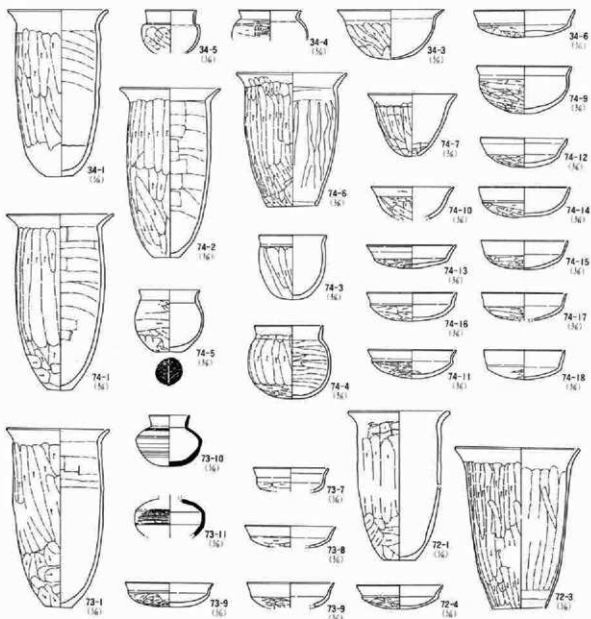
第481回 出土土器分類図(1)

第1節 出土遺物について

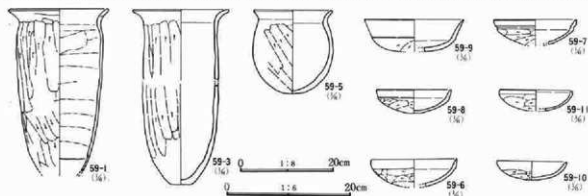


第482図 出土土器分類図(2)

第4章 成果と問題点



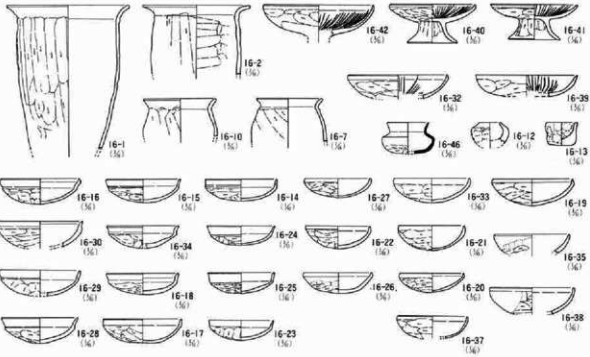
第IV期



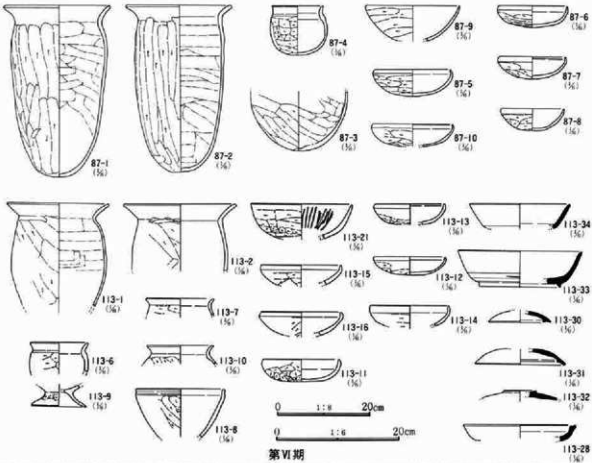
第V期(1)

第483図 出土土器分類図(3)

第1節 出土遺物について



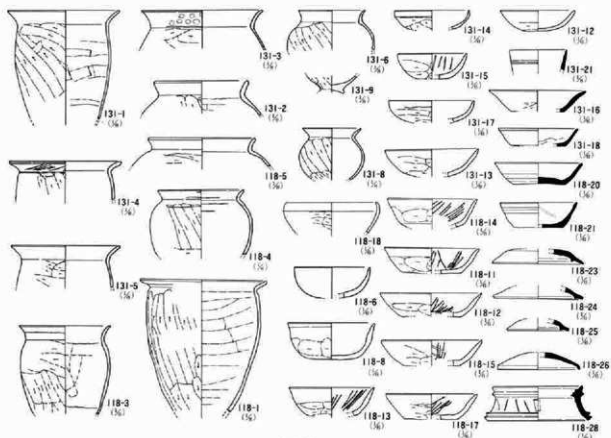
第V期 (2)



第VI期

第484図 出土土器分類図 (4)

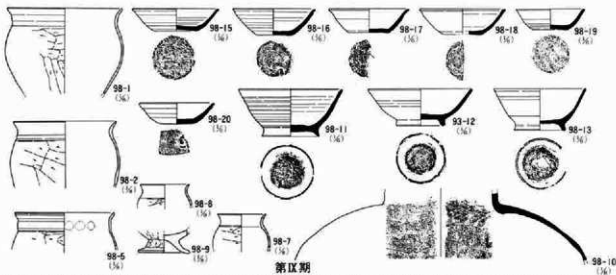
第4章 成果と問題点



第Ⅳ期

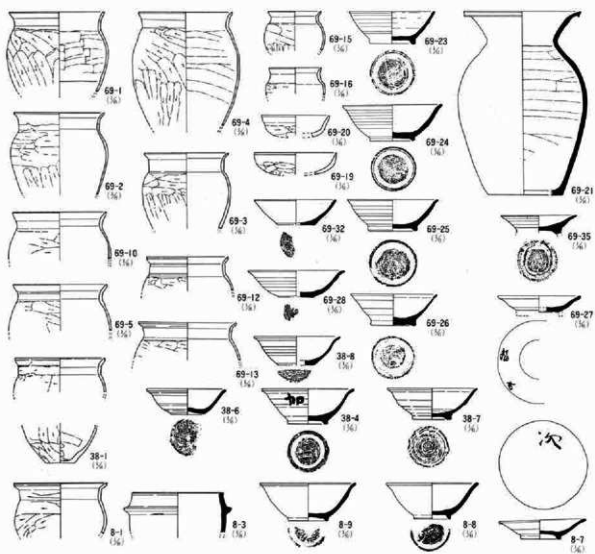


第Ⅴ期

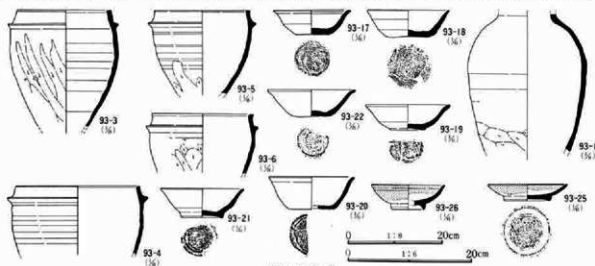


第Ⅵ期

第485図 出土土器分類図(5)



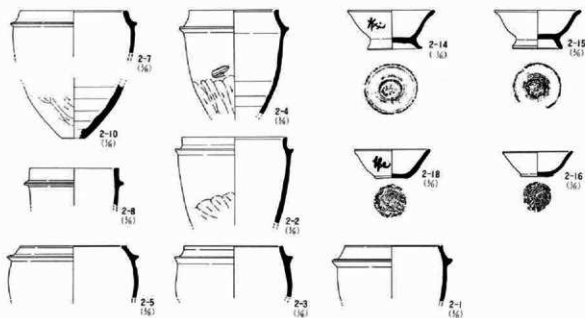
第V期



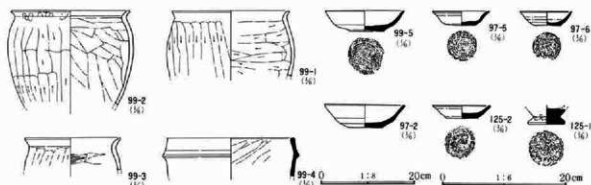
第XI期 (1)

第486図 出土土器分類図 (6)

第4章 成果と問題点



第五期 (2)



第六期

第487図 出土土器分類図(7)

- 9 松島栄治 「愛宕山遺跡」『群馬県史資料編』2 群馬県昭和61年
- 小林敏夫 「群馬県出土の腰帯具について」『群馬の考古学』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和63年
- この論文で袴帯から石帯に変わるのが延暦15年(796)から弘仁1年(810)の頃であることから、袴帯具と石帯具を共存する愛宕山4号住居跡の年代は8世紀末～9世紀初頭であると推論した。
- 10 能登 健編 『史跡 観音山古墳』群馬県教育委員会 昭和57年
- 11 三浦京子 「群馬県における平安時代後期の土器様相—灰胎陶器を中心として」『群馬の考古学』朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和63年

参考文献

- ・坂口 一 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年—共存関係による土器型式組列の検討—」『研究紀要』4 朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和62年
- ・坂口 一 「奈良・平安時代の土器の編年—住居の重視と共存関係による土器型式組列の検討—」『群馬県史研究』24 群馬県 昭和61年
- ・浅木由行 「群馬県における鬼瓦式土器の編年」『群馬考古通信』第9号 群馬県考古学談話会 昭和59年

(2) 出土の文字資料について

本遺跡からは、第19表にあげた通り、墨書土器9点、紡錘車に線刻してあるもの2点、須恵器台付甕の底部に線刻してあるもの1点の計12点が出土している。

この内、墨書土器は、土器編年より住居跡出土のものはもちろん、2区グリッド出土のものも、すべて、9世紀後半から10世紀にかけての平安時代に含まれるものである。5は、3文字が書かれており、第1字の「(横)」と第3字の「家」の間の第2字の部分は書かれた後、意識的に削ってあり、第3字にあたかも書き直したように受け取れる。さらに9は、「田5」で、これと同じものに、前橋市柳久保遺跡群中鶴谷遺跡⁽¹⁾の住居跡や井戸跡・土坑から出土した、一連の「田部」・「田5」などの出土例がある。柳久保遺跡の時期は、奈良時代から平安時代への移行期とされており、本遺跡のものは、器形からそれよりおよそ1世紀ほど新しいものと考えられる。関口功一氏は、「[矢田遺跡]とその周辺⁽²⁾」の中で、柳久保遺跡群の墨書土器にふれて「現状ではひとつの可能性を示すに過ぎないかもしれないが」と前置きしながらも「8世紀以降にも前代の地域支配組織の承譜を引くような組織が、あの種の地域に限っては残存していたということがいいうるであろう。」としている。本遺跡では、1点のみで、しかも10世紀代の

鹿沼栄輔

ものと考えられることから、関口氏の論への結び付きは弱いと考えられるが、可能性もあるのではないだろうか。

また、紡錘車に線刻してあるものは、共に8世紀後半の住居跡から出土している。そのうち、10は、短軸面に3文字あるが、判読できない。下軸牛状遺跡8号住居跡出土の鬼高期前葉の土器器高環に描かれた線刻文字らしきものとよく似ており、なにか呪術的雰囲気を感じ出している。11には、線刻で「山」と書かれており、これは、12と相通じるものがあるのか。

本遺跡出土の文字資料は、数少ないものの、本遺跡周辺の奈良時代以降の歴史的な性格を伺い知るうえで、貴重な資料といえようである。

なお、墨書土器の文字判読に際しては、国立歴史民俗博物館助教授 平川 南氏並びに高島英之氏・平野卓治氏に御教授戴いた。文末ながら、感謝申し上げる次第である。

註

- (1) 山武考古学研究所「群馬県前橋市柳久保遺跡群IV発掘調査報告書」1988
 (2) 中沢 恒・春山秀幸・関口功一「[矢田遺跡]とその周辺」信濃第41巻第3号 1989
 (3) 群馬県高須城文化財調査事業団「下軸牛状遺跡」1986

第19表 文字資料一覧表

番号	出土位置	土器種	器種	文字部位	文字	時期	備考
1	2号住	須恵器	高台坏	体部正位	茂	10世紀後半	墨書
2	2号住	須恵器	坏	体部正位	茂	10世紀後半	墨書
3	8号住	須恵器	高台皿	体部内面正位	次	10世紀前半	墨書
4	38号住	須恵器	高台坏	体部正位	加	9世紀後半	墨書
5	69号住	須恵器	坏	体部横位	□(横a)□(家)	10世紀前半	墨書
6	136号住	須恵器	高台埴	体部横位	∨(得a)	9世紀後半か	墨書 内黒
7	2区第6トレンチ	須恵器	坏	体部正位・体部内面正位	室・室	9世紀後半か	墨書
8	2区15B45	須恵器	坏	体部内・外面 正位a	□・□	10世紀前半か	墨書
9	2区15B45	須恵器	坏	体部外面・横位	田5a	10世紀前半か	墨書
10	118号住	蛇紋岩	紡錘車	短軸面横位	≡ 6 ㄥ	8世紀後半	線刻 側面落書き
11	118号住	蛇紋岩	紡錘車	側面正位	山	8世紀後半	線刻
12	90号住	須恵器	台付甕	底部横位	山	10世紀後半か	線刻 流れ込みの可能性大

(3) 砥石について

本遺跡では、古墳時代後期から近世に至るまでの砥石が、多数出土している。それらは、本遺跡における生産活動の一端を表現する遺物とおもわれ、また、その中には、滑石製模造品の製作との関連が考えられるものもあり、貴重である。

その鑑定については、朝鮮馬泉埋蔵文化財調査事業団 専門員 大江正行氏に依頼した。本項は、その折の留意点と所見を掲載することとする。

砥石の観察について留意した点は、次の通りである。

器種名称の中で「砥石」とした例は、研磨主体に金属を除き、木や皮などの軟質の素材が想定された場合にあっても、金属砥石との区分が困難であるので、砥石と表記した。「砥石か」と表記した例は、概ね研磨面が甘く判然としない場合や、刃ならし傷のみの個体について、砥石かとした。「製作台」は、砥石としての性格よりも、突き込みや敲打痕が主体の個体について、製作台とした。「石製品」は、材質が砥石材「流紋岩」であっても、研磨痕がなく、ある程度の完成状態の形を示している個体に用いた。

原料の名称には、概ね、3種の区分を行なった。「川原石の利用」は、語意の通りである。「自然石の角礫」は、本来であれば、角ばった山石の状態を呈するのが、一般的と思われるが、ここでは、それよりもやや丸味をおびた石材も含めた。「転石の利用」は、本稿中では、角閃石安山岩性の砥石に多く用いたのであるが、角閃石安山岩の小礫には、川原石でなく、山麓での土石流中にも角張りのとれた例を見るので、あえて、採取川原石との区分を行なった。また、川原石であっても、転石に含まれていることになる。

術語のうち、大半は、現在用いられている研磨用語を用いた。主要な語句にふれると「ヒケ傷」は、研磨主体を研磨した際によって生じた傷をさし、その原因は、主体の角部と砥石の硬質夾雑物の移動に

大江正行

よる。「刃傷」と「刃ならし傷」と「ならし痕」の区分は、感覚的ではあるが、刃傷は、砥石に研磨主体をあてる際、鋭利な個所が作意なしについたと、考えられる場合。刃ならし傷は、刃こぼれした刃先の再調整にあてたと考えられる条痕をとらえた。ならし痕は、刃のない金属利器の再調整にあてたと見られる個所をとらえた。さらに「原材料加工時点の削り」は、砂岩製の大形品についてみられたが、古墳の切石や削り石の石材面に残された大型の削り跡を意味する。

研磨主体について、金属と木や皮など軟質の素材を推定した。それは、研磨を一般的に考えた場合を基とし、夾雑物の凸出や部分的な凸部が生じた場合、金属では、それらは、削られるか、脱落するはずであり、主体が軟らかければ、夾雑物の凸出や、やや硬い個所の凸出が考えられるのである。

所見

①遺構出土砥石のうち、古代遺構に伴ったと考えられる例の中で、大きな削り石加工は別として、細かな削り調整は見られなかった。

②古代遺構出土の多くに砂岩製の敲打、又は、突込によって生じたと考えられる個体が多く存在していた。このことは、他遺跡の適切な砥石並びに工具用石材の抽出を経なければ明言できないが、当集落におけるなにかの特殊加工が示唆された。

③角閃石安山岩製の砥石については、金属製利器の成形や、硬質物質の成形にあてたらしく、独特な砥ぎ減りをもって存在していた。その研磨主体器種については明確ではないが、数例に、研磨主体の巾単位を留めるものがあり、その点からすれば、同一種利器(?)にあてたのかもしれない。

④片岩製の砥石は、硬質でしかも夾雑物が多く、金属研磨には不適であるにもかかわらず、顕著な研磨減りが多くの例にみられた。それらの中で、数例ではあるが、軟質の物質でなければ生じないはずの、夾雑物の凸出がみとめられ、研磨主体の想定に、

矛盾が生じてしまった。そのことをあえて解釈すれば、砥石と金属器との間には、どの場合であっても砥汁が、潤滑材の機能を果たすのが常である。片岩と金属器との間に、多くの砥汁が生じたとは思えず、また、砥汁なしで研磨し得たと思えないので、そこには、砥汁に相当する別潤滑物質が、想定される。別潤滑物質とは、粘土と繊維物質とを混ぜ合わせたもの、その片方であってもよいと思われる。そう考えた時、大きな研磨減りと共に、夾雑物の凸出や、硬質個所の凸出も考え得るであろう。こうした類別は、県内の調査例では、極めて少ないことであるので、本遺跡の特種な生産活動の一端が示唆されたのではなかろうか。

⑤ ③と④の特種な砥石については、出土地点を見ると、古墳時代後期の滑石加工をしたと思われる住居跡からその多くが出土しており、何らかの形で、金属工具の調整にあてたのではないだろうか。

(4) 鉄器類について

各遺構毎に取り上げた鉄器について改めて集めてみたのが、第488・489図である。大きく農具・工具・生活用具の3種類に分けることができる。農具では、鎌・鋤先があり、工具では、鉈・鋸状工具・鋸・手斧・紡錘車・刀子があり、また、生活用具では、毛抜き・鉄・釘などがある。鎌については、武器の可能性もあるが、大江正行氏の言うように、狩猟などの生業の一端に用いられた可能性の方がより強いであろう。ただ、遺構出土の鎌は奈良時代だけに集中していることになにか意味があるのか、今後の類別の増加を待ちたい。

これらの鉄器の中で古墳時代後期から平安時代まで共通して出土したものに鎌と釘がある。鎌については出土数が少ないが、散えて特徴付けるとすると古墳時代後期が最も小さく、奈良時代・平安時代というように時代が下がるに従い、大きくなっていく。また、古墳時代後期の鎌は、48号住居跡のものは、床下土坑から出土し、81号住居跡のものは、竪掘りかたから出土しているというように祭祀との関連が考えられる。131号住居埋没土出土、さらに奈良時代の

⑥ 3号土器集積出土の工作用兼砥石は、今回出土の砥石のうち、部分的ではあるが、研磨主体に石材が想定された。その理由は、大きく中凹みは、研磨主体が金属であった場合、手掌中におさえて研磨したためであり、手掌中におさまる物質は、丸味をおび、ある程度の厚さがなければ考え難いのであり、それを考えると、金属製品でそれだけの形態は考え難い。そのため、手掌中におさまる、あるいは、おさえられる石材なら考え得るところである。また、表裏に小穴が11箇所認められ、それらは、もみ錐の跡であると考えられ、おそらくは、滑石製品の多く出土した供伴遺構との関連からすれば、滑石製品の穿孔に使用されたものと考えられる。

⑦ 小型の精粒子砥石の出土例は、県内でも少ない。

(そこから、精仕上げの工作が考えられ、10号溝出土鉄滓の製品化像の一端が、考えられなくもない。)

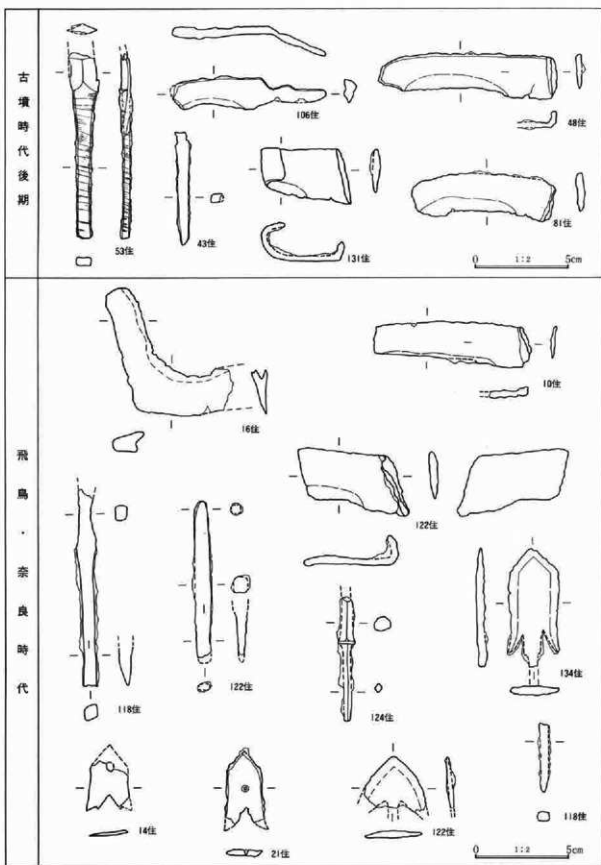
鹿沼栄輔

鎌のうち、122号住居跡から出土しているものは、滑石製品を製作する時の工具として転用された可能性が高い。釘については、各時代から1、2点の出土であり、それがどのような意味があるのかは不明である。

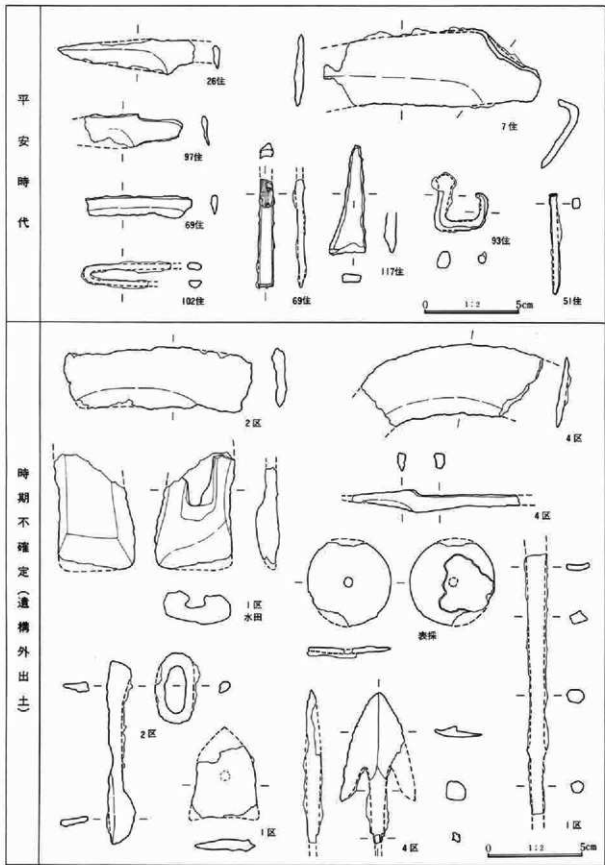
また、奈良時代の118・122号住居跡からはともに鋸状工具が出土しており、特に122号住居跡からは紡錘車未成品や滑石チップなどが出土していることから、詳しくは後述するが、紡錘車の製作と密接な関係を考えることができる。

さらに、16号住居跡より出土した鋤先については、全体の遺物が床面より浮いた状態であるが、その住居から立石が出土し、その周りから手握土器や暗文のある小皿高環が集中して出土していることなどから祭祀との関連が考えられる。類別としては、田端遺跡3号集石から滑石製の白玉や多量の坏類と供伴して鋤先が出土しており、調査担当の所見は鋤先がその遺構の中心であった可能性を指摘している。

註 (1) 大江正行「出土の鉄製遺物について——村主遺跡出土、奈良・平安時代鉄製遺物の検討——」
『大原II遺跡・村主遺跡』1989年群馬県歴史文化財調査事業団



第488図 時代別鉄器一覽(1)



第489図 時代別鉄器一覽(2)

5) 羽田倉遺跡の煮沸具の観察から

——古墳時代を中心にして——

外山 政子

1 はじめに

羽田倉遺跡は古墳時代後期を主体とする集落で、竪穴式住居跡総数は133軒、そのうち炉を有するもの2軒、調査区域外にのびていて、カマド、炉の区別不明のもの9軒を除くと、のこりの122軒はすべてカマドを作り付けている。古墳時代後期の住居には、カマドにカメが懸けられたまま出土したものもあり、総じてカマドの遺存状態が良好である。

群馬県地域で住居内にカマドが普及する時期は、およそ古墳時代中期から後期で、その後平安時代まで煮炊き施設の主体をなしている。古墳時代後期から平安時代の集落において、カマド以外の火処施設^(註1)の出土例は稀である。しかし、実際の生活上の様々な場面を想定してみると、火処がカマドだけでは完結しないような気がしている。例えば、糸を作るにも、煮たり蒸したりする作業が必要であり、また屋内ばかりでなく屋外での火の使用も当然考えられる。そのばあいの施設もやはりカマドであろうか。こうした私自身も持っている素朴な疑問にたいして、カマド以外の遺構が確認されていないというほかに、確実な答が用意できない。

はたして、当時の加熱施設はカマドだけだったのか。羽田倉遺跡の土器の使用痕跡を観察することによって検討してみたい。

そこでまず、カマドに懸かったままで出土したカメ類の「スス」の付きかたや内面の「ヨゴレ」を観察することによって、「カマド型の使用痕」^(註2)とも言うべきタイプが特定できれば、出土状態からはカマドに使用したと確定できないカメ類についても使用施設の特定が可能となると考えた。

遺跡から出土する土器類は、当時の人々の生活具であり、当然使用の痕跡をとどめているはずである。しかし長い間土中において、土質や植物、虫の作用などによって変質し、私達が実際に手にとる時点までに多くの情報が失われてしまっていることも考えられる。また同様な作用によって土器の表面に別の

物質がこびりつく可能性もあり、どれが本来の使用によって生じた痕跡であるのか判断できない場合も多い。そこで観察の際は明らかな二次加熱の痕跡を手掛かりとした。

外面は

①ススの付着（器面のきめに吸着したうすいススも含む）

②繰り返して行われる加熱によって生じた器面の変色（一般的に赤化）と器面の剝離

③粘土の付着（カマドに設置する際に付着し、加熱されることによってこびりつくものである。）

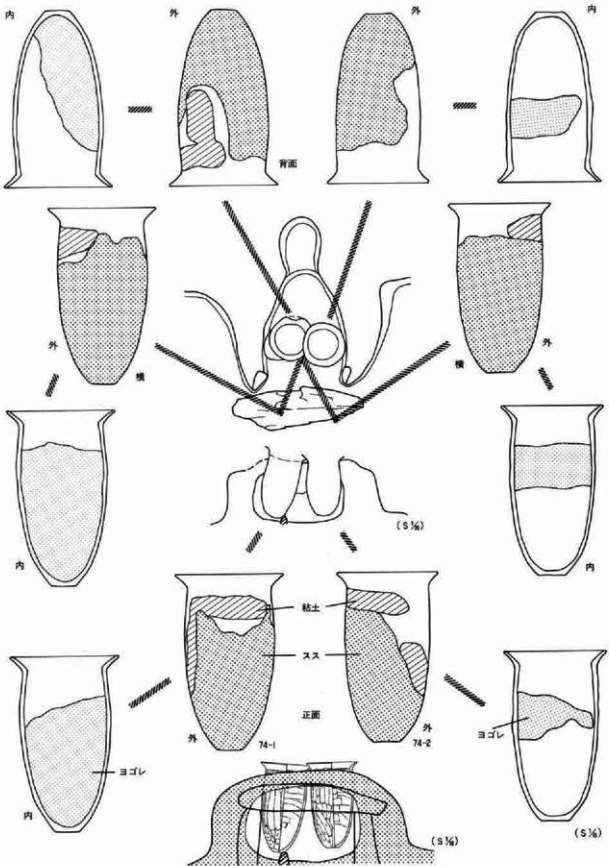
の3点を観察し、そのうち①スス、②変色は加熱痕跡として同じスクリーントーンで表示した。③は加熱痕跡というよりカマド設置の痕跡であり別のトーンとした。

内面は

①炭化状のこびりつき ②「ヨゴレ」

③器面の剝離

である。炭化したこびりつきは内容物の焦げ付いたものと認定されるが、器面に薄くしみついたような「ヨゴレ」は、土中でうけた変化と分離しにくい。この「ヨゴレ」の観察できる部分はカメの頸部よりやや下あたりから底部にかけてで、上胴部にリング状にまわる場合もある。これらは外面の加熱痕跡とも位置的に良く対応しており、内面の「ヨゴレ」を使用痕跡と考える根拠となりうるだろう。器面の剝離は底部よりやや上の体部が丸みを持つ部分と上胴部の「ヨゴレ」部分に重なることが多い。ともに加熱による影響ともいえるが、内容物を掻き回したりすることを想定するとその器具が、一番当たりやすい部分ではある。いまのところ器面の「アレ」としている。①、②、③とも煮炊きによる痕跡とかがえて、ここでは同じトーンで表示をした。ただ、ごく明瞭な焦げ付きについてはトーンを濃くして示しておいた。なお、ここでは古墳時代後期の資料をおもに観察対象とした。また、土器がカマドに懸けて



第490図 74号住居跡のカマドとカメ

あった場合の正面は、出土状態の写真から判断した。土器は1/8、カマドは1/20、カマド使用状態想定復原図は1/16で図示した。

2 カマドに懸かったカメ

㊦ 74号住居跡のカマドとカメ

(第490図、本文 176P～180P)

74号住居跡はカマドにカメが二個懸かっただけで確認された。袖部先端に石を据え、焚き口天井部は調査時点では崩落していたが、偏平な割石を鳥居状に組んでいる。支脚は左側のカメの下にあるが、しっかり埋め込まれていないようだ。全体に土圧によって崩れたような状態で左右のカメもやや沈んでいるが、土層断面図によれば両側からカメを包みこむようにカマドがつくられ、カメとカメの間にも粘土を詰め込んでいる様子が認められる。左側支脚に乗っている74-1は、74-2より僅かに丈が高い。

この二つのカメの正面、両者の接する横の面、背面の三方向についてスス、粘土の付着と内面の「ヨグレ」を図示してみた。なお、内面は断面をいれて土器を半截したような表現としたが、観察の実際をそのまま書き入れた場合左右が逆となって外面と内面の対応性がわかりにくくなるため、外面に対応する内面の様子を透視した図として記入した。

正面では、左のカメ(74-1)はその左側と頸部に粘土が付着し、ススは粘土に阻まれるように左下がりに付着する。右のカメ(74-2)では右側面と頸部に粘土が付着し、ススは右下がりに付着している。両者が接する側面では、双方とも頸部に粘土が付着し、それより下はススが付着している。

背面はちょうど正面と逆で左の74-1が右下がりにススが付着し74-2は左下がりでである。その内面は74-1は炭化した強いヨグレが認められ、74-2は上胴部にめぐる薄いヨグレである。双方の内面とも外側のスス付着範囲に対応する部分にヨグレが観察出来る。カマド側面にあって火が懸かりにくい部分には内面のヨグレも観察できない。

土器観察の結果と出土状況からカマドにかけた状態を復原したのが第490図の下段である。左側のカメ

は支脚とカマド側面に支えられ、右側のカメは左のカメとカマドに支えられて宙に浮く格好であったと推測される。

㊧ 12号住居跡のカマドとカメ

(第491図左段、本文 57P～68P)

12号住居跡は多量の土器が出土しており、住居廃絶時点か、その後土器類の投棄が行われている。

カマドは袖部先端に石を固定し、周囲は粘土で作られている。支脚石はやや右に寄って埋め込まれており、12-1のカメが乗る。左側には12-2のカメが前方に倒れ込むようにして出土している。二個懸けのタイプである。支脚に支えられている12-1のほうが丈が高い。

左側の12-2は粘土の付着が見いだせず、胴部下半にやや強いススと加熱痕跡が見られる。口縁部や頸部にススは付着しない。

右側の12-1は頸部から右後ろにかけて粘土が付着し、ススも右下がりに付着する。

内面は両者とも薄いむらむらとしたヨグレが下胴部に認められる。

㊨ 66号住居跡のカマドとカメ

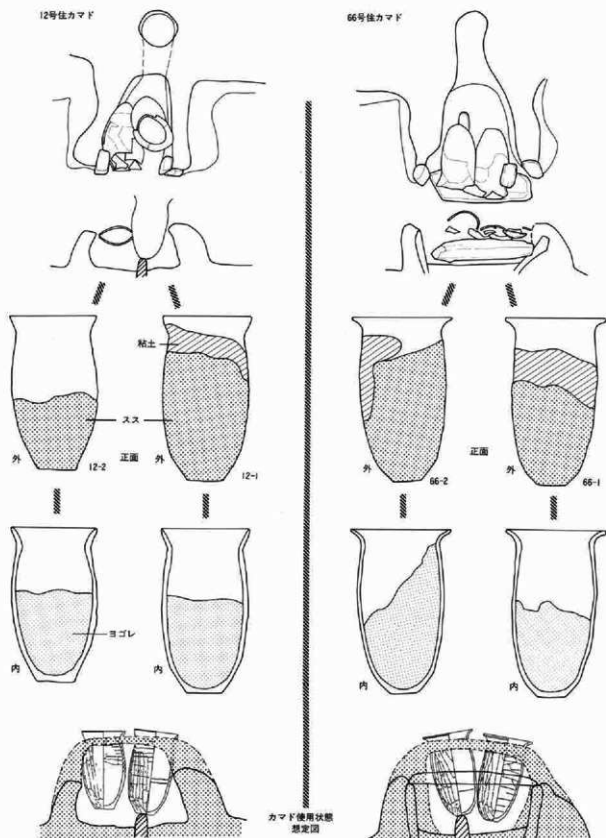
(第491図右段、本文 164P～167P)

66号住居跡のカマドは袖部先端に石を据え、焚き口天井部に板状の切石を使って鳥居状に組んでいる。

住居外側から内側に圧力が加わったように右袖石がずれ、天井石が落ち2個懸けのカメが覆いかぶさるように倒れ込んで出土している。支脚石は左側に寄って埋め込まれている。支脚に乗っていたと思われるカメ66-2は、右に並ぶ66-1より僅かに丈が短い。

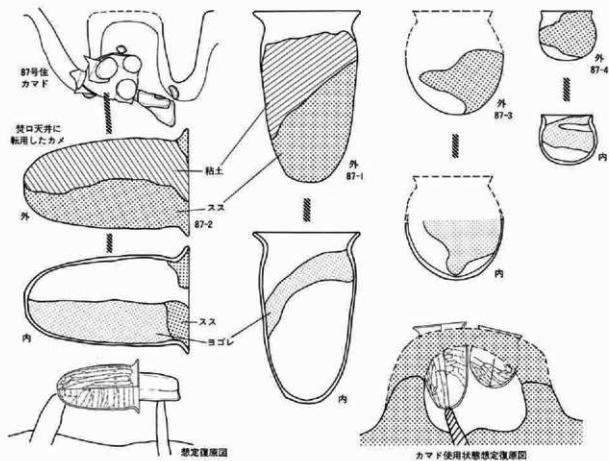
左側に設置した66-2は頸部から左側面にかけて粘土がし字状に認められ、ススは粘土部分をこえて上方には付着しない。

右側の66-1は右下がりに粘土がめぐり、右後方に縦に粘土の付着部分が認められる。ススは粘土より下部に付着している。内面のヨグレは外面の加熱痕跡に良く対応する。66-2は粘土が縦にのびる部分にはヨグレが薄く、右のカマド中心部側にあたる

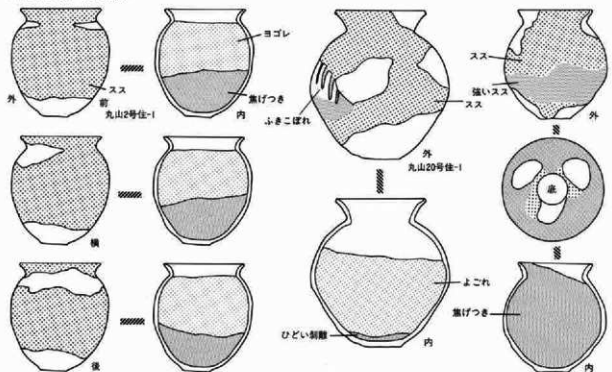


第491図 12号住・66号住のカマドとカメ

第4章 成果と問題点



炉の住居のカメ (丸山遺跡)



第492図 87号住のカマドとカメ・炉の住居のカメ

(S 36)

部分では強いヨゴレが観察できた。66-1は下半部分にヨゴレが認められた。

㊦ 87号住居跡のカマドとカメ

(第492図上段、本文 250P～252P)

87-2は石と組み合わせて焚き口天井部に転用しており、カマドに懸けて使用していたカメと転用したカメとの使用痕跡の違いが明らかに出来る例としてとりあげた。

カマドは袖部先端に石を据えて、支脚は左側に寄せて埋め込まれている。両袖石の間に横たわるように板状の石と87-2が出土している。

出土状況の写真では厳密にカメのどの部分が焚き口側か特定できないが、粘土とススの付着範囲の違いから図のような状態で使用されたと推測される。口縁部から縦に縦線が付着し、頸部には巡っていない。粘土の付着範囲に対応して、やはり口縁部から底部まで縦に強いススの付着が認められている。内面は外面のススに対応して縦に変色部分があり、口縁部の内側にもススが付着している。

焚き口に鳥居状に懸けた場合、下に向いた部分にススが付着するだろう。上部は粘土で固定している状態であろう。口縁部内側にススが付着することは通常の形で使用した場合には認められない。

87号住からは87-2のほか貯蔵穴内に落ち込んだ状態で87-1、87-3のカメが出土し、カマド左脇からは87-4の小型カメも出土している。これらのカメ類のススやヨゴレの痕跡はカマド使用の結果によるものとして良いだろう。

87号住居は住居断絶にあたってカマドに懸けていたカメ類をとりはずしていると解釈できる。

3 炉の住居のカメ——ススとヨゴレのつきかた

(第492図下段)

当遺跡には古墳時代前期とする住居跡が2軒検出されているが、土器の出土が少なく対比資料とは(註3)出来ないで、前橋市荒砥北部の丸山遺跡出土のカメについて検討してみたい。図示した資料はすべていわゆる和泉式土器期に属し、住居の火処は炉である。

2号住-1は底部と頸部の一部分を除いてススが口縁部まで付着する。底部を地面に直接設置したか、持ち上げていたかは不明である。

頸部にススの着く部分と着かない部分とがあり、炎と空気の流れを考えさせる。炎の流れを想定して火の側からの前、横、後としてみた。内面は頸部以下全体にヨゴレがあり、器面の剝落も認められる。特に下胴部はお焦げと思われるこびりつきがある。

20号住-1は大型カメでやはり底部と体部、口縁部の一部にススの無い部分があるが、器面全体に炎が巡った様子が観察できる。胴部には吹きこぼれのさいに生じるようなススが筋状に残った部分がある。内面はヨゴレと剝離が巡り、底部分は剝離がひどい。

21号住-2のカメは下胴部の三箇所にススの着かない部分が認められる。これは石などによって三点を支持し、カメを地面から浮かせて下から加熱したためであろう。ススは口縁部まで広がっているが、胴部最大径より下に特に強いススが付着する。内面は強いこびりつきと器面の剝離が観察できた。

僅か三例しか図示できないが、炉の住居から出土するカメの使用痕跡の代表例と出来るだろう。

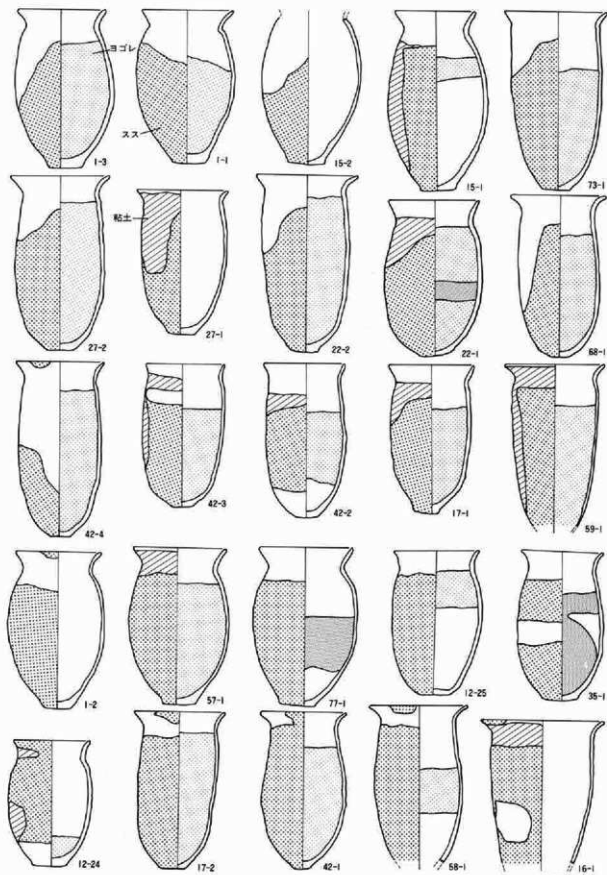
その特徴は、

- 1 ほぼ全体にススがまわること、口縁部にまでススが付着する。
- 2 ススが付着しない部分に規則性の無いこと、炎が空気の流れによってゆらゆらするようなススの付着状態である。
- 3 内面のこびりつきが著しい。
- 4 外面に粘土の付着が認められないのも重要な特徴であろう。

4 カマド使用のカメ——ススとヨゴレの特徴

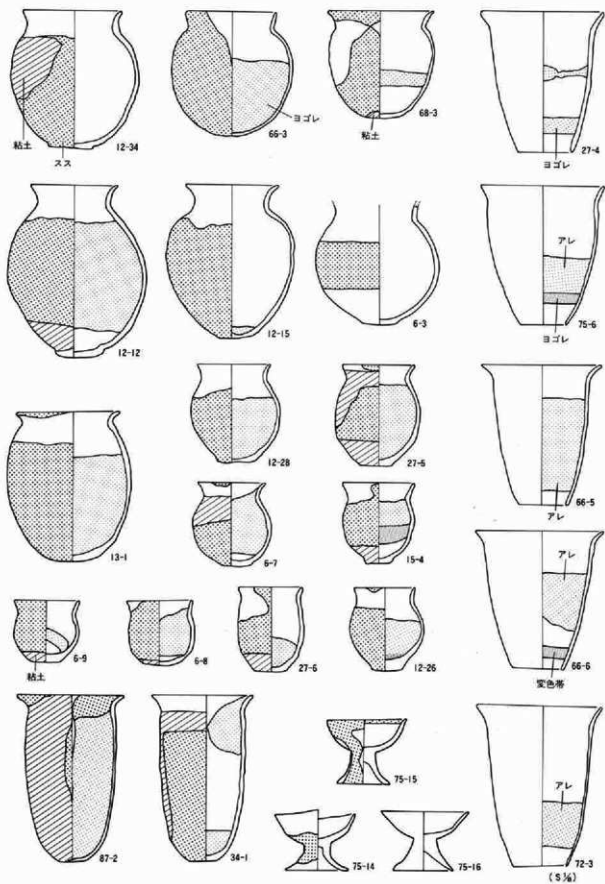
出土状態からカマドに懸けて使用していたことが確実なカメの例は、先に図示した74号住、12号住、66号住のカメ類の他に、1号住-3、1号住-1、15号住-2、15号住-1、35号住-1、59号住-1などである。

これらも含めてススやヨゴレの付着している土器



第493図 カメの使用痕跡

(S 1/4)



第494図 カメの使用痕跡

第4章 成果と問題点

類を集めてみたのが第493図と第494図である。

ススやヨゴレの付着する土器種は長カメ、丸胴カメ、小型カメ、高坏、坏、甔であった。

そのうち長カメの一部と高坏、坏は出土状況と内面にまでまわるススの着きかたから器本来の使いかたでない「転用」による使用痕跡と判断できる(第494図87-2、34-1、75-14・15・16)。高坏、坏はほとんどがカマド支脚材、高さの調整材としての使いかたと思われる。^(註4)

器本来の機能が煮炊、煮沸であるとススやヨゴレによって判断できるのは長カメ、丸胴カメ、小型カメ、大型甔であろう。

大型甔の場合、使用痕跡が確認できるのは稀で類例が少なくないが、蒸し器であることには異論がない。27-4(第494図)は内面に褐色のヨゴレがリング状につく。体部中程寄り僅か上と、底部から約4センチメートル程上との二箇所3～4センチメートルの幅でめぐっている。二本の間には一部器面の剝離が見られる。外面には特別な使用痕跡は認められない。

この内面のヨゴレの実体については特定できないが、器面内側にぐるりとまわる^(註5)こと、底部より数センチあがったあたりからヨゴレがついている^(註6)こと、上下の間隔が内容物を効率的に蒸す事が可能な範囲の幅に収まることなどから、使用時の内容物の成分が染み付いた^(註7)可能性が高い。

上のように明瞭な付着物の他にうすい「ヨゴレ」や器面の剝離に代表される「アレ」が観察できる(第494図右列参照)。この内面の「ヨゴレ」や「アレ」は、27-1と同じように器の下半に集中し、しかも均一にぐるりと巡るのを特色としている。甔の胎土は良く精選されたものが使われていることが多く、内面は良く磨かれて目ざめをしていることが通例である。胎土のために内面がアレやすいということはないようである。従って、この内面の剝離、アレは使用痕跡としてよいだろう。外面にススの付着は認められない。^(註8)

長カメの使用痕跡を集成したものが第493図であ

る。上三段はススが左下がり、右下がりどちらかに偏るもの、したがって粘土の付着も同じ傾向を示すものである。下二段はほぼ頸部より下に口縁部に平行にススが付着するものを集めた。

上三段は74号住のカメ類に照らし合わせれば、カマドの左右どちらかに設置したばあいススの着きかたであり、粘土の付着状態である。

下二段は同じく74号住のカマド中心側の横向きススの着きかたと同じである。

この向きの場合口縁部にススが付着している例がある。(1-2, 17-2, 42-1, 58-1, 16-1)これは複数のカメを設置する場合に、お互いが接する部分に詰めた粘土にひびが入りやすいために、このひび割れからススが昇り口縁部分に付着したものと推測している。スス漏れである。スス漏れの場合は、炉の住居のカメのススのように広い範囲では付着しない。一部分であることが多い。当地域の古墳時代のカマドはカメを包み込むように粘土で固定するスタイルであったと考えているが、決して懸けっぱなしではなく、かなり頻繁に懸けはずしを行っていた^(註9)と思われる。そのたびにカマドは天井部の一部が壊れる。脆弱な天井部は常に補修の対象であっただろう。こうした事情を反映しているのがカメのスス漏れ状態であると言えよう。

第494図は長カメ以外の加熱痕跡を遺す丸胴カメ、小型カメである。

丸胴カメはスス、粘土の付着、内面のヨゴレとも長カメで観察した様子と基本的に変わりはない。頸部から下にススが、右下がり、あるいは左下がりに付着する。68-3は底部に円くススがつかない部分があり、そこに粘土が付着している。支脚に据えた痕跡と思われる。

小型カメは内面のヨゴレが強く、しばしば焦げ付き状態も観察できる。複数のカメをカマドに据え込んで、同じ火力で加熱するため、容量の少ない小型カメでは焦げが付きやすいであろう。また小型カメはススが口縁部にまで認められることが多いが、大型のカメ二個懸けの空間を埋めるように懸けられ

(註10)

るためスス漏れが生じやすいであろう。小型カメには形態で機能に違いがあるようだが現在のところ明確な線は引けなかった。

観察し得た羽田倉遺跡古墳時代後期で、カマド以外から出土した煮沸具の使用痕跡はすべてカマドから出土したもののそれと一致する。先に述べた炉使用のカメ使用痕跡と対比しながら カマドで煮炊きに使ったカメ類の使用痕跡の特徴をあげてみると、

- 1 口縁部から6～7センチメートル下がったあたりから一線を画する様に、底部にかけてススが付着する。
- 2 しぼしぼ左下がり、右下がりにススが付着する。
- 3 胴部のススが無い部分や頸部にカマド材の粘土が付着する。
- 4 内面は外面の加熱痕跡とよく対応する。外面のスス付着部分より僅か下がったあたりからヨゴレが返る。
- 5 焦げ付きは炉使用のカメ類に比較すると極端に少ない。
- 6 内面にはススが付着しない。(内面にススが付着している 第492図87-2、第494図34-1はカマド材として長カメを転用している例である。)

5 おわりに

カマドは焚き口から支脚までの間に薪をいれて火を焚く。炭は焚き口天井部をあぶり、土器前部を暖め土器と土器の間やカマド壁の間を通して後ろへまわり、保温効果を上げる。十分に暖められた空気は煙道を通して排煙される。カマドは空気の流れをコントロールし一定方向に導くことによって、加熱効果を上げている施設である。その施設を使うことによって生じる使用痕跡も、ある程度の規則性を持つと言えるだろう。上記1、2、3の三点がカマド使用痕跡のタイプとできる。

炉を使用した場合のカメ使用痕跡とは、先に列挙したように違いが明らかである。

カマドに懸かったままの土器の使用痕跡からカマド型の使用痕跡を確認する作業を行ったが、長根羽田倉遺跡古墳時代後期の煮沸具はすべてカマド使用

の痕跡を残しているという結果となった。

煮沸具が土器のみであったとすれば、調理から生活全般の作業に伴う煮沸は総てカマドで行い、土器も長カメ、丸胴カメ、小型カメの種類の中で耐われて居たこととなる。

同じような長カメでも大きさに差があり、作業内容によって使い分けがあったと思われる。より厳密に一住居内で一時期に使用されて居た道具の抽出をするとともに、使用痕跡が手がかりとして土器の機能についても検討を重ねていくべきであろう。こうした作業によって人々の行動をより具体的に解明し、生活の全体像を明らかにできればと考えている。尚、本文を記すにあたって 西田健彦氏には整理中の資料の観察を快諾していただき、宮下万喜子氏には諸般お手を煩わした。文末ながら記して感謝の意としたい。

註

- 1 群馬県利根郡月夜野町村主遺跡ではカマドを持つ竪穴式住居内に伊が併設されていた例がある。今のところ竪内北部の様相であるらしく、暖房用が考えられている。
- 2 藤田至希子氏は古墳時代前期のカメ類のスス、オコゲの付着状態を型型、カマド型に分類し、使用施設の特定をしている。カマドの構造が西日本と当地域に代表される東日本と異なるのか、多少付着のパターンが異なるようである。カマド構造については稿を改めて検討する予定である。藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について——矢部遺跡を中心に——」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 3 西田健彦「丸山・北原」群馬県教育委員会 1987
- 4 図示したのは75号住居カマドから出土した高坏である(本文P181参照)。75-16は支脚石に過ぎないせいで状態が出土した。ススの付着は認められないが、二次加熱によって裏面が全体に荒れている。75-14はカマド燃焼部奥から出土している。ススは認められないが、二次加熱によって変色している。75-15はカマド右袖内から出土している。外面と口縁部内面にススが付着している。高坏は支脚として遊逸に据えて使われるのが他の遺跡でも報告されている(群馬県三ツ寺遺跡)。
- 5 高坏は図示しなかった。1号住居N11(本文P48参照)。
- 6 長期埋土の中にあつたことによって生じた変化であれば、模倣しなかったように出土する土器の口縁部に平行にまわったりはしないだろう。
- 7 すのこ状の底板を覆すと考えられる箇所より上である。
- 8 蒸気の濃度を考えれば、内容物は底部から胴部の間の7箇所が原度だろう。
- 9 竪の外面にススが付着しないことは、カマドを使用していた根拠である。外山政子「群馬県地域の土器類について」『研究紀要』6、1989
- 10 註8文献に同じ
- 11 観察した土器のなかには一部8世紀のものもあつた(87号住居、第492図上段)が、古墳時代と使用痕跡のちがいは見だせなかった。

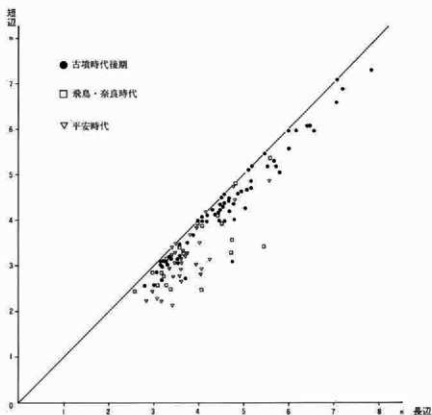
第2節 竪穴住居跡の形態・規模・主軸方位について

鹿沼栄輔

本遺跡の竪穴住居跡の形態・規模を古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、平安時代の3期に分けて統計処理したものが下図である。横軸を長辺、縦軸を短辺とした。斜めのライン上は、正方形を表わしている。これをみると古墳時代後期の住居跡は、概して正方形に近い形態をしているのに対して飛鳥・奈良時代、平安時代の住居跡は、長方形を呈するものが増加する傾向にある。規模でみると古墳時代後期の住居跡は、一辺が7mを越すような大型のものから3mほどの小型のものまでバラエティーに富んでいるのに対して、飛鳥・奈良、平安と時代が新しくなるに従い、小規模化する傾向になっているようである。さらに詳細にみると一辺が6mを越すような大型住居跡は、6世紀前半の時期に特に集中している。この時期は、本遺跡において大規模な集落が営まれた最初の時期であり、以後の住居跡の占地に大きく影響を与えている。その後、住居規模の差が徐々に小さくなっていき、奈良時代前半に比定される8世紀前半

の時期に至ると、最も小規模化となる。また、平安時代になるとほとんど同様な規模の住居跡となる。

住居跡の主軸は、原則として竪の主軸方向とした。全体的な特徴は、2つある舌状台地の傾斜を意識して住居跡を建てていること、そして、同時期の近接する住居跡はほぼ方位が一致する傾向があることなどである。例えば6世紀前半の住居跡では、1・3・6号住居跡はN-18°~35°-Eの範囲に、15・27・36・53号住居跡はN-52°~60°-Eの範囲に、57・75・76・47・49号住居跡はN-52°~59°-Eの範囲にそれぞれはいる。6世紀後半、7世紀前半の住居跡もほとんどが6世紀前半の住居跡を意識しながら、およそN-60°-Eあるいはそこから90°西へ振った角度のところに主軸が置かれている。ところが、集落が散在傾向を示す飛鳥・奈良時代になると、全体の主軸方位は統一性に欠けるが、近接している住居跡ではほぼ一致した方向となる。さらに平安時代になると集落が舌状台地全体に拡大され、散在傾向はすすむ



第2節 竪穴住居跡の形態・規模・軸方位について

が、近接している住居跡でも軸方位に統一性がなくなる傾向がみられる。特に、この時期は住居が谷地に面した急斜面にも構築されるようになり、それらの住居ではその山側に竪を構築する傾向がみうけられる。概して、古墳時代後期の住居跡の方が飛鳥・

奈良時代、平安時代比べて統一性がみられる。以上は限定された調査範囲の中でとらえられた現象であり、同じ村落共同体であると推測される神保富士塚遺跡の成果とも併わせて考える必要がある。

第20表 住居跡一覧表

No.	グリッド 位置	形状	規模(m)				方位	カマ				F(cm)	初形貯蔵穴	年代	備	考	
			面積	長さ	短辺	壁高		位置	全長	幅	壁高						形状
1	5区13C00	正方形	17.60	4.37	4.15	0.44	N-28°-E	北壁中央	94	65	32	30	○	橢円形	6 C前	軸石・天井石・石割、支脚・雲母石英片岩	
2	3区15C08	(長方形)	10.64	3.32	3.10	0.43	N-66°-E	北壁東寄り	165	61	47	18	×	長方形	10 C後	石組カマド・雲母石英片岩・粗粒安山岩	
3	5区10B45	正方形	38.12	6.46	6.08	0.64	N-34°-E	北壁東寄り	108	70	36	38	○	長方形	6 C前	貯蔵穴作り換えている。天井石一脱岩	
4	5区08C02	正方形	11.43	3.82	3.18	0.18	N-50°-E	北壁東寄り	53	53	60	60	×	長方形	10 C前		
5	5区03B42	長方形	9.92	4.08	2.50	0.38	N-47°-E	北壁東寄り	83	56	34	29	○	長方形	7 C後	住居外に柱穴あり。支脚・雲母石英片岩	
6	5区18B45	正方形	37.41	6.50	6.10	0.74	N-35°-E	北壁中央	88	56	29	32	○	長方形	6 C前	天井石一脱岩、軸石一脱岩 支脚の雲母石英片岩・黒色片岩	
7	5区05C02	正方形	7.43	2.84	2.24	0.56	N-105°-E	東壁中央	176	110	37	44	×	橢円形	10 C前		
8	4区49B49	長方形	11.96	3.96	3.84	0.33	N-102°-E	東壁南寄り	70	40	44	56	×	—	10 C前	天井石・雲母石英片岩	
9	4区45B45	正方形	11.57	3.68	3.30	0.62	N-49°-E	北壁中央	81	52	48	44	○	正方形	7 C後	天井石・軸石・雲母石英片岩	
10	4区49B47	長方形	8.63	3.42	2.50	0.48	N-85°-E	東壁中央	70	42	26	31	×	—	7 C後	軸石・粗粒安山岩 天井石一緑色片岩	
11	4区43C04	長方形	20.69	4.54	3.94	0.68	N-53°-W	西壁中央	50	40	—	—	○	—	7 C後		
12	4区45C06	正方形	9.87	3.32	3.10	0.58	N-60°-E	北壁東寄り	89	48	25	30	×	橢円形	6 C前	天井石・黒色片岩・支脚・雲母石英片岩 軸石・雲母石英片岩・黒色片岩	
13	4区37C09	長方形	8.28	3.30	2.58	0.48	N-32°-W	北壁中央	58	30	22	24	×	橢円形	7 C後		
14	4区34C11	正方形	12.36	3.64	3.44	0.47	N-60°-W	北壁東寄り	76	38	41	46	×	橢円形	7 C後		
15	4区33C06	正方形	47.90	7.16	6.82	0.80	N-136°-W	西壁南寄り	163	64	26	27	○	長方形	6 C前	軸石・雲母石英片岩・黒色片岩 天井石 粗粒安山岩粗粒安山岩 支脚・雲母石英片岩	
16	4区36C06	正方形	18.13	4.44	4.14	0.30	N-26°-W	北壁中央	61	50	31	30	○	長方形	7 C後		
17	4区42C08	正方形	28.62	5.60	5.22	0.52	N-68°-E	東壁中央	131	50	31	29	○	円形	6 C後	軸石一黒色片岩・雲母石英片岩	
18	4区31C02	正方形	9.74	3.36	2.96	—	N-56°-E	東壁南寄り	50	40	28	39	×	橢円形	10 C前		
19	4区29C04	正方形	10.27	3.40	3.30	0.33	N-82°-E	東壁南隅	32	30	29	32	×	—	6 C後		
20	4区42C09	不明	—	—	3.66	—	N-80°-E	—	—	—	—	—	×	—	10 C前		
21	4区22C04	正方形	10.35	3.24	3.12	0.22	N-44°-E	東壁南寄り	—	—	—	—	○	—	8 C前	カマド残存状態悪い。	
22	4区21C04	正方形	19.66	4.48	4.26	0.48	N-15°-W	北壁中央	92	70	29	49	○	橢円形	6 C後	軸石・緑色片岩・支脚・雲母石英片岩 天井石 緑色片岩 支脚・雲母石英片岩	
23	4区25C04	正方形	40.19	6.58	6.00	0.52	N-23°-W	北壁東寄り	—	—	—	—	○	—	7 C前	カマド残存状態悪い。	
24	4区25C09	正方形	19.33	4.52	4.34	0.52	N-32°-W	北壁中央	114	42	20	18	○	長方形	7 C前	支脚・雲母石英片岩	
25	4区24C09	長方形	21.57	5.86	4.28	0.34	N-58°-E	東壁北寄り	60	50	25	29	○	円形	6 C後	天井石一砂岩 支脚・雲母石英片岩	
26	5区02C06	不明	—	—	—	0.18	N-66°-E	東壁北寄り	96	60	74	60	×	—	10 C後	石組カマドカ・粗粒安山岩。チャート	
27	4区19C14	正方形	17.10	4.10	4.00	0.39	N-52°-E	東壁中央	110	40	30	28	○	—	6 C前		
28	4区18C10	正方形	29.67	5.74	5.22	0.56	N-32°-E	東壁中央	77	64	29	27	○	円形	6 C後	支脚一緑色片岩	
29	3区15C09	(長方形)	—	—	—	—	N-60°-E	北壁東寄り	(56)	—	(30)	—	—	—	10 C後	2号住と重複	
30	4区19C02	正方形	16.20	4.00	3.96	0.34	N-20°-W	北壁東寄り	92	(64)	36	(20)	—	円形	7 C後		
31	4区19C03	正方形	16.41	4.10	4.10	0.45	N-50°-E	東壁南寄り	74	64	25	21	○	—	7 C前	天井石・雲母石英片岩	
32	4区18C05	正方形	13.94	3.90	3.70	0.25	N-60°-E	東壁中央	90	75	33	28	○	—	6 C後	天井石一緑色片岩 軸石・雲母石英片岩	
33	4区20C01	正方形	21.17	4.60	4.58	0.29	N-61°-E	東壁中央	61	54	30	38	○	—	6 C後		
34	4区24C12	正方形	25.02	5.20	5.20	0.49	N-92°-E	東壁南寄り	88	62	34	26	○	橢円形	7 C前	支脚・雲母石英片岩	
35	4区05B40	長方形	18.48	4.82	4.90	0.74	N-17°-W	北壁中央	100	80	25	22	○	円形	6 C前	天井石・軸石一砂岩 支脚・雲母石英片岩	
36	4区14C07	正方形	56.07	7.94	7.32	0.63	N-50°-E	東壁南寄り	112	90	33	43	○	橢円形	6 C前	天井石一砂岩	
37	4区04C01	正方形	20.47	4.70	4.50	0.36	N-85°-E	東壁南寄り	86	65	40	43	○	円形	6 C後		
38	3区47B43	長方形	7.51	2.98	2.44	0.12	N-68°-E	東壁南寄り	(78)	(66)	(30)	(56)	○	円形	10 C前	住居外に柱穴あり。	
39	4区09C01	正方形	17.15	4.22	4.14	0.44	N-71°-E	東壁中央	68	58	20	21	○	円形	7 C前	カマド・貯蔵穴カマドあり。 支脚・雲母石英片岩	
40	4区08C01	長方形	18.95	4.50	4.00	0.18	N-57°-E	東壁南寄り	54	40	32	36	—	円形	6 C後		
41	4区08B46	正方形	29.67	5.50	5.46	0.38	N-22°-W	北壁中央	66	50	34	30	○	橢円形	7 C前		

第4章 成果と問題点

No.	グリッド 位置	形状	縦 横(m)				方 位	ホ ヲ D(m)				地 質	貯蔵穴	年代	備 考		
			面積	長さ	短辺	壁高		位 置	全長	断面積	貯蔵						
																位 置	全長
42	4区06B48	正方形	34.27	4.20	6.00	0.81	N-58°E	東壁南寄り	66	50	32	36	○	円形	6C後	天井石・支脚・袖石一箇母石英片岩	
43	4区06B49	(ほぼ)正方形	23.29	4.80	4.36	0.68	N-102°E	東壁南寄り	(56)	(40)	(16)	(34)	○	円形	6C後		
44	4区10B48	正方形	16.97	4.46	4.12	0.55	N-52°E	東壁中央	110	90	42	—	○	円形	6C後	天井石・支脚一箇母石英片岩	
45	4区24C06	正方形	15.65	4.16	4.00	0.52	N-30°W	北壁中央	—	—	—	—	○	—	7C前		
46	4区04B35	正方形	21.60	4.70	4.50	0.31	N-90°E	東壁中央	86	76	25	35	○	円形	7C前	袖石・牛伏砂岩	
47	4区07B36	正方形	15.56	4.63	4.00	0.22	N-59°E	東壁中央	75	64	33	35	○	円形	6C前	天井石・支脚母石英片岩 支脚・緑色片岩	
48	4区10B37	正方形	25.10	5.18	4.90	0.53	N-57°W	北壁南寄り	(80)	(42)	(29)	(34)	○	円形	6C後		
49	4区02B40	正方形	20.63	4.60	4.38	0.30	N-57°E	北壁か	—	—	—	—	—	—	—	6C前	
50	4区06C13	長方形	10.64	3.60	2.80	0.20	N-77°E	東壁中央	(70)	(56)	(32)	(28)	×	楕円形	10C前		
51	4区07C14	長方形	6.84	3.19	2.25	0.22	N-85°E	東壁中央	62	40	44	25	×	円形	10C後	石組みカマド・雲母石英片岩・黒色片岩	
52	4区12C15	(ほぼ)正方形	不明	0.28	0.30	0.10	N-65°E	東壁	—	—	—	—	×	—	10C前	天井石・雲母石英片岩	
53	4区12C14	正方形	51.35	7.25	6.90	0.55	N-120°W	西壁南寄り	115	75	108	55	○	長方形	6C後	天井石・支脚一箇母石英片岩	
54	4区06B47	長方形	8.88	3.18	2.84	0.75	N-87°E	東壁南寄り	71	43	49	49	×	—	8C前	支脚一箇母石英片岩	
55	4区07B40	不明	—	—	—	—	N-88°E	東壁か	—	—	—	—	×	—	10C後		
56	4区09B40	正方形	29.63	5.70	5.32	0.56	N-27°W	北壁中央	—	—	—	—	○	円形	7C前		
57	4区10B42	正方形	51.77	7.16	7.10	0.69	N-129°W	西壁南寄り	164	110	38	44	○	長方形	8C前	カマド・貯蔵穴作り跡 天井石・袖石一箇母石英片岩	
58	5区22C01	正方形	19.61	4.52	4.52	0.18	N-40°E	北壁南寄り	110	80	32	22	○	円形	6C後		
59	5区21C03	不明	—	4.92	—	0.34	N-22°E	北壁中央	94	86	30	33	○	楕円形	7C後		
60	5区24C05	不明	—	—	3.14	0.27	N-101°E	不明	—	—	—	—	—	—	—	10C前	
61	5区29B35	正方形	11.38	3.56	3.24	0.46	N-36°E	北壁中央	85	56	30	29	×	楕円形	7C前		
62	5区36B36	長方形	10.67	3.52	3.08	0.29	N-29°E	北壁南寄り	78	66	28	28	○	円形	8C前		
63	5区34B30	長方形	15.23	4.18	3.78	0.51	N-62°W	伊 藤	—	30	30	—	○	—	4C前		
64	5区39B45	正方形	9.49	3.16	3.02	0.32	N-33°E	北壁中央	102	70	34	29	×	—	8C前	支脚一箇母石英片岩	
65	5区41B48	正方形	23.57	5.08	4.66	0.66	N-111°E	東壁南寄り	108	38	34	30	○	楕円形	6C後	袖石一箇母石英片岩・緑色片岩	
66	5区36B49	正方形	16.98	4.30	4.24	0.34	N-82°E	東壁中央	84	49	37	54	○	円形	6C後	袖石一箇母石英片岩	
67	5区45C02	正方形	29.18	5.60	5.12	0.45	N-30°E	伊 藤	—	—	—	—	○	—	4C前	伊藤一箇母石英片岩	
68	5区30C01	正方形	11.84	3.56	3.48	0.34	N-101°E	東壁中央	92	58	32	36	○	—	6C後	カマド作り跡 袖石・緑色片岩	
69	5区30C05	長方形	15.33	4.68	3.52	0.58	N-94°E	東壁南寄り	77	46	34	44	×	円形	10C前	石組みカマド一箇母石英片岩・砂岩	
70	5区30C07	不明	—	3.90	—	0.16	N-90°E	東壁か	—	—	—	—	○	—	7C前		
71	5区32C14	正方形	15.51	4.10	3.92	0.35	N-20°E	北壁南寄り	70	48	18	24	○	楕円形	7C後		
72	4区25B40	長方形	18.63	4.83	4.02	0.48	N-57°E	東壁南寄り	58	44	42	47	○	円形	7C前		
73	4区22B45	正方形	12.62	3.76	3.55	0.37	N-83°E	東壁中央	70	28	34	47	○	円形	7C前	袖石一箇母石英片岩・緑色片岩	
74	4区18B39	正方形	20.15	4.52	4.34	0.69	N-66°E	東壁南寄り	88	38	36	38	○	円形	7C前	天井石・袖石一箇母石英片岩	
75	4区14B36	正方形	23.18	4.90	4.66	0.55	N-37°E	東壁中央	100	90	50	37	○	円形	6C後	袖石・支脚一箇母石英片岩・緑色片岩	
76	4区15B43	正方形	36.23	6.64	5.94	0.65	N-52°E	東壁南寄り	90	71	28	42	○	楕円形	6C前	カマド・貯蔵穴作り跡	
77	4区12B43	長方形	24.25	5.20	4.50	0.19	N-36°E	北壁中央	110	70	34	44	○	円形	6C前		
78	4区12B45	長方形	18.79	4.70	4.18	0.61	N-70°E	東壁南寄り	100	86	30	22	○	円形	7C前		
79	4区21C01	正方形	7.10	2.81	2.56	0.34	N-100°E	東壁南寄り	—	(30)	(30)	○	—	—	7C前		
80	4区24C06	長方形	8.53	3.02	2.60	0.32	N-106°E	東壁北隅	136	100	24	30	×	—	7C前		
81	4区12B47	長方形	14.22	4.76	3.11	0.33	N-33°W	北壁南寄り	—	(58)	(54)	○	—	—	7C前		
82	4区12B49	正方形	24.66	4.58	4.65	0.44	N-58°E	東壁南寄り	92	52	43	48	○	楕円形	7C前		
83	4区02C13	正方形	9.45	3.20	3.20	—	N-81°W	西壁北隅	—	—	—	—	×	—	10C後		
84	4区07C16	不明	—	—	—	0.10	N-118°E	東壁北隅	—	—	—	—	×	—	10C前		
85	4区15C18	正方形	(36.3)	5.15	5.15	0.95	N-34°E	北壁南寄り	110	56	46	48	—	—	—	6C後	
86	4区08C17	不明	—	—	—	N-0°E	東壁か	—	—	—	—	×	—	9C後			
87	4区11C00	正方形	8.57	3.01	2.87	0.50	N-82°E	東壁南寄り	—	40	30	40	×	正方形	8C前	天井石・支脚一箇母石英片岩 袖石・緑色片岩	
88	2区27B41	正方形	11.59	3.68	—	0.10	N-1°E	北壁か	—	—	—	—	○	—	7C前		
89	4区15C11	長方形	8.87	3.18	2.72	0.93	N-97°E	東壁北隅	112	62	56	46	×	—	10C後	石組みカマド一箇母石英片岩	

第2節 竪穴住居跡の形態・規模・主軸方位について

No	グリッド 位置	形状	規 模(m)				方 位	カ マ ド(m)				貯蔵庫	年代	備 考		
			南横	長辺	短辺	敷高		位 置	全長	開口	形状					
90	2区32B43	長方形	13.73	4.10	2.50	0.23	N-77°-E	東壁南隅	74	35	30	26	×	—	10C後	石組みカマド一層母石炭片岩 文部一砂岩
91	2区33B42	長方形	16.05	3.32	3.68	0.52	N-51°-E	北壁東寄り	80	57	28	38	×	×	7C前	—
92	2区33B48	正方形	11.61	3.24	3.02	0.52	N-37°-E	北壁中央	—	—	—	—	×	—	7C前	—
93	2区30C10	長方形	13.56	4.26	3.18	0.42	N-108°-E	東壁南寄り	100	62	44	32	×	×	10C後	石組みカマド一層母石炭片岩・緑色片 岩・敷底安山岩・砂岩
94	3区03C06	正方形	9.84	3.16	3.12	0.51	N-26°-E	北壁隅	—	—	—	—	×	—	7C前	—
95	3区07C09	不明	—	—	—	—	N-180°-W	南壁か	—	—	—	—	×	—	10C後	—
96	2区40B48	正方形	10.87	3.40	3.20	0.27	N-180°-W	西壁南隅	112	50	30	44	×	×	11C前	天井石・支脚一層母石炭片岩
97	2区44B45	正方形	17.12	4.22	4.20	0.30	N-58°-E	北壁東隅	154	84	46	50	×	—	11C前	—
98	2区16C12	正方形	24.37	4.82	4.74	0.47	N-73°-E	東壁南寄り	60	44	38	32	×	×	9C後	石組みカマド一層母石炭片岩
99	3区44C12	長方形	9.12	3.46	2.76	0.15	N-140°-W	西壁南隅	72	36	30	34	×	—	11C前	—
100	3区44C10	正方形	11.73	3.68	3.32	0.33	N-150°-W	西壁南隅	104	40	30	44	×	—	11C前	—
101	2区29C33	長方形	14.98	4.74	3.32	0.64	N-103°-E	東壁か	—	—	—	—	×	—	8C後	—
102	2区20C14	長方形	11.00	3.58	3.10	0.52	N-140°-E	東壁南隅	70	50	24	30	×	×	11C前	天井石・袖石・支脚一層母石炭片岩
103	2区28C12	長方形	9.57	3.66	2.70	0.66	N-88°-E	東壁か	—	—	—	—	×	—	9C前	—
104	3区27B41	正方形	15.03	4.60	3.86	0.40	N-20°-E	北壁か	—	—	—	—	×	—	10C後	—
105	3区26B40	長方形	—	5.52	—	0.56	N-13°-E	北壁中央か	40	22	12	18	○	—	7C前	—
106	2区22C09	長方形	30.02	5.82	5.02	0.40	N-68°-E	東壁中央	—	—	—	—	○	×	6C後	支脚一層母石炭片岩
107	2区21C08 (床石)	—	—	—	—	N-14°-E	北壁か	—	—	—	—	×	—	9C後	—	
108	2区37C06 (床石)	—	—	—	—	N-46°-E	東壁中央	—	—	—	—	×	—	10C後	—	
109	2区39C04	正方形	10.26	3.26	3.24	—	N-88°-E	北壁西寄り	—	—	—	—	×	—	11C前	—
110	2区33C05	長方形	8.11	3.45	2.14	0.12	N-90°-E	東壁南寄り	50	48	55	54	×	—	10C後	—
111	2区19C20	長方形	11.68	3.72	3.24	0.42	N-73°-E	東壁南寄り	62	48	20	25	×	—	9C前	—
112	2区17C11	正方形	16.53	3.50	3.32	0.25	N-166°-W	西壁南隅	114	100	46	64	×	—	9C前	—
113	2区17C20	長方形	18.78	5.44	3.45	0.84	N-66°-E	北壁中央	70	42	40	66	×	—	8C後	—
114	2区15B33 (床石)	—	8.88	3.10	2.90	0.03	N-19°-E	北壁か	—	—	—	—	×	—	6C後	—
115	2区16B35 (床石)	—	12.11	3.80	3.20	0.05	N-19°-E	北壁 (40)	—	(60)	—	—	×	—	6C後	—
117	2区15C15 (床石)	—	26.10	5.80	4.90	0.19	N-167°-W	南壁中央	106	54	38	32	×	×	11C前	—
118	2区18C16	正方形	23.66	4.88	4.84	0.49	N-67°-E	東壁南寄り	66	58	26	(46)	×	—	8C後	—
119	2区19C14	正方形	14.10	3.85	3.44	0.50	N-125°-E	東壁南隅	137	58	32	46	×	×	11C前	—
120	2区13C10	正方形	20.73	4.78	4.48	0.18	N-1°-E	北壁か	—	—	—	—	×	—	9C後	—
122	2区15C13	正方形	30.06	5.62	5.38	0.70	N-15°-W	北壁中央	100	66	45	32	×	—	8C後	—
123	2区07C03 (床石)	—	31.70	6.04	5.58	0.29	N-40°-W	北壁中央	90	75	44	54	○	×	7C前	—
124	2区06C03	長方形	16.08	4.76	3.60	0.20	N-67°-E	東壁北隅	64	40	44	32	×	×	8C後	天井石一緑色片岩
125	2区03C05	正方形	12.89	3.56	3.50	0.33	N-138°-W	西壁南隅	95	80	58	80	×	—	11C前	—
126	2区15B42	不明	—	—	—	—	不明	不明	—	—	—	—	×	—	6C後	—
127	1区47B49	長方形	10.76	4.04	2.80	0.98	N-73°-W	西壁中央	50	46	58	58	×	—	11C後	支脚一層母石炭片岩
128	1区11C05	長方形	10.10	3.62	2.88	0.16	N-80°-E	東壁南隅	62	52	42	48	×	×	9C後	—
129	2区06C06	長方形	8.81	3.24	2.80	0.21	N-13°-W	北壁東寄り	60	52	34	35	×	—	8C後	—
131	1区47C04	長方形	6.46	2.57	2.46	0.11	N-11°-E	北壁中央	60	27	48	42	×	×	8C後	—
132	2区06C12	不明	—	—	—	—	N-94°-W	西壁 (46)	145	70	56	43	×	—	10C後	—
133	1区44C01	長方形	7.98	3.10	2.60	0.23	N-52°-W	西壁か	—	—	—	—	×	—	8C後	—
134	1区45C02	正方形	10.16	3.34	3.22	0.51	N-11°-W	北壁東寄り	53	38	26	60	×	—	8C後	—
135	2区04C06	不明	—	—	—	—	N-95°-W	西壁南隅	116	40	36	—	×	—	11C前	—
136	4区14C07	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	—	10C前	36住のセクションに確認。

第3節 集落の変遷について

本節では、前々節(1)の土器分類及びその編年に基づき、本遺跡における集落のあり方について検討する。土器分類から12期に分けることができ、その分類に基づき、竪穴住居跡の分布図を作成した。特に、一時点の集落を復元することは不可能であり、作成した分布図のうち、2期から12期までは、それぞれおよそ半世紀の時間幅をもうけた。また、集落論を展開するときには竪穴住居跡外の土器などの遺物の存在を子持村黒井峰遺跡で確認されたような平地式住居跡との絡みで常に考えなければならず、本遺跡の集落でも考慮すべきであるが、発掘調査時では確認困難であり、実際には確認できなかった。また、掘立柱建物遺構についても11棟確認されたが、明確に時期を決定するまでに至らず、ここでは除外せざるを得なかった。その点、片手落ちであり、批判を覚悟の上で、敢えて竪穴住居跡に絞って記述することとする。

(1) 遺跡の立地

銅川によって形成された河岸段丘の上位段丘面に位置している本遺跡はさらに大きく東と西の2つの舌状台地から成る。最も西側では銅川の支流の安坪川による谷で安坪の台地と画され、東側では谷地水田で神保富士塚遺跡を隔てている。しかし、地形的にみても祭祀遺物などの出土遺物をみても、おそらく、神保富士塚遺跡と本遺跡とは同じ村落共同体と考えられ、集落の変遷を語るときは、神保富士塚遺跡をも考慮に入れる必要があると思われるが、本報告書では、本遺跡に限って変遷を行い、全体の変遷については神保富士塚遺跡の報告を待ちたい。東側と西側の台地の間には小さな谷地が存在し、今でも湧水が流れており、その水を当時の人々は、生活用水に使用していたと思われる。

(2) 時期別住居跡分布

第1期以前の遺構について

縄文時代では、早期から晩期までの土器片や石器類・珠状耳飾などが出土しているが、遺構としては

鹿沼栄輔

落とし穴状遺構1基のみであった。弥生時代では、中期の土壇墓とおもわれるもの1基、土坑とおもわれるもの1基の計2基が確認された他は、表採という形で遺物が出土しているに過ぎない。縄文・弥生とも集落域は本遺跡よりも北あるいは南にずれる所に形成されているものと考えられる。

第1期

調査地の最も西端に2軒存在する。2軒ともプランは方形を呈し、炉跡を持つ。この両住居跡から出土した土器のうち、在地系のものに交じって胴上部に羽状縄文を持つ非在地系の土器が出土していることが特徴である。時期は、4世紀前半と思われる。

この時期の他の遺物としては、東側の舌状台地にある120号住居跡の埋没土の中から刷目文を持つ小型甕の口縁部・胴部が出土している以外は、全く出土していない。この時期を過ぎると第II期までおよそ2世紀のプランクがある。

第II期

調査地の西側の舌状台地に集中して15軒存在し、東側の舌状台地には1軒も確認できなかった。それらの住居跡の主軸方位はほぼ一致し、おそらく、特定の企画性のもとに集落が作成されていたと考えられる。また、この分布状況から4グループに分けることができる。すなわち、1・3・6号、12・15号、27・36・53号、35・47・49・57・75・76・77号の4グループであり、その中には大型住居と中型住居あるいは大型住居と小型住居などの組み合わせがある。それぞれは後の奈良時代の1戸に当たるような家族単位であろうか。西側の舌状台地のこの4グループの占拠した場所は、以後の古墳時代後期を通じて、人々に継承されていた可能性がある。

特にこの時期の住居跡に特徴的なことは、以下のとおりである。

- ① 1辺が8m程もある大型のものが他の時期に比べて多く、特に36・57・76号は作り替えている。
- ② 竈の位置が北東あるいは南西にあるものが多

く、53・57号では北東から南西に、76号では南西から北東へ移動された。

③ 炭化材が36・49・53・57・76号住居跡より出土し、また、15号住居跡の埋没土中から多量の炭化物粒が出土している。

④ 15・27・53・57号住居跡の竈周辺からは土器類があたかも使用時のままの状態出土している状況が見受けられるが個体数が少ない傾向もある。

これらを考え合わせると、15・27・36・49・53・57・76号住居跡は同時期に存在し、また、ほぼ同時期に焼出された可能性が非常に高いものと考えられる。また、12号住居跡からは壺を中心としたほぼ完形の土器が70個体以上出土しており、その出土状態から中央に据え置かれたり、東側から投げ込まれたりとすることが伺え、先の焼出された住居跡と何等かの関係があるものと思われる。

遺物で特徴的なことは、この時期以降7世紀前半までの住居跡の40%から、滑石製模造品や滑石チップ・石核などが出土していることである。この集落内の人々は、おそらく自分達の祭祀のために滑石製模造品の製作を行っていたであろう。また、76号からは、金属を研いだであろうと考えられる砥石類が40個以上出土していることも特徴のひとつであろう。時期は、古墳時代後期、6世紀前半。

第III期

東側に4軒、西側に18軒、計22軒確認できた。東側では初めて集落が営まれる。西側では、第II期の集落の占地に基づいて、若干のずれをもって住居を造っており、第II期の住居跡とは重複がない。このことは、この時期の住居を建てるときに、第II期の住居跡が存在したか、完全に埋まってしまったとしても人々の記憶の中にその場所が意識されていた可能性がある。また、前代に比べて大型住居の数が減り、全体に規模が同様になる傾向を伺うことができる。竈の位置は、ほとんどが東あるいは北東にある。時期は、古墳時代後期、6世紀後半と思われる。

第IV期

東側5軒、西側20軒、計25軒と時的には最も大

きな集落の時期である。この時期は、竈の位置が大きく東と北に分かれ、東15軒、北9軒、両方向1軒となる。西側では、基本的に第II期の占地に基づき集落が営まれており、第II期、第III期の住居跡と重複がみられるようになる。また、特に東端1軒、西端2軒を除くと、中央に集中する傾向が見受けられるのに対し、台地の西半分では、軒数が急激に減少する。東側の台地では縁辺部に住居を造る傾向があり、最も良いと思われる台地中央部には1軒も検出されなかった。また、この時期に東側の台地、東斜面には祭祀遺構が確認された。時期は、古墳時代後期、7世紀前半と思われる。

第V期

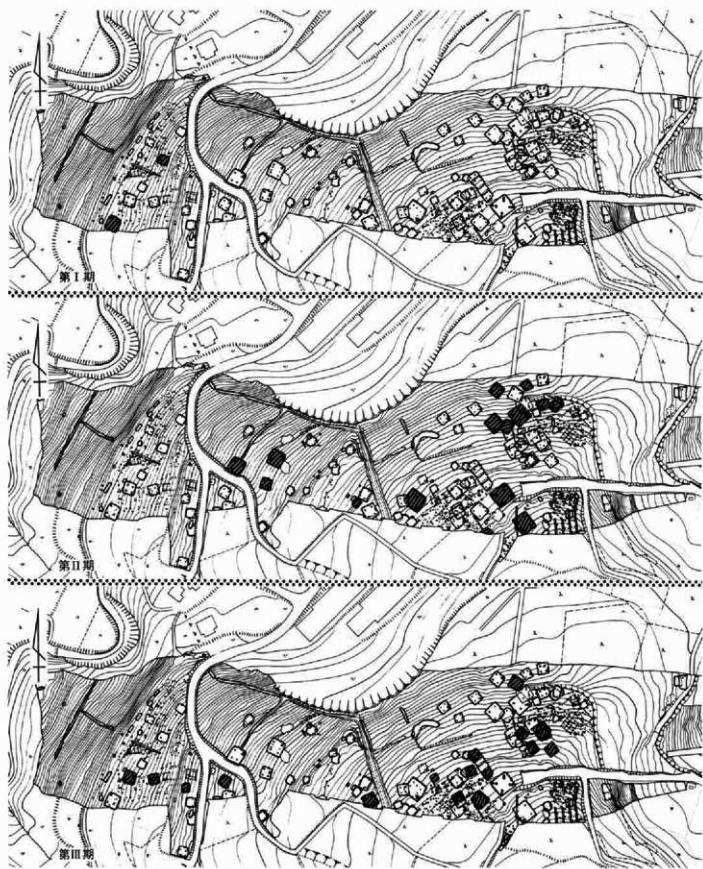
東側では0軒、西側では10軒というように前代より急激に減少し、東側では、一時期ではあるが断絶期を迎える。この時期以降、10世紀中頃までこの地域全体では集落の縮小傾向にある。西側では、今までの時代に占地されていなかった中間地域に集落を構える傾向がみられ、それは、そこから東側に占地していた第IV期の集落を意識していることと考えられる。竈は北あるいは東である。時期は、本報告の飛鳥期、7世紀後半と思われる。

第VI期

東側に3軒、西側に4軒と、初めて東西がほぼ対等になる。東側では東斜面に面した所に占地しており、西側では散在傾向である。住居の形状は、113号を除いて小さな正方形を呈するようになる。竈の位置は、東側はすべて北に、西側はすべて東側にある。すなわち、等高線に対して直交する壁に竈を構築している。時期は、奈良時代前半と思われる。

第VII期

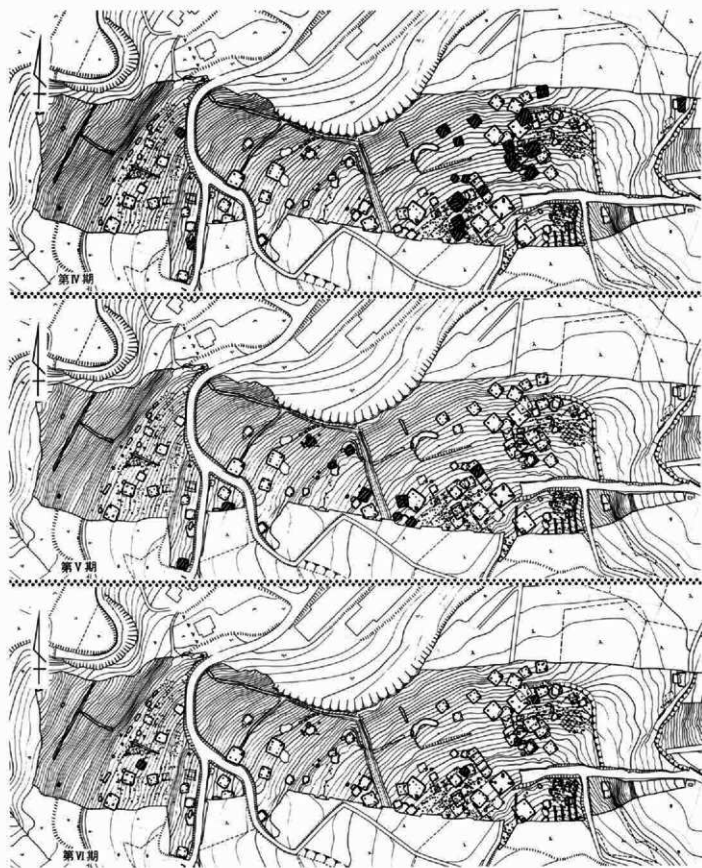
東側6軒、西側1軒と、初めて東側に主体が移る時期である。東側では、台地縁辺部から中央部へと拡大していく。西側では、西端に1軒のみである。この時期の住居跡からは、円面硯や、紡錘車が集中して出土したり、紡錘車の製作に使用したと考えられる工具類が出土するなど、遺物的には文字・布と関連するものなど、本遺跡の中で大変特徴的なもの



第495図 集落実運図(1)



第496図 集落変遷図(2)



第497図 集落安遷図(3)



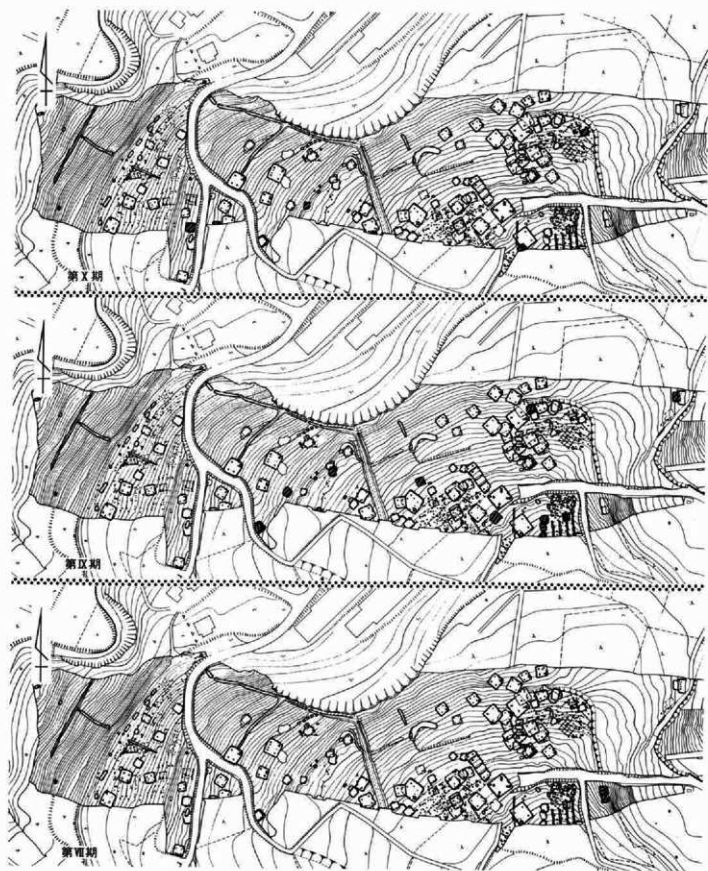
第498図 集落空通図(4)



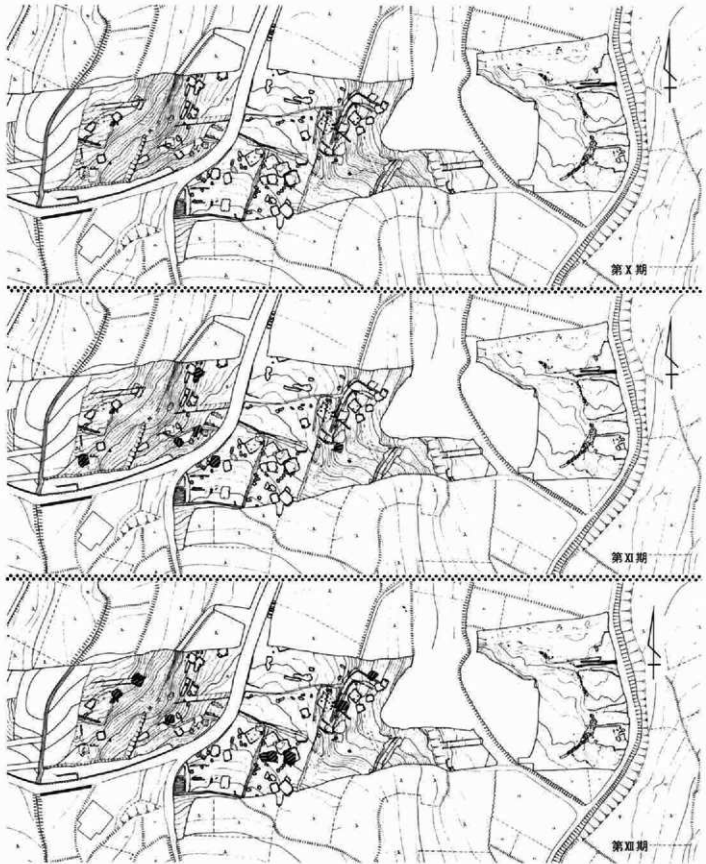
第499図 集落实遷図(5)



第500図 集落変遷図(6)



第501図 集落変遷図(7)



第502図 集落変遷図(8)

が出土している。時期は、奈良時代後半と思われる。

第VIII期

東側台地だけに3軒確認されており、西側は断絶期である。台地の頂上部から検出されている。時期は、平安時代前期と思われる。

第IX期

東側に4軒、西側に1軒確認された。西側に集落が再開される時期である。東側では、台地頂上部より若干降りた所に集中する。時期は、平安時代前期。

第X期

西側に6軒のみで、東側には確認されず断絶期に入る。この時期の住居には竪穴住居跡と明確には掘り込まず黒色土中にあたかも平地式住居のごとく住居を構えるものと2通りあるようである。また、全体に散在する状況にある。このうち、69号住居跡からは、土器やその他の遺物が集中して出土しており、特に、紡錘車4個、「□(橋カ)□(家)家」と書かれた墨書土器、木質を残した鉄器の鏝などが出土しており、特異な様相を示している。また、8号住居跡では、羽釜が出土する。時期は、平安時代前期から中葉か。

第XI期

東側に6軒、西側に13軒と、急激に増加する時期であり、この時期から羽釜が多量出土していく。東側では、台地の頂上、縁辺、さらに各地にまで集落が広がりをみせ、全体的には散在傾向にある。その中で93号住居跡のように灰軸や緑軸を伴った住居や小鍛冶跡と思われる90・110号住居のように、特徴的な住居跡が存在する。西側でも東側と同様にかなり広範囲に散在する。29号からは、大型の石製鉈尾が1点出土している。また、X期と共に、この時期の特色として、墨書や線刻など文字資料が集中していることがあげられる。時期は、平安時代中葉か。

第XII期

東側より9軒、西側より2軒、計11軒の住居が検出されており、主体が、また東側に移る。東側の台地では東斜面3、台地頂上部3、西斜面3とほぼ全域にわたって集落が形成されている。西側では、東斜面に2軒のみである。

この時期以降、竪穴住居跡は確認されなくなるが、中世陶磁器類、宋銭、多量の鉄滓などが出土しており、両台地に人々は引き続き居住していたと考えられる。その中で遺物の出土状況からみて東側の台地の方がより人々の活動が多かった可能性が高い。時期は平安時代中葉か。

(3) まとめ

全体を通しての特徴を述べてみると、東西二つの舌状台地のうち、まず、西側に集落ができた後に東側へも集落が拡大していったことがあげられる。また概して、古墳時代後期は一定の場所に集中して居住する傾向があるのに対して奈良時代・平安時代になると台地全体に拡散する形での居住のしかたに変化する。これらの点に関しては、調査範囲が限定されているという条件の中では限界があり、結論付けることはできない。また、遺跡の立地の項でも説明したとおり、地形的にも出土遺物の特徴からみても本遺跡と東隣の神保塚遺跡は同一の村落共同体である可能性が高く、その報告を持って再度考える必要があると思われる。

最後に、この集落の墓域について若干述べると、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の前半にかけては、推定ではあるが、同じ台地上にある神保古墳群が最も可能性が高いと考えられる。神保古墳群についてはこれまで一本杉古墳⁽¹⁾・城古墳の調査⁽²⁾、及び関越道上越線関連の神保植松遺跡⁽³⁾での数基の調査などが行われており、6世紀後半から8世紀前半における群集墳であることが判明している。本遺跡周辺には神保古墳群の他に、西側の安坪上段段丘に安坪古墳群が存在し距離も近いが、そこは安坪川が形成した谷によって隔てられていることが可能性を薄くさせている。また、奈良時代後期から平安時代にかけての墓域については不明である。今後の周辺の調査によって、墓域をも含めたこの地域の集落の変遷について、さらに解明されることを望んで本考を閉じる。

註 (1) 梅沢重昭「多野郡吉井町神保一本杉古墳 発掘調査報告」『群馬県立博物館報』第4号 1961

(2) 富岡高等学校歴史部「城古墳発掘調査報告書」1966

(3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987-1988年度調査。

第4節 滑石製模造品の製作について

鹿沼栄輔

本遺跡では、祭祀遺構より出土した滑石製模造品の他に、6世紀後半から11世紀にかけての住居跡からも滑石製模造品や石核・チップ、さらに、それらを製作した折に使用したと考えられる工作用の石器類や鉄器類も出土している。したがって、本遺跡では、その時期の滑石製模造品の製作地でもあったと言える。

本項では、本遺跡から出土した滑石製模造品の時代別の種類、それらを製作する時に使用された工作用具、滑石製模造品の製作工程、および滑石の産地について、若干の考察をしてみたいと思う。

(1) 滑石製模造品の時代別種類

第21表に見られるとおり、全体的に、明確にレベルがわかり本来的に住居跡に伴うものか否か判別できる例が少なく、埋没土中よりの出土として扱われているものが多いが、概して、古墳時代後期に数量的にみてピークがあることがわかり、この時代に各種の模造品が製作されていたとすることができる。1区・2区・4区の各グリッドより出土している模造品も器種や製作技法からこの時期に含まれるものであろう。ただ、調査範囲内の住居跡のうち、石核やチップが多量に出土している住居跡はなく、いわゆる、工房跡といわれる、集落外の需要のために専門的に滑石製模造品を製作し搬出・供給していたと考えられるものはなく、集落内の祭祀行為のために、製作を行ったとしたほうがスムーズと考えられる小規模のものであったと言える。

飛鳥・奈良時代には、紡錘車の製作だけになる。122号住居跡では確実に紡錘車の製作を行っており、材質は、滑石質の緑色片岩である。この時期の住居跡より出土している模造品のうち、54号・62号・113号・131号住居跡より出土している有孔円板・剣形・チップは、流れ込みの可能性が高く、おそらく、前代に製作されたものであろう。特に、131号住居跡より出土している有孔円板やチップは、住居跡の立地や製作技法から考えて、2号・3号土器集積とほぼ

同時期のものであると考えられる。

平安時代では、69号住居跡から4点の紡錘車が出土している他、117号住居跡から紡錘車の未成品が出土しているが、この住居跡は奈良時代の122号住居跡と重複しているため、未成品は、122号に含まれるかもしれない。90号住居跡出土の剣形・白玉は、本来的に91号住居跡にふくまれるものであり、108号住居跡は、住居跡であるか不明の部分があり、さらに、112号住居跡出土の白玉も流れ込みの可能性が高い。

特に器種のうち、紡錘車については、未成品も含めて全体で25個出土しているが、時期で分けると

古墳時代後期	2
飛鳥・奈良時代	9
平安時代	7
時期不明	7

となる。見てわかるとおり、飛鳥・奈良時代になって急激に増加していることがわかる。このうち、118号・122号・69号住居跡からそれぞれ3～4個集中して出土している。118号・122号住居跡は、8世紀後半に、69号住居跡は、10世紀前半に比定される住居跡であり、これらのことから、当時の徴税とのなんらかの関連性が考えられること、集落内の特定の住居で布生産を行っていた可能性があることなどが何われる。

(2) 製作工具について

滑石製模造品の表面に残っている製作時の成・整形痕、調整痕からの類推や供伴して出土している鉄器・砥石・石器などから滑石製模造品を製作したときに使用したと考えられる工具類について時代別に列挙しておきたい。

① 古墳時代後期

〈石器類〉

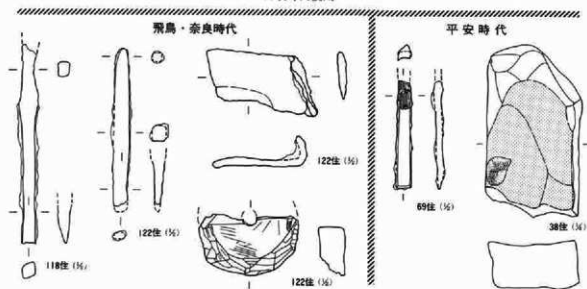
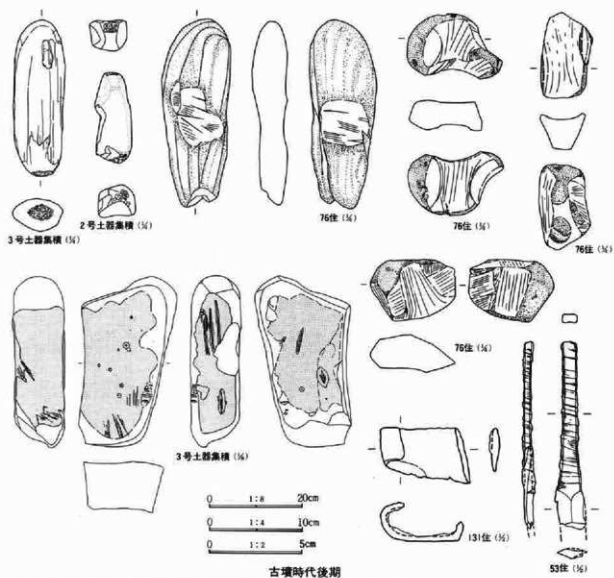
敲打石 2号・3号土器集積・33・39・44・53・56号住居跡出土。雲母石英片岩やデイサイト・黒色片岩・緑色片岩などを利用。滑石の荒削りや形削りに使用。

第4章 成果と問題点

第21表 出土滑石製模造品一覧

時期	器種	刻玉	円板		方板		刺形	白玉	馬形	紡錘車	未完成チップ	石核	合計点数	
			有孔	無孔	有孔	無孔								
古墳	6号住		1▼										1	
	12号住				1			6▼			2▼	1▼	10	
	17号住						1▼						1	
	22号住										1▼	6	7	
	23号住						1▼						1	
	24号住											1▼	1	
	27号住											2	2	
	31号住					1▼	2▼				1▼			4
	32号住						1							1
	33号住						1							1
	34号住											1		1
	35号住						1▼	1▼						2
	39号住											1▼		1
	41号住		1▼								3▼			4
	42号住							1		1				2
	44号住					4▼					1▼			5
	56号住		1▼					1▼						2
	57号住	1										3▼		4
	58号住		1▼											1
	74号住									1▼				1
	78号住							1						1
	82号住										1▼			1
	91号住						1▼	5					1▼	7
	106号住							1						1
	123号住							1▼						1
	2号土器集積		12				6	1	12			115		146
	3号土器集積	6	53				17	1				142		219
	飛鳥	9号住									1			1
		21号住										1▼		1
		30号住										1▼		1
		54号住		1▼				1▼						2
	奈良	82号住		1▼										1
		113号住						1▼				1		2
		118号住									4			4
		122号住									3	9▼		12
129号住											2▼		2	
131号住			2								9▼		11	
134号住										1▼			1	
平安	28号住											1▼	1	
	89号住									4			4	
	90号住					1▼	2▼				1▼		4	
	98号住									1▼			1	
	108号住						2▼						2	
	111号住										1		1	
	112号住						1▼						1	
	117号住									1			1	
代	128号住									1▼			1	
	2号溝									1▼			1	
	1区グリッド					1▼	1▼				2▼	1▼	5	
	2区グリッド	3▼	5▼			5▼	5▼	2▼	6▼	6▼	21▼	4▼	51	

第4節 滑石製模造品の製作について



第503図 滑石製模造品製作工具類

第4章 成果と問題点

時期	器種	勾玉		円板		方板		剣形	白玉	馬形	紡錘車	未成品 チップ	石核	合計点数
		有孔	無孔	有孔	無孔	有孔	無孔							
	4区グリッド	1▼	2▼	1▼	1▼			1▼	2▼			1▼	2▼	11
	ラベルなし								2▼			1▼		3
	総計	11	89	1	2	5	41	34	14	25	319	21		553

註1 紡錘車には、滑石質の蛇紋岩・緑色片岩も含まれる

2 ▼印は、埋没土中よりの出土。

工作台 2号・3号土器集積・34・35・36・57号住居跡出土。粗粒安山岩・黒色片岩などを利用。

砥石 2号・3号土器集積・17・23・24・27・28・31・32・34・35・36・39・42・47・48・53・56・57・58・65・68・73・74・75・76・78号住居跡出土。砂岩・デイスイト・流紋岩・緑色片岩・粗粒安山岩・角閃石安山岩（標名二ツ岳軽石）などを利用。金属や滑石を磨く。

〈鉄器類〉

鉋 3号土器集積出土の砥石表面に痕跡。穿孔のある模造品・紡錘車より類推。

刀子状工具 106号住居跡出土。砥石の刃ならし傷や滑石製模造品の表面の整形痕から類推。

鋸状工具 滑石製模造品の表面の整形痕から類推。

U字状工具 76号住居跡出土の砥石の使用面にRが弱いU字状の凹面凸面があることから類推。刃幅は、2.4～3.7cmの間に収まるものと思われる。（製作時に使用した可能性）

鉋 53号住居跡より出土。（製作時に使用した可能性）

鎌転用工具 131号住居跡埋没土より出土。131号住居跡より出土している滑石製模造品が2号・3号土器集積と同じ古墳時代後期の可能性が高いことから供伴する本遺物も同じ時期に入れることができる。

② 飛鳥・奈良時代

〈石器類〉

敲打石 122号住居跡より出土。材質は雲母石英片岩。原石の荒削りや形削りに使用。

砥石 118号・122号住居跡より出土。砂岩・流紋

岩を利用。金属や滑石・緑色片岩。蛇紋岩を磨く。

〈鉄器類〉

鋸 118号・122号住居跡より出土。特に、122号住居跡より出土の鋸の刃幅と紡錘車未成品側面の整形痕の幅が一致する。

鎌転用工具 122号住居跡より出土。

鉋 118号・122号住居跡出土の紡錘車の穿孔部分から類推。

③ 平安時代

この時代には製作痕の確認はできなかったが、紡錘車の成品および未成品が、出土していることから本遺跡周辺で製作が行われていた可能性があり、本遺跡内より出土している工具類、または、類推できる工具類を参考までに上げておく。

〈石器類〉

敲打石 38号・69号住居跡より出土。材質は、黒色片岩・雲母石英片岩。

砥石 38号・69号住居跡より出土。材質は、砂岩。金属を磨く。

〈鉄器類〉

鋸 69号住居跡より出土。

鉋 紡錘車の穿孔部分から類推。

刀子 26号・97号住居跡より出土。

(3) 製作工程について

本遺跡出土の滑石製模造品（一部、滑石質の蛇紋岩・緑色片岩を含む）は、そのほとんどが、刃物による削り調整で製作を終了しているということが特徴であり、磨き上げという行為は、白玉の側面、紡錘車の表面、12号住居跡出土の有孔方板1点、44号住居跡出土の方板、および1区グリッド出土の勾玉などにみられるだけである。

以下に、それぞれの滑石製模造品の製作工程について、『古代玉作形成史の研究』・『神板峠』など数多くの論考を参考にしながら本遺跡の特徴を若干述べてみたい。

〈1〉勾玉の製作工程

今回出土した勾玉の内、成品11点、製作途中で判断されるもの3点である。すべてが同遺構からの出土ではないため、若干の疑問も残るが、本遺跡で考えられる勾玉の工程は、以下の通りである。

① 荒 割

原石は、『三波川変成帯』に産地が求められる緑色がかった滑石で、露頭部分からの、あるいは河原の転石の採取と考えられる。その原石から板状剥片を製作する段階がこの過程であるが、できた原材料は、勾玉だけでなく、有孔円板・有孔方板・剣形その他

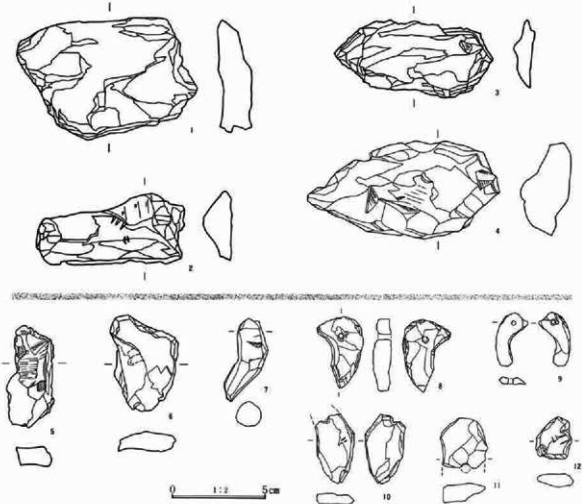
の模造品を製作することが可能な段階であり、勾玉を意図した荒割と言うことはできないと思われる。

② 形 割

この工程では、荒割された板状剥片をさらに薄く、細く打ち欠き、上下左右端を落として、勾玉の大きさの限定がなされる段階である。この時に使用される工具は、敲打石・槌状工具であろう。第504図の5の表面には刃幅約8mmの槌状工具の刃跡がある。また、この段階で石の擦理に沿って細長く形削している。

③ 削り整形・調整

この工程では、形割された未成品を刀子状工具・槌状工具で削り、整形・調整をしていく段階で、この段階で、穿孔を残してほぼ完成品となる。時代がさかのぼると研磨による整形を施してあるのが通例



第504図 滑石荒割及び勾玉製作工程

だが、本遺跡の勾玉は、削りによる整形・調整で終了しているのが、特徴であろう。さらに、もう少し、詳細に観察すると、始めに、形割された未成品の上下・側面全体を粗く削り、おおよばに勾玉の形を作り、次に、上下面を丁寧に削り、最後に、側面を丁寧に削って終了していると思われる。成品は、C字形よりも「R」がかなり緩くなっている。

④ 穿孔

勾玉の穿孔部分を観察すると、一方向穿孔の場合に穿孔終了時の欠けが残っていることから、穿孔が製作工程の最終段階であると考えられる。穿孔方向には一方向からと両方向からの2通りがあり、方法としては、錐による場合と刀子状工具の先端を利用する場合の2通りが考えられる。

〈2〉有孔円板の製作工程

本遺跡から出土した滑石製模造品の中では、最も数の多いものであり、80点を数える。また、製作途中と考えられるものも3点確認できた。

① 荒削

勾玉と同様に原石から板状剥片を削り出す段階のものである。

② 形割

荒削の段階で製作された板状剥片の上下・左右の

端部を削り、さらに、角を落として、円に近い形に整えていく。

③ 削り整形・調整

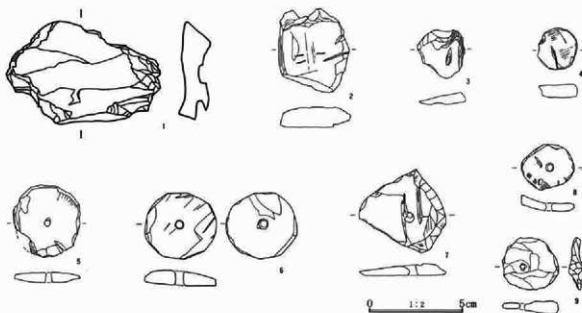
刀子状工具・鑿状工具などを利用して上下平面・側面を削りて整形・調整していく段階である。この場合、全面を丁寧に削る場合と一部分で終了しており、形割段階の面がそのまま残っている場合とあり、後者の方が、数量的に多い。また、中には、円形を呈していないものもある。

④ 穿孔

成品の中に、穿孔の終孔部に穿孔時の欠けが残るものがあることから、穿孔を最終段階とした。穿孔方向には、一方向穿孔と両方向穿孔と一方向から穿孔したのち終孔部において「面取り」による修正が施されているものの3通りがあり、方法も錐による場合と刀子状工具による場合の2通りが考えられる。

〈3〉方板の製作工程

有孔方板 1点、無孔方板 5点の合計6点が出土している。このうち、無孔については、それが成品なのか未成品なのかは不明である。また、製作途中のものを確認できなかったために、工程は、他の模造品のそれから類推せざるを得ない。



第505図 有孔円板製作工程

① 荒 割

前述の勾玉・有孔円板と同様に、原石から板状剥片を製作する段階である。

② 形 割

荒割で製作された板状剥片をさらに薄く割ったものの上・左右端部を落として、方板の大きさを限定させる段階である。

③ 研 磨

質の粗い砥石を使用して方板を作る。この段階で側面を金属器で削ることもすることがある。無孔のもの、この段階で製作終了している。

④ 穿 孔

穿孔してある例は、12号住居跡出土の1点のみで、その観察からは、終孔部に穿孔終了時の欠けが見られるため、研磨したのち、穿孔していることがわかる。

〈4〉 剣形の製作工程

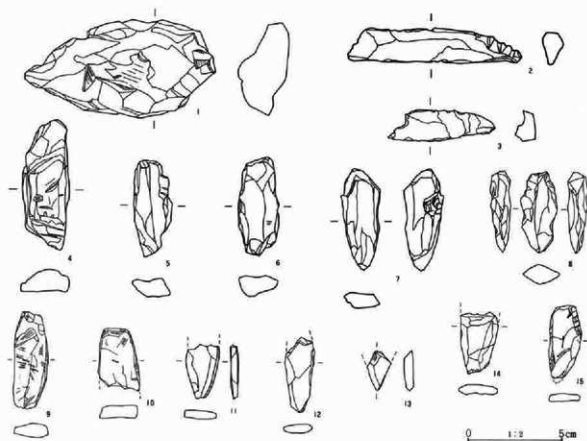
本遺跡では、成品・未成品を含めて、41個ある。それらの特徴としては、すべて、穿孔されていないということである。2号・3号土器集積の出土状況から穿孔がない状態で、成品として扱っていたと考えられる。また、形状は、一方が刃先を、もう一方が柄を表しているものではなく、両方とも刃先を表している場合か、刃部だけで柄の部分を省略している場合かのどちらかである。以下に、その製作工程について、整理したい。

① 荒 割

前述の勾玉・有孔円板と同様に、原石から板状剥片を割り出す段階であるが、その段階で、剣形を意識して細長く、割っていた可能性がある。第506図の2がそれに当たるか。

② 形 割

荒割の段階で製作された原材料の一端か両端かを尖らせて、剣形の大まかな形状を割りや削りで作り出



第506図 剣形製作工程

す。使用する工具は、敲打石や刀子状工具と思われる。このとき、厚さもほぼ決められる。

③ 削り整形・調整

おそらく、刀子状工具を使用して刃部を削り出す。この折り、溝の表現は施さず、また、刃部もある程度の厚さを残すため、断面は、菱形に成らず、ほぼ細長い長方形を呈することとなる。この段階で製作を終了させている。

〈5〉白玉の製作工程

本遺跡から出土した白玉は、34点であり、そのうち、穿孔時に割れたため、製作を途中で止めたものが2点で、他の32点は、成品と考えてよいものである。概して、大振りで厚い成品が多く、みな古墳時代後期の所産と考えられる。製作方法について、『神坂峠』では、以下の4種類をあげている。

A. 平板石に碁盤目状に直交する溝を入れ、それぞれの中央に穿孔し、チョコレートのように割るもの

◎筑前宗像沖ノ島の例など。

B. 偏平長方形の細長い板材を次々と切断し正方形の材をつくり、整形、穿孔するもの

◎出雲東忌部中島玉作の例など。

C. 板状の偏平石を原材とし、一個分ずつ削り出していくもの

◎下総船橋夏見台の例など。

D. 管玉を切断するもの

◎筑前宗像沖ノ島7号遺跡の例など

本遺跡出土の白玉の未成品の数は少ないため、上記のA～Dまでの、どの製作方法が判別することは、

かなり困難であるが、Cの個々の原材からの製作方法が最も考えられやすい。また、91号住居跡出土の成品には、できた成品をさらに輪切りにしたとみられるものもある。以下に、製作工程を順を追って記述したい。

① 荒 割

原石から板状剥片を製作する。

② 形 割

板状剥片を割って未成品の玉を製作する。

③ 粗 研 磨

未成品の側面を粗い砥石で磨き、大まかな円形を作り出す。この段階で、上下面は、刀子状工具などで削る。

④ 穿 孔

上下面のほぼ中央に棒錐で穿孔する。方向は、一方方向であり、終孔部に欠けの残るものもある。

⑤ 精 研 磨

側面を縦方向や斜め方向に研磨する。

⑥ 成品を輪切りにする

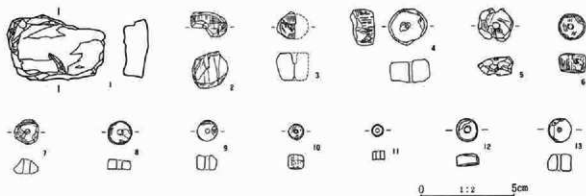
91号住居跡出土の成品の中にみられるもので、非常に偏平な作りで、上下面は削り調整しておらず、割れたままの状態になっている。これは、他の成品にはみられないものである。

〈6〉馬形の製作工程

2号土器集積出土のもの12点、2区グリット出土のもの2点の、合計14点が確認された。

① 荒 割

原材から板状剥片を製作する。



第507図 白玉製作工程

② 形 割

板状剥片の上下左右端を割り、さらに、厚さも揃えて、ほぼ扁平の直方体を製作する。

③ 削り整形・調整

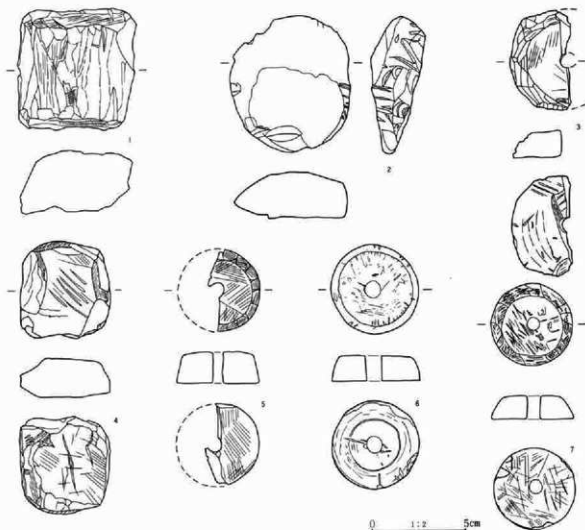
刀子状工具や蟹状工具で形割した未成品の表面・側面を整形・調整する。また、馬の表現として、背部中央と頸部から頸部に切り込みをいれる。馬形の中には、表面全面を面取りしたものと一部分だけ削って原石面がそのまま残っているものとある。

〈7〉紡錘車の製作工程

紡錘車は、前述したとおり、古墳時代後期から平安時代までの遺構から出土しており、他の滑石製模造品とは、性格を異にする。材質も滑石だけでなく、

滑石質の緑色片岩・蛇紋岩もあるが、ここでは、一括して扱うこととする。出土数は、グリッド出土のものも含めると、25個であり、この中には、未成品も含まれている。さらに、122号住居跡では、未成品3点とともにチップも9点出土しており、蟹状工具も住居跡から出土していることから、紡錘車を製作していたと思われる。

時期別に製作工程を追おうとすると、古墳時代後期の2点は、成品であるため、工程を追うことができない。また、溝やグリッド出土の未成品は、いつの時代に引かれるか、不明な部分があり、かなり問題を含んでいると思われるが、溝やグリッド出土の未成品は、すべて断面が扁平な台形の紡錘車を意図



第508図 紡錘車製作工程

第4章 成果と問題点

していること、本遺跡では、断面が偏平な台形をした紡錘車は、古墳時代後期からは出土していないことなどから、飛鳥・奈良・平安時代に引かれる可能性が高いと考える。

以上を踏まえて、本遺跡の飛鳥・奈良・平安時代の紡錘車の製作工程を追っていく。未成品の観察により、2種類の製作工程を復元できる。その中で、①荒削 ②形削までは同じ工程であるが、第3段階で工程の異なりが生じてくる。以下に、順を追って記述していきたい。

A工程

① 荒削

原材から削片を削り出す。

② 形削

削片の端部を削り、ほぼ偏平の直方体に整える。

この段階で、鑿状工具を使用し始める。第508図の1がこの段階にあたる。

③ 形削り

刀子状工具や鑿状工具により、形削したものを円形に削り出し、さらに、長軸面・短軸面・側面を削り出し、大まかな紡錘車の形をつくる。第508図の2・3がこの段階に当たる。

④ 穿孔

形削りをして作成した未成品に鎌で穿孔する。方向は、一方向と両方向と2通り考えられる。図の3がこの段階にあたる。

⑤ 研磨による整形・調整

粗い砥石で鑿状工具の刃先をならし、仕上げ砥石を使用して精研磨して仕上げる。

B工程

① 荒削 A工程と同じ

② 形削 A工程と同じ

③ 粗研磨

粗い砥石を使用して短軸面・長軸面・側面と面取りする。この段階である程度の紡錘車の形にする。第508図の4がその段階にあたる。

④ 穿孔

粗研磨した未成品を鎌により穿孔する。方向は、

一方向からと両方向からの2通りが考えられる。

⑤ 精研磨

仕上げ砥石で仕上げる。

(4) 滑石の産地について

本遺跡の南側には関東山地がそびえており、その中に結晶片岩の地帯である「三波川変成帯」が存在している。この変成帯からは、滑石（蠟石）や蛇紋岩など模造品の原材となる岩石が産出される。この地域では、昭和20年代に盛んに採掘がされていた。その産地は、およそ3カ所あり、すべて鍋川にそそぐ支流の上流に集中している。すなわち、東から、鮎川の上流の藤岡市日野地区、大沢川の上流の大判地・大沢地区、雄川の上流の甘栗町小幡の轟地区・秋畑地区である。それぞれの地区では、その周辺から産出される原材を加工する工場もあったが、現在、そのほとんどの鉱山・工場は、閉鎖されている。

甘栗の谷にはこの「三波川変成帯」を背景にして、古墳時代後期を中心とした時期に滑石や蛇紋岩を利用して祭祀時の供犠品を製作したと思われる遺跡が数多くあるが、それらのほとんどが、先にあげた鍋川の支流の近辺にある。鮎川左岸の「竹沼遺跡」、雄川右岸に「笹遺跡」・「甘栗条理遺跡」、そして、大沢川左岸の本遺跡などである。

本遺跡から出土した滑石や蛇紋岩の産地について考えると、距離的には、最も近い大沢川上流の大判地・大沢地区の産の可能性が高いとおもわれる。現在でも、大判地地区では滑石や蛇紋岩を採取することができる。採取した原材の色調は、本遺跡から出土したものと似て、大変緑がかっているが、多少、片岩質が強いように思える。昭和20年代に大判地では3カ所で採掘をしており、筆者が採取した場所は、その内の1カ所である。

また、甘栗町轟地区でも採取できた。それは、やはり緑がかっているが、質的には大判地のものよりも滑らかで、本遺跡のものに近い。

滑石や蛇紋岩は、脈を形成しており、同じ脈の中でも質が異なり、さらに、同じ「三波川変成帯」の中の別の採掘場所でも同質なものを産出し、成分分

析をしてもその違いは判明できないとのことである。

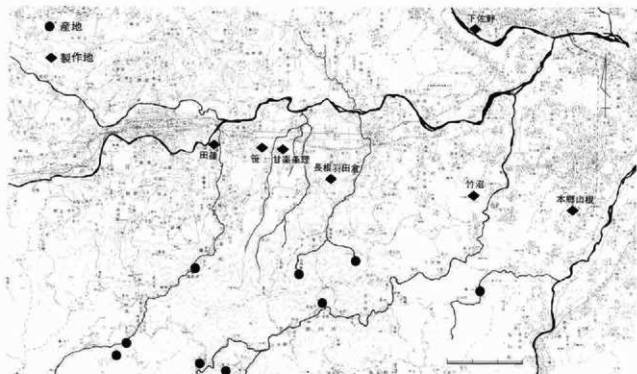
以上のことを踏まえた場合、遺跡から出土する滑石や蛇紋岩の産地を特定することは、かなり困難であるといえるが、それを考慮にいれて可能性を考えた場合、古墳時代後期から平安時代の本遺跡に居住していた人々は、最も近距離の大判地地区まで採取にきたか、あるいは、大沢川の下流の川原の転石を採取して、模造品を製作していたものと考えられることができるであろう。ちなみに、本遺跡に最も近い下神保地区の川原では、原石は、現在採取できない。

また、本遺跡の滑石製模造品は、祭祀時の神への供献品として位置づけられる最終段階であるが、仮に、滑石や蛇紋岩が、当時、依然として祭祀との関係で重要視されていた場合、あるいは、当時の交易品の1つとして存在した場合、この甘楽の谷の領域支配の状況を考慮にいれて考える必要があることは明らかである。しかし、筆者はそれを明確にする力を現在持ち得ない。今後の課題としたい。

以上、滑石製模造品について、時代別種類、製作工具、製作工程、石材の産地について、本遺跡出土の遺物から考えてみた。^{註1)}

本遺跡からは、例えば、藤岡市竹沼遺跡や甘楽町甘楽条理遺跡のような古墳時代後期の滑石製模造品の工房跡は検出されなかった。ただ、62軒を数える古墳時代後期の住居跡の内、25軒から滑石製模造品や石核・チップなどが出土しているという、およそ40%の高確率での出土や2区グリッドの谷地部分から数多くの出土しているということは、隣の神保富士塚遺跡を含めた、当時この地域に居住していた人々の滑石製模造品を使用した祭祀に対する意識の高いことの表われであると考えられる。隣接する長根安坪遺跡や神保植松遺跡・多胡蛇黒遺跡・矢田遺跡・多比良追部野遺跡などの広大な面積の遺跡やその他の遺跡など、古代多胡郡内の遺跡からは、これほどの滑石製模造品や未成品・チップなどは出土していないという事実を踏まえて、本遺跡は、祭祀という行為において、他の地域とは異なった、特別の位置にあった場所ということが言える。

註1) 本遺跡では、滑石製模造品の他に高塚製玉5点が古墳時代後期の17号住居跡より出土している。この製作を何わせるものとして、巻頭の口絵で紹介したとおり、本遺跡より鴨塚の切片2点が遺跡外ではあるが出土していることが注目される。すなわち、本遺跡では滑石製模造品の製作のみでなく、少数ながら高塚製品の製作も行っていた可能性が高い。



第509図 滑石製模造品製作地及び滑石の産地

第5節 祭祀について

鹿沼栄輔

前節で考察した通り、本遺跡古墳時代後期の滑石製模造品製作は、年代的には、6世紀後半から7世紀前半にあたり、その間に、白玉・勾玉・有孔円板・剣形そして馬形などの模造品を製作していたと考えられるが、確実な製作跡は、確認できなかつた。そして、2号・3号土器集積では、祭祀行為の最終段階の状態を確認でき、また、住居跡内から滑石製模造品が、1～数点出土している例も祭祀行為として含めて考えると、まさしく、寺村光晴氏分類の「集団内自給的生産の遺跡⁽¹⁾」の形態に該当する。

本項では、本遺跡の祭祀遺物の出土状況を住居跡と祭祀遺構とに分けて、もう少し詳細にあたり、また、周辺の遺跡・類似する遺跡との比較を通して、本遺跡の祭祀の特徴を確認したい。さらに全国でも出土例の少ない馬形について若干の考察をしてみたいと思う。なお、本項で一般に「祭祀」と言った場合の定義については、いわゆる予祝や収穫祭だけにとどまらず、献いや呪術も含めた意味で使用しようとする。

(1) 祭祀遺物の出土状況

① 住居跡出土の遺物

第21表で示した通り、古墳時代後期にあたる住居跡は、62軒確認され、そのうち、滑石製模造品や石核・チップを何等かの形で出土する住居跡は、25軒を数え、40%を占める。これらのすべてが、祭祀行為と直接関係があるか否かについては問題が残るが、間接的に関係することは事実であろう。そのうち、竈内から出土している住居跡が、12・27・33・42・57・78号住居跡の6軒を数える。27号では、竈両袖上面から石核が1点ずつ合計2点、33号では竈覆土から剣形未成品が1点、42号・78号では、竈覆土から白玉が1点ずつ、57号では竈覆土から勾玉未成品が1点、それぞれ出土している。また、12号住居跡は、土師器壺・小型壺・高環・環・鬲などが、ほぼ完形のまま70点以上廃棄されたと思える状態で出土しており、それらに混じって、白玉が6点、チッ

プ・石核が3点、竈に懸けられた壁の中から有孔方板1点が出土している。

また、祭祀遺物である手捏土器を出土している住居跡は、古墳時代後期が3軒、飛鳥・奈良時代が1軒の合計4軒である。そのうち、古墳時代後期の15号住居跡には住居内の北東隅に石組があり、祭祀と関連が考えられ、65号住居跡では、竈左袖上部から1点、竈右袖から落ちた状態で1点合計2点出土している。飛鳥・奈良時代の16号住居跡には、中央や西寄り若干浮いた状態ではあるが、立石が確認され、その周辺から手捏土器や高環などが集中して出土している。さらに、59号住居跡からは、竈覆土から土玉が1点出土している。

以上を見ると、本遺跡の住居跡内でも何等かの祭祀行為を行う場合があった可能性がある。

すなわち、まず第1に、竈に關係しての祭祀である。本遺跡の住居跡は、比較的残りの良好のものが多かったが、その中で使用時の状況のまま出土した例は、1つとしてなく、すべて、どこかが壊されるか、壊れたかした状態での出土であった。例えば、焚口部の天井石が外されていたり、片方の袖石が抜かれていたり、といった状況であった。

中沢 悟氏は、村主遺跡における平安時代の竈の出土状況の観察から「新しい家に引っ越し場合、新しい家の竈は、古い家の竈とは全く別に作られる。家と竈が完成し、家財道具等の引っ越しを行うとき、竈も引っ越しのである。(中略)古い竈は、そのままの状態でもとして放置することは避けて、竈としての機能を失わせることにより初めて竈ではなくなり、その時点で放棄しているのではないだろう。竈としての機能を失わせるための行為としては、これまで述べてきたような焚口天井石をはじめとした天井石の多くや袖石の一部等はずすことであり、このような一種の儀式が行われていたのではないだろうか。」と述べられている。また、氏の言う「竈内で消えることなく保ち続けられていたであろう火

と支脚石を新しい住居へ移動させる」ことについては、本遺跡の状況からは言えないが、前記の論は、本遺跡の住居跡の竈にも通応させることができるのではないだろうか。その竈に関する一種の祭祀行為（儀式）の折に、本遺跡の場合、古墳時代後期では、滑石製模造品や手捏土器を使用する場合があったり、飛鳥・奈良時代では、手捏土器を使用する場合があったのではないだろうか。

第2として、住居を廃棄するとき、あるいは、住居跡の凹みを利用して土器などを廃棄するとき、お蔵のような祭祀行為を行った場合があったのではないだろうか。先にあげた12号住居跡のような、古墳時代後期では小さな部類の住居跡の凹みに大型の土師器を中心に70点という多量の土器がほぼ完形で廃棄されているなかに、滑石製模造品の白玉が6点、ナツ・石核3点が含まれている状況を考えると、何等かの状況の中で廃棄せざるを得なかったことが伺え、白玉などを使用してお蔵い等の祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

② 祭祀遺構出土の遺物

祭祀遺構としては、2号・3号土器集積がそれに当たる。その詳細は、第3章第6節を参照されたいが、その中で、本遺構は、祭祀の最終段階の廃棄あるいは遺棄の状況を示すものと位置付けた。その理由として、出土土器がほとんど粉々に破砕されていること、2号の中に、坏が数枚重ねられた状態で出土したものがあること、滑石製模造品の中に製作時ではなく、整形・調整時以降に割れたと思われるものが多く出土していること、土器や滑石製模造品よりも若干浮いた状態で工作用石器類が出土していること、明確な遺構が確認されていないこと、などをあげた。それに付言して、この祭祀遺構の周辺、標高値がほぼ同じ位置から出土している滑石製模造品や、祭祀遺構の面する2区の谷地からほぼ同時期と思われる滑石製模造品が46点、多量の土器とともに散在しながら出土している状況を考えると、祭祀遺構が遺棄された場所と考えるよりも廃棄された場所と考えたほうがスムーズであると考えられる。

(2) 周辺における類似の祭祀遺跡

本遺跡の2号・3号土器集積のように多量の土器と滑石製模造品を出土とした祭祀遺構の類例を県内に求め、その中で本遺跡の位置付けを考えてみたいと思う。まず、代表的な類例をあげ、それぞれの遺構の概略を記す以下ようになる。

① 太田市反丸遺跡⁽³⁾

この遺跡は、群馬県の東部を流れる渡良瀬川右岸の微高地に広がる古墳時代後期前半の大集落跡で、この集落の東端部に住居跡の全く存在しない区域があり、その中心ともいえる場所に祭祀遺構が確認された。出土遺物は、多量の須恵器と土師器、手捏土器、土製勾玉、石製小玉、多数の土玉があり、土器の編年から集落と同時代のものであるとされている。まだ、整理がされておらず、その性格が判明していないが、出土状況の写真からは、微傾斜地に広がる土器集積であり、祭祀行為の最終段階の状態であると思われる。

② 富岡市久保遺跡⁽⁴⁾

この遺跡は、富岡段丘面の南縁部にあたり、鍋川が、南へ大きく蛇行する地点の南へ突き出した低い段丘の中央付近に位置する。遺構は、外観上は、小円墳の上部が削平されたような低い土壇をなしており、径が約12m程、高さは1m程の大きさと考えられる。この土壇の中央には、径6m、深さ50cm程の円形のくぼみがあり、その中から遺物がぎっしり詰まった状態で出土した。整理が終了していないため、数量は明確でないが、その種類は、土師器、須恵器、銅製儀器、鉄器、滑石製模造品などである。特に、滑石製模造品は、多量であり、小破片を除いても、7,000点以上にのぼる。出土状況からその場所で祭祀を行い、終了時点でその場所に遺棄されたものと考えられる。時期は、土器編年から、6世紀前半と考えられる。

③ 群馬郡群馬町三ツ寺I遺跡⁽⁵⁾

県中西部にあって榛名山の東南麓に接する「前橋台地」上、井野川の支流である猿狩川が開析した低台地上にある。本遺跡は、古墳時代、5世紀後半か

ら6世紀前半にかけての豪族居館跡である。この遺構のうち、濠・張出部・柵列・石垣・石敷・井戸・住居など、この居館を構成するそれぞれの構造物跡の特定部分から土師器・須恵器・滑石製模造品・木製品などの祭祀遺物が集中して出土している。張出部・柵列・石垣などの構造物の建設にあたり、祭祀行為を行い、また、石敷・井戸など特定の場所で祭祀行為を行い、さらに、祭祀行為の最終段階で濠に祭祀遺物を廃棄することが行われていたと考えられる。特に、1号石敷遺構からは、620点の土器・32点の滑石製模造品、2号石敷遺構からは、1000点の土器・5点の滑石製模造品が出土しており、それぞれ1号溝に流れる水に対しての祭祀行為の場として位置付けられる。本遺跡全体の性格について、報告書では「館の内部は首長の祭政実行の場として計画的かつ整然と区画され継承されており、館での祭祀行為は、共同体の基盤である農耕に対する祭祀を一方の主要行為として位置付け、儀礼化させて館内に持ち込んでいる。また、一方の主要行為として首長権にかかわる井水に対する祭祀も館内に持ち込んでいる。(中略)館の築造や改装、廃絶といった画期に各構造物に祭祀行為を行っている点は、館そのものが神聖な場としての位置付けがなされていた結果である。」と考え、この居館全体が共同体の祭祀行為の場として神聖視されていたと結論付けている。

④ 伊勢崎市原之城遺跡⁽⁶⁾

本遺跡は、赤城山南麓の大間々扇状地の西端に位置する。この地は、等高線に沿って東西約10kmにわたり湧水池が点在し、それを水源とする谷地の西側に形成された低台地上に本遺跡はある。遺構は、環濠跡とその内部の竪穴式住居跡と掘立柱建物遺構が主で、全体の状況から6世紀における豪族の居館跡であることが判明した。その台状部の東北隅に祭祀遺構が確認された。遺構は、ほとんど平地で、そこに手掘土器約400点、土師器・須恵器多量、滑石製模造品約150点、鉄器1点などが出土した。土器類は、口縁部を上に向けて重ねており、その中に滑石製模造品の白玉・剣形などをおいている。そして、遺物

が集中する縁辺部には土師器の坏を重ねて並べ、その四至には須恵器大型器台を立てた痕跡が認められた。出土状況からこの場所で祭祀行為を行ったものと判断できる。年代は、土師器は、鬼高II、須恵器は、陶器編年におけるTK-10型式に比定することができ、6世紀中頃を中心とした時期を与えることができる。

⑤ 波川市中村遺跡⁽⁷⁾

本遺跡は、榛名山東麓、浪川市の南に位置し、利根川の右岸にある。地形は、利根川が基盤層を形成し、茂沢川により低湿地・微高地は形成され、弥生時代以降、集落が作られていった。調査により、この地は、火山や河川などの自然災害を何回となく、受けてきた場所であることが判明した。この遺跡のB区の水田に面した微高地に9カ所の土器群が確認された。その中には出土の形状が「V」字形を呈するものなど配置意図が認められ、滑石製模造品などは出土していないので明確ではないが、これらの土器群は単なる土器廃棄の場ではなく、祭祀遺構と位置付けられた。時期は、FP(榛名二ヶ岳軽石)に埋没していることや須恵器がMT-15~TK-10に相当することから6世紀前半と考えられる。

⑥ 前橋市荒砥前原遺跡⁽⁸⁾

本遺跡は、赤城山南麓の端部にあたり、荒砥川と神沢川の合流点を一望することができる台地上に位置する。その台地の縁辺部から手掘土器639点(個体数200個以上)を中心とする祭祀遺物が確認された。ただ、発見時、すでに遺構としての把握が不可能であり、出土地点の土壌をフルイにかけ、全遺物の採集を行ったとのことである。また、調査の結果、周辺の開墾の際に集められたものであることが判明したが、確認範囲は、10m四方という狭い範囲であり、点数からして土器集積であったことが推測される。滑石製模造品は出土していない。手掘土器の時期は、伴土器が古墳時代初期から鬼高I期にかけてのものであるが、鬼高I期に引かれる可能性が高い。

⑦ 子持村黒井峰遺跡⁽⁹⁾

本遺跡は、吾妻川に面した河岸段丘最上段にあり、

この段丘面は子持山より南北に流れる小河川によって台地状に分割され、遺跡の位置する台地は広さ約160,000㎡の面積をもつ。本遺跡は、榛名山ニッ岳を給源とする厚さ1.5mの軽石（F P）層により覆われており、軽石下の旧地表面は榛名山ニッ岳降下火山灰（F A）層となっている。その面から古墳時代後期の集落遺構が確認されており、祭祀遺構も9カ所検出されている。その中には、大規模の祭祀遺構と小規模のものがあり、さらに、場所が道路脇や建物脇、木の根元と言うように幾つかのパターンが見られ、中には土器のすぐ脇に棒を立てたと考えられる小穴が確認されたものもある。そのうち、大規模の祭祀は、完形品で約250点ほどの土器を中心とした土器群であり、土器型式で2型式ほどの期間、祭祀が行われたものと考えられている。出土状況は、F A層を攪乱し埋めたものとF Pが土器を覆ったものとなり、意識的に埋める行為をする場合とそのまま置いた場合とある。また、坏などが重なった状況で出土したり、破砕された状況で出土しているものもある。さらに、坏の底に意識的に穴をあけたものも確認されており、祭祀行為の一端を伺わせている。滑石製模造品は、白玉が1点のみの出土である。その祭祀は、集落全体の祭祀場所というよりは一族共同体の祭祀場所と考えたほうがよい。時期は、6世紀前半である。

⑧ 高崎市井野川遺跡⁰⁸

本遺跡は、高崎市大八木地内、榛名山南麓に発する井野川の河床に確認された。遺物包含層は、グレイ層直上の砂質層内にあることから、水流の影響を受けた地層であり、遺物が散布するのは、東西20mの範囲である。組成は、土器・須恵器、滑石製模造品の剣形・鏡形・刀子形・斧形・勾玉などであり、特に滑石製模造品の中では、剣形が最も多く、全体に形式化・多量化的傾向を示しているという。出土状況は、滑石製模造品は、いずれもかたまつての出土であるという。この遺跡の存続時期は、2～6世紀頃であるが、主体的な役割を果たした時期は、5世紀代と考えられる。

⑨ 松井田町入山峠遺跡⁰⁹

上信国境入山峠は、現在の国道18号線碓氷バイパスの工事に伴う祭祀遺跡の緊急範囲確認調査により確認された。その結果、採取された遺物は、総点数で約2,000余点を数えるが、このうち大部分は土器の小破片であり、他に管玉・勾玉・水晶製玉・ガラス小玉・白玉・有孔円板・剣形・刀子形・鉄製品・石鏃などが多数出土しており、中でも石製模造品に、未完成が多く出土していることが注目される。峠で行う祭祀について、報告書では、「見知らぬ新しい国へ入って行く時に、それを防ぎ遮るであろう他国の国魂に対しての鎮祭であり、また、内をまもり、外来者を遮る境の神の信仰とも通じる。」としている。さらに、行為者について、「防人などのように地方から出かけていく人々の個人あるいは小集団の祈りであるとともに、大集団によるまつりであった可能性をもっている。」としている。ここで行われた祭祀行為の時期は、遺物から古墳時代前期に限定される。

⑩ 高崎市芦田貝戸遺跡¹⁰

榛名山東南麓に位置し、東100mには井野川が東南流している。確認された遺構は、浅間山C軽石直下の水田跡、榛名山ニッ岳降灰（F A）層下の水田跡・畝状遺構、微高地と住居跡、大溝などであり、祭祀遺構と考えられるものは、大溝の西脇から2箇所、II区-Dグリッドから1箇所確認された。そのうち、大溝西脇の最も高い部分からは、土器器坏・高坏が、20数個、2個の白玉を伴って出土しており、さらに、6mほど南の土堤状部分からは白玉155個、勾玉1個が、径21cm、深さ7cmほど掘りくぼめて埋まっていた。土器は、口縁部を上にして出土しているが、一部分は、重なった状態で出土していることから祭祀終了後に片付けた可能性がある。出土位置から、当時給排水路として使用されていたと考えられる大溝に対する祭祀遺構と考えられる。時期は、F A直下ということから6世紀前半と考えられる。

⑪ 高崎市田端遺跡¹¹

本遺跡は、県西部を流れる鑛川、鮎川、鳥川の合流地点に形成された氾濫原に位置し、鑛川の左岸自

然堀防上にある。祭祀遺構は、そのE区に確認された3号集石である。東半部は調査区域外にあるため、全貌をつかむことはできなかったが、白玉25点や有孔円板1点、滑石チップと多量の土器片が出土した。土器が重なって出土しているものがあること、土器の中からも白玉が出土していること、土器は圧倒的に坏類が多いこと、土器集中地のほぼ中央から鉄製鋸先が出土していること、石は人為的に持ち込まれていることなどが特徴である。時期は、土器形式から6世紀後半から7世紀と見られる。

⑫ 粕川村中祭祀遺跡

赤城山南麓の台地部分に位置し、粕川の旧河道に多くの土師器、手捏土器、滑石製模造品を埋納した祭祀遺跡である。地主が耕作中に偶然掘り出したもので出土状況から意図的に遺物が配されたというより集中的に廃棄された状況であったようである。再調査の結果、浅い皿状ピットが確認できたという。時期は、5世紀末から6世紀初頭の可能性が高い。

⑬ 高崎市正観寺遺跡群巨石遺構

榛名山南東斜面に形成された扇状地扇端部にあり、井野川支流の天王川と染谷川に挟まれた地域に広がる遺跡群である。そのE区北端の最も標高の高い位置に巨石遺構は存在する。2m×2m、高さ1.10mの上下面やや平らな、不定形な石がおかれており、その石の北、南、東から多数の遺物が出土した。組成は、土師器坏・甕、須恵器高坏・甕・短頸壺・壺など多数に及ぶ。時期は、鬼高期に属すると思われるが、整理が終了していないため、明確ではない。

以上を概観すると、おおよそ次のことが言える。

① 遺構の出土位置からみると、反丸・荒砥前原・黒井峰・田端・正観寺遺跡が集落内祭祀として位置付けられる。それぞれ集落の縁辺部や最も高い部分に位置していることに共通点があり、遺物の出土状況とも考えると本遺跡は、この範囲に入らう。

② 土器集積と一般に言われている祭祀遺構には、久保・三ツ寺I・原之城・正観寺遺跡などのように狭義の祭祀行為を行う場に祭場を作り祭祀終了

後その場に祭祀用具が遺棄されたものと、井野川・中祭祀のように別の場で祭祀行為を行い、遺物が発見された場所に廃棄されたものの2通りが存在する。本遺跡の祭祀遺構は、後者にあたり、おそらく、別の場所で、狭義の祭祀行為が行われ、確認された遺構の場所に廃棄されたのではないかと考えられる。

③ その場に遺棄される場合と廃棄される場合の違いについては、それぞれの地域の祭祀行為者の祭祀に対する考え方の違いによって生じるのか、あるいは、祭祀対象の違いによって生じるのか、現状では不明であると言わざるをえない。

④ 祭祀行為の最終段階では、坏などを重ねたり、一箇所に集中させるなど祭祀用具を片付ける行為を行うか、土器や滑石製模造品を破砕するという行為を行うなどして、祭祀行為を終了させている場合が多い。本遺跡でも最終段階で使用した用具類を時には重ねて置いたり、また、時には破砕する行為を行ったのであろう。

(3) 滑石製馬形について

全国の遺跡から出土する馬形にはいろいろな材質のものがあり、これは、地域性あるいは祭祀行為を行った人々の価値観の違いの表われであると思われるが同じ馬形という動物を用いる意味においては、それらを総て同等に扱うことが必要と思われる。馬の形をそのまま立体的に表した土馬に代表される馬形と、馬を横から見た状態をかたどった板状の馬形(木製・滑石製)とは、異なった意識あるいは祭祀行為のもとで製作されているという見解もあるが、筆者は、現段階ではその点については、まだ不明であると言わざるを得ないと考える。全国に土馬・石製・木製(絵馬も含む)・鉄製(馬歯・馬骨を一部含む)などの馬形の出土例をあたってみると、37府県^⑩619遺跡を数える。第22表より全国の分布地域をみると圧倒的に畿内、それも平城京跡・長岡京跡・平安京跡をかえり余らずに奈良・京都に集中することがわかる。しかし、時期を古墳時代に限定してみると全国に散らばる様相を見せている。また、奈良時代になると静

岡・三重・京都・奈良・鳥取などに集中して出土するようになる。そして、平安時代では、京都に集中するとともに東北地方まで馬形を用いた祭祀が波及していることがわかる。

ここで材質により、類例をあたってみると、滑石製のものは全国で本遺跡以外に7例を数えることができる。以下に各遺跡の概略を記しておく。

1. 西別府遺跡⁽⁷⁾

埼玉県熊谷市にある遺跡で、湯殿山神社裏の湧水地より祭祀遺物が出土した。奈良時代に比定されて

いるが、土器は古墳時代後期から平安時代までであり、また、湧水により攪乱を受けているのでどの時期にひかれるのか明確にできないのが現状である。

馬形 13 有孔円板 10 勾玉 16 剣形 3

櫛形 19 有線円板 19

2. 本郷前東遺跡⁽⁸⁾

埼玉県深谷市にある遺跡で、上記の西別府遺跡と直線距離で約3kmのところくに位置する。住居跡と住居跡の間に穿たれたピット群から古墳時代後期の土

第22表 都道府県別馬形出土遺跡数一覧

No	都道府県名	古墳時代	飛鳥・奈良時代	平安時代	時期不確定	No	都道府県名	古墳時代	飛鳥・奈良時代	平安時代	時期不確定
1	青森			1		21	大阪	2	8	2	9
2	秋田			1		22	兵庫		7	2	12
3	山形			2	1	23	奈良	3	98	3	71
4	福島			1	1	24	和歌山				1
5	栃木		1		2	25	鳥取	1	32		8
6	埼玉	2	1			26	島根	1	8		11
7	群馬	1				27	岡山	4			2
8	千葉			1		28	広島	2	2		3
9	新潟	1		3	1	29	山口	2	1		
10	富山	1	3	1		30	徳島		2		
11	石川	5	6		2	31	香川		1		6
12	福井				5	32	高知	1	1		1
13	山梨	1				33	福岡	3	2		14
14	長野	1		1	1	34	熊本	4		1	20
15	岐阜		4		1	35	宮崎				1
16	静岡	3	30	4	20	36	佐賀				2
17	愛知	1	9	1	3	37	鹿児島		3	1	1
18	三重	2	13	1	9	計	45	250	103	221	
19	滋賀		5	1	9	総計	619遺跡				
20	京都	4	13	76	4						

注 (1)国立歴史民俗博物館研究報告第7集(1985・3)の附篇記載例に若干の情報を加えて作成した。

(2)たとえば、時期が「古墳後期～平安」のような表現の場合、時期不確定とした。

師器環頸と供伴して祭祀遺物が出土した。滑石製模造品の組成は、西別府遺跡のそれと共通するものが多い。また、まわりの住居跡からは、滑石製模造品の製作と関連する滑石の石核やチップが多量に出土している。

馬形 4 有孔円板 10 勾玉 2 剣形 5

有線円板 8

3. 神坂峠遺跡

長野県と岐阜県との県境にある神祭祀遺跡である。時期は古墳～室町時代まで幅広く、馬形の年代は設定できない。

馬形 2 土馬 1 有孔円板 69 剣形 310

勾玉 27 白玉 903 刀子形 15 斧形 1

鎌形 1 鏡形 1

4. 山口県吉敷郡平井にある古墳より馬形 1 出土

5. 波羅が浜遺跡

山口県宇部市大字東岐波にある6世紀から古墳時代終末期にかけての製塩遺跡である。この製塩遺跡の中心部から南西30mたらずのところで祭祀遺物が出土している。

馬形 1 勾玉 2

土製模造品 勾玉 2 スプーン 1 小玉 2

手捏土器 4

6. 下高宮遺跡

福岡県宗像郡玄海町田島上殿下高宮にある宗像辺津宮比定地。

馬形 1 有孔円板 1 白玉 1 船形 1

丸玉 1

7. 宗像沖ノ島

福岡県宗像郡大島村沖ノ島にある海の神を対象とした祭祀遺跡で馬形を伴う遺跡は8～9世紀の時期と考えられている。

1号祭祀遺跡 馬形 40

3号祭祀遺跡 馬形 1

4号祭祀遺跡 馬形 10

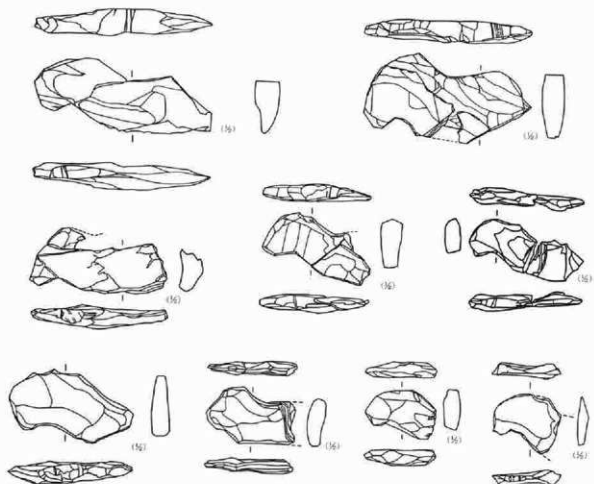
その他の遺物は多数出土しているが省略する。

小田富士雄氏は、その論考「古代形代馬考」の中で4号遺跡の馬形は後世に移動させられたもので、

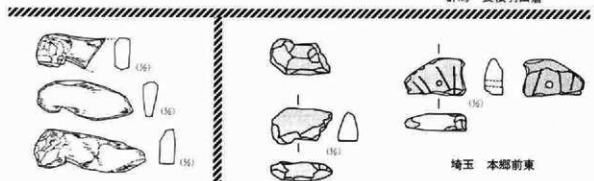
本来は、1号か3号に還元されるべきものと推論されている。

これらのうち、4・5の馬形は、形状が土馬に似ているのに対し、1・2・3・6・7の馬形の形状は板状を呈している。本遺跡の2号土器集積のものは、後者のグループにはいり、その中では、2の本郷前東遺跡のものとはほぼ同時期のものと考えられる。また、西別府遺跡の馬形は、本郷前東遺跡との関連から奈良時代よりも時期を遡らせる必要が出てきたのではないかと考える。もし、それが適切であるとすると古墳時代後期において、東国である群馬・埼玉では、なんらかの祭祀のときに滑石製の馬形を使用するという考えが、すでに存在していたことになる。これは、全国の馬形出土例からみても早い段階にあたる。

木製の馬形は、全国で31遺跡を数えるが、形状は、みな板状で滑石製のものと類似している。このうち、最も古い時期のものは、静岡県神明原元宮川遺跡の旧大谷川河道より出土したものと京都府石本遺跡の大溝から出土したものが知られている。前者の神明原元宮川遺跡では、古墳時代後期から現代まで旧大谷川の流路が13回ほど変わっている中で、中には時期が特定できる流路が良好に残っている地域があり、その古墳時代後期の流路から土器や土馬・木製人形などと供伴して木製馬形が出土した。後者の石本遺跡の溝では、木製馬形が多量の土器や木製品と供伴して出土した。土器のほとんどが古墳時代後期のものであり、さらに、溝の上下から出土している遺物に時期差を与えることはできないことなどから、馬形もこの時期のものと考えて、まづ間違えなであろう。金子裕之氏は、藤原宮の中心部で検出された溝S D 1901-Aから出土した木製の馬形・人形・斎串・刀形、土馬および天武天皇10年代(680年代)の紀年銘木簡を資料として、いわゆる律令祭祀の中に木製馬形を取り込むのは、天武期(7世紀後半)であると結論づけている。しかし、石本遺跡の木製馬形の出土した溝からは古墳時代後期以外の土器は出土していないことや、供伴する木製品も律令

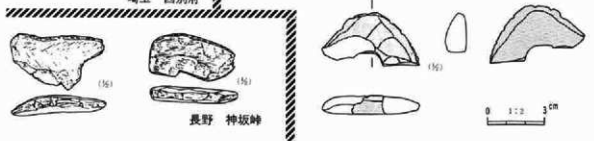


群馬 長根羽田倉



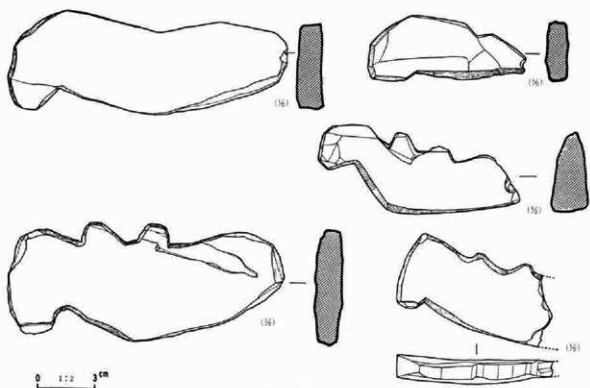
埼玉 西別府

埼玉 本郷前東

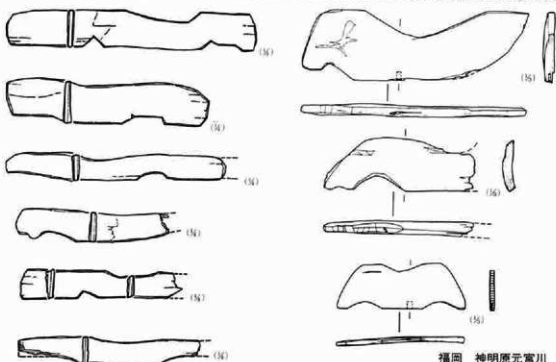


長野 神坂峠

第510図 滑石製馬形



福岡、宗像沖ノ島1号祭祀



京都府 石本遺跡

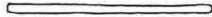
福岡 神明原元富川
(大谷川)

宮川6区SR313

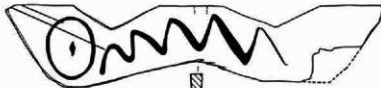
第511図 滑石製馬形及び木製馬形



奈良 藤原宮
大溝 S D1901-A



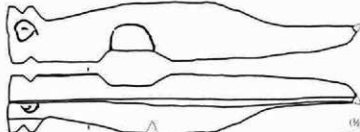
長野 箕輪



静岡 伊場



山形 俵田



山形 俵田



第512図 木製馬形

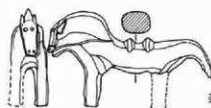
第4章 成果と問題点



大阪
菅田 7C前



奈良
平城京 750



奈良
藤原宮 7C末



平城京



奈良
平城京 710-720



奈良
平城京 9C後



奈良
平城京 724-730



奈良
平城京 10C前

第513図 土馬編年図

的祭祀開始時以降のものよりもそれ以前の伝統的なものの方が多いこと、木製馬形と同じ位置付けをされている板状の滑石製馬形が古墳時代後期の時期に確認されていることなどを傍証として、木製馬形もこの時期に出土しておかしくないと考えられる。

また、板状の馬形について、形状の形式化が取り沙汰されることがあるが、古墳時代後期から平安時代の出土例を見る限りにおいて、たとえば、時代が下がるに従って、形が形式化されていくといったことはなく、どの時期の馬形もほぼ形状は変化ないと言える。そもそも初めから板状の馬形の形は、非常に単純簡略化されているのである。

土馬については、馬形といわれるものの中で最も出土遺跡や出土量ともずば抜けており、全国で575遺

跡を上回っている。その中心的な場所は、平城京内であり、そこから出土した土馬を中心とした編年を木下正史氏にご教授いただき、第513図に載せた。古い段階のものでは、6世紀後半の可能性のあるものに京都府長岡京市今里4丁目の今里遺跡出土のものがあり、7世紀前半の時期の出土例には、大阪府羽曳野市菅田白鳥遺跡出土のものや奈良県高市郡明日香村島庄の嶋宮伝承地出土のものがあるが、それらは、写実的な馬首と馬面を持ち、鞍や装具で飾られた、実際の馬を彷彿させる。それに対し、時期が下がり、都城や国衙、郡衙から出土する土馬は、三日月形の馬面、装具を表現しない馬体、長く大きく開いた馬脚、高くはねる尾を持つ、大和型土馬が多くなり、それらは企画性を感じさせるものである。

以上をまとめると、次のようになる。

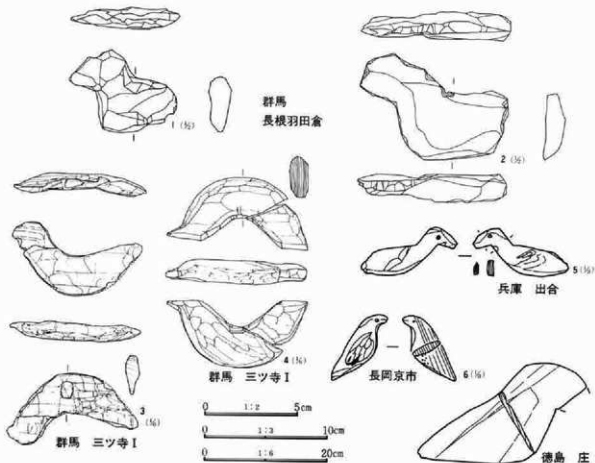
- ① 馬形といわれるものは、滑石製・木製・土馬のいずれも少なくともその初出を古墳時代後期にまで遡ることができること。
- ② 滑石製・木製などの板状馬形は、形状で編年を考慮することができないこと。
- ③ 木製・滑石製を合めて、板状馬形の初出を天武朝と見て、その時点に画期を求められる「律令的祭祀」の中に人形と共に新たに取り込まれていったとする見方は、古墳時代後期にまで遡る遺物が多く出土している事実から再考をせざるを得なくなっていると思われる。筆者は、「律令的祭祀」について論ずる力は持ち得ないが、もし仮に7世紀後半段階で「律令的祭祀」が成立していたとした場合、本遺跡の遺物組成からみて、馬形は、律令的祭祀の先駆的形態ではなく、本来は別物で、7世紀後半段階で律令的祭祀に取り込まれてい

ったと考えたほうが妥当と考える。

(4) 鳥形について

本遺跡の滑石製形代の中に明らかに馬形とは形状の異なるものが2点存在する。本遺跡の馬形の形状は、概して、神ノ島1号遺跡出土の裸馬形に似ており、板状の滑石の背部と頸部をそれぞれ1カ所ずつ刃物で切り込みを入れているのに対して、第514図の1は、切り込みの方向が若干違い、しかも顔部の先端を尖らせたり、駒元をふくらませたり、尾部を丸めたりして一見、水鳥のように思える。また、2も胴部の幅にくらべて、頸部が細くなり、本遺跡の馬形とは、雰囲気異なる。ここでは、既出の木製模造品との類似から鳥形の可能性を示唆しておきたい。

木製模造品の類例は、周辺では、三ツ寺I遺跡の濠から出土したものがあ。特に、3には中央寄りに幅2cmの貫通孔があり、軸木に対して挿しこみ式



第514図 鳥形模造品

の使用方法が考えられるという。用途不明品としているが、鳥形の可能性も指摘されている。形状が似ているものとして、徳島県庄遺跡・京都府長岡京遺跡^⑤・兵庫県出合遺跡出土のものがあげられる。

(5) 今後の課題

以上、本遺跡の古墳時代後期における祭祀の必要素を取り出し、考えられることを羅列してみた。前述したとおり、本遺跡から出土する祭祀遺物は、周辺に存在する遺跡群の中でも、群を抜いた量と広がりを持つ。その中で甕に対する祭祀、土器廃棄に伴う祭祀、馬形や鳥形を伴う祭祀などの可能性を指摘してきたが、あくまでも可能性の域を脱することができなかった。その中で、滑石製馬形（一部鳥形）を古墳時代後期の土器群を併せて確認できたことは、意味深いことであるとおもわれる。ただ、その遺物がどのような祭祀の時に使用されたかという問題について解決することができなかった。一般に、馬形は、水との関連性を強く伺うことができ、水神への奉獻品として意味付けられているが、それは、遺物の出土位置からの推測や民俗伝承から持たされた考えであろう。さらに、漢神信仰から行役神や崇り神の乗り物で、それらの神の動きを封じて災いを敵う敵い具としても考えられている。本遺跡では、そのどちらなのか、位置や出土状況からは判別できない。今後の課題となろう。ただ、この祭祀行為集団については、周辺の地形や祭祀遺物の分布状況から、「家祭」程度を行う小規模集団ではなく、本遺跡と隣の神保富士塚遺跡を含めた、古墳時代後期の村落共同体であったと考えられる。

註

- ① 寺村光晴『古代五作形成史の研究』吉川弘文館 1980
- ② 中沢 悟「甕の廃棄について」『大原Ⅱ・村主遺跡』朝鮮馬形埋蔵文化財調査事業団 1986
- ③ 反丸遺跡『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』群馬県教育委員会 1979
- ④ 『富岡市史』原始・古代・中世編 富岡市史編さん委員会 1987

- ⑤ 『三ツ寺1遺跡』(本編)朝鮮馬形埋蔵文化財調査事業団 1988
- ⑥ 『原之城遺跡発掘調査報告』伊勢崎市教育委員会 1987
- ⑦ 『中村遺跡』茨川市教育委員会 1986
- ⑧ 『瓦崎原遺跡・赤石塚址』 朝鮮馬形埋蔵文化財調査事業団 1985
- ⑨ 『黒井峰遺跡発掘調査概報』子持村教育委員会 1987 他 内容の詳細については、子持村教育委員会の石井克己氏にご教授いただいた。
- ⑩ 『高崎市井野川遺跡』群馬県教育委員会 1970
- ⑪ 『入山峠』軽井沢町教育委員会 1983
- ⑫ 『芦田貝戸遺跡Ⅱ』高崎市教育委員会 1980
- ⑬ 『田端遺跡』朝鮮馬形埋蔵文化財調査事業団 1988
- ⑭ 井上唯雄『赤城山礫石と群馬の祭祀遺跡』『群馬文化』第192号 群馬県地域文化研究協議会 1982
- ⑮ 『正康寺遺跡群(Ⅱ)』高崎市教育委員会 1980
- ⑯ 『国立歴史民俗博物館研究報告第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」』1985 および『特別展 古代文化・馬形の謎』馬の博物館 1986を参考に、さらに新出の遺跡も加えた。
- ⑰ 大場健雄・小沢国平『新発見の祭祀遺跡』『史迹と美術』第338号 1963
- ⑱ 『本郷前東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- ⑲ 『神塚峠』阿賀村教育委員会 1983
- ⑳ 弘津文『防長通信』『考古学雑誌』第18巻第7号 1928
- ㉑ 亀井正道『祭祀遺跡一覽編』『新編考古学雑誌』8 特論(上)祭祀・信仰 1979
- ㉒ 『沖ノ島』宗像神社復興期成会編 1958
- ㉓ 『宗像沖ノ島』第3次沖ノ島学術調査編 1979
- ㉔ 小田富士雄『古代形代馬考』『史前』第105-106合併号 1971
- ㉕ 『神明原・元宮川遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査研究所 1986
- ㉖ 『石本遺跡』徳島県埋蔵文化財調査研究センター 1987
- ㉗ 金子裕之『日本における人形の起源』『道教と東アジア—中國・朝鮮・日本』福永光司編 人文書院 1989
- ㉘ 『特別展 古代文化・馬形の謎』馬の博物館編 1986
- ㉙ 『国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 祭祀関係遺物出土地名表』1985及び 木下正史氏にいただいた資料による。
- ㉚ 『国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 祭祀関係遺物出土地名表』1985
- ㉛ 金子裕之『郡城と祭祀』『古代を考える 神ノ島と古代祭祀』小田富士雄編 1988
- ㉜ 神道考古学講座第3巻 原始神道第二で「榎原式」としているものがこれにあたる。
- ㉝ 井上北貞『古代沖ノ島の祭祀』『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会 1984
- ㉞ 金子裕之氏は、『日本における人形の起源』前掲の中で神明原・元宮川出土の木製人形・馬形によれ、6世紀後半～7世紀初頭の年代観に疑問をいだきながら、「仮に6世紀後半～7世紀初頭に遡るなら」と「律令の祭祀」の存在を前提として以下の2通りの考え方を紹介している。A. 律令の祭祀、あるいはその先駆的形態がこの頃まで遡る。B. 本来人形は律令の祭祀とは別物で、地方に早く伝わったが、7世紀後半に律令の祭祀に取り込まれた。本遺跡の馬形は、この解釈でいくとBと思われる。
- ㉟ 『三ツ寺1遺跡 本編編』朝鮮馬形埋蔵文化財調査事業団 1988
- ㊱ 『律令期祭祀遺物集成』金子裕之編 1988

第6節 まとめ

長根羽田倉遺跡は、関越自動車道土越線建設に伴う事前発掘調査である。この地は、北方を東流する箭川が形成した上位河岸段丘面上に位置し、土越線は、このような上位河岸段丘面上を藤岡から甘楽町まで通過する。調査の結果、本遺跡からは、4世紀前半および6世紀前半から11世紀までの竪穴住居跡が合計133軒確認でき、4世紀から6世紀までおよそ2世紀ほどの断絶期はあるものの、その後、6世紀から11世紀までの500年間にわたってこの地に居住していた人々の生活跡を調査することができた。このような状況は、他の上位河岸段丘面でも確認されており、古代において、上位河岸段丘面上には大集落が営まれる傾向があった。河川の氾濫等の影響を受けない安定した土地であったからと考えられる。

調査結果の中で最も特筆すべきことは、古墳時代後期にこの地で滑石製模造品が製作され、それらと共に全国的にも大変貴重な滑石製馬形を用いた祭祀行為が行われていたことが判明したことである。すなわち、この時期の住居跡の40%から、滑石の成品・未成品・原石・石核・チップなどが数点ずつ出土しており、さらに製作とかかわりのある砥石・敲打石・工作台等も数多く出土した。ただ、その出土状況がいわゆる工房跡のように多量の滑石類を出土するような住居跡はなく、あたかも「集落内自給的生産」の形態を思わせる状況であった。さらに本遺跡の東端の谷地に臨む斜面の肩部からは祭祀行為の最終段階の祭祀用品の廃棄場所と思われる遺構が確認され、そこから多量の土師器・須恵器、勾玉・白玉・有孔円板・剣形などの滑石製模造品・工作石器類と併せて滑石製馬形が出土した。以上のことから、本遺跡は周辺の他の遺跡とは性格を異にする地域であるといえる。さらに祭祀遺構出土の多量の須恵器のうち、遺構を代表するような土器30点について胎土分析を行った。その結果、秋間・乗附・吉井・藤岡の窯群からの土器の他、東海からの搬入された可能性のある土器も確認され、古代の

土器の需給関係の一端をみることができた。

また、8世紀後半の住居跡2軒からは、紡錘車の未成品や鉄製の型状工具・鏝状工具などが出土し、紡錘車を製作したと考えられ、注目される。

住居跡以外の遺構としては、遺跡東端の谷地に浅間山B軽石で覆われた水田が確認された。

本遺跡の調査には以前、この地は、辛科神社が本遺跡の北東250mの位置に鎮座していることから古代「多胡郡」内の「韓級郷」の比定地とされていた。辛科神社については、「神道集」や「上野国神名帳」の記載から多胡郡の鎮守と考えることができ、また、宝物として伝えられている懸仏の銘文から鎌倉時代初頭までさかのぼることができる。さらに、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の関越自動車道新潟線地域の国分寺中間地域の発掘調査で出土した「辛神人□(宿カ)子福麩」とへう描きされた平瓦からは9世紀において韓級郷(辛科郷)内に神道となんらかの関連性のある人物の存在を窺わせている。実際の調査では、古代「韓級郷」を直接裏付ける資料は確認されなかったものの、本遺跡から出土した多量の祭祀遺物は、神道との密接な関連性を窺わせる。古代「韓級郷」は、伝統的に祭祀と深い関係のある地域であるとの仮説に基づき、同じ関越道土越線関連の矢田遺跡から「八田郷」と線刻された紡錘車や「八田」と読める墨書土器が出土していることから、この地域では、古代の地名が比較的良く伝承されているということを確認し、本遺跡は古代「韓級郷」内の一部分である可能性が現在のところ最も高いと考えられる。

このように長根羽田倉遺跡の発掘調査では多くの成果を上げることができるとともに多くの課題も残された。今後、周辺の調査がなされ、残された課題が解決されることを願ってやまない。

最後に長根羽田倉遺跡の調査は、群馬県教育委員会、日本道路公団、吉井町農協をはじめ、多くの方々の御指導・御支援や、直接調査に携わった発掘調査作業員、整理補助員など多くの方々との御協力のお陰で終了することができた。深く謝意を申し上げ、まとめと致します。

附編 科学分析

第1節 胎土分析

花岡 紘一・鹿沼 栄輔

はじめに

1979年からはじまった胎土分析は、約600点を越え、現在に至っている。その結果、県内10箇所に存在する窯跡群のうち、吉井・乗附（観音山丘陵）・秋間・中之条・月夜野・笠懸窯跡群について、傾向・領域を知るとともに消費地出土須恵器の製作地同定を可能にし、さらに、各窯跡群の胎土傾向は、存在基盤層と有機的な関係にある点も、次第に判明してきた。

今回の分析は、長根羽田倉遺跡の2号・3号土器集積出土の須恵器30点を扱う。長根羽田倉遺跡の2号・3号土器集積は、7世紀前半の祭祀跡と考えられる。そこからは多くの土師器片・滑石製模造品・工作用石器類とともに須恵器片も数多く出土している。(2号・3号土器集積出土土器 合計5,216片、特に3号土器集積出土土器の内、14%が須恵器である。)これらの土器は、滑石製模造品とともに神に奉献されたものと考えられる。群馬県内では、数多くの祭祀跡が確認されているが、7世紀代の祭祀跡は、たいへん数が少なく、その様相がつかめていない。本遺跡の2号・3号土器集積の祭祀跡はその意味でたいへん価値のあるものと思われる。この遺構から出土した須恵器の胎土分析を行うことにより、産地を同定し、産地と消費地である本遺跡の需給関係を知る手掛かりをつかむことが可能となる。

1. 試料の選択

今回の分析試料は、長根羽田倉遺跡の2号土器集積より出土の須恵器10点、3号土器集積より出土の須恵器20点を抽出した。それぞれ遺構を代表し得る7世紀代の須恵器、あるいは、遺構の性格付けに寄与し得る背景にある須恵器を選んだ。各試料の肉眼

観察の所見と肉眼による製作地の推定は付表（胎土分析試料観察表）のとおりである。

2. 分析の目的と意図

蛍光X線による定性（元素）分析の有効性は製作地の同定と原料の推定にあるため、今回の分析目的をそこに置いた。具体的な内容に関しては、下記のとおりである。

- ① 試料№647・648は肉眼観察では東海からの搬入と思われる。分析で東海地方の製品と比較したい。
- ② 本遺跡が立地的に吉井・藤岡・乗附・秋間窯跡群と近接しているため、それぞれの窯跡群出土の製品と分析で比較したい。肉眼観察では以下のとおりである。

吉井窯跡群の製品の可能性のあるもの

試料№631・632・636・639・652・654・656

藤岡窯跡群の製品の可能性のあるもの

試料№631・632・652

乗附窯跡群の製品の可能性のあるもの

試料№631・632・633・634・635・638・640・645・646・649・650・651・652・653・655・657

秋間窯跡群の製品の可能性のあるもの

試料№633・637・640・650・653・655・657・659・660

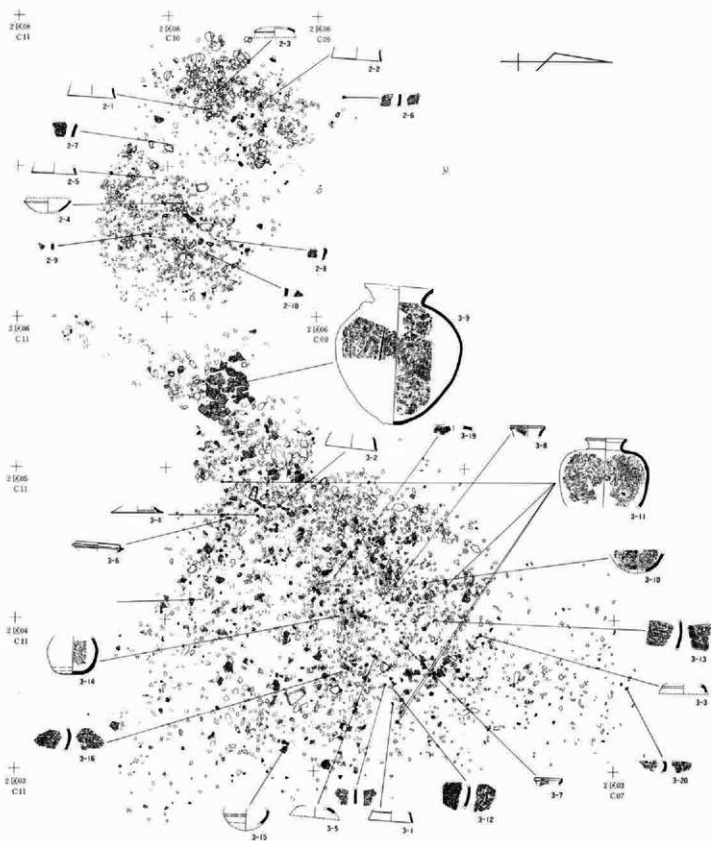
3. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を10mm以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機㈱KG-4型

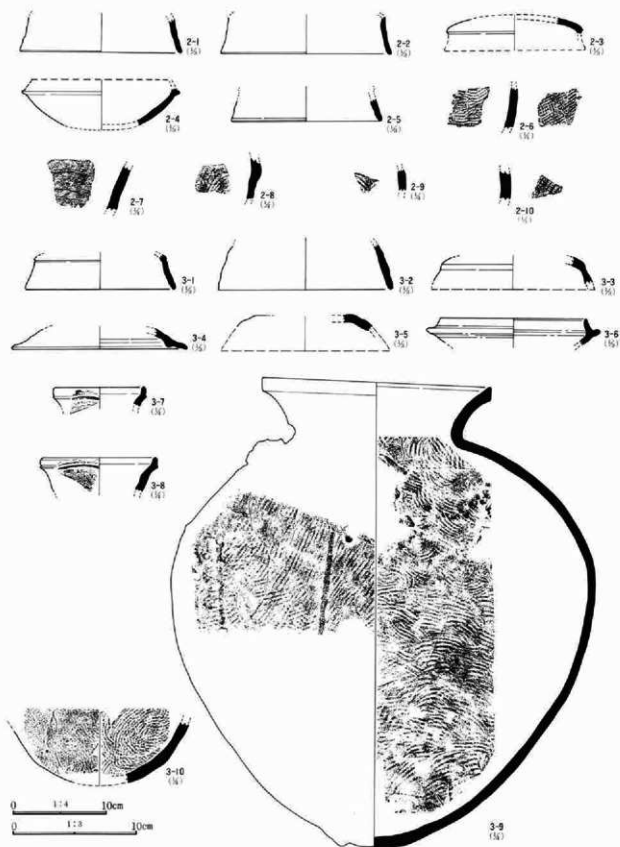
分光結晶：Fe, Sr, RbにはLiF (2d=4.028Å)

Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT (2d=8.

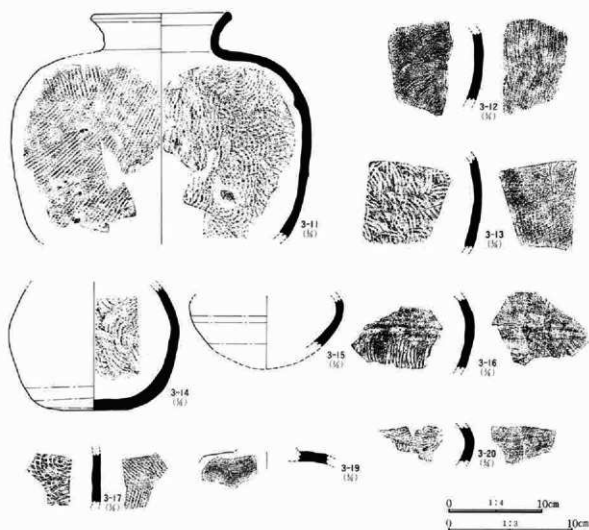


第515圖 祭祀遺構遺物出土状態実測図

0 2m



第516图 2号・3号土器集積出土胎土分析試料実測圖(1)



第517図 2号・3号土器集積出土胎土分析試料実測図(2)

第23表 祭祀遺構出土土器胎土分析資料観察表

図番号	器種 器形	出土位置	大 小 残 存 状 態	①胎土 ②構成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
2-1 631	須恵器 坏蓋	2区06C 09(D-5)	口一高一 体部~口縁部片	①細・白色微砂粒少量 ②還元・普通 ③灰色	ロクロ整形。(右回転)	吉井・藤岡・栗附
2-2 632	須恵器 坏蓋	2区07C 09(D-6)	口(13.6) 高一 体部~口縁部片	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	ロクロ整形。(右回転)	吉井・藤岡・栗附
2-3 633	須恵器 坏蓋	2区06C 09(D-5)	口一高一 体部片	①細・黒色微砂粒少量、白 色微砂粒少量 ②還元・硬	ロクロ整形。(右回転)	表面は灰色 秋間・栗附
2-4 634	須恵器 坏身	2区06C 09(D-5)	口一高一 底一 体部片	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・軟 ③灰白色	ロクロ整形。(右回転) 体部裏 削り調整。	栗附
2-5 635	須恵器 坏蓋	2区06C 10(E-5)	口(12.0) 高一 口縁部片	①細・白色微砂粒少量②還 元・硬③オリーブ灰色	ロクロ整形。(右回転)	栗附
2-6 636	須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦3.5 横4.1)	①細・白色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 内面 青海波印。外面 斜格子 印。	吉井
2-7 637	須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦5.0 横5.8)	①普通・白色微砂粒少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 内面 撫で。	
2-8 638	須恵器 壺	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦3.0 横3.5)	①普通・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 内面 青海波印。	秋間・栗附

附編 科学分析

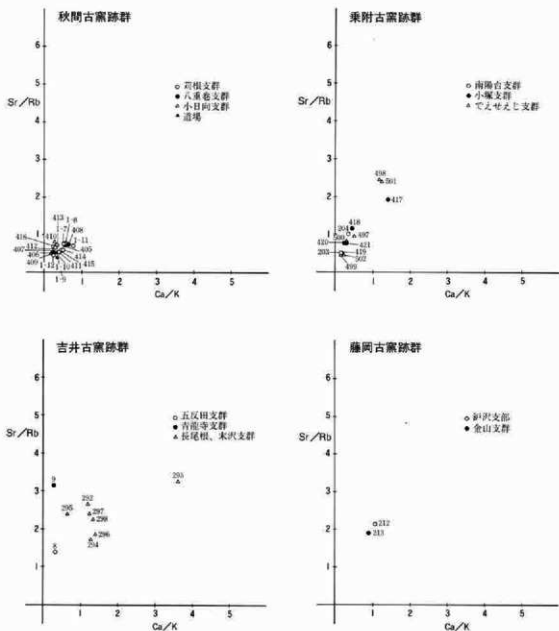
図番号	器形 器名	出土位置	大 概 寸 法	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・整形の技法	備 考
2-9 639	須恵器 甕	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦2.9 横2.0)	①普通・白色黒色微砂粒 少量 ②還元・軟 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 内面 青海波印キ。	中間に鈍い黄褐色 帯あり。吉井
2-10 640	須恵器 甕	2区06C 09(D-5)	胴部片 (縦2.1 横3.0)	①細・黒色微砂粒少量 ②還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 格子印キ。	杖間・兼附
3-1 641	須恵器 坏蓋	埋 設 土	口(12.0) 高一 体一端部片	①細・黒色白色微砂少量 ②還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	杖間・兼入
3-2 642	須恵器 坏蓋	埋 設 土	口(14.0) 高一 体一端部片	①粗・灰色微砂少量 ②還 元・普通 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	
3-3 643	須恵器 坏蓋	埋 設 土	口一 高一 体部片	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形 (右回転)	
3-4 644	須恵器 坏蓋	埋 設 土	口一 高一 口縁部片	①普通・黒色白色微砂少 量 ②還元・硬 ③オ リーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	
3-5 645	須恵器 坏蓋	2区03C0 8(C-2)	口一 高一 体部片	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	兼附
3-6 646	須恵器 坏身	2区03C 09(D-2)	口(10.7) 高一 高一 口一端部片	①普通・白色微砂少量 還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	吉井
3-7 647	須恵器 甕(查)	埋 設 土	口(9.4) 高一 底一 口一端部片	①細・白色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面に波状文。	自然輪付着 兼入(東海)
3-8 648	須恵器 甕	2区03C 08(C-2)	口(12.1) 高一 底一 口縁部片	①細・白色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面に波状文。	兼入(東海)
3-9 649	須恵器 大甕	2区05C 09(D-4)	口(24.4) 高(49.5) 底一 口一底部 片	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	外面 紐作り後、口縁部横撫で。 胴部格子印キ。内面 口縁部横 撫で。胴部は青海波印キ。	外面に自然輪付着 兼附
3-10 650	須恵器 甕	2区04C 08(C-3)	口一 高一 底一 胴部片 (縦9.0 横5.4)	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 平行印キ。内面 青海波 印キ。	自然輪付着 兼附・杖間
3-11 651	須恵器 甕	2区02C 08(C-1)	口(14.2) 高一 底一 口一端部 片	①細・白色微砂少量 ② 還元・硬③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 斜格子印キ。内面 青海 波印キ。	全体に自然輪付着 兼附
3-12 652	須恵器 甕	2区03C 08(D-1)	口一 高一 底一 胴部片 (縦10.2 横6.8)	①普通・白色黒色微砂少量 ②還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 平行印キ。内面 青海波 印キ後、すり消し。	吉井・藤岡・兼附・ 杖間
3-13 653	須恵器 甕	2区04C 08(C-3)	口一 高一 底一 胴部片 (縦9.5 横12.5)	①細・白色微砂少量 ②還 元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 格子印キ後、すり消し。 内面 青海波印キ。	兼附・杖間
3-14 654	須恵器 甕	2区05C 09(D-4)	口一 高一 底7.0 胴一底部 片	①細・白色微砂少量 ②還 元・硬 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 内面 青海波印キ。	底部に自然輪付着 吉井
3-15 655	須恵器 甕	2区03C 09(D-2)	口一 高一 底一 胴部 片	①細・黒色微砂少量 ②還 元・硬 ③オリーブ灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	自然輪付着 兼附・杖間
3-16 656	須恵器 甕	2区04C 09(D-3)	口一 高一 底一 胴部片 (縦9.5 横7.5)	①細・白色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 胴部下半格子印キ。内面 胴部下半、青海波。	断面、3層。 吉井
3-17 657	須恵器 甕	2区03C 09(D-2)	口一 高一 底一 胴部片 (縦5.2 横4.5)	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 斜格子印キ後、回転ウキ 目。内面 青海波印キ。	杖間・兼附
3-18 658	須恵器 甕	2区04C 09(D-3)	口一 高一 底一 胴部片	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	
3-19 659	須恵器 甕	2区04C 08(C-3)	口一 高一 底一 胴部片	①細・黒色微砂少量 ② 還元・硬 ③灰白色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転)	杖間・兼入 (東海)
3-20 660	須恵器 甕	2区04C 07(B-3)	口一 高一 底一 胴部片 (縦3.7 横6.5)	①粗・白色微砂少量 ② 還元・硬 ③暗灰色	紐作り後、ロクロ整形。(右回転) 外面 回転ウキ目。内面 青海 波印キ。	自然輪付着 杖間・兼附

第24表 祭記遺構出土土器胎土分析試料結果

試料	成分							備 考		
	SiO ₂ %	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %	TiO ₂ %	CaO%	MgO%	K ₂ O%			
631	62.0	17.8	7.84	1.03	1.24	2.38	1.58	1.60	1.05	吉井・藤岡・兼附

第1節 胎土分析

試料	成分	SiO ₂ %	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %	TiO ₂ %	CaO%	MgO%	K ₂ O%	Sr/Rb	Ca/K	備考
632		74.1	20.0	3.78	0.89	0.30	1.07	1.44	0.63	0.26	吉井・藤岡・栗附
633		79.6	17.7	3.53	0.90	1.37	0.99	1.34	0.77	0.35	秋岡・栗附
634		67.8	71.8	5.36	0.84	0.23	1.91	2.19	0.75	0.13	栗附
635		71.1	19.0	3.60	0.86	0.23	1.40	2.05	0.67	0.14	栗附
636		65.8	24.6	3.06	0.97	0.43	0.80	1.32	2.15	0.42	吉井
637		61.5	19.1	9.81	1.05	0.54	1.09	1.73	7.83	0.41	
638		72.0	19.0	3.28	0.81	0.37	1.39	1.83	0.87	0.26	秋岡・栗附
639		66.2	24.3	4.64	1.08	0.51	0.92	1.84	2.30	0.54	吉井
640		78.9	172.1	2.27	0.91	0.21	1.15	1.21	0.51	0.21	秋岡・栗附
641		75.0	17.6	3.50	0.89	0.30	0.87	1.32	0.63	0.28	秋岡・搬入
642		68.9	21.2	5.69	1.01	0.60	1.32	1.48	2.87	0.53	
643		69.2	20.8	4.38	0.79	1.12	0.35	1.21	6.25	1.22	
644		67.3	20.6	6.90	0.93	0.54	0.92	1.48	3.47	0.47	
645		71.9	21.4	2.56	0.86	1.48	1.26	1.87	3.72	0.34	栗附
646		69.6	22.6	4.64	0.78	0.30	1.18	1.38	0.64	0.27	吉井
647		74.8	17.7	3.21	0.71	0.14	1.71	2.21	0.51	0.07	搬入(東海)
648		72.7	18.4	3.03	0.80	0.23	1.49	2.45	0.65	0.12	搬入(東海)
649		66.9	17.7	6.01	0.80	0.65	1.91	2.46	0.74	0.35	栗附
650		73.6	17.5	3.53	0.99	0.43	1.02	1.24	1.12	0.44	栗附・秋岡
651		75.0	17.7	4.07	0.74	0.79	1.18	1.66	0.74	0.63	栗附
652		72.7	18.8	3.13	0.72	0.65	0.35	1.81	3.34	0.47	吉井・藤岡・栗附 秋岡
653		73.5	18.0	3.74	0.69	0.20	1.85	2.17	0.67	0.12	栗附・秋岡
654		69.5	21.2	2.83	0.78	0.51	0.99	1.66	3.54	0.41	吉井
655		71.0	17.3	5.81	0.67	0.30	1.08	1.61	0.96	0.24	栗附・秋岡
656		57.4	25.4	8.75	1.14	0.72	0.93	0.56	1.67	1.60	吉井
657		68.1	23.5	4.00	0.90	0.40	1.21	1.32	0.73	0.39	秋岡・栗附
658		69.9	20.6	4.10	0.86	0.27	1.20	1.50	0.50	0.23	
659		71.9	18.2	3.02	0.77	0.25	1.74	2.30	0.70	0.14	秋岡・搬入(東海)
660		61.5	24.5	6.29	1.08	1.26	1.32	0.98	3.65	1.69	秋岡・栗附



第518図 Sr/RbとCa/Kのグラフ(1)

808A*) Mg にはADP (2d=10.648 A*)

検出器: LiFを使用したとき、S・C,

EDDT、ADPを使用したとき、P・C,

時定数: 1

計数法: Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートにより、Si, Al, Mgは定時計数法による。なお、チャートは、4'/minとした。

波高分析器: 積分方式

測定線: FeK β , CaK α , KK α , TiK α , AlK α ,

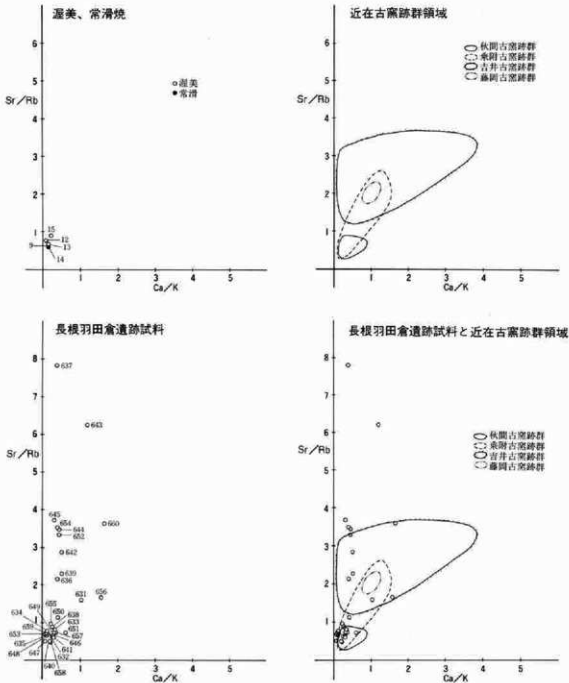
MgK α , SrK α , RbK α の各1次線を使用した。

X線照射面積: 20mm ϕ

標準試料: 群馬県埋蔵文化財調査から依頼を受けた土器6点(295、310、336、345、360、380)を化学分析し、標準試料とした。

4. 試験結果

試験結果は表のとおりで、Ca/K, Sr/Rbについて図示した。また、今回の結果の比較・検討資料とし



第519図 Sr/RbとCa/Kのグラフ(2)

て、近在の古窯跡群と瀧美・常滑焼の領域を示すグラフを載せた。

以下に分析目的の①、②について結果を報告する。

- (1) 県外からの搬入製品に見えたNa647、648は、既分析値の中では、Ca/KとSr/Rbとの値が最小に近く、既領域では、瀧美・常滑焼の領域や県内でも最小値の秋間窯跡群の領域に入る。瀧美・常滑焼の窯からの搬入の可能性が大きいと言える。

- (2) 乗附(観音山丘陵)窯跡群の領域との比較ではNa631・632・633・635・638・640・641・646・648・649・650・651・652・653・655・657・658・659がその領域に入る。

- (3) 秋間窯跡群の領域との比較ではNa632・633・634・635・638・640・641・646・647・648・649・651・653・657・658・659が入り、Na650・655が近接する。

- (4) 吉井・藤岡窯跡群の領域との比較では、No.631・636・639・642・644・652・656が領域に入り、No.645・654)が近接する。
- (5) 藤岡窯跡群は試料が少なく、領域設定されていないので比較困難である。
- (6) 試料No.637・643については県内の大窯跡群の領域内に入らず、既660点の分析でSr/Rbの値が高く、6.00を越えた例は、「清里・陣場遺跡」朝群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981出土のNo.3(室町時代後期軟質陶器)・No.5・6・7(平安時代後期土師質土器)、新保遺跡(「塚廻り古墳群」(群馬県教育委員会)1980)出土のNo.2・3(弥生時代後期の土器)である。

5. まとめ

本遺跡の2号・3号土器集積出土の須恵器は、吉井・藤岡・栗附・秋間という近在の窯跡群で製作されたものと東海の渥美・常滑地方で製作されたものが混在していることが判明した。すなわち、7世紀という時代に単一の窯との需給関係ではなく、複数の窯とのかなり広範囲の需給関係が成り立っていたことが明らかになった。ただ、2号・3号土器集積は、およそ半世紀ほどの長期間にわたり祭祀を行ったと思われる遺構であり、例えば、1回の祭祀行為のときに使用される須恵器の需給関係については単一の窯から複数の窯からなのかは不明である。この点については今後の調査を待ちたい。また、この祭祀遺構出土の須恵器と周りに存在する6世紀後半

～7世紀前半の住居跡出土の須恵器との比較も今回は、行うことができなかった。反省点として上げておきたい。今後、何等かの機会に分析が行えることを期待したい。

県内の胎土分析資料

- a) 「土師の胎土分析」[塚廻り古墳群](群馬県教育委員会)1980年 花岡敏一・石塚久則
- b) 「瓦の胎土分析」[天代瓦窯遺跡](中之条町教育委員会)1982年 花岡敏一・大江正行
- c) 「湯井遺跡出土須恵器の胎土分析」[湯井遺跡](群馬県教育委員会)1981年 花岡敏一・真下高幸
- d) 「瓦の胎土分析について」[山王院寺跡第7発掘調査報告書](前橋市教育委員会)1982年 花岡敏一・田口正典
- e) 「土師の胎土分析について」[清里・陣場遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年 花岡敏一・中沢悟
- f) 「新保遺跡出土土師の胎土分析」[新保遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982年 花岡敏一・中沢悟・原雅信
- g) 「大差遺跡・金山古墳出土土師の胎土分析」[大差遺跡・金山古墳群](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年 花岡敏一・大西雅広
- h) 「奥原・古墳群出土須恵器の胎土分析」[奥原古墳群](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1983年 花岡敏一・石塚久則
- i) 「月夜野古窯跡群の胎土分析」[土師部会研究資料No.2](群馬県史考古同人会)1983年 花岡敏一・大江正行
- j) 「須恵器の胎土分析について」[三ツ木遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1984年 花岡敏一・飯田陽一
- k) 「赤井宮前遺跡出土須恵器の胎土分析」[赤井宮前遺跡I](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1985年 花岡敏一・山口逸弘
- l) 「土師の胎土分析について」[吉田遺跡](埴町教育委員会)1985年 花岡敏一・加部二生
- m) 「村主遺跡出土土師を中心とした胎土分析」[大原日遺跡・村主遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1986年 花岡敏一・中沢悟
- n) 「古墳出土須恵器の胎土分析」[下船牛伏遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1986年 花岡敏一・小島敦子
- o) 「胎土分析」[下東西遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1987年 花岡敏一・三浦京子
- p) 「胎土分析」[田藤上平遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988年 花岡敏一・小沢直樹・依田由雄
- q) 「胎土分析」[上原原遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡](群馬県埋蔵文化財調査事業団)1989年 花岡敏一・斉藤利昭

第2節 プラント・オパール分析調査報告

古環境研究所

1. はじめに

長根羽田倉遺跡では、発掘調査によって浅間Bテフラの下層から畦畔状の遺構が検出され、水田ではないかと見られていた。

今回の調査は、同水田跡の分析的確認と、その他の層における水田跡の探索を目的として行なわれたものである。

以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2. 試料

サンプリングは、昭和62年5月13日に行なった。サンプリング地点は、第520図に示すA～E地点の5地点である。

基本層序は1層～7層に分層された。このうち、1層は現表土層、5層は浅間Bテフラ層、7層はローム層である。畦畔状の遺構が検出されたのは6a層の上面である。なお、同調査区ではFAや浅間Cテフラは確認されなかった。

試料は、D地点については1層から7層迄各層ごとに5～10cm間隔で採取した。その他の地点については、5層以下について同様に採取した。採取にあたっては、50ccサンプル管およびポリ袋を用いた。

採取した試料数は30点で、これらすべてについて分析を行なった。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、つぎの手順で行なった。

試料の絶乾(105°C・24時間)→仮比重測定→試料約1gを秤量→ガラスビーズ混入(直径約40μm, 約30万個)→脱有機物処理(電気炉灰化法)→超音波による分散(150W・26KHZ・15分間)→沈底法によ

る20μm以下の微細粒子除去→乾燥→オイキット中に分散→プレバート作成→検鏡・計数。なお、試料とガラスビーズの秤量は電子分析天秤を用いて1万分の1gの精度で行なった。

プラント・オパールの同定は、おもに機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を対象として400倍の偏光顕微鏡下で行なった。プラント・オパールの計数と同時にガラスビーズ個数をカウントし、これをガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。

こうして計測された計数結果(各プラント・オパール個数/ガラスビーズ個数)に試料1gあたりに混入されたガラスビーズ個数をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。これに仮比重をかけて、試料1ccあたりのプラント・オパール個数を求めた。

このようにしてイネのプラント・オパール密度を測定していくと、水田が埋蔵されている層にピークが現われるのが通例である。通常、イネのプラント・オパールが試料1ccあたり5,000個以上検出された場合に、水田跡の可能性があると判断している。

プラント・オパール密度(個/cc)を表1の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重)をかけて、植物体生産量($t/10a \cdot cm$)を算出した。これに層厚をかけて、その層の堆積期間中に生産された植物体の総量($t/10a$)を推定した。

表1 各種植物体の換算係数(単位: $10^{-1}g$) 藤原(1979)の第1表を一部改定

植物名	葉身	全地上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
ヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

4. 分析結果

イネ、キビ族(ヒエなどを含む)、ヨシ属、タケ亜科(竹笹類)、ワシクサ族(スキなどを含む)について同定・定量を行ない、数値データを表25に示した。上記以外については、検出数が少ないため割愛した。表26に各層の深度、層厚、仮比重の値とともに、イネの推定生産量を示した。

図521にイネのプラント・オパール密度と変遷を示した。柱状図内のドットは、試料の採取箇所を示している。図522、523、524に、イネ、ヨシ属、タケ亜科について植物体生産量と変遷を示した。

5. 考 察

(1) 水田跡の検証と探察

D地点では、1層(現耕作土層)から7層(ローム層)まで連続的に分析を行なった。その結果、1層、3層、4層ではイネのプラント・オパールが5,000個/cc前後検出され、明らかなピークが認められた。このことは、これらの層で稲作が行なわれた可能性が高いことを示している。

2層、5層、6a層、6b層ではイネのプラント・オパールは検出されたが、いずれも2,000個/cc前後と少量である。また、これらの層の上部には上述した高密度の地層があることから、上層からプラント・オパールが混入した可能性が考えられる。6a層(浅間Bテフラ直下層)は、発掘調査の所見から水田跡ではないかとみられていたが、同層で稲作が行なわれていた可能性は低いと考えられる。これは、D地点、E地点の6a層についても同様であろう。

一方、A地点とB地点の6a層では、イネのプラント・オパールが5,000個/cc以上と多量に検出され、明らかなピークが認められた。したがって、これらの地点の6a層で稲作が行なわれていた可能性は高いと考えられる。

以上のことから、同調査区の少なくともA地点、B地点周辺に、6a層水田跡が分布していたものと推定される。

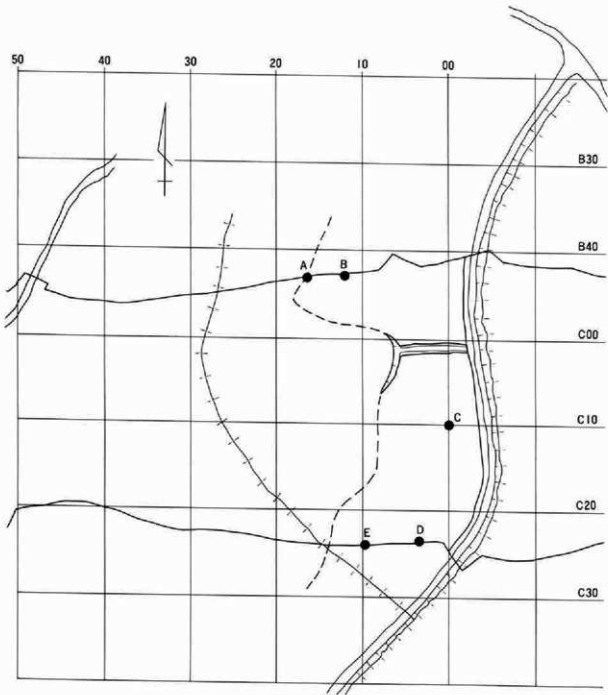
(2) 稲穀生産総量の推定

水田跡である可能性が高いと考えられるA地点とB地点の6a層で生産された稲穀の総量は、それぞれ4.3t、2.7tと算出された。(表26参照)。当時の稲穀の年間終了を10aあたり100kgと仮定すると、これらの地点の6a層で稲作が営まれたのは、約30~40年間であったものと推定される。

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行なわれ、稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。したがって、ここで推定した稲穀の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

◎ 参考文献

- 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究I—数種イネ科栽培植物の塊状体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9: 15-29
- 藤原宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・飯付遺跡(復旧式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定—。考古学と自然科学, 12: 29-41
- 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田跡の探査—。考古学と自然科学, 17: 73-85
- 藤原宏志・杉山真二・外山秀一 1984 地層の区分と水田跡の探査。那珂郡休遺跡II。福岡市埋蔵文化財調査報告書、第106集: 11-15



第520図 プラント・オパール分析試料採取地点

附編 科学分析

第25表 試料1ccあたりのプラント・オパール個数

A地点

試料名	イ	ネ	ヨ	シ	属	タケ	亜科	ウシクサ	族	キ	ビ	族
5		2,800			900		20,800		900			0
6 a		5,200			3,100		26,000		1,000			0
6-1		0			1,000		27,200		2,600			0
6-2		0			1,000		26,600		1,000			0
6-3		0			2,000		21,900		1,000			0

B地点

試料名	イ	ネ	ヨ	シ	属	タケ	亜科	ウシクサ	族	キ	ビ	族
5		0			0		1,900		0			0
6 a		5,300			2,100		25,400		1,000			1,000
6-1		900			1,900		20,900		900			0
6-2		1,100			3,500		21,400		0			0
6-3		1,000			3,000		19,200		0			0
7		0			0		1,800		0			0

C地点

試料名	イ	ネ	ヨ	シ	属	タケ	亜科	ウシクサ	族	キ	ビ	族
5		2,900			0		13,600		2,000			0
6 a		900			1,900		17,200		1,900			0
6		1,000			3,000		21,100		2,000			0

D地点

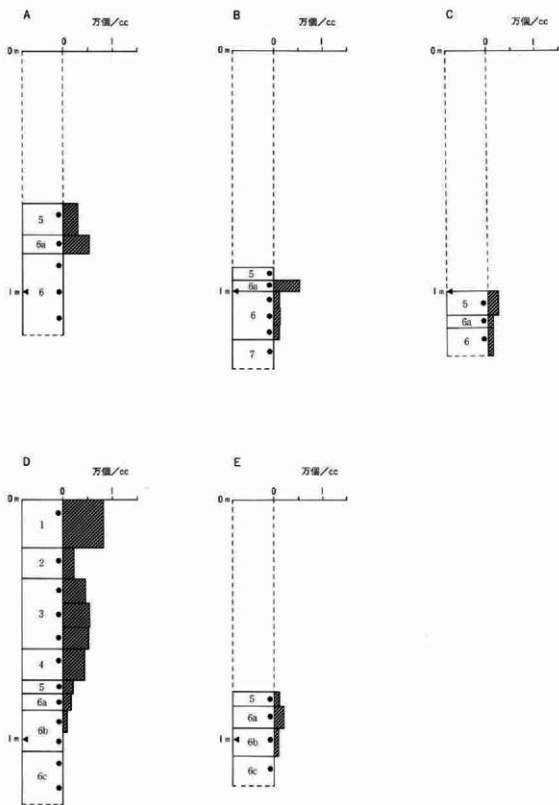
試料名	イ	ネ	ヨ	シ	属	タケ	亜科	ウシクサ	族	キ	ビ	族
1		8,000			800		14,300		800			800
2		2,200			1,100		20,000		3,300			0
3-1		4,400			0		23,500		3,300			1,100
3-2		5,400			1,000		29,600		3,200			2,100
3-3		5,300			0		18,000		2,100			1,000
4		4,200			0		21,400		2,100			0
5		2,000			3,000		18,100		1,000			1,000
6 a		1,700			800		20,600		1,700			0
6 b-1		800			800		16,000		0			800
6 b-2		0			900		13,600		0			0
6 c-1		0			0		15,400		0			0
6 c-2		0			1,900		14,800		0			0

E地点

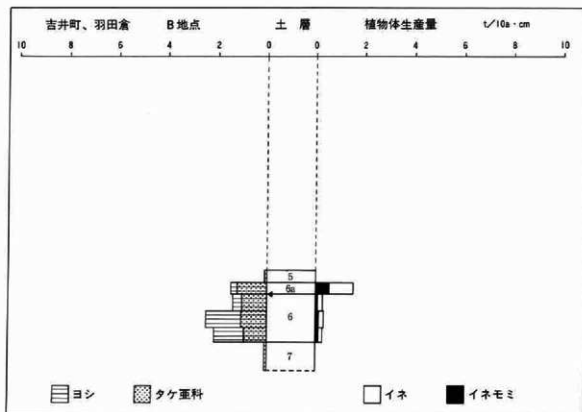
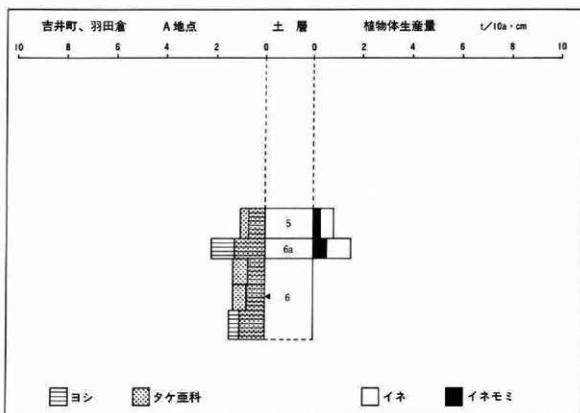
試料名	イ	ネ	ヨ	シ	属	タケ	亜科	ウシクサ	族	キ	ビ	族
5		900			0		9,800		900			0
6 a		1,800			1,800		19,400		0			0
6 b		900			900		19,900		900			900
6 c		0			1,900		17,100		1,900			0

第26表 イネの推定生産量

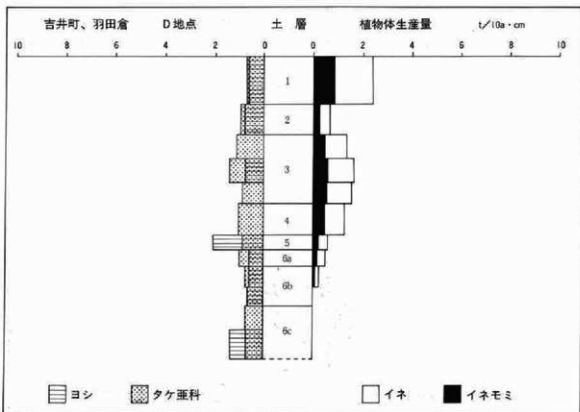
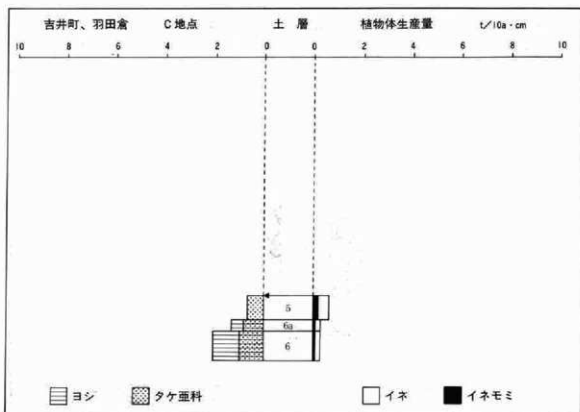
A地点							
層名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	PO数/cc	稲わら重 t / 10 a. cm	稲穂重 t / 10 a. cm	稲穂総量 t/10a
5	63	13	1.08	2,800	0.53	0.29	3.75
6 a	76	8	1.10	5,200	0.99	0.54	4.28
6-1	84	11	1.13	0	0.00	0.00	0.00
6-2	95	11	1.13	0	0.00	0.00	0.00
6-3	106	—	1.13	0	0.00	0.00	—
B地点							
層名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	PO数/cc	稲わら重 t / 10 a. cm	稲穂重 t / 10 a. cm	稲穂総量 t/10a
5	90	5	1.08	0	0.00	0.00	0.00
6 a	95	5	1.16	5,300	1.01	0.55	2.73
6-1	100	7	1.13	900	0.17	0.09	0.65
6-2	107	7	1.13	1,100	0.21	0.11	0.79
6-3	114	6	1.13	1,600	0.19	0.10	0.62
7	120	—	1.00	0	0.00	0.00	—
C地点							
層名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	PO数/cc	稲わら重 t / 10 a. cm	稲穂重 t / 10 a. cm	稲穂総量 t/10a
5	100	10	1.08	2,600	0.38	0.21	2.06
6 a	110	5	0.97	900	0.17	0.09	0.46
6	115	—	1.00	1,000	0.19	0.10	—
D地点							
層名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	PO数/cc	稲わら重 t / 10 a. cm	稲穂重 t / 10 a. cm	稲穂総量 t/10a
1	0	20	0.95	8,600	1.53	0.82	16.48
2	20	13	1.15	2,200	0.42	0.23	2.95
3-1	33	10	1.16	4,400	0.84	0.45	4.53
3-2	43	10	1.16	5,400	1.03	0.56	5.56
3-3	53	9	1.16	5,300	1.01	0.55	4.91
4	62	13	1.15	4,200	0.80	0.43	5.62
5	75	6	1.08	2,600	0.38	0.21	1.24
6 a	81	7	0.97	1,700	0.32	0.18	1.23
6 b-1	88	9	0.99	800	0.15	0.08	0.74
6 b-2	97	8	0.99	0	0.00	0.00	0.00
6 c-1	105	10	1.03	0	0.00	0.00	0.00
6 c-2	115	—	1.03	0	0.00	0.00	—
E地点							
層名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	PO数/cc	稲わら重 t / 10 a. cm	稲穂重 t / 10 a. cm	稲穂総量 t/10a
5	80	6	1.08	900	0.17	0.09	0.56
6 a.	86	9	0.97	1,800	0.34	0.19	1.67
6 b	95	12	0.99	900	0.17	0.09	1.11
6 c	107	—	1.03	0	0.00	0.00	—



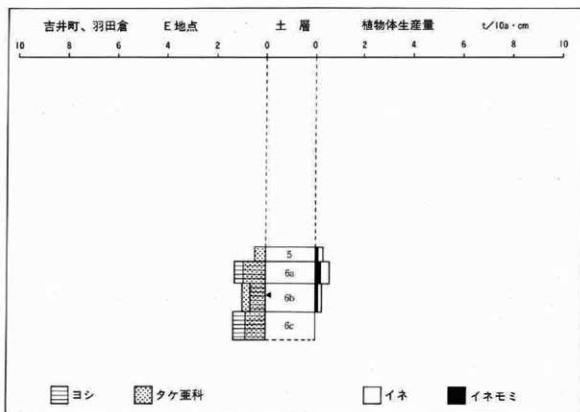
第521図 イネのプラント・オバール密度と変遷



第522図 おもな植物の推定生産量と実運(1)



第523図 おもな植物の推定生産量と変遷(2)



第524図 おもな植物の推定生産量と実運 (3)

第3節 長根羽田倉遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（バリノ・サーヴェイ株式会社）

1. 試料

試料はNo 1～20の20点で、古墳時代後期（鬼高Ⅲ式期）から平安時代のものでとされる住居跡から検出されたものである（第27表）。いずれも建築材と考えられている。

2. 方法

試料を乾燥されたのち木口・柾目・板目三断面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版22～24）も作成した。

3. 結果

確実な同定のできないものもあったが、以下の9種類（Taxa）に同定された。各試験料の主な解剖学的特徴や一般的性質などはつぎのようなものである。

・モミ属の一種（*Abies* sp.）マツ科 No 8

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

モミ属には、モミ（*Abies firma*）、ウラジロモミ（*A. homolepis*）、アオモリトドマツ（*A. mariesii*）、シラベ（*A. veitchii*）、アカトドマツ（*A. sachalinensis*）の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・建築材など各種の用途が知られている。

・ブナ属の一種（*Fagus* sp.）ブナ科 No 1

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、分布密度は高い。道管は単および階段穿孔（bar）数は10前後、壁孔は対列、数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短線状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

ブナ属には、ブナ（*Fagus crenata*）とイヌブナ（*F. japonica*）の2種がある。ブナは北海道西南部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほかがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは、日本の冷温帯落葉材を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していた。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があった。また種子は食用となり、搾油される。

・コナラ属（アカガシ亜属）の一種 [*Quercus* (subgen. *Cyclobalanopsis*) sp.] ブナ科 №3、4、5、7、9、10、11、13、16、17、18

放射孔材で、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のもの複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には、アカガシ（*Quercus acuta*）、イチイガシ（*Q. gilva*）、アラカシ（*Q. glauca*）など7種がある。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹材（いわゆる照葉樹材）の主要な構成種であり、主として西日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.] ブナ科 №19

環孔材で孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棚状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のもの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるトングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ（*Quercus acutissima*）とアベマキ（*Q. variabilis*）の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造材されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材、櫛木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

・ニレ属の一種（*Ulmus* sp.）ニレ科 №2

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ニレ属にはアキニレ（*Ulmus parvifolia*）、ハルニレ（*U. japonica*）、オヒョウ（*U. laciniata*）の3種がある。アキニレは本州（長野・静岡県以西）・四国・九州に、ハルニレ・オヒョウは北海道・本州・四国・九州に生育するが、ハルニレは北海道・本州北部に多く、オヒョウは北海道に多いが他に地域では少ない。ハルニレの材は中程度～やや重硬で、割製性は小さく、加工はやや困難、保存性は低い。器具・家具・建築材などに用いられるほか、樹皮は布・縄・紙の原料となった。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*）ニレ科 №14、20

環孔材で孔圏部は1～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性H型、1～10細胞幅、1～60細胞高。

しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐行性が高く、木目が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

・クロモジ属類(種 (cf. *Lindera* sp.) クスノキ科 No.6

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独まれに2〜3個が放射方向に複合する。分布密度は小さい。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性Ⅲ型、1〜3細胞幅、1〜30細胞高。柔組織は周囲状。年輪界はやや不明瞭。手元の現生標本中には上記の特徴を示すのはクロモジ属以外に見当たらないが、他種の可能性もあるため類以種とした。

クロモジ属は、ダンコウバイ (*Lindera obtusiloba*)、クロモジ (*L. umbellata*) など6種といくつかの変種が自生する。常緑または落葉の低木で、西南日本に多い。最も北まで分布するのはクロモジで、北海道(渡島半島)・本州の山地に生育する。材に方向があるため楊子とされ、種子は搾油(燈用)された。

・サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科 No.15

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2〜8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1〜5細胞幅、1〜30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ (*Prunus jamasakura*) やウヅミザクラ (*P. grayana*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木〜低木である。このうちヤマザクラは、本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度〜やや重硬・強靱で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は糠皮細工に用いられる。

・カエデ属の一種 (*Acer* sp.) カエデ科 No.12

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独および2〜3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列〜交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1〜5細胞幅、1〜50細胞高。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属には、イタヤカエデ (*Acer mono*) やイロハモミジ (*A. palmatum*) など約25種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木〜低木である。一般に材はやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

同定結果を一覧表で示す(第27表)。

4. 考 察

試料はいずれも建築材と考えられていることから、遺跡のごく近くで採取した樹木を加工して用いたもの

第27表 出土炭化材の樹種

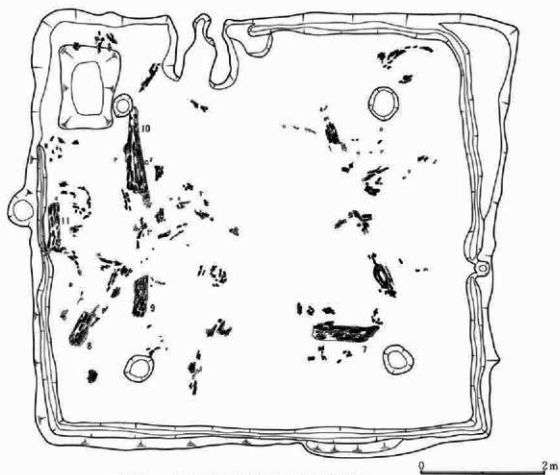
試料番号	住居跡など	時 代	種 名
1	16住	飛鳥・奈良	ブナ属の一種
2	36住	古墳後期	ニレ属の一種
3	37住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
4	37住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
5	48住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
6	49住	古墳後期	クロモジ属類似種
7	53住№1	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
8	53住№2	古墳後期	モミ属の一種
9	53住№3	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
10	53住№4	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
11	53住№5	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
12	57住	古墳後期	カエデ属の一種
13	57住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
14	57住	古墳後期	ケヤキ
15	76住	古墳後期	サクラ属の一種
16	82住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
17	85住	古墳後期	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
18	87住	飛鳥・奈良	コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種
19	90住	平安	コナラ属(アカガシ亜属)の一種
20	91住	古墳後期	ケヤキ

と思う。しかし、焼失住居跡から検出される炭化材の残存率はごく小さく、樹種や大きさ・使われていた場所などによっても異なるであろう(高橋印刷中)。したがって、検出された炭化材の同定結果から、当時の用材や周辺の植生について言及することは困難である。とくに、本試料のように1住居跡から1～数点が検出されたにすぎない場合には、ほとんどできないと考えている。

ただ、上記のような制約のあることを認めた上で、今回同定された試料をみると、古墳時代後期のものとされる試料ではアカガシ亜属(カシ類)が比較的多いことに気付く。弥生時代中期～古墳時代前期とされる高崎市新保遺跡では、加工材に多量に認められるカシ類が自然木にはほとんどないことから、これらは周囲に生育していた樹木を伐採・加工したものではなく、他の場所からもちこまれたものであるとされている(鈴木・能城 1988)。しかし、奈良～平安時代のもっとされる富岡市田籾上平遺跡の出土炭化材(高橋 1988)や本遺跡の結果からみると、照葉樹林とよべるものではなかったとは思いますが、ある程度の本数あるいは面積を占めるカシ類が生育していた可能性を指摘できる。今後は、こうした視点にたった解析を進める必要があらう。

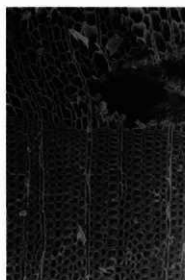
引用文献

- 鈴木三男・能城修一 1988 新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生の復元。「新保遺跡II 発掘・古墳時代集」一関越自動車道(新潟編)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集(本文編)、群馬県教育委員会・鉾郡馬場埋蔵文化財調査事業団、435-453
高橋利彦 1988 田籾遺跡出土炭化材の樹種。「田籾遺跡発掘調査報告書」、群馬県教育委員会・鉾郡馬場埋蔵文化財調査事業団



第525図 第53号住居跡炭化物出土状態実測図

第3節 長根羽田倉遺跡出土炭化材の樹種



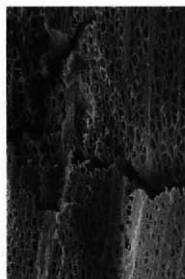
No.8 そと属の一種 木口×100



No.8 椀目×200



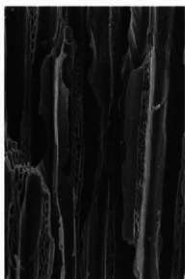
No.8 板目×150



No.1 プナ属の一種 木口×50



No.1 椀目×200



No.1 板目×150



No.3 コナラ属の一種 木口×50

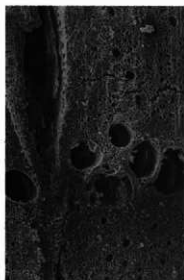


No.3 椀目×200



No.3 板目×100

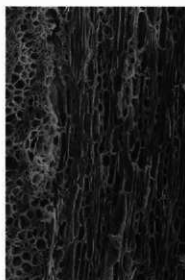
第4章 成果と問題点



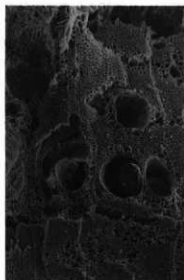
No.19 コナラ属の一種 木口×50



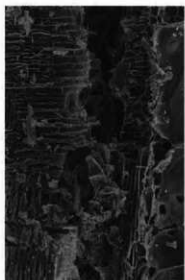
No.19 砦目×150



No.19 板目×150



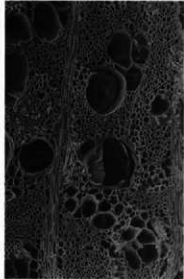
No.2 ニレ属の一種 木口×50



No.2 砦目×150



No.2 板目×100



No.20 ケヤキ 木口×70

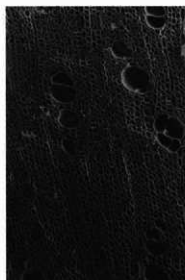


No.20 砦目×150



No.20 板目×100

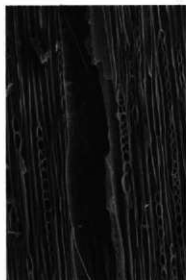
第3節 長根羽田倉遺跡出土炭化材の樹種



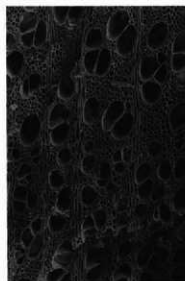
No. 5 クロモジ属類似種 木口×100



No. 6 板目×200



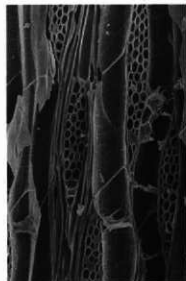
No. 6 板目×150



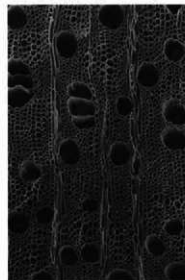
No. 15 サクラ属の一種 木口×70



No. 15 板目×150



No. 15 板目×150



No. 12 カエデ属の一種 木口×100



No. 12 板目×200



No. 12 板目×150

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第3集

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第3集

長根羽田倉遺跡

《本文編》

平成2年3月15日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県北橋村大字下箱田784-2

電話(0278)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社